

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター調査報告書第24集

小籠遺跡Ⅱ

—あけぼの道路建設工事に伴う発掘調査報告書—

1996.3

(財)高知県文化財団
埋蔵文化財センター

小籠遺跡Ⅱ

1996.3

(財)高知県文化財団
埋蔵文化財センター



全景



2-1

ST 13 出土遺物



2-2

ST 14 出土遺物



3-1

ST 17 出土遺物



3-2

SK 130 出土遺物

序

あけぼの道路建設に伴う小籠遺跡の調査は、平成6年度から始まり今年で2年目を迎えました。昨年の調査では弥生時代と近世とを中心とする遺構を検出し、弥生時代の遺構としては前期に遡る大溝の存在を明らかにすることができました。これは長岡台地の開発の歴史に新たな1ページを加えるものです。本年度は、弥生時代末から古墳時代初めにかけての竪穴住居址を15棟検出し、小籠遺跡が当該期の大集落址であることが明らかになりました。さらにこの地域で全く空白であった古代の良好な遺構遺物を数多く検出し得たことは、大きな成果だと思います。

このような貴重な遺跡が、道路工事で消えてしまうことは誠に残念なことです。この度、記録保存というかたちで皆様の前に報告することができました。小籠遺跡の発掘資料は、周辺地域はもとより高知平野の歴史を明らかにするうえで掛け替えのないものです。この成果が斯学の向上と共に地域社会に広く活用されますことを念じて止みません。

調査に際しては、地元小籠地区の皆様はじめ、共運工業、四国開発株式会社、高知県南国土木事務所の方々には絶大な協力を得ることができました。今後共一層のご支援を頂きますようよろしくお願い申し上げます。

平成8年3月

(財)高知県文化財団 埋蔵文化財センター
所長 原 雅彦

例 言

- 1 本書は、高知県文化財団埋蔵文化財センターが、平成6年度及び7年度に実施した国道195号道路改良（あけぼの道路）に伴う小籠遺跡Ⅱ区（3,119m²）の緊急発掘調査報告書である。
- 2 小籠遺跡は、高知県南国市岡豊町小籠469他に所在する。
- 3 発掘調査は、平成7年4月11日から10月31日まで行った。
- 4 本年度の調査面積はⅡ区（1,958m²）、Ⅳ区（1,076m²）、Ⅴ区（2,621m²）、Ⅵ区（617m²）、Ⅶ区（495m²）であり、総調査面積は6,767m²である。
- 5 調査体制
 - (1) 調査員 出原 恵三（高知県文化財団埋蔵文化財センター 調査第3係長）
泉 幸代（同 専門調査員）
浜田 恵子（同 主任調査員）
藤方 正治（同 調査員）
 - (2) 総務担当 吉岡 利一（同 主幹）
- 6 本書の編集は出原が行い、執筆は各員が分担し、文末に（ ）で執筆者名を記した。
- 7 検出遺構の竪穴住居址（ST）、土坑（SK）、溝（SD）、井戸（SE）、性格不明土坑（SX）のナンバーについては、平成6年度に刊行した『小籠遺跡Ⅰ』からの通しナンバーとなっている。
- 8 本報告書を作成するに当たっては、特に近世陶磁器の整理について丸山和雄（元高知女子大学教授）、大橋康二（佐賀県立九州陶磁文化館）、仲野泰裕（愛知県陶磁資料館）、松田直則（当センター主任調査員）、竹村三菜（当センター調査補助員）をはじめ諸氏のご教示を頂いた。（敬称略）
- 9 発掘現場作業員は下記の方々である。猛暑を厭わず作業に従事して下さいの皆様へたいして、記して敬意を表したい。

測量補助員：石川 健史 小倉 功
発掘作業員：石川 功 尾崎 富貴 小野山美香 大和田延子 金子 博文 川原 庸照
楠瀬 正人 楠目ミチ子 小松 栄一 小松 好 小松 木義 小松 浜子
小松 雪子 小松 光尾 島井 博志 下村 裕 田代 勝 田島 一徳
永田美津子 中越 禅 浜口 興 松崎 邦久 森本 幸栄 森岡 和信
岡田 晃 山本 純代
- 10 重機による表土剥ぎ、廃土運搬、埋め戻しについては、共運工業の石川康人、小松和則氏の便宜、助力を得た。
- 11 遺物整理、報告書作成においては下記の方々の協力を得た。記して感謝の意を表したい。

大原 喜子 山中美代子 浜田 雅代 矢野 雅 竹村 延子 岩本須美子 東村 知子
小野山美香 大黒 泰子 尾崎 富貴 福井 章代 河村 真美

本文目次

第Ⅰ章	これまでの経過と調査の方法	1
第Ⅱ章	調査の成果	
1	基本層準	9
2	弥生時代・古墳時代の遺構と遺物	
(1)	堅穴住居	10
(2)	土坑	47
(3)	溝	54
(4)	ピット	55
3	古代の遺構と遺物	
(1)	土坑	58
(2)	掘立柱建物	67
(3)	溝	68
4	中世の遺構と遺物	
(1)	掘立柱建物	71
(2)	溝	71
(3)	ピット	71
5	近世・その他の遺構と遺物	
(1)	土坑	72
(2)	井戸状遺構	103
(3)	溝	112
(4)	性格不明土坑	118
(5)	ピット	123
(6)	遺構間接合の遺物	124
(7)	遺構外出土の遺物	125
第Ⅲ章	考察	
1	小籠遺跡出土の弥生後期土器及び古式土師器	130
1)	弥生後期土器	130
2)	古式土師器	131
3)	まとめ	132
2	小籠遺跡出土の搬入品について	134
1)	東阿波型土器	134
2)	吉備型甕	135
3)	畿内、その他の土器	136
4)	まとめ	137
3	小籠遺跡出土の支脚について	140
(1)	小籠遺跡出土支脚の分類	140
(2)	形態、成形・調整、煤付着痕	140
(3)	県外での分布と出現時期	142
(4)	高知県での分布と出現時期	142
4	小籠遺跡出土の古代土器について	144
1)	西群の土器	144
2)	東群の土器	144
3)	土師器杯・皿の製作技法に見られる画期	148
4)	SK130・136出土土器の位置付けと高知平野における古代の土器生産	148
5)	まとめ	151

挿 図 目 次

Fig. 1	小籠遺跡位置図	Fig.37	ST19 平面・セクション・エレベーション図及び出土遺物実測図
Fig. 2	周辺の遺跡分布図	Fig.38	ST20 平面・セクション・エレベーション図及び出土遺物実測図
Fig. 3	小籠遺跡 調査区位置図	Fig.39	ST21 平面・セクション図及び出土遺物実測図
Fig. 4	Ⅱ区検出遺構全体図	Fig.40	ST22 平面・セクション・遺物出土状況図
Fig. 5	小籠遺跡 Ⅱ区Grid設定図	Fig.41	ST22 出土遺物実測図
Fig. 6	Ⅱ区基本層準	Fig.42	ST23 平面・エレベーション図及び出土遺物実測図
Fig. 7	ST 5 平面・セクション・エレベーション・遺物出土状況図	Fig.43	SK42・43・47・98・99 平面・セクション・エレベーション図及びSK98 出土遺物実測図
Fig. 8	ST 5 出土遺物実測図	Fig.44	SK103・104・108・111・112 平面・エレベーション図
Fig. 9	ST 5 出土遺物実測図	Fig.45	ST113 平面・セクション・遺物出土状況図
Fig.10	ST 6 平面・セクション図	Fig.46	SK113 出土遺物実測図
Fig.11	ST 7 平面・セクション・遺物出土状況図	Fig.47	SK114～118・141・142 平面・エレベーション図
Fig.12	ST 7 出土遺物実測図	Fig.48	SK117・118・142 出土遺物実測図
Fig.13	ST 8 平面・セクション・遺物出土状況図	Fig.49	SD57～60・79 エレベーション図及びSD79 出土遺物実測図
Fig.14	ST 8 出土遺物実測図	Fig.50	P 7・8・12・22・32・40・42・44・54 平面・エレベーション・遺物出土状況図
Fig.15	ST 9 平面・セクション・エレベーション・遺物出土状況図	Fig.51	P 7・8・12・32・40・42・44・54 出土遺物実測図
Fig.16	ST 9 出土遺物実測図	Fig.52	SK100～102・105 平面・セクション・エレベーション・遺物出土状況図及び出土遺物実測図
Fig.17	ST10 平面・セクション・遺物出土状況図	Fig.53	SK106・107・109 平面・セクション・エレベーション・遺物出土状況図及び出土遺物実測図
Fig.18	ST10 出土遺物実測図	Fig.54	SK110 平面・セクション・エレベーション図及び出土遺物実測図
Fig.19	ST11 平面・セクション・遺物出土状況図及び出土遺物実測図	Fig.55	SK123・126～129 平面・セクション・エレベーション図及び出土遺物実測図
Fig.20	ST12 平面・セクション・遺物出土状況図	Fig.56	SK130 平面・セクション・エレベーション・遺物出土状況図及び出土遺物実測図
Fig.21	ST12 出土遺物実測図	Fig.57	SK130 出土遺物実測図
Fig.22	ST13 平面・セクション・遺物出土状況図	Fig.58	SK130 出土遺物実測図
Fig.23	ST13 出土遺物実測図	Fig.59	SK136 平面・セクション・遺物出土状況図
Fig.24	ST13 出土遺物実測図	Fig.60	SK136 出土遺物実測図
Fig.25	ST14 平面・セクション・遺物出土状況図		
Fig.26	ST14 出土遺物実測図		
Fig.27	ST14 出土遺物実測図		
Fig.28	ST15 平面・セクション図及び出土遺物実測図		
Fig.29	ST16 平面・セクション・遺物出土状況図		
Fig.30	ST16 出土遺物実測図		
Fig.31	ST16 出土遺物実測図		
Fig.32	ST17 平面・セクション・遺物出土状況図		
Fig.33	ST17 出土遺物実測図		
Fig.34	ST17 出土遺物実測図		
Fig.35	ST17 出土遺物実測図		
Fig.36	ST18 平面・セクション・遺物出土状況図及び出土遺物実測図		

- Fig.61 SK138・140、SD70、SB2、P47 平面・エレベーション図及び出土遺物実測図
- Fig.62 SD69・P41・SB1 平面・セクション・エレベーション図及び出土遺物実測図
- Fig.63 SK44～46・48～51 平面・セクション・エレベーション図及びSK46・48・51 出土遺物実測図
- Fig.64 SK52 平面・セクション図
- Fig.65 SK52・53 出土遺物実測図
- Fig.66 SK53～57 平面・セクション・エレベーション図
- Fig.67 SK56 出土遺物実測図
- Fig.68 SK58 平面・エレベーション・遺物出土状況図
- Fig.69 SK58 出土遺物実測図
- Fig.70 SK59～64 平面・セクション・エレベーション図
- Fig.71 SK64 出土遺物実測図
- Fig.72 SK65 平面・セクション・エレベーション図及び出土遺物実測図
- Fig.73 SK65 出土遺物実測図及びSK66・67 平面・セクション図
- Fig.74 SK68 平面・エレベーション図及び出土遺物実測図
- Fig.75 SK69～75 平面・セクション・エレベーション図
- Fig.76 SK71・73～75 出土遺物実測図
- Fig.77 SK76・77 平面・エレベーション図
- Fig.78 SK76 出土遺物実測図
- Fig.79 SK78 平面・セクション図
- Fig.80 SK79～85 平面・セクション・エレベーション図
- Fig.81 SK79・80 出土遺物実測図
- Fig.82 SK86 平面・エレベーション図
- Fig.83 SK87 平面・セクション・エレベーション・遺物出土状況図及び出土遺物実測図 その1
- Fig.84 SK87 出土遺物実測図 その2
- Fig.85 SK87 出土遺物実測図 その3
- Fig.86 SK88 平面・セクション図及び出土遺物実測図
- Fig.87 SK89 平面・エレベーション図及び出土遺物実測図
- Fig.88 SK90 遺物出土状況図
- Fig.89 SK90 平面・エレベーション図
- Fig.90 SK91・92 平面・エレベーション図
- Fig.91 SK91 出土遺物実測図
- Fig.92 SK93 平面・エレベーション図
- Fig.93 SK93 出土遺物実測図
- Fig.94 SK94 平面・エレベーション図及び出土遺物実測図
- Fig.95 SK95～97 平面・エレベーション図
- Fig.96 SK119～122・124・134・135 平面・セクション・エレベーション図
- Fig.97 SK137・139 平面・セクション・エレベーション図
- Fig.98 SK121・124・137・139 出土遺物実測図
- Fig.99 SE 2～6 平面・セクション・エレベーション図
- Fig.100 SE 4・5 出土遺物実測図
- Fig.101 SE 5 出土遺物実測図
- Fig.102 SE 6 出土遺物実測図 その1
- Fig.103 SE 6 出土遺物実測図 その2
- Fig.104 SE 7～9 平面・エレベーション図
- Fig.105 SE 9 出土遺物実測図
- Fig.106 SE 10・11 平面・エレベーション図
- Fig.107 SE11 出土遺物実測図
- Fig.108 SD55・56・61～67・72・74・76～78 エレベーション図
- Fig.109 SD56・61 出土遺物実測図
- Fig.110 SD62・64～66 出土遺物実測図
- Fig.111 SD78 出土遺物実測図
- Fig.112 SX 4・5・7・8 平面・エレベーション図
- Fig.113 SX 6・10 平面・エレベーション図
- Fig.114 SX 5・9 出土遺物実測図
- Fig.115 SX 9・10 出土遺物実測図
- Fig.116 P 1 出土遺物実測図
- Fig.117 遺構間接合の遺物実測図
- Fig.118 遺構外出土遺物実測図 その1
- Fig.119 遺構外出土遺物実測図 その2
- Fig.120 遺構外出土遺物実測図 その3
- Fig.121 遺構外出土遺物実測図 その4
- Fig.122 出土古銭拓本
- Fig.123 ST 8 出土の東阿波型土器実測図

写真図版

- PL.1 II区調査前全景
- PL.2 II-2区 西壁セクション
- PL.3 ST5 完掘状況、ST5セクション
- PL.4 ST5 遺物出土状況、ST6完掘状況
- PL.5 ST7 完掘状況、ST8 セクション及び遺物出土状況
- PL.6 ST9 遺物出土状況、ST9 完掘状況
- PL.7 ST9 セクション、ST10 遺物出土状況
- PL.8 ST10 セクション及び遺物出土状況、ST10 遺物出土状況
- PL.9 ST11・12 セクション及び遺物出土状況、ST11 遺物出土状況
- PL.10 ST12 完掘状況、ST13 セクション及び遺物出土状況
- PL.11 ST13 セクション及び遺物出土状況、ST13 完掘状況
- PL.12 ST13・14 完掘状況、ST14 遺物出土状況
- PL.13 ST14内P7 半截状況、ST14 セクション
- PL.14 ST14 遺物出土状況、ST15 北壁セクション
- PL.15 ST16 セクション及び遺物出土状況、ST16 完掘状況
- PL.16 ST17 セクション及び遺物出土状況、ST17 セクション
- PL.17 ST17 遺物出土状況
- PL.18 ST18 遺物出土状況、ST19 セクション
- PL.19 ST19 完掘状況、ST19・20 完掘状況
- PL.20 ST22 セクション、ST22 完掘状況
- PL.21 SK102 半截状況、SK106 遺物出土状況
- PL.22 SK98 遺物出土状況、SK113 セクション及び遺物出土状況
- PL.23 SK108 半截状況、P2 遺物出土状況
- PL.24 SK113 セクション及び遺物出土状況
- PL.25 SK113・110 セクション、SK113・110 完掘状況
- PL.26 SK105 遺物出土状況、SK130 セクション及び遺物出土状況
- PL.27 SK130 セクション及び遺物出土状況、SK130 遺物出土状況
- PL.28 SK130 完掘状況、SK136 遺物出土状況
- PL.29 SK136 完掘状況、SD69 セクション
- PL.30 ST8 遺物出土状況、SK42 半截状況、SK43 半截状況
- PL.31 ST9・10・12・13 遺物出土状況
- PL.32 ST13・14 遺物出土状況
- PL.33 ST14・15・16・17 遺物出土状況
- PL.34 ST17・18・20 遺物出土状況
- PL.35 ST12、SK106・118・136、P44・8 遺物出土状況
- PL.36 ST5・9・10 出土遺物
- PL.37 ST12・13・14・16・17 出土遺物
- PL.38 ST17、SK98・113 出土遺物
- PL.39 ST5・12、SK110・113、P8・12 出土遺物
- PL.40 ST8・11・22、SK130・136 出土遺物
- PL.41 ST5・9・17・18・22、SK113、P54 出土遺物
- PL.42 ST16・18、SK113 出土遺物

- PL.43 ST 5・10・13・17、SK113、P22 出土遺物
 PL.44 ST 8・10・13・14・15 出土遺物
 PL.45 ST 8・12・13・16 出土遺物
 PL.46 ST 5・12・13・14・20 出土遺物
 PL.47 SK105・106・126・130 出土遺物
 PL.48 SK130・136 出土遺物
 PL.49 SK51 出土状況、SK56 セクション
 PL.50 SK60 完掘状況、SK64 完掘状況
 PL.51 SK71 完掘状況、SK72 完掘状況
 PL.52 SK71 三和土粹除去時 (SE8上面)
 PL.53 SK73・SK74 半截状況、SK78 完掘状況
 PL.54 SK90 出土状況、SK119・120 完掘状況
 PL.55 SK121 遺物出土状況、SK122 セクション
 PL.56 SE 2 セクション、SE 4 完掘状況
 PL.57 SE 9 完掘状況、SE 8 完掘状況
 PL.58 SE11 完掘状況、SD65 出土状況
 PL.59 SD78 セクション・'94年度調査区全景 (西より)
 PL.60 '94年度調査区全景 (南東より)、'94年度調査区全景 (南西より)
 PL.61 SK48 完掘状況、SK50 出土状況、SK51 半截状況、SK57 完掘状況、SK58 遺物出土状況、SK60 完掘状況
 PL.62 SK75 半截状況、SK75 完掘状況、SK79 出土状況、SK80 完掘状況、SK81 完掘状況、SK83 完掘状況
 PL.63 SK87 銅銭 (c) 出土状況、SK121 遺物 (724) 出土状況、SE5 完掘状況、SE9 遺物 (233) 出土状況、ピット半截状況
 PL.64 SK46・58・64・65・68・87 出土遺物
 PL.65 SK87・93・121・124・137・139 出土遺物
 PL.66 SE 5・6・9 出土遺物
 PL.67 SE11・SD61・65・78 出土遺物
 PL.68 SX 9・SK87・SE 9・SE 5・SX 9 出土遺物
 PL.69 遺構外の出土遺物
 PL.70 遺構外の出土遺物
 PL.71 SK58・65・87及び包含層出土の古銭

表 目 次

- | | | | |
|------|-------------|------|------------------|
| 表.1 | ST 5 ピット計測表 | 表.11 | ST17 ピット計測表 |
| 表.2 | ST 6 ピット計測表 | 表.12 | ST18 ピット計測表 |
| 表.3 | ST 7 ピット計測表 | 表.13 | ST22 ピット計測表 |
| 表.4 | ST 8 ピット計測表 | 表.14 | 弥生～古墳時代の主なピット計測表 |
| 表.5 | ST 9 ピット計測表 | 表.15 | 近世土坑計測表 |
| 表.6 | ST11 ピット計測表 | 表.16 | 遺物観察表 (弥生～中世) |
| 表.7 | ST12 ピット計測表 | 表.17 | 遺物観察表 (近世) |
| 表.8 | ST13 ピット計測表 | 表.18 | 石器観察表 |
| 表.9 | ST14 ピット計測表 | 表.19 | 近世瓦観察表 |
| 表.10 | ST16 ピット計測表 | 表.20 | 出土古銭計測表 |

第Ⅰ章 これまでの経過と調査の方法

1 平成6年度の調査

南国市岡豊町小籠に所在する小籠遺跡は、高知県の中央部にひろがる高知平野の中程に位置し旧物部川によって形成された更新世の扇状地、通称長岡台地と呼ばれている低位段丘の西端に立地している。海拔6～7m、海岸線からの直線距離は約6kmを測る。この長岡台地は、弥生時代後期から古代・中世にいたる数多くの遺跡が分布しており、高知県の歴史の主要舞台として位置付けることのできる地域である。

小籠遺跡は、弥生時代から古墳時代の遺物散布地として知られていたところであるが、高知市内と県東部地域とを結ぶ幹線道路国道195号線改良工事（あけぼの道路）が計画され、当遺跡内を計画路線が通過することとなった。高知県教育委員会は南国土木事務所と協議を重ねた結果、工事対象地の全面について緊急発掘調査を実施することに決し、その任を高知県埋蔵文化財センターが負うこととなった。そして平成6年4月27日付けで、高知県南国土木事務所長安岡亮一より高知県教育委員会を經由して、高知県文化財団埋蔵文化財センター所長原雅彦に対して同遺跡の発掘調査業務の委託について依頼があった。これを受けて、平成6年6月27日付けで両者間で委託契約を締結した。

その結果、平成6年度調査を平成6年7月27日から7年3月31日まで実施することとなった。調査区については便宜上、現在の水田や畑の畦畔をそのまま利用して任意にⅠ～Ⅳ区を設定した。6年度の調査地点は、Ⅰ区（3353m²）、Ⅲ区（1974m²）、Ⅱ区の一部（1161m²）、およびⅣ区の一部（2018m²）であり、総調査面積は8506m²であった。Ⅰ～Ⅲ区は耕作土直下が遺構検出面となっており、Ⅰ区からは、弥生時代前期末の溝、後期の竪穴住居、中・近世の溝、井戸、多量の近世墓を検出する

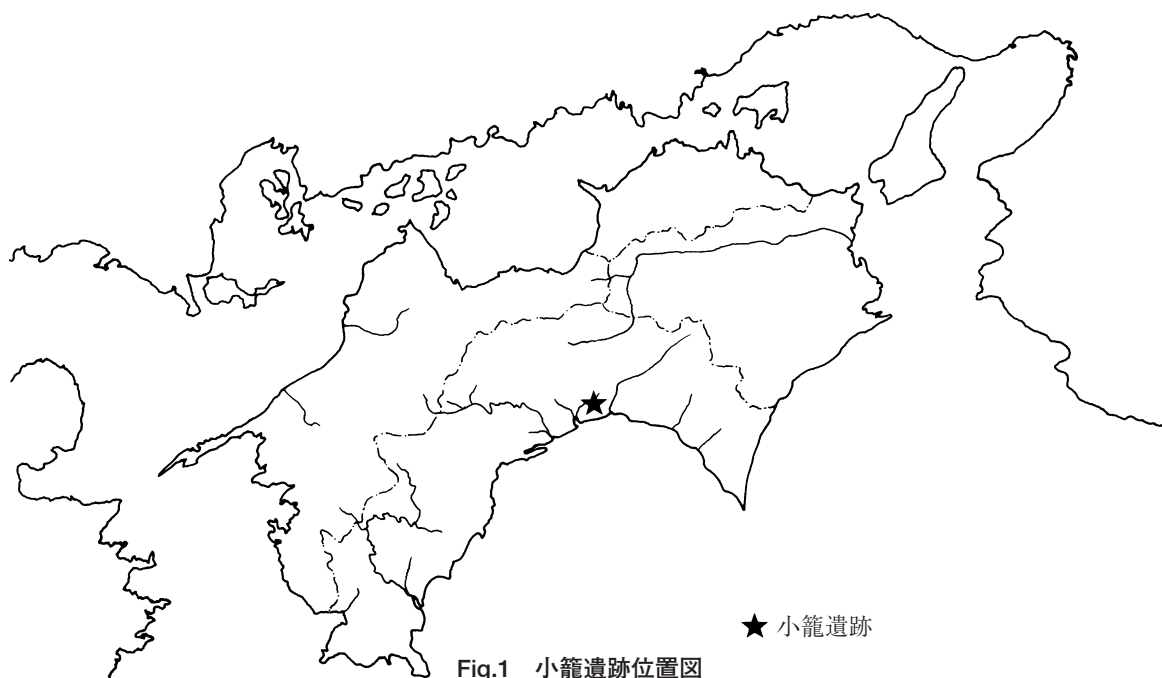




Fig.2 周辺の遺跡分布図

No	遺跡名	No	遺跡名	No	遺跡名	No	遺跡名	No	遺跡名
1	田村遺跡群	11	東崎遺跡	21	小蓮遺跡	31	土佐国分寺跡	41	大塚遺跡
2	栄エ田遺跡	12	金地遺跡	22	船岩古墳群	32	土佐国衛跡	42	高柳土居城跡
3	奥谷南遺跡	13	ひびのき遺跡	23	狭間古墳	33	比江廃寺跡	43	高柳遺跡
4	大篠遺跡	14	ひびのきサウジ遺跡	24	蔵本2号墳	34	野中廃寺跡	44	土島田遺跡
5	国分寺遺跡群	15	久次遺跡	25	口ミノヲ谷古墳	35	須江上段遺跡	45	久保遺跡
6	三島遺跡	16	シタノヂ遺跡	26	高松古墳	36	タンガン窯跡	46	末松遺跡
7	原遺跡	17	林田遺跡	27	新改古墳	37	長谷山窯跡群	47	五反地遺跡
8	原南遺跡	18	深淵遺跡	28	西ノ内2号墳	38	岡豊城跡	48	明神遺跡
9	稲荷前遺跡	19	高間原1号墳	29	伏原大塚古墳	39	西谷遺跡	49	浜道の西遺跡
10	楠目遺跡	20	蒲原山東1号墳	30	大谷古墳	40	田村城跡	50	小籠遺跡

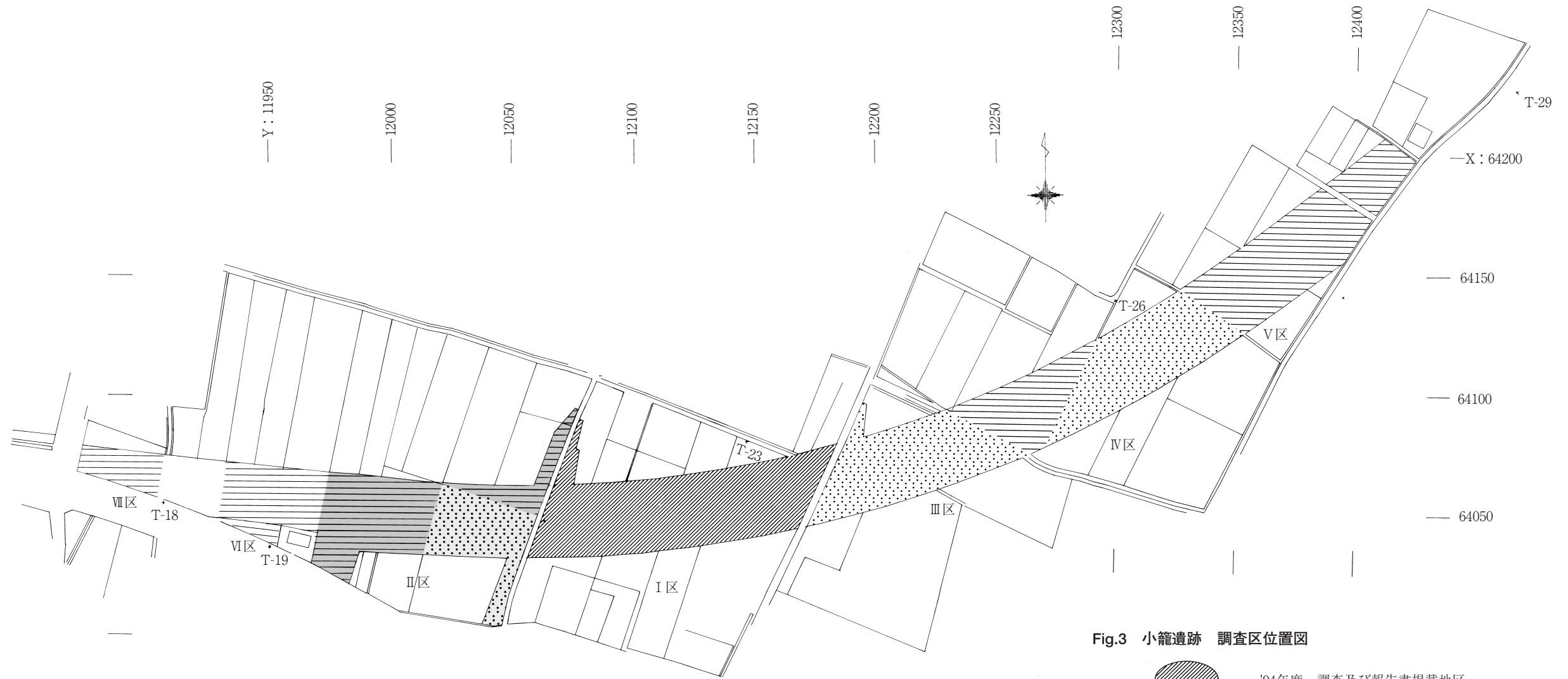


Fig.3 小籠遺跡 調査区位置図


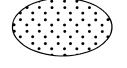


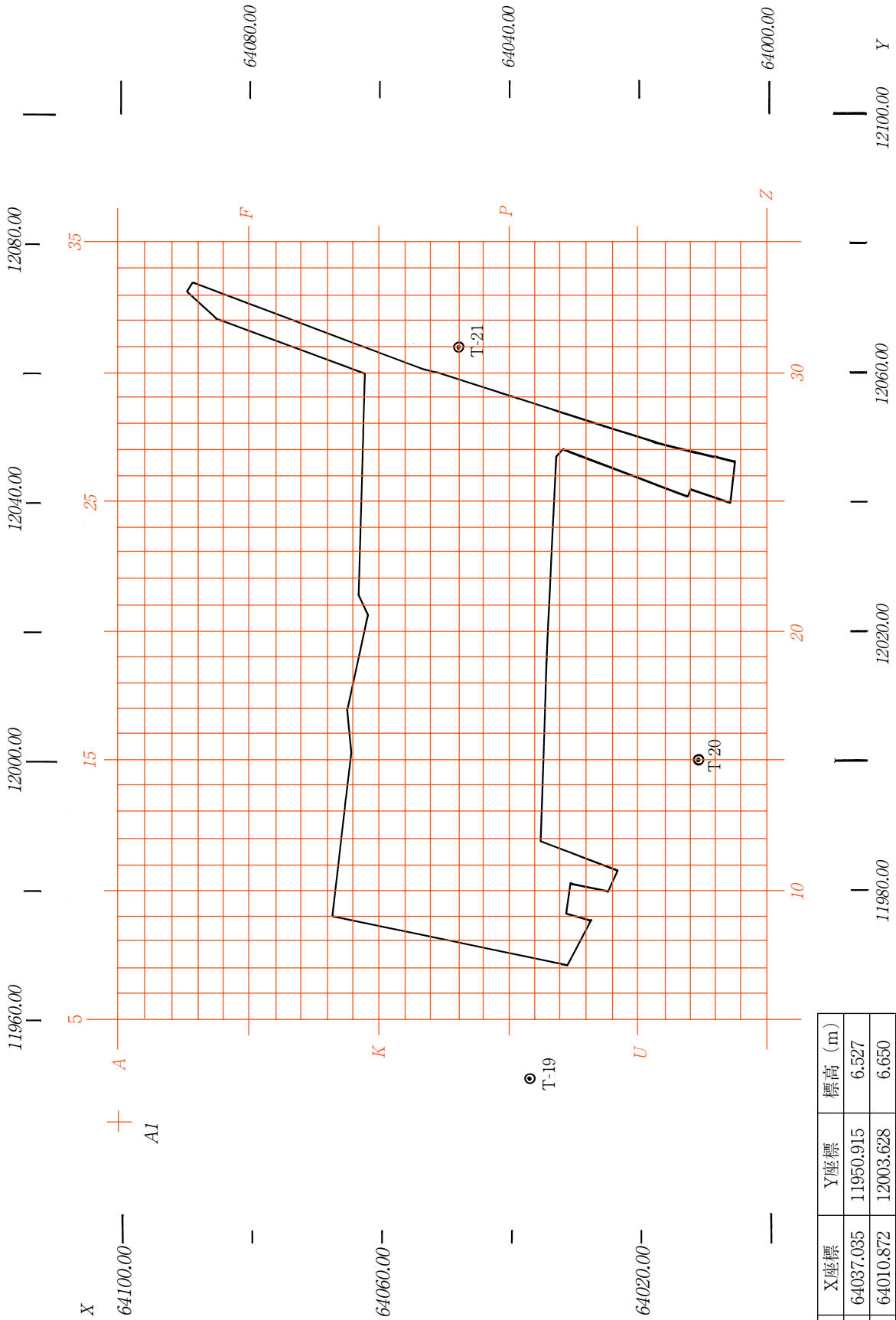
-  '94年度 調査及び報告書掲載地区
-  '94年度 調査地区
-  '95年度 調査地区
-  '95年度 報告書掲載地区



Fig.4 II区検出遺構全体図



主な地点	X座標	Y座標	標高 (m)
T-19	64037.035	11950.915	6.527
T-20	64010.872	12003.628	6.650
T-21	64048.012	12064.339	6.756
A1	64100.000	11940.000	

Fig.5 小籠遺跡 II区Grid 設定図 (1:900)

ことができた。弥生前期末の溝は幅1.8～2.4m、深さ1.2mを測る大溝であり、溝底の形状や堆積状況から見て用水路としての性格付けがなされる遺構である。このことは長岡台地の開発は弥生後期以降と考えられていたこれまでの通説に変更を迫るものである。18世紀代の井戸とそれに近接する河原石を巡らした洗い場状の遺構、その周辺の柱穴群は近世屋敷跡を想定させるものであり、その廃絶後に営まれた近世墓群やⅡ・Ⅲ区の諸遺構とともに当地域における近世の集落景観の変遷を知る上で貴重な資料を得ることができた。Ⅱ区からは弥生時代末から古墳時代初頭の竪穴住居4棟の他近世の産業用土坑を数多く検出することができた。Ⅱ区の調査から当遺跡における弥生時代～古墳時代の集落の中心は、遺跡の西部に偏していることが明らかとなったのである。Ⅲ区からは、18世紀代の比較的小規模な井戸と産業用と考えられる土坑が多量に検出された。両者はセットとして把握すべき性格のものと考えられる。またⅣ区からは、弥生時代後期初頭の方形周溝状の遺構、中・近世の掘立柱建物9棟などを検出した。近世の諸遺構は、各調査区毎にその性格が異なっている傾向が強く窺われる。このことは調査区設定に使った現在の畦畔がそのまま生きている可能性を示すものであり、注目すべきことである。

以上のように6年度の調査を通して、小籠遺跡が従来知られていたような弥生時代後期～古墳時代初めに属するものだけではなく、その成立が弥生時代前期末に遡ること、そして古代の遺構は確認できなかったが中・近世にも営まれている遺跡であることが明らかとなったのである。

なお、Ⅰ区の調査については、すでに報告書を刊行している。(財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター『小籠遺跡Ⅰ—あけぼの道路建設工事に伴う発掘調査報告書—』 1995. 3)

2 平成7年度の調査

4月11日から10月31日まで実施した。今次調査に際して、調査区を新たに設定した。Ⅳ区の北側にⅤ区を、Ⅱ区の西側にⅥとⅦ区を設けた。調査は工事の計画、用地の買収状況の制約からⅣ区の残り部分から着手し、Ⅴ区→Ⅱ区の残部(西半分)→Ⅵ区→Ⅶ区へと進んだ。Ⅵ・Ⅶ区からは近世を中心とする遺構が、Ⅱ区の西半分からは、弥生時代後期～古墳時代初頭・古代を中心とする遺構が数多く検出された。Ⅱ区は、西に向かって旧地形が傾斜しており、遺構検出面もⅥ区で海拔5m前後、Ⅶ区では4m前後となっている。Ⅱ区との比高差はⅣ区で約1m、Ⅶ区では2m以上となっている。

発掘調査の手順としては、耕作土を重機を用いて除去した後、手作業で進めた。遺物包含層の遺物取り上げ、遺構の実測については公共座標に基づいて調査区全体に4m方眼をかけ、東西方向に1. 2. 3. ……、南北方向にA. B. C. ……のNoを付して出土地点の記録および実測を行った。平面実測図および地層断面図については、20分の1を基本に適宜任意の縮尺を用いた。

出土遺物の整理および報告書の作成については、各調査区における遺物の出土量や時期的なまとまりを勘案して、平成7年度はⅡ区についてまとめることとし他の調査区については8年度に実施することとした。

(出原)

第Ⅱ章 調査の成果

1 基本層準 (fig.6)

調査区の西壁と北壁で基本層準を観察した。調査区の約東半分は耕作土直下が遺構検出面となっている。従って北壁の層準は、遺物包含層の存在する西部について観察した。

I層：耕作土。

II層：赤茶色粘質土。床土を形成する層準であるが、西・北壁ともに部分的な堆積である。

III層：濃茶色粘質土で1~6cmの砂岩小礫を含む。両壁に安定した堆積を示している。層厚は8~30cmを測り、北壁では西に向かって、西壁では北に向かって層厚を増している。弥生土器、古代・中世の遺物を包含している。

IV層：黒褐色粘質土で1~5cm大の砂岩礫を少量含む。調査区北西隅に堆積する。層厚0~10cmを測る弥生時代後期~古墳時代の遺物を包含している。

V層：基盤礫層。長岡台地を形成する更新世扇状地の層準で、拳大~人頭大の砂岩礫が主体を占める。調査区の東から西に向かって急傾斜しており、当地点が更新世扇状地の西端であることを示している。

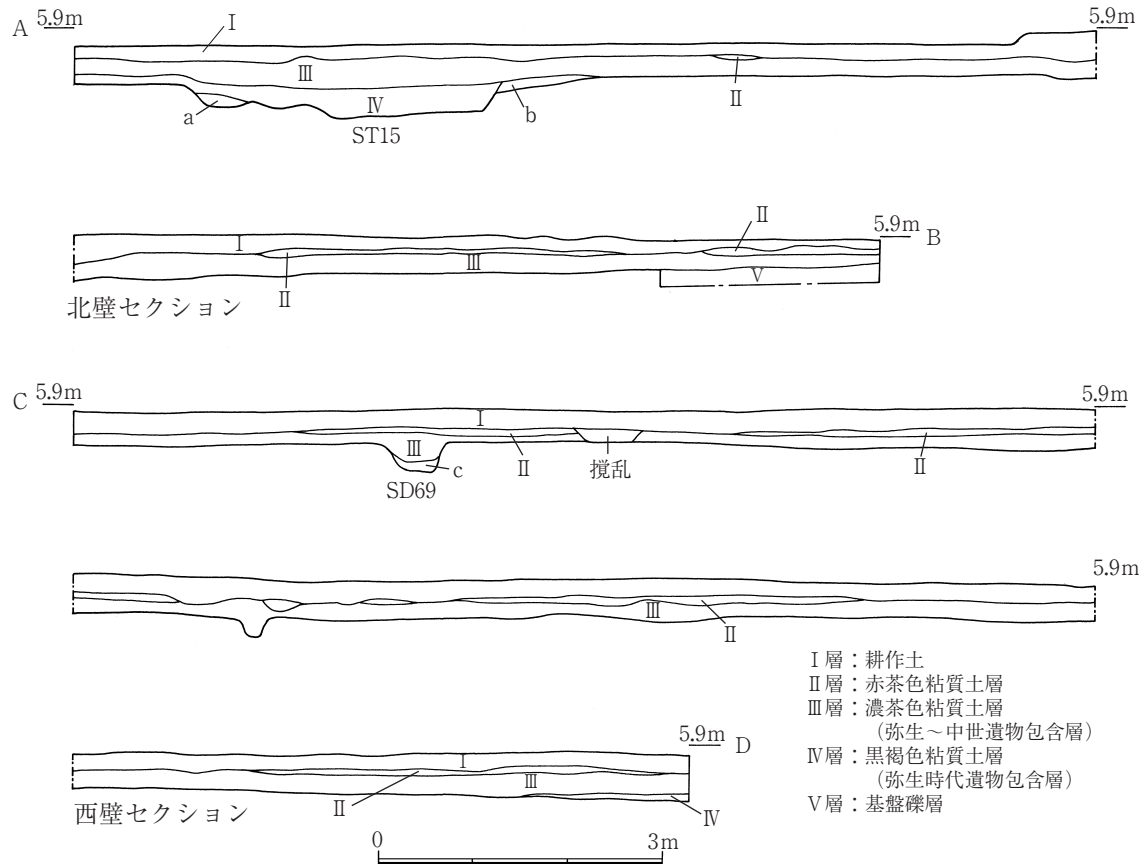


Fig.6 II区基本層準

2 弥生時代・古墳時代の遺構と遺物

(1) 竪穴住居

ST5 (fig.7・8・9)

調査区の北東部にあり一辺7.1m前後を測る方形の住居址である。南側の半分を現在の水路と近世の攪乱によって大きく削られており、南部は西側コーナーの一部を残すのみである。深さは北側で約40cm、南側で10cmである。埋土はI層：黒褐色粘質土、II層：黒灰色粘質土で、I層は中央部に一部見られるだけでほとんどがII層である。床面はいわゆるベット状遺構を有しており、西・東・北の三面に削り出しによる高床部を設けている。高床部の幅は約1.1m、高さは20cmである。西南コーナー部より東壁にかけて幅15~30cm、深さ10cm前後の壁溝がめぐり、東壁の中ほどで最大幅を有する。また低床部の縁辺にも30~45cm、深さ5cm前後の溝が巡っている。支柱穴は低床部のコーナー部にあるP2とP3を該当させることができる。前者は40×60cmの楕円形を呈し深さ80cm、後者は径30cm深さ40cmを測る。柱間距離は2.3mである。この他北面高床部の中央には径50~60cm、深さ60cmのP1が設けられている。P1は後述するように多量の土器片が出土していることからST5に伴う貯蔵穴と考えられる。

出土遺物は甕、壺、鉢、高杯、支脚、ミニチュア土器、砥石などである。口縁部と脚部の点数で見る

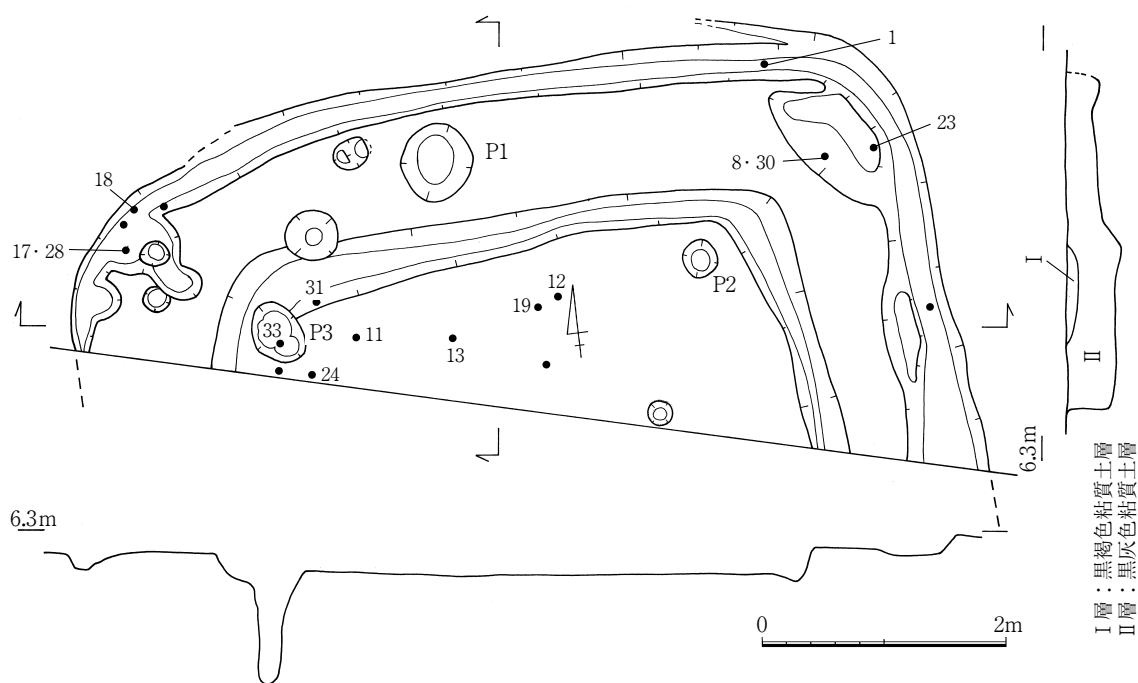
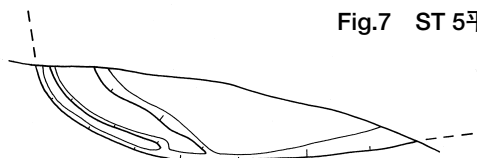


Fig.7 ST5平面・セクション・エレベーション・遺物出土状況図



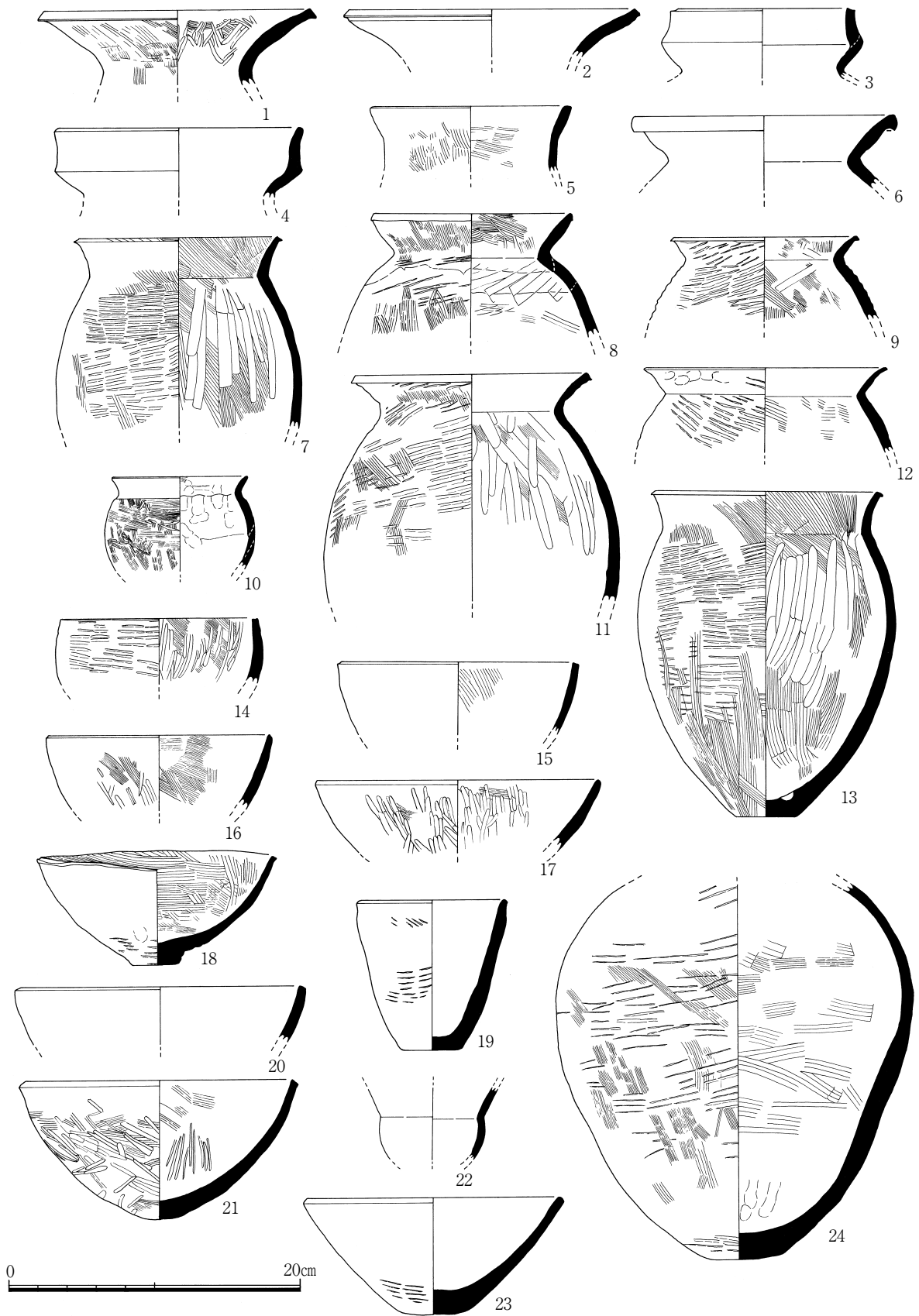


Fig.8 ST 5 出土遺物実測図

と甕53点、壺12点、鉢47点、高杯脚14点、支脚1点、ミニチュア土器1点を数える。底部は75点出土しているが、平底が61点、丸底が13点、尖底が1点となっている。埋土出土のものが多いが、床面及び床直上出土の一括性の高い遺物にも恵まれている。床面出土の遺物は、高床部の北側東西コーナー及び低床部北西コーナーに集中する傾向が見られる。高床部北西コーナーからは壺口縁部(3)、鉢(17・18・21)、高杯脚部(28)が出土しておりこれらのうち18・21は完形品である。これらの土器は、壁溝が高床部の床面の高さと同じ高さにまで埋まった段階で置かれたものである。高床部北東コーナーからは、壺(1)、甕(8)、高杯脚部(30)が出土しており、1は壁溝床へばりつき、8・30は高床部に作られた浅い凹の床にへばり付いている。なお甕(8)は埋土中層出土のものと同接関係にある。低床部コーナーからは、甕(11・24)、底部(31)が出土している。11・24は床面へばりつき、31は溝埋土からの出土で、後述するP1出土のものと接合関係にある。この

ピットNo	平面規模 (cm)	深さ (cm)	平面形態
P1	40×60	8	楕円形
P2	30×24	24	楕円形
P3	径36	31	円形
P4	33×38	22	楕円形
P5	24×28	27	楕円形
P6	径36	13	円形
P7	径36	33	円形
P8	径30	25	円形
P9	径33	6	円形
P10	径24	18	円形

表1 ST5ピット計測表

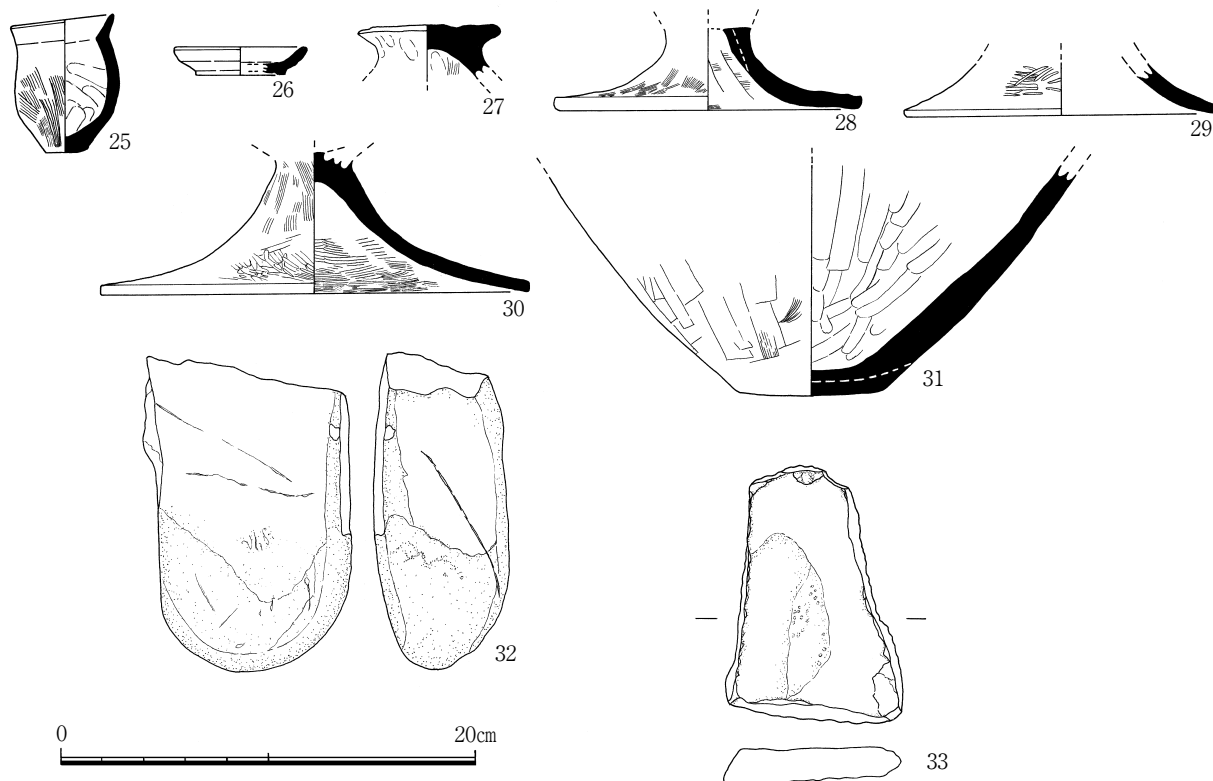


Fig.9 ST5出土遺物実測図

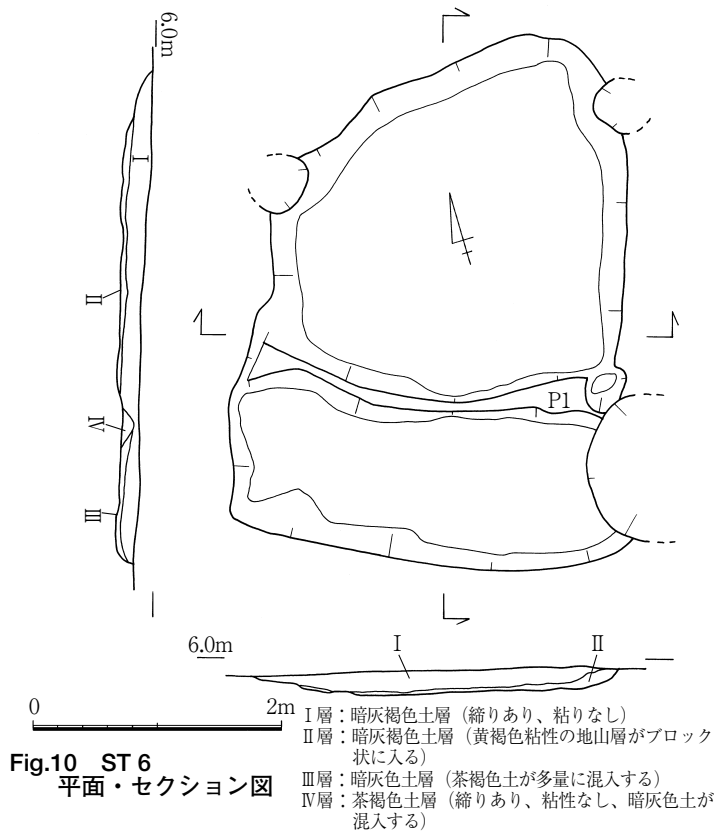


Fig.10 ST6
平面・セクション図

他床面からは甕(12・13)、鉢(19)、砥石(32)が出土しており、13と19はそれぞれ埋土中出土のものと接合関係にある。P1からは底部(31)と接合関係にあるものの他に蓋(27)など、図示し得なかったが多くの土器片が出土している。P3の埋土中からは壺(10)、同検出面上からは砥石(33)が出土している。この他埋土中より東阿波型土器の細片が一点出土している。以上床面出土の遺物を中心に述べたが、これらは出土状況から見てST5が廃絶される直前に遺棄された一括性の高いものと判断することができる。また埋土中の遺物についても接合関係などから見て、26以外は一時期のまとまりのある資料として把握することができよう。ST5は弥生時代後期終末に属する。(出原)

ST6 (fig.10)

調査区東部の中央に存在していた竪穴住居址である。住居の北辺から西辺にかけては後世の削平を受けており、また東部には近世の土坑SK60や柱穴群が存在している。検出時の平面形は不整形長方形を呈しており、規模は南北4.3m、東西2.8m、検出面から床面までの深さは15cmを測る。住居址の南部には幅1.2m、床面からの高さ9cmのベッド状遺構が存在している。これは地山削り出しによっており、低床部から立ち上がった北端部には茶褐色土による土手状の盛土部分が存在していた。住居に伴うと考えられる柱穴は東壁際に1個確認されている。遺構埋土はI層：暗灰褐色土、II層：暗灰褐色土、III層：暗灰色土である。

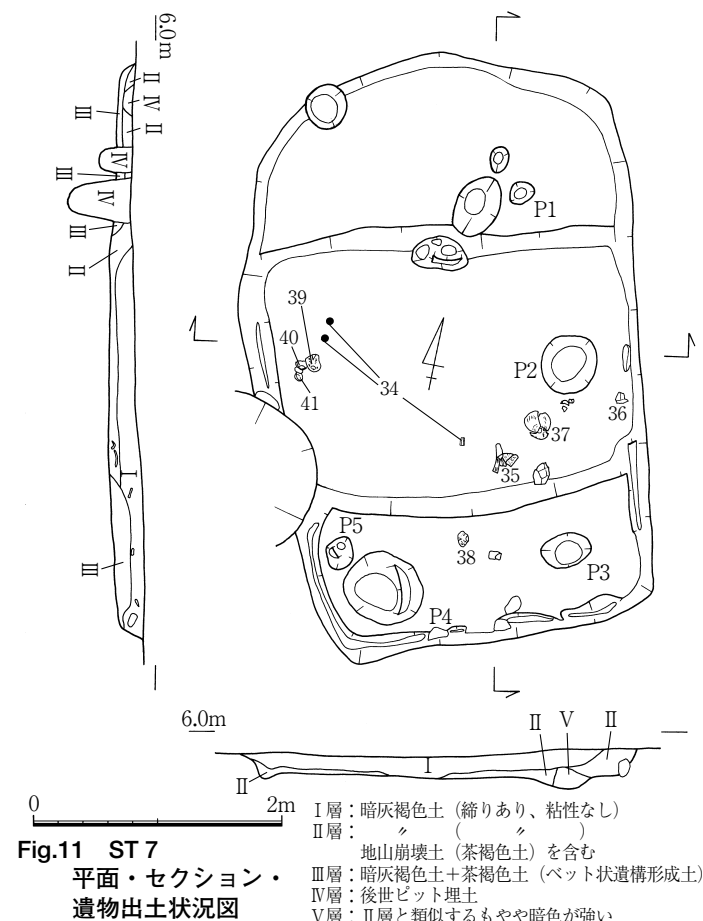


Fig.11 ST7
平面・セクション・
遺物出土状況図

出土遺物には弥生後期末の土器破片が存在しているが、図示できるものは無い。

ST 6は弥生時代後期終末のものと考えられる。(藤方)

ピットNo	平面規模 (cm)	深さ (cm)	平面形態
P1	39×30	35	楕円形

表2 ST 6 ピット計測表

ST 7 (fig. 11・12)

調査区東部の南に位置する。平面形は隅丸方形を呈しており、規模は南北4.7m、東西3.1m、検出面から床面までの深さは15cm～21cmである。近世の土坑SK80や柱穴群によって切られているが、残存状態は比較的良好である。

北辺と南辺に沿って暗灰褐色土と茶褐色土による盛土成形のベッド状遺構が存在している。北部高床部は幅1.25mであり、低床部床面からの高さは6cmを測る。また南部高床部は幅0.8mであり、低床部床面からの高さ15cmを測る。中央低床部の西壁際と南高床部の壁際には幅約15cm、深さ6～10cmの規模を持つ壁溝が不連続で存在している。

住居に伴うと考えられる柱穴は5個検出されており、南北高床部に4個、低床部に1個存在していた。床面からの焼土及び炭化物の検出は無い。遺構埋土はI層：暗灰褐色土、II層：暗灰褐色土であり、II層は比較的早い段階の埋土と考えられるが、出土遺物の多くはI層内からのものである。

ST 7 出土の遺物の中で口縁部と脚部の破片は壺 8点、甕 21点、鉢 22点、支脚 2点であり、底部破片中形態のわかるものは平底4点のみである。出土遺物の中で図示できるのは 34～42である。34～37は甕であ

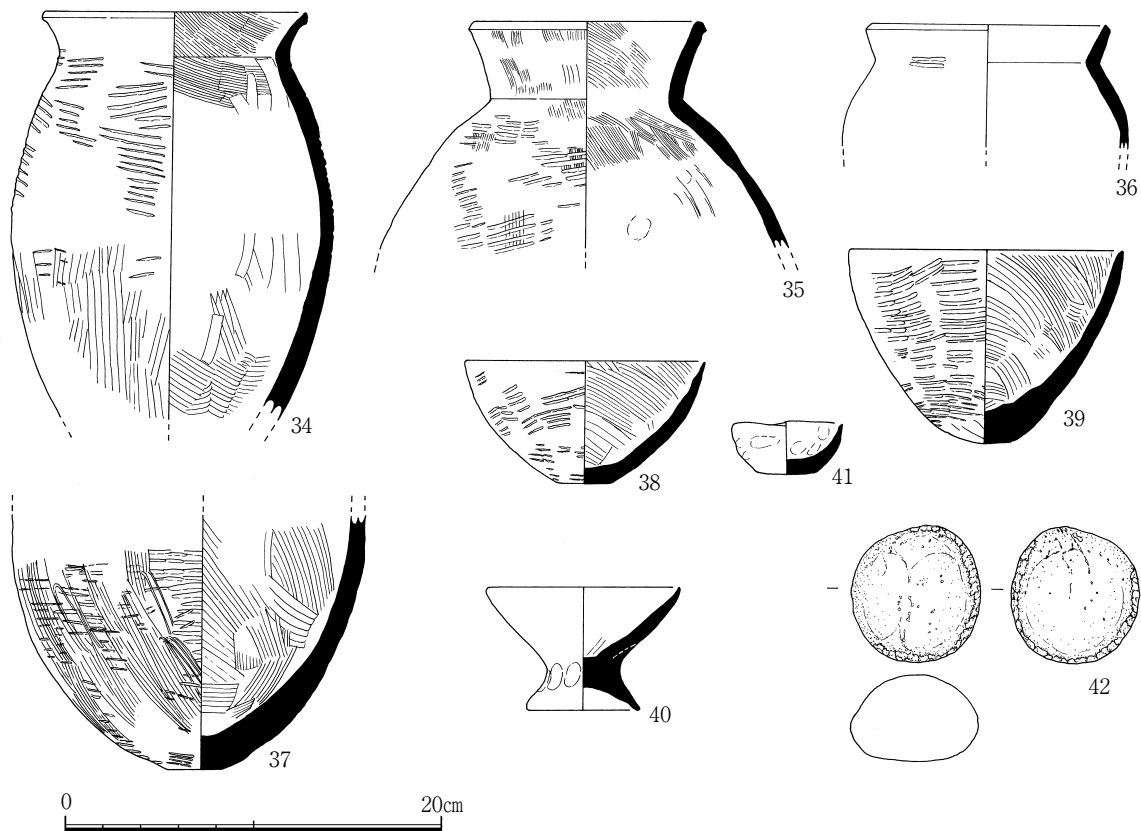


Fig.12 ST 7 出土遺物実測図

り、38・39は鉢である。40は脚付鉢であり、41は手捏ね土器である。42は砂岩製の叩石である。

これら遺物の出土状況は甕(34)・鉢(38)が南高床部上から出土しており、甕(35~37)が低床部床面の南西部分から出

ピットNo	平面規模(cm)	深さ(cm)	平面形態
P1	21×18	5	楕円形
P2	径45	8	円形
P3	39×27	9	楕円形
P4	63×63	24	不整円形
P5	21×24	16	不整円形

表3 ST7ピット計測表

土している。また脚付鉢(40)と手捏ね土器(41)は同じく低床部床面の西部から出土している。ST7は弥生時代後期終末のものと考えられる。(藤方)

ST8 (fig.13・14)

調査区中央部のやや南寄りに位置する。平面形は東西4.9m南北4.4mのほぼ隅丸方形を呈しており、検出面からの深さは18cm~24cmである。ST8の北辺、西辺、中央部南には、SK72、SE8とSK71、SK70の近世出自の各土坑や井戸が存在しており、南東隅部にも近世の柱穴が存在している。

この住居址には全周すると考えられるベット状遺構が存在する。規模は幅約0.9m、低床部床面からの高さは6~12cmであり、茶褐色土(Ⅲ層)を用いた盛土成形によると考えられる。壁際には幅15cm、深さ6cmの規模を持つ壁溝が存在しており、これも全周するものと考えられる。この住居に伴うと考えられる柱穴は8個存在している。北東隅部と北西隅部に存在するP1とP2は同じような規模を持つ柱穴であり、低床部のコーナーに存在する3つ柱穴(P3~P5)も似通った規模を持つものである。主な柱穴間の距離は、P1-P2が3.45m、P3-P4が2.10m、P3-P4が2.25mである。中央床面には中央ピットと考えられるP8が存在している。平面形は不整楕円形(瓢箪形)を呈しており、比較的浅く、底部は舟底状を成している。この東には直径40cmのほぼ円形の範囲で被熱赤変部分が確認された。尚、ST

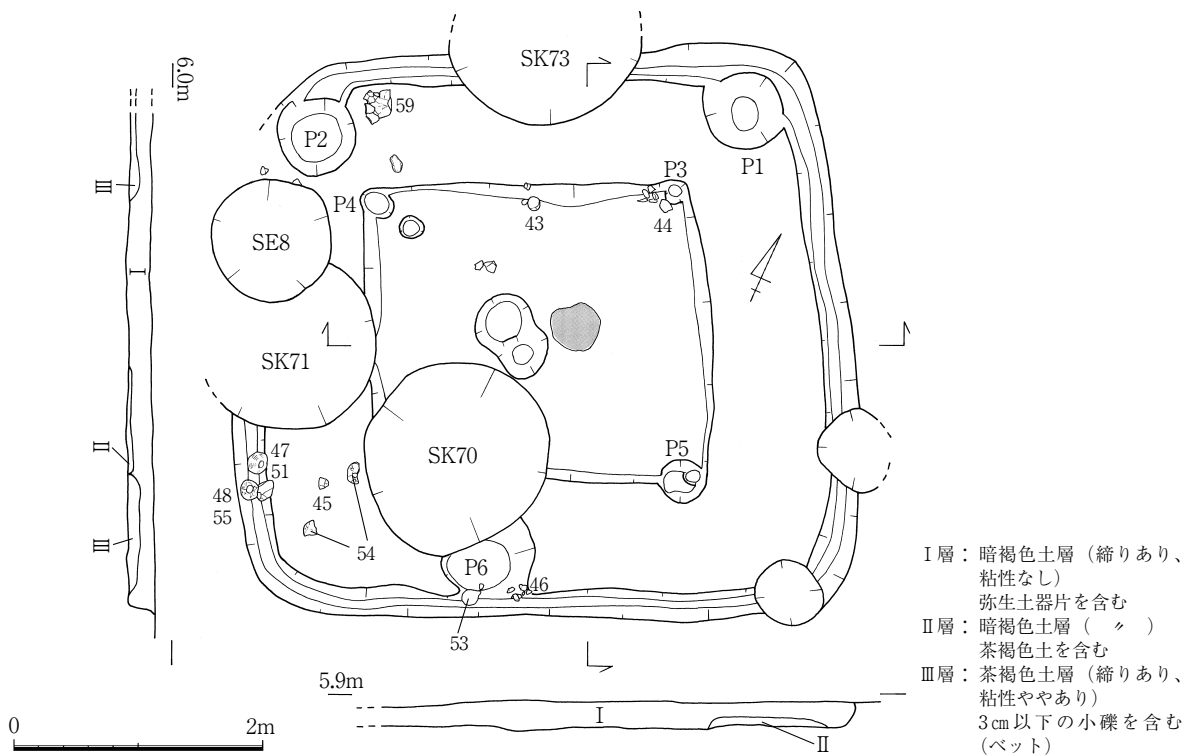


Fig.13 ST8平面・セクション・遺物出土状況図

8の遺構埋土はI層：暗茶褐色土、II層：暗茶褐色土とに分層が可能であるが主にI層が広く存在している。

出土遺物は壺、甕、鉢、高杯、支脚などであり、この中には東阿波型土器甕の破片が存在していた。出土破片中に於ける口縁部と脚部の点数は壺 11点、甕 44点、鉢 66点、高杯 8点、支脚 1点であり、底部形態の明確なものは平底14点、尖底1点である。出土遺物中で図示できるものは43～59である。43～

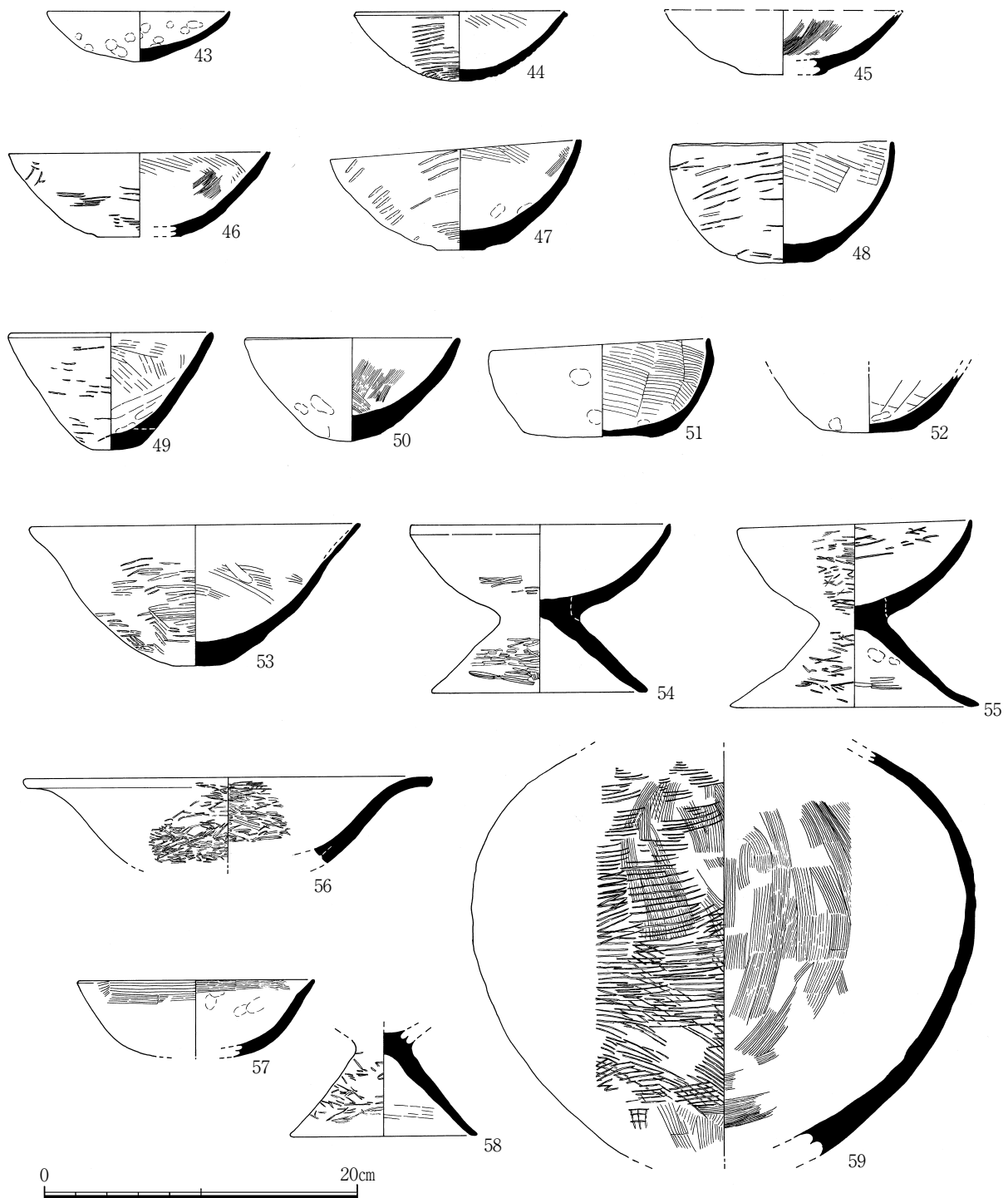


Fig.14 ST 8 出土遺物実測図

53は鉢である。43～45は器高の低い皿状を呈する小鉢であり、43は手捏ね成形による。46～52は椀状を呈する小鉢であり、53はやや容量のある鉢である。底部形態では51と52が平底を成し、44～48は狭い平底を、また43・49・50・53は丸底を成している。54～58は高杯である。54・55は杯部椀型を成しており、54は口縁部がやや開く。56は口縁部が外反する。59は甕の胴部と考えられる。

ピットNo	平面規模(cm)	深さ(cm)	平面形態
P1	径63	51	円形
P2	径60	37	円形
P3	21×18	23	楕円形
P4	径24	31	円形
P5	径36	20	円形
P6	75×〈48〉	24	円形？
P7	径18	6	円形
P8	69×48	18	不整楕円形

※〈 〉内は残存値。

表4 ST 8 ピット計測表

これら遺物の出土状況は鉢(43)が低床部北端の高床部との境からうつ伏せの状態出土しており、鉢(44)はP3の傍ら床面上から、また東阿波型土器甕口縁部(937)も床面上から出土したものである。南西隅の高床部からは鉢(45)と高杯(54)が出土している。南西部の壁溝上には鉢(47・48・51)と高杯(55)が出土しており、47と51はうつ伏せの状態前者が後者の上に重なって存在していた。南辺の壁溝上からは鉢(46・53)が出土している。これら遺物の多くは埋積の早い段階で、また壁溝上から出土した遺物は何れも壁溝が埋った段階で出土位置を定めたものと考えられる。ST 8は古墳時代初頭のものと考えられる。(藤方)

ST 9 (fig. 15・16)

調査区の南東端に位置する。住居の半分以上が調査区外に出ており、さらに南側が攪乱を受けているため、北西の約1/4に相当する部分が確認された。規模は判然としないが、ベット状遺構を有する隅丸方形の竪穴住居である。深さは30～34cmで、埋土はⅣ層：濃茶色粘質土、Ⅴ層：茶色粘質土、Ⅵ層：暗茶色粘質土、Ⅶ層：灰茶色粘質土、Ⅷ層：黒色粘質土である。

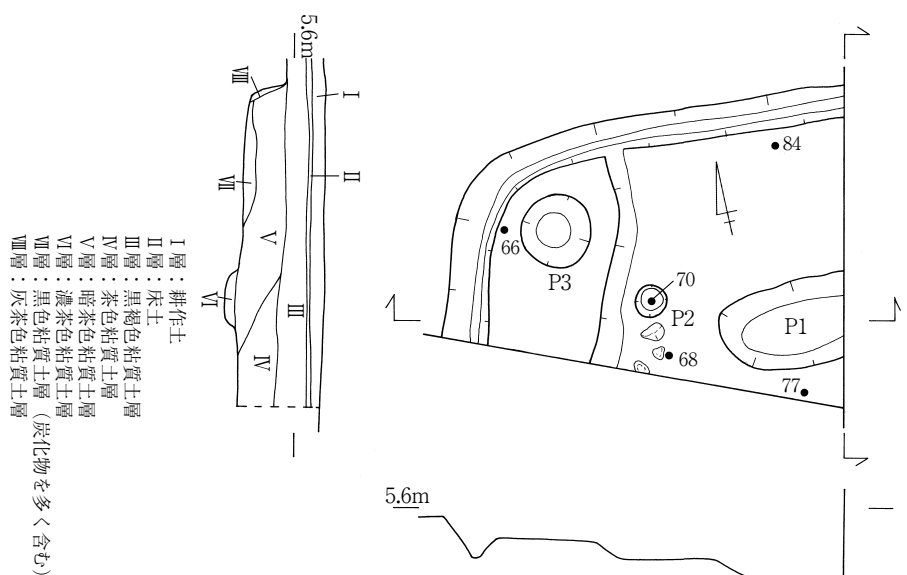


Fig.15 ST 9 平面・セクション・エレベーション・遺物出土状況図



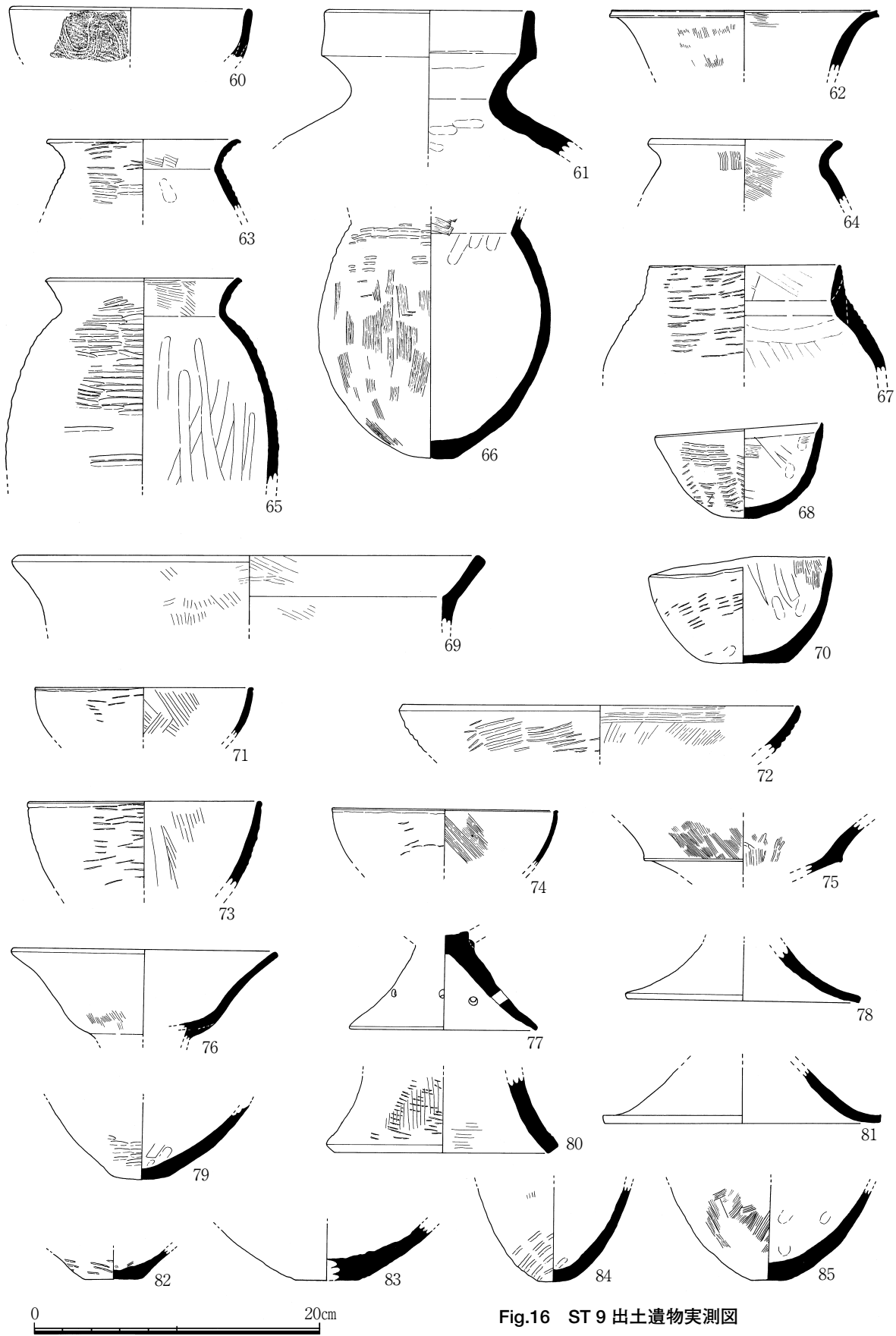


Fig.16 ST 9 出土遺物実測図

床面は、削り出しによるベット状遺構を有し、住居西側に幅92cm、高さ8.1cm前後の高床部が認められる。また、住居壁際直下には幅2～3cm、深さ10～15cmの壁溝がめぐっている。中央ピットは

ピットNo	平面規模(cm)	深さ(cm)	平面形態
P1	140×70	15	長楕円形
P2	径24	28	円形
P3	径52	21	円形

表5 ST9ピット計測表

東西に主軸を置く長楕円形を呈し、検出部分から推測すると長径およそ140cm前後、短径70cm、深さ13～15cmの規模のものと推測される。中央ピット床面には円礫を敷きつめており、北側部分では焼土が確認された。また、埋土中には多量の炭化物を含んでいる。支柱穴はP2を該当させることができる。また、P3は高床部の北西コーナーに位置し、その規模から貯蔵穴と考えられる。

出土遺物は、壺、甕、鉢、高杯である。口縁部と脚部から器種を確認できるものは壺5点、甕34点、鉢25点、高杯10点である。底部は27点出土しており、このうち平底が24点、丸底が3点である。多量の土器片が住居内から出土したが、床面に接した状態の出土例はなく、その全てが埋土中よりの出土である。そのうち66は完形品でベッド部北西コーナー上層より出土している。また、柱穴P1からは完形の鉢(70)が上向きに置かれた状態で出土しており、住居の廃棄にあたり柱材を抜き取った後に埋置している可能性が唆される。その他、埋土中より庄内式土器の胴部細片が出土している。P1出土の土器より、ST9はその時期を弥生時代後期終末に位置づけられる。(浜田)

ST10 (fig.17・18)

調査区の西南部に位置し、住居址の北東隅から南西隅にかけてSD70に切られている。長軸4m、短軸3.7mの隅丸方形で、深さは10～13.5cmを測る。埋土はI層からVI層で、主層はI層の黒褐色粘質土である。中央部は落ち込みで周囲は地山の高床部をもっている。検出面から高床部までの深さは11～17cmである。また東側には長さ2.2m、幅20cm、深さ3～4cmの壁溝があり、その途中を切るような形で焼土が広がっている。その中にうつ伏せの甕(88)が出土し、竈の跡を検出した。住居址の中の溝北側や中央部などで数個のピットを検出したが、弥生土器の細片や古代の土師器が出土しており、住居址に伴うとは考えにくい。支柱穴に該当するものは見当たらない。

遺物は東半分集中して多く出土している。主に土師器の甕・鉢・甗・高杯や須恵器の杯である。また弥生土器の細片も混入している。口縁部の点数は甕が7点と最も多く、鉢と甗は各々1点ずつ出土している。底部は平底の甕1点と丸底の鉢が1点出土している。また、高床部直上から土師器の甕(87～91)、高杯(92)、鉢(93・94)、甗(95)と須恵器の蓋(96)、杯蓋(97)、杯身(98・99)などが出土している。須恵器は6世紀後半のものである。86の甕はこの時期に見かけない胎土なので、搬入品の可能性もある。また、88の甕は検出面や埋土中の土器と接合関係にある。89の甕はaとbが同一個体で埋土上層の土器と接合関係にあり、住居を廃棄する際正常体で置かれたと思われる。89～91の甕は被熱赤変し、激しく煤けている。図示した殆どの土器は埋土中の土器と接合関係にあり、東壁溝付近と南壁付近に集中して出土している。また内面ヘラ削りの甕も東南部のコーナー近くから出土している。

この住居址の特徴は竈が出土したことである。Ⅱ区の中で竈が出土したのはST10だけである。県内でも竈の出土はあるが北側に位置する例が多いので今回の東側にあるのは珍しい。この住居址は古墳時代後期(6世紀末)と考えられる。(泉)

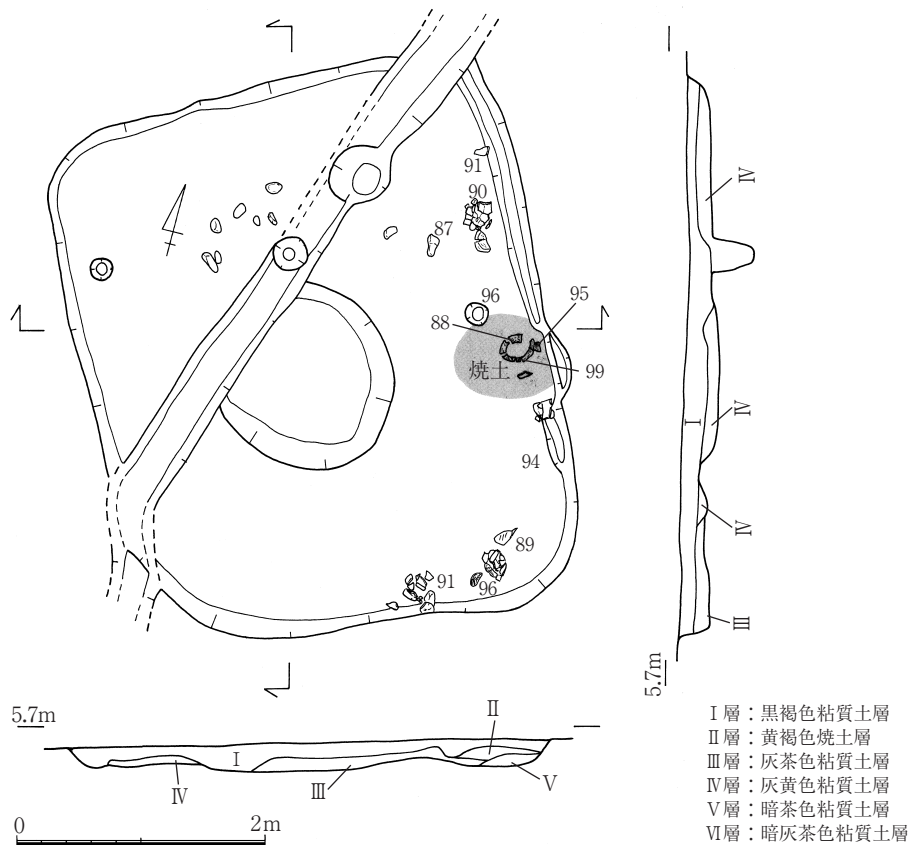


Fig.17 ST10平面・セクション・遺物出土状況図

ST 11 (fig.19)

調査区の中央やや西側寄りに位置する竪穴住居址である。西側の約1/4に相当する部分をST12によって切られているが、長軸 5mを測る円形の住居が復元される。後世の削平のため検出面からの深さ 10cm程が残るのみで、遺存状況はあまり良くない。埋土は I 層：濃茶色粘質土である。

床面はベット状遺構、壁溝ともに認められない。中央部には不整形を呈する中央ピットが存在し、長径50cm、短径43cm、深さ10~13cmを測る。埋土中からは胴部細片が 3点出土している。主柱穴は P2・P3を想定することができ、柱間距離は1.9mを測る。

遺物は埋土中及び床面から壺、甕、鉢、高杯、鉄器が出土しているが、出土量は総じて少ない。口縁部と脚部の点数でみると壺 3点、甕 5点、鉢 6点、高杯 1点を数える。底部は10点出土しており、すべて丸底である。床面出土の遺物は甕口縁部 (102・103)、小型の甕完形品 (101)、高杯の脚部 (105) である。床上5cm程の埋土中よりは、鉢(110)が出土しているが、ST11に伴うものと考えられる。110は全長14cm、最大幅1.8cm、刃部の厚さ0.5cmを測り、刃部が断面U字形、基部が断面

ピットNo	平面規模(cm)	深さ(cm)	平面形態
P 1	50×43	13	楕円形
P 2	径23	52	円形
P 3	28×26	30	楕円形
P 4	30×24	8	不整形円形
P 5	径26	6	円形
P 6	径21	14	円形

表6 ST11 ピット計測表

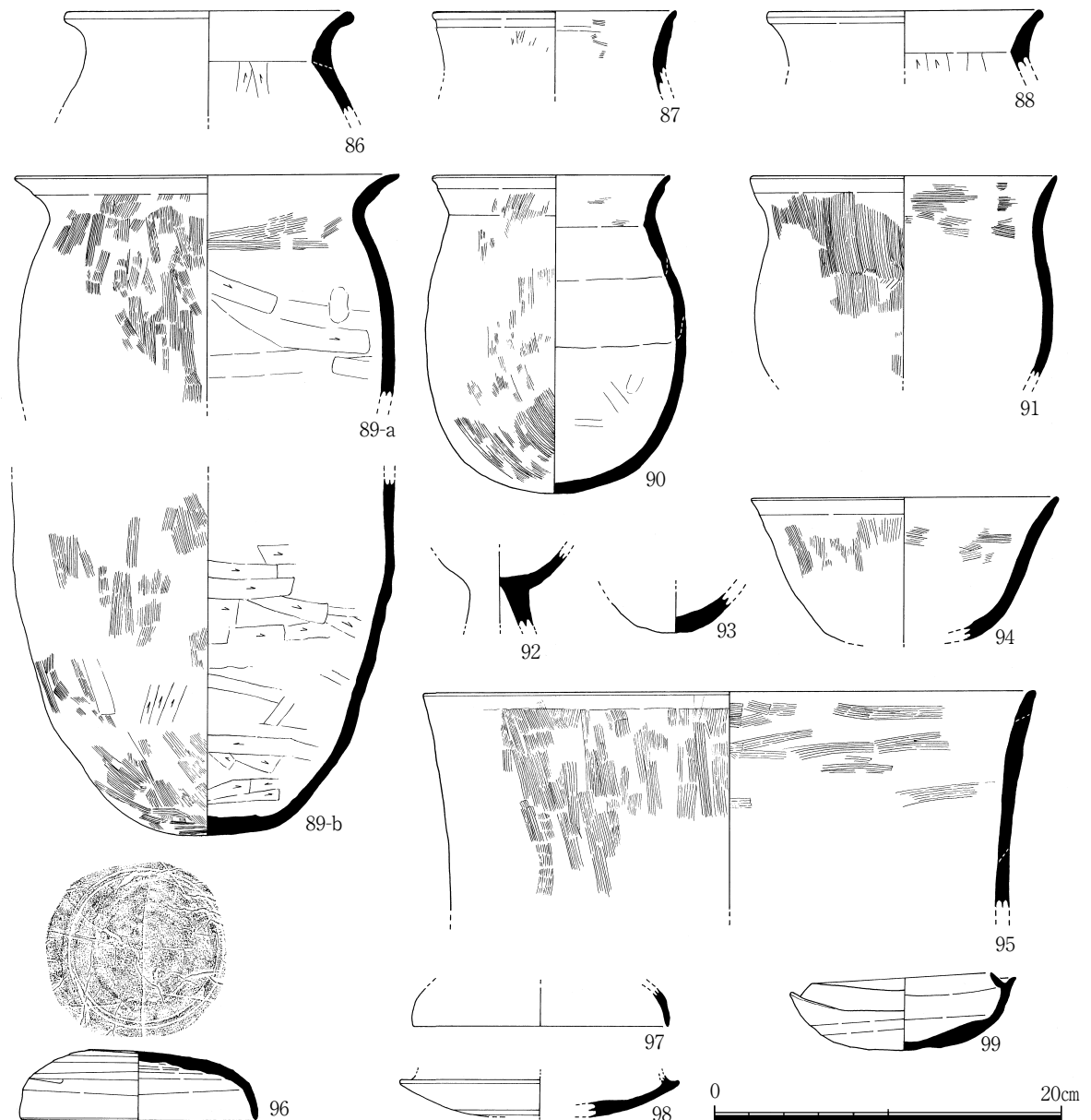


Fig.18 ST10出土遺物実測図

長方形を呈するものである。また、住居北側検出面直下の埋土中からは大型の壺底部が出土している。なお、埋土中から古代の須恵器皿(109)、土師器杯(107・108)が出土しているが、これらは混入である。P2からは甕の口縁部が出土している。これらの床面および柱穴よりの出土土器から、ST11は弥生時代後期前半、当調査区の中ではもっとも古い時期の住居として位置づけられる。(浜田)

ST 12 (fig. 20・21)

調査区の西よりにありST11を切っている。5.1×5.6mの方形プランを呈し、深さ30cm前後を測る。床面には南面の中央部を除いてベット状遺構を有する。高床部の幅は70~120cmを測り、南面のベット状遺構の端部が最も狭くなっている。低床部との比高差は10cm前後を測る。埋土はⅠ~Ⅵ層からなっている。Ⅰ層：黒褐色粘質土、Ⅱ層：黒色粘質土(2~3cm大の河原石を多く含む)、Ⅲ層：灰茶色礫混砂層、Ⅳ層：暗茶色粘土、Ⅴ層：暗茶色粘土(3~5cm大の河原石を少量含む)、Ⅵ層：灰茶色粘土である。Ⅶ・Ⅷ層は東壁側のベット状遺構を形成している。Ⅸ層はセクションベルト脇のサブトレンチに

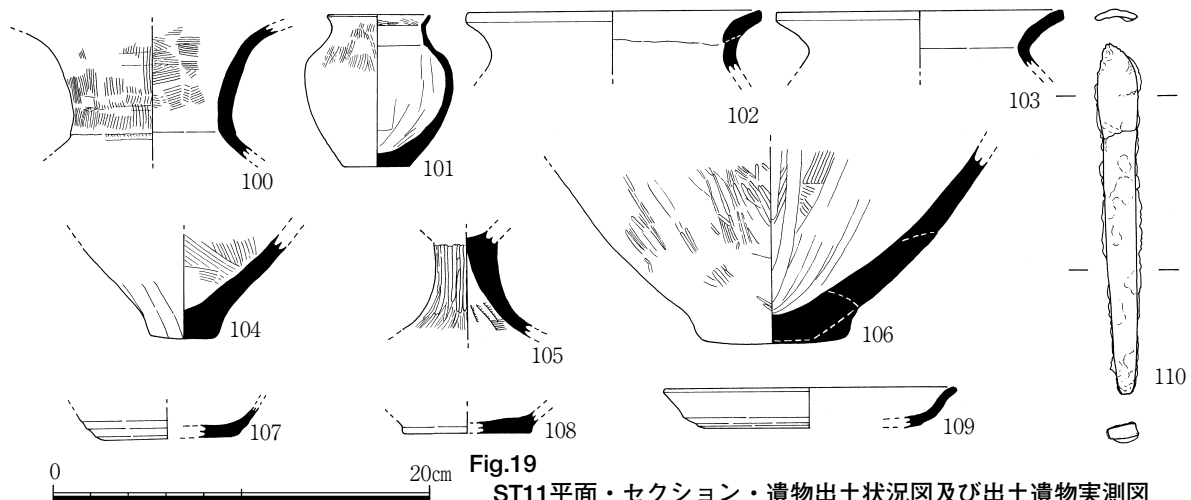
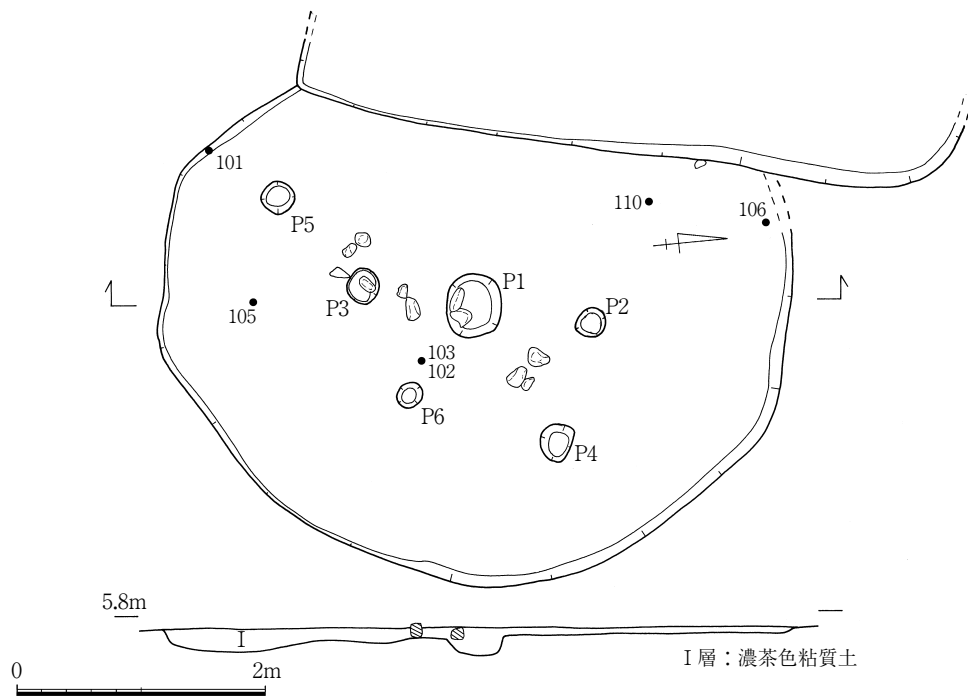


Fig.19 ST11平面・セクション・遺物出土状況図及び出土遺物実測図 (鉄器スケールは3分の1)

かかった地山成形の高床部の断面である。

ベット状遺構は、西・北面では地山削り出しによるしっかりした段部を有しているが、東面では僅かな高まりしか認められず、Ⅶ・Ⅷ層を版築状にして形成している。東側半分に幅18cm、深さ5cm前後の壁溝が巡るが部分的に不明瞭な箇所がある。主柱穴は低床部コーナーにあるP2・3・5・7を該当させることができる。柱間距離は、P3-P7が2.8m、P7-P5が2.8m、P5-P2が3m、P2-P3が2.8mである。中央ピットはP1であるが断面は皿状をなし深さ8cmと浅い。

出土遺物は甕、壺、鉢、砥石である。口縁部の点数で見ると甕3点、壺5点、鉢11点である。底部は13点出土しているが、この内丸底は2点のみで他はすべて平底である。出土状況を図示した甕(115・116)、鉢(118・122・123)は南東コーナーの高床部から集中しており、これらは床面より4~10

cm浮いているが、115・116・123は床面出土の破片と接合関係にある。鉢(119)は完形品でP10よりうつ伏せの状態出土している。脚付鉢(124)は北面高床部床面にうつ伏せの状態出土している。この他床面からは二重口縁壺(112)が出土している。鉢(120・121)は床面から10cm程浮いているが2個体ともに完形品

ピットNo	平面規模 (cm)	深さ (cm)	平面形態
P1	130×86	10	隅丸方形
P2	径20	30	円形
P3	径28	23	円形
P4	径30	24	円形
P5	径24	25	円形
P6	80×90	20	不整形
P7	70×80	17	楕円形

表7 ST12ピット計測表

で重なって出土している。このような出土状況は、住居の廃棄に際して意図的な埋め戻しがなされ、その際に土器が置かれたものと考えられる。東面高床部に集中する河原石群もその時に投入されたものであろう。第Ⅱ層が埋め戻しの土に該当しよう。以上の他埋土中より東阿波型土器の細片が3点出土している。ST12は古墳時代初頭に属する。(出原)

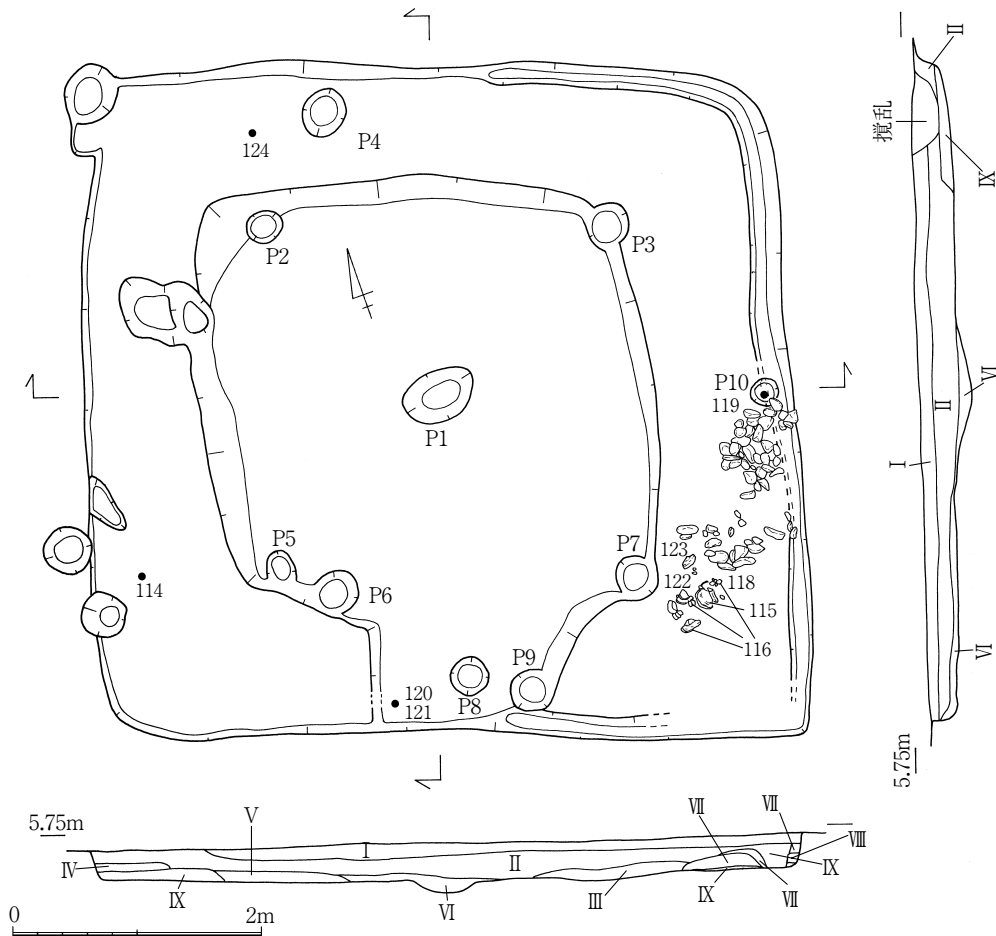


Fig.20 ST12平面・セクション・遺物出土状況図

- I層：黒褐色粘質土層
- II層：黒色土層 (2~5cm大の小礫を多く含む)
- III層：灰茶色礫混じり砂層
- IV層：暗茶色粘土層
- V層：暗茶色粘土層 (3~5cm大の礫が少し入る)
- VI層：灰茶色粘土層
- VII層：暗茶黄色粘質土層
- VIII層：茶色小礫混じり粘土層 (ベット埋土)
- IX層：地山礫層

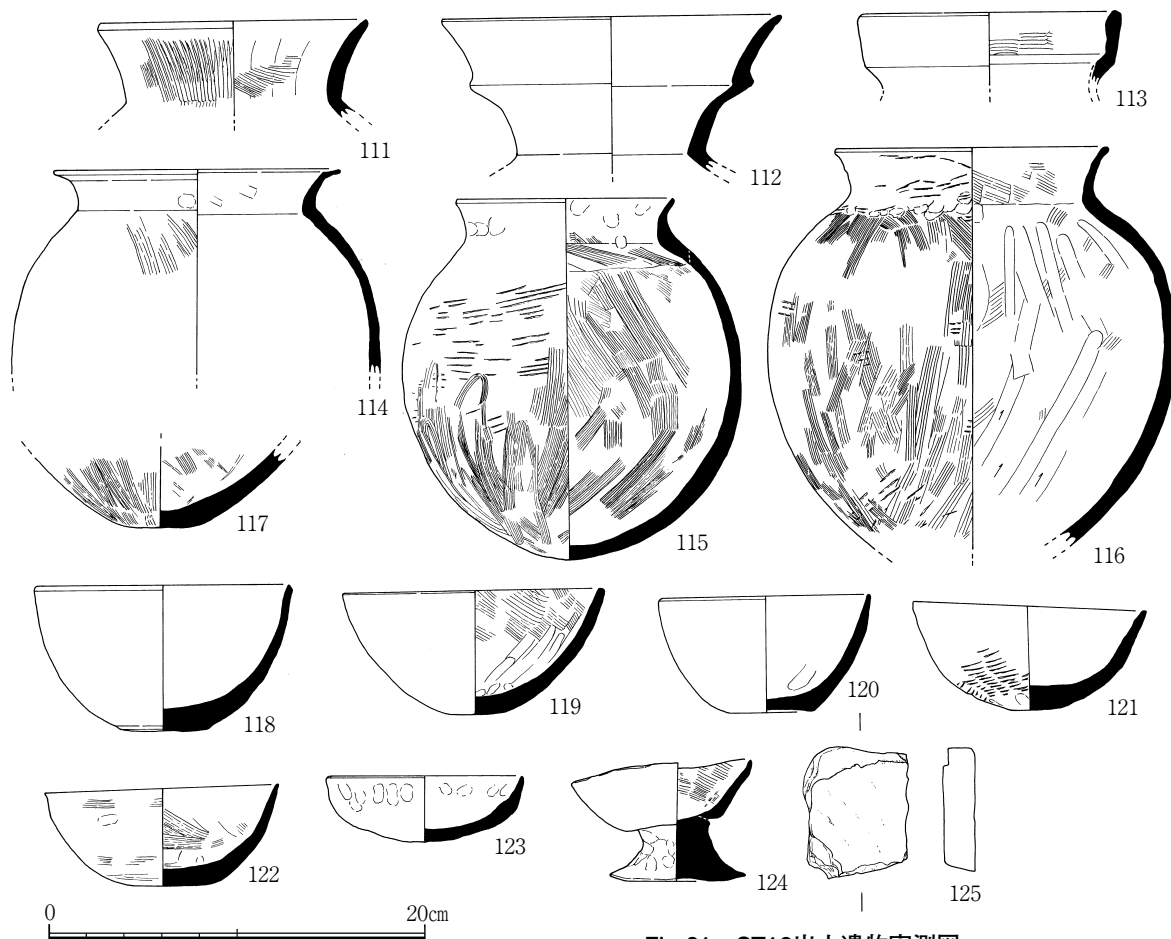


Fig.21 ST12出土遺物実測図

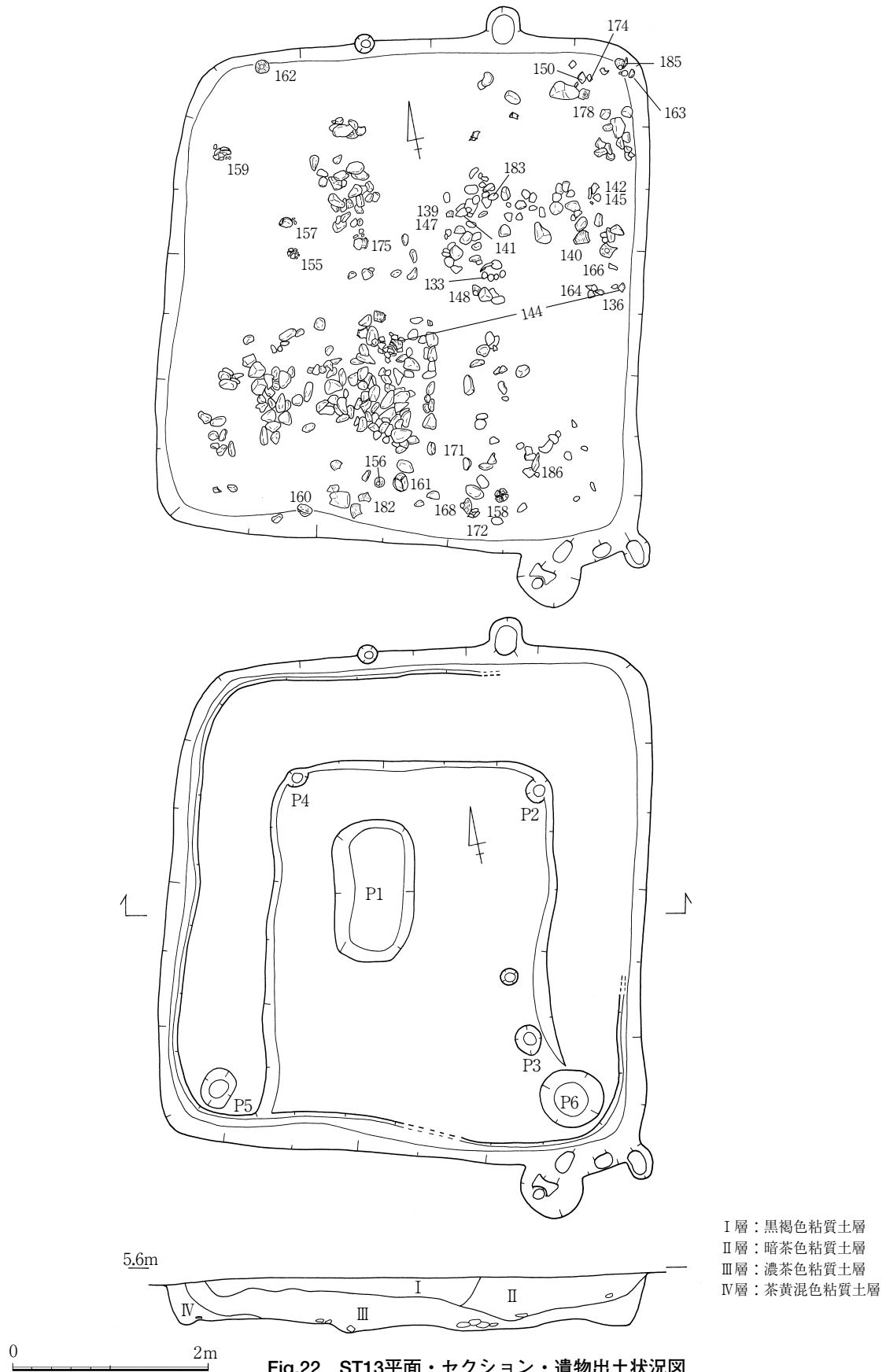
ST 13 (fig. 22・23・24)

調査区の北西部に位置する住居址で、西側のST14とは距離約60cm程で近接している。平面形は東西4.9m、南北5.2mとやや南北に長い方形をなし、床面までの深さは40～55cmである。埋土はⅠ層：黒褐色粘質土、Ⅱ層：暗茶色粘質土、Ⅲ層：濃茶色粘質土、Ⅳ層：黄茶混色粘質土である。

床面は削り出しによるコの字状のベット状遺構を有し、南を除く三方に幅86～82cm、高さ5～3cm程の高床部が認められる。また、住居壁際直下には幅4～6cm、深さ4cm前後の規模の壁溝がめぐっているが、北東コーナーでは壁溝を検出することができなかった。中央ピットは住居の中央部やや西寄りで見出された。南北に主軸をもつ長楕円形を呈し、長軸140cm、短軸80cm、深さ6～10cmを測る。主柱穴は低床部のコーナーにあるP2・P3・P4を該当させることができる。柱穴間の距離は南北(P2-P3)が2.6m、東西(P2-P4)が2.5mである。主柱は4本と想定できるが、精査したにもかかわらず、南西の柱穴に該当するものは検出できなかった。P6はその規模から貯蔵穴と考えられる。

ピットNo	平面規模 (cm)	深さ (cm)	平面形態
P1	140×80	10	長楕円形
P2	径24	23	円形
P3	30×26	19	楕円形
P4	径24	23	円形
P5	38×32	18	楕円形
P6	径66	26	円形

表8 ST13ピット計測表



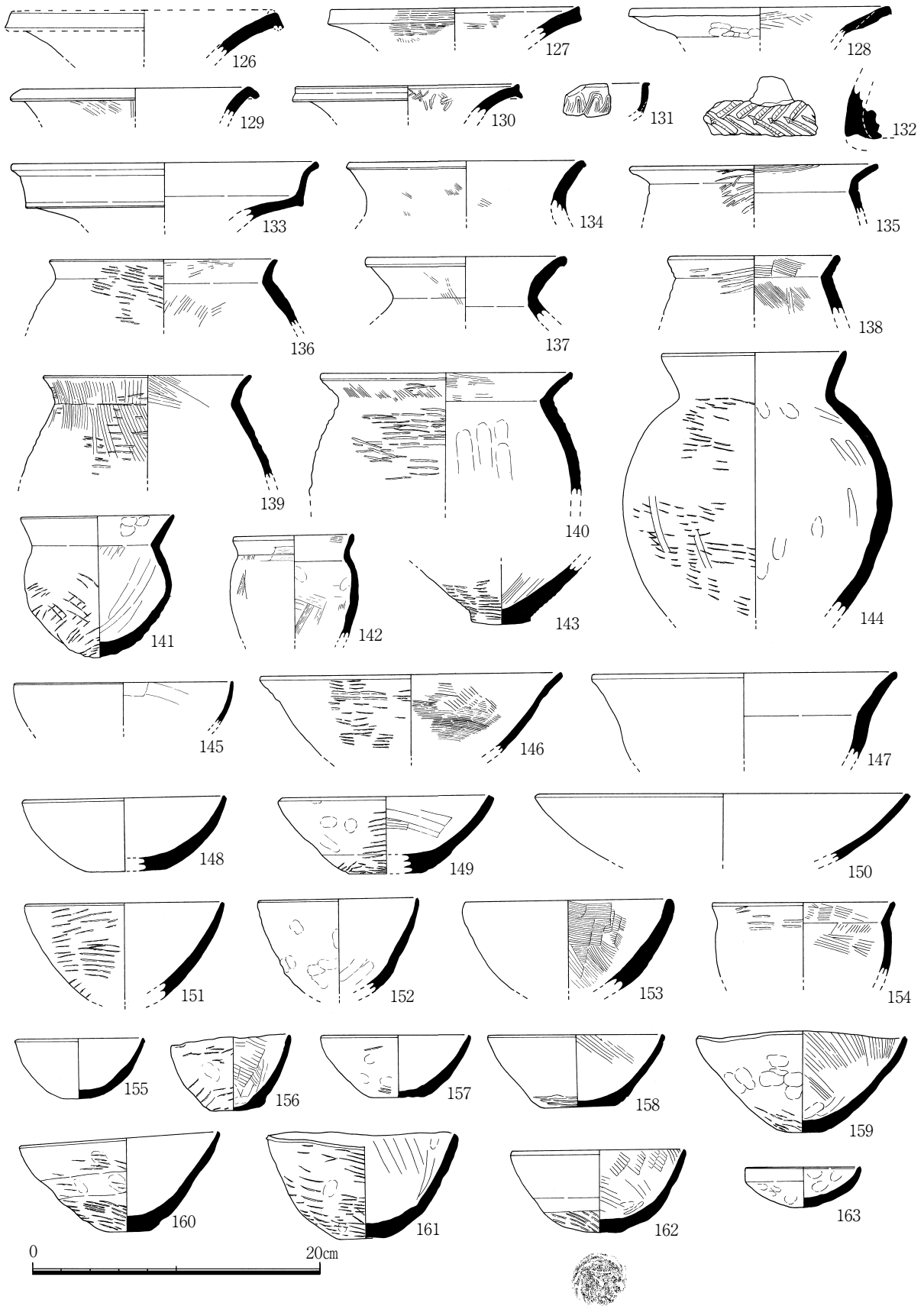


Fig.23 ST13出土遺物実測図

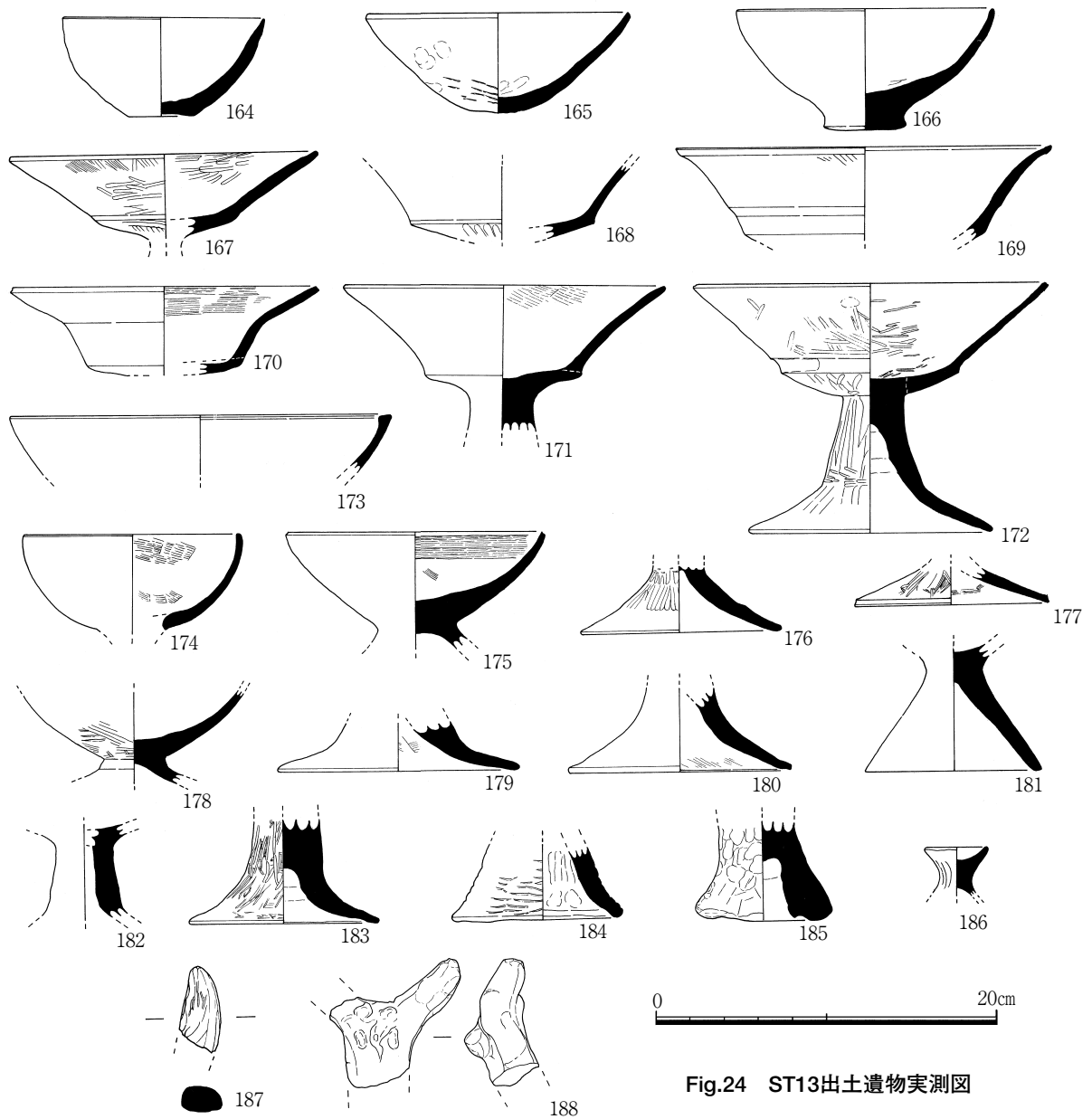


Fig.24 ST13出土遺物実測図

出土遺物は壺、甕、鉢、高杯、支脚、ミニチュア土器、磨製石包丁などで、埋土中および床直上より、多量の土器が拳大～人頭大の河原石とともに出土している。口縁部と脚部から器種を確認できるものは壺 25点、甕 61点、鉢 88点、高杯 30点、支脚 10点を数える。底部は47点出土しており、平底33点、丸底13点、尖底 1点である。出土状況を見ると床面出土の土器は高床部では東壁際、低床部では南壁際に多く出土する傾向がみられる。高床部東側からは甕 (136・140・142・144)、鉢 (145・150・164・166)、高杯 (174・178) が出土している。北東コーナーでは支脚 (185) と完形の手捏ねによる皿状小型の鉢 (163) が壁際にかかる状態で出土している。また北西コーナーでは完形の鉢 (159・162) が出土し、そのうち162は壁溝の上に向きの状態で出土している。低床部からは壺 (133)、甕

(139・144)、鉢(147・148・155～158・160・161)、高杯(168・171・172・175・182)が出土しているが、そのうち141は完形の小型の甕、133は搬入品で東阿波型土器の二重口縁壺口縁部である。また、南側壁直下には土器が集中する傾向があり、中でも156・158・160・161の鉢が各々完形の状態で出土している。これらの床直上土器は鉢を中心に数多くの完形品が認められ、住居廃絶にともなう意図的な廃棄行為が考えられる。なお、埋土中からは意図的に投棄されたとみられる多量の河原石とともに、186が床上17cmの位置で出土している。186は手捏ねによるミニチュア土器で、祭祀性の強いものであると考えられる。他に、柱穴P2からは砂岩製の磨製石包丁が出土しており、これはST13の住居廃絶後に意図的に埋められたものと考えられる。これら床面の一括性の高い遺物と搬入土器より、ST13は古墳時代初頭に位置づけられる。(浜田)

ST 14 (fig. 25・26・27)

ST14は調査区の北西にあり、一辺5.2m前後の隅丸方形状を呈する竪穴住居址である。深さは33cm前後を測る。埋土はⅠ層：黒褐色粘質土、Ⅱ層：濃茶色粘質土(拳大の河原石を多量に含む)、Ⅲ層：灰茶色砂礫混粘質土(一部に音地の二次堆積土が認められる)、Ⅳ層：黒色粘質土である。床面はほぼ平坦であるが南端に深さ5～8cmの楕円形の凹みが見られる。中央ピット(P1)は、南北に長く隅丸方形状を呈し、断面は逆台形で深さ10cm前後を測る。主柱穴はP2～P5である。柱間距離は、P2-P3・P

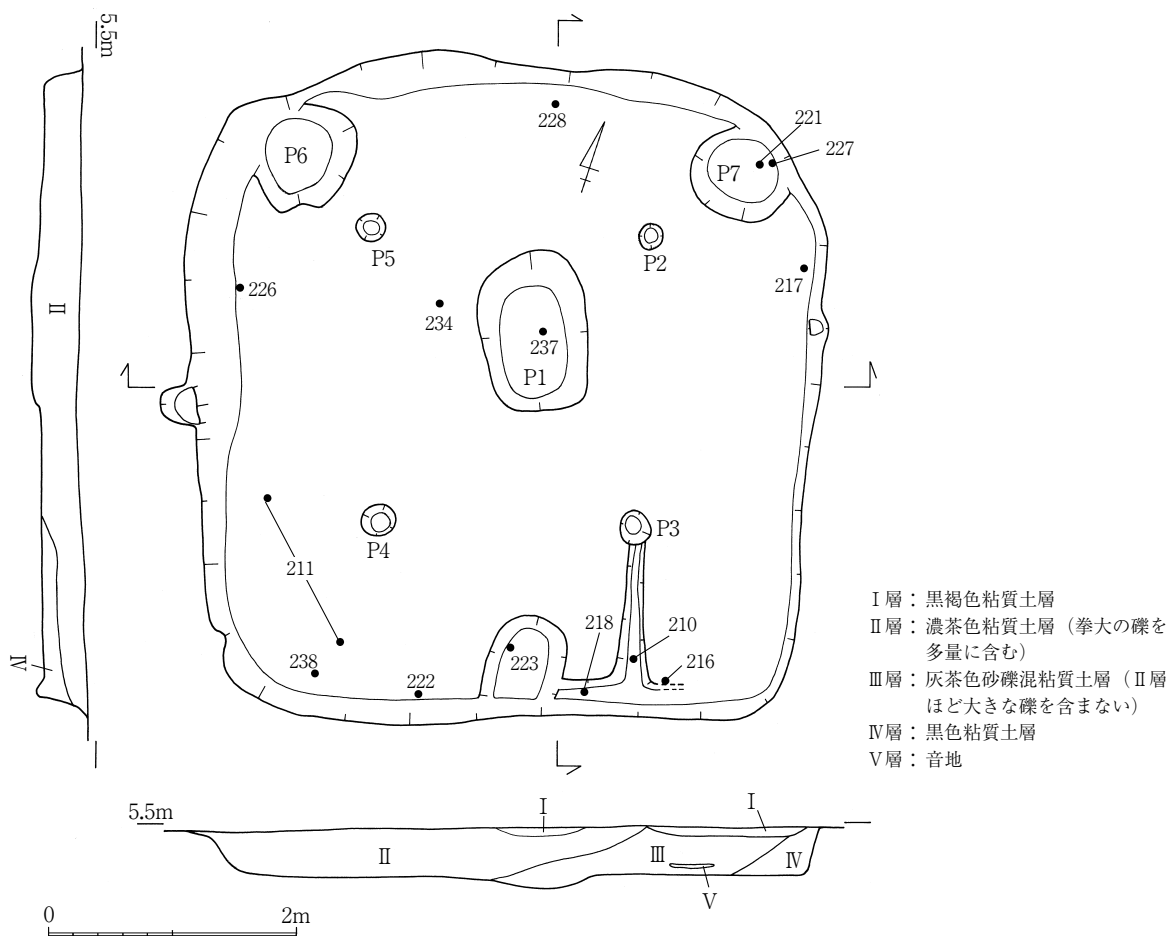


Fig.25 ST14平面・セクション・遺物出土状況図

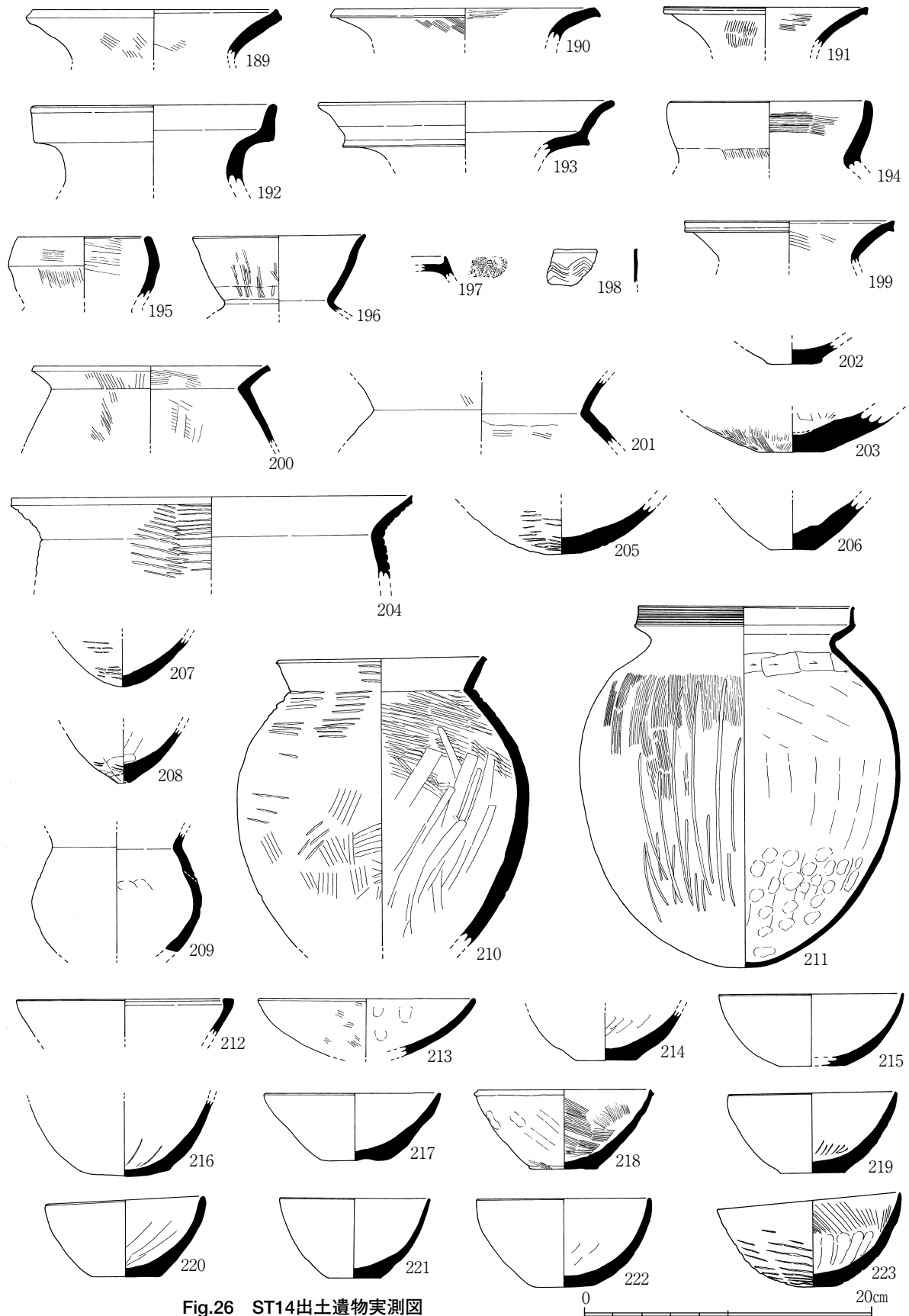


Fig.26 ST14出土遺物実測図

4-P5・P5-P2がそれぞれ2.3m、P3-P4が2.1mである。北のコーナーにあるP6・P7は貯蔵穴と考えられる。壁溝は基本的に認められないが、南壁側からP3に向かって逆T字状に延びる幅18cm~40cm、深さ5cm前後の小溝が存在する。間仕切りに関係するものであろうか。

出土遺物は、甕、壺、鉢、高杯、支脚

である。口縁部の点数で見ると甕 71点、壺 21点、鉢 44点、高杯脚部 4点、支脚の頭部・脚部が11点である。底部は全部で44点出土しており、この内平底が35点、丸底が8点、尖底が1点である。出土状況を見ると床面出土の土器は壺(194・198)、甕(210・211)、鉢(212・225)、支脚(235・236)、P4の床からは鉢(227)が出土している。これらのうち、甕の2点は埋土中出土の大片と接合関係にある。この他、おもだった土器についてドットに落して図示しているが、これらはすべて床面から10~15cmほど浮いている。しかしこれらの中には、鉢を中心に完形品やそれに近いものが多く含まれている(甕:211、鉢:217、219、220、222、223、226、228)。このような出土状況は、堅穴住居が廃絶された後に自然現象によって偶然に混入したのではなく、廃絶に際して意図的に置かれたものと考えられる。当住居址もST12などで見たように、埋め戻しがなされその際に置かれたものであろう。ちなみに211は吉備型甕である。この他に搬入土器として東阿波型土器の壺(193・196)が見られる。また在地産の甕で内面ヘラ削りの認められる破片が12点存在するが、全体の1%に満たない。ST14は古墳時代初頭に属する。(出原)

ピットNo	平面規模(cm)	深さ(cm)	平面形態
P1	30×40	43	楕円形
P2	径28	20	円形
P3	40×50	40	不整形
P4	22×30	10	楕円形
P5	32×38	35	楕円形
P6	径36	37	円形
P7	60×106	8	不整楕円形
P8	径40	40	円形

表9 ST14ピット計測表

ST 15 (fig. 28)

調査区の北西端に位置し、殆どが調査区外に出ているが、ベット状遺構を有する方形住居址と考えられ

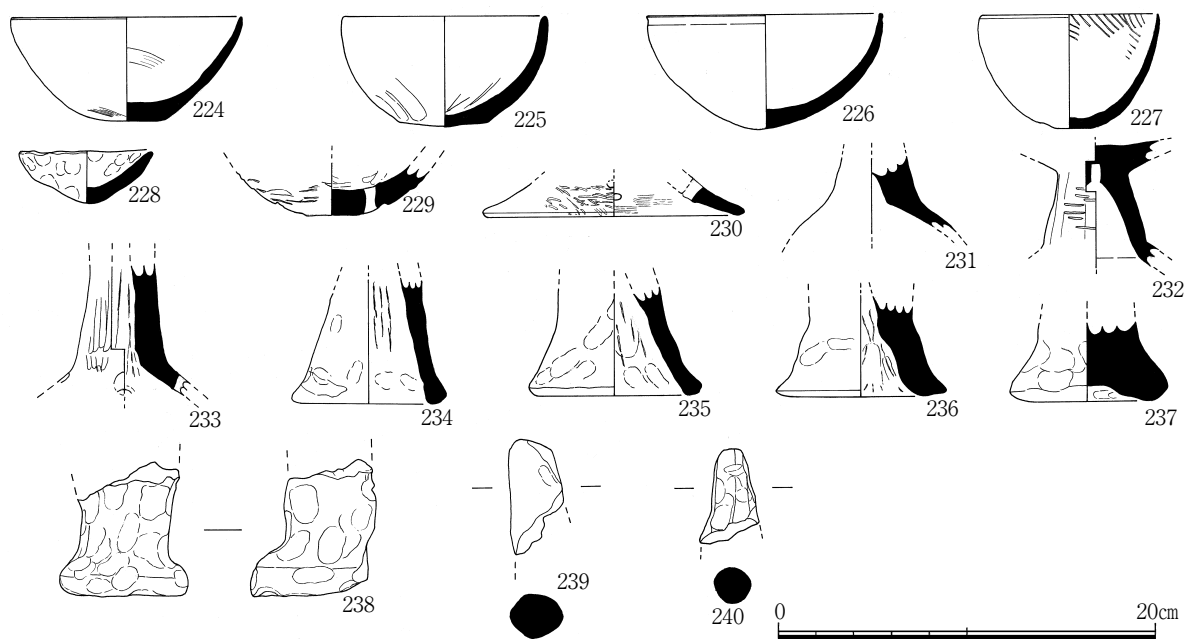


Fig.27 ST14出土遺物実測図

る。西コーナー部に検出された地山削りだしのベット状遺構は高床部の幅61cm、検出面からの深さ 28cm、低床部との比高差は6cmである。埋土は3層に分かれており、Ⅰ層：濃茶色粘質土、Ⅱ層：黒褐色粘質土、Ⅲ層：暗茶黄混色土で、Ⅱ層が大半を占めている。壁溝やピットは確認できていない。

遺物は弥生土器の細片が多く出土しているが、図示するものは少ない。南壁近くの高床部直上より完形の脚付鉢 (243) が横向きで出土している。その他甕の口縁部も出土しており、これらは東阿波型土器 (241) と庄内式土器 (242) で搬入品である。241は上層からの出土で、242は床面からの出土である。ST15は古墳時代初頭に属する住居址と思われる。(泉)

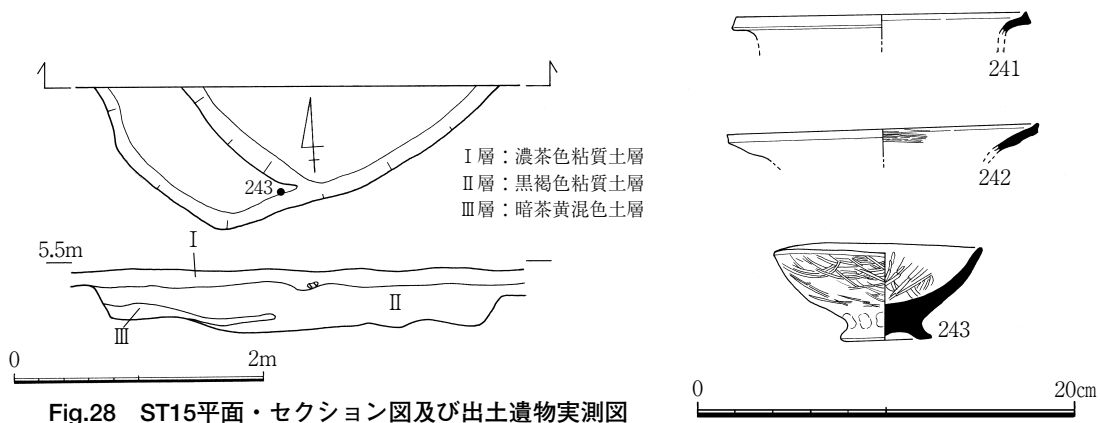


Fig.28 ST15平面・セクション図及び出土遺物実測図

ST 16 (fig. 29・30・31)

調査区の西寄りにありST12と近接している。長軸が6.3m前後を測る胴張り状の方形を呈する竪穴住居址で、深さは約25cmである。北壁は直線状をなしているが西・南壁は弱い弧状を描いている。東壁側は近世の溝に切られている。埋土は、Ⅰ層：円礫を多く含む茶色粗粒砂、Ⅱ層：円礫を多く含む暗茶色粘質～砂質土、Ⅲ層：濃茶色粘質土(地山の黄色シルトをブロック状に含む)、Ⅳ層：淡茶色粘質土である。西壁側の中央部 3mと南壁の一部を除いて楕円形状に地山削り出しのベット状遺構が巡っている。高床部の幅は25～80cmでコーナー部分で最も広がっている。低床部との比高は10～15cm前後を測る。ただ南北セクションのⅢ層の堆積は、粘土貼付による高床部拡張の可能性も考えられる。中央ピット(P7)は、60×106cm、深さ8cmの不整楕円形を呈し、床面中央よりやや南に偏して位置している。支柱穴は、P1、P3、P5、P6、P8の5穴である。柱穴間距離は、P1-P3・P8-P6・P6-P1が2.4m、P3-P5が2.3m、P5-P8が2.2mである。

出土遺物は、壺、甕、鉢、高杯、甌、支脚、磨製石斧などである。口縁部及び脚部の出土点数は、壺 17点、甕 82点、鉢 45点、高杯杯部4点、高杯脚部9点、甌1点、支脚頭部5点、支脚脚部 25点である。底部は66点出土しており、平底が34点、丸底が28点、尖底が4点である。この他焼成後穿孔の甌底部が1点出土している。床面からは壺(244・

ピットNo	平面規模(cm)	深さ(cm)	平面形態
P1	30×40	43	楕円形
P2	径28	20	円形
P3	40×50	40	不整形
P4	22×30	10	楕円形
P5	32×38	35	楕円形
P6	径36	37	円形
P7	60×106	8	不整楕円形
P8	径40	40	円形

表10 ST16ピット計測表

249・255)、甕(257・259・261・270)、鉢(272・274・275・279・282)、高杯(287)、甌(285)出土し、P6からは脚付鉢(295)が出土している。高杯(287)は柱状部以下が欠落しているが、床面に杯部をうつ伏せにした状態で出土した。甌(285)と同底部(284)は同一個体と考えられる。他は埋土中からの出土である。搬入土器は庄内式の甕(245)と東阿波型土器の高杯(291)が見られる。磨製石斧(307)は検出面直下からの出土であり混入の可能性が強い。

西壁側に河原石の集中出土が見られるが、この礫群は高床部床面に下面をあわせた状態で出土している。東側半分が現状の地山削り出しによる高床部からはみ出した状態であるが、上述したように本来は粘土貼付によるもっと広い高床部があったと考えられる。またこれらの礫群の数点には上面に煤の付着が認められる。従って住居に付属した施設として理解しなければならない。

ST16は古墳時代初頭に属する。(出原)

ST 17 (fig. 32・33・34・35)

調査区の南端に位置する。西側端を近世の溝SD78、床面北は土坑SK125、北東は古代の土坑SK123

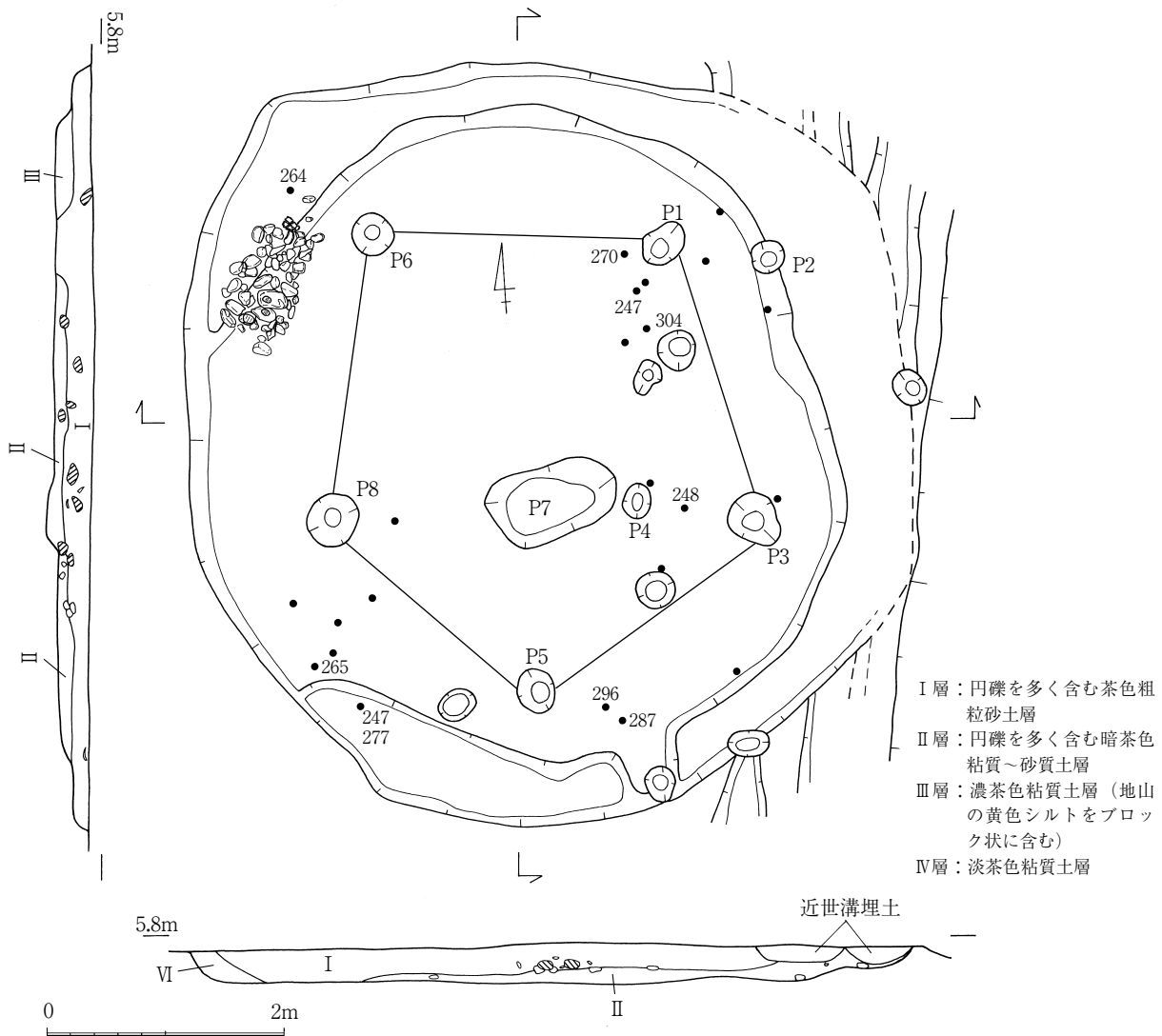


Fig.29 ST16平面・セクション・遺物出土状況図

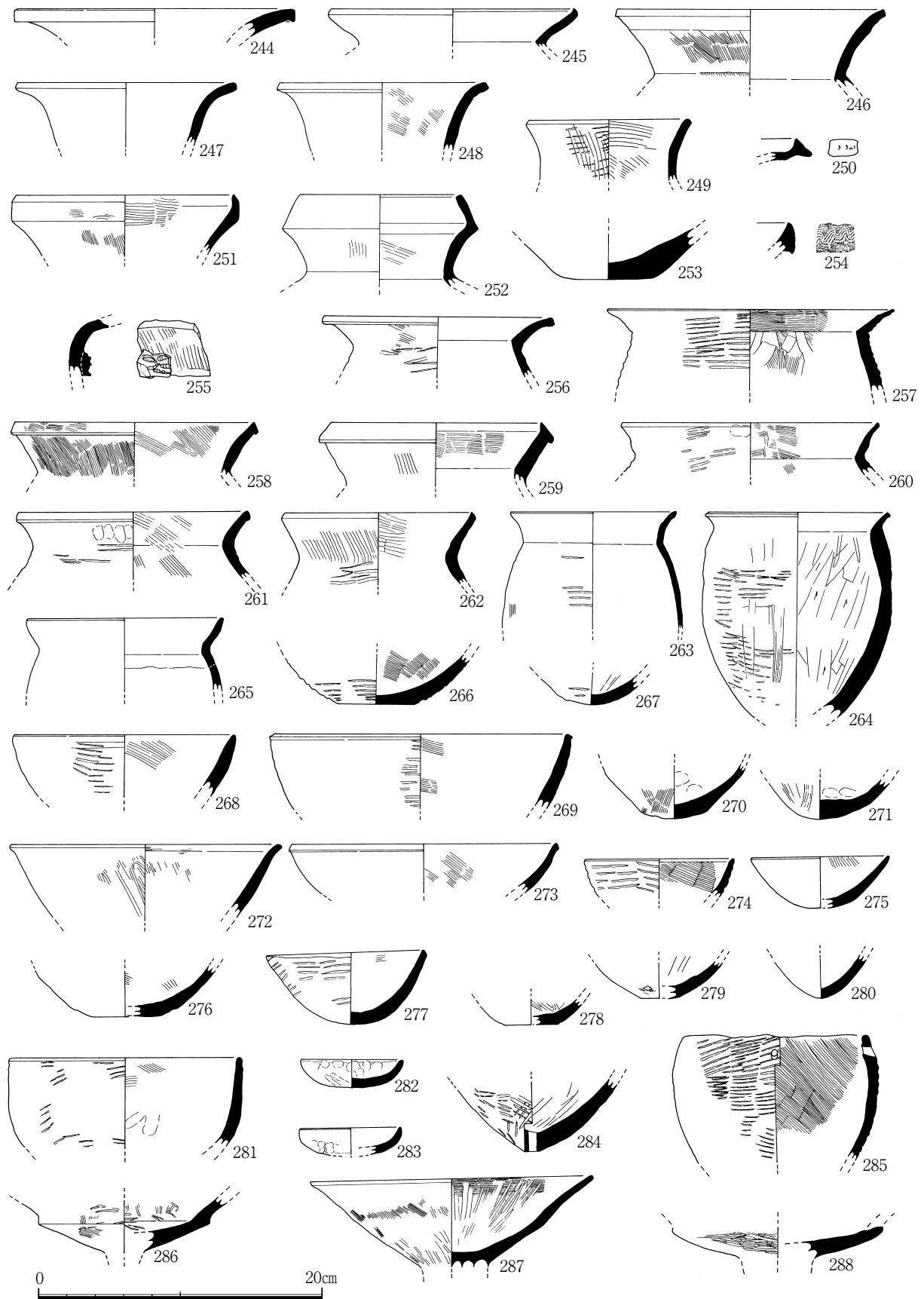


Fig.30 ST16出土遺物実測図

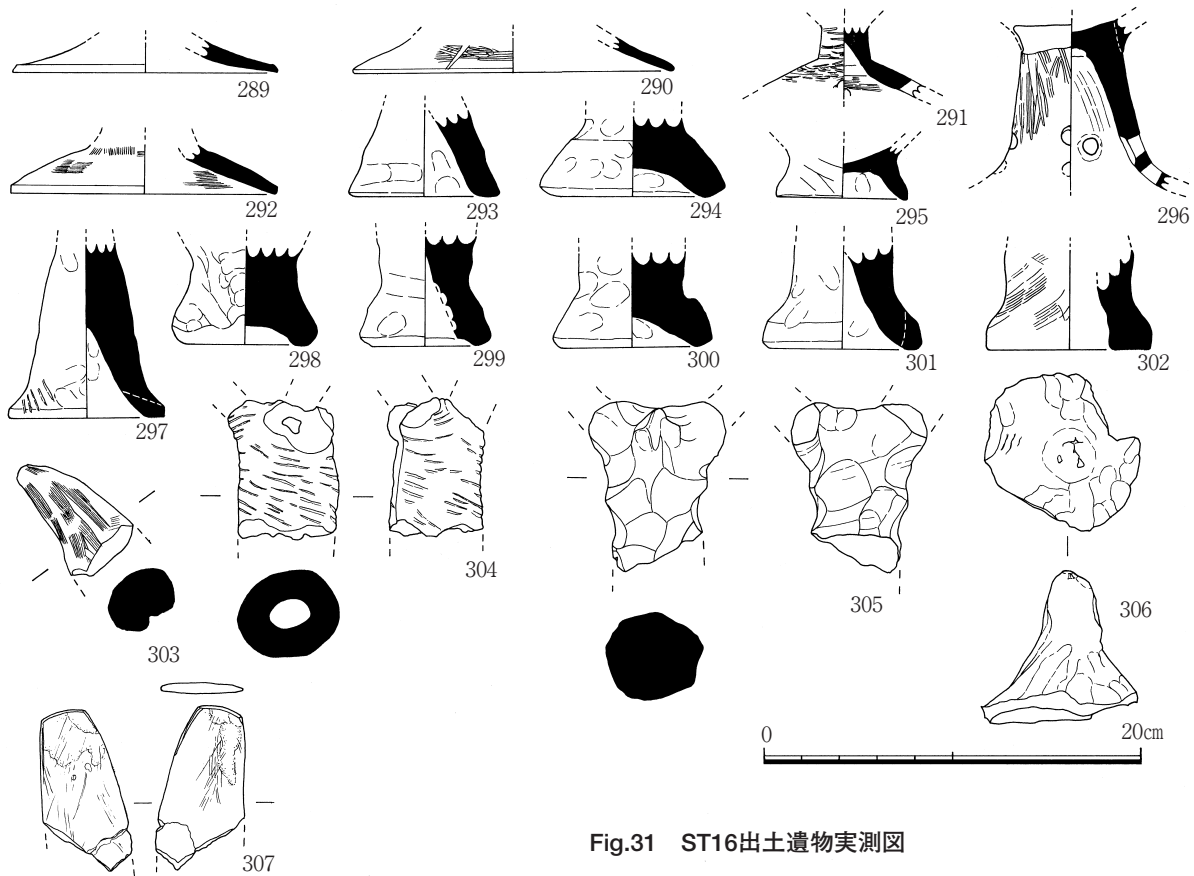


Fig.31 ST16出土遺物実測図

によって切られている。さらに、北側部分が攪乱によって判然としない状況にあり、住居の範囲・規模などに明瞭さを欠く。現状での検出部分からみると、平面形は南側がやや丸みをもったほぼ方形に近いプランを呈し、一辺6m前後の当調査区でも比較的大型の住居であると推測される。深さは22cmまで確認された。埋土はⅠ層：灰茶色粘質土、Ⅱ層：橙色シルト、Ⅲ層：灰黄茶色粘質土であった。主な埋土はⅠ層で、中央にⅡ層のシルト層が一部入りこんでいる。

床面はベット状遺構を有し、西を除く三方に幅80cm、高さ6cm前後の高床部を設けている。確認されたもののうち、東側は削り出しによってなされているが、南側では削り出した上にさらに貼り土を施している可能性があり、埋土Ⅲ層がそれに該当すると考えられる。なお、壁溝は確認できなかった。中央ピットは住居のほぼ中央部やや南寄りで確認された。東西方向に主軸をもったもので、規模は長軸130cm、短軸66cm、深さ13～15cmを測り、長楕円形を呈する。埋土中底位部には炭化物が確認された。主柱穴は低床部のコーナーにあるP3、P6を該当させることができるが、低床部やや中央寄りのP4、P5も36～37cm前後の深さをもつもので、柱穴の可能性もある。また、P1は甕の細片が20点ほど出土しており、貯蔵穴の可能性が高い。

出土遺物は壺、甕、鉢、高杯、砥石、打製石包丁などである。口縁部と脚部が

ピットNo	平面規模(cm)	深さ(cm)	平面形態
P1	38×32	28	楕円形
P2	130×66	37	長楕円形
P3	28×24	24	楕円形
P4	径36	36	円形
P5	径28	37	円形
P6	34×24	32	楕円形

表11 ST17ピット計測表

ら器種を確認できるものは、壺 13点、甕 40点、鉢 18点、高杯 6点を数える。底部は36点出土しており、そのうち平底は34点、丸底は1点、尖底は 1点である。出土状況を見ると、床面出土の遺物は低床部北西コーナーと南西コーナー、及び東側に集中してみられる。低床部北西コーナーからは、壺 (312)、甕 (324)、鉢 (329) が出土しており、324・329はほぼ完形に復元できた。低床部南西コーナーからは、壺 (311)、甕 (315・317・318・319・320・322・332・336・338) が出土し、うち319は完形品、他のものもほぼ完形品に近いものである。このうち、318・320は激しく煤けている。また、低床部東側からは、壺 (313・337)、甕 (323・324・339)、鉢 (326)、大型の鉢 (330・331)、砂岩製の砥石 (347・348) が出土し、331が完形、323と324はほぼ完形に近い状態まで復元できた。これらの床面直上土器は、A-北西・B-南西・C-東という3つのブロックに分けることができる。各々をその出土状況と接合関係から詳細に検討すると各ブロック内で接合が完成している。また、器種構成をみると、Bブロックでは完形品を含む甕のまとまり、Aブロックではほぼ完形の壺・甕・鉢が各 1点ずつ、Cブロックでは大型の鉢が 2点など特徴があり、土器の廃棄に対して一定の意図があったものと思われる。なお、B-南西ブロックの土器の一部と339・323が柱穴P5・P6に落ち込んでいることから、これらの土器群はこの住居の廃絶直後に一括して廃棄されたものと考えられる。しかも、すでにふれたように、3つの土器群から構成されていることは、無秩序の廃棄ではなく一定のまとまり=単位をもって廃棄行為が行われたものと考えられる。

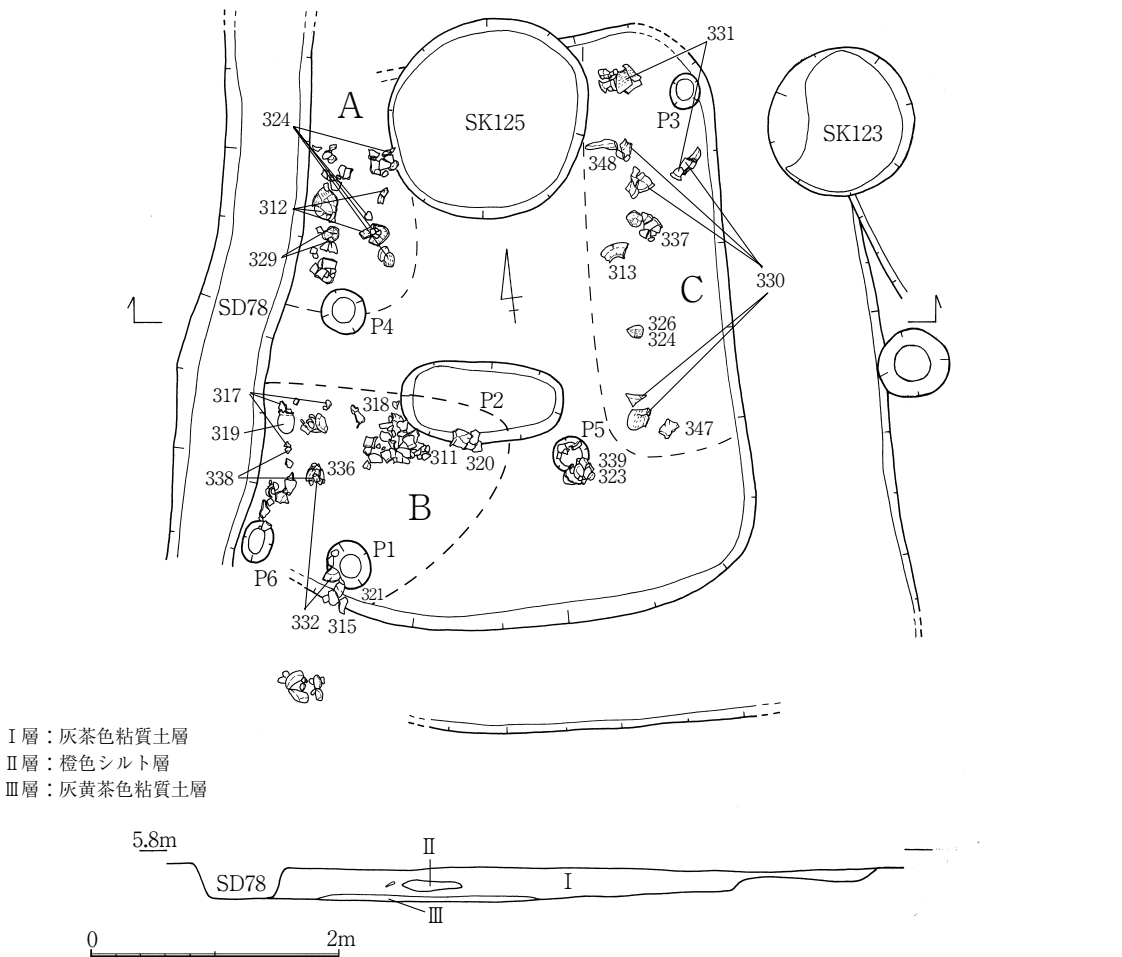


Fig.32 ST17平面・セクション・遺物出土状況図

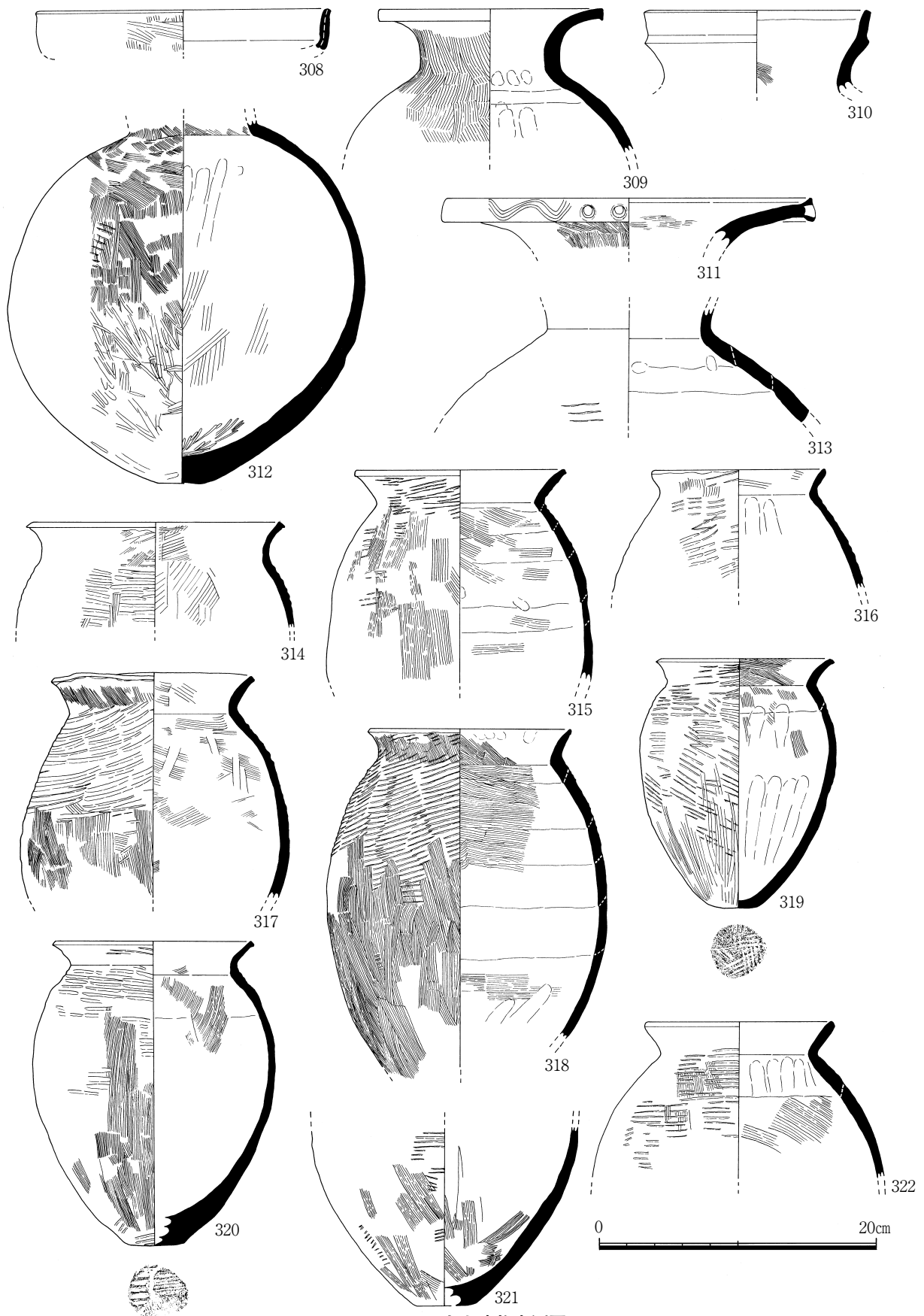


Fig.33 ST17出土遺物実測図

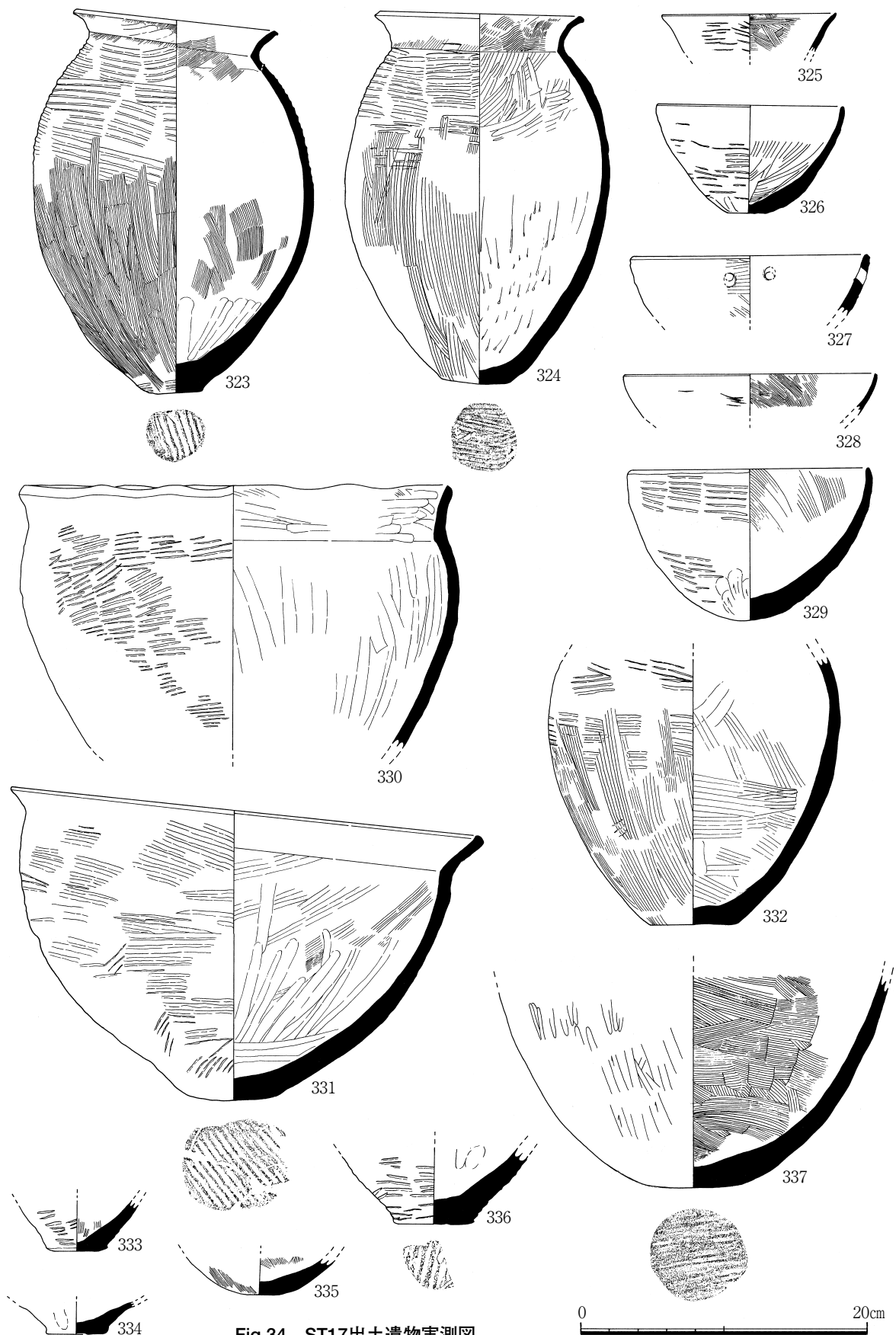


Fig.34 ST17出土遺物実測図



Fig.35 ST17出土遺物実測図

この他、ベット直上南東コーナーからは結晶片岩製の打製石包丁が出土している。ST17は弥生時代後期末に位置づけられる。(浜田)

ST 18 (fig. 36)

調査区の中央部に位置し、径4.7m前後を測る円形の住居址である。上部全体はかなり削平されており、深さは10~15cmと浅い。また西側は古代の溝(SD80)に切られており、北側や北東部も近世攪乱のため残存は少ない。埋土は単純一層(濃茶色粘質土)である。中央ピット(P1)は94×68cmを測る楕円形を呈し、深さは12~15cmである。中央ピット上層には住居址埋土が堆積し、下層は黒褐色粘質土が堆積している。住居址南部のP2は径20cmの円形で、深さは12.5cmであり、西部のP3も円形で径28cm、深さ34cmである。P2-P3の柱穴間の距離は3mである。これらのピットから特に遺物は出土していないがこの住居址に伴うもので、支柱穴であると考えられる。さらに北側にも多数のピットを検出したが、住居址に伴うものかどうか不明である。

遺物は住居址の東半分に集中して多く出土しており、甕、壺、鉢、高杯の他、支脚の完形品も多く見られる。他の住居址に比べて、支脚の多いのが特徴である。口縁部で見ると、甕11点で、壺4点、鉢32点出土している。底部は平底7点、丸底4点で、脚部は脚付

ピットNo	平面規模(cm)	深さ(cm)	平面形態
P1	94×68	15	楕円形
P2	径20	12.5	円形
P3	径28	34	円形

表12 ST18ピット計測表

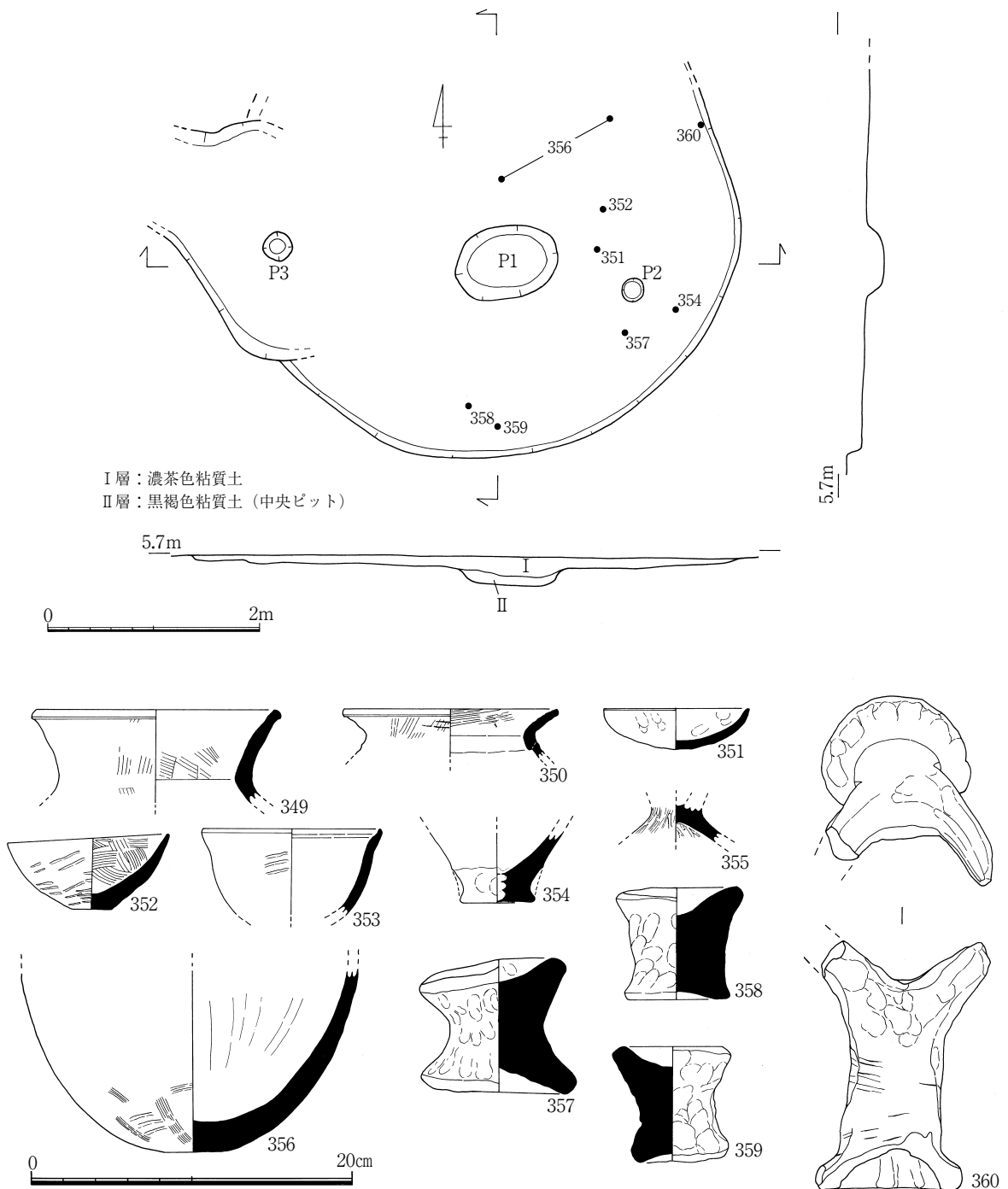


Fig.36 ST18平面・セクション・遺物出土状況図及び出土遺物実測図

鉢1点のみである。これらの殆どは床面から出土したもので、351は手捏ねの皿状の鉢で搬入品の可能性があり、352は叩き成形の鉢で完形品である。353・354の鉢も床面からの出土である。また、床面へばりつきで出土した357・358・359は支脚で、これらも完形品である。359は南壁近くで出土しており、上面被熱赤変している。358・359は357の支脚よりやや小さめである。360は角のある支脚でほぼ完形品である。ST18は弥生時代後期終末の住居址と考えられる。(泉)

ST 19 (fig. 37)

調査区の北東側に位置し、住居址の南半分は近世の攪乱、北西部はST20と切り合い関係にある。上部は南北方向に延びるSD80に切られており、西側もSD81に切られている。ST20との先後関係は不明であるが、5.5m前後を測る隅丸方形と考えられる。埋土はⅠ層：暗灰茶色粘質土、Ⅱ層：濃茶茶色粘質土、Ⅲ層：茶色砂質土である。地山削り出しの幅1.1mを測るベット状遺構がある。高床部までの深さ37cm、低床部との比高差は11cmを測る。低床部の北東隅のP 1は平面規模が9×7cmの楕円形で、深さ16.7cmを測り、北西隅のP 2は径26cmの円形で、深さ28cmを測る。P 1-P 2の距離は2.7mで、断面形はどちらもU字形である。これらのピットから弥生土器細片が出土しており、住居址に伴う支柱穴と考えられる。

出土遺物は甕・壺・鉢・支脚・有孔円盤状土器・紡錘車などである。口縁部の点数で見ると鉢が43点と最も多く、甕が32点で、壺は14点である。壺のうち広口壺(362・363・368他)が12点と多い。底部は平底が一番多く29点で、丸底10点、尖底1点出土している。二重口縁壺(364)と高杯(372)はⅡ層からの出土で、壺(363・368)はベット床面からの出土である。その他有孔円盤状土器(380)、高杯の杯部(361・370)・同脚部(371・372)、器台(378)は床面へばりつきか床面直上の出土である。また検出面直下では紡錘車(379)が出土しており、埋土中からは庄内式土器と思われる搬入品の細片も出土している。377の鉢は埋土中の土器と接合関係にあるが、図示した殆どの土器は他の層の土器とは接合していない。ST19は弥生時代後期終末の住居址と考えられる。(泉)

ST 20 (fig. 38)

ST20は調査区の北部にある。北側半分以上が調査区外に出ており、南側の一部はST19と切り合っている。さらに後世の溝に切られ、かなり激しい攪乱も受けている。従って平面形態や規模を明瞭になし難い。ST19との先後関係も不明であるが、おおよそ一辺5m程の方形の堅穴住居址と考えられる。確実にST20の埋土として押さえることのできる層準は、Ⅷ層：赤茶色粘質土とⅨ層：灰黒茶色粘質土である。地山削り出しのベット状遺構を有し、低床部との比高差を5~10cm程確認することができる。中央ピット(P 1)は、80×120cmの隅丸長方形を呈し深さ20cm前後を測る。断面形は逆台形状を呈する。南東コーナー部にあるP 2は支柱穴の一つである。径28cm、深さ30cmを測る。

遺物は、壺、甕、鉢、高杯、支脚などが見られる。床面からは、壺(381)、甕(384・388)、鉢(391・393)、中央ピット床面より鉢(392)が出土している。床面出土のものは一応一括性が考えられるが、他の埋土出土の土器は攪乱を受けている。鉢(392・393)を根拠に古墳時代初頭の住居址とする。(出原)

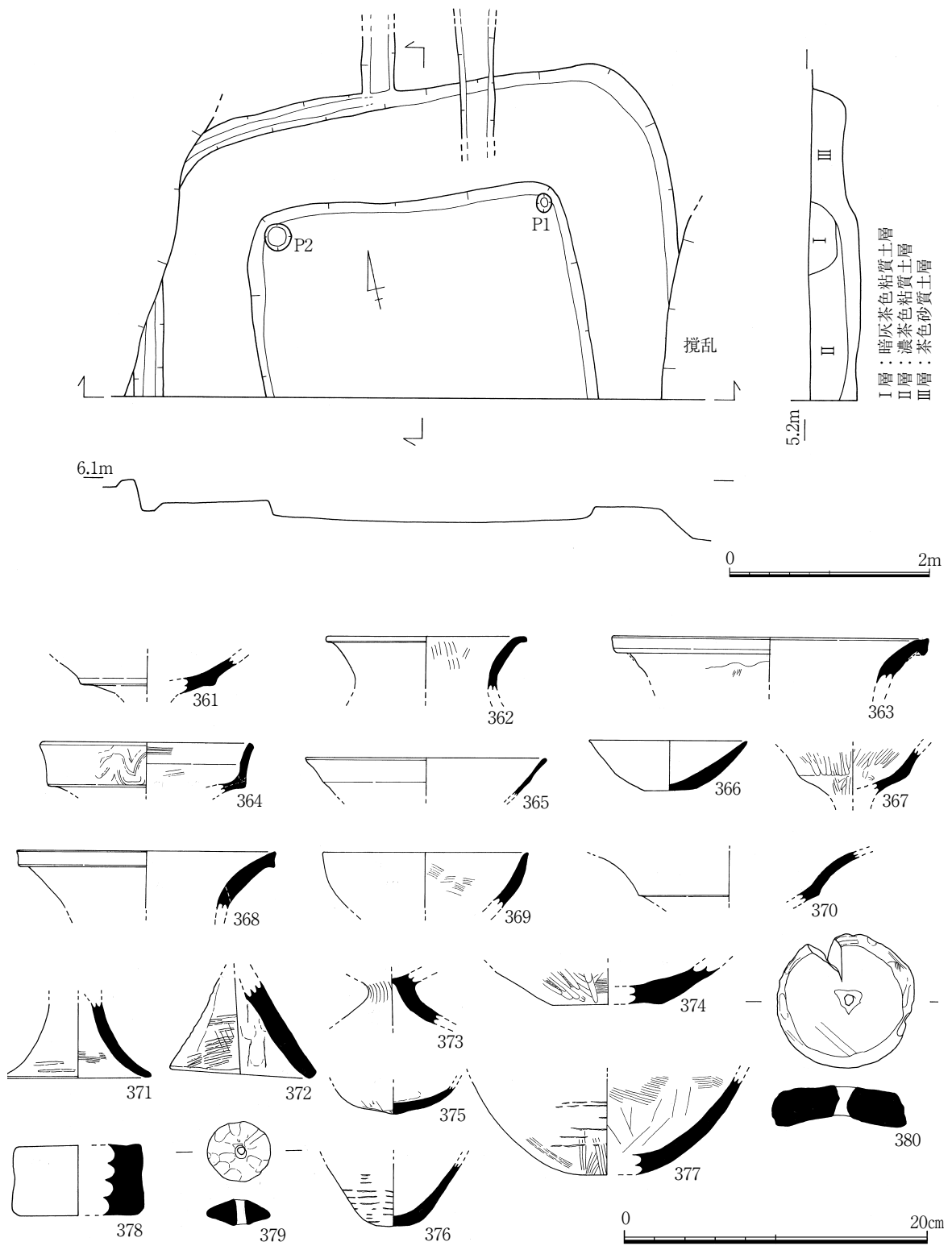


Fig.37 ST19平面・セクション・エレベーション図及び出土遺物実測図

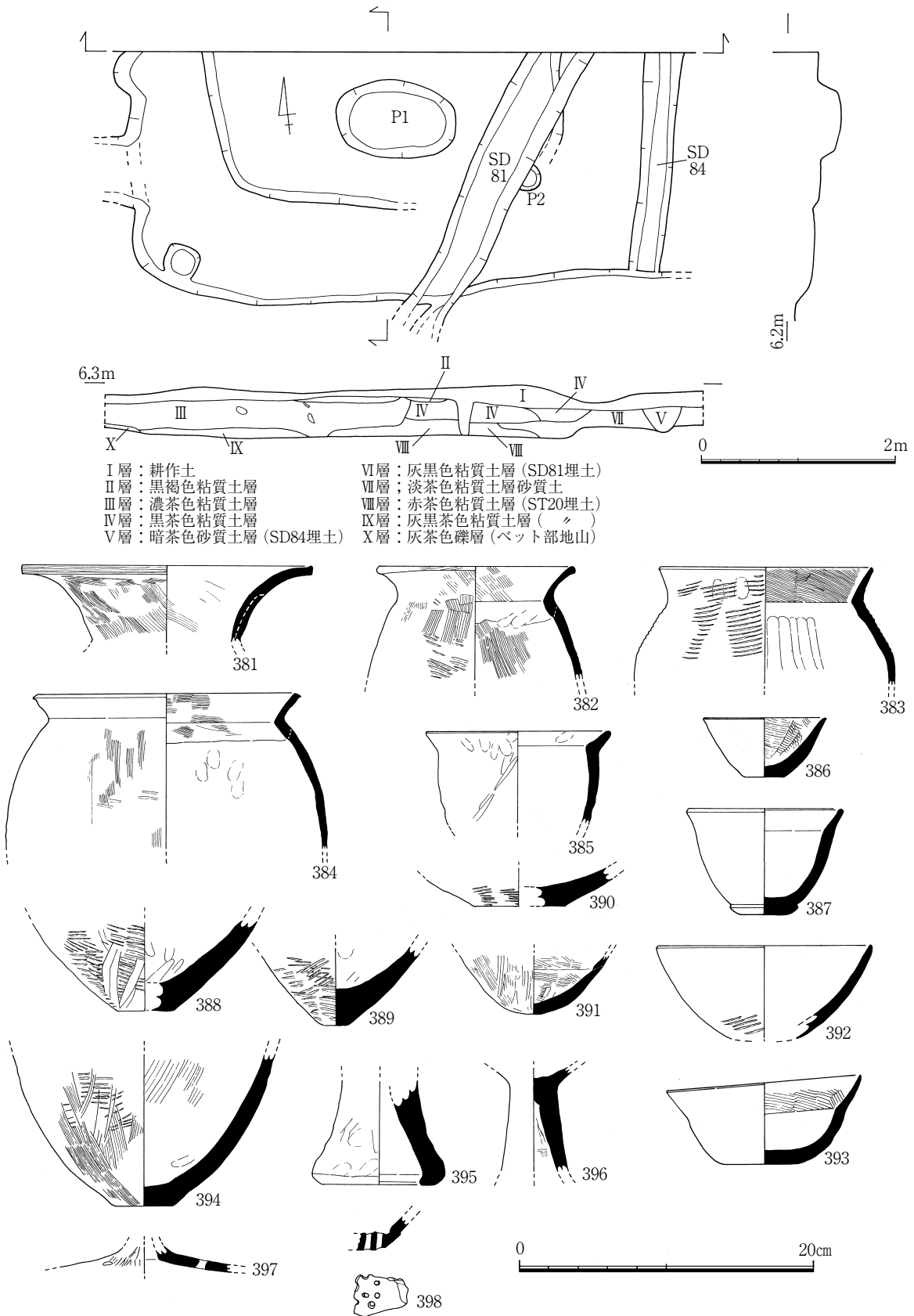


Fig.38 ST20平面・セクション・エレベーション図及び出土遺物実測図

ST21 (fig. 39)

調査区の北に位置する。3/4以上が調査区外に出ているため部分的にしか検出できなかったが、一辺約 5m前後の隅丸方形の竪穴住居であると想定される。深さは30cmを測る。埋土はⅠ層：明茶色粘質土、Ⅱ層：茶色粘質土である。

床面は削り出しによるベット状遺構を有し、住居の東側でその一部が確認された。幅80~94cm高さ11cmを測る。なお、壁溝、中央ピット、柱穴ともに検出することができなかった。

出土遺物は壺、甕、鉢、高杯である。口縁部と脚部の点数でみると、壺 9点、甕 12点、鉢 7点、高杯 2点を数える。底部は 9点出土し、平底 6点、丸底 3点である。ほとんどが埋土中よりの出土で、出土量も少ない。床面からは、わずかに甕口縁部細片が 1点と胴部細片が少量出土したのみであった。また、埋土中出土土器の中には東阿波型土器の胴部細片が 1点含まれている。ST21は弥生時代後期終末に位置づけられる。(浜田)

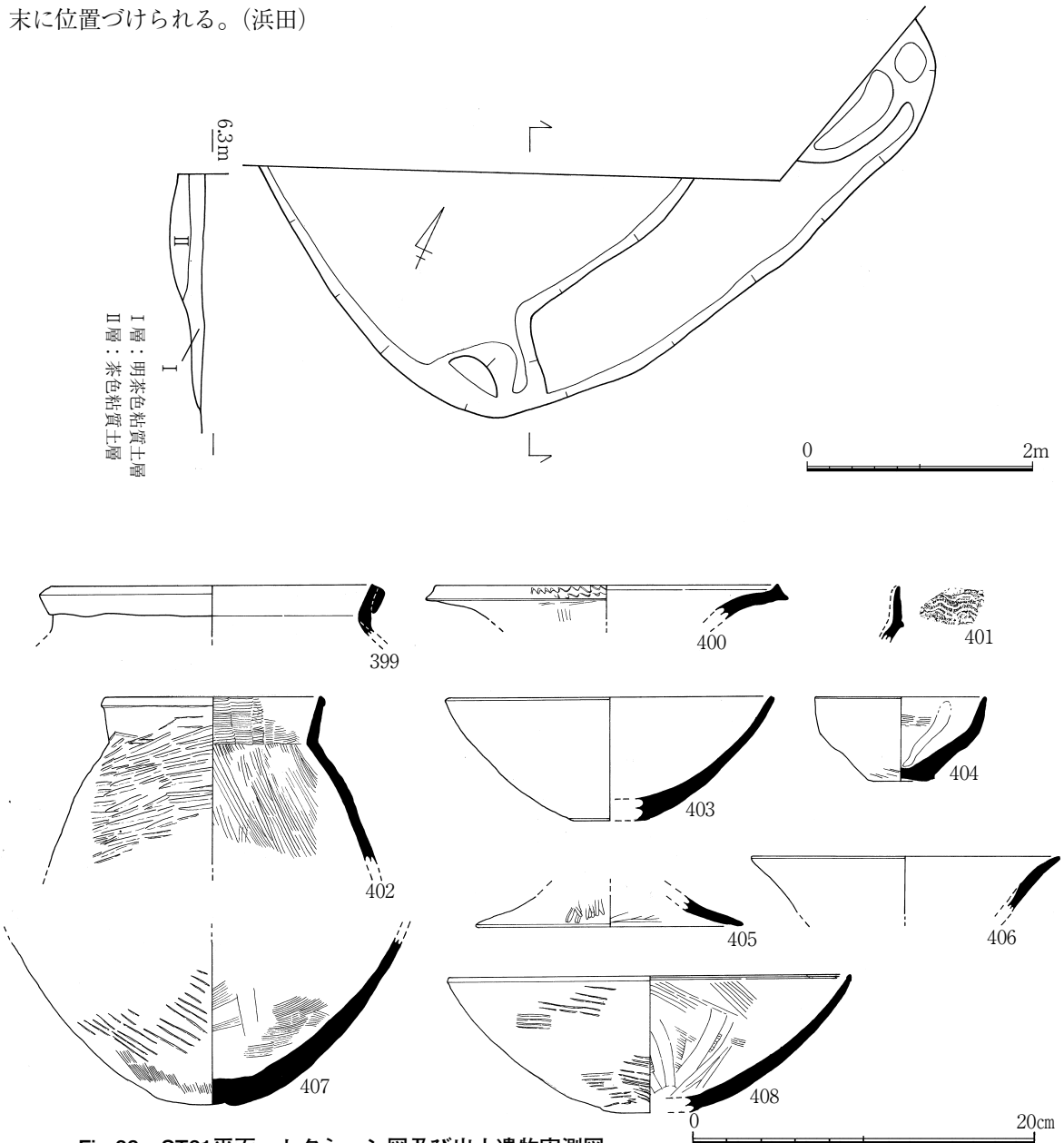


Fig.39 ST21平面・セクション図及び出土遺物実測図

ST22 (fig. 40・41)

調査区の東北端に位置し、住居址の東南側と北西隅は調査区外である。平面形は1辺5.6mの隅丸方形で、20~80cmの幅のベット状遺構がある。高床部までの深さは18cm、低床部との比高差は7cmである。埋土は6層に分かれており、Ⅱ層の濃茶色粘質土が主層である。Ⅲ層は炭を少量含む黒色粘質土で中央ピットである。中央ピット(P1)は96×70cmの楕円形で、深さは9cm前後である。床部には幅20~40cm、深さ10cm前後の周溝があり、そのコーナー部に重なる形でピットが検出されている。南側のP2は径24cmの円形で、深さ40cmを測る。P4は46×34cmの楕円形、P6は径30cmの円形で、どちらも深さは40cm前後である。ピット間の距離はP2-P4が2.4m、P4-P6間は2.3mである。これらのピットからは弥生土器と炭化物が出土しており、支柱穴と考えられる。

出土遺物は甕、壺、鉢、高杯、支脚、蓋、砥石、鉄器である。P1からは甕の胴部や底部の破片が多く出土している。P3は床面から鉢(424)、高杯(428)、完形の甕(414・415)が出土しており、埋土中からも多量の土器が確認され、貯蔵穴と考えられる。P5も住居址に伴うピットで弥生土器の細片と炭化物が出土している。口縁部は鉢50点、甕48点と多く、壺は10点である。底部は平底21点、丸底13点である。壺(409・410・432)、鉢(418・421・429・430・434)、431の蓋、433の甕、435の支脚は埋土中からの

ピットNo	平面規模(cm)	深さ(cm)	平面形態
P1	96×70	9	楕円形
P2	径24	40	円形
P3	82×62	45	楕円形
P4	46×34	43	楕円形
P5	50×46	60	楕円形
P6	径30	40	円形

表13 ST22ピット計測表

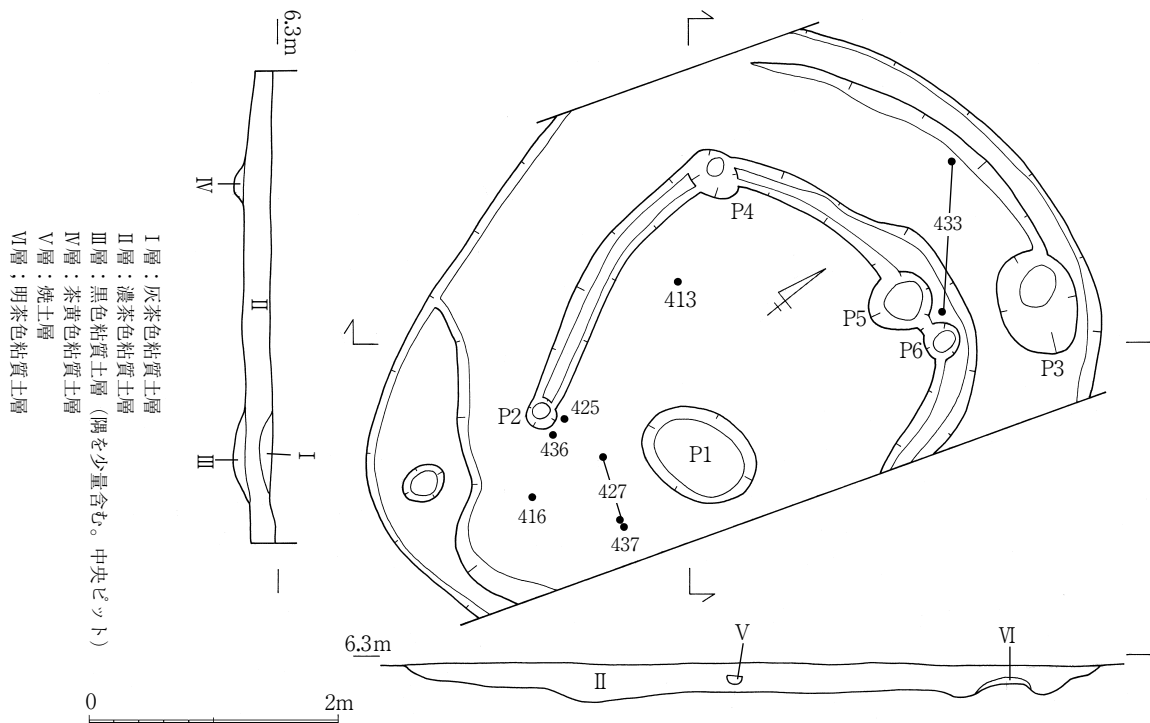


Fig.40 ST22平面・セクション・遺物出土状況図

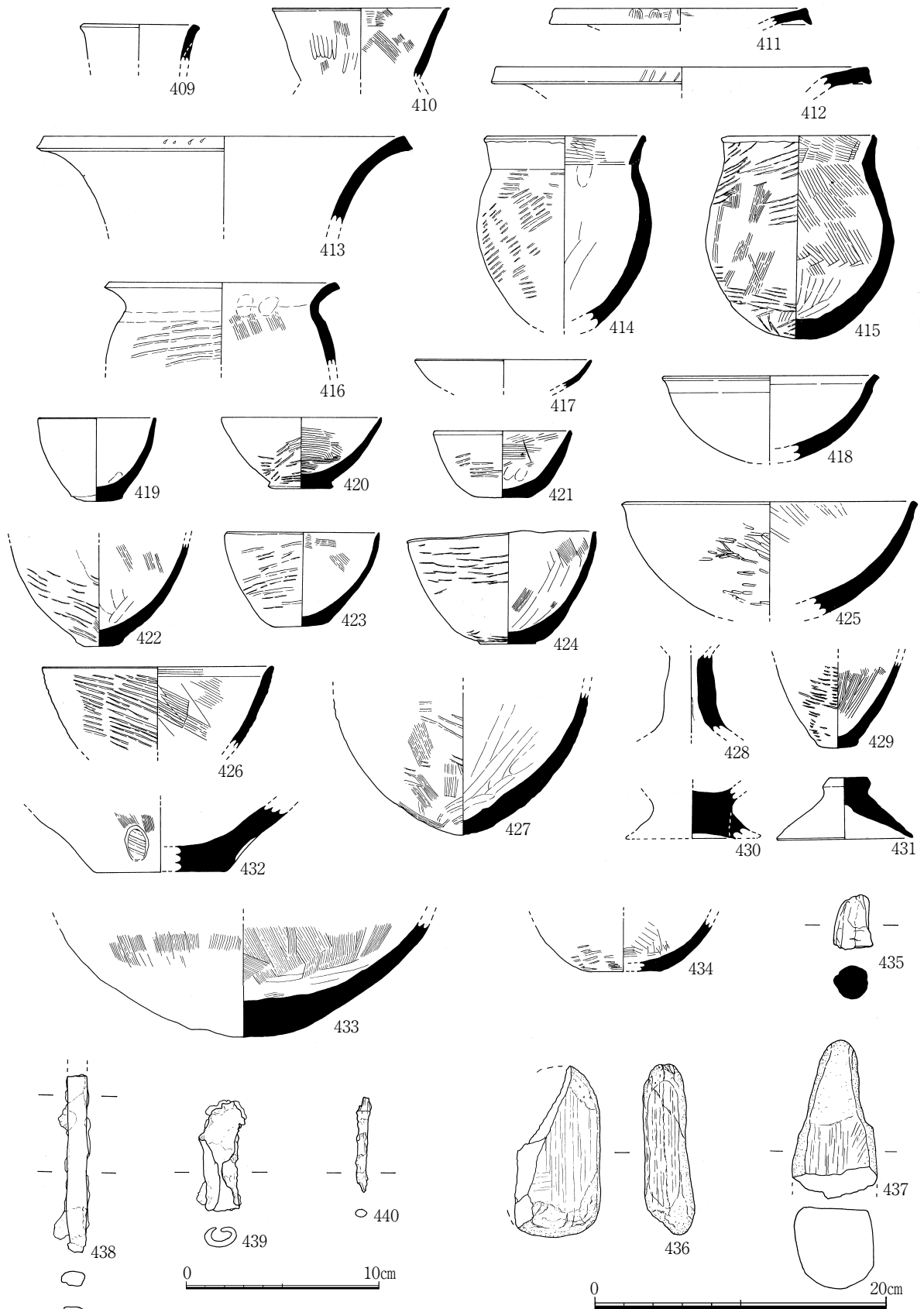


Fig.41 ST22出土遺物実測図

出土である。また鉢(427)は床面から出土しており、埋土中の土器と接合関係にある。壺(411~413)、全面煤けた甕(416)は床面へばりつきか床面直上で出土している。鉢(425)、砂岩製の砥石(436・437)も床面へばりつきで出土している。またP6近くの周溝からは鈍の身部(438)も出土している。438は全長9.2cm、全幅1.2cm、刃部の厚さ0.7cmを測り、柄部の断面は長方形を呈するものである。ST22は弥生時代後期終末の住居址と考えられる。(泉)

ST 23 (fig. 42)

ST23は調査区の中央部にある。中世のSD69や近世のSD12に切られ、さらに激しい削平を受けており満身創痍の住居址である。中央ピット(P1)と一部残存する東南壁の立ち上がりから住居址の存在を確認することができた。隅丸方形の平面形態を有するものと考えられるが、その規模は明らかにし得ない。中央ピットは60×120cmの長楕円形を呈し、深さは20cmを測る。P2とP3を支柱穴の一部と考えることができる。前者は径25cm、深さ10cm、後者は20×30cm、深さ30cmを測る。

出土遺物は、図示した3点(甕:441・442、鉢:443)がST23に伴うものである。

弥生時代後期終末~古墳時代初頭に属する住居址である。(出原)

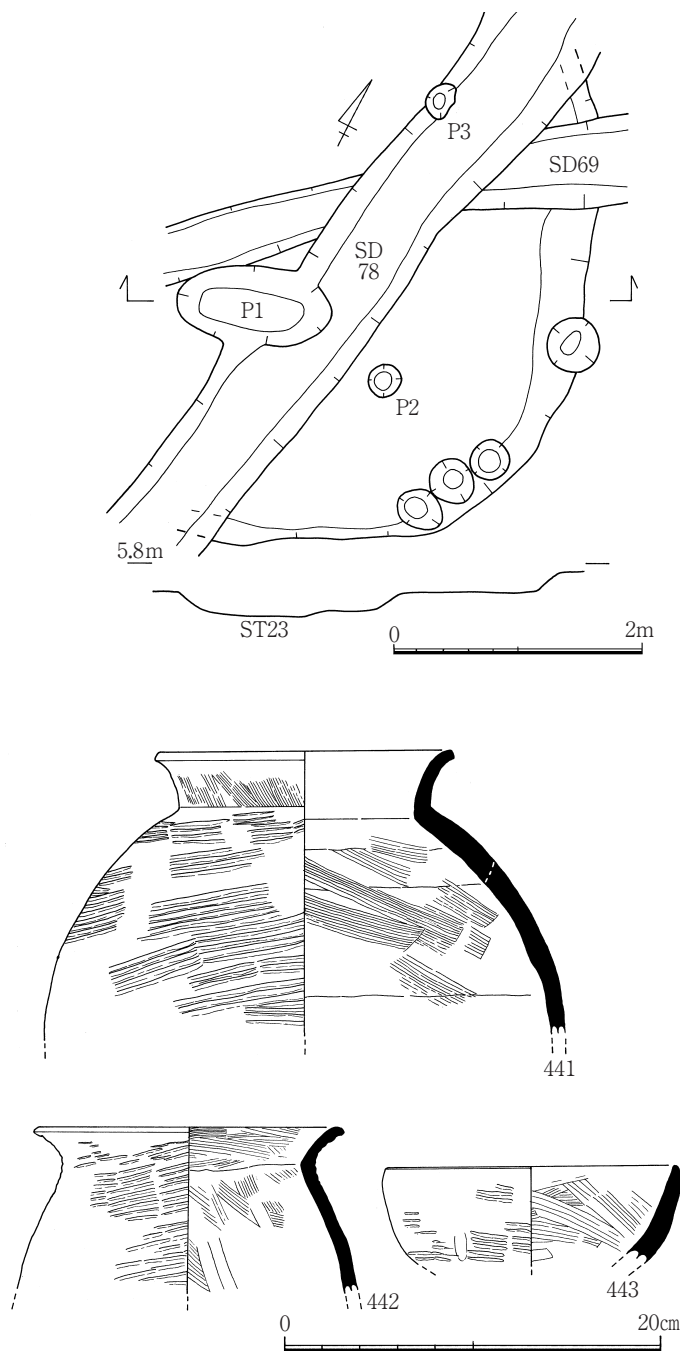


Fig.42 ST23平面・エレベーション図及び出土遺物実測図

(2) 土 坑**SK 42 (fig. 43)**

調査区東端の南張り出し部分に位置する。検出時の平面形は東西2.0m、南北1.2mの隅丸長方形を呈しており、深さは40cmを測る。東壁によって隔されており全体の規模は不明であるが、長軸方向は東西方向($N-90^{\circ}-E$)である。底部形態は舟底状を成し、南及び北壁はやや急に立ち上がりそれぞれ中に段部が存在している。

埋土はⅠ層：暗褐色土、Ⅱ層：黒色土、Ⅲ層：黒灰色土、Ⅳ層：灰褐色土、Ⅴ層：黄褐色土であり、Ⅰ・Ⅱ層には弥生後期土器の破片が多く含まれていた。出土遺物の中で口縁部の破片は甕 5点、鉢 1点である。これら遺物中に図示できるものは無い。弥生時代後期終末の土坑である。(藤方)

SK 43 (fig. 43)

SK42と同様に調査区東南部に位置する。東壁によって隔されており、全体は不明であるが2ヶ所の隅部が存在することから、方形又は長方形を呈すると考えられる。検出された部分は、東西最大幅1.12m、南北2.6mの規模を持ち、検出面からの深さは34cmを測る。長軸方向は $N-4^{\circ}-E$ に存在する。底部は比較的平らな面を成し、壁は急に立ち上がる。

埋土はⅡ層：暗褐色土、Ⅲ層：黒色土、Ⅳ層：黒褐色土であり、Ⅱ層には弥生後期末の土器破片が多く含まれていた。出土遺物の中で口縁部の破片は壺 1点、甕 5点、鉢 2点であり、底部破片は平底1点である。これら遺物中に図示できるものは無い。弥生時代後期終末の土坑である。(藤方)

SK 47 (fig. 43)

調査区の東南部SK42の北に位置している。平面形は不整楕円形を成しており、南北1.3m、東西1m、検出面からの深さは10cmを測る。底部形態は面を成し、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は黒褐色土単純一層である。出土遺物は弥生時代後期土器の細片であり、図示できるものは無い。弥生時代後期の土坑と考えられる。(藤方)

SK 98 (fig. 43)

調査区の南西端にある。平面形は楕円形を呈し、長軸120cm、短軸50cm、深さ10cm前後を測る。埋土は濃茶色粘質土単純一層である。床面は中央よりやや東よりで僅かに高まりをもっている。遺物は検出面直下で甕(444・445)・鉢及び土器底部(446)を6点検出した。底部はすべて平底である。弥生時代後期終末の土坑である。(出原)

SK 99 (fig. 43)

調査区の西端にある。平面形は細長い溝状を呈し、長軸2.3m、短軸36cm、深さ10～15cmを測る。埋土は濃茶色粘質土単純一層である。遺物は甕・鉢等の破片が数多く出土しており、この中には吉備型甕の胴部細片も一点入っている。図示できるものはないが、弥生時代後期終末～古墳時代初頭の土坑である。(出原)

SK 103 (fig. 44)

調査区の西端にある小土坑である。径70cm前後の円形に近い平面形を呈し、深さは約30cmを測る。埋土は濃茶色粘質土単純一層で、埋土中より甕・鉢などの細片が数点出土しているが図示し得るものはない。弥生時代後期終末の土坑である。(出原)

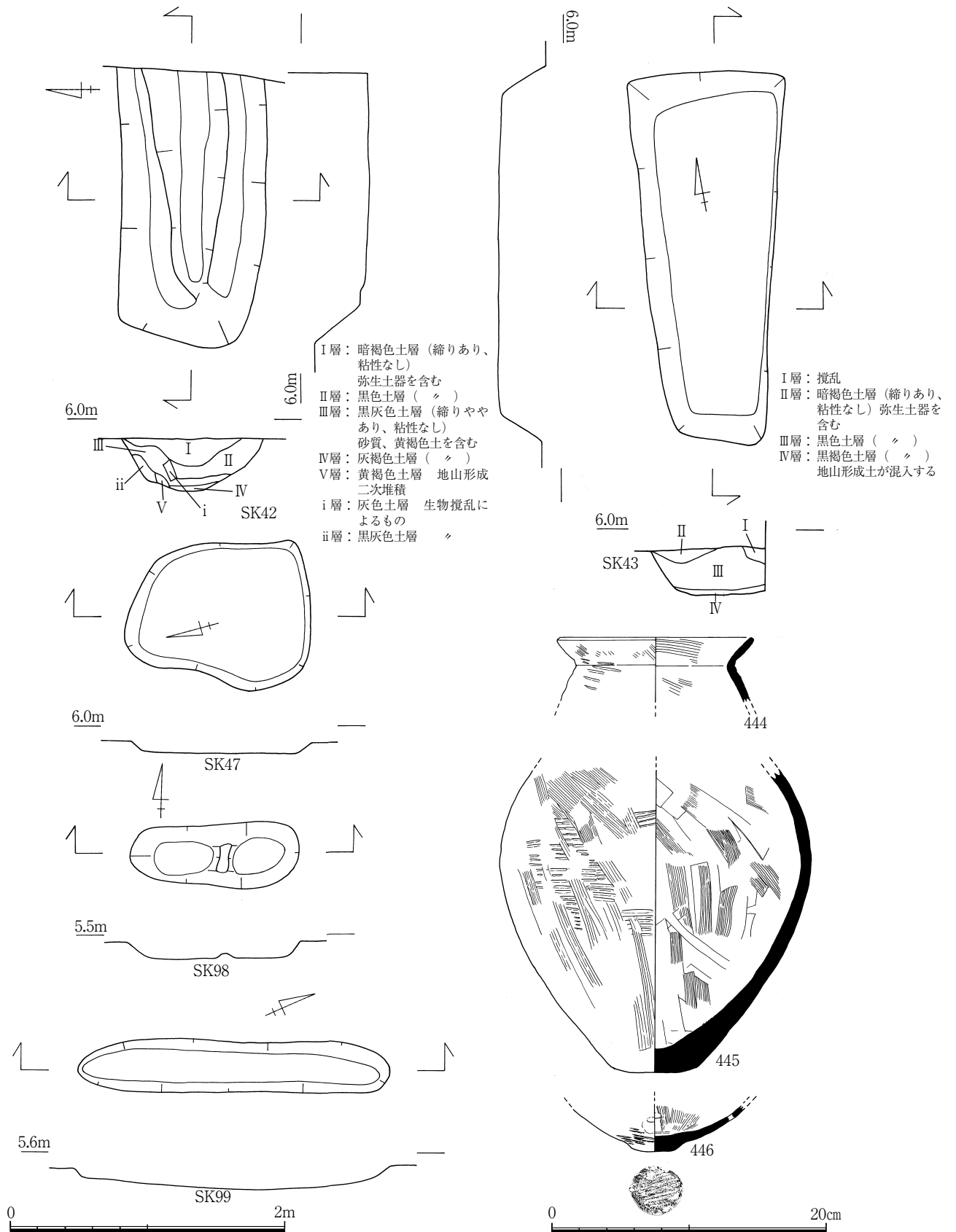


Fig.43 SK42・43・47・98・99平面・セクション・エレベーション図及びSK98出土遺物実測図

SK 104 (fig. 44)

調査区の西部にある。平面形は長方形を呈し、長軸140cm、短軸45cm、深さ15cmを測る。床面は平坦である。西端でピットと切り合っているが先後関係は不明である。埋土は濃茶色粘質土単純一層で、埋土中より甕などの細片が数点出土している。弥生時代後期終末の土坑である。(出原)

SK 108 (fig. 44)

ST12の南3mにある。平面形は隅丸方形を呈し、長軸110cm、短軸90cm、深さ10~15cmを測り、東隅をピットに切られている。床面は僅かに舟底状を呈する。埋土は濃茶色粘質土単純一層で、埋土中より甕などの細片が数点出土している。弥生時代後期終末の土坑である。(出原)

SK 111 (fig. 44)

調査区の西部にありSK113に近接している。平面形は楕円形を呈し、長軸76cm、短軸34cm、深さ22~25cmを測る。断面は逆台形状に立ち上がる。埋土は濃茶色粘質土単純一層で、埋土中より甕などの細片が数点出土している。弥生時代後期終末の土坑である。(出原)

SK 112 (fig. 44)

ST13の南2mの地点にある。平面形は隅丸方形を呈し、長軸100cm、短軸76cm、深さ15cm前後を測る。床面は平坦面をなす。埋土は濃茶色粘質土単純一層で、埋土中より甕などの細片が十数点出土しているが図示し得るものはない。弥生時代後期終末の土坑である。(出原)

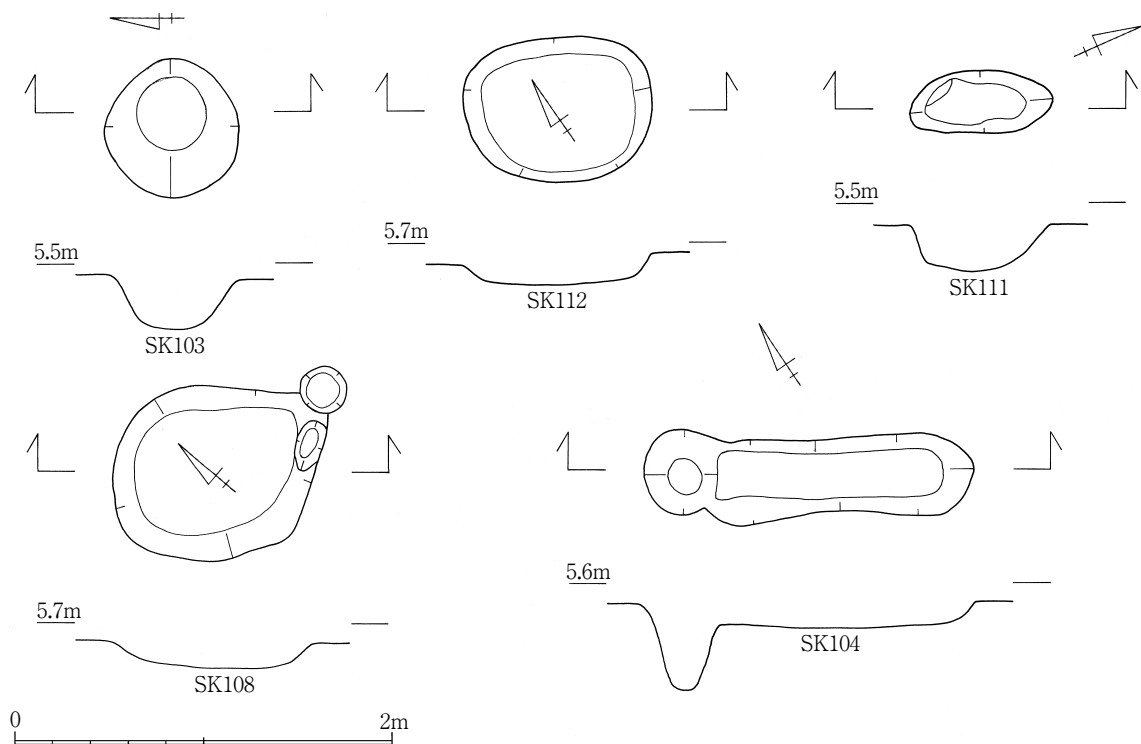


Fig.44 SK103・104・108・111・112平面・エレベーション図

SK 113 (fig. 45・46)

ST14の南3mにある。南側を古代の土坑SK109、SK110に切られており、全形を明らかにすることはできないが、一辺2.5m前後を測る方形の土坑と考えられる。深さは10~20cmを測り床面は北から南に向かって傾斜している。北西部に4個と床面東よりに1個のピットがある。この内P1は土坑に伴うものであるが、他のピットとの関係は不明である。埋土はI~III層からなっている。

遺物は、壺・甕・鉢・高杯・支脚・甑が床面及び各層準から多量に出土しており、接合関係にあるものも多い。口縁部や脚部の点数で見ると図示し得なかったものも含めて壺3点、甕13点、鉢21点、高杯5点、支脚5点、甑1点である。この他底部が24点出土しており、この内平底が14点、丸底が10点を数えるが、大半は鉢である。また出土遺物のうちで搬入品が多いのも特徴である。図示した448・449は東阿波型土器の二重口縁壺、453・454も東阿波型土器の甕である。この他452も産地は不明ながらも搬入品と考えられる。これらの遺物の出土状況は、一時期にまとめて投棄された状態を示しており、一括性の高いものである。古墳時代初頭の土坑である。(出原)

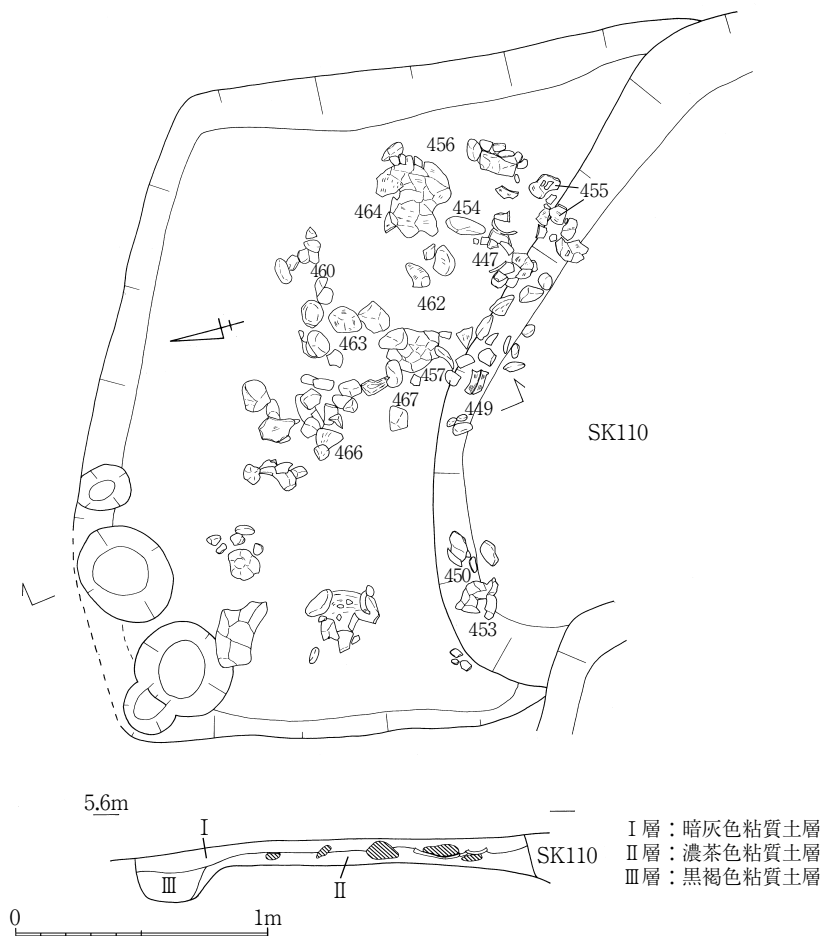


Fig.45 SK113平面・セクション・遺物出土状況図

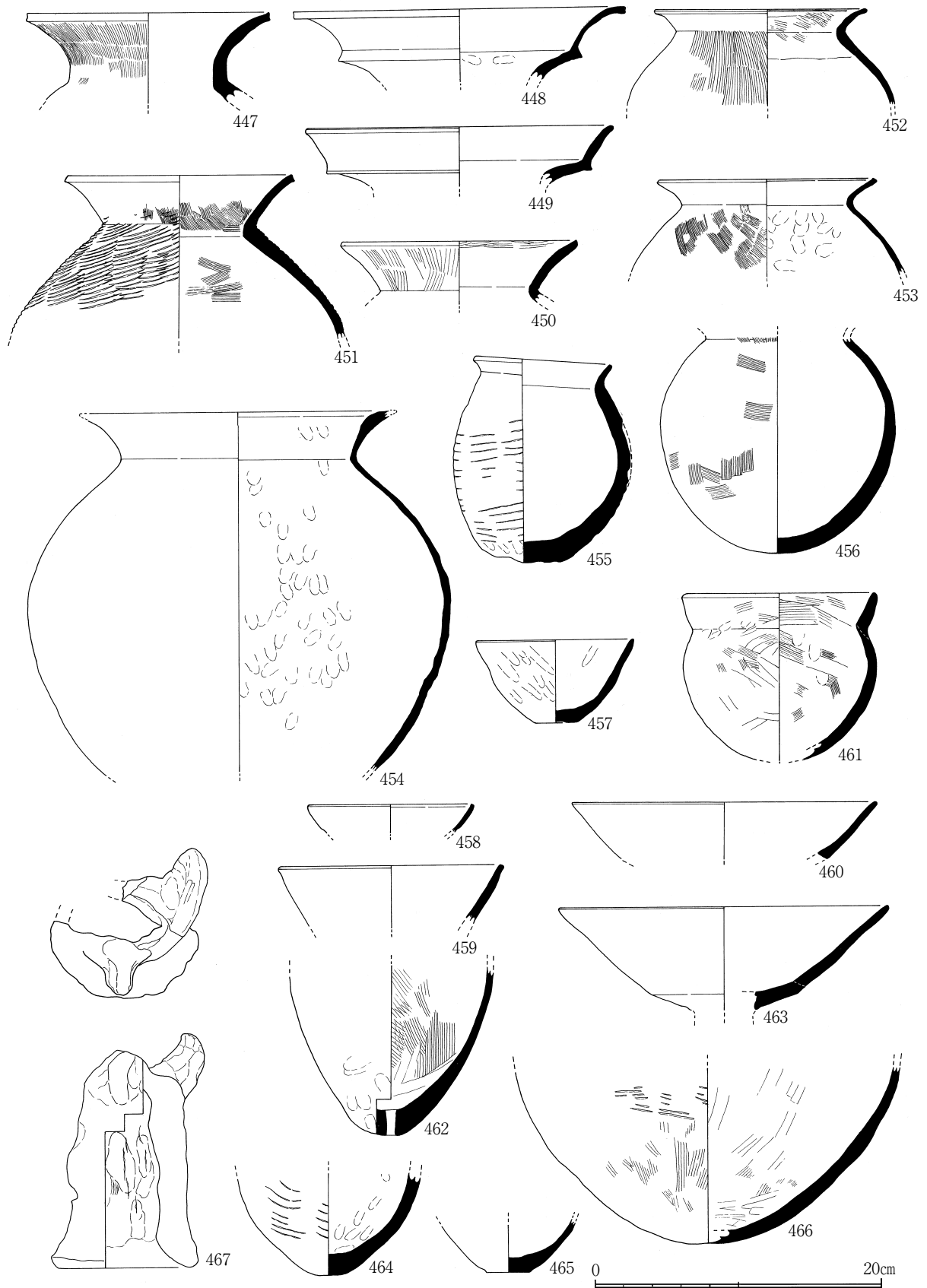


Fig.46 SK113出土遺物実測図

SK 114 (fig. 47)

調査区の北西端、ST14の西隣にある。平面形は長軸1.9m、短軸0.46mの楕円形(瓢箪型)を呈し、深さ12～16cmを測る。断面形は概ね舟底形である。埋土は黒褐色粘質土単層である。

遺物は埋土中より弥生時代後期後半の土器細片が十数点出土しているが、図示できるものはない。

(泉)

SK 115 (fig. 47)

調査区の北西寄りに位置し、SK114の南にある。平面形は長軸0.94m、短軸0.74mの楕円形を呈し、深さ12～22cmを測る。断面形は概ね舟底形で、埋土は黒褐色粘質土の堆積が認められる。

遺物は埋土中より弥生時代後期後半の土器細片が出土しているが、図示できるものはない。(泉)

SK 116 (fig. 47)

調査区の北寄りに位置し、ST13の南にある。東側はSD75と切り合い関係にあるが、先後関係は明確にできない。平面形は長軸1.36m、短軸1.02mの不整形で、深さ6～10cmを測る。断面形は舟底形である。埋土は濃茶色粘質土である。

遺物は埋土中より弥生時代後期後半の土器細片が二十数点出土しているが、図示できるものはない。

(泉)

SK 117 (fig. 47・48)

調査区の北西寄りに位置し、SK118との距離約4.6mを測る。平面形は不整形を呈し、長軸1.0m、短軸0.7m、深さ8cmを測る。断面形は舟底形を呈し、濃茶色粘質土の堆積が認められる。埋土中より、壺(468)・甕の破片数点と弥生時代後期土器細片十数点が出土している。壺(468)は口縁部に波状文を施したもので、搬入品である。(浜田)

SK 118 (fig. 47・48)

調査区の北西に位置する。平面形は楕円形を呈し、長軸0.76m、短軸0.7m、深さ28cmを測る。断面形はU字形を呈し、黒褐色粘質土の堆積が認められる。出土遺物は埋土中よりほぼ完形の甕(470)と鉢(469)、その他弥生時代後期土器細片が出土している。(浜田)

SK 141 (fig. 47)

調査区の北西端に位置する長軸2.3m、短軸0.7mの長楕円形を呈し、深さは10.4cmを測る。断面形は舟底形で、埋土は濃茶色粘質土単層である。

埋土中より、弥生時代後期土器細片が三十数点出土しているが、図示できるものは無い。(浜田)

SK 142 (fig. 47・48)

ST5と切り合い関係にある隅丸方形の大型の土坑である。一辺4m前後の規模を有し、深さは20cmを測る。北東壁には幅20cm前後の壁溝とも考えられる溝状の掘り込みがあり、堅穴住居址の可能性もあるが、ここでは土坑とした。埋土は、ST5の埋土Ⅱ層と同じ黒灰色粘質土単層であり、精査したが先後関係は把握できなかった。遺物は埋土中より弥生時代後期終末～古墳時代前期初頭の土器片が数多く出土しているが、図示し得たものは高杯脚部(471)のみである。(出原)

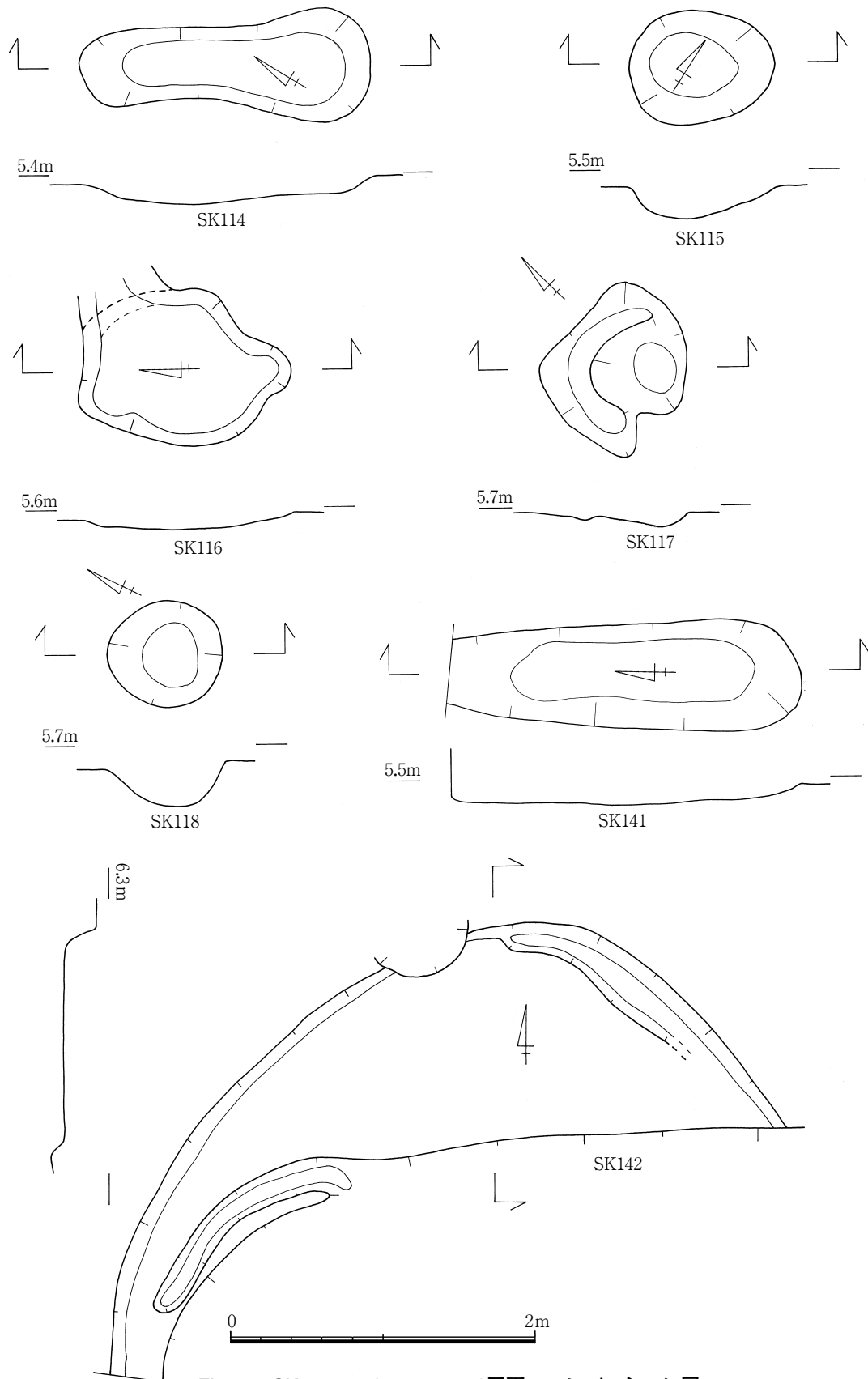


Fig.47 SK114~118、141・142平面・エレベーション図

(3) 溝

弥生時代後期終末のものと考えられる。SD57～60は東側の調査I区西端に存在した弥生時代後期の溝と同じ性格を持つものと考えられる。

SD 57 (fig. 49)

調査区東南部に位置する。東西方向($N-70^{\circ}-W$)の溝であり、西端部を近世の溝SD55によって

切られている。確認長80cm、幅36cm、検出面からの深さは11cmであり、断面形は逆台形を呈する。埋土は黒褐色土である。

出土遺物は弥生時代後期土器の細片であり、図示できるものは無い。(藤方)

SD 58 (fig. 49)

調査区東南部に位置する。東西方向($N-76^{\circ}-W$)の溝であり、西端部を近世の溝SD55によって切られている。確認長は1.80m、幅28cm、検出面からの深さは7cmである。断面形は逆台形を呈する。東端部でやや北に向きを変えているが、東への遺構の広がりには確認できなかった。埋土は黒褐色土である。出土遺物は弥生時代後期土器の細片であり、図示できるものは無い。(藤方)

SD 59 (fig. 49)

調査区東南部に位置する。東西方向($N-79^{\circ}-W$)の溝であり、西部を近世の溝SD55・56によって切られている。確認長は4.0m、幅28～36cm、検出面からの深さは6cmである。断面形は逆台形を呈する。埋土は黒褐色土であり、弥生時代後期土器破片が出土しているが、図示できるものは無い。(藤方)

SD 60 (fig. 49)

調査区東南部に位置する。東西方向($N-81^{\circ}-W$)の溝であり、東は調査区外に及んでいる。西部を近世の溝SD55によって切られており、西方への広がりには確認できなかった。確認長は3.4m、幅25～34cm、検出面からの深さは3～10cmである。底部形態は舟底形を呈する。埋土は黒褐色土であり、弥生時代後期土器破片が出土しているが、図示できるものは無い。(藤方)

SD 79 (fig. 49)

調査区の南端で、やや中央寄りに位置する。北南方向($N-23^{\circ}-W$)の溝であり、南側は調査区外である。また、北側は近世のSD78に切られており、確認延長13.9mを測る。西側は古代のSK123と近世のSK131・SK132に切られており、ST17とは切り合い関係にある。幅は北側で1.36m、南側で1.04mと南は幅が狭くなっている。上層はかなり削平をうけており、深さは6～15cmと浅い。断面形は逆台形を呈する。埋土は濃茶色粘質土で、単純一層である。

出土遺物は弥生土器の細片が多いが、図示するものは少なく1点のみである。472は平底の甕で完形品である。(泉)

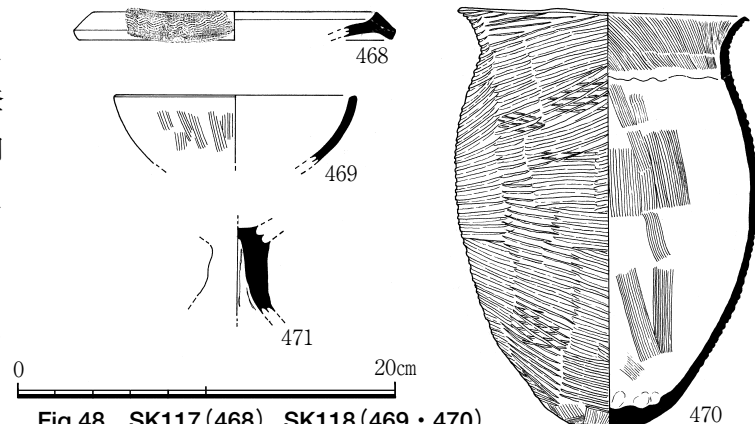


Fig.48 SK117(468)、SK118(469・470)、SK142(471) 出土遺物実測図

(4) ピット (fig.50・51)

当該期に属するピットは31個検出したが、この内出土遺物の良好な9個について図示し、その計測表を示した。これらのピットは、竪穴住居址の集まっている調査区の西側半分に多いが、掘立柱建物や倉庫の柱穴に該当するものは認められず、不規則に分布している。P 12からは、甕が3個体分(477・480・481)が、P 22からは鉢2個体分(482・486)と支脚(491)が、P 44からは小さなピットであるが甕(474・479)、壺(475)、鉢(483~485・490)、支脚(493)が出土している。P 54からは鉢が2点(488・489)出土しており488は完形品である。これらの時期は、P 54が弥生時代後期前半であるが、他は古墳時代初頭に属する。図示し得なかったピットについても総じて古墳時代初頭に属するものである。(出原)

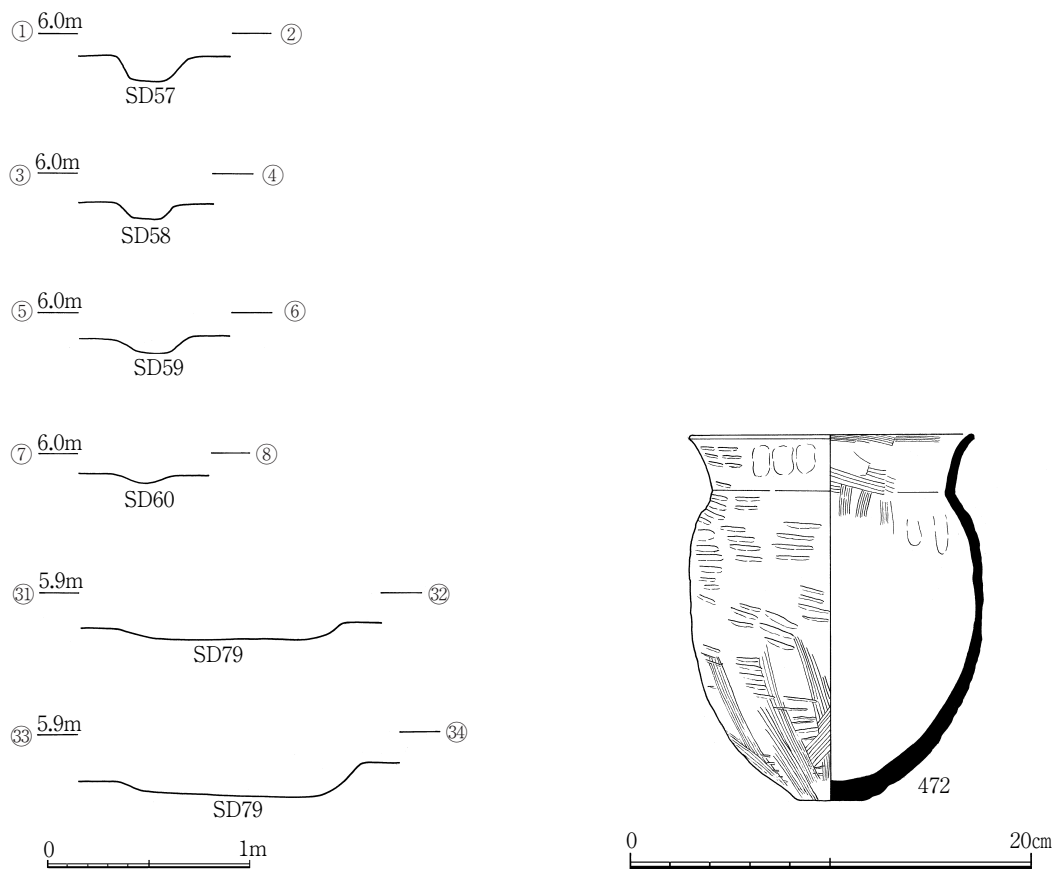


Fig.49 SD57~60、79エレベーション図及びSD79出土遺物実測図

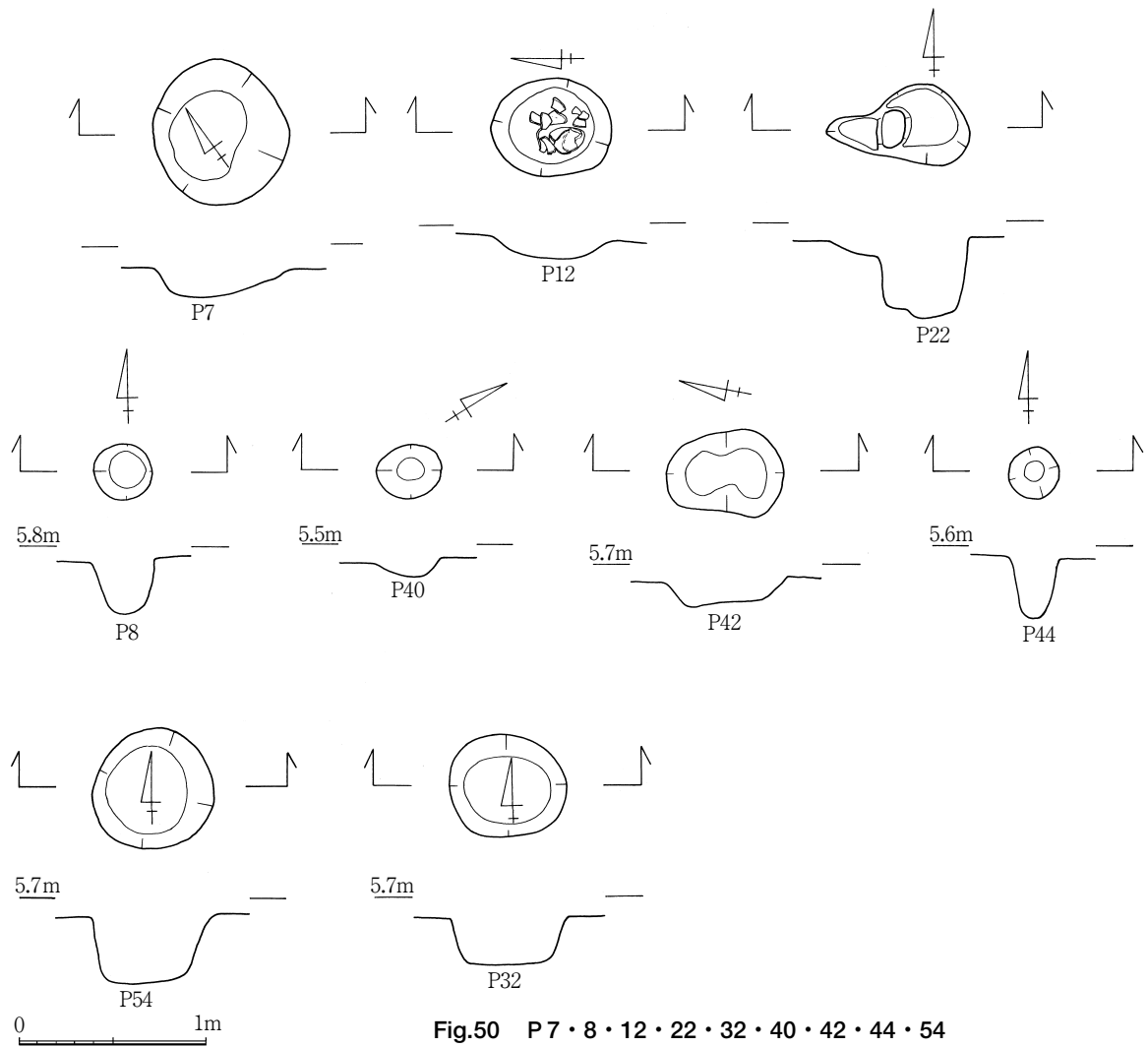


Fig.50 P 7・8・12・22・32・40・42・44・54
平面・エレベーション・遺物出土状況図

ピットNo	平面規模 (cm)	深さ (cm)	平面形態
P 7	径75	18	円形
P 8	径30	28	円形
P 12	64×53	12	楕円形
P 22	50×45	44	楕円形
P 32	63×54	27	楕円形
P 40	34×29	10	楕円形
P 42	64×42	12~14	楕円形
P 44	径27	54	円形
P 54	径64	36	円形

表.14 弥生～古墳時代の主なピット計測表

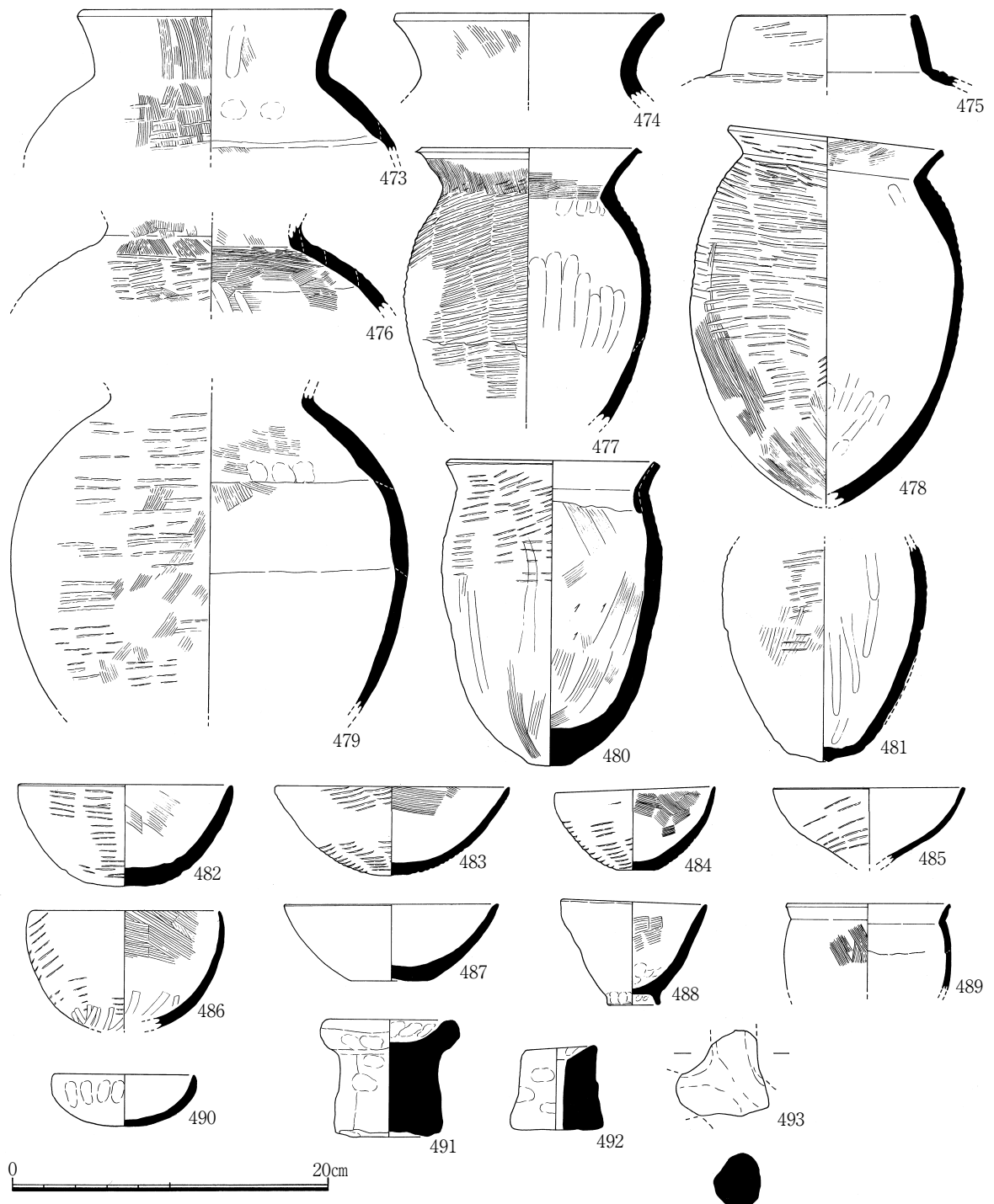


Fig.51 P7・8・12・32・40・42・44・54出土遺物実測図

P7 (487)、P8 (478)、P12 (477・480・481)、P22 (482・486・491)、P32 (476)、P40 (492)、P42 (473)、P44 (474・475・479・483～485・490・493)、P54 (488・489)

3 古代の遺構と遺物

(1) 土坑

SK 100 (fig. 52)

調査区の西端に位置する。長軸1.16m、短軸1.02mの不整円形を呈し、深さ10～16 cmを測る。断面形は概ね舟底形で、北側の壁が緩やかに立ち上がる。埋土は濃茶色粘質土で、単純一層である。

出土遺物は皿、甕、壺など約15点であるが、図示するものはない。また弥生土器の細片も混入している。(泉)

SK 101 (fig. 52)

調査区の西側で、SK 100の北東隣に位置する。長軸1.76m、短軸1.32mの楕円形を呈する。断面形は舟底形で、深さ13～16cmを測る。埋土は黒褐色粘質土である。

出土遺物は土師器皿(494)、須恵器杯(501)、土師器甕などが出土しており、この他弥生時代後期、古墳時代初頭の土器も混入している。後者の中には東阿波型土器の破片が含まれている。SK 101は9世紀代の土坑である。(泉)

SK 102 (fig. 52)

調査区の西側で、SK 101の南東隣に位置する。長軸2.04m、短軸1.68mの隅丸方形を呈する。床面は東側が一段高くなっており、深さは14～18cmを測る。埋土は黒褐色粘質土で単純一層である。

出土遺物は埋土中より須恵器杯(496)、土師器の移動式竈口縁部(498)、甕の細片が多量に出土している。498は畿内からの搬入品である。この他弥生時代後期、古墳時代初頭の土器も混入している。後者の中には東阿波型土器の破片が2点含まれている。(泉)

SK 105 (fig. 52)

調査区の西側で、SK 102の東隣に位置する。長軸0.96m、短軸0.72mの楕円形を呈し、深さは12～18cmを測る。埋土はⅠ層：茶色粘質土、Ⅱ層：濃茶色粘質土、Ⅲ層：黒褐色粘質土、Ⅳ層：濃茶黄混色土である。

出土遺物は土師器・須恵器の杯・皿で、前者が多く、後者は少量である。図示可能なものは土師器杯(499)、同皿(495)、須恵器杯(497)、同皿(500)で、この他弥生土器の細片も混入している。これらは埋土中からの出土である。(泉)

SK 106 (fig. 53)

調査区の西側でSK 105の東隣に位置する。長軸1.5m、短軸1.12mの楕円形を呈し、深さは60～62 cmを測り、壁の一部がオーバーハングしている。埋土はⅠ層：黒褐茶色粘質土、Ⅱ層：黒褐色粘質土、Ⅲ層：暗茶色粘質土、Ⅳ層：暗茶黄混色粘質土で、Ⅱ層は主層で全体の4分の3を占めている。

出土遺物は土師器・須恵器の供膳形態を中心に比較的まとまって出土している。土師器杯(502・513)、須恵器杯(505・509・510)、同皿(504・506・507)、土師器甕(515・517)、さらに製塩土器(514)がみられる。製塩土器は外面が粗いナデ調整、内面に布目の圧痕が見られる。これらの土器は殆どが北半分の埋土中から集中して出土しているが、甕(517)と杯(505)は東と西の壁にへばりついた状態で出土している。埋土中出土の遺物も含めて、一括性の高い資料であり、供膳形態では須恵器と土師器がほぼ同数出土しているところに特徴がある。SK 106は9世紀代に属する。(泉)

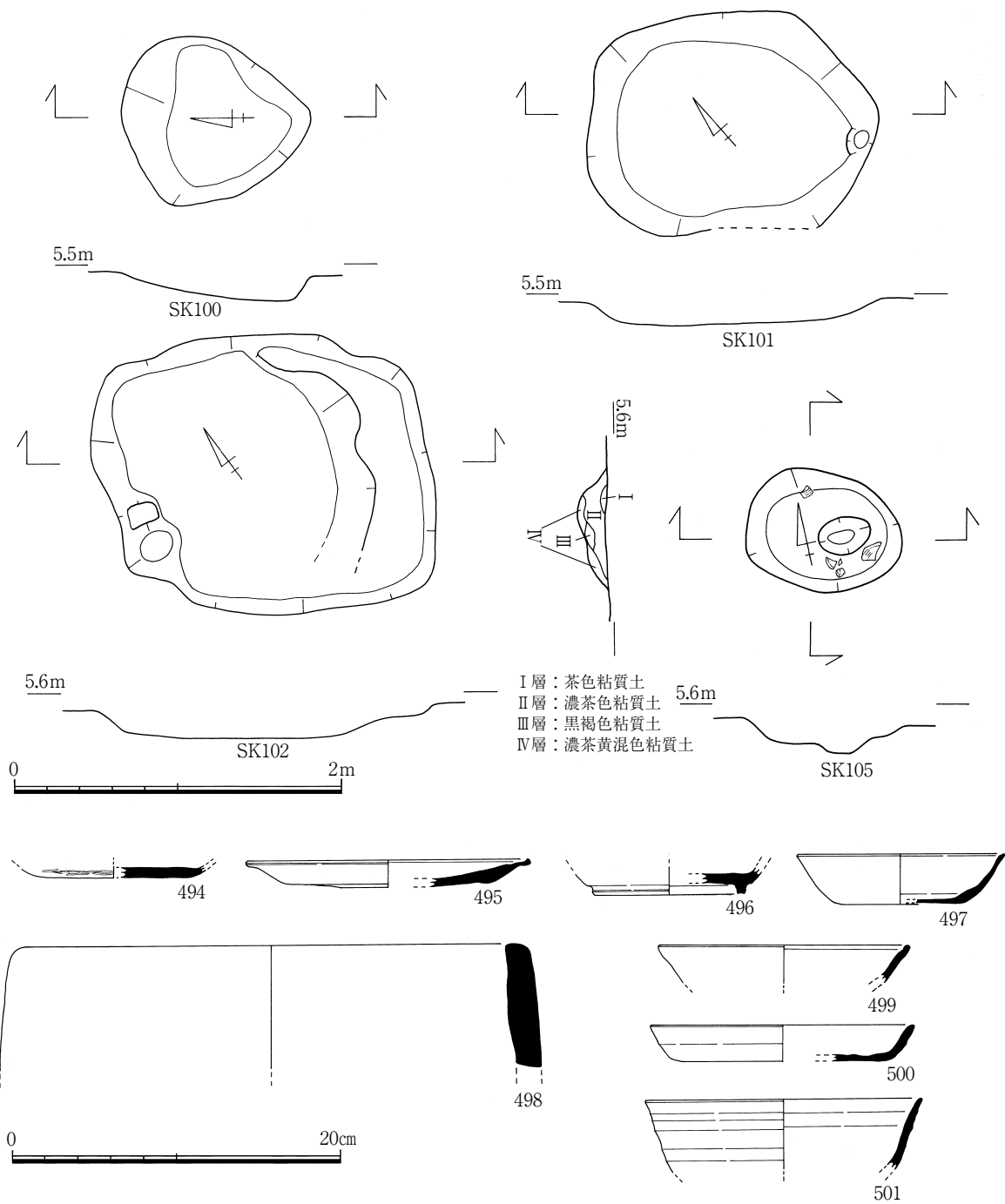


Fig.52 SK100~102・105 平面・セクション・エレベーション・遺物出土状況図及び出土遺物実測図
 SK101 (土師器皿：494、須恵器杯：501) SK102 (須恵器杯：496、土師器竈：498)
 SK105 (土師器杯：499、同皿：495、須恵器杯：497、同皿：500)

SK 107 (fig. 53)

調査区の西側中央部に位置し、ST 12の南にある。長軸 0.92m、短軸0.84mの楕円形のプランを有する。断面形は舟底形を呈し、深さは6~8cmである。埋土は濃茶色粘質土であり、単純一層である。

出土遺物は甕、鉢、皿などで、弥生土器の混入もみられる。図示するものは少なく、埋土中から出土した土師器杯(508)1点のみである。須恵器は細片も出土せず、土師器ばかりである。(泉)

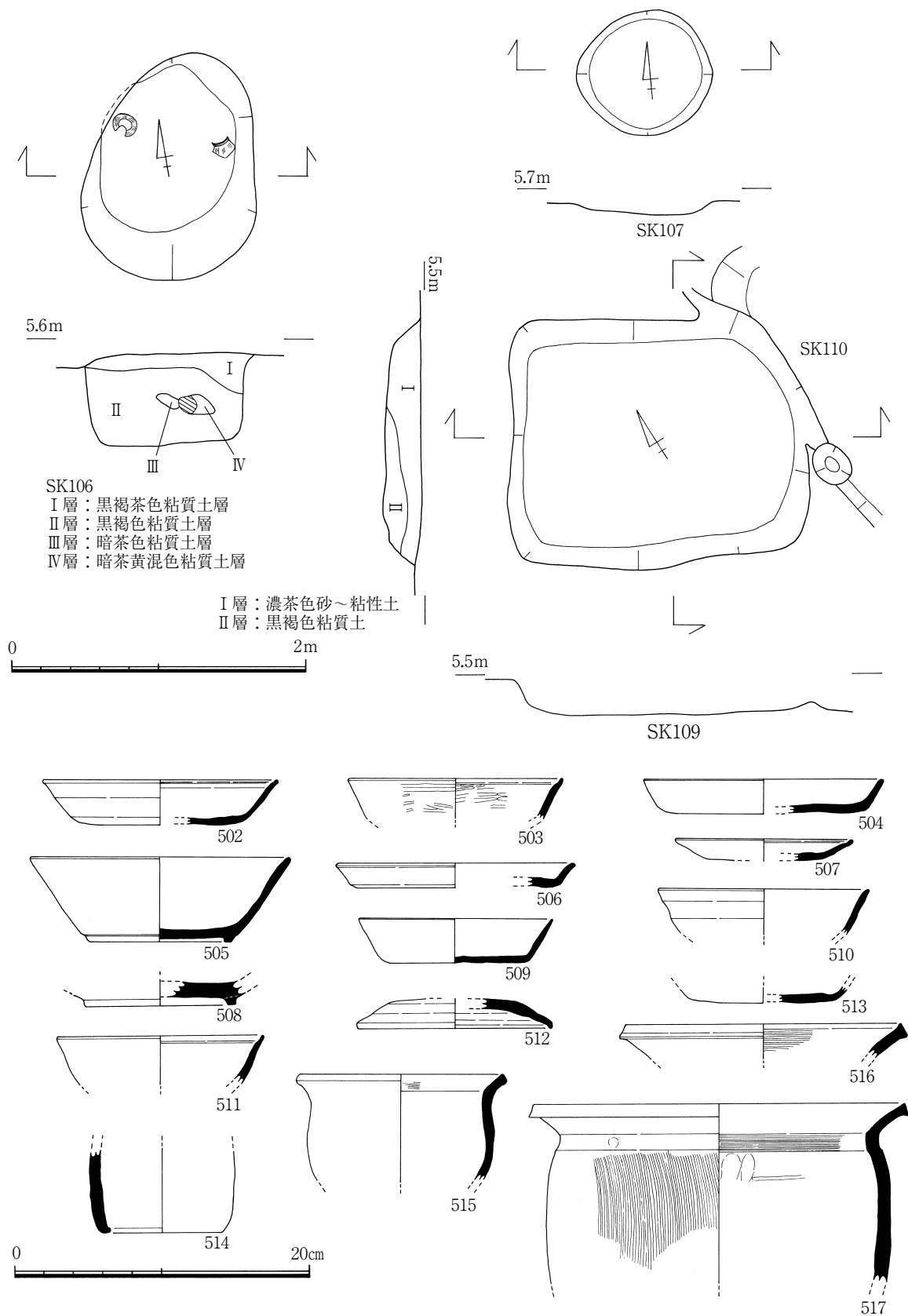


Fig.53 SK106・107・109平面・セクション・エレベーション・遺物出土状況図及び出土遺物実測図
 SK106 (土師器杯：502・513、須恵器杯：505・509・510、同皿：504・506・507、土師器甕：515・517、製塩土器：514) SK107 (土師器杯：508) SK109 (土師器杯：503・511、須恵器杯蓋：512、土師器甕：516)

SK 109 (fig. 53)

調査区の西に位置する。SK 110・113とは東コーナーで切り合っており、SK 109が両者を切っている。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸2.06m、短軸1.7m、深さ18～25cmを測る。断面は浅い船底形を呈し、埋土はⅠ層：濃茶色砂～粘性土、Ⅱ層：黒褐色粘質土である。

出土遺物のうち図示できたものは土師器杯(503・511)、甕(516)、須恵器蓋(512)であり、これらは全て埋土上層からの出土である。なお、弥生時代後期土器細片も多く出土しているが、SK 113よりの混入である。(浜田)

SK 110 (fig. 54)

調査区の西に位置し、SK 113とは北側でSK 109とは西側で切り合っている。切り合い関係を見ると、SK 110が弥生時代後期終末の土坑SK 113を大きく切っており、同じ古代の土坑SK 109には西側の一部を切られている。平面形は楕円形を呈し、長軸3.84m、短軸2.28m、深さ26～34cmを測り、床面は東半分が浅くなっている。埋土はⅠ層：濃茶色粘質土、Ⅱ層：黒褐色粘質土、Ⅲ層：茶褐黄混色粘質土である。

遺物は、土師器の甕(522)、鉢(529)、杯(518)、皿(519・520)、須恵器蓋(521)、製塩土器(525)が出土している。図示できたもののうち床面の出土は521、522、525である。521は杯蓋で擬宝珠形の摘みを持つものである。525は製塩土器で、細片5点が出土しているが同一固体と考えられる。内面には布目による圧痕が見られ、外面は被熱している。他に、床面からは移動式の竈の破片1点が出土している。なお、埋土中および床面から弥生時代後期の甕(528)、東阿波型土器の甕(524・526・527)、古式土師器(523)が出土しているが、これらはSK 113からの混入である。(浜田)

SK 123 (fig. 55)

調査区の南寄りに位置する。古代の土坑SK 126の西64cmの位置にあり、SD 13、ST 17を切っている。平面形は径1.18m前後の円形を呈し、深さは38～41cmを測る。断面形は逆台形を呈する。埋土はⅠ層：灰茶色粘質土、Ⅱ層：濃茶色粘質土、Ⅲ層：灰茶色黄混粘質土である。Ⅰ・Ⅱ層には拳大の円礫が多量に含まれており、意識的な埋め戻しがなされたと思われる。

埋土中より、古代の鉢・皿等の底部数点が出土しているが、図示できるものはない。(浜田)

SK 126 (fig. 55)

調査区の南寄りに位置し、SK 123の東に近接する。上層は攪乱を受けている。平面形は略方形を呈し、一辺約86cm、深さ26～34cmを測る。断面形は概ね船底形で、埋土はⅠ層：灰茶色粘質土(攪乱)、Ⅱ層：黄茶色粘質土、Ⅲ層：灰茶色粘質土である。遺物は土師器皿(530)の他、混入と思われる弥生土器細片約40点が出土している。(浜田)

SK 127 (fig. 56)

調査区の南側にあり、古代の土坑SK 126の東0.9m、SK 128の北西0.8mに位置する。平面形は不整形円形を呈し、径約1.2m、深さ22cmを測る。断面形は不整形である。小ピットが数個存在しているが、SK 127との関係は不明である。埋土中より、土師器の甕・杯の破片とその他細片が出土しているが、図示できるものはない。(浜田)

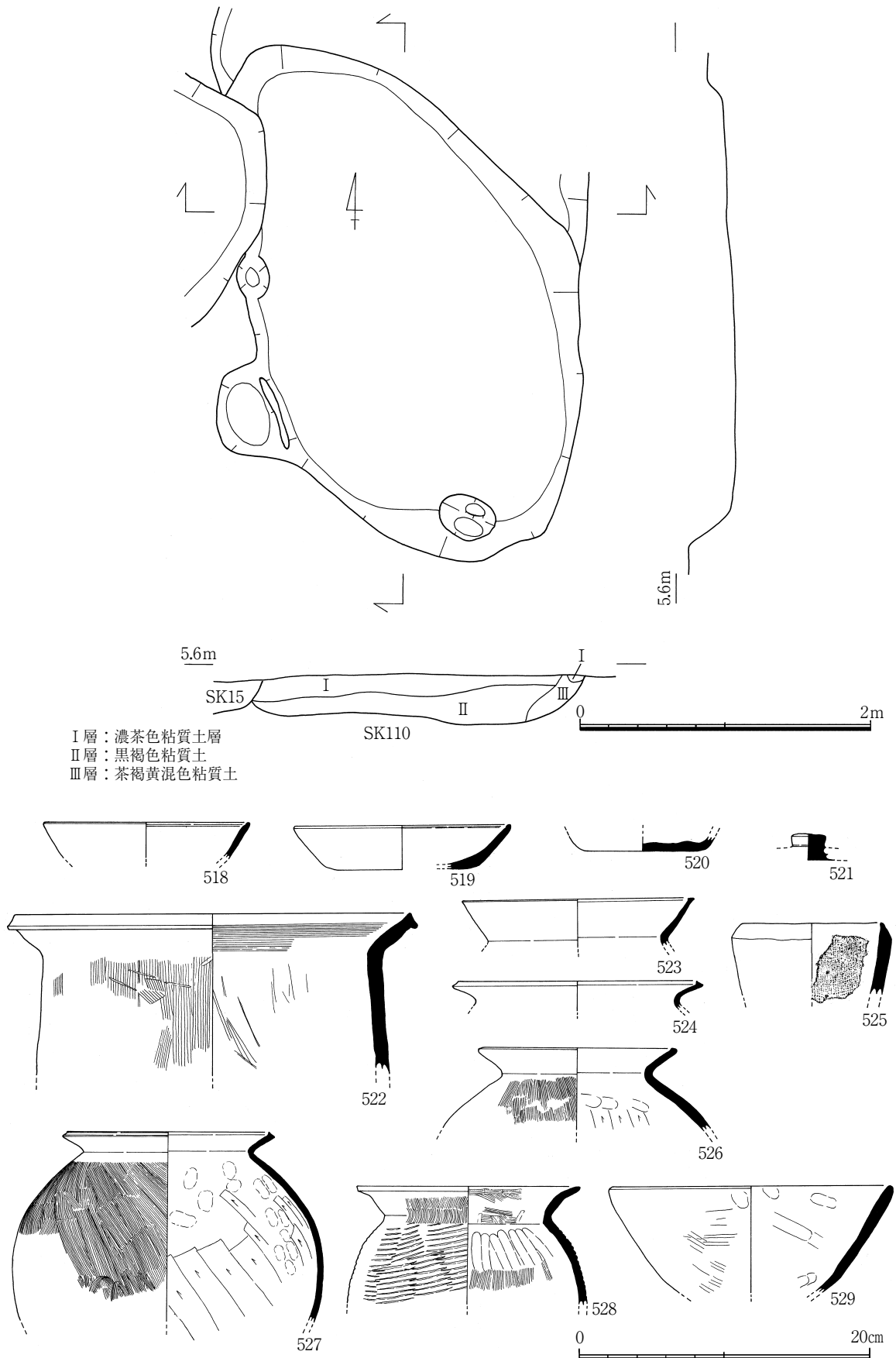


Fig.54 SK110 平面・セクション・エレベーション図及び出土遺物実測図
 土師器杯：518・519、同皿：520、須恵器杯蓋：521、土師器甕：522、
 製塩土器：525、混入土器：523・524・526～529

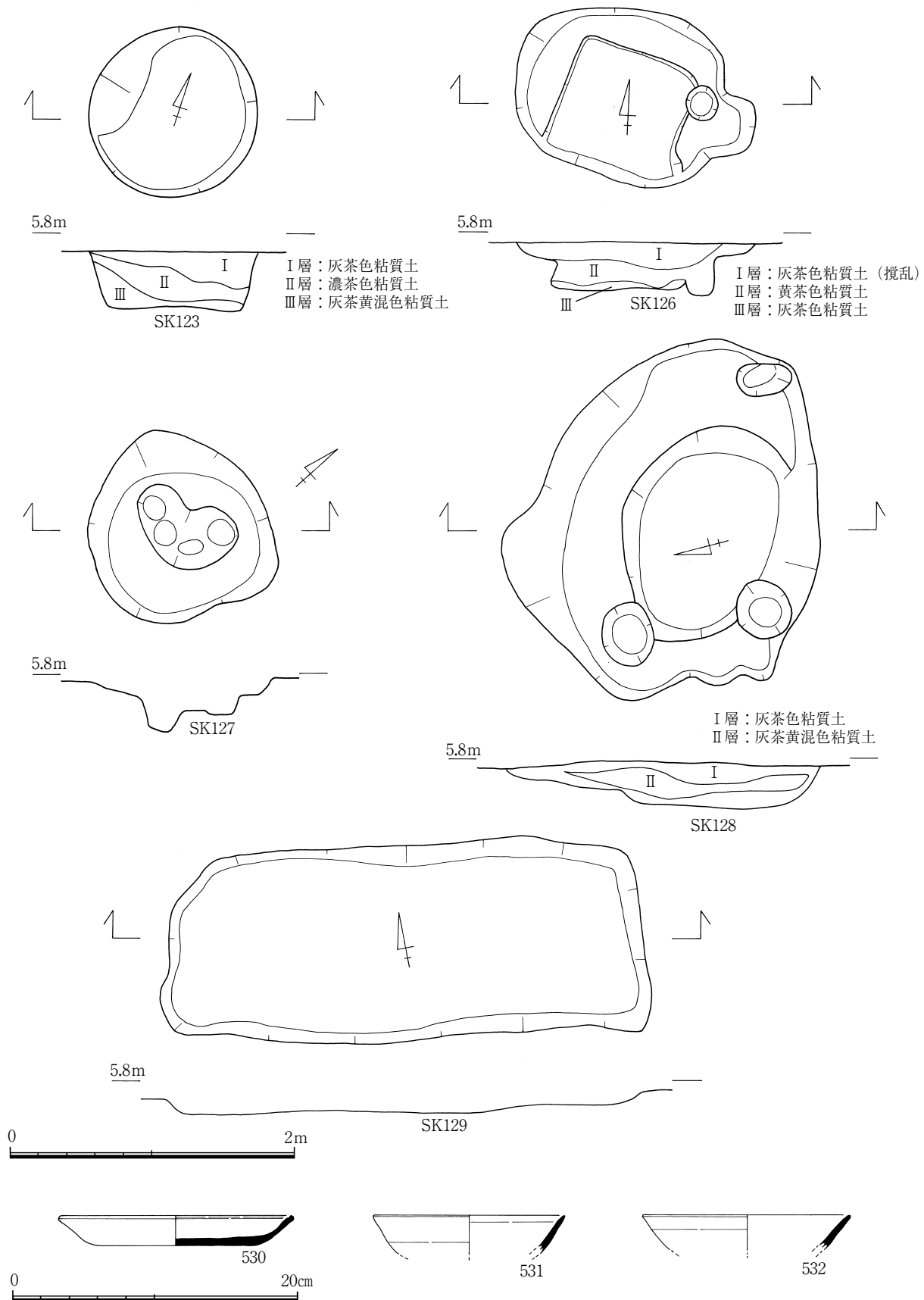


Fig.55 SK123・126～129平面・セクション・エレベーション図及び出土遺物実測図
SK126（土師器皿：530）SK128（土師器杯：531）SK129（須恵器杯：532）

SK 128 (fig. 55)

調査区の南端に位置する。弥生時代後期のP6とは南端で切り合い、SK 128がP6を切っている。断面形は概ね舟底形で、埋土はⅠ層：灰茶色粘質土、Ⅱ層：灰茶黄混色粘質土である。

出土遺物は、埋土中より土師器・須恵器の破片が数点出土している。図示できるものは土師器杯(531)のみで、これは上層よりの出土である。須恵器のような焼成で、搬入品である。(浜田)

SK 129 (fig. 55)

調査区中央部の南寄りにある。長軸3.3m、短軸1.3mの長方形のプランを呈し、深さ10cm前後を測る。床面は平坦面をなす。埋土は濃茶色粘質土の単統一層である。

出土遺物は、土師器杯・甕、須恵器の破片が出土しているが、図示し得たものは須恵器杯(532)のみである。(出原)

SK 130 (fig. 56~58)

SK 129の北隣にある。南北方向に長軸を有するやや不整な隅丸方形を呈し、長軸2.5m、短軸2.1m、深さは最大56cmを測る。床面は概ね平坦で、コーナー部に長軸20cm前後、深さ5~7cmの小ピットが3個認められる。南の壁は階段状に掘り込まれ二段の小テラスを有している。床面のピットは柱穴と考えられる。階段上の掘り込みから半地下式倉庫的な性格を有する小堅穴と考えられる。埋土はⅠ~Ⅳ層からなり、Ⅱ・Ⅲ層から多量の遺物が出土している。床面へばりつきの遺物は少ないが、土坑が使用されなくなった時に、一気に投げ込まれたような出土状況を示しており一括性の高い遺物群である。

遺物のほとんどを土師器が占めており須恵器は極少量である。供膳形態として土師器皿(533~541)、土師器杯(542~568・571・572)、土師器椀(569・570)、黒色土器A類椀(573~577)、灰釉陶器椀(578)、煮沸形態として土師器甕(580~586)が出土している。甕はすべて激しく煤けている。この他、土師器土錘(587~589)、瓦片(591)、須恵器壺底部(590)、砥石(592)が出土している。(出原)

SK 136 (fig. 59・60)

調査区中央部の北寄りにあり、北半分の上部が近世の溝SD 67に切られている。東側の壁が大きく内側に張り出しているが、概ね方形のプランを呈し一辺2.2m前後、深さ30~40cmを測る。壁は緩やかに立ち上がり、断面形は舟底状を呈する。SK 130のような柱穴は確認できなかったが、東壁の張り出しは、やはり階段状の遺構と考えられる。埋土は概ねⅠ層(濃茶色粘質土)からなるが、中層付近にⅡ~Ⅴ層がブロック状に入っている。

遺物はⅠ層下部の西側半分から集中して出土しており、出土状況から見て一括性の高いものである。SK 130と同じように土師器の供膳形態が主体を占めており、土師器皿(593~597)、土師器杯(598~612)、黒色土器A類椀(613~615)、土師器甕(616~619)、須恵器無頸壺(620)、鉄製品(621・622)が出土している。(出原)

SK 138 (fig. 61)

調査区の中央部にある。長軸1.1m、短軸0.7mの楕円形のプランを有し、深さ15cm前後を測る。埋土は濃茶色粘質土単統一層で、埋土中より須恵器の細片が出土しているが図示できるものはない。

(出原)

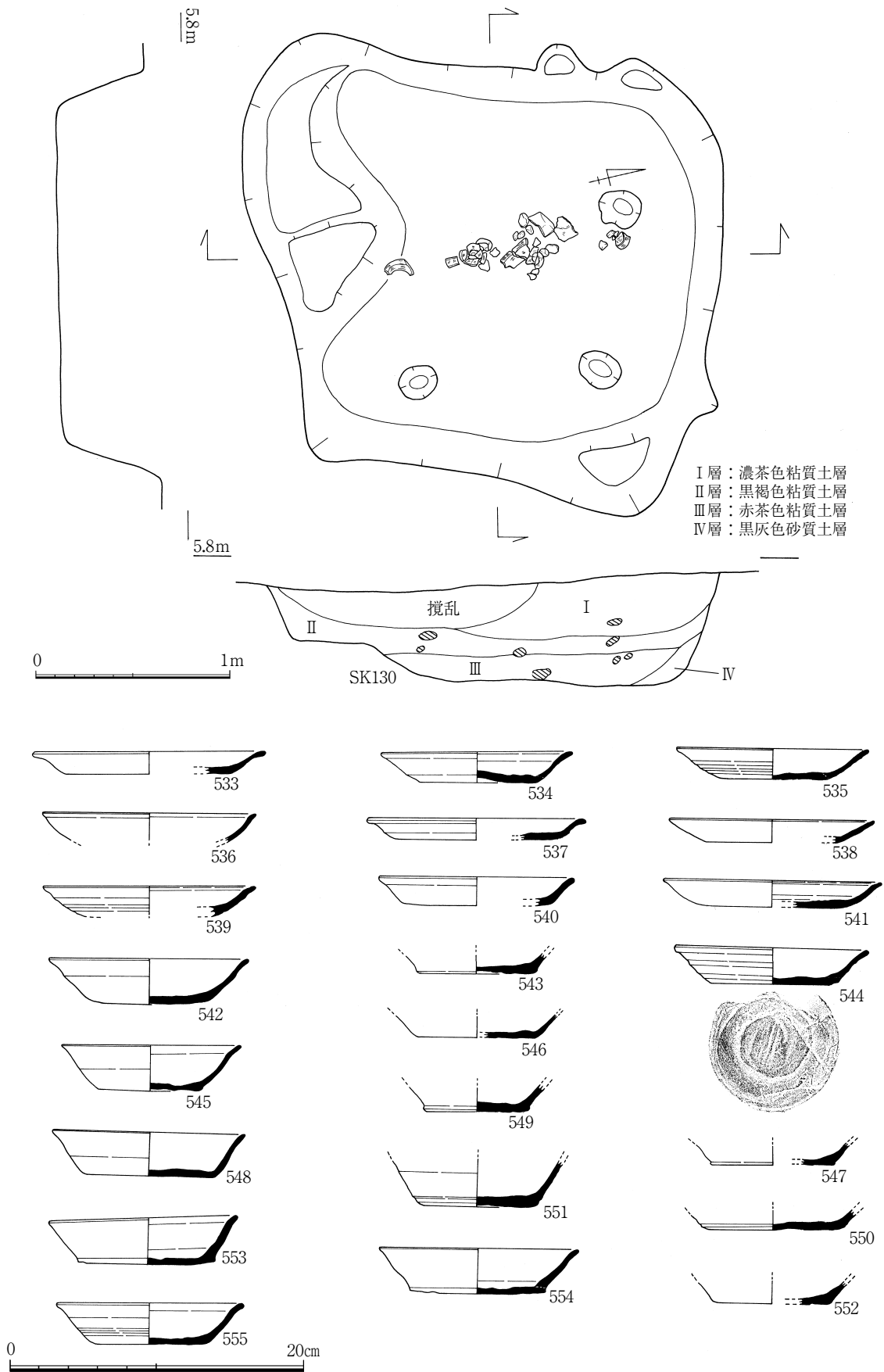


Fig.56 SK130平面・セクション・エレベーション・遺物出土状況図及び出土遺物実測図
 土師器皿A I類 (535・538～541)、同皿A II類 (533・534・537)、同皿A III類 (536)、同杯A I a類 (542・544・548・554)、同杯A I b類 (545・553・555)、杯底部 (543・546・547・549～552)

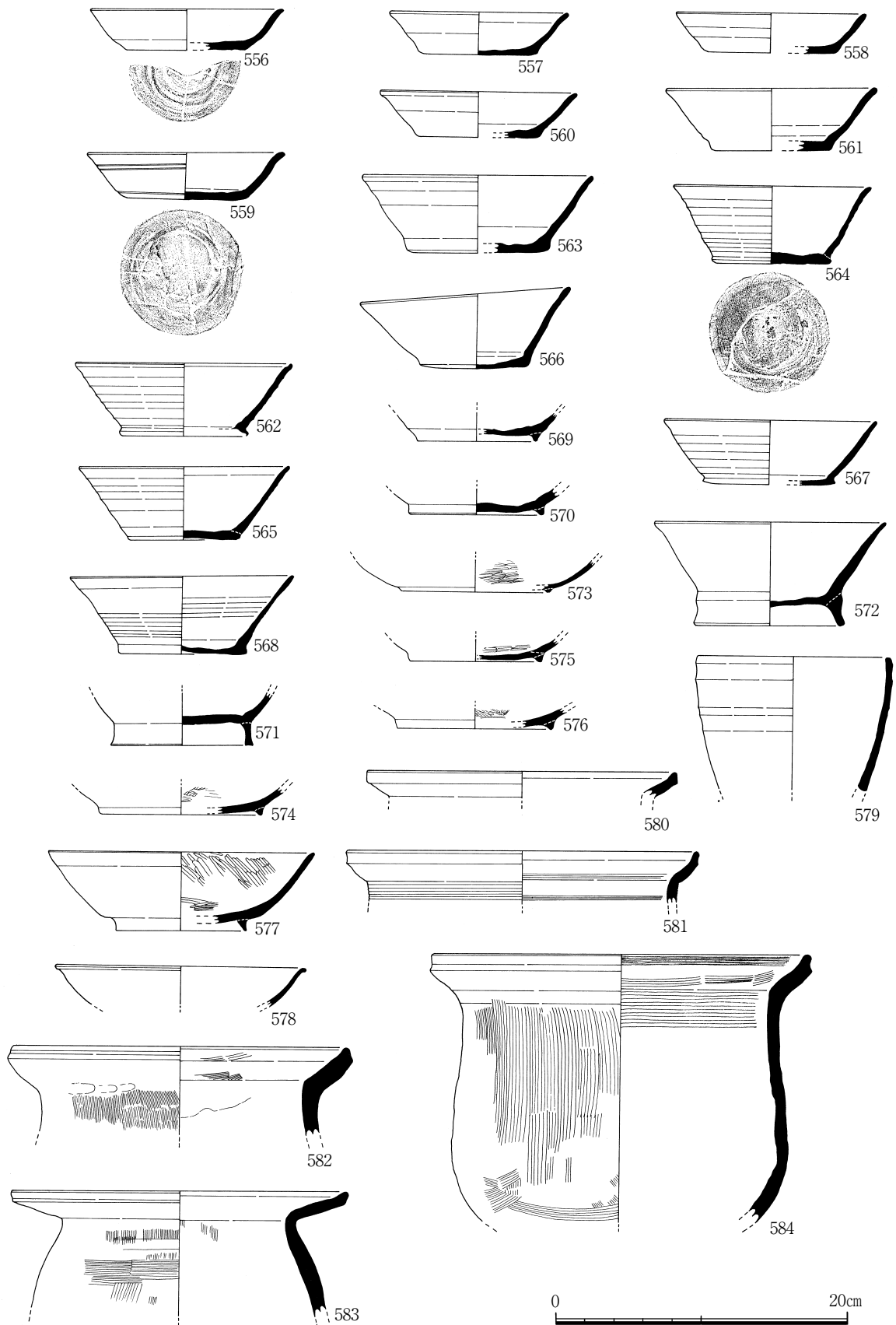


Fig.57 SK130出土遺物実測図

土師器杯A I a類 (556・559・560)、同A I b類 (557・558)、同A II a類 (562～566・568)、同A II b類 (561・567)、土師器杯B I a類 (572)、同B I b類 (571)、土師器碗 (569・570)、土師器鉢 (579)、黒色土器A類碗 (573～577)、灰釉碗 (578)、土師器甕Ⅲ類 (582・584)、同Ⅳ類 (580・581・583)

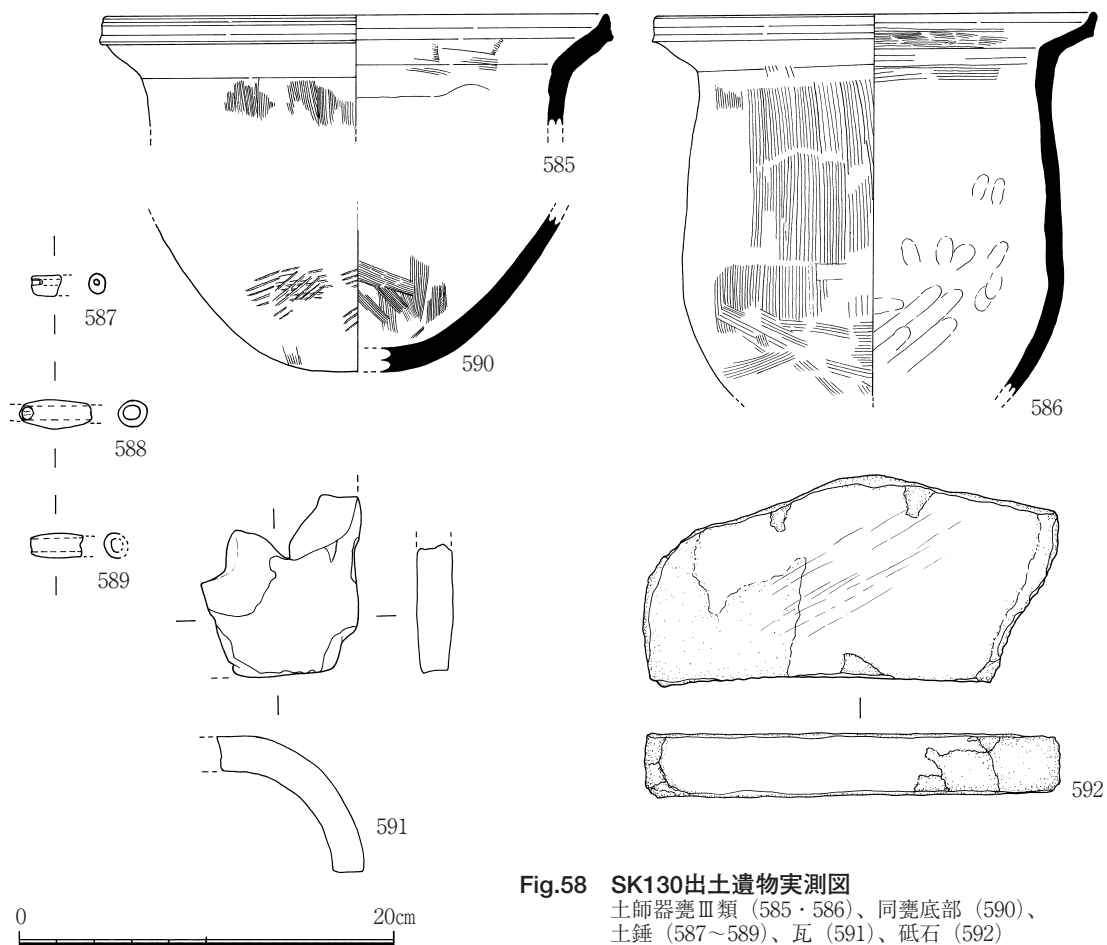


Fig.58 SK130出土遺物実測図
土師器甕Ⅲ類 (585・586)、同甕底部 (590)、
土錘 (587~589)、瓦 (591)、砥石 (592)

SK 140 (Fig. 61)

調査区北部にある。長軸60cm、短軸50cmの隅丸方形のプランを呈し、深さ40cmを測る。埋土は黒褐色粘質土単純一層で、埋土中より須恵器杯蓋(623)、須恵器皿(626)、土師器杯(624・625)、土師器甕(627)が出土している。(出原)

(2) 掘立柱建物

SB 2 (Fig. 61)

調査区の南西に位置する。建物の規模は梁間2間(3m)、桁行2間(3.5m)を測る総柱建物である。棟方向は $N-13^{\circ}-E$ で、ほぼ北方向である。柱間寸法は1.2~1.7mでややばらつきが大きい。各柱穴の大きさはP1・2・5が長径28~44cmの楕円形、その他のものは径16~32cmの円形を呈し、検出面からの深さは20~30cmを測る。埋土は濃茶色粘質土単純一層である。

出土遺物は、P3床面より土師器杯(630)が口縁部の一部を欠くものの完形に近い状態で出土している。この杯からSB 2は12世紀代に属すると考えられる。(浜田)

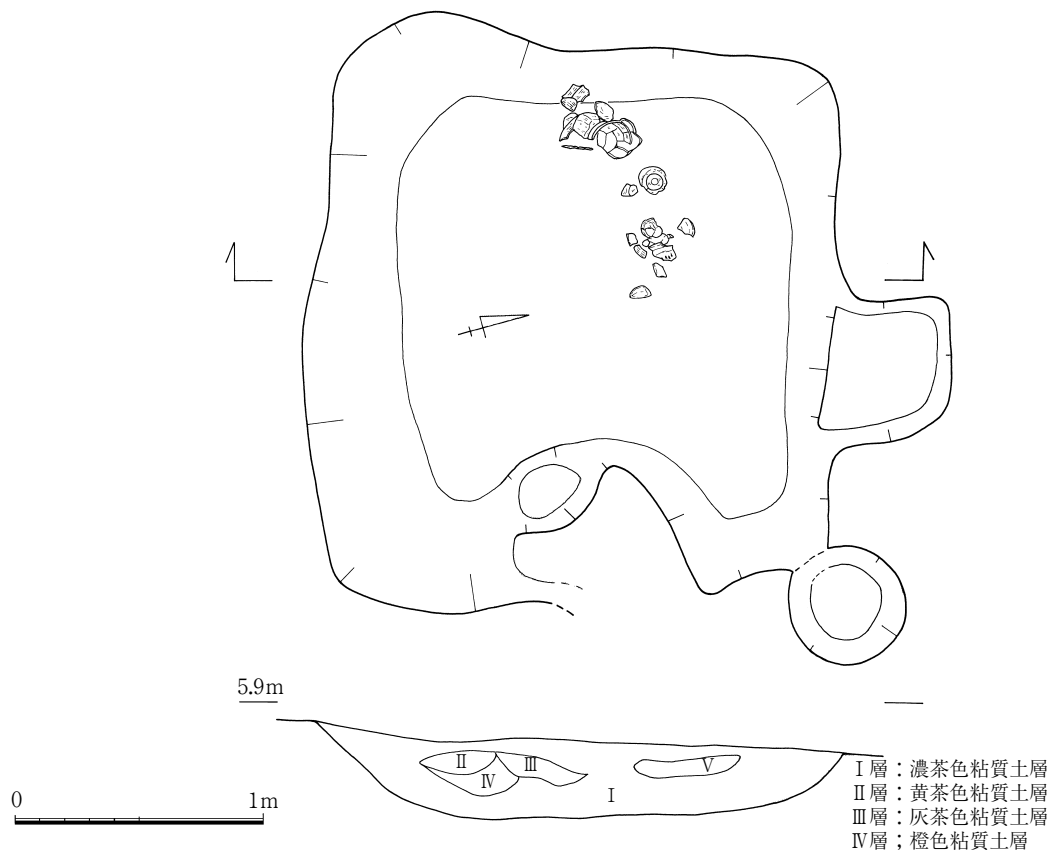


Fig.59 SK136平面・セクション・遺物出土状況図

(3) 溝

SD 70 (Fig. 61)

調査区西部に位置する。調査区中央部から南西方向($N-18^{\circ}-E$)に流れる溝であり、確認延長は26.4m、幅44~54cm、検出面からの深さは6~26cmを測る。断面形は逆台形で、黒褐色粘質土の堆積が認められる。中世の溝SD 64に切られ、南ではST 10を切っている。

出土遺物は、須恵器皿(628)、黒色土器A類椀、土師器杯口縁部、須恵器甕胴部細片等である。他に多量の弥生後期土器細片を含むが混入である。9世紀末~10世紀初めの溝である。

この他、古代に属する遺構としては、調査区西よりのP 47があり埋土中より、土師器杯(629)が出土している。(浜田)

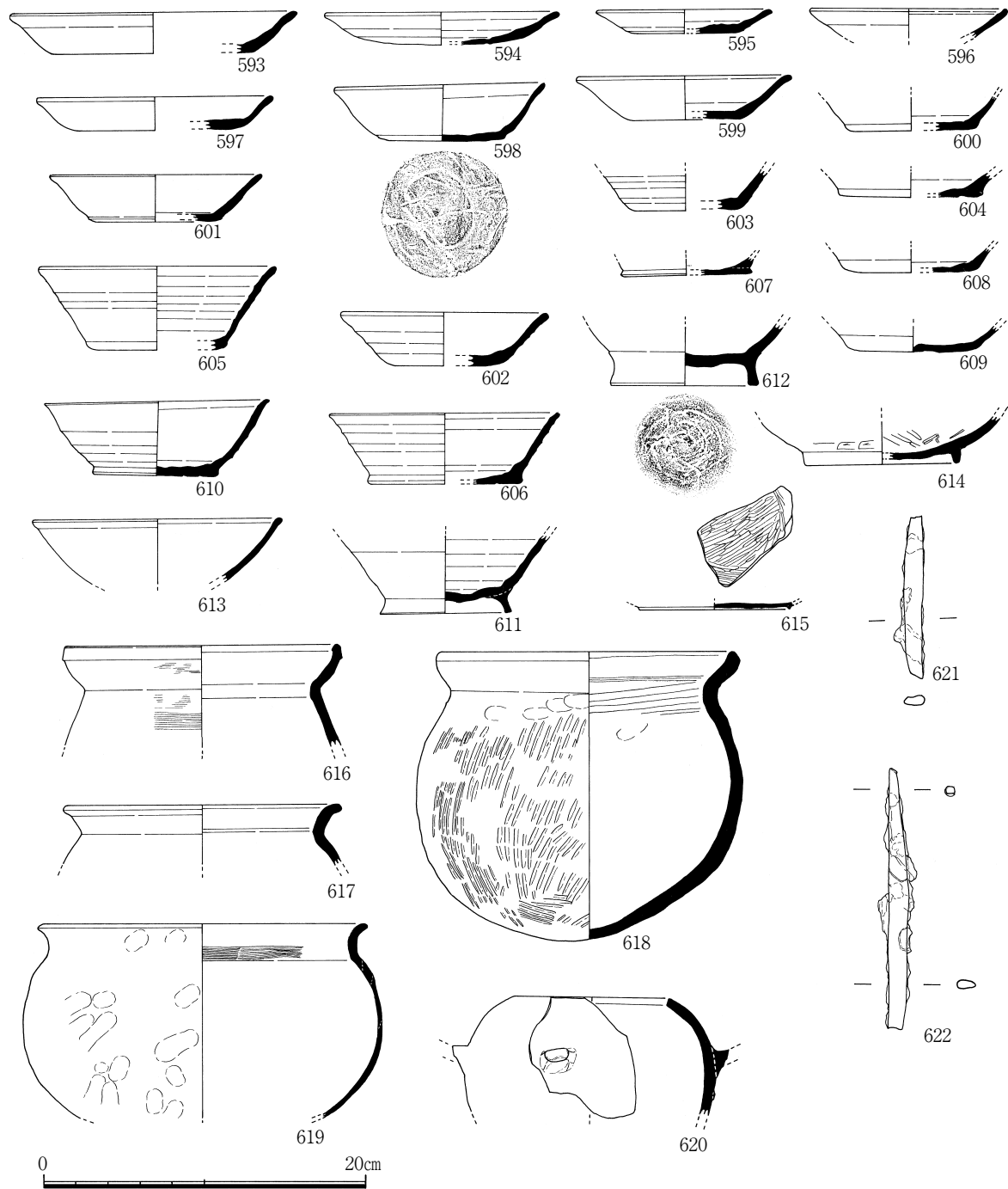


Fig.60 SK136出土遺物実測図

土師器皿A I類 (593~597)、同杯A I a類 (598・599・601・602)、同杯A II a類 (605)、同杯A II b類 (606・610)、同杯B I a類 (612)、同杯B I b類 (611)、同底部 (600・603・604・607~609)、黒色土器A類 椀 (613~615)、土師器甕 I類 (617・619)、同甕 II類 (618)、同甕 IV類 (616)、須恵器壺 (620)、鉄製品 (621・622)

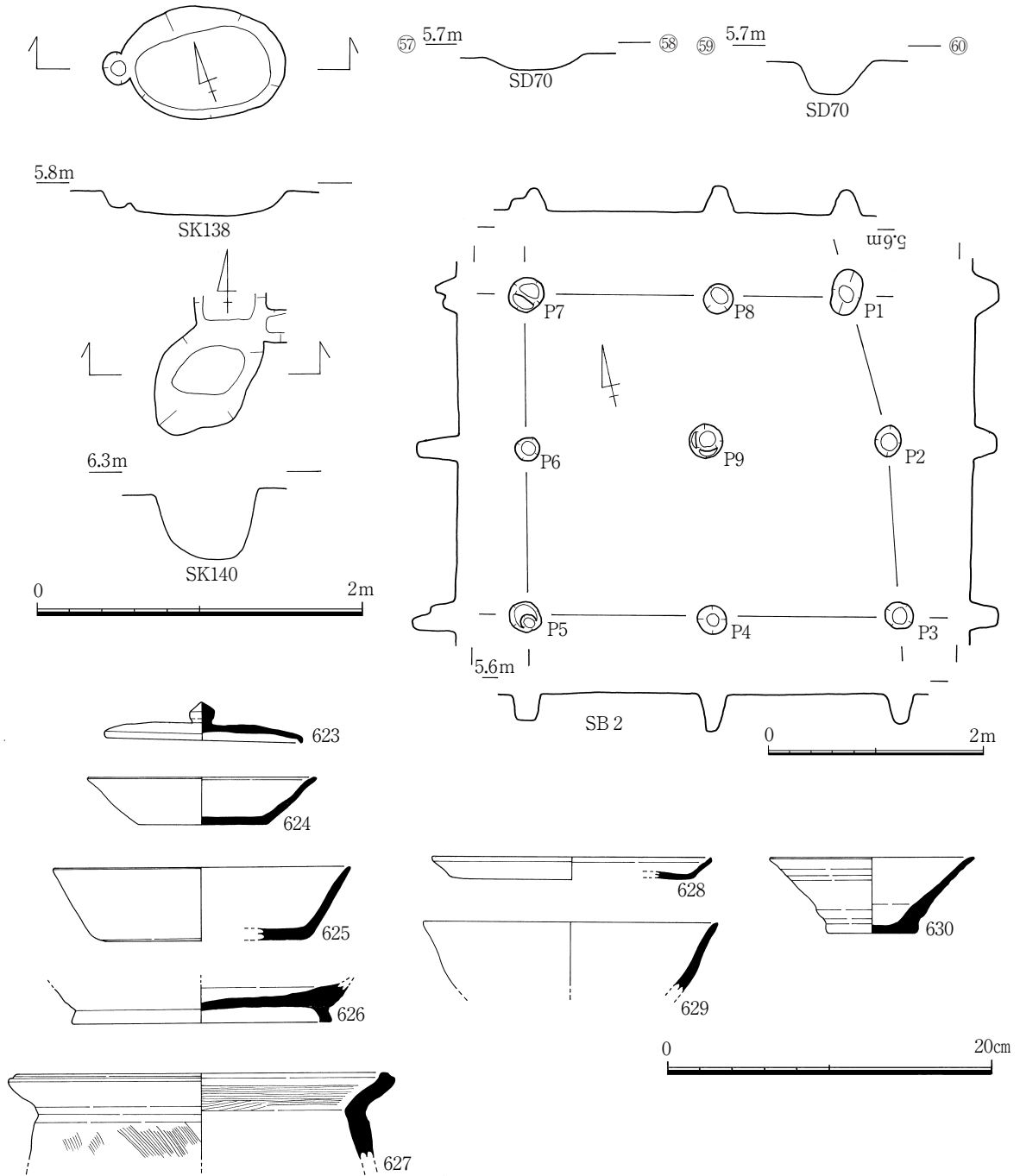


Fig.61 SK138・140・SD70・SB2・P47平面・エレベーション図及び出土遺物実測図
 SK140 (須恵器杯蓋: 623、同皿: 626、土師器杯: 624・625、同甕: 627)
 SD70 (須恵器皿: 628) SB2-P3 (土師器杯: 630) P47 (土師器杯: 629)

4 中世の遺構と遺物

(1) 掘立柱建物

SB 1 (Fig. 62)

調査区の西南端にあり、古代の掘立柱建物跡(SB 2)の南側に位置する。包含層を除去した段階で検出した掘立柱建物跡である。建物の棟方向は $N-13.5^{\circ}-E$ のほぼ南北方向で、規模は2間×2間の総柱建物跡である。梁間の北側は3.46m、南側は3.44mである。桁行の東側は3.64m、西側は3.62mである。柱間寸法は1.64~1.98mで平均は1.7mを測る。柱穴の掘り方は円形状か楕円形状を呈し、柱穴の大きさは円形状のものが径30cm前後で、楕円形状のもので大きいものは長径40cm、短径28cmであり、小さいピット(P5)は26×20(cm)を測る。検出面から床面までの深さは14~41cmで、平均31cmである。埋土はP2が黒褐色粘質土で、他は濃茶色粘質土である。断面形はP3が逆台形で、それ以外はU字形である。

出土遺物は土師器、瓦器の細片が出土している。P3から瓦器椀口縁部1点と細片3点が出土している。これらは中層からの出土である。P4からは土師器の細片3点と床面から杯の底部1点が出土している。また、P8埋土中より細片1点、床面より杯か皿の底部が1点と細片が1点出土しているが図示できるものはない。(泉)

(2) 溝

SD 69 (Fig. 62)

調査区の西部を大きな弧を描いて北から西方に走る溝である。確認延長28m、幅は60cm前後と一定しているが、深さは15~55cmを測り西に向かうほどに深さを増している。また断面形も北端近くでは台形状をなしているが、西にむかって次第に箱形を呈するようになる。埋土はI層：濃茶色粘質土、II層：灰茶色粘質土であるが、部分的に底部に砂礫の堆積が見られる。出土遺物は埋土中より土師器、瓦器などの細片が認められるが、図示し得たのは瓦器椀(631)と青磁碗(632)のみである。13世紀代の溝である。(出原)

(3) ピット

P 41 (Fig. 62)

調査区の北西部に位置し、長軸47cm、短軸30cm、深さ32cmを測る楕円形のプランを有するピットである。埋土中より瓦器椀の口縁部(633・634)が出土している。(出原)

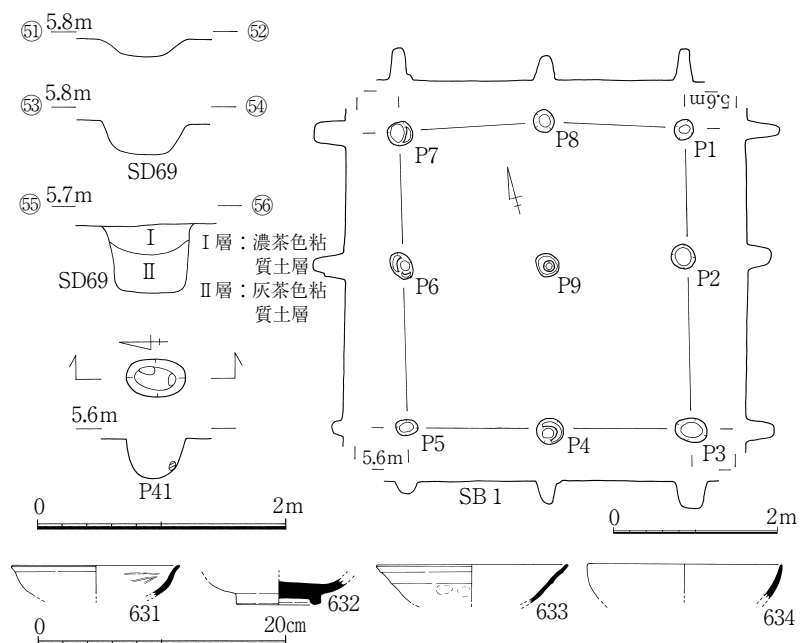


Fig.62 SD69・P41・SB1平面・セクション・エレベーション図及び出土遺物実測図
SD69 (瓦器椀: 631, 青磁碗: 632) P41 (瓦器椀: 633・634)

5 近世・その他の遺構と遺物

(1) 土坑

SK 44 (fig.63)

調査区の東部南張り出し部に存在する。平面形は不整長方形を呈し、長軸方向は $N-17^{\circ}-E$ である。規模は南北0.93m、東西0.7mであり、深さは6cmを測る。底部は平坦であり、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は灰色土（黒色土・黄色土混り）単統一層である。

出土遺物は存在しない。埋土の色調から近世土坑と判断した。（藤方）

SK 45 (fig. 63)

調査区の東部南張り出し部分に存在する。平面形は不整楕円形（瓢箪型）を呈しており、長軸方向は $N-71^{\circ}-W$ である。規模は東西1.08m、南北0.58mであり、深さは10cmである。底部は緩く窪んだ面を成し、壁は不明瞭で緩やかに立ち上がる。埋土は灰色土であり、黄灰色粘土がブロックで存在する。

出土遺物はどれも細片であるが、弥生土器1点、磁器2点、陶器1点、瓦1点である。（藤方）

SK 46 (fig.63)

調査区の東部南張り出し部に存在する。平面形は楕円形を呈しており、長軸方向は南北（ $N-0^{\circ}-W$ ）である。規模は南北1m、東西0.77mであり、深さは12cmを測る。底面は緩く窪んだ面を成し、壁は急に立ち上がる。埋土は灰色土（黒色土・黄色土混入）である。

出土遺物としては土師器の皿（635）が図示可能であり、破片として磁器1点、土師器2点が存在する。（藤方）

SK 48 (fig.63)

調査区の東部に存在する。東辺を部分的に東接する土坑によって切られている。平面形は楕円形を呈しており、長軸方向は $N-17^{\circ}-E$ である。規模は南北1.32m、東西0.62mであり、深さは36cmを測る。底部は平らな面を成し、壁はほぼ直立する。部分的に存在する窪みは後世の柱穴によると考えられるが、調査時点では切り合いは明確にならなかった。土坑の壁及び底面は幅約5cmの三和土（黄色を呈し、粗砂粒を含む。）による枠が存在する。

出土遺物としては磁器の蓋（636）が図示可能であり、他に平瓦3点が存在している。（藤方）

SK 49 (fig. 63)

調査区の東端に存在する。平面形は不整楕円形を呈し、長軸方向は $N-24^{\circ}-E$ である。規模は南北1.62m、東西1.58mであり、深さは16~22cmを測る。底部は平坦面を成し、東部にはやや浅い段部が存在する。埋土は主にⅠ層：黒褐色土、Ⅱ層：黒褐色土である。Ⅲ層は地山崩壊の土を含んでいることから、比較的早い段階の埋土と考えられる。また、土坑底部の南に存在した数個の円礫は、早い段階に埋土と共に放り込まれた可能性が強い。

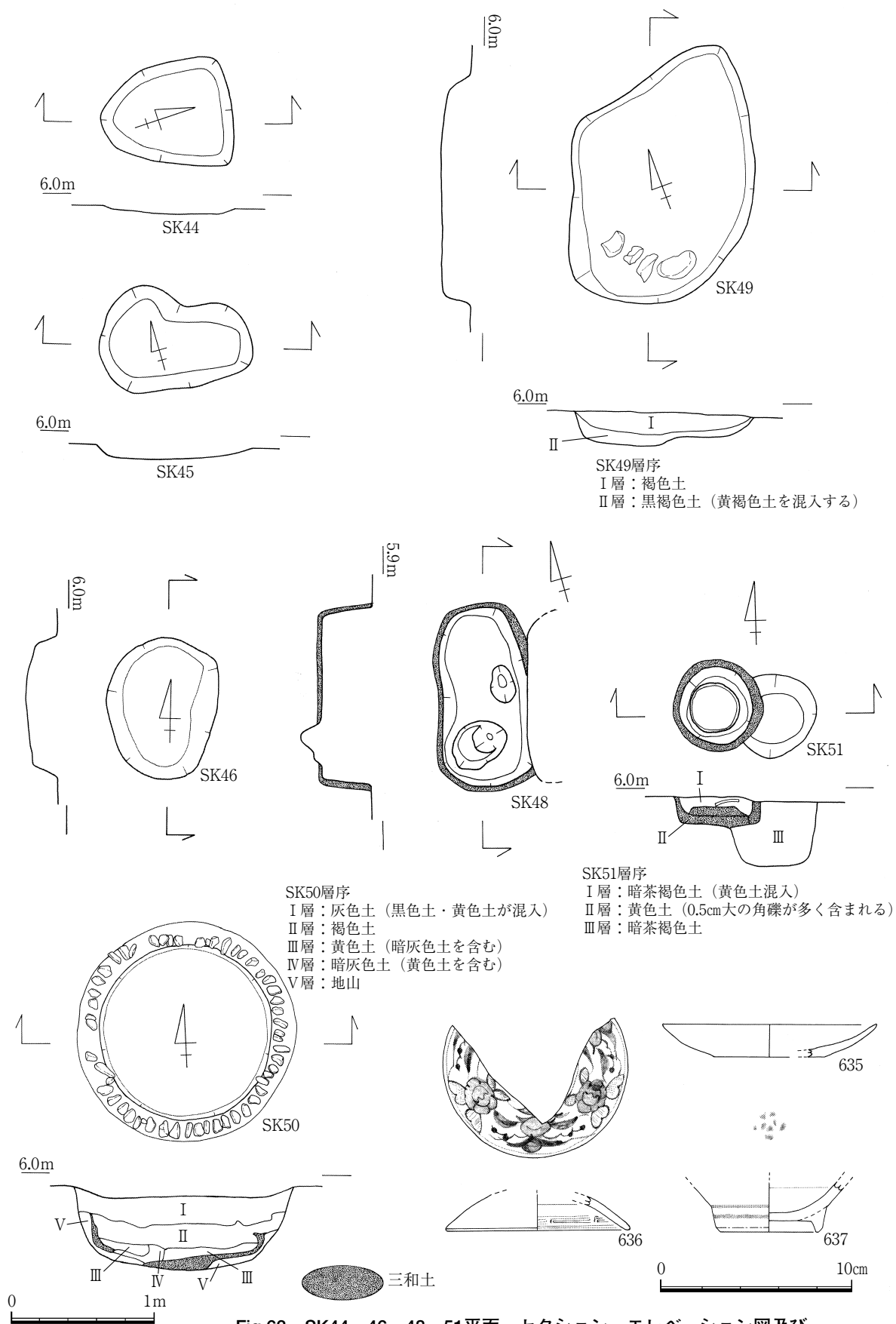


Fig.63 SK44~46・48~51平面・セクション・エレベーション図及びSK46 (635)・SK48 (636)・SK51 (637) 出土遺物実測図

出土遺物は存在しないが、埋土色から近世のものと判断した。(藤方)

SK 50 (fig.63)

調査区の東部南に位置し、近世の溝SD64を切って存在する。平面形は直径1.38mの円形を呈し、深さは中央部で最大であり52cmを測る。埋土はⅠ層：灰色土、Ⅱ層：褐色土、Ⅲ層：黄色土、Ⅳ層：暗灰色土であり、Ⅱ～Ⅲ層については比較的短期間に、然も意図的に埋められた可能性が強い。

検出時点では壁及び底部の三和土の存在は不明瞭であったが、崩落部分が多いものの厚さ5～8cmで底部と側壁に残存している。また、この三和土による枠の外側には拳大の円礫が環状に列石を成して存在する。これはSK50が比較的軟弱なSD64の埋土上に構築されていることから、枠を補強する目的を持つものと考えられる。

出土遺物は破片であり、陶器1点、平瓦6点、丸瓦1点である。(藤方)

SK 51 (fig. 63)

調査区の東部に位置し、東には直径60cmの円形を呈した深さ40cmを測る柱穴状の遺構が存在する。SK51の平面形は直径54cmの円形を呈し、深さは14cmを測る。壁と底部に厚さ5cm程度の三和土が存在し、中央床面には直径30cm、床面からの高さ6cmの規模を持つ三和土で形成された盤状の構築物が存在している。この盤状の構築物は東側の柱穴状遺構に張り出すように存在しており、柱穴状遺構の埋積後に構築された可能性が高い。柱穴状遺構の埋土が茶褐色土であり、SK51埋土との関わりも捉え得なかったことから、付属施設としての可能性は低い。三和土による構築物を有するSK51

の形態は、挽き白(下白)の形状に酷似する。

出土遺物としては瀬戸・美濃産の広東茶椀底部(637)が図示可能であり、破片としては磁器1点、平瓦2点が存在している。

(藤方)

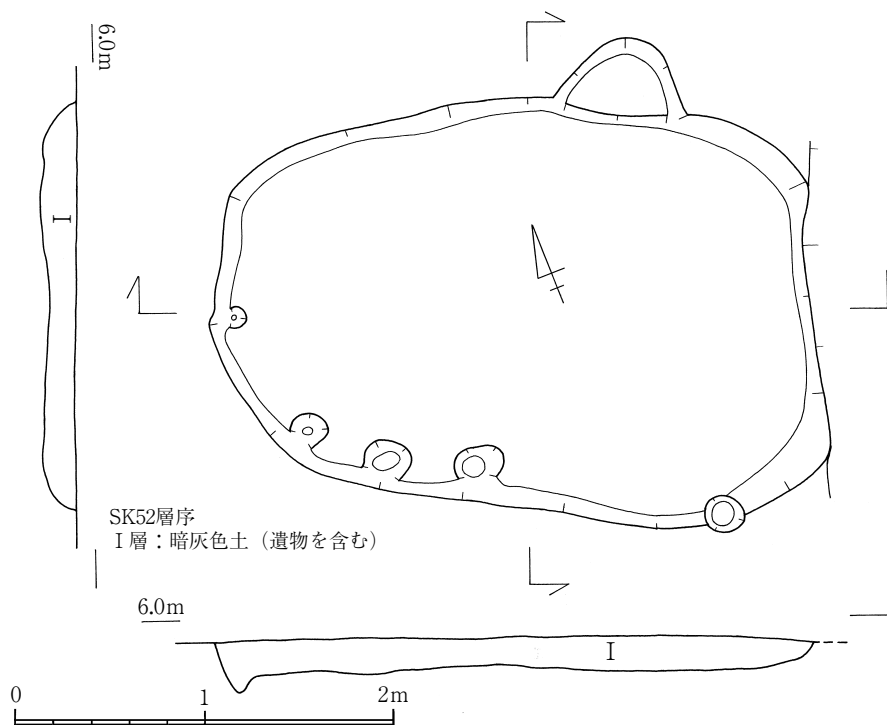


Fig.64 SK52平面・セクション図

SK 52(fig.64・65)

調査区の東部南に位置し、東

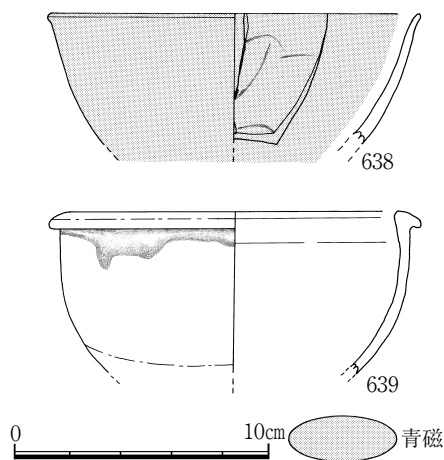


Fig.65 SK52(638)・53(639)出土遺物実測図

端を近世の溝SD64によって切られて存在する。平面形は隅丸長方形又は楕円形を呈すると考えられ、長軸方向は $N-69^{\circ}-W$ である。規模は東西3.16m、南北2.16mであり、深さは16~27cmを測る。底部は小さな凸凹が存在し、西に向かって緩やかな傾斜を持つ。西壁はやや急に立ち上がり、他は底部から連続してなだらかに立ち上がる。埋土は暗灰色単純一層である。

出土遺物として図示できるものには龍泉窯産の青磁碗(638)が在り、破片としては陶器1点、土師器1点、平瓦1点が存在している。638は13世紀のものであるが混入したものと考えられる。(藤方)

SK 53 (fig.65・66)

調査区の東部北に存在する。平面形は楕円形を呈し、長軸方向は $N-78^{\circ}-W$ である。規模は東西1.5m、南北0.84mであり、深さは22cmを測る。底部は平坦面を成し、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は灰色土単純一層である。

出土遺物として図示できるものは陶器の鉢(639)であり、破片としては陶器1点、平瓦1点、釘3点が存在している。(藤方)

SK 54 (fig. 66)

調査区の東部中央に位置し、東辺と西辺を各々近世の柱穴によって切られて存在する。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸方向は $N-22^{\circ}-E$ である。規模は南北3.77m、東西1.24mであり、深さは20~30cmを測る。底部は比較的平らな面を成しているが、北部には段部が存在し、壁は急に立ち上がる。埋土はⅠ層：暗褐色土、Ⅱ層：黒色土に分層が可能であるが、比較的短い時間で埋まったものと考えられる。

出土遺物は磁器1点が存在するが図示できるものは無い。(藤方)

SK 55 (fig.66)

調査区の東部中央に位置し、東辺と西辺の中央部は後世の柱穴によって切られて存在する。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸方向は $N-12^{\circ}-E$ である。規模は南北2.25m、東西1.76mであり、深さは6~20cmである。底面形態は南東部に長形状のやや深い個所が存在し一様ではない。埋土にはⅠ層：暗灰色土、Ⅱ層：暗灰色土(黄褐色土混入)が在り、Ⅱ層が南東部の深い部分に、Ⅰ層が西及び北部の比較的浅い部分に存在している。このことから新旧土坑の存在した可能性を含む。

出土遺物は皆無であるが、埋土色から近世のものと判断した。(藤方)

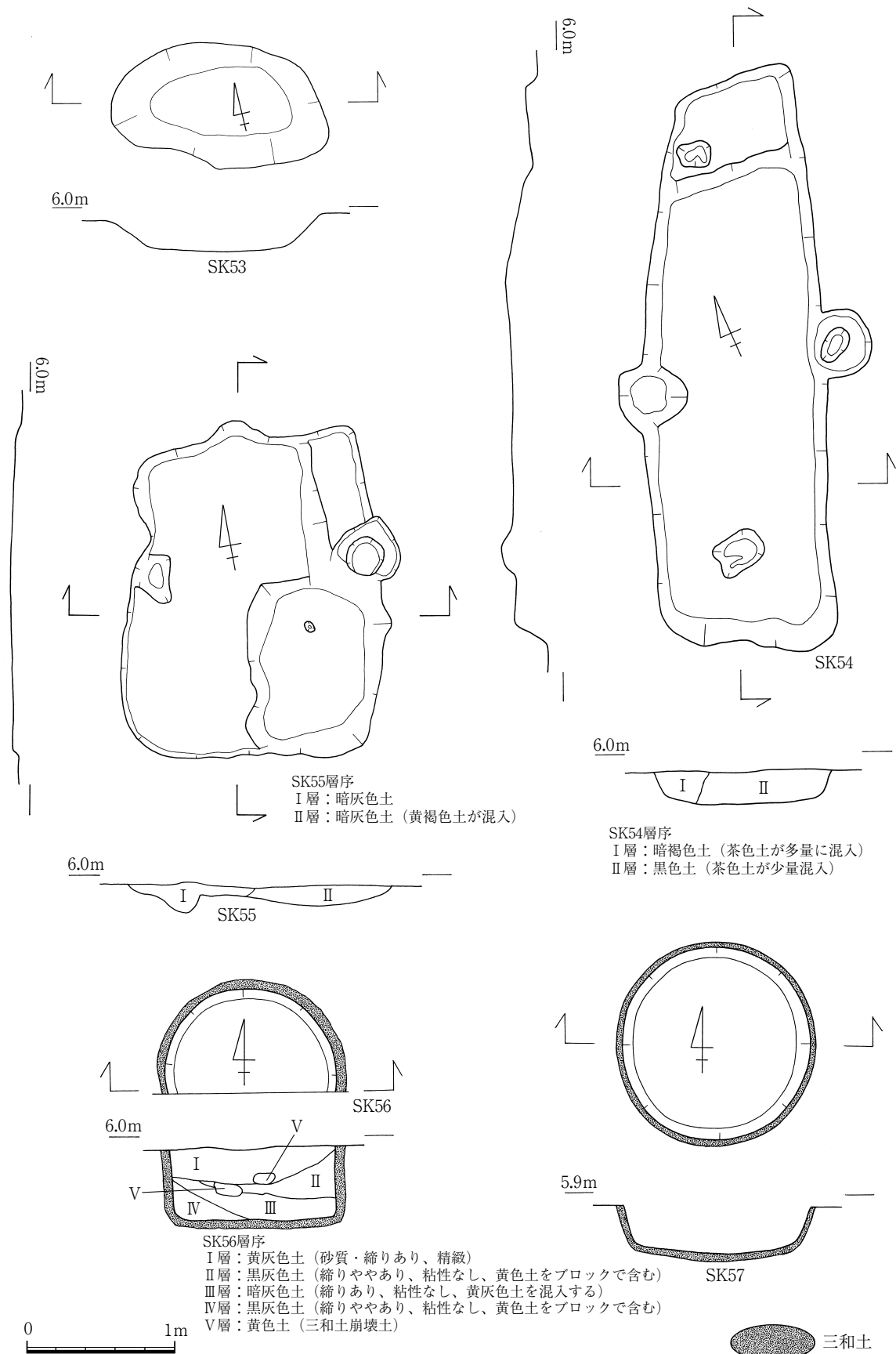


Fig.66 SK53~57平面・セクション・エレベーション図

SK 56 (fig.66・67)

調査区の東部南端存在する。南壁によって隔されており全体の規模は不明である。平面形は直径1.16mの円形を呈し、深さは50cmを測る。底部はほぼ平らな面を成し、壁は直立する。壁及び底部には三和土による枠が存在しているが、外周に列石は存在しない。埋土は大きく上部のⅠ層：黄灰色土と下部のⅡ層：黒灰色土、Ⅲ層：暗灰色土、Ⅳ層：黒灰色土、Ⅴ層：黄色土（三和土崩壊土）に分けることが可能であり、下部の各層には三和土の崩壊土が多く存在していることから、破棄された後一時期に埋め戻された部分であると考えられる。

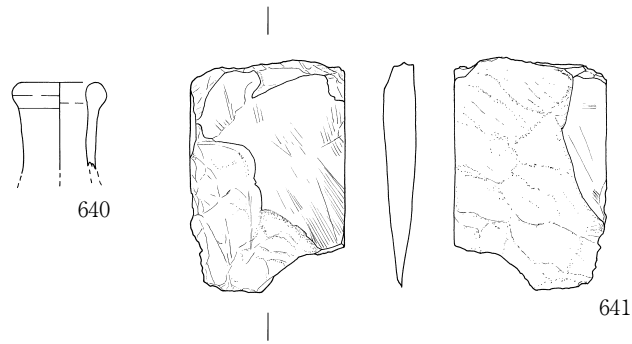


Fig.67 SK56出土遺物実測図 (1/3)

出土遺物として図示できるものは陶器の瓶口縁部（640）、泥岩製の砥石（641）であり、破片としては陶器1点、瓦5点が存在している。（藤方）

SK 57 (fig.66)

調査区の東部中央に存在する。平面形は直径1.27mの円形を呈し、深さは33cmを測る。底部は中央部分が深い窪んだ面を成し、壁は急に立ち上がる。埋土は暗灰色土であり、拳大の円礫を多く含み三和土がブロックで混入する。壁及び底部には三和土による枠が存在しており、北東部の外周には列石の一部が確認されたが、拳大の円礫が数個存在するのみである。

出土遺物は皆無である。（藤方）

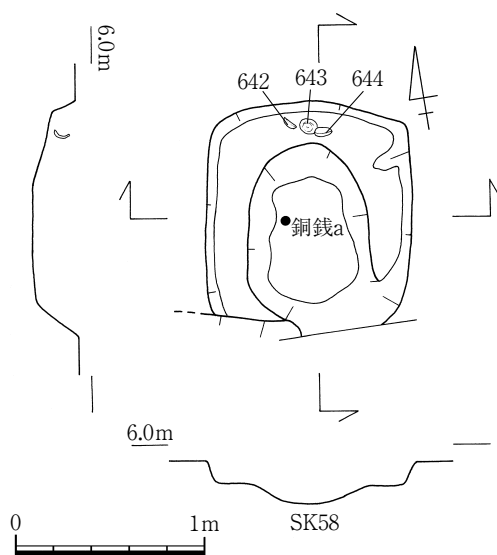


Fig.68 SK58平面・エレベーション・遺物出土状況図

SK 58 (fig.68・69・122)

調査区の東部南端に位置し、南端はSK61によって切られて存在する。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸方向は南北（ $N-9^{\circ}-E$ ）である。規模は南北1.24m、東西1.09mであり、深さは22～26cmを測る。底部形態は中央部で深く、壁に向かって緩やかに立ち上がり、壁は急に立ち上がる。埋土は暗灰色土単純一層である。出土遺物としては、土師器の小皿3点（642～644）、治平元室（a）と識別不能の銅銭破片1点が存在している。出土位置は銅銭 a が床面からの出土であり、642～644は北壁上から出土している。

SK58は土壙墓の可能性が強い。（藤方）

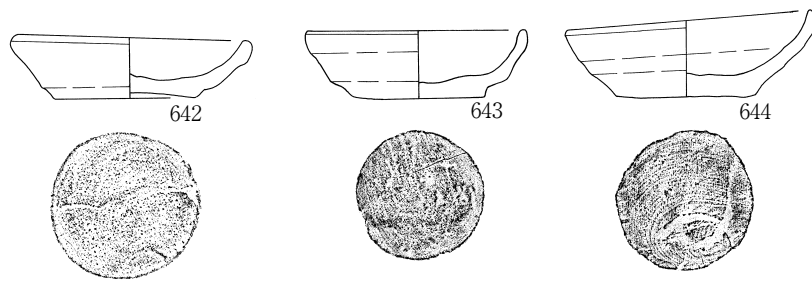


Fig.69 SK58出土遺物実測図 (1/3)

SK 59 (fig.70)

調査区の中央部に位置し、中央部南寄りを後世の柱穴によって切られて存在する。平面形は隅丸方形を呈し、長軸方向は $N-26^{\circ}-E$ である。規模は南北1.6m、東西0.74

mであり、深さは10cmを測る。底部は平らな面を成し、南へはなだらかに立ち上がり明瞭な壁を持たない。他の三方向には緩やかな傾斜を持って立ち上がる。埋土は暗灰色土単純一層である。

出土遺物は皆無である。(藤方)

SK 60 (fig.70)

調査区の東部中央に位置し、弥生時代後期住居址ST6及び近世土坑SK83を切って存在する。平面形は直径1.28mの円形を呈し、深さは26~37cmを測る。壁及び底部には幅8cm程度の三和土による枠が存在しており、南東部の外周には拳大の円礫が数個存在する。底部は本来平らな面を持ち、壁は直立するものと考えられるが、使用するに於て底部中央の三和土は欠失したものと考えられる。埋土は灰色土(黒色土・黄色土を混入)であり、拳大の円礫を含んでいる。

出土遺物はすべて破片であり、磁器2点、平瓦9点である。(藤方)

SK 61 (fig.70)

調査区の東部南端に位置し、近世土壙墓SK58を切って存在する。遺構の主体は調査区外に存在し、調査は部分的なものである。2ヶ所の隅部が検出されていることから、平面形は隅丸方形又は隅丸長方形を呈すると考えられる。検出規模は東西1.1m、南北0.23mであり、深さは14cmを測る。底部は平らな面を成し、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は暗灰色土単純一層である。

出土遺物は皆無である。SK58同様土壙墓と考えられる。(藤方)

SK 62 (fig.70)

調査区の東部南端に存在する。南壁に隔されており、遺構の全形は不明であるが、平面形は隅丸方形又は隅丸長方形を呈すると考えられ、その場合長軸方向は $N-23^{\circ}-E$ を示す。検出規模は南北0.9m、東西0.8mであり、深さは10cmを測る。底部は平らな面を成し、壁はやや急に立ち上がる。埋土は暗灰色土単純一層である。

出土遺物は皆無である。SK58・61同様土壙墓と考えられる。(藤方)

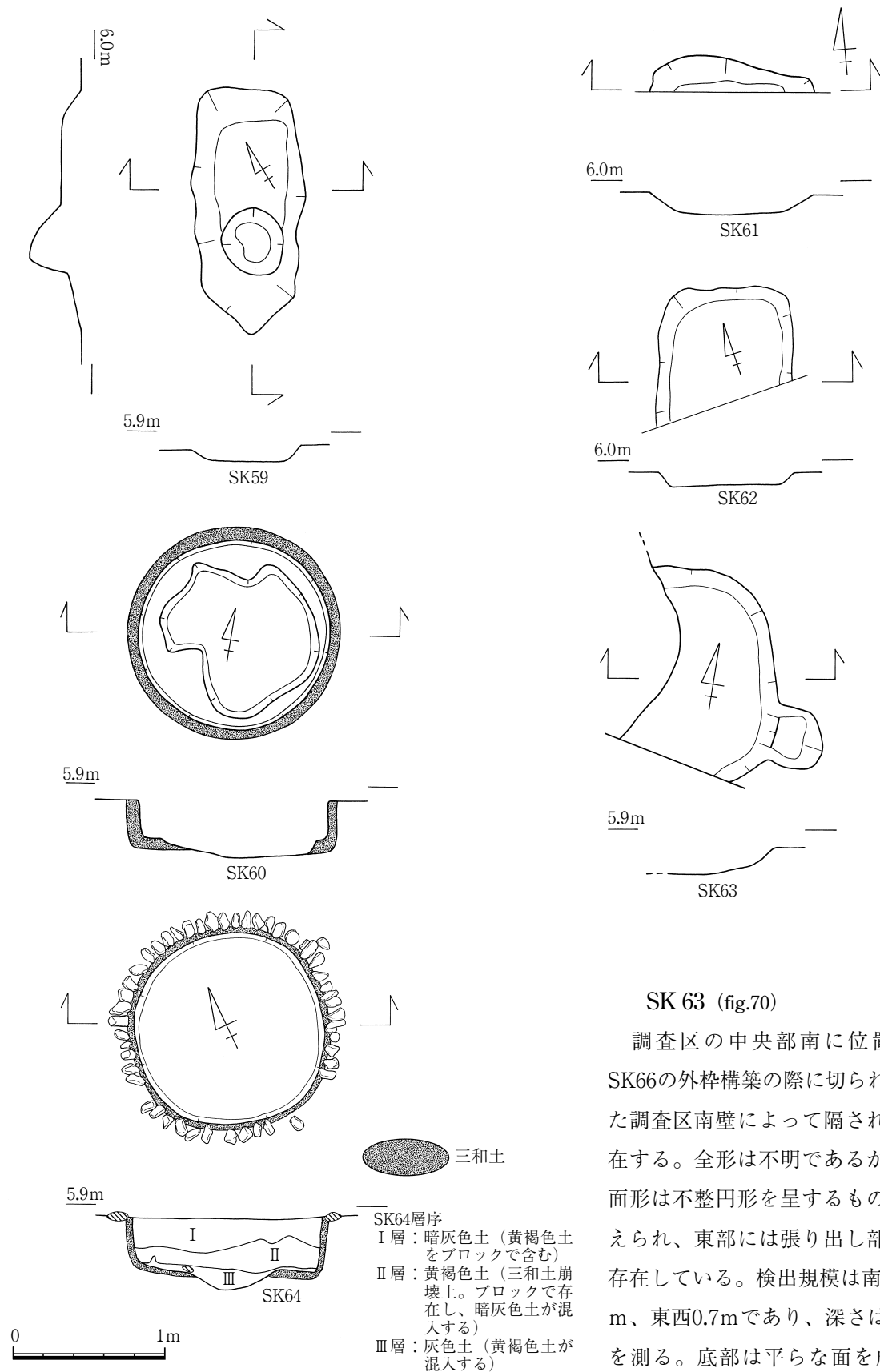


Fig.70 SK59~64平面・セクション・エレベーション図

SK 63 (fig.70)

調査区の中央部南に位置し、SK66の外枠構築の際に切られ、また調査区南壁によって隔されて存在する。全形は不明であるが、平面形は不整円形を呈するものと考えられ、東部には張り出し部分が存在している。検出規模は南北1.4m、東西0.7mであり、深さは18cmを測る。底部は平らな面を成し、

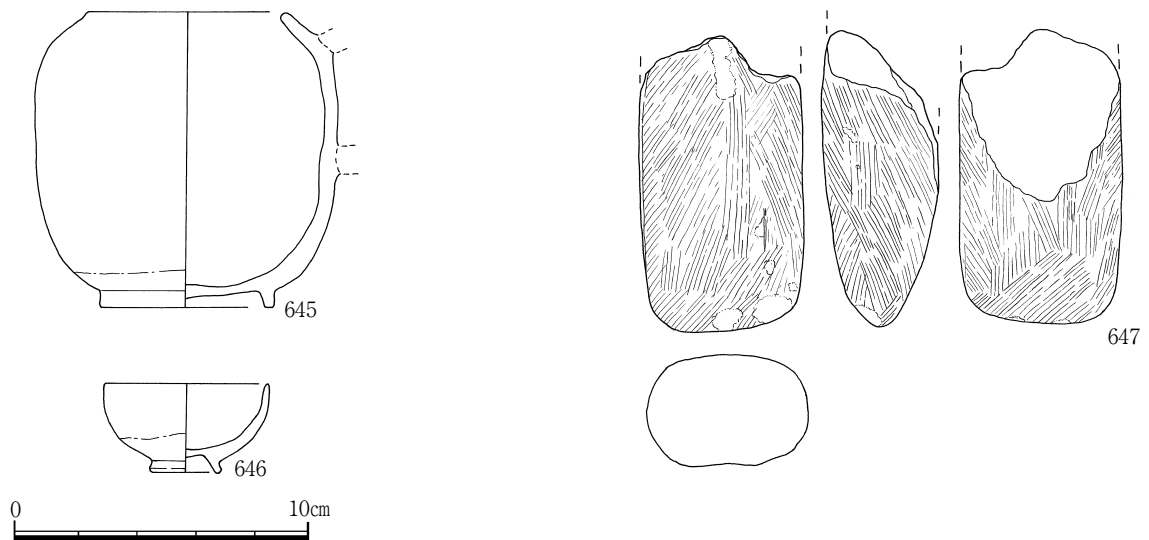


Fig.71 SK64出土遺物実測図

壁は緩やかに立ち上がる。埋土は黒色土（黄色砂粒、灰色土混り）である。

出土遺物は破片であり、陶器1点のみである。（藤方）

SK 64 (fig.70・71)

調査区の東部中央に存在する。平面形は直径1.26mの円形を呈し、深さは36～48cmを測る。底部は中央で深く周囲は平らな面を成し、壁はほぼ直立して立ち上がる。壁及び底部には幅4cm程度の三和土による枠が存在するが、底部中央にはこの枠は存在しない。外周には拳大の円礫による環状の列石が存在する。埋土はⅠ層：暗灰色土、Ⅱ層：黄褐色土、Ⅲ層：灰色土であるが、Ⅱ層以下は黄色土（三和土）をブロックで多く含んでおり、一時期に埋め戻された可能性が強い。

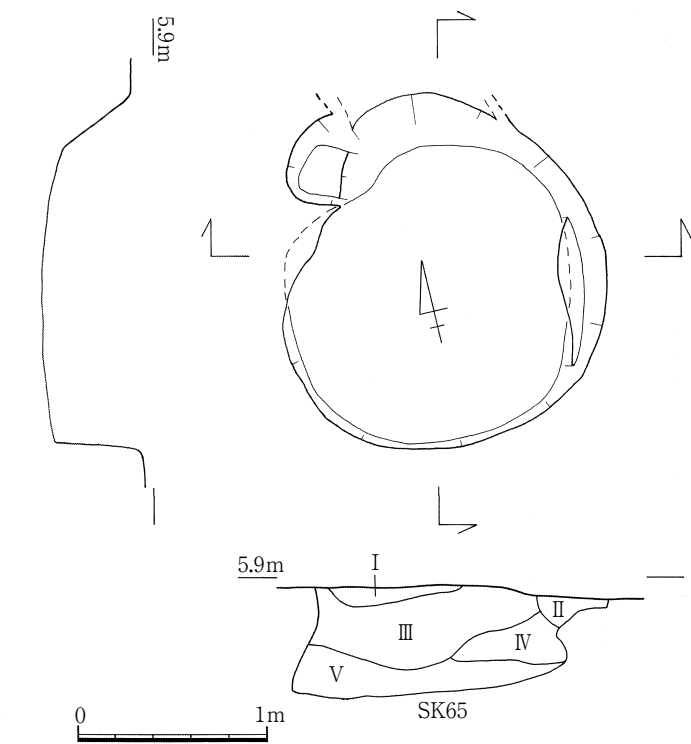
出土遺物として図示できるものは、瀬戸・美濃産の汁次（645）、陶器の小椀（646）であり、破片としては磁器3点、陶器2点、土師器1点が存在している。また、SK64の構築に用いられた列石の中には緑色片岩製の大型蛤刃石斧刃部（647）が存在した。（藤方）

SK 65 (fig.72・73・122)

調査区の東部中央に存在する。平面形は直径約1.8mの不整円形を呈しており、深さは48～52cmを測る。底部は中央部分がやや深く、壁に向かって緩やかに立ち上がる。壁は概ね垂直又は急に立ち上がるが、東壁と西壁一部では壁の上位が迫り出している。埋土はⅠ層：灰色土、Ⅱ層：灰褐色土、Ⅲ層：暗灰褐色土（遺物を含む。）、Ⅳ層：暗灰褐色土、Ⅴ層：灰色土が存在している。Ⅰ層は北部へ延びる帯状の堆積が確認されており、後世の攪乱によるものと考えられる。

出土遺物として図示できるものは土器（648～656）と銅銭（b）である。

648は磁器の染付蓋、649は能茶山産の染付皿、650は土師器の小皿、651は能茶山産の染付鉢、652は磁器の広東茶碗、653は磁器の瓶、654は陶器の播鉢底部、655は泥岩製の仕上げ砥、656は陶



器の甕であり、bは寛永通宝（文銭）である。破片としては磁器8点、陶器21点、土師器1点、板状鉄製品1点が存在する。

SK65は土壙墓と考えられる。（藤方）

SK65層序

- I層：灰色土（締りあり、粘性ややあり）
- II層：灰褐色土（締りあり、粘性なし）
- III層：暗灰褐色土（締りあり、粘性なし、遺物・茶褐色土を含む）
- IV層：暗灰褐色土（締りあり、粘性なし、茶褐色土をブロックで多く含む）
- V層：灰色土（締りあり、粘性あり、シルト質。茶褐色土を少量含む）

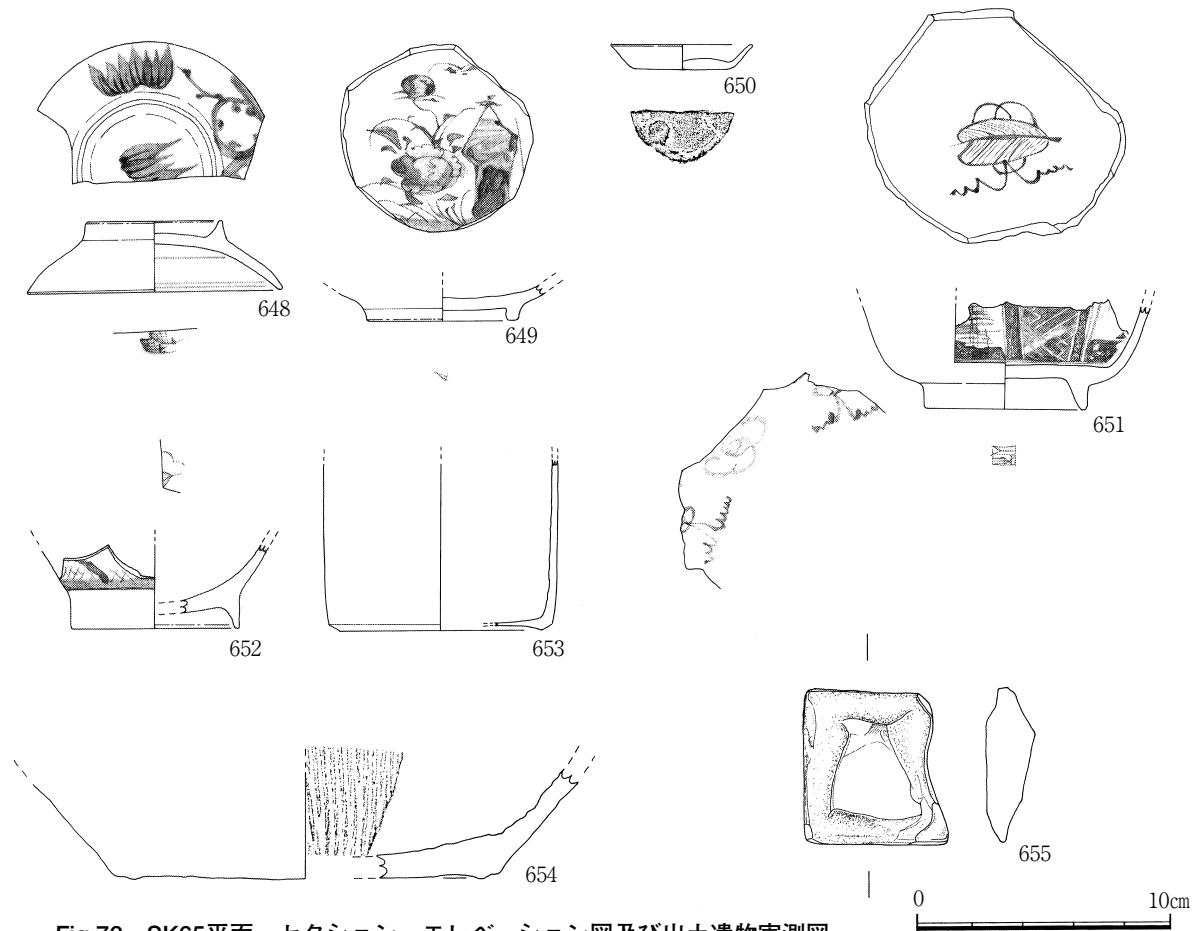


Fig.72 SK65平面・セクション・エレベーション図及び出土遺物実測図

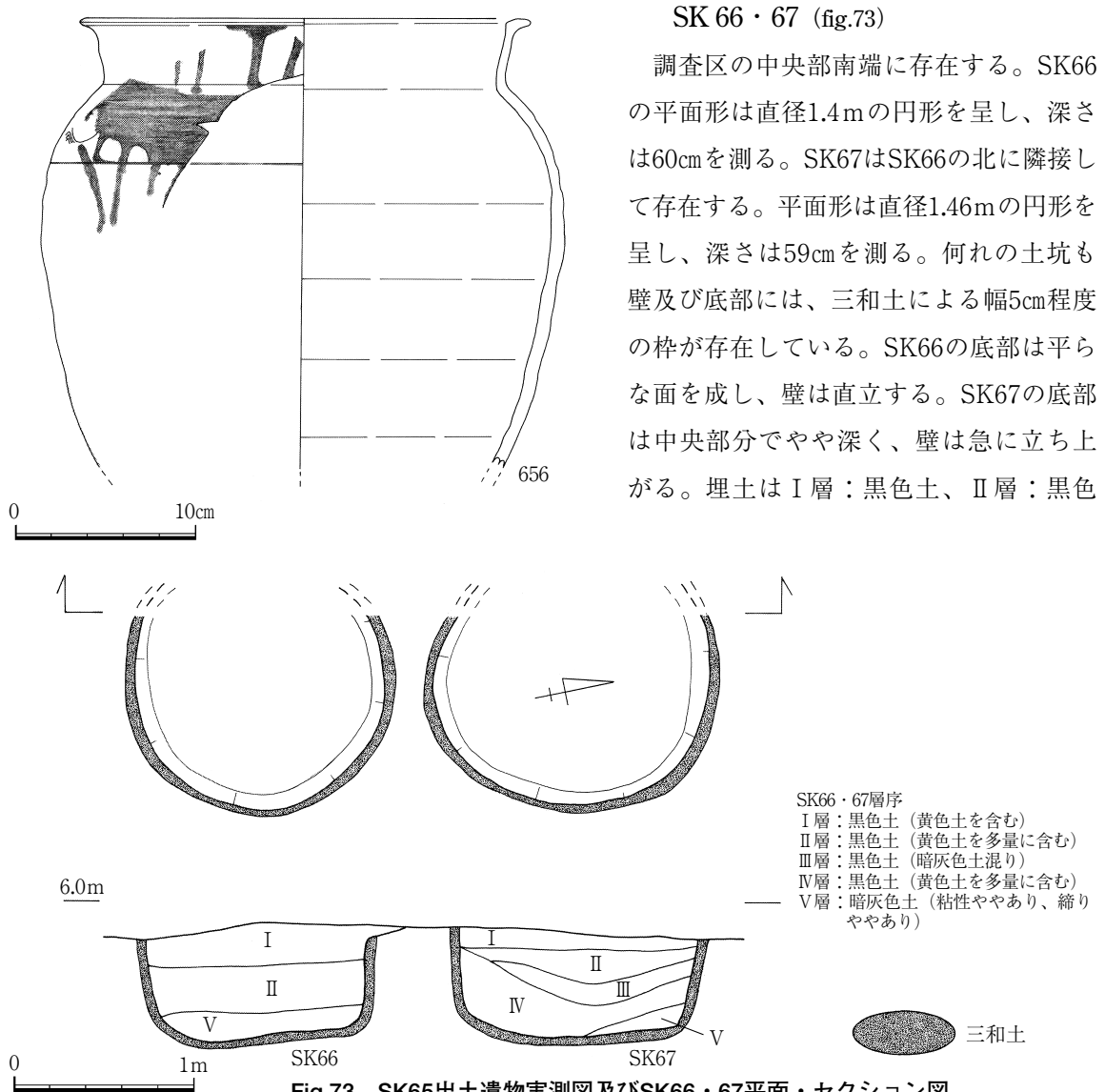


Fig.73 SK65出土遺物実測図及びSK66・67平面・セクション図

土（黄色土を多量に含む）、Ⅲ層：黒色土（暗灰色土混り）、Ⅳ層：黒色土（黄色土を多量に含む）、Ⅴ層：暗灰色土である。SK66と67には共通した埋土が存在することから、同時に埋め戻された可能性が高い。

出土遺物はSK66では皆無である。SK67からは磁器の破片が2点存在しており、このうち1点は肥前産のものであり、高台内に「大明年製」の銘を施したものである。（藤方）

SK 68 (fig.74)

調査区の中央部北に位置する。上部は近世の溝SD67によって切られて存在しており、井戸SE6に接しているが先後関係は不明である。平面形は径約0.95mの不整円形を呈し、深さは27cmを測る。底部は中央でやや深く、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は上部をSD67埋土である茶褐色土によって覆われているが、本来は暗灰色土単純一層と考えられる。

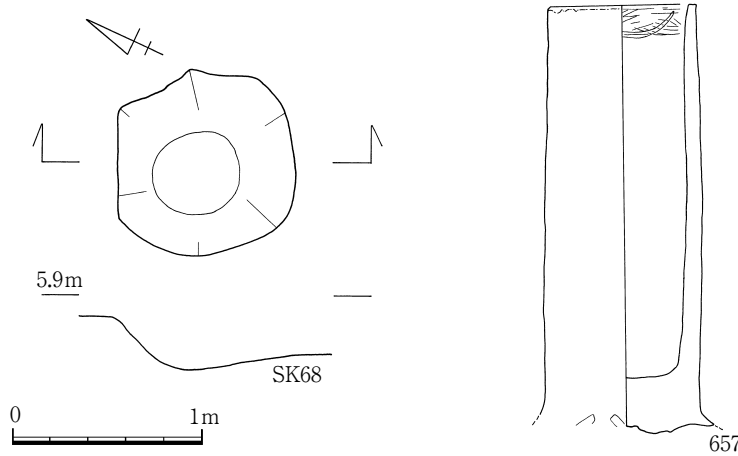


Fig.74 SK68平面・エレベーション図及び出土遺物実測図 (1/3)

長軸方向は $N-17^{\circ}-E$ である。規模は南北2.0m、東西1.23mであり、深さは14~25cmを測る。底部は概ね平らであり、壁は急に立ち上がる。埋土は暗灰色土単純一層である。

出土遺物は磁器破片2点である。(藤方)

SK 70 (fig.75)

調査区の中央部に位置し、弥生時代後期住居址ST 8を切って存在する。平面形は直径1.36mの円形を呈し、深さは36cmを測る。底部は中央でやや深く、壁は急に立ち上がる。壁と底部に幅5cm程度の三和土による枠が存在し、外周には拳大(10~15cm大)の円礫による環状の列石が存在する。これはSK70がST 8の埋土中に構築された為、やや軟弱な土質を考慮してのことと考えられる。

出土遺物は破片であり、磁器1点、陶器2点、土師器2点、平瓦1点が存在している。(藤方)

SK 71 (fig.75・76)

調査区の中央部にあり、SK70の西隣に位置する。平面形は径1.3mの円形プランを呈する。断面形を逆台形に掘削した後、厚さ5~6cmの三和土で固めている。深さは40~50cmを測る。上部の三和土で固めた外縁には拳大の円礫による列石が巡らされている。埋土は暗灰色土で、拳大の円礫を多く含む。土坑の北西部はSE 8を切っており、この井戸が廃棄された後造られたものである。北西の断面にはその枠構築時の補強を目的とする石垣が整然と残っている。

出土遺物は碗、鍋、小皿、徳利などである。碗は染付の広東茶碗(658)、土師器の小皿(660)、陶器の行平鍋(661)・爛徳利(659)が出土している。661は19世紀のものである。その他磁器の細片が3点出土している。(泉)

SK 72 (fig.75)

調査区の中央部に位置し、ST 8の北側を切っている。平面形は径1.22mの円形プランを呈する。断面形を逆台形に掘削した後、厚さ5~6cmの三和土で固めている。検出面から床面までの深さは42

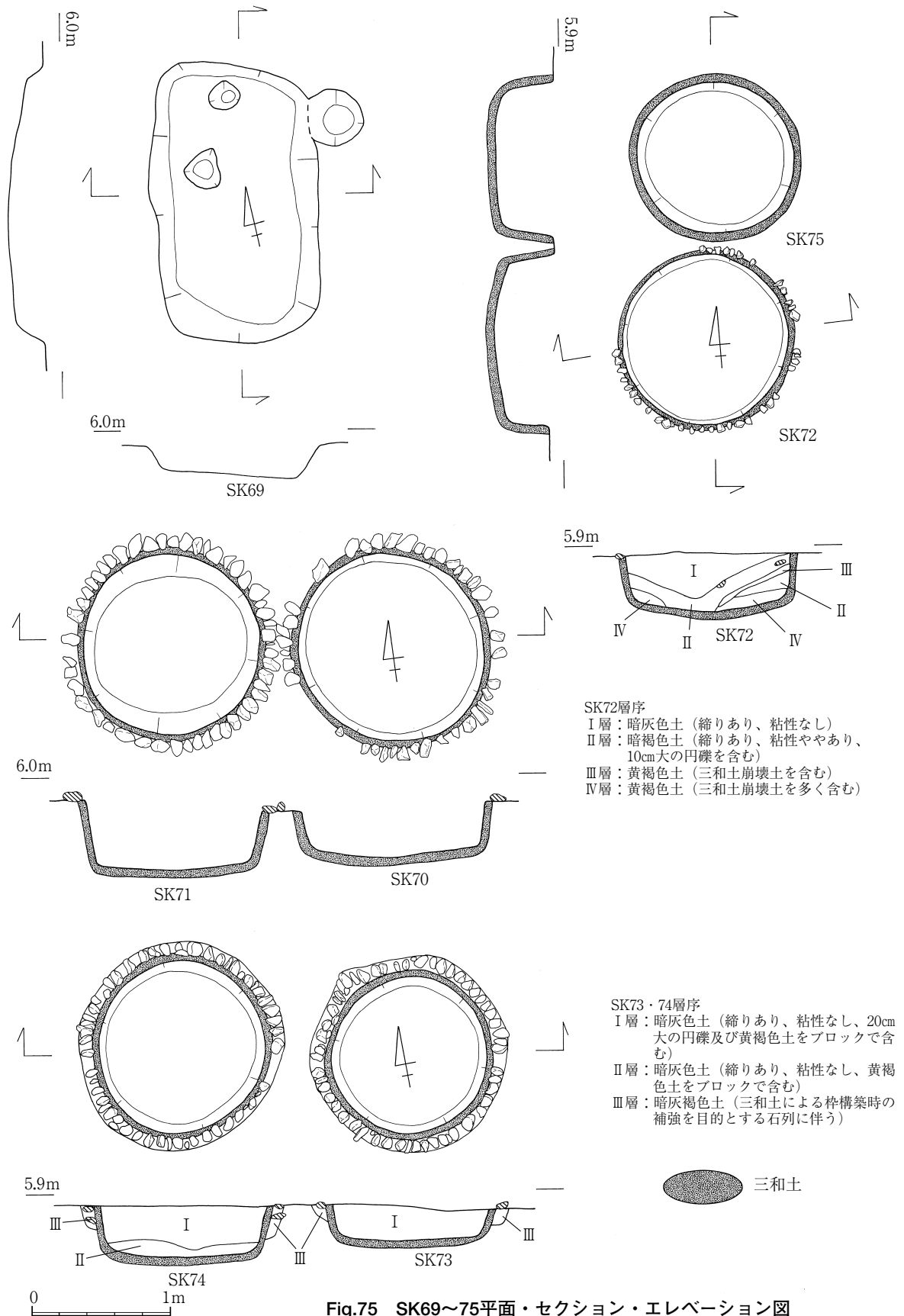


Fig.75 SK69～75平面・セクション・エレベーション図

cmである。上部の外縁は拳大以下の円礫による石列が巡らされている。この円礫は他の土坑より小さめであり、北西側は検出時より石列が確認されていない。埋土はⅠ層：暗灰色土、Ⅱ層：暗褐色土、Ⅲ層：黄褐色土（三和土崩壊土）である。

出土遺物は陶器3点、磁器2点、平瓦2点などであるが、図示できるものはない。（泉）

SK 73 (fig.75・76)

調査区の中央部北側に位置し、SD67を切っている。平面形は径1.12mの円形プランを呈する。断面形を逆台形に掘削した後、厚さ5～7cmの三和土で固めている。検出面から床面までの深さは26cmを測る。上部の周囲は円礫（拳大～人頭大）の石列が巡らされている。埋土はⅠ層：暗灰色土、Ⅱ層：黄褐色土、Ⅲ層：暗灰褐色土である。Ⅱ層は三和土でSK74のⅢ層と同層であり、Ⅲ層は三和土による枠構築時の補強を目的とする石列に伴うもので、SK74のⅣ層と同層である。

出土遺物は陶器の蓋（662）の他、磁器2点、陶器2点、鉄製品1点であるが、図示できたのは1点のみである。（泉）

SK 74 (fig.75・76)

調査区の中央部北側で、SK73の西隣に位置する。SD67を切っている。平面形は径1.12mの円形プランを呈する。断面形を逆台形に掘削した後、厚さ5～7cmの三和土で固めている。検出面から床面までの深さは26cmを測る。上部の外縁は拳大の円礫による石列が巡らされている。埋土はⅠ層：暗灰色土（20cm大の円礫及び黄褐色土をブロックで含む）、Ⅱ層：暗灰色土（黄褐色土をブロックで含む）、Ⅲ層：黄褐色土（三和土）、Ⅳ層：暗灰褐色土（三和土による枠構築時の補強を目的とする石列に伴う。）である。

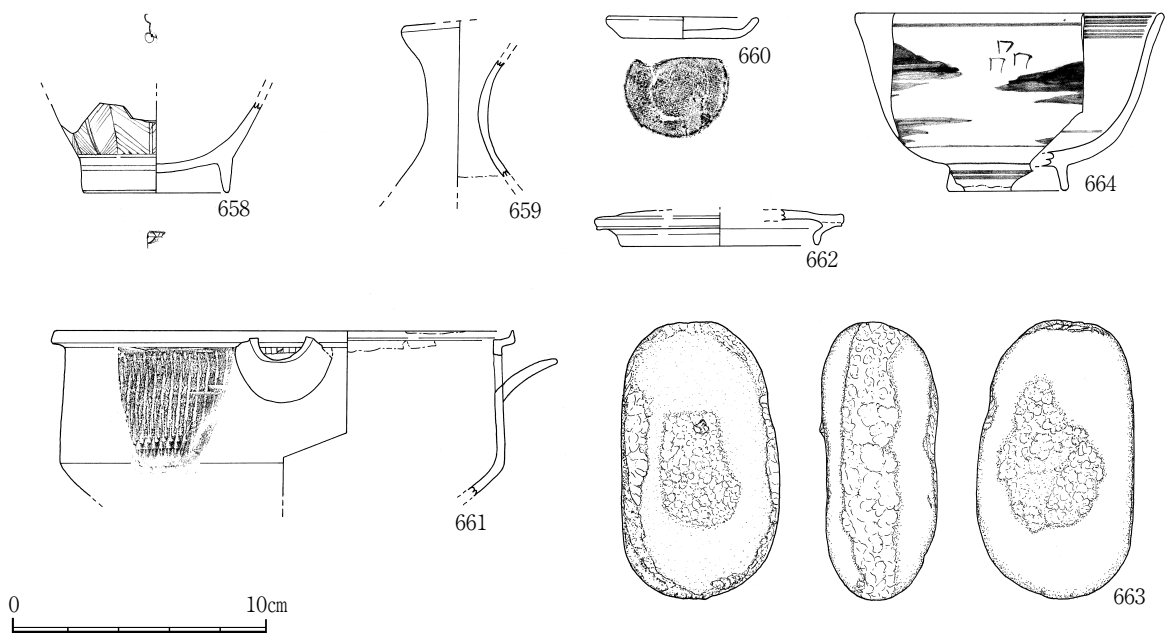


Fig.76 SK71 (658～661) ・73 (662) ・74 (663) ・75 (664) 出土遺物実測図

遺物は砂岩製の敲打具（663）の他、かわらけの口縁部1点、磁器の破片3点出土している。

（泉）

SK 75 (fig.75・76)

調査区の中央部やや南に位置し、SK72の北側に近接する。平面形は径1.12mの円形で、検出面から床面までの深さ42cmを測る。断面は舟底形に掘削した後、厚さ4～5cmの三和土で固めている。埋土は2層に分かれており、Ⅰ層：灰色土（黄褐色土及び10cm大の円礫を含む。）、Ⅱ層：暗灰色土（黄褐色土及び5cm大の円礫を含む。）である。

遺物は染付の碗（664）の他、磁器1点、陶器1点出土しているが、図示できるものは1点のみである。（泉）

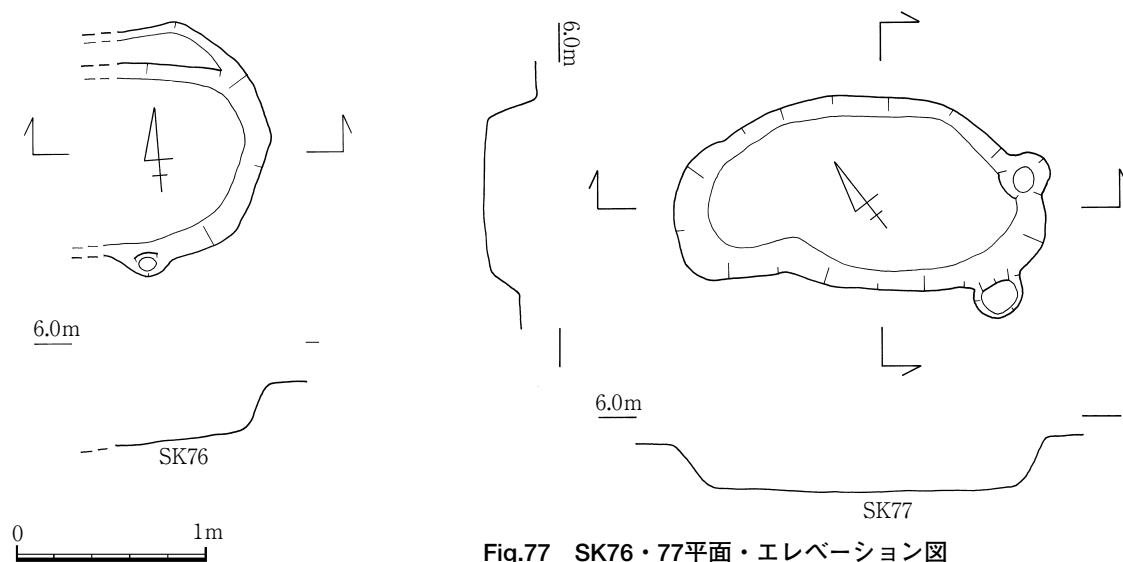


Fig.77 SK76・77平面・エレベーション図

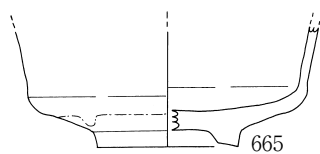


Fig.78 SK76出土遺物実測図 (1/3)

SK 76 (fig.77・78)

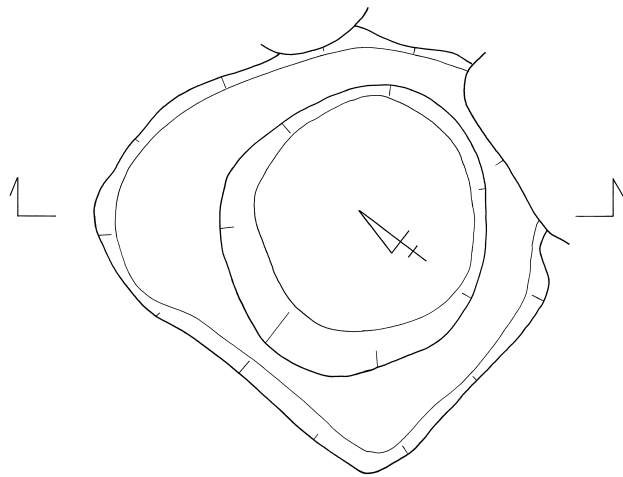
調査区の中央部で、SX9の北側に位置する。西側は後世における区画整理のための攪乱を受けている。平面形は長軸1.35m、短軸0.92mの不整形で、深さ35cmを測る。断面は舟底形に掘削した後、厚さ4～5cmの三和土で固めている。埋土は暗灰色土で、黄褐色土及び5cm大の円礫を含むものである。

遺物は陶器の火入れ（665）のみである。665は17世紀前半のものである。

（泉）

SK 78 (fig.79)

調査区の中央部やや北側に位置し、東側はSK69に切られている。平面形は長軸2.15m、短軸2.04mの不整形を呈し、長軸方向はN-0°-Wの南北方向である。断面形は概ね舟底形で、北側は緩やかに立ち上がり、深さは56cmを測る。埋土は7層に分かれており、Ⅰ層：暗灰色土（茶褐色土が混入し、10cm大の円礫が見られる。）Ⅱ層：黄灰色土、Ⅲ層：灰褐色土（茶褐色土を混入する。）Ⅳ層：灰色



SK78層序

- I層：暗灰色土（締りあり、粘性なし、茶褐色土、10cm大の円礫が含まれる）
- II層：黄灰色土（締りあり、粘性なし）
- III層：灰褐色土（締りあり、粘性なし、茶褐色土混入）
- IV層：灰色土（III層にブロック状に存在する。生物擾乱）
- V層：灰褐色土（締りややあり、粘性なし、円礫を含まない）
- VI層：黄灰色砂層（10cm大の円礫を含む）
- VII層：黒色土（締りややあり、粘性なし）

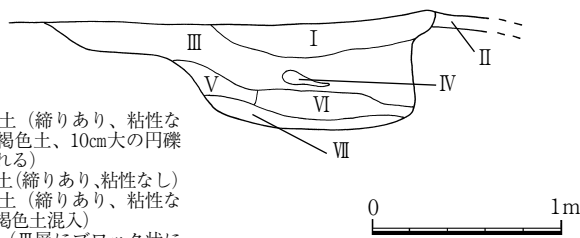


Fig.79 SK78平面・セクション図

土（III層にブロックで存する。生物擾乱あり）、V層：灰褐色土（円礫を含まない）、VI層：黄灰色砂（10cm大の円礫を含む）、VII層：黒色土である。このうちIII層が全体の3分の1を占めている。

遺物は磁器1点、陶器1点の破片のみで、図示できるものはない。（泉）

SK 79 (fig.80・81)

調査区の中央部よりやや東側にあり、SK77の西南隣に位置する。平面形は径2.24mの円形を呈する。断面形は逆台形で、深さ40cmを測る。埋土はI層：濃茶色粘質土（黄褐色土がブロック状に混入する）、II層：黒褐色粘質土、III層：黒褐色粘質土

（黄褐色土が混入し、堅緻。）で、I層とII層が全体の90%を占める。

遺物は西側中央部の床面より砂岩製の石臼（666）が出土しており、同時に西南部の床面より円礫（拳大～人頭大）が集中して検出されている。円礫や石臼以外の出土遺物はないが、円礫が意識的に投げ込まれたSK79は土壙墓であると考えられる。（泉）

SK 80 (fig.80・81)

調査区の東側南部に位置し、ST 7を切っている。平面形は径1.3mの円形で、深さ56cmを測る。断面を逆台形に掘削した後、5～6cmの三和土で固めている。東側はST 7と接するため、三和土による枠構築時に補強の目的として石列を使用している。なお検出面も全面に円礫が確認された。

遺物は陶器が出土しており、椀（667・668）、甕（669）の他、陶器の破片が4点出土している。667は17世紀のもので、肥前産の可能性がある。668は16世紀末～17世紀初めのものである。その他、須恵器や弥生土器の混入も見られる。（泉）

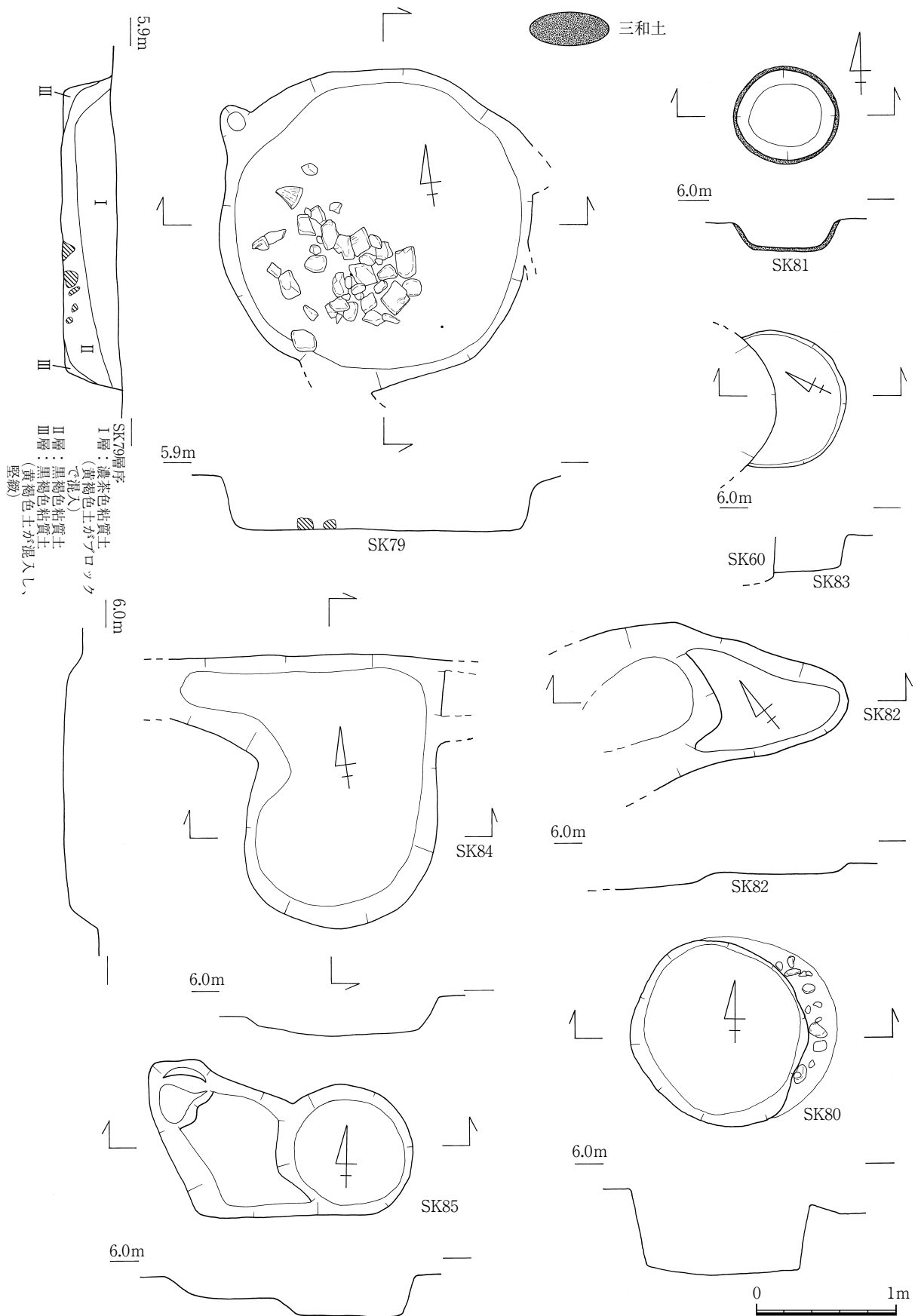


Fig.80 SK79~85平面・セクション・エレベーション図

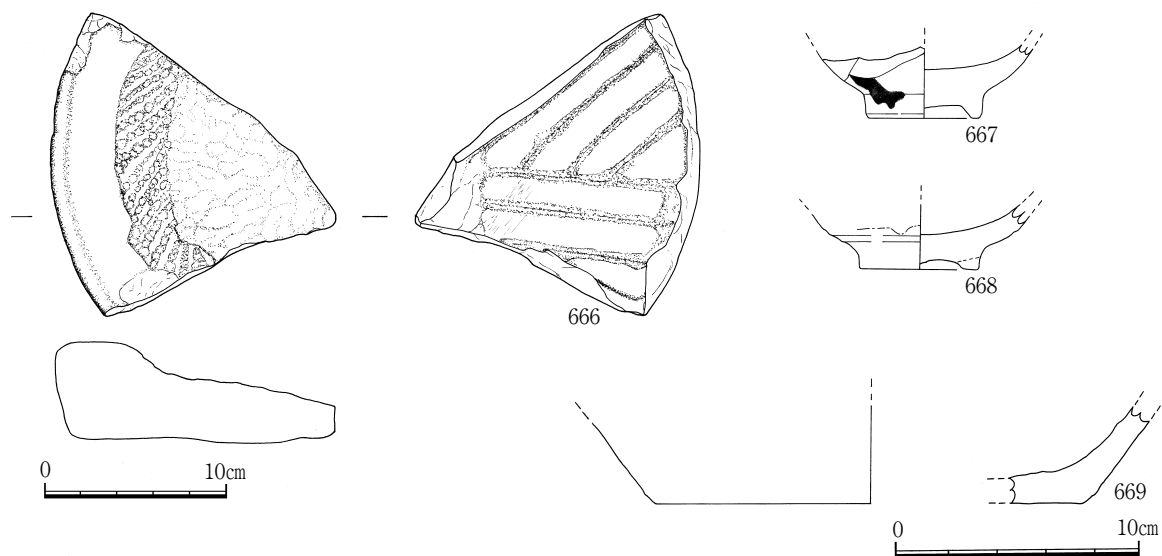


Fig.81 SK79 (666)・80 (667~669) 出土遺物実測図 (666は1/4)

SK 81 (fig.80)

調査区やや中央部の北側にあり、SK78の北隣に位置する。平面形は長軸0.7m、短軸0.64mの楕円形を呈する。主軸方向は $N-67^{\circ}-W$ の東西方向である。埋土は暗灰色土で、断面を逆台形に掘削した後3cm程の三和土で固めている。

遺物は磁器の破片1点のみで、図示するものはない。(泉)

SK 82 (fig.80)

調査区の中央部南側で、SK67の北側に位置する。西側は後世の攪乱で残存が悪く、平面形や規模ははっきりしないが、長軸1.72m以上、短軸1.06mの長楕円形と考えられる。主軸方向は $N-53^{\circ}-W$ の東西方向である。南東部はテラス状になっており、検出面からの深さは10cmと浅く、反対側は34cmと深くなっている。断面形はなだらかな舟底形を呈している。埋土は黒色土(黄色砂粒・灰色土混)である。

遺物は磁器の破片1点、陶器の破片1点のみであり、図示するものはない。(泉)

SK 83 (fig.80)

調査区東半分の中央部にあり、SK48の西隣に位置する。北西側はSK60に切られているが、平面形は径0.98mの円形と考えられる。深さは26cmを測り、断面形は逆台形を呈すると考えられる。埋土は暗灰色土(黒色土・黄褐色土混)である。周囲を三和土で固めてはいないが三和土の土坑によく似ている。

遺物は磁器1点、土師器2点、陶器1点、平瓦1点が出土しているが、図示できるものはない。

(泉)

SK 85 (fig.80)

調査区の中央部よりやや東に位置する。南東端はSK86と接する。平面形は長軸1.76m、短軸0.89mの不整形を呈している。断面形は東側が逆台形で、西側は舟底形のように緩やかに立ち上がる。深さは西側が14cm、東側が30cmである。埋土は暗灰色土であり、上層では円礫も検出されている。なお、主軸方向は $N-89^{\circ}-W$ の東西方向である。

遺物は陶器の破片1点、平瓦4点、丸瓦1点、釘2点が出土しているが、図示できるものはない。また、弥生土器の細片も混入している。(泉)

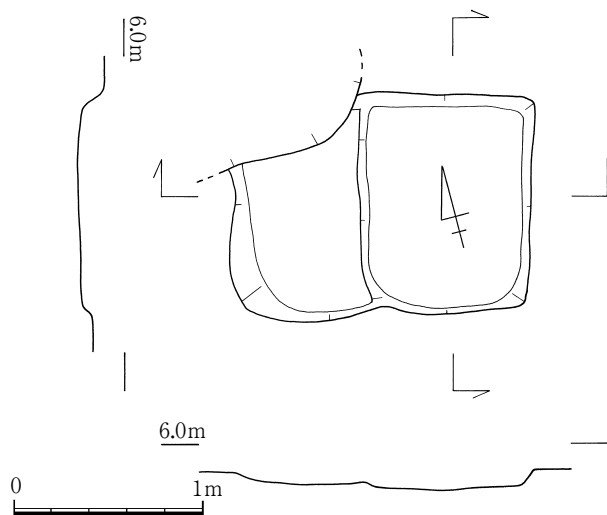


Fig.82 SK86平面・エレベーション図

SK 86 (fig.82)

調査区の中央部よりやや東側に位置する。北西側はSK85に切られている。平面形は長軸1.56m、短軸1.16mの隅丸長方形を呈する。埋土は東西で分かれており、東は暗茶色土で、西は黒色土(黄色砂粒・灰色土混)である。深さも東西で違い、東側は12cm、西側は8cmと東が深くなっている。なお、断面形は緩やかな舟底形になっている。主軸方向は $N-75^{\circ}-W$ で、東西方向である。

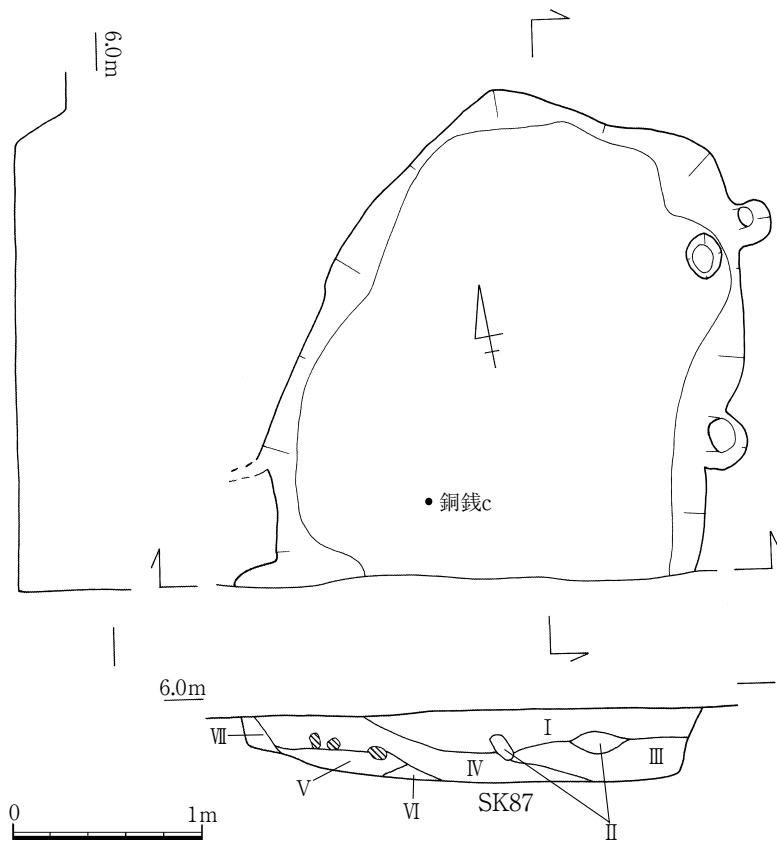
遺物は磁器の破片が1点、陶器の破片が1点、平瓦が1点出土しているが、図示できるものはない。(泉)

SK 87 (fig.83~85・122)

調査区やや中央部、南端に位置する。南側は調査区外であり、平面は長軸2.58m、短軸2.24mを測る不整形プランを有する。主軸方向は $N-12^{\circ}-E$ で、深さは28~40cmである。埋土は7層に分かれており、Ⅰ層：暗灰褐色土(黄色砂粒あり)、Ⅱ層：茶褐色土(ブロックで存在する。)、Ⅲ層：暗灰色土(瓦片や5~15cm大の円礫を多量に含む。)、Ⅳ層：暗灰色土(黄灰色土が多く混入する。)、Ⅴ層：暗灰色土(磁器片を含み、茶褐色土を混入する。)、Ⅵ層：茶褐色土(ブロックで存在する。)、Ⅶ層：黒色土である。断面形は概ね舟底形である。また、東壁で検出した幾つかのピットはSK87以前のものか、後世のものでこの土坑とは関係がないと思われる。

出土遺物は多量で、大きく分類すると磁器、陶器、土師器、鉄製品、古銭に分けられる。

出土している器種を磁器で分類すると、碗、鉢、皿、蓋、壺、瓶、猪口になる。碗は染付(683)・広東茶碗(682)、小型碗(678)、染付の小型碗(680)が出土している。皿は型打ちの菊皿(672)、染付の小皿(673)、型打ちの紅皿(670・671)などである。670は19世紀で、671は18世紀後半~19世紀初めのものである。その他皿は染付2点出土している。蓋は染付(684)1点のみであ



る。鉢は多角形鉢1点、口縁部他細片2点出土しているが図示できるものはない。猪口は677や染付の蕎麦猪口(679)で、瓶は染付の土瓶(685)が出土している。そ

SK87層序

- I層：暗灰褐色土（締りあり、粘性なし、瓦・陶磁器破片を含む。黄色砂粒が見られる。）
- II層：茶褐色土（締り強、粘性なし）
- III層：暗灰色土（締りややあり、粘性なし、瓦片や5~15cmの円礫を多量に含む。）
- IV層：暗灰色土（締りややあり、粘性なし、黄色土が多く混入。）
- V層：暗灰色土（締りややあり、粘性なし、磁器片を含み茶褐色土を混入する。）
- VI層：茶褐色土（締りあり、粘性あり）
- VII層：黒色土（締りあり、粘性なし）

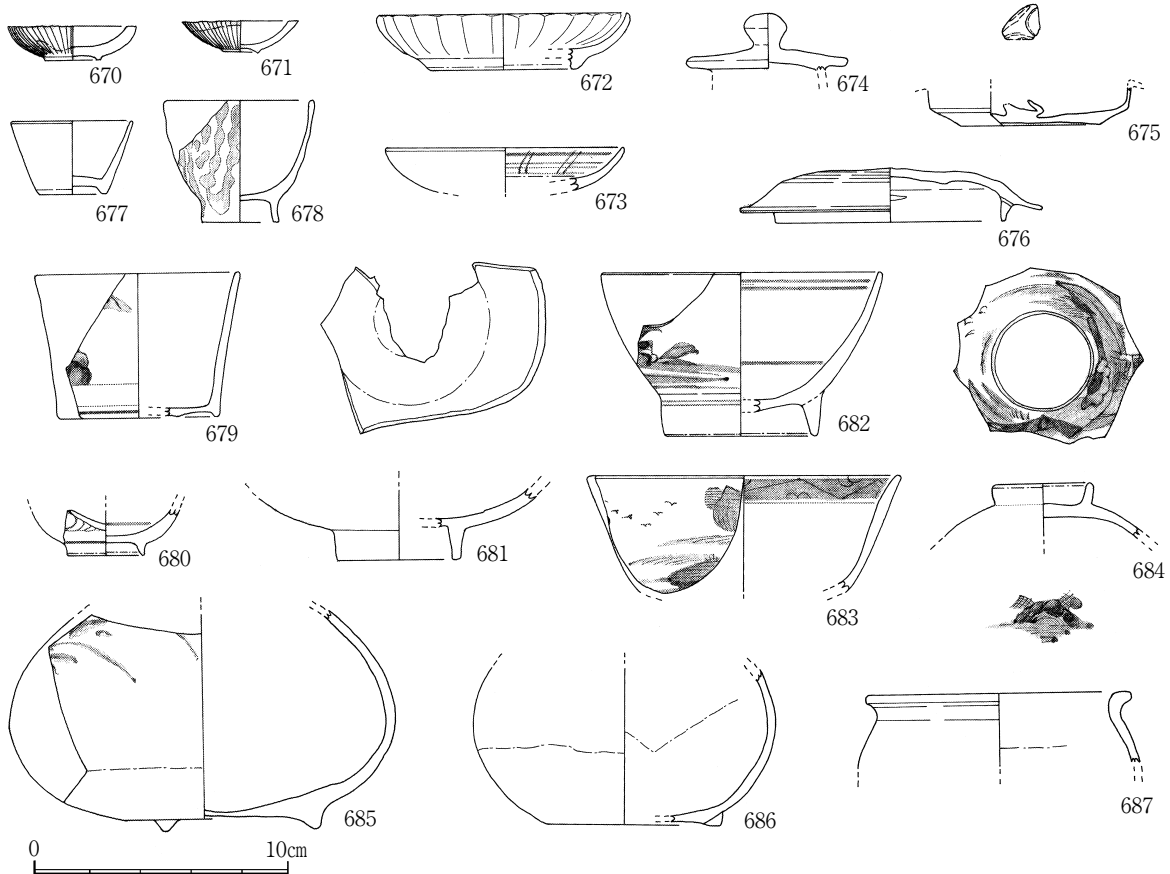


Fig.83 SK87平面・セクション・エレベーション・遺物出土状況図及び出土遺物実測図 その1

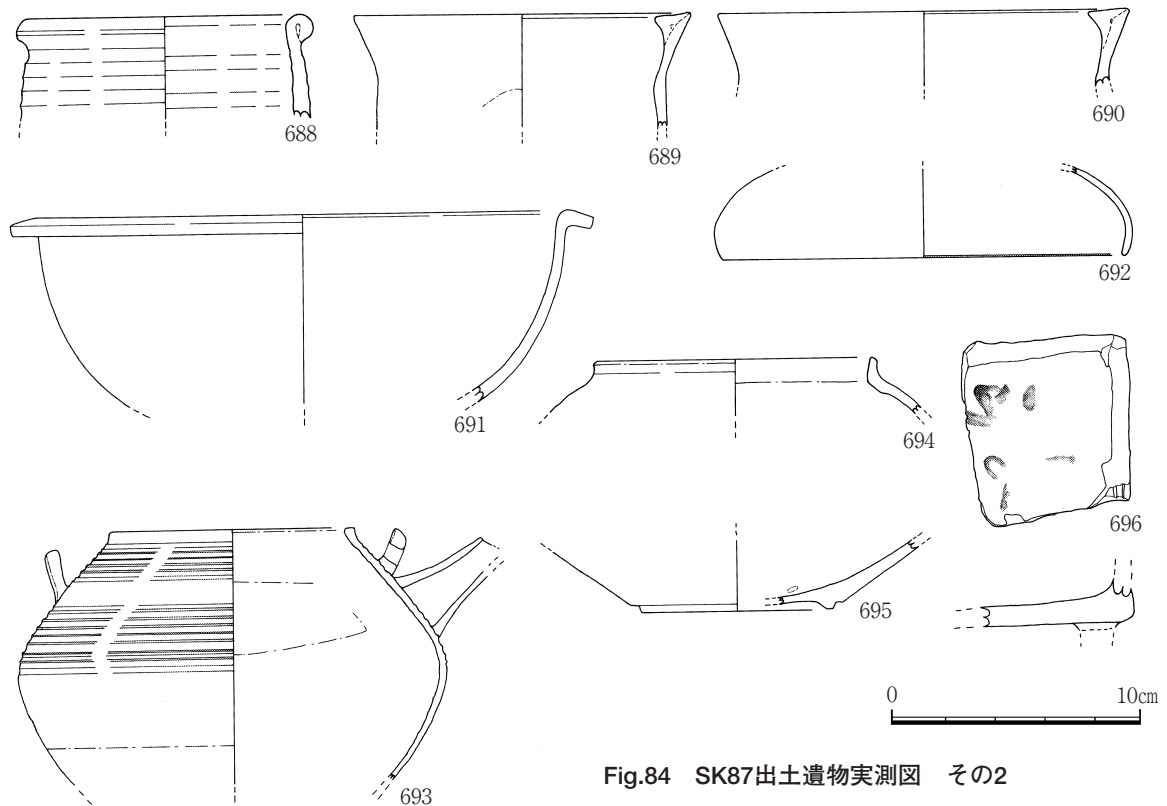


Fig.84 SK87出土遺物実測図 その2

の他長頸壺の口縁部が1点、器種は断定できないが染付の細片6点と磁器細片が11点出土している。

陶器で出土している器種は蓋、皿、壺、土瓶、鍋、播鉢、甕などである。蓋は674・675・676の他、細片1点出土している。675は落し蓋の可能性が高い。皿は底部(681)のみ図示でき、681は蛇の目状釉剥ぎの見込みを持つもので、その他皿の破片が3点出土している。壺は口縁部が2点(687・694)出土しており、どちらも小型壺である。瓶は足付きの底部(686)と土瓶は4点出土して

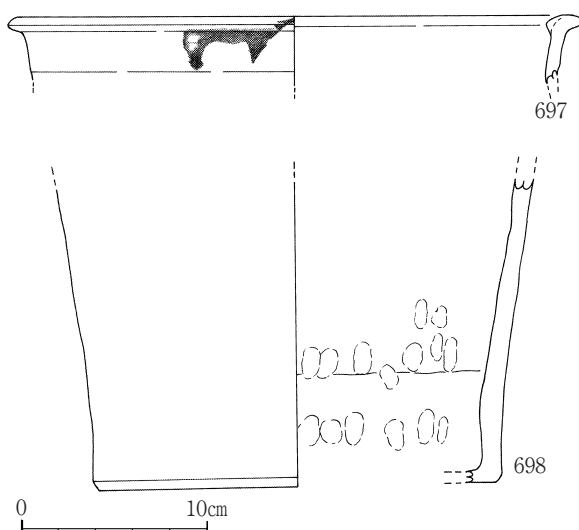


Fig.85 SK87出土遺物実測図 その3

しており、図示した土瓶(693)には注口部と把手の取付部があり、19世紀のものである。鉢は底部(695)、植木鉢と考えられる口縁部(691)の他、播鉢も2点出土している。甕は6点出土のうち、口縁部4点を図示(688・689・690・697)している。鍋は図示していないが3点出土している。その他陶器の破片が19点出土している。

土師器の器種は火鉢、焜炉、蓋、焙烙、小皿である。698は焜炉の底部であり、火鉢は内面墨書の見られる696の他、破片4点出土している。蓋は火消し壺の蓋(692)が出土している。また、焙烙の破片4点と小皿の破

片が12点出土しているが図示できるものはない。その他土師器の細片が2点、かわらけの細片が7点と見込部分に老男女と松の押し型絵があるもの（かわらけ）も1点出土している。

なお、瓦器の焙烙1点、釘11点、鉄製品1点、古銭（銅銭）2枚も出土している。銅銭（c・d）は寛永通宝で、字体から判読すると初鑄造1697年の新寛永通宝である。

これらの遺物や遺構から判断すると、SK87は19世紀代の近世土墳墓である。（泉）

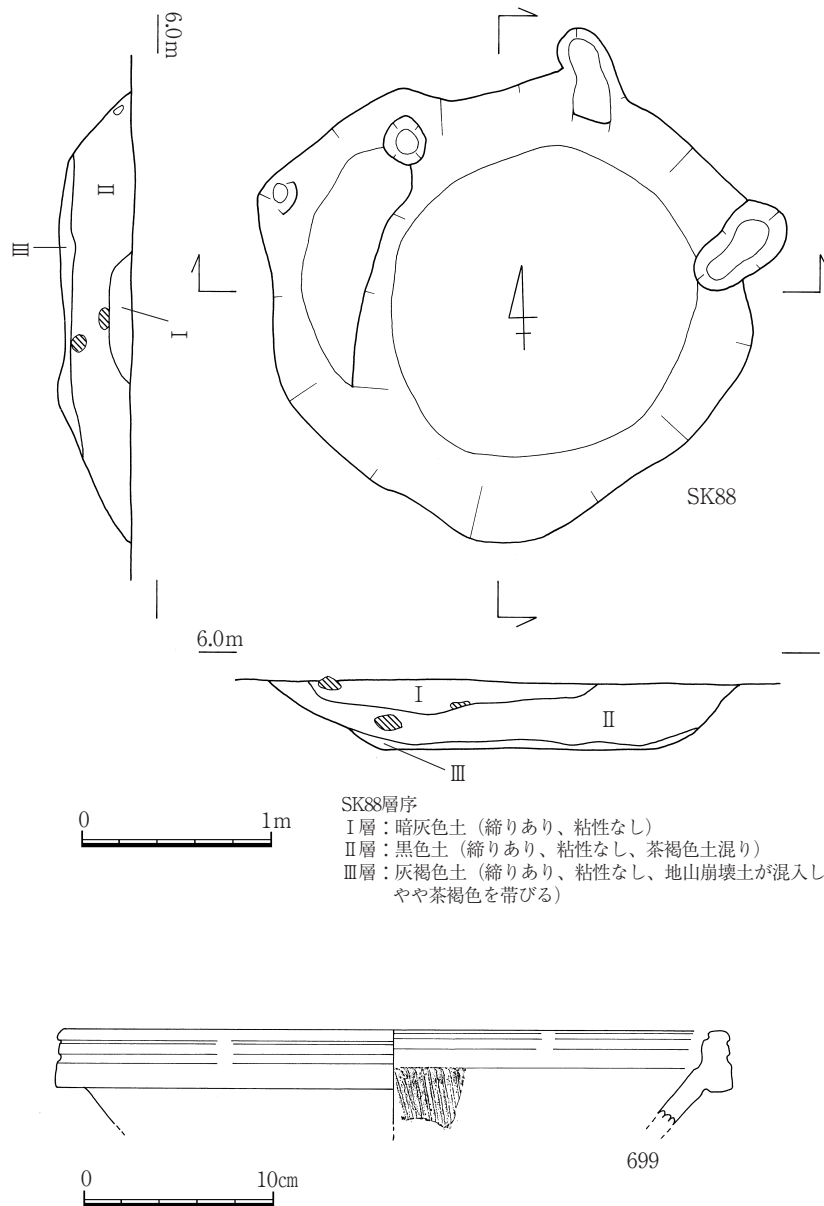
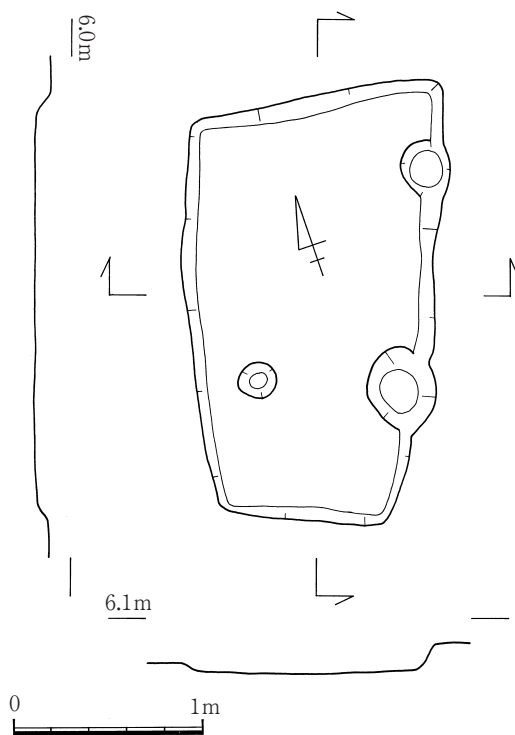


Fig.86 SK88平面・セクション図及び出土遺物実測図

SK 88 (fig.86)

調査区やや中央部南側で、SK87の北西隣に位置する。平面形は長軸2.48m、短軸2.38mの楕円形に近い不整形を呈する。主軸方向はほぼ北方向で、深さは38cmを測る。断面形は舟底形を呈している。埋土は3層に分かれており、I層：暗灰色土、II層：黒色土（茶褐色土混）、III層：灰褐色土である。主層はII層であり、I層は上部中央のみで、III層は床上4~8cm程度の堆積である。なお、I層とII層の埋土中には円礫も混入しており、III層は地山崩壊土が混入し、やや茶褐色土を帯びている。また、東壁で1個のピットと北側で1個のピットを検出したが、SK88以前のものであると思われる。



出土遺物で図示できるのは陶器の挿鉢(699) 1点のみである。その他陶器2点、竹のような木製品が1点出土している。遺物や遺構からSK88は土壙墓の可能性が高い。(泉)

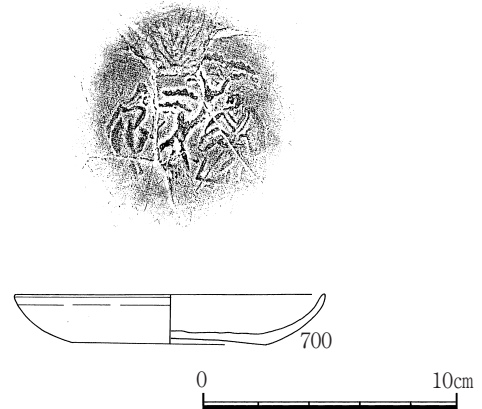


Fig.87 SK89平面・エレベーション図及び出土遺物実測図

SK 89 (fig.87)

調査区の中央よりやや東側に位置し、SK69・SK85・SK86と近隣する。平面形は長軸2.48m、短軸1.32mの長方形に近い台形を呈する。主軸方向はN-17°-Eの南北方向である。深さは8~14cmを測る。埋土は暗灰色土で、単純一層である。また、東壁で2個のピットと西側で1個のピットを検出したが、SK89を切っており、後世のものであると思われる。

遺物はかわらけ1点のみで、老男女と松の押し型絵の皿(700)が完形で出土している。遺物は少ないが、埋土も考慮して近世のものとは判断した。(泉)

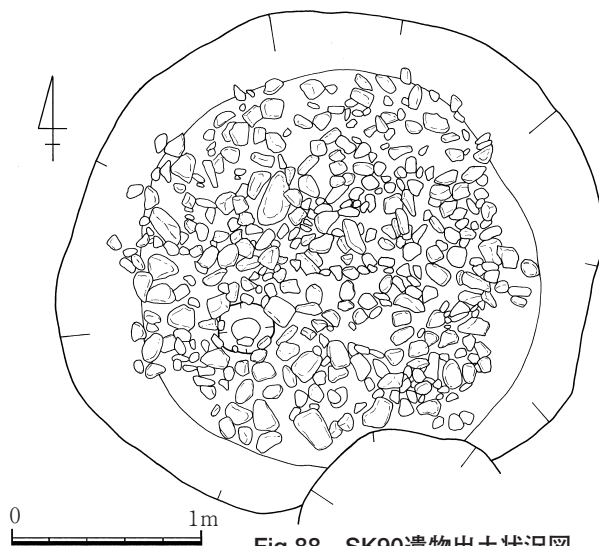


Fig.88 SK90遺物出土状況図

SK 90 (fig.88・89)

調査区中央やや南寄りに位置しており、南側はSK91に切られている。平面形は長径2.88m、短径2.62mを測る円形に近い楕円形である。断面形はほぼ逆台形を呈し、床面は台状に少し盛り上がり、その周囲は周溝のように凹んでいる。台状に盛り上がった部分は径1.58mの円形を呈している。検出面から床面までの深さは20~

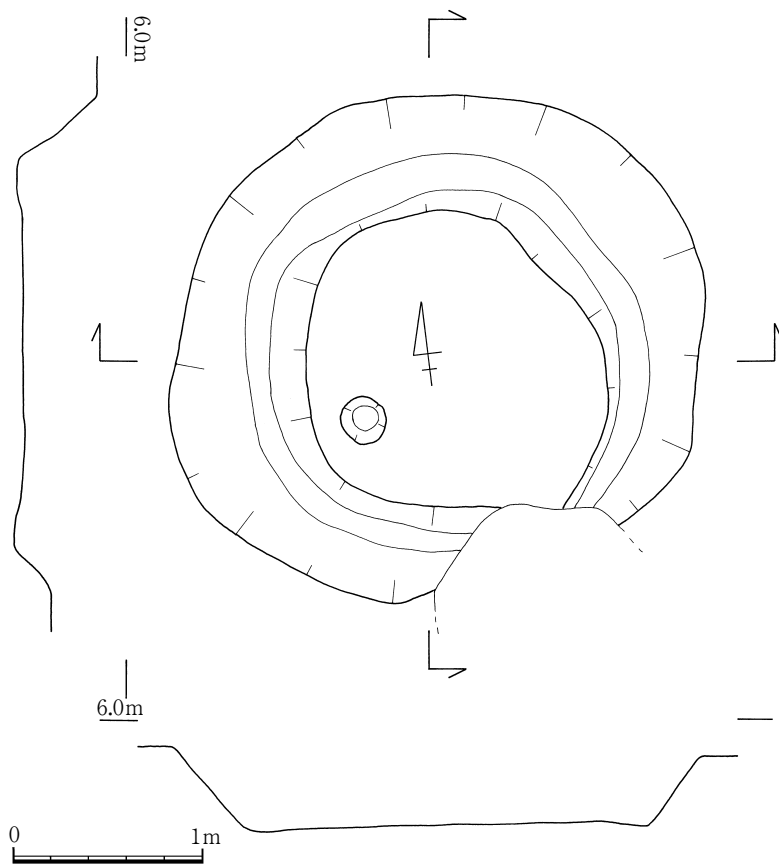


Fig.89 SK90平面・エレベーション図

42cmを測り、主軸方向は $N-85^{\circ}-E$ である。埋土は上層：黒色土（黄色砂粒・灰色土混）、中層以下は黒色土（茶褐色土を少量含む。）である。床面からは大小さまざまな円礫が多量に検出された。この円礫は床全面にあり、この土坑を廃棄する際、意図的に投げ込まれた可能性が高い。また床面の周りには深さ3.6~4.6cmの溝のような凹みがある。

南西コーナー部にあるピットは径24cm、

深さ15cmであるが、この土坑に関係あるかどうか明確にできない。SK90より後世に営まれた可能性が高い。

遺物は磁器の破片1点、陶器の破片1点、平瓦1点出土しているが、図示できるものはない。

床底部が台状に少し盛り上がったSK90は近世墓の可能性もある。（泉）

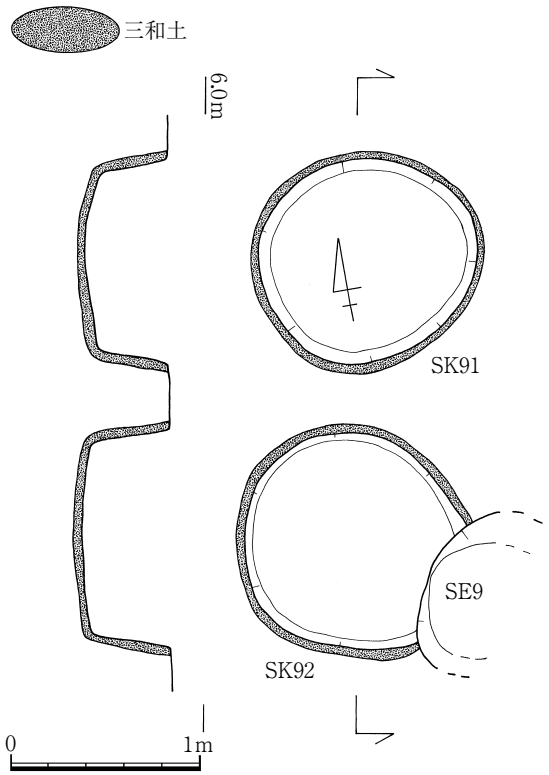


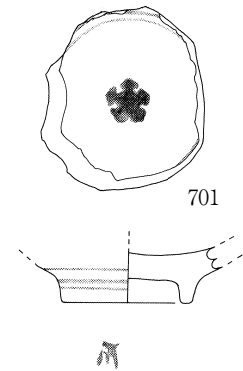
Fig.90 SK91・92平面・エレベーション図

SK 91 (fig.90・91)

調査区のやや中央部南寄り、SK92の北側に位置する。平面形は径1.08mの円形を呈する。上層の埋土は暗灰色土で、中層以下は灰色土（黒色・黄色土混）である。断面を舟底形に掘削した後、4~5cmの三和土で固めている。上部の外縁には補強を目的とした石列

が巡っている。

出土遺物で図示できたのは磁器の染付碗（701）1点のみである。701は肥前系の碗で、18世紀後半に属するものである。この他、磁器の破片が1点出土している。（泉）



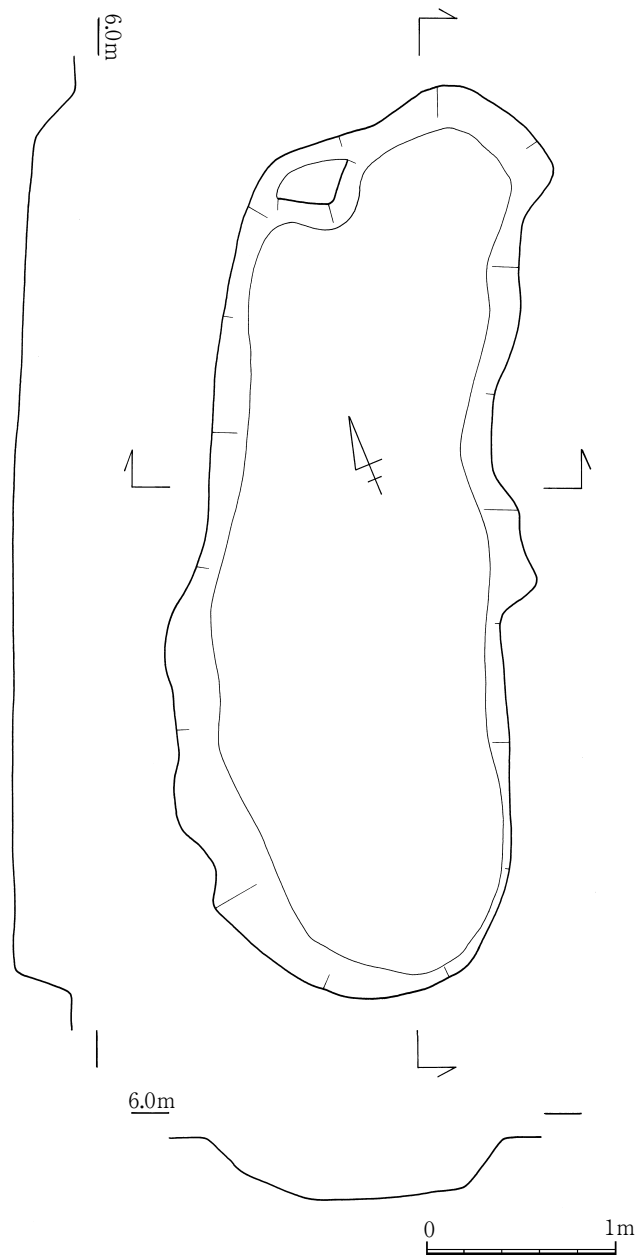
SK 92 (fig.90)

調査区やや中央部南側で、SK91の南隣、SK88の北隣に位置する。土坑の南東部はSE 9に切られている。断面埋土から判断すると、この土坑が機能した後、井戸を掘削したものと考えられる。

埋土は全体が灰色土（黒色土・黄色土混）で、中層は円礫が多く、下層は三和土が多い。平面形は1.1mの円形を呈し、深さは50cmを測る。断面を逆台形に掘削した後、4~5cmの三和土で固めている。

遺物は確認できなかったが、埋土から近世のものと判断した。（泉）

Fig.91 SK91出土遺物実測図(1/3)



SK 93 (fig.92・93)

調査区やや中央部で、ST8の東隣に位置する。平面形は長軸4.76m、短軸1.5mと大規模で、長楕円形を呈している。主軸方向はN-22°-Eであり、深さは22~32cmを測る。埋土は北側が暗灰色土で、南側は灰色土（黒色土・黄色土混）である。断面形は舟底形で、両端は緩やかに立ち上がる。

出土遺物は多量で、大きく分類すると、磁器、陶器、土師器、木器、鉄製品に分けられる。

出土の磁器を器種で分けると、皿、碗、徳利、猪口などである。皿は染付（702）と色絵付（710）が出土している。702は輪花の小皿であり、710は19世紀中頃のものである。その他皿は盤も含

Fig.92 SK93平面・エレベーション図

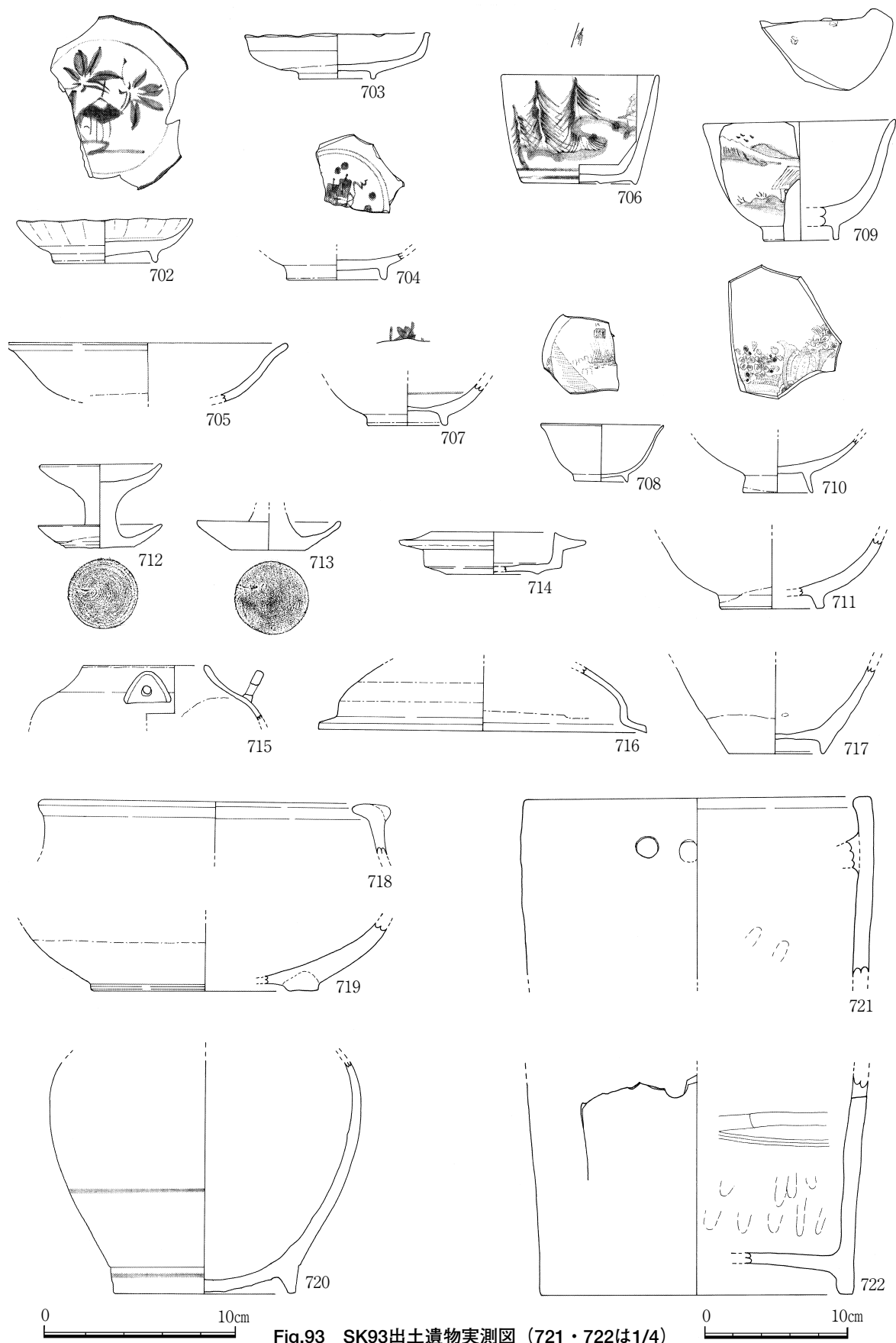


Fig.93 SK93出土遺物実測図 (721・722は1/4)

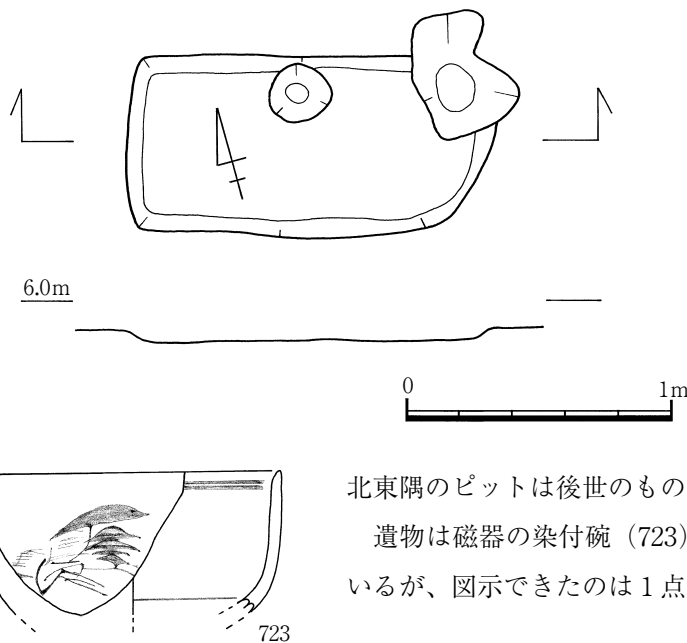
めた破片が3点出土している。碗は染付（704・707・709）と他2点、猪口は染付の蕎麦猪口（706）、色絵付の猪口（708）が出土しており、708は19世紀中頃のものである。徳利は染付（720）のみである。その他、磁器の破片は16点確認されている。

陶器で出土した器種は主に、蓋、皿、椀、鉢、甕、急須である。蓋は714・716で、714は落し蓋の可能性があり、716は被せ蓋で19世紀のものである。皿は小皿と台付灯明皿が出土している。小皿は705と型打ちの輪花（703）で、台付灯明皿は712・713である。椀は711・717の他、1点出土している。鉢は底部（719）が1点出土しており、急須も底部（715）が1点、甕は口縁部（718）が1点出土している。その他、陶器の破片が20点出土している。

土師器は七厘、鉢、皿、焙烙などが出土している。七厘は721・722で、鉢は火鉢が2点出土している。皿は小皿の破片が10点とかわらけで老男女と松の押し型絵1点、他の破片が1点出土している。焙烙は破片が4点出土しているが図示できるものはない。

木器は一部炭化しているのも合わせて3点出土している。その他鉄製品が3点と土製品のもの1点出土している。（泉）

SK 94 (fig.94)



調査区の中央よりやや東寄りで、SK89の東に位置する。平面形は長軸1.36m、短軸0.68mの隅丸長方形を呈する。長軸方向は $N-74^{\circ}-W$ で、東西方向といえる。埋土は暗灰茶色土であり、埋土上層はかなり削平を受けており、深さは6cmと浅い。断面形は逆台形である。北壁にある径22cmのピットはSK94以前のもので、

北東隅のピットは後世のものと考えられる。

遺物は磁器の染付碗（723）の他、磁器1点、土師器1点出土しているが、図示できたのは1点のみである。（泉）

Fig.94 SK94平面・エレベーション図及び出土遺物実測図（1/3） SK 96 (fig.95)

調査区の中央南部で、ST8の南側に位置している。平面形は長軸1.62m、短軸1.32mの円形に近い不整形を呈し、深さ20~26cmを測る。長軸方向は南北方向で $N-9^{\circ}-E$ である。埋土は暗灰色土で、単純一層である。断面形は概ね舟底形で、西側は緩やかに立ち上がる。また、北コーナー部に半円形のテラスがある。

遺物は確認できなかったが、埋土から近世のものだと判断した。（泉）

SK 97 (fig.95)

調査区はやや中央部で、SK86の西隣とSK93の北西隣に位置する。平面形は長軸1.38m、短軸0.68

mの隅丸長方形を呈する。主軸方向は $N-11^{\circ}-E$ の南北方向である。深さは6~8cmを測る。埋土は暗灰色土で、単純一層である。また、東壁に検出した径14cmのピットは後世のものと思われる。

遺物は皆無であるが、埋土から近世のものと思われる。(泉)

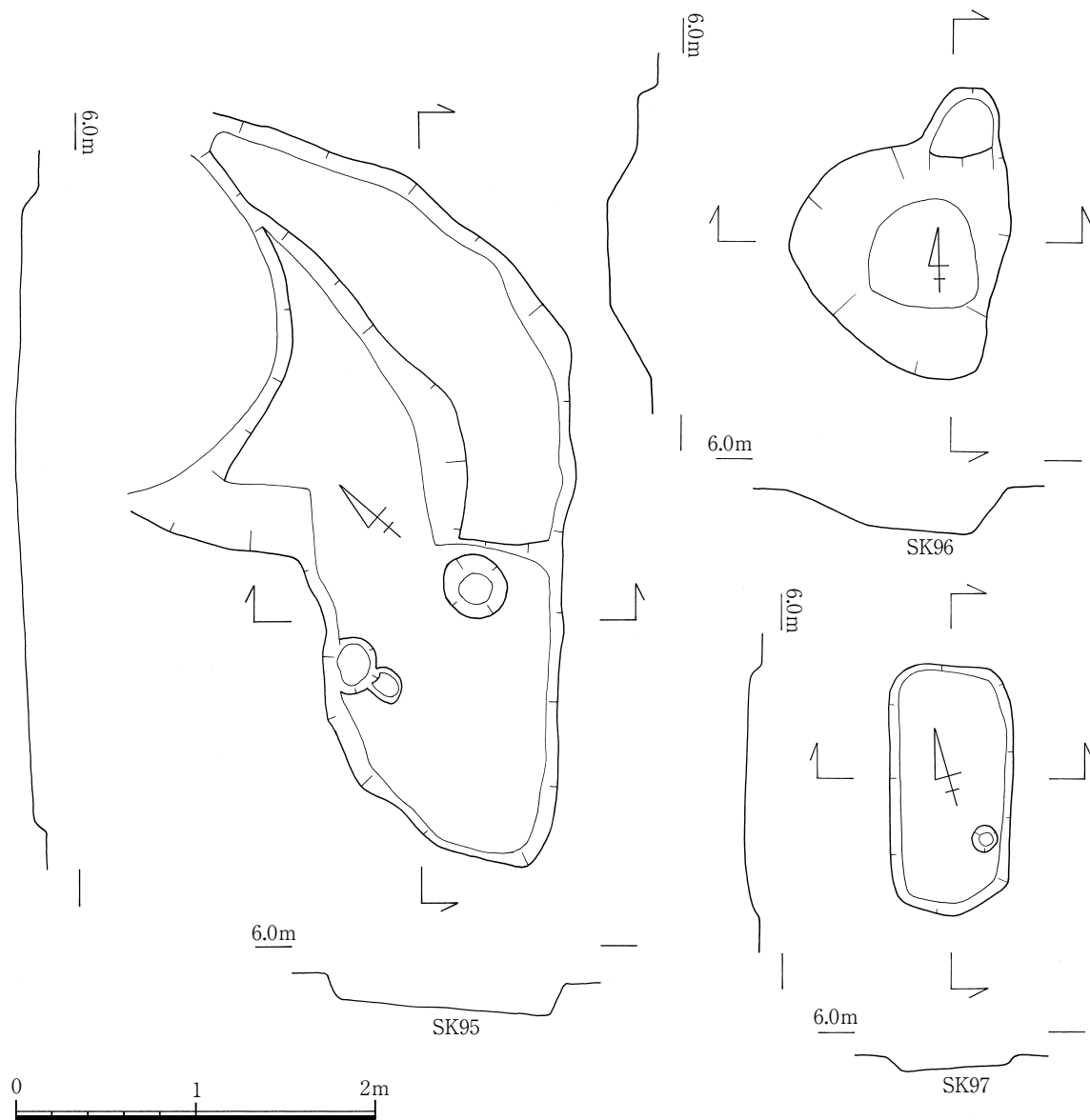


Fig.95 SK95~97平面・エレベーション図

SK 119 (fig.96)

調査区の南東端に位置し、近世の土坑SK120の南に近接する。平面形は楕円形を呈し、長軸1.68m、短軸1.34m、深さ45~56cmを測る。壁は床面から急角度に立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。掘削の後、厚さ4~6cmの三和土で固めている。埋土はI層：灰茶色土、II層：明黄茶色土、III

層：橙色土（三和土崩壊土）である。概ねⅠ層から成るが、一部Ⅱ・Ⅲ層がブロック状に入り込んでおり、SK119がⅠ～Ⅲ層埋土により一気に埋め戻されたものと考えられる。

出土遺物は近世磁器1点、及び混入による中世土師器皿1点、弥生土器細片10点であるが、何れも細片で図示できるものはない。（浜田）

SK 120 (fig.96)

調査区の南東に位置し、SK119の北に近接する。平面形は円形を呈し、径約2.1m、深さ54～70cmを測る。断面形は舟底形を呈し、掘削の後、厚さ8cm前後の三和土で固めている。埋土はⅠ層：灰茶色土、Ⅱ層：黄茶色土、Ⅲ層：暗茶色土で、部分的にⅣ層：橙色土（三和土崩壊土）が入る。Ⅱ層には10～20cm大を測る円礫が多量に含まれており。土坑の埋め戻しに伴い上部の列石が落ち込んだものと考えられる。

出土遺物は近世陶器3点、磁器1点、及び混入による土師器小皿2点、須恵器2点が出土しているが、何れも細片で図示できるものはない。（浜田）

SK 121 (fig.96・98)

調査区のほぼ中央に位置する。近世の土坑SK135の南に近接し、古代の土坑SK134を切っている。平面形は円形を呈し、径約1.06m、深さ50～61cmを測る。断面形は舟底形を呈する。掘削の後、厚さ3～4cmの三和土で固めており、上部外縁には補強を目的とする拳大円礫による列石の一部が残る。埋土はⅠ層：灰茶色土、Ⅱ層：明茶色土（黄褐色土を含む。）、Ⅲ層：黄橙色粘質土（白色土を少量含む。三和土崩壊土。）である。Ⅱ～Ⅲ層には拳大の円礫を含み、埋め戻しに伴い列石が落ち込んだものと考えられる。

出土遺物は床面出土の磁器碗（724）である。（浜田）

SK 122 (fig.96)

調査区のほぼ中央北よりに位置し、近世の溝SD78を切っている。平面形は円形を呈し、径約1.3m、深さ24～38cmを測る。断面形は舟底形で、壁は急角度で立ち上がる。床面及び側壁を幅6cm前後の三和土で固めており、上部外縁には拳大の円礫による列石の一部が残る。埋土はⅠ層：灰茶色土（黄色土を含む。）、Ⅱ層：黄色土（茶褐色土を含む。）、Ⅲ層：暗灰色土である。Ⅰ～Ⅱ層には拳大の円礫を含む。

床面より近世陶器3点、磁器5点が出土しているが、何れも細片で図示できるものはない。床面からは他に砥石1点が出土している。（浜田）

SK 124 (fig.96・98)

調査区の北に位置する。近世の溝SD78と切り合っているが、先後関係は不明である。平面形は不明で、規模は長軸2.2m、短軸1.6m、深さ28～34cmを測る。断面形は舟底形を呈する。埋土は灰茶色土単純一層であるが、東半分は攪乱を受けている。

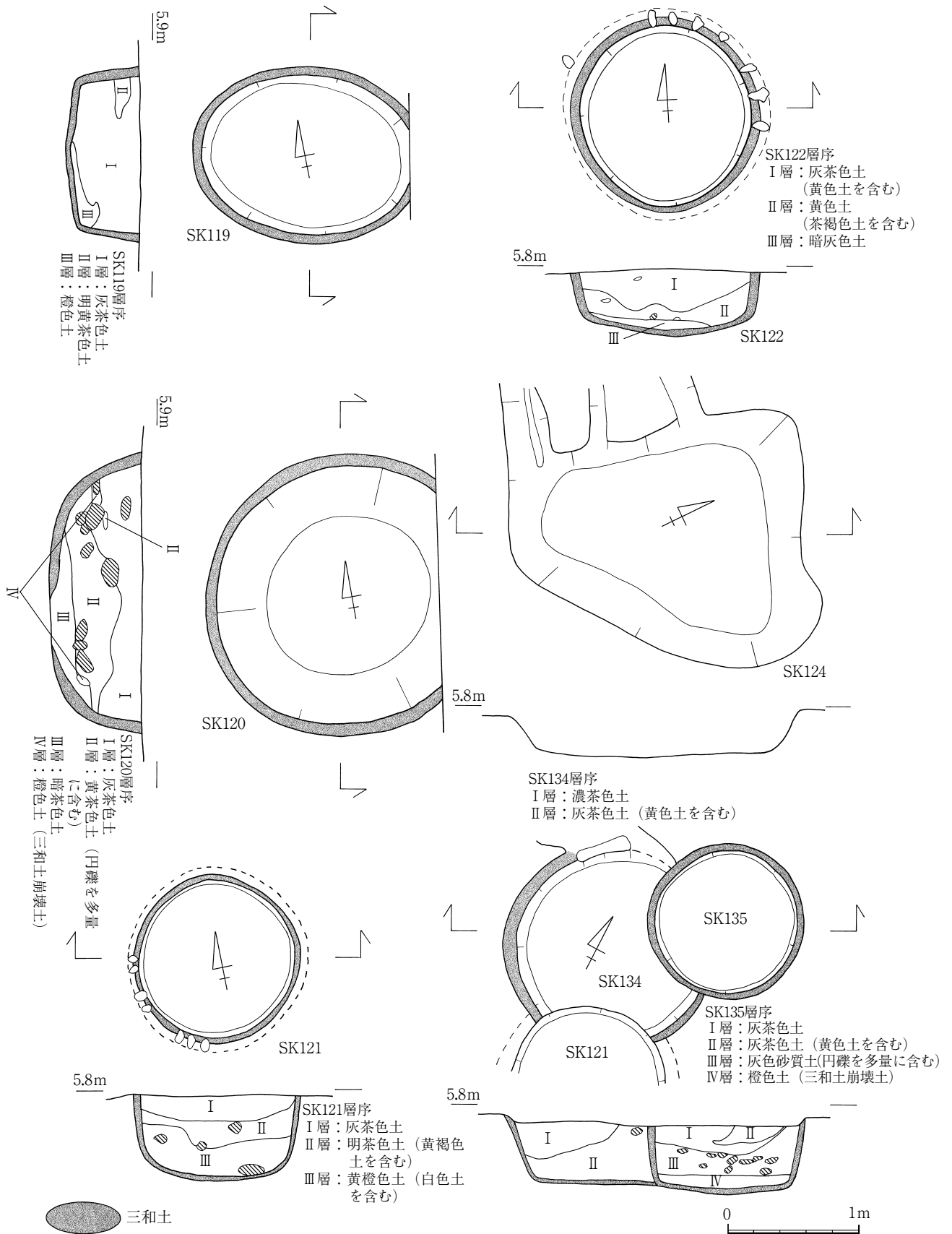


Fig.96 SK119~122・124・134・135平面・セクション・エレベーション図

出土遺物は近世陶磁器類20数点である。725は肥前産の青磁染付碗で、18世紀後半のものである。726は鉢又は火入れで、底部に粘土貼付による脚を3個所施す。727は肥前産の縁折皿で、17世紀後半から18世紀のものである。他に在地系の陶器細片17点、磁器細片2点が出土している。(浜田)

SK 135 (fig.96)

調査区のほぼ中央に位置する。SK121の南にあり、古代の土坑SK134を切っている。平面形は円形を呈し、径約1.2m、深さ44～58cmを測る。断面形は逆台形で、壁は床面からほぼ垂直に立ち上がる。床面及び側壁を厚さ4～6cmの三和土で固めている。埋土はⅠ層：灰茶色土、Ⅱ層：灰茶色土(黄色土を含む)、Ⅲ層：灰色砂質土、Ⅳ層：橙色土(三和土崩壊土)である。Ⅲ層は拳大の円礫を多量に含んでおり、土坑埋め戻しに伴い列石が落ち込んだものと考えられる。

出土遺物はない。(浜田)

SK 137 (fig.97)

調査区の中央、近世の土坑SK139の南に位置する。径約1.2mの円形の土坑で、深さ28～34cm、断面形は逆台形を呈する。床面及び側壁を厚さ3～4cmの三和土で固めている。埋土はⅠ層：灰黄茶色土、Ⅱ層：灰茶色土で、拳大の円礫を少量含む。Ⅰ・Ⅱ層には黄色土(三和土崩壊土)がブロック状に入り込んでいる。

出土遺物は近世陶磁器が2点である。磁器碗(728)は染付の広東茶碗である。(浜田)

SK 139 (fig.97・98)

調査区のほぼ中央に位置する。平面形は不整楕円形を呈し、規模は長軸0.8m、短軸0.5mで、深さは34～60cmを測る。底部は中央部分でやや深く、東西に段部が存在する。埋土は濃茶色土単純一層である。

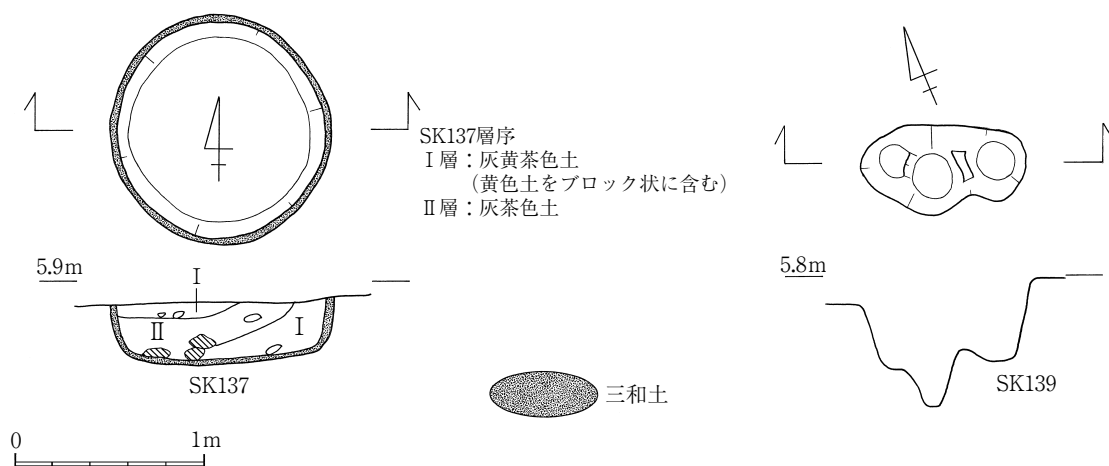


Fig.97 SK137・139平面・セクション・エレベーション図

出土遺物は土師器小皿（730・731）、陶器椀（729・732）、陶器皿（733）、陶器甕（734）である。
729・732は尾戸産の椀であり、同一個体と考えられる。（浜田）

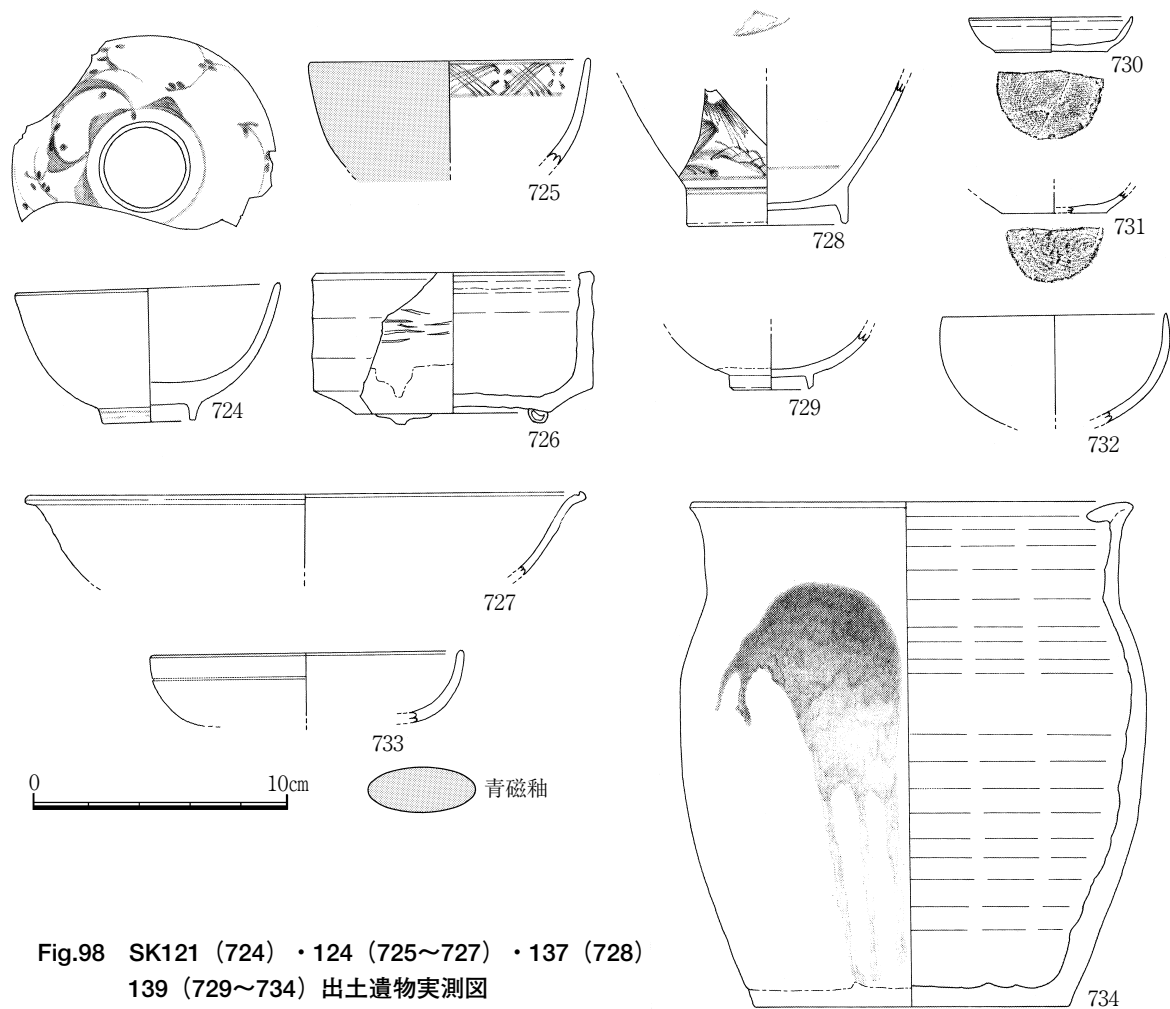


Fig.98 SK121 (724)・124 (725~727)・137 (728)
139 (729~734) 出土遺物実測図

(2) 井戸状遺構

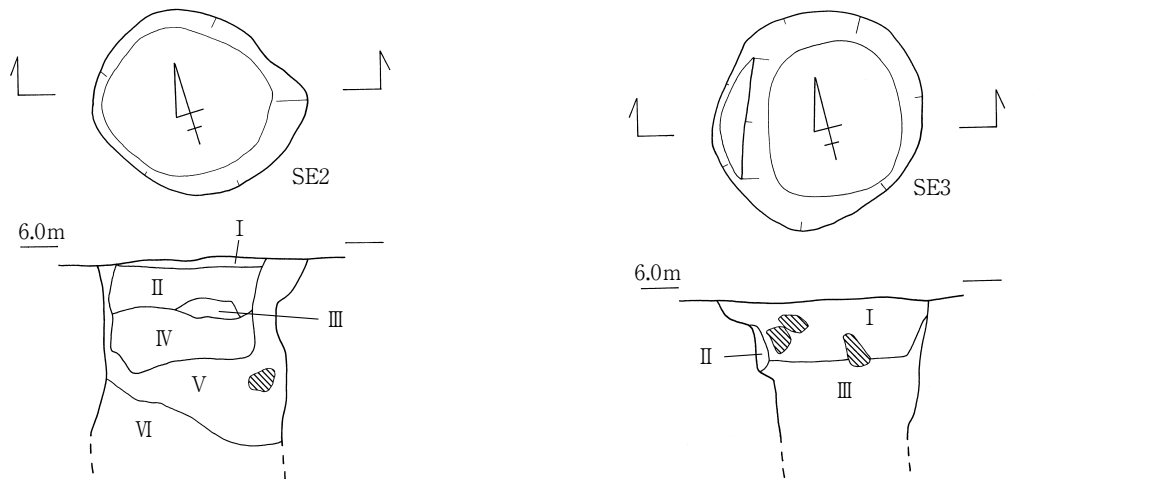
SE 2 (fig. 99)

調査区の東部南張り出し部分に存在した素掘りの井戸である。平面形は東西1.15m、南北0.95mの規模を持つ不整楕円形を呈している。埋土は上層でⅠ層：黄灰色土、Ⅱ層：暗灰色土、Ⅲ層：黒灰色土、Ⅳ層：灰色土（灰色砂粒を多く含む。）を確認している。

出土遺物は破片であり、陶器2点が存在している。（藤方）

SE 3 (fig.99)

調査区の東部南で検出した素掘りの井戸であり、近世の溝SD56・63を切って存在する。平面形は径約1.1mの規模を持つ不整形円形を呈する。西側には狭い段部が存在しているが、これはSD63の底部形態の名残りと考えられる。埋土は上層でI層：暗灰色土、II層：黒色土、III層：灰色砂層が存在する。



SE2層序

- I層：黄灰色土（縮りあり、粘性なし、黒色土及び黄色砂礫を含む）
- II層：暗灰色土（縮りあり、粘性ややあり、シルト質）
- III層：黒灰色土（縮りあり、粘性ややあり、シルト質）
- IV層：灰色土（縮りややあり、粘性なし、上部では灰色砂粒、黄色砂礫、5cm大の円礫が多く、下部では幅1cm程度の黒色土層が存在する）
- V層：黒色土（縮りややあり、粘性なし、黒ボクを多く含む）
- VI層：灰色土（縮りややあり、粘性なし、灰色砂粒を多く含む）

SE3層序

- I層：暗灰色土（20cm大の円礫を含む）
- II層：黒色土（灰色土が混入する）
- III層：灰色砂層（拳大から人頭大の円礫を含む）

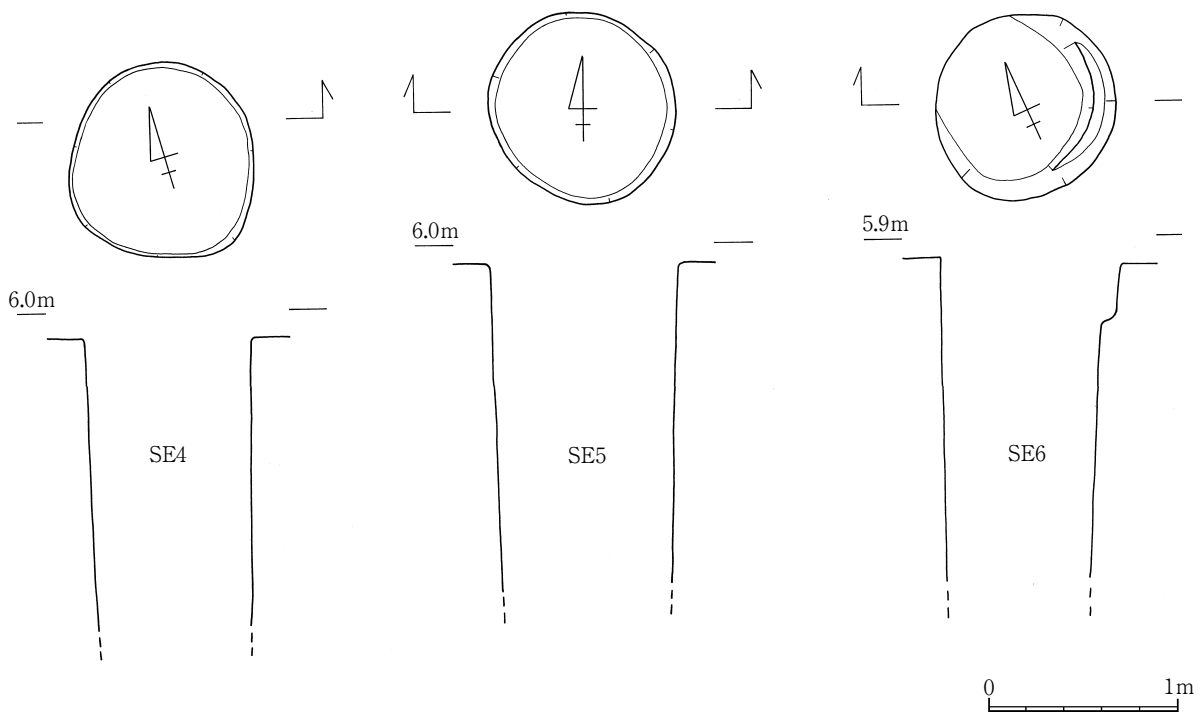


Fig.99 SE2～6平面・セクション・エレベーション図

出土遺物は平瓦破片4点が存在している。(藤方)

SE 4 (fig.99・100)

調査区の東部北で検出した素堀りの井戸であり、近世の溝SD65・66によって切られて存在する。上部形態は不明であるが、平面形は径約1.0mの不整形円形を呈すると考えられる。埋土は上層にI層：暗灰色土、II層：灰色土、III層：灰色砂礫層が確認されている。I・II層はSD66との関わりが深いと考えられる。

出土遺物としては磁器の広東茶碗底部(735)が図示可能であり、破片としては磁器2点、須恵器1点、平瓦2点、丸瓦2点が存在している。(藤方)

SE 5 (fig.99~101)

調査区の東部北に位置し、SE4の北2mで検出された素堀りの井戸である。平面形は直径1.0mの円形を呈する。埋土は暗灰色土が上層に存在していたが、崩落が激しく層序は記録し得なかった。下層に向かうに従い湿り気を帯び、粘性土が多く存在していた。

出土遺物の中で図示できるものは736~757である。

736は磁器の猪口である。737~740は碗である。737は磁器の小碗、738は瀬戸・美濃産の広東茶碗底部、739・740は磁器の広東茶碗である。741~743は皿である。741は磁器であり染付による。742は肥前系で18世紀のものである。743は内野山窯産の蛇の目釉剥ぎ皿であり、17世紀末~18世紀前半のものである。744は磁器の蓋、745は陶器の碗である。746~749は磁器の徳利であり、肥前産で18世紀後半から19世紀のものである。750は陶器の土瓶、751は陶器の火鉢であり、獅子頭の把手を持つ。752は土師器の焙烙、753・754は陶器の甕であり、各々胴体部と口縁部である。755~757は瓦である。755は均整唐草紋軒平瓦、756は「あき」の刻印を有する軒丸瓦、757は凸面に縄蓆紋、凹面に布目圧痕を有する平瓦であり、平安時代のものである。破片としては磁器8点、陶器7点、土師器3点、瓦22点、ガラス片2点が存在している。

近代初頭まで機能していた可能性がある。(藤方)

SE 6 (fig.99・102・103)

調査区の中央部北に位置し、近世土坑SK68に接して存在するが、先後関係は不明である。平面形は直径約0.95mの円形を呈し、東側には上位に狭い段部が存在する。埋土は暗灰色土(黒色土、黄色土混入)である。

出土遺物の中で図示できるものは758~777である。

758~762は猪口又は小碗である。758は磁器で薄手のもの、759は瀬戸・美濃産の染付端反り碗であり、19世紀中頃のものである。760~762は上絵付けを施したものであり、19世紀中頃のものである。763は磁器の小皿、764・765は磁器の蓋である。766は磁器の碗口縁部、767は陶器の碗口縁部、768・769は陶器の碗であり、鉄釉を施す。770は陶器の蓋、771は磁器の稜花皿、772は備前産の甕底部、773は陶器の碗であり、尾戸産のものと考えられる。774は能茶山産の小鉢であり、蛇の目凹

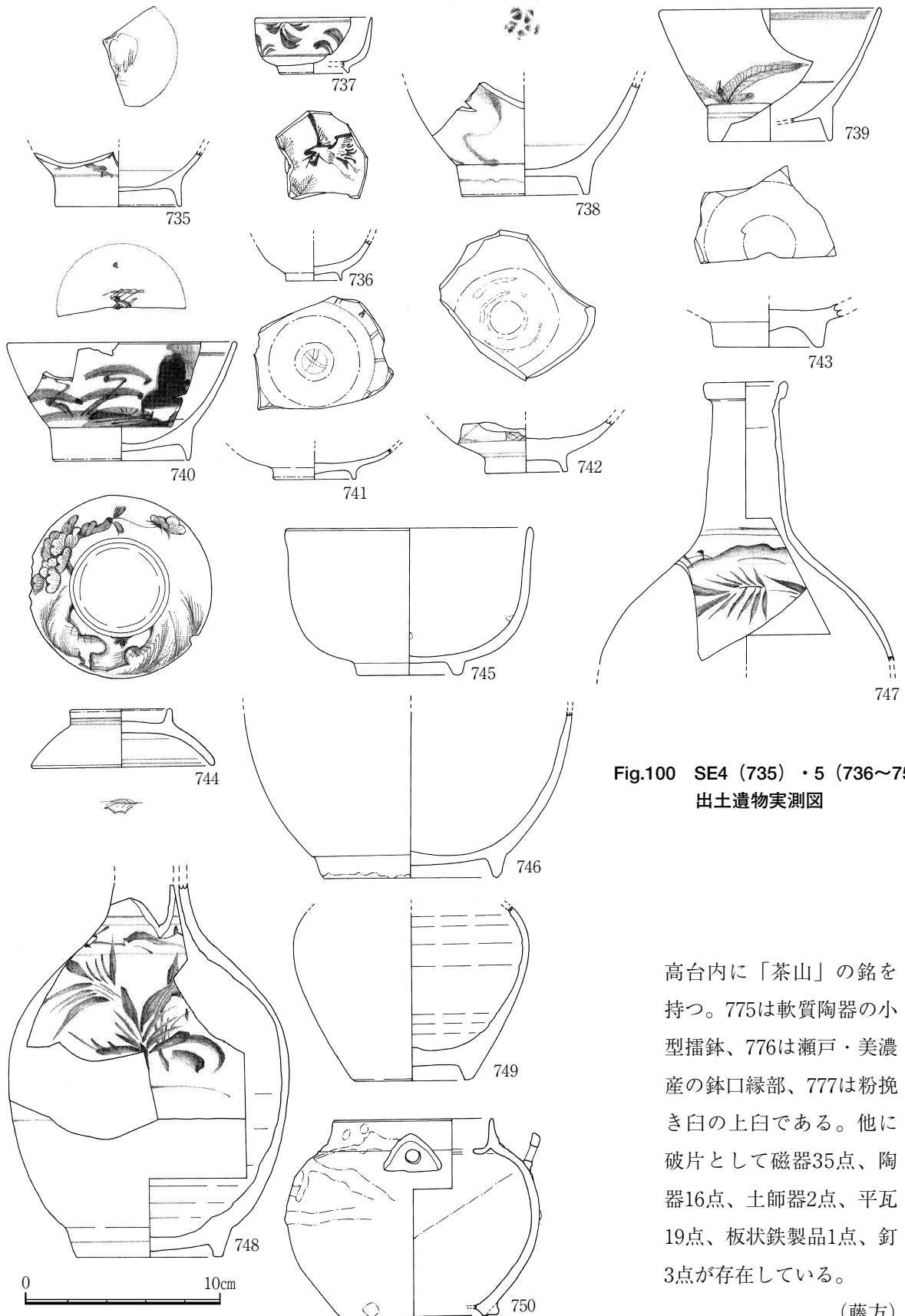


Fig.100 SE4 (735) ・5 (736~750)
出土遺物実測図

高台内に「茶山」の銘を持つ。775は軟質陶器の小型播鉢、776は瀬戸・美濃産の鉢口縁部、777は粉挽き白の上白である。他に破片として磁器35点、陶器16点、土師器2点、平瓦19点、板状鉄製品1点、釘3点が存在している。

(藤方)

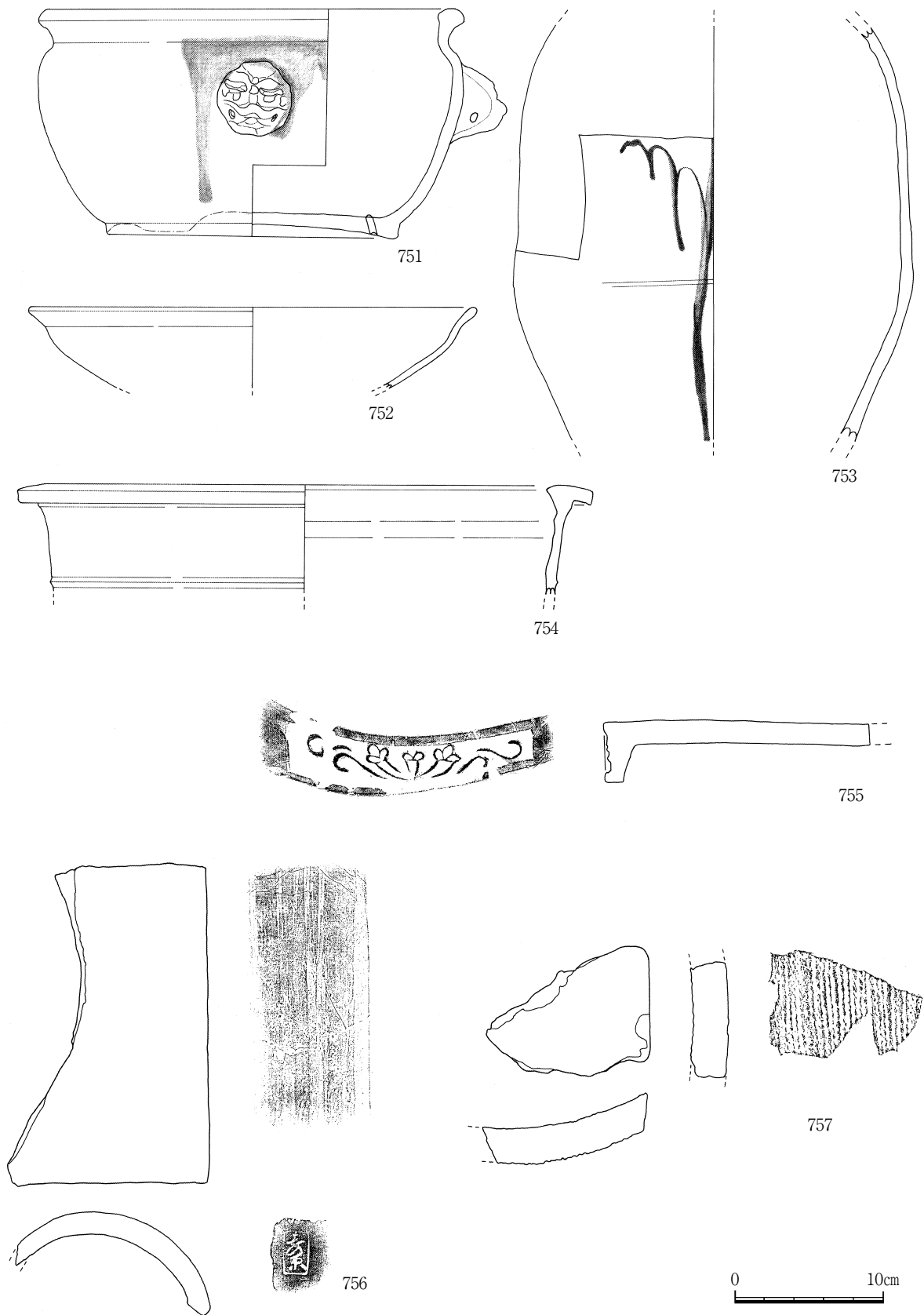


Fig.101 SE5出土遺物実測図

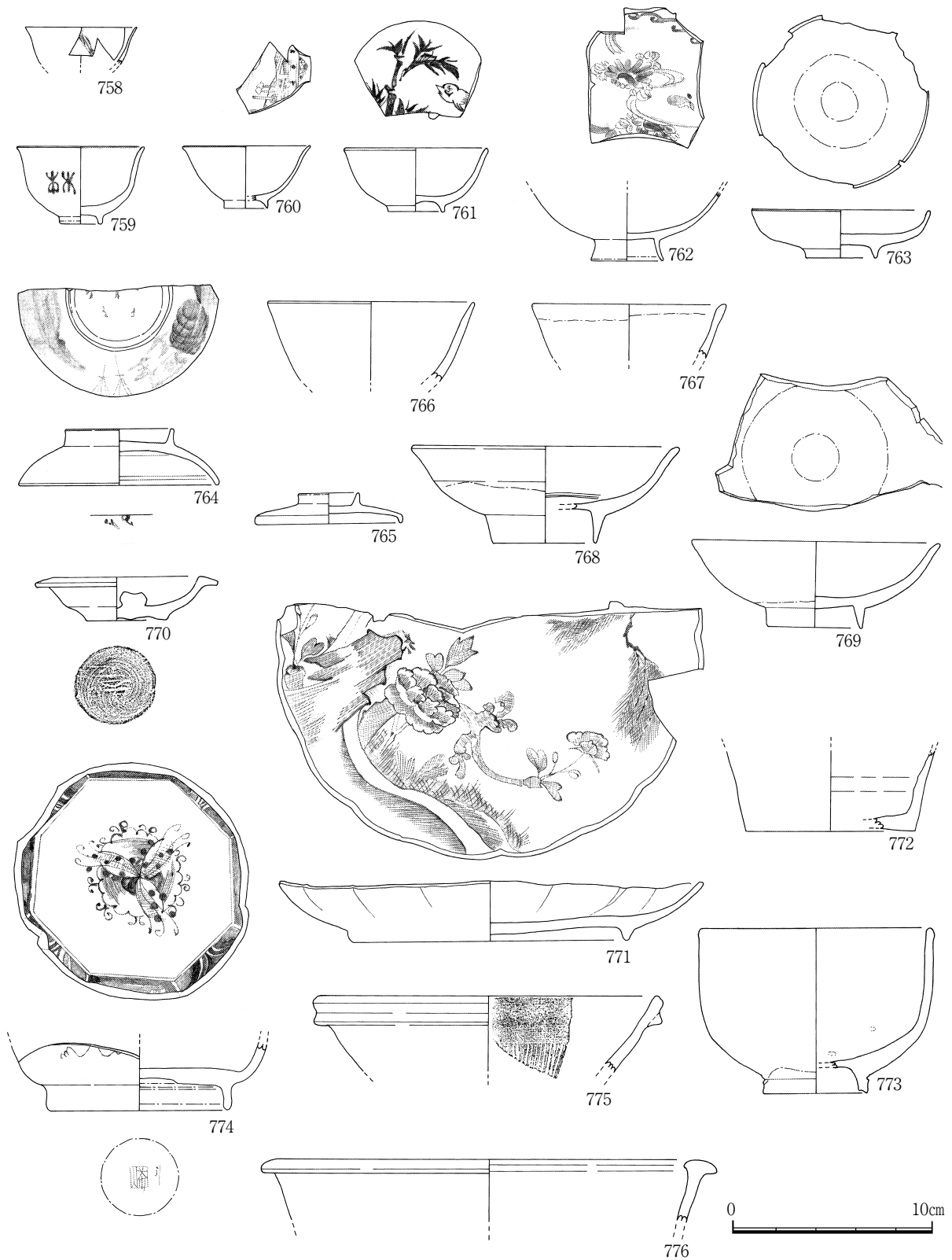


Fig.102 SE6出土遺物実測図 その1

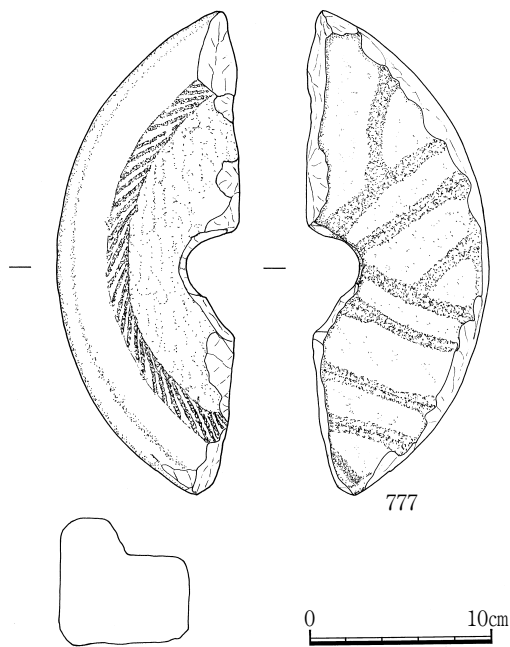


Fig.103 SE6出土遺物実測図 その2

SE 7 (fig.104)

調査区の中央部北に位置し、近世の溝SD67を切って存在する。平面形は約1mの円形を呈する。埋土は上部に灰色土（黒色土・黄色土混入）が存在している。検出面から約50cmの所で、黄色粘土と円礫を敷き詰めて底面を造った形跡が窺え、井戸としての機能を廃した後に上部を土坑として使用した可能性がある。

出土遺物は破片であり、磁器4点、陶器3点、土師器1点、瓦1点、銅製品1点である。

(藤方)

SE 8 (fig.104)

調査区の中央部分に位置する。弥生時代後期末の住居址ST 8を切っており、近世土坑SK71によって切られて存在する。平面形は直径0.98mの円形を呈するが、検出時点には

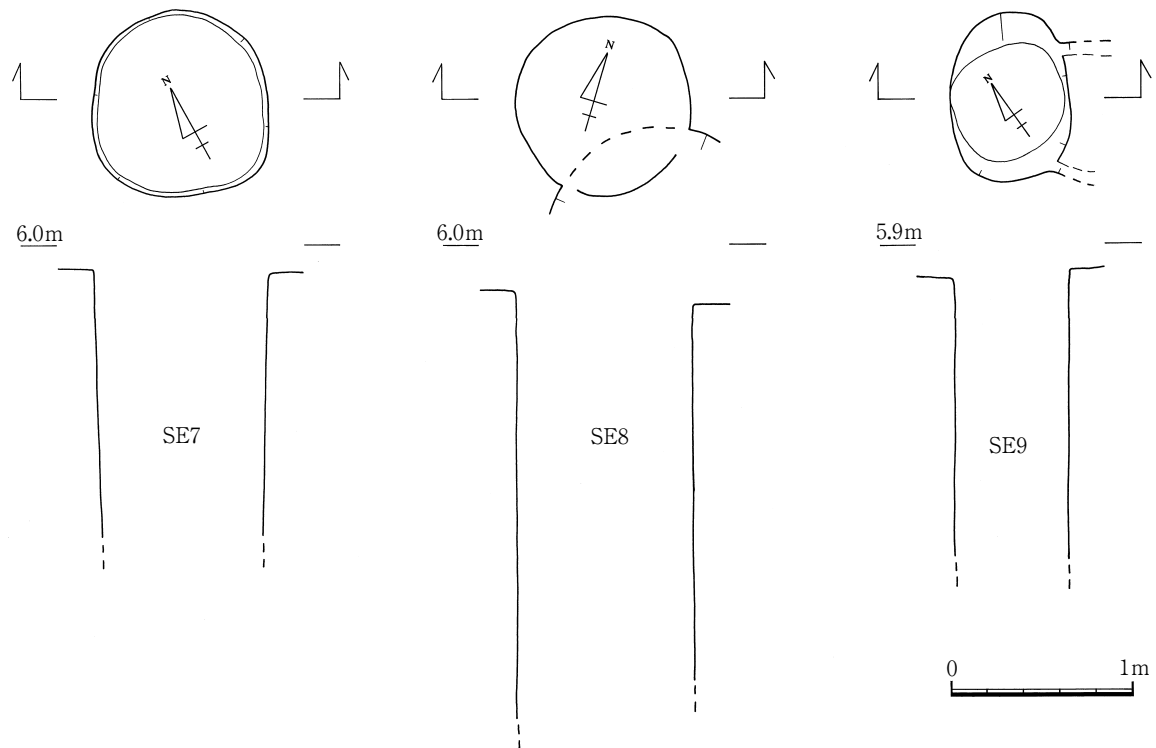


Fig.104 SE7~9平面・エレベーション図

SK71を構築する際にSE 8埋土の軟弱さを考慮して、拳大の円礫を積み重ねた壁が存在していた。埋土は上部で暗灰色土であった。また、この井戸では検出面下2.2mで湧水を見た。

出土遺物は破片であり、陶器2点、板状鉄製品1点が存在する。（藤方）

SE 9 (fig.104・105)

調査区の中央部南に位置し、近世土坑SK92を切って存在する。平面形は長軸0.92m、短軸0.66mの楕円形を呈する。埋土は主に暗灰色砂層であるが、上部にはSK92も含めて褐色土が広く存在する。

出土遺物として図示できるものは778～787である。

778は土師器の小皿であり、灯明皿としての使用が窺える。779は陶器の蓋、780は陶器の小鉢であり、尾戸産の可能性はある。781は備前産の甕又は壺の底部、782は陶胎染付の瓶底部、783は陶器の鍋底部、784は陶器の鉢底部、785は軒平瓦であり、均整唐草紋を持つ。786は砂質凝灰岩製の砥石であり、荒砥として使用したものの一部である。787は瓦器の焙烙である。その他破片は磁器9点、陶器13点、土師器12点、瓦器14点、瓦1点が存在している。（藤方）

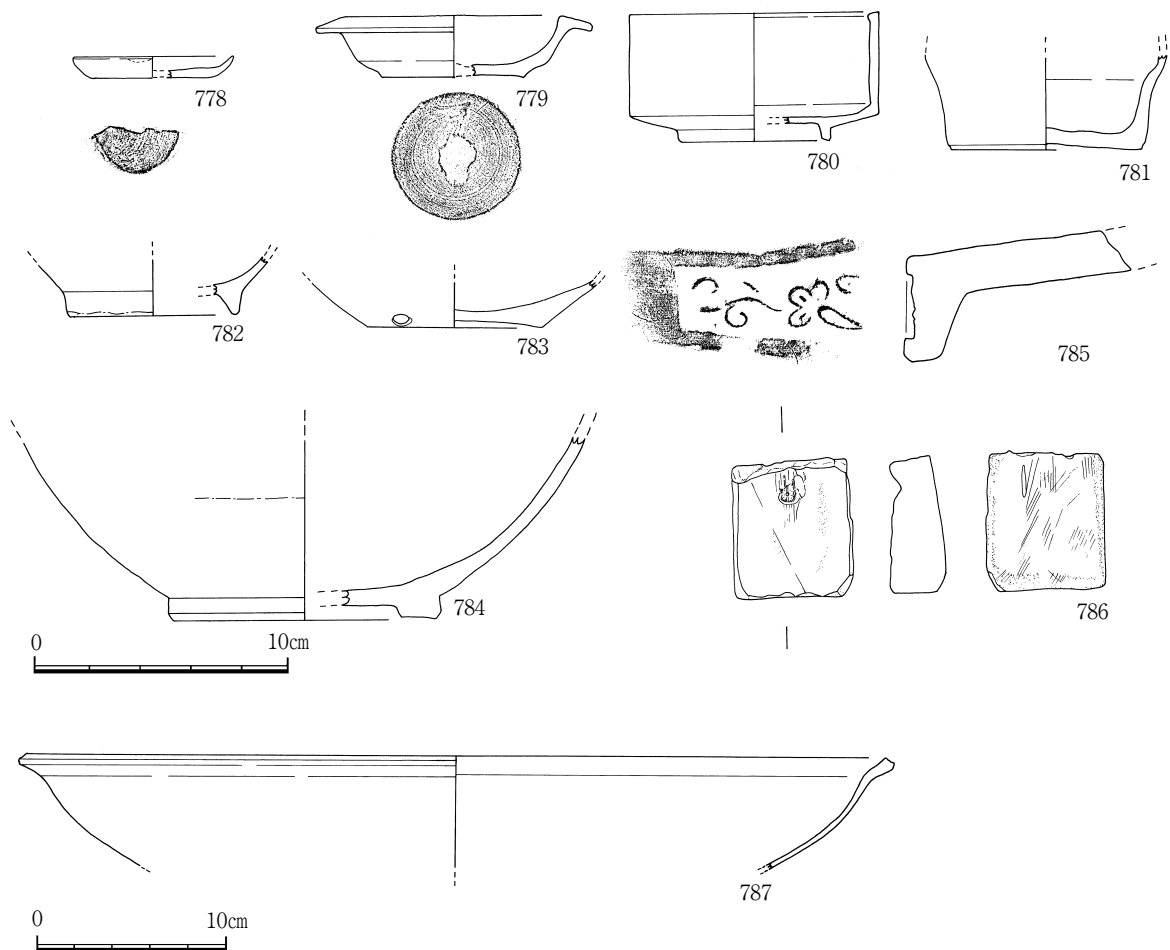


Fig.105 SE9出土遺物実測図

SE 10 (fig.106)

調査区中央部北よりの近世溝SD12の北西コーナー部内側にある。長軸1.2m、短軸1.1mの楕円形のプランを有する素掘りの井戸である。深さ1.5mまで掘り下げたが、湧水があり崩壊の危険があるのでそれより下への発掘は中止した。砂礫が多く詰まっており近世陶磁器類の細片が少量出土しているが、図示できるものはない。(出原)

SE 11 (fig.106・107)

SE10の東8mのところであり、直径1.3m前後の円形プランを有する素掘りの井戸である。深さ1.5mまで掘り下げたところで湧水があり崩壊の危険があるのでそれより下への発掘は中止した。砂礫が多く詰まっており、多量の近世陶磁器が出土している。瀬戸・美濃産の染付碗(788)、尾戸産の灰釉陶器碗(789・791・793・795・796)、同陶胎染付け碗(790)、同陶器香炉(797)、同陶器徳利(798)、肥前産磁器広東茶碗(792)、播鉢(799)などを挙げる事ができる。これらの遺物は井戸が埋め戻される時に投げ込まれたものである。(出原)

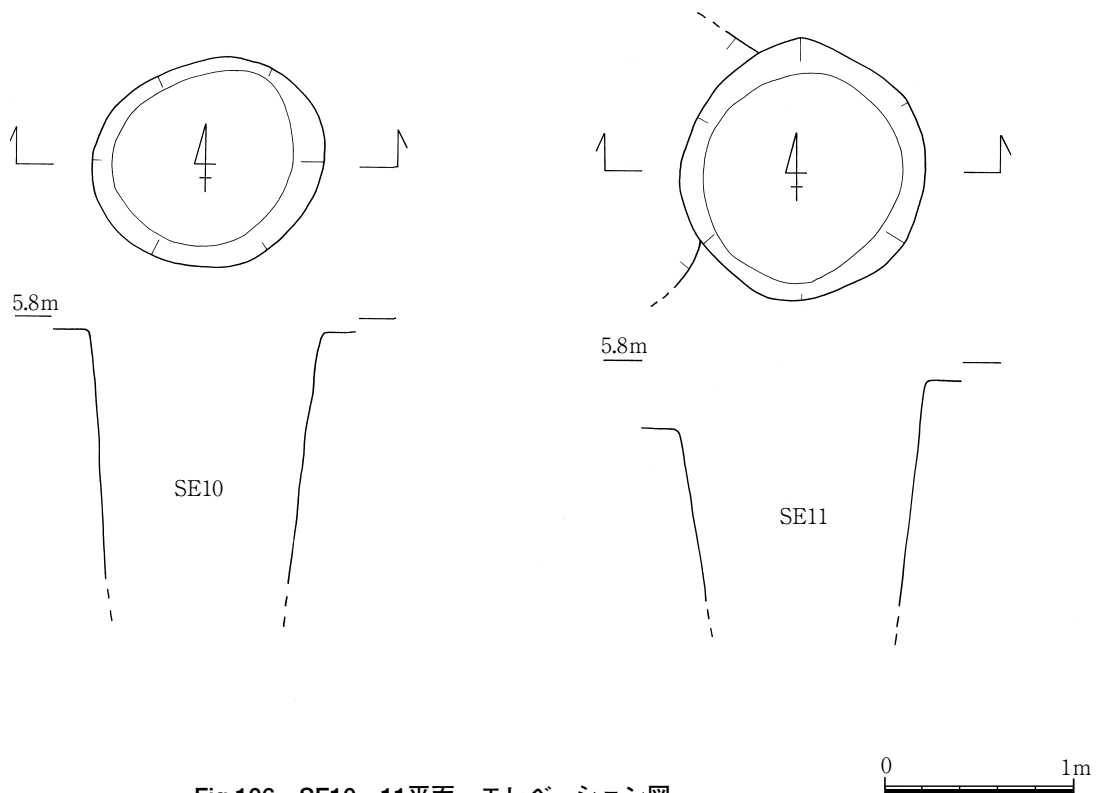


Fig.106 SE10・11平面・エレベーション図

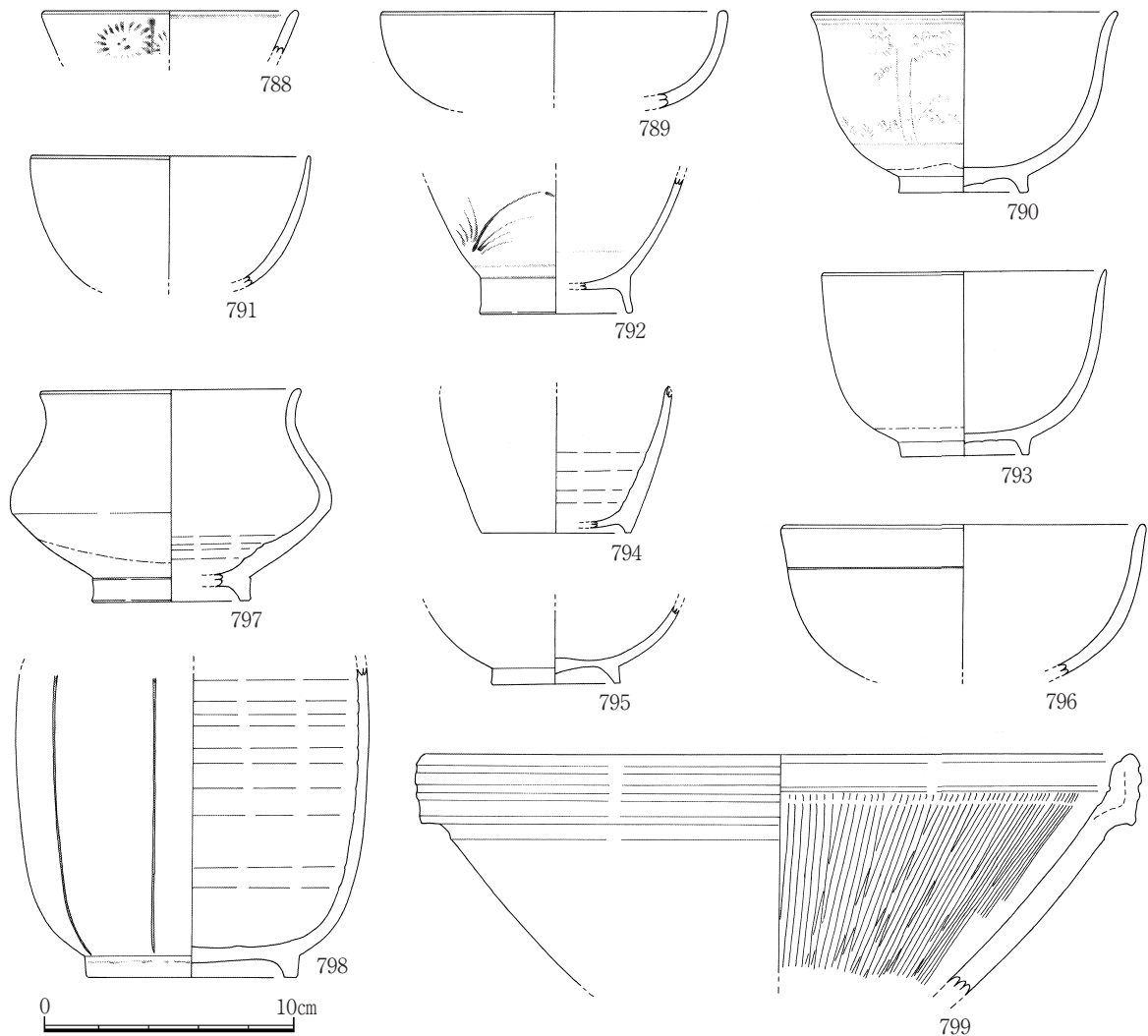


Fig.107 SE11出土遺物実測図

(3) 溝

SD 55 (fig.108)

調査区の東部南張り出し部に位置し、近世の溝SD56を切って存在する。主軸方向は $N-13^{\circ}-E$ であり、北から南へ流れていたものと考えられる。確認延長は17mであり、幅は約40cm、深さは約10cmを測る。底部は舟底状を呈している。埋土は灰色土である。

出土遺物は破片であり、磁器1点、陶器1点が存在している。（藤方）

SD 56 (fig.108・109)

調査区の東部南張り出し部分に位置し、近世の溝SD55に切られて存在する。主軸方向は $N-13^{\circ}-E$ であり、北から南へ流れていたものと考えられる。確認延長は48mであり、幅は約40cmである。

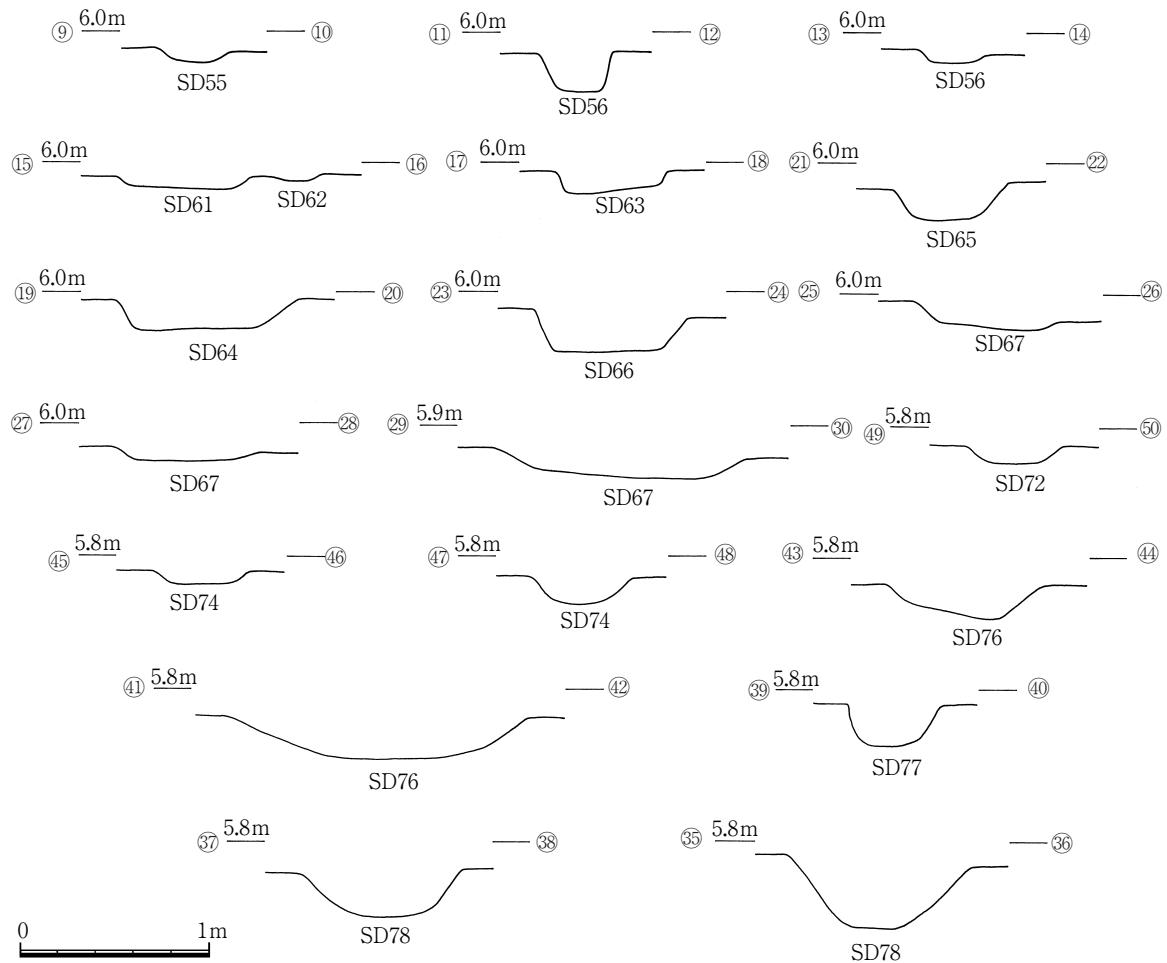


Fig.108 SD55・56・61～67・72・74・76～78エレベーション図

北部は削平を受けて浅く、検出面からの深さは6cm、底部形態は舟底状を成す。南部は深さ20cmを測り、断面は逆台形を呈す。埋土は暗灰色土である。

出土遺物として図示できるものは800～802である。

800は磁器の皿、801は龍泉窯産の青磁碗であり、13世紀のものである。802は肥前系の甕である。破片としては磁器1点、陶器1点、土師器1点が存在している。（藤方）

SD 61 (fig.108・109)

調査区の東端に位置し、近世の溝SD62を切って存在している。主軸方向はN-18°-Eであり、北から南へ流れていたものと考えられるが、南部では東側へ流路を変更している。確認延長は21m

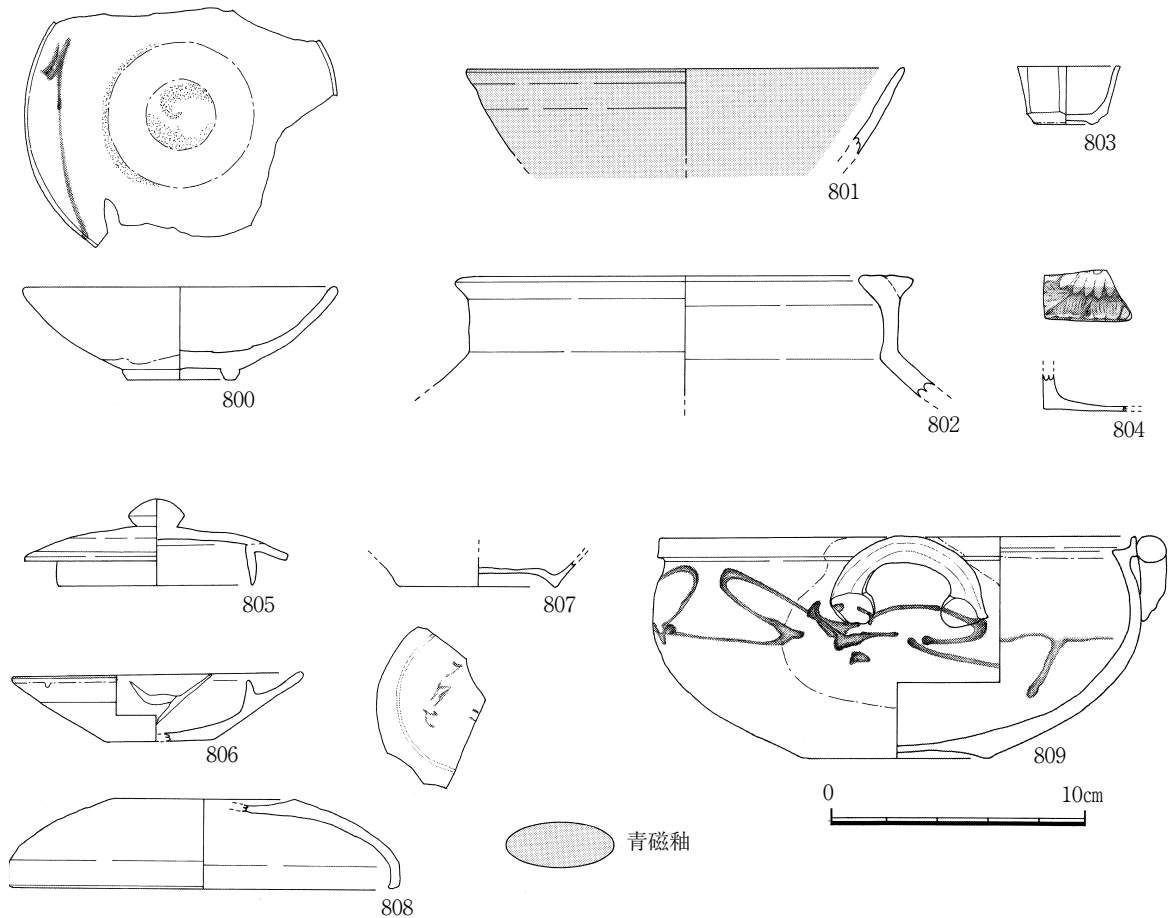


Fig.109 SD56 (800~802)・61 (803~809) 出土遺物実測図

であり、幅は50~80cm、検出面からの深さは約6~10cmを測る。断面形は逆台形を呈する。埋土は灰色土であり、砂粒及び円礫を多く含んでいる。

出土遺物として図示できるものは803~809である。

803は磁器の猪口又は小碗、804は型押しによる菊紋水滴、805は陶器の蓋、806は陶器の受付灯明皿、807は陶器の蓋であり、内面に墨字を施す。808は火消し壺の蓋、809は陶器の鍋である。破片としては磁器16点、陶器21点、土師器1点、瓦器1点、瓦34点が存在している。(藤方)

SD 62 (fig.108・110)

調査区の東端に位置し、近世の溝SD61によって切られて存在する。主軸方向はN-18°-Eであるが、流路方向は不明である。確認延長は7.2mであり、幅は約20cm、検出面からの深さは約4cmを測る。断面形は逆台形を呈する。

出土遺物としては磁器の染付蓋(810)が図示可能であり、他に破片として磁器1点が存在している。(藤方)

SD 63 (fig.108)

調査区の東部に位置し、南部では近世井戸SE 3に、北部では近世土坑SK49に切られて存在する。主軸方向は $N-19^{\circ}-E$ であり、北から南へ流れていたものと考えられる。確認延長は約14mであり、幅は約50cm、検出面からの深さは北部で約10cm、南端では深く約30cmを測る。埋土は暗灰色土である。

出土遺物は破片であり、丸瓦1点が出土している。(藤方)

SD 64 (fig.108・110)

調査区の東部に位置し、南部で近世土坑SK50に、北部では近世の溝SD67に切られて存在する。主軸方向は $N-18^{\circ}-E$ であり、北から南へ流れていたものと考えられる。確認延長は約14mであり、幅は約1m、検出面からの深さは14cmを測る。埋土は暗灰色土である。

出土遺物として図示できるものは、肥前産の磁器紅皿(811)であり、破片としては磁器3点、瓦4点、板状鉄製品1点が存在している。(藤方)

SD 65 (fig.108・110)

調査区の東部に位置し、近世の井戸SE 4と接して存在するが先後関係は不明である。主軸方向は $N-72^{\circ}-W$ であり、東から西へ流れていたものと考えられる。確認延長は20mであり、幅は約60cm、検出面からの深さは約20cmを測る。東部で南方向へ曲折しており、SD56と連なる可能性がある。東側は後世の削平を受け、遺構の繋がりは確認できなかった。埋土は黒色土である。

出土遺物として図示できるものは812~817である。

812は磁器の碗底部、813は肥前系の青磁仏飯碗であり、17世紀中頃のものである。814は陶器の皿、815は磁器の皿、816は瀬戸・美濃産の皿であり、17世紀中頃のものである。その他に破片として陶器1点が存在する。(藤方)

SD 66 (fig.108・110)

調査区の東部に位置し、近世の土坑SK68や井戸SE 4を切って存在する。主軸方向は $N-70^{\circ}-W$ であり、東から西へ向って流れていたものと考えられる。確認延長は20mであり、幅は約80cm、検出面からの深さは22cmを測る。遺構の西方への繋がりは確認できなかった。埋土は暗灰色土ある。

出土遺物として図示できるものは、陶器の椀(818)であり、破片としては陶器1点が存在している。(藤方)

SD 67 (fig.108)

調査区の東部から中央部に掛けて存在する。近世の井戸SE 7、土坑SK63・73・74、中世の溝SD67によって切られている。主軸方向は $N-68^{\circ}-W$ であり、東から西へ向って流れていたものと考えられる。確認延長は約42mであり、東側では幅80cm、深さ10cm、中央部では幅76cm、深さ6cm、

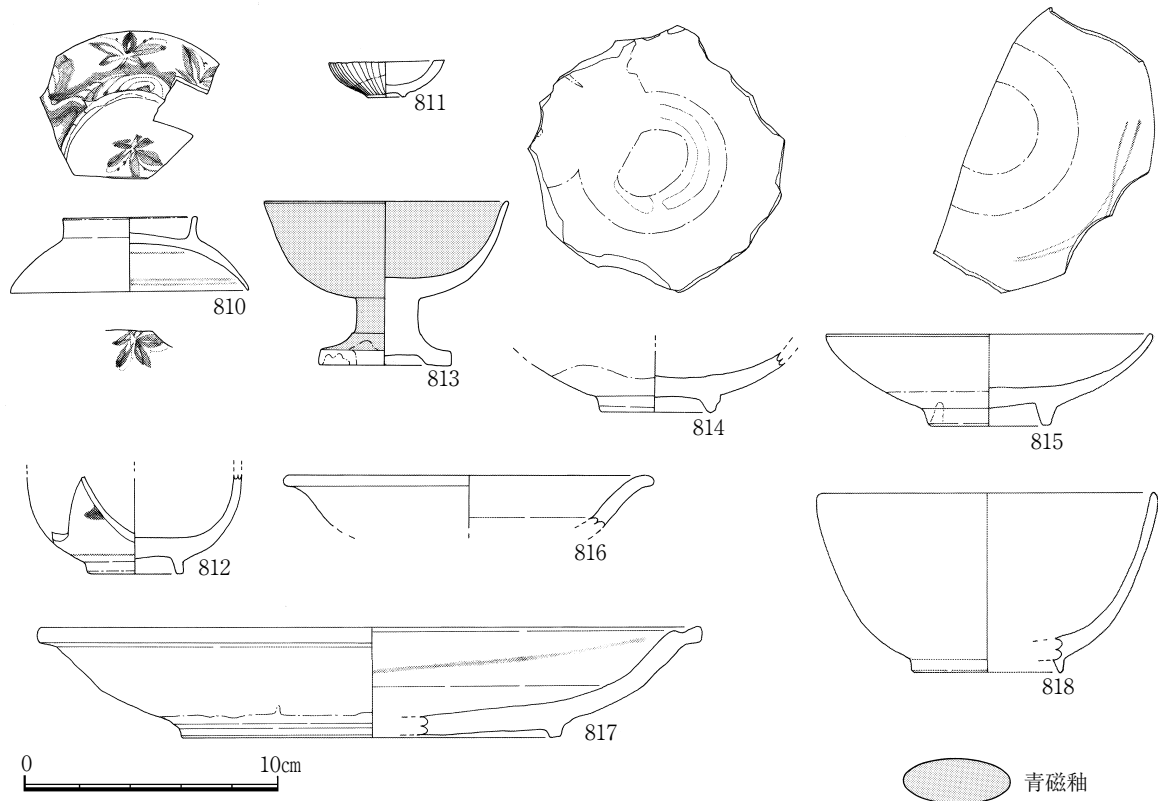


Fig.110 SD62 (810)・64 (811)・65 (812~817)・66 (818) 出土遺物実測図

西側では幅1.34m、深さ10cmを測る。西端部分は明らかでないが、近世の溝SD78と連なる可能性がある。埋土は茶褐色土である。

出土遺物は破片であり、弥生後期土器12点、陶器1点、土師器1点、瓦1点が存在している。

(藤方)

SD 68

調査区の中央部北寄りに存在する。平成6年度調査区の北端に位置しており、全体の規模を確認し得なかった。主軸方向は $N-72^{\circ}-W$ であり、東から西へ向って流れていた可能性が強い。確認延長は13.5m、検出幅は50cm、深さは約15cmを測る。埋土は茶褐色土である。

出土遺物は皆無であるが、埋土から近世のものと判断した。(藤方)

SD 72 (fig.108)

調査区中央部では3条の溝が南北方向に平行して走っているが、SD72はそのうちの西側に位置する溝である。確認延長29.6m、溝幅は50~60cmで一定しているが南端近くでは幅が減少し一部SD74とつながっている。また北端部は攪乱を受けている。断面は逆台形状を呈し、深さは北端から中央

部で約10cm、南端で6cmを測る。床面のレベルは、北端で5.65m、中央部で5.60m、南端で5.56mとなっており緩やかに南に向かって傾斜している。埋土は暗灰色の砂礫混ざりの粘質土で、埋土中より近世陶磁器類の細片が出土しているが図示できるものはない。近世の灌漑用の溝と考えられる。

(出原)

SD 74 (fig.108)

SD 72の東隣を平行して走る溝である。北端部は攪乱を受けており肩はかなり削平されている。

確認延長28mを測る。幅は概ね50cm前後を測るが、南端では少し狭まり40cm程になっている。断面形は逆台形状を呈し、深さは全体を通して10cm未満である。床面のレベルは、北端で5.65m、中央部で5.60m、南端で5.54mでSD72とほぼ同様の勾配を有している。埋土もSD72と同様であるが遺物はほとんど出土していない。溝の性格はSD72と同様のことが考えられる。(出原)

SD 76 (fig.108)

3条の中で東に位置し、最も規模の大きな溝である。北端と中央部で攪乱による削平を受けている。確認延長28mを測る。幅は北部で1.6～1.9m、中央部で1m前後、南部で70～80cm、深さはそれぞれ20cm、15cm、10cmとなり、南に行くに従って幅・深さを減じている。しかし床面のレベルは5.5m前後と一定である。断面形は逆台形状を呈する。埋土はSD72・74と同様で埋土中より近世陶磁器類・近世土師器小皿などが出土している。(出原)

SD 77 (fig.108)

調査区の中央部にあり、後述するSD78から派生した溝である。確認延長11m、幅は40～60cm、深さ15cm前後を測る。埋土は砂礫混ざりの灰茶色土層で、埋土中より肥前産青磁染付碗などの近世陶磁器類、土師器小皿などが出土している。尾戸産の陶器碗(827)は、SD78出土の破片と接合関係にある。(出原)

SD 78 (fig.108・111)

調査区中央部を南北に走る溝であるが、北端で直角に東に折れ端部でSK124と切り合っているが先後関係は不明である。確認延長36mを測る。幅は0.8～1m、深さは北半部分でおよそ20cm前後であるが、南に寄る程に深さを増し南端では30cmを測る。断面形は、逆台形状を有する。埋土は砂礫混ざりの灰茶色土層で、埋土中より近世陶磁器類を中心とする多量の遺物が出土している。土師器灯明皿(819～821)、肥前産青磁染付碗(823)、同じく蛇の目釉剥ぎ皿(825・826・829)、尾戸産碗(824・827)、近世磁器壺(828)、泥岩製砥石(830)などが出土している。

先述のようにSD78は、位置関係、出土遺物、規模などからSD67と一連の溝になる可能性がある。

(出原)

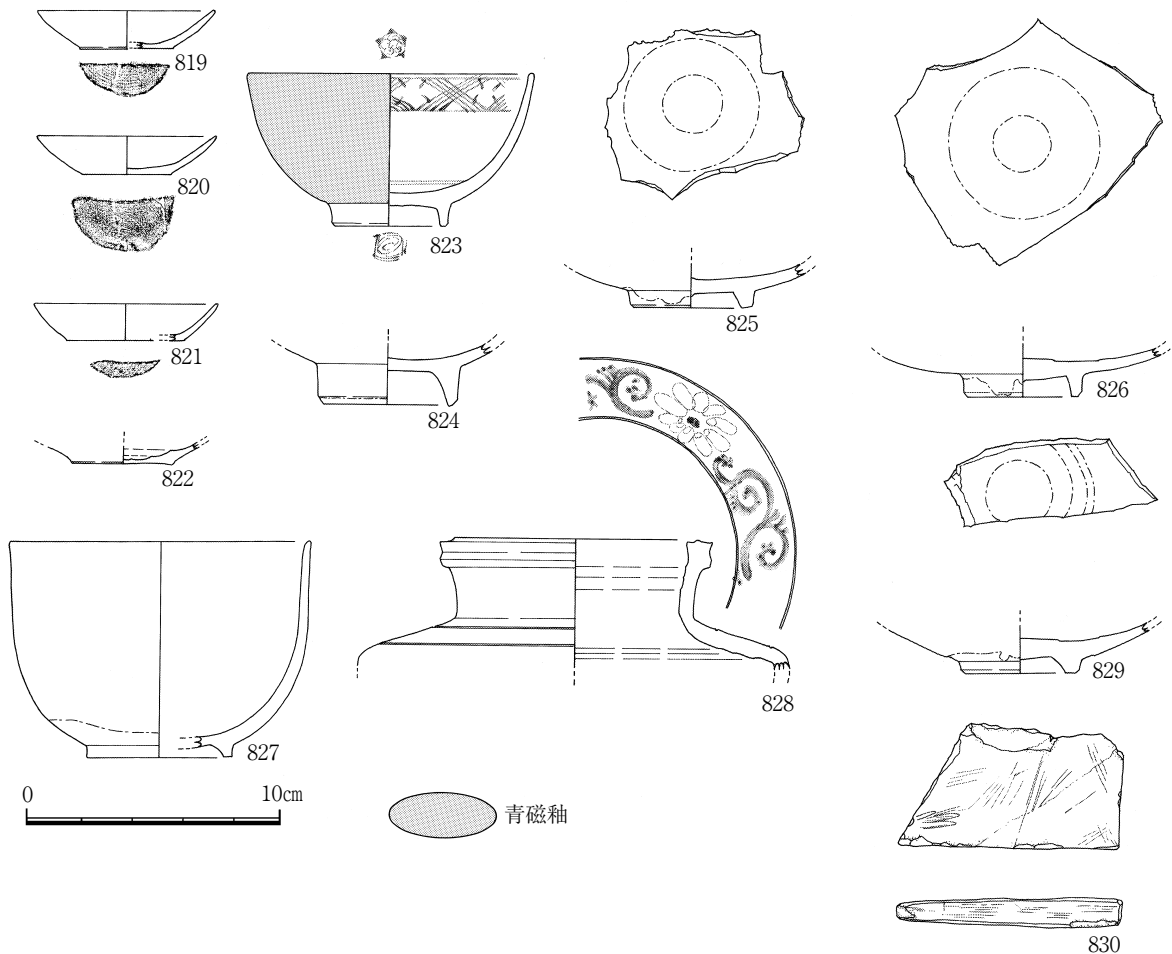


Fig.111 SD78出土遺物実測図

(4) 性格不明土坑

SX 4 (fig.112)

調査区の中央部に位置し、北辺の一部は近世土坑SK74に切られて存在する。検出規模は長軸3.2m、短軸1.5mであり、深さは15~24cmである。底部は幾つかの平らな面を有しており、壁はやや急に立ち上がる。調査区の設定上西への広がりを確認し得なかった。埋土は部分的に黒色土（黄色砂粒、灰色土混）が存在するが、概ね暗灰色土である。

出土遺物は破片であり、陶器1点、土師器1点が存在している。（藤方）

SX 5 (fig.112・114)

調査区の中央部北に位置し、近世の溝SD68を切って存在する。調査区の設定上遺構の北への広がりを確認し得なかった。検出規模は東西1.7m、南北1.6mであり、深さは12cmを測る。底面は弱く窪んでおり、壁は緩やかに立ち上がる。

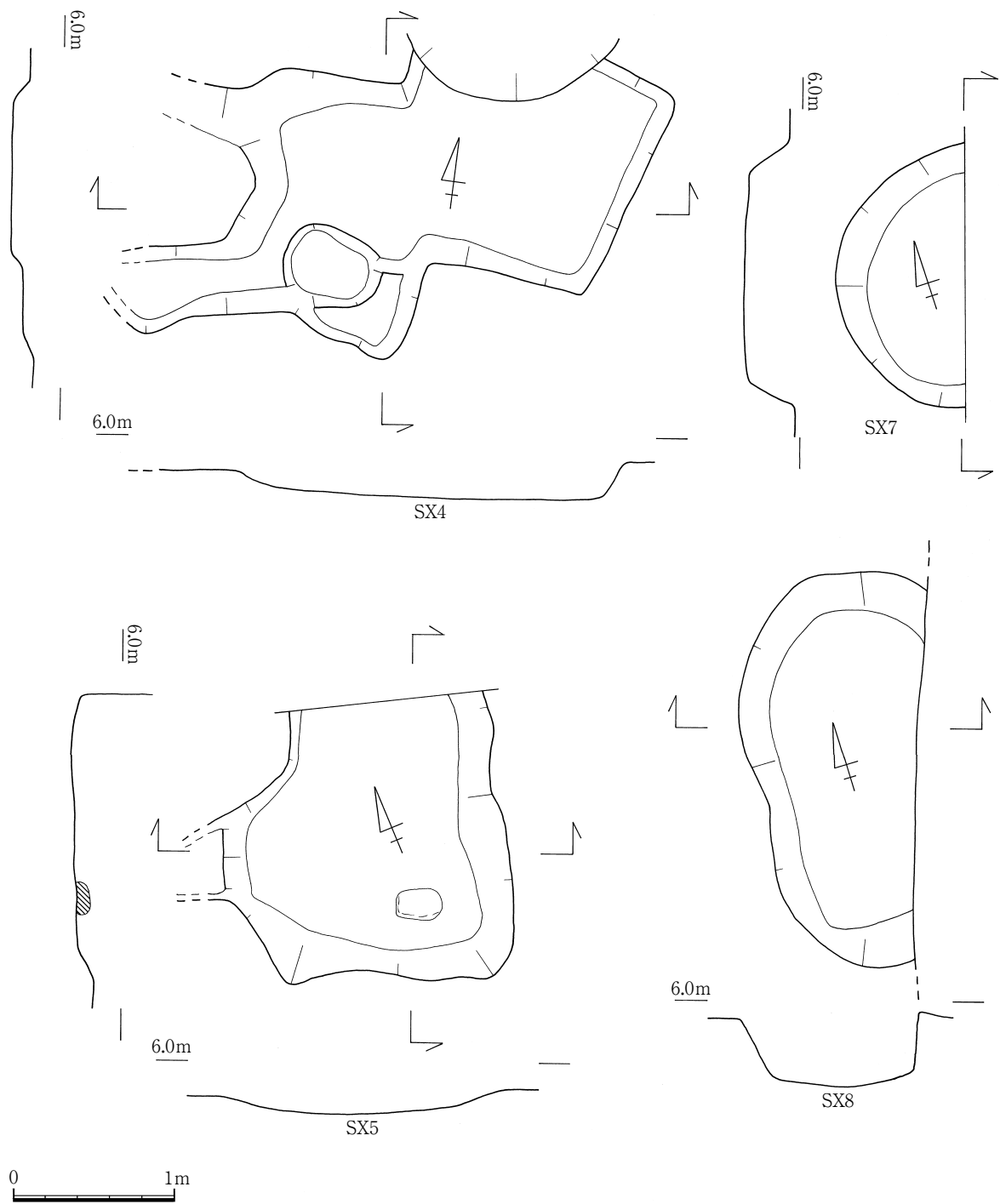


Fig.112 SX4・5・7・8平面・エレベーション図

出土遺物の中で図示できるものは、磁器の猪口（831）、土師器の小皿（832）、磁器の煎茶碗（833）であり、他に破片として磁器7点、陶器4点、土師器2点、瓦2点が存在している。（藤方）

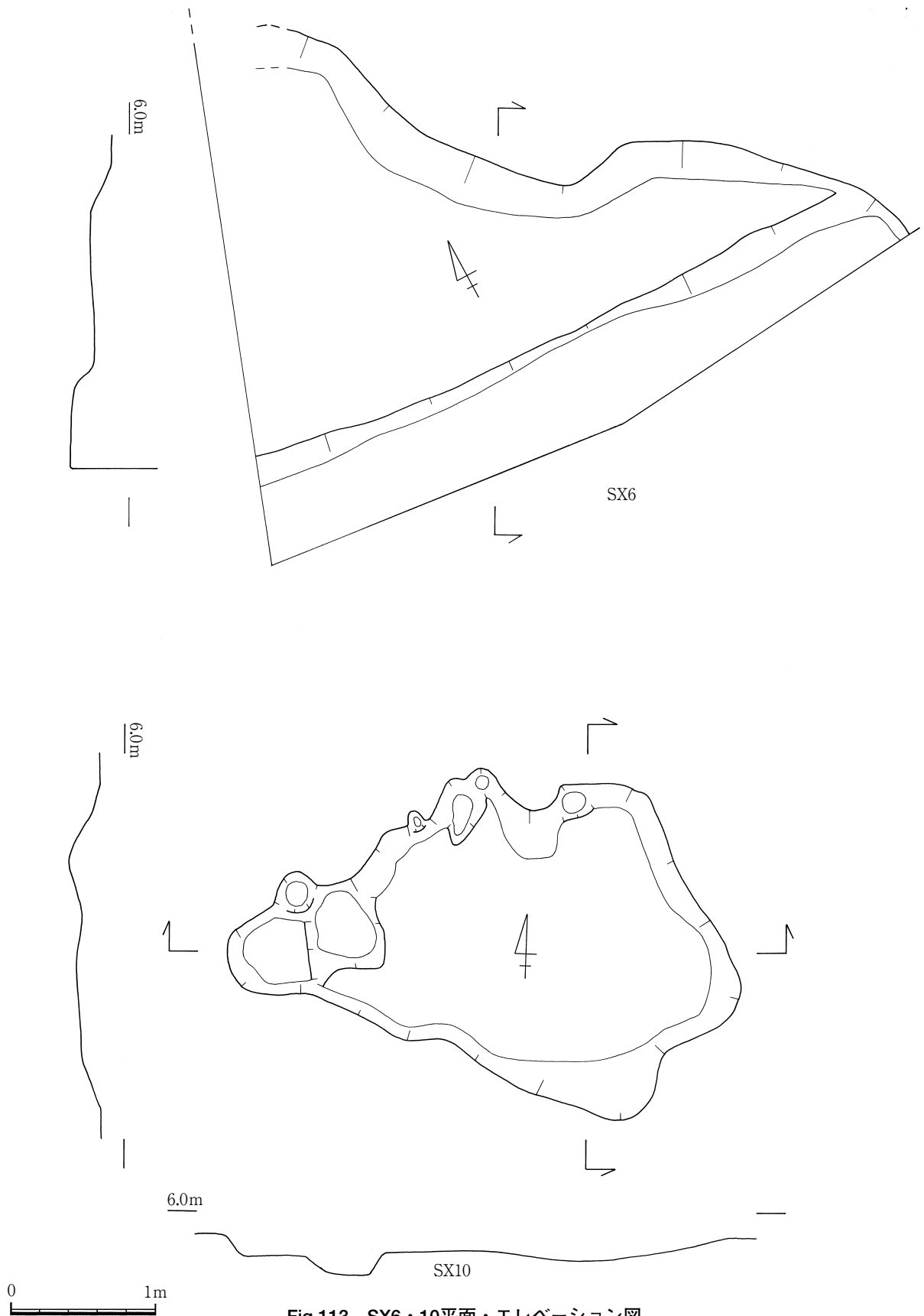


Fig.113 SX6・10平面・エレベーション図

SX 6 (fig.113)

調査区の東部南張り出し部分南端に位置し、近世の溝SD55・56に切られて存在する。検出規模は東西4.8m、南北最大3.5mであり、深さは約30cmを測る。北から緩やかに下降し、段部を有して更に深くなる。埋土は黒色土単純一層である。底面から弥生後期土器の破片が多く出土しており、この時期に機能していた何らかの遺構か自然の落ち込み部分と考えられる。上部及び南端部は近世以降に於いて改変を激しく受けており、ここでは性格不明土坑として扱う。

出土遺物は弥生後期土器破片が90点である。（藤方）

SX 7 (fig.112)

調査区の東端に位置し、東壁によって隔されて存在する。検出規模は南北1.6m、東西0.8mであり、深さは約30cmを測る。埋土は主として黒色土及び黄色砂礫である。

調査I区で検出したSX 1～3と同様な形態、堆積状況を示すものであり、時期・性格共不明確である。（藤方）

SX 8 (fig.112)

調査区の東部に位置し、東側は近世の溝SD61によって切られて存在する。検出規模は南北2.3m、東西1.1mであり、深さは約40cmを測る。

SX 7と同様、時期・性格共不明確である。（藤方）

SX 9 (fig.114・115)

調査区の中央部に位置し、南端部でST 8を切り、南西部では近世土坑SK75によって切られて存在する。検出規模は東西5.6m、南北最大5.5mであり、深さは15～24cmを測る。底部は凹凸が激しく一様でない。埋土は暗灰色土であり、円礫を多く含んでいる。

出土遺物として図示できるものは834～857である。

834は肥前産の紅皿であり、19世紀のものである。835は染付の煎茶碗、836は染付の碗、837は磁器の瓶底部、838は能茶山産の碗、839は瀬戸・美濃産の端反り碗、840・841は広東茶碗である。842～844は磁器の蓋である。842は小壺の蓋、843は能茶山産の可能性を持つ。844は能茶山産であり、摘み部内に「茶」銘の一部分見える。847は波佐見窯系の小皿か蓋であり、18世紀後半のものである。845・846は磁器の鉢、848は陶器の皿、849は陶器の椀底部、850は陶器の蓋、851は陶器の播鉢口縁部、852は陶器の花筒と考えられる。853は陶器の鉢、854は陶器の壺底部、855・856は肥前産の徳利であり、18世紀後半～19世紀中頃のものである。857は軒平瓦であり、瓦当文様として均整唐草紋を施すと考えられる。他に破片として磁器24点、陶器22点、土師器1点、瓦器1点、瓦3点が存在している。（藤方）

SX 10 (fig.113・115)

調査区の中央部北に位置し、西部で柱穴に切られて存在する。平面形は不整楕円形を呈し、長軸

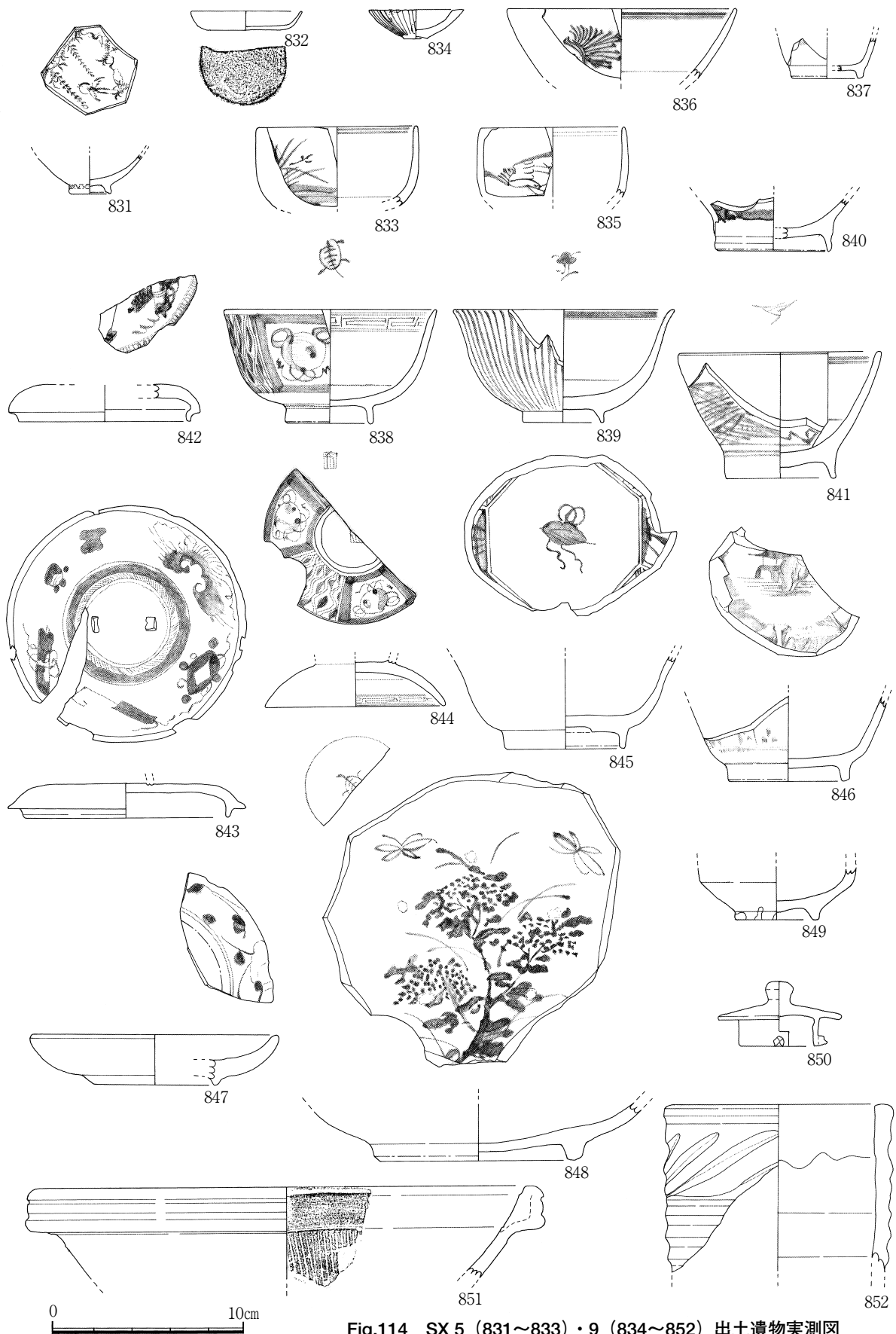


Fig.114 SX 5 (831~833)・9 (834~852) 出土遺物実測図

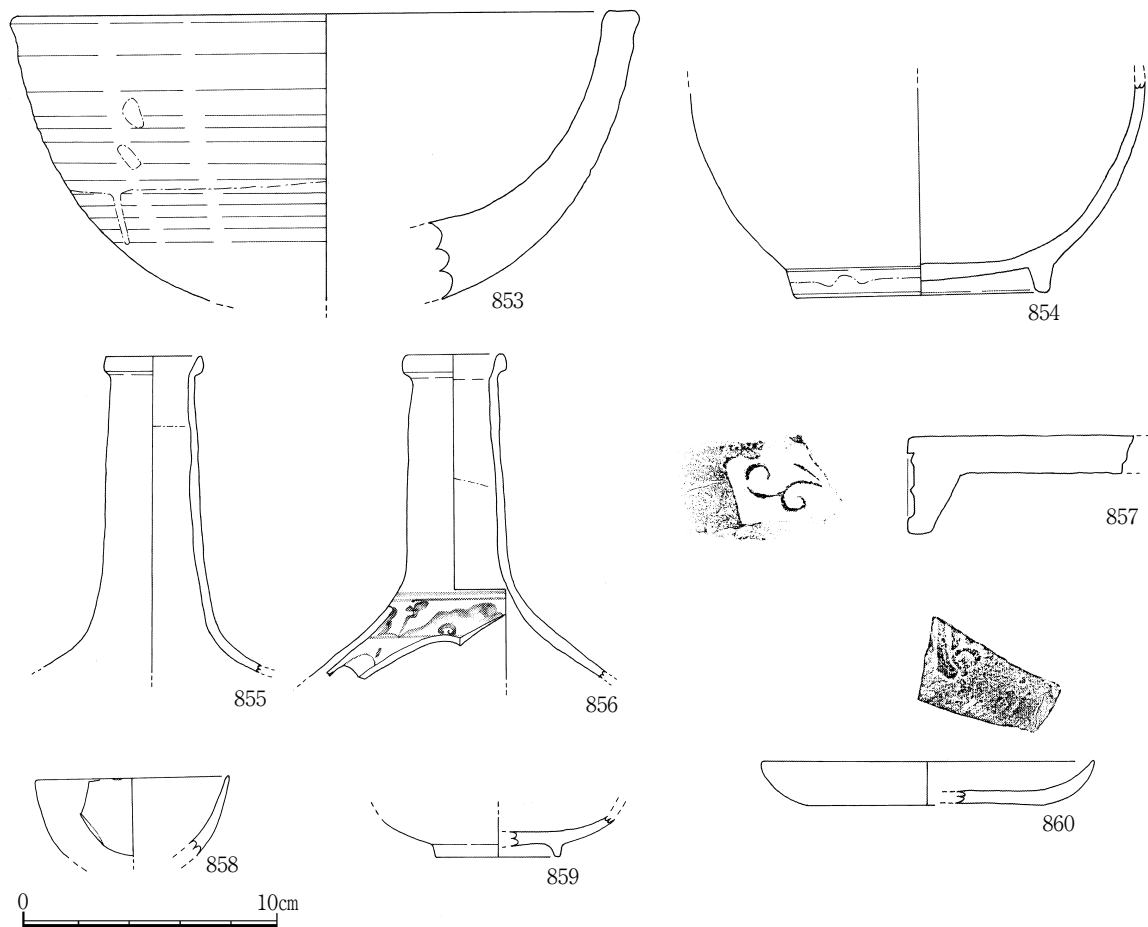


Fig.115 SX9・10出土遺物実測図

方向はN-88°-Wである。規模は東西3.5m、南北2.3mであり、深さは約10cmを測る。埋土は灰色土（黒色土、黄色土混）である。

出土遺物として図示できるものは858～860である。

858は磁器の碗口縁部、859は磁器の皿であり、19世紀のものである。860は土師器の皿であり、見込みに陽刻を施している。（藤方）

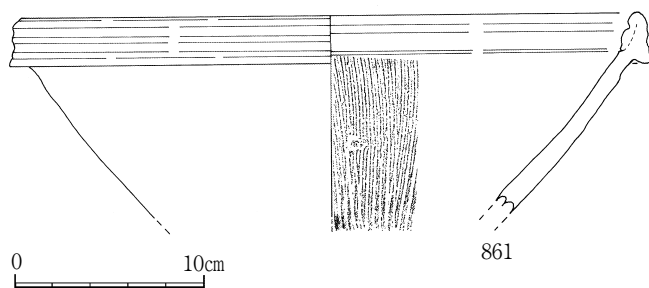


Fig.116 P1出土遺物実測図

(5) ピット

P 1 (fig.116)

調査区の東部に位置し、近世の溝SD56を切って存在する。平面形は長径64cm、短径50cmの規模を持つ楕円形を呈し、深さ

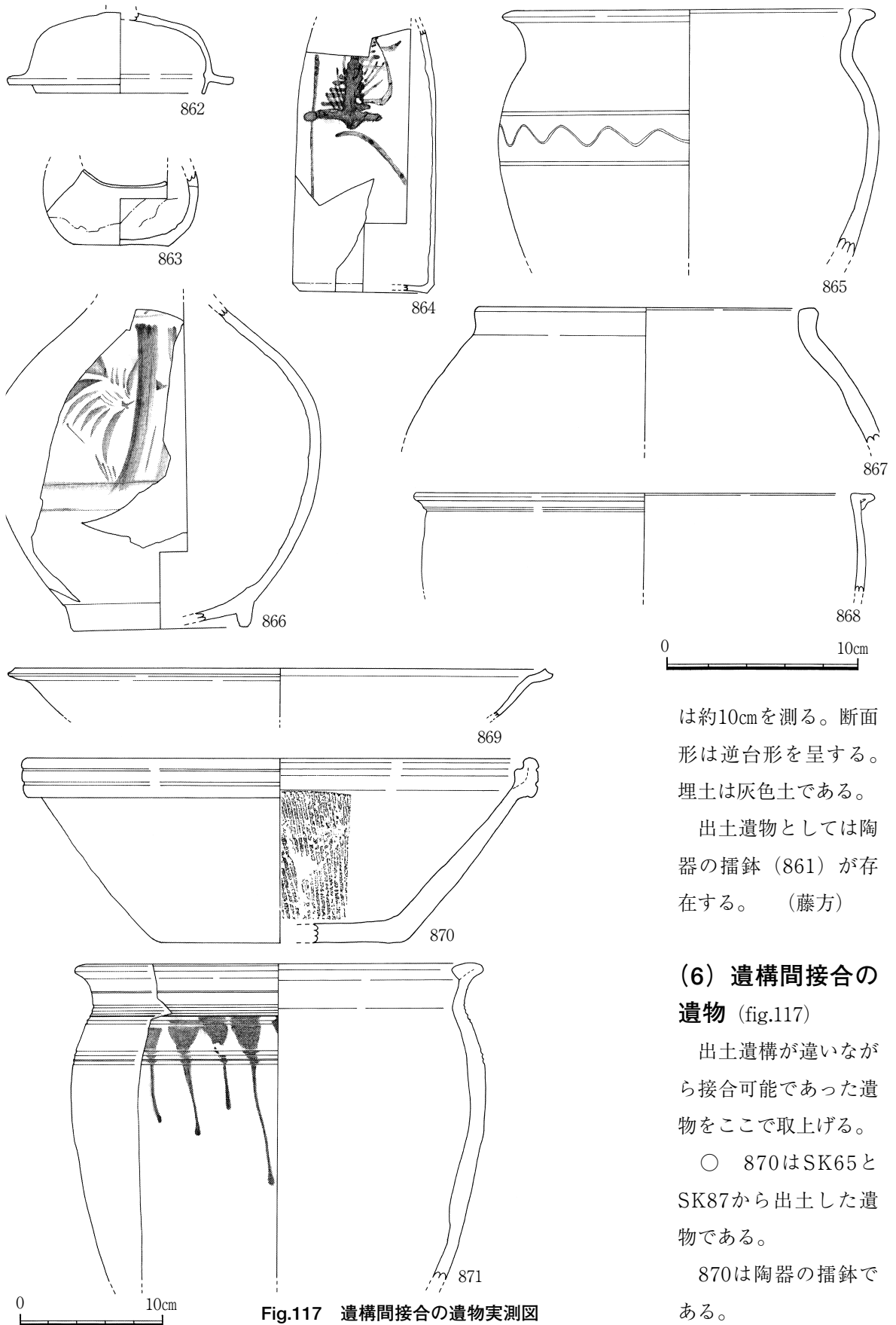


Fig.117 遺構間接合の遺物実測図

は約10cmを測る。断面形は逆台形を呈する。埋土は灰色土である。

出土遺物としては陶器の挿鉢（861）が存在する。（藤方）

(6) 遺構間接合の遺物 (fig.117)

出土遺構が違いながら接合可能であった遺物をここで取上げる。

○ 870はSK65とSK87から出土した遺物である。

870は陶器の挿鉢である。

- 862～865・867・869はSK87とSE 9から出土した遺物である。
862は陶器の蓋、863は陶器の瓶底部、864は磁器の瓶底部、865は陶器の甕口縁部、867は土師器の火消し壺口縁部、869は瓦質の焙烙口縁部である。
- 866はSE 5とSX 9から出土した遺物である。
866は肥前産の徳利であり、18世紀後半から19世紀中頃のものである。
- 868はSE 6とSD62から出土した遺物である。
868は陶器の鉢口縁部である。
- 871はSE 9とSX 9から出土した遺物である。
871は陶器の甕である。 (藤方)

(7) 遺構外出土の遺物 (fig.118～121)

調査区内では近世の遺物包含層は確認できなかったが、遺構としては捉え得ない小さな窪みが存在しており、ここには近世以降の陶磁器や瓦などが多く含まれていた。調査区の東部特にSE 5周辺から出土した遺物の資料を遺構外出土遺物としてここに図示する。

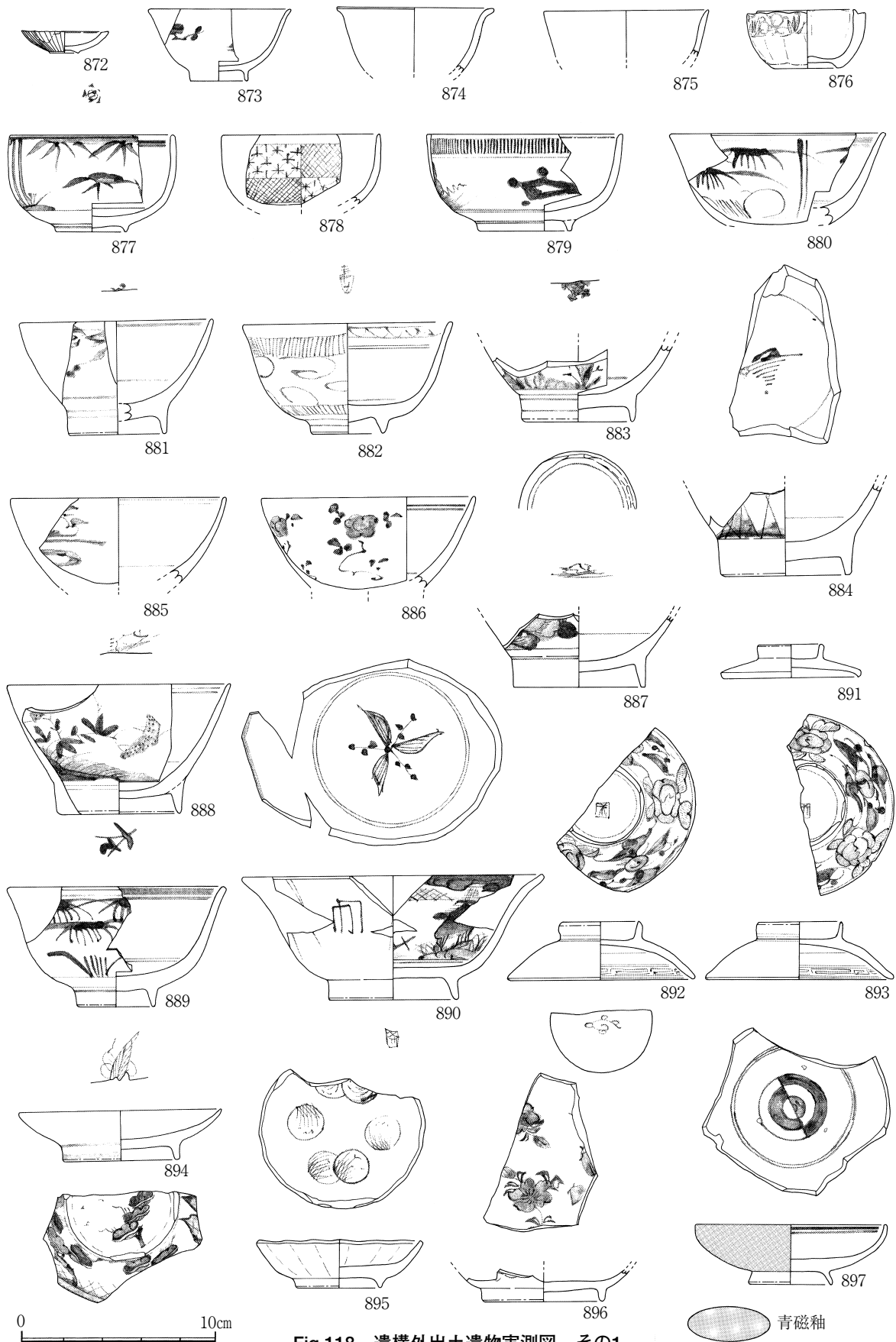


Fig.118 遺構外出土遺物実測図 その1

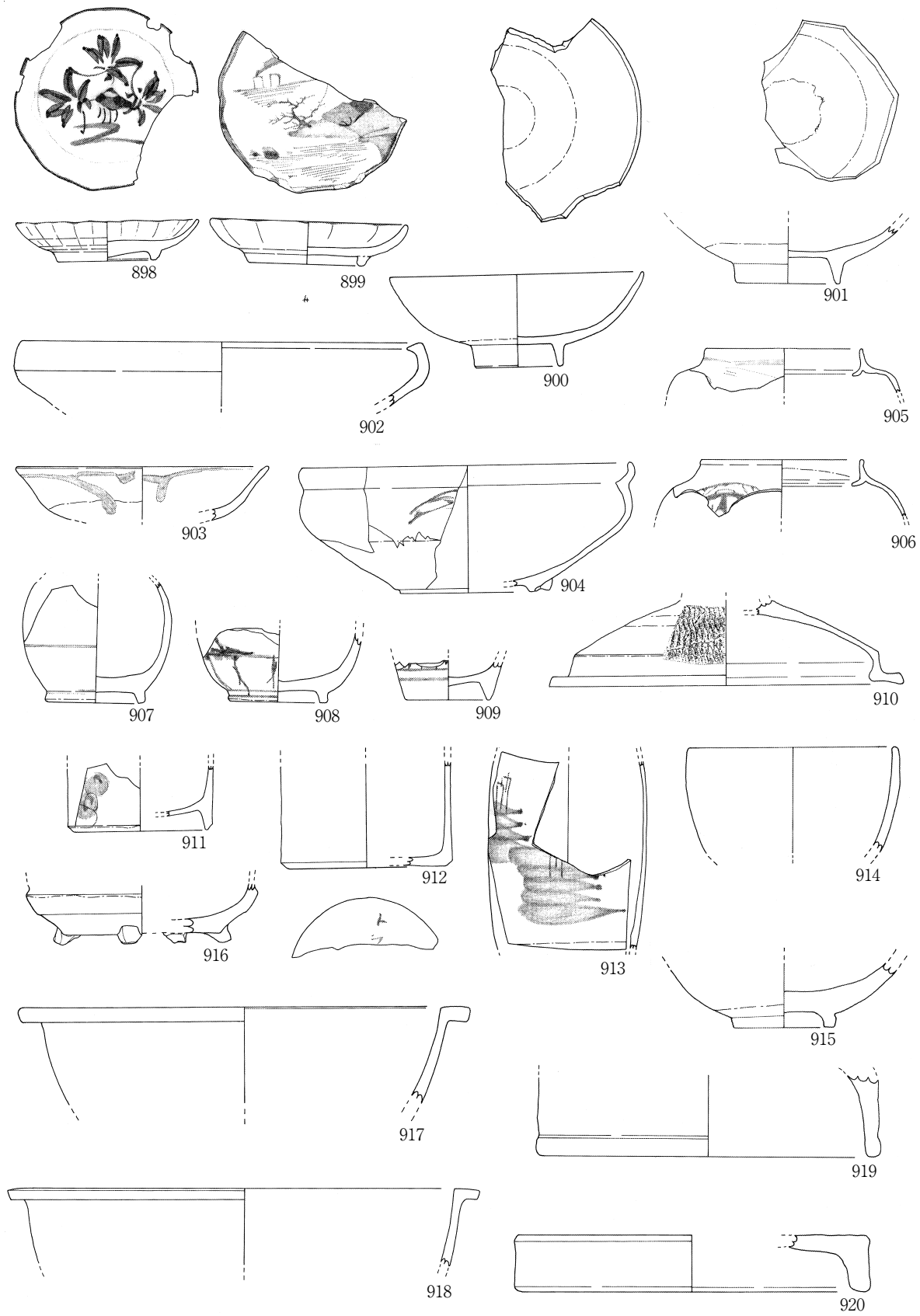


Fig.119 遺構外出土遺物実測図 その2

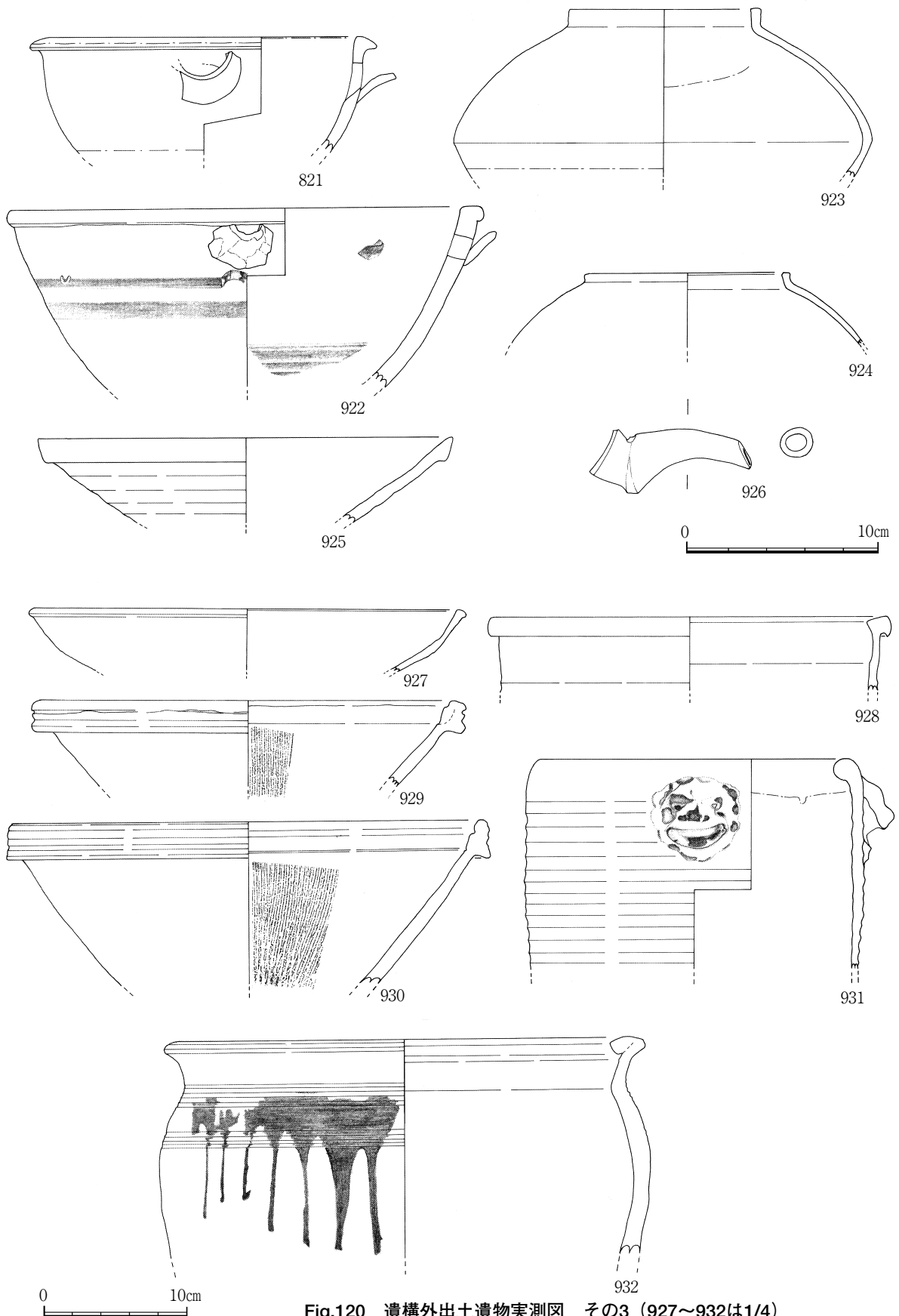


Fig.120 遺構外出土遺物実測図 その3 (927~932は1/4)

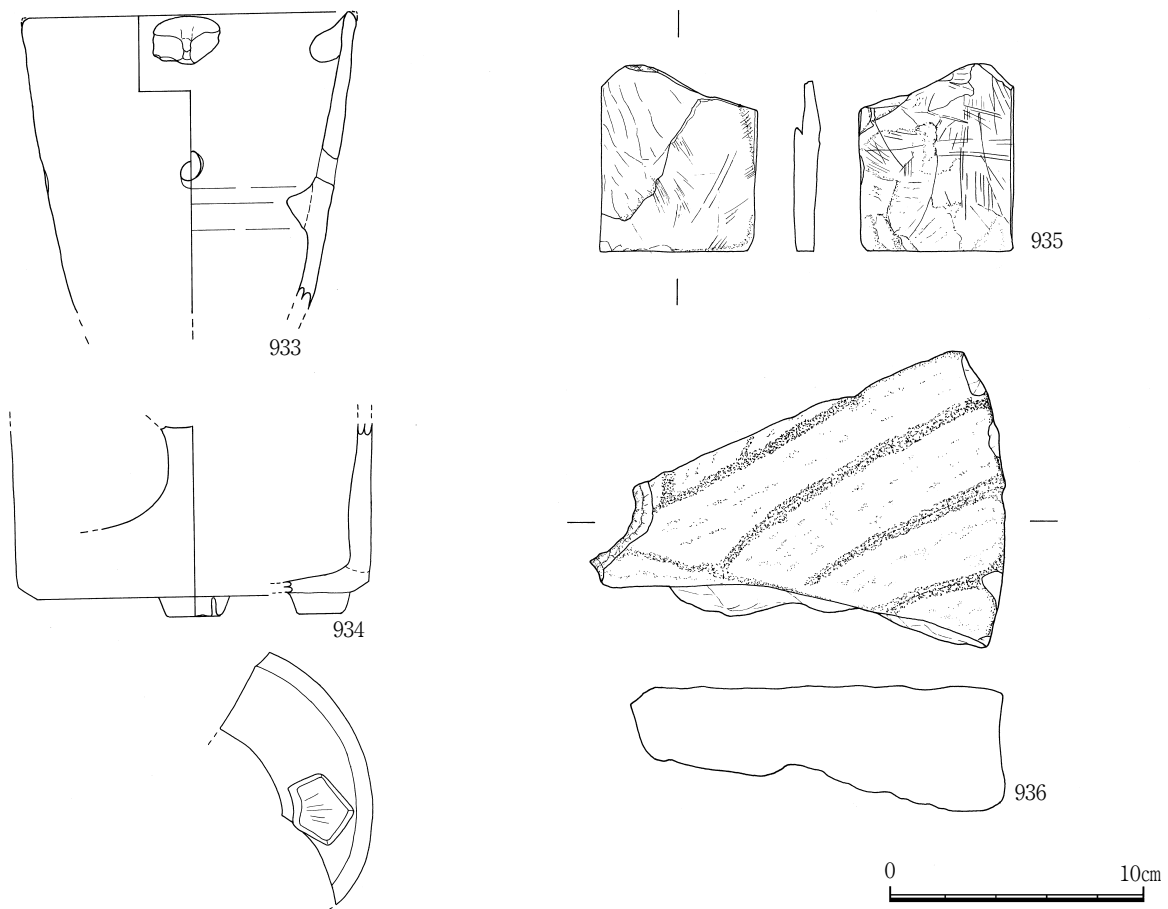
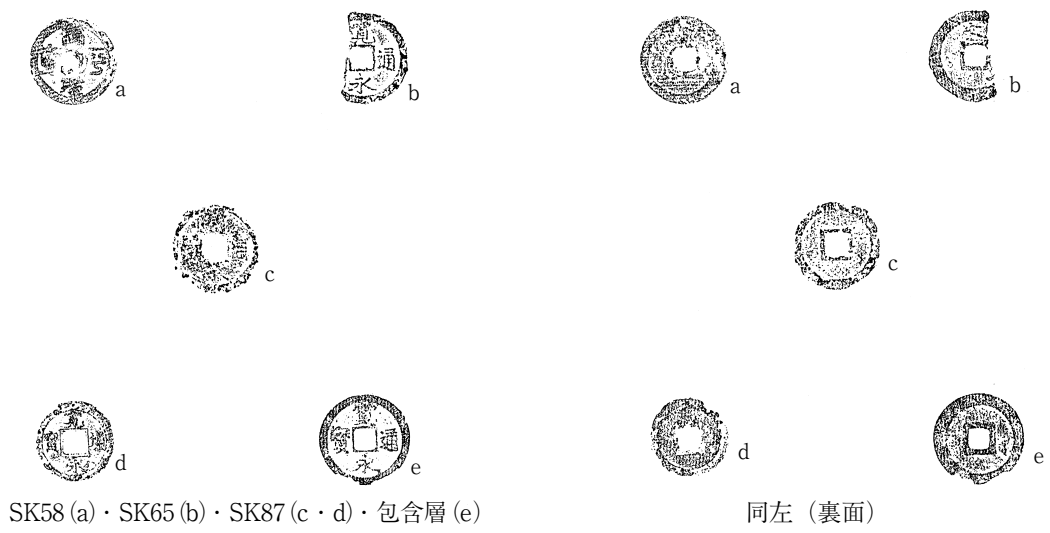


Fig.121 遺構外出土遺物実測図 その4



SK58 (a) · SK65 (b) · SK87 (c · d) · 包含層 (e)

同左 (裏面)

Fig.122 出土古銭拓本 (S=1/2)

第Ⅲ章 考 察

1 小籠遺跡出土の弥生後期土器及び古式土師器

出原 恵三

今次調査においては、多量の弥生後期から古墳時代初頭の土器を多量に検出することができた。その特徴としては、東阿波型土器を中心とする搬入土器が数多く出土したことやこれまで高知平野では僅少であった支脚がまとまって出土したことを挙げるができる。搬入品や支脚については、別項で述べることとし、ここでは最も出土量の多かった在地の壺、甕、鉢、高坏などについて既成の土器編年や周辺の諸遺跡との比較をしながら若干の考察を試みるものである。

高知平野における後期土器の編年は、凹線文や内面ヘラ削りなど中期末の特徴を残す前半と叩き技法の顕在化、壺の減少と甕・鉢の著しい増加が見られる後半に大別することができる。そして前半は4つの小期(1~4期)に、後半は3つの小期(5~7期)に細分が可能である⁽¹⁾。古式土師器は叩きの有無や内面ヘラ削り、器種組成の変化などから1~4期の編年が組まれている⁽²⁾。しかしながら在地土器の後期後半から古式土師器1期への移行は、丸底の増加や鉢の形態変化などを指標とすることができるものの、全体としては極めて漸進的な変化であり、技法・形態上の顕著な画期を求めることはできない。

1) 弥生後期土器

(1) 前半の土器

ST11は、明らかに叩き成形が顕在化する以前の段階のものである。資料が少ないために詳細な時期を決めることはできないが、2~3期に該当させることができる。昨年度I区で検出したST3とほぼ同時期と考えられる。

(2) 後半の土器

6期の土器

ST17出土の土器を当てることができる。床面一括の良好な資料である。口縁部で見ると甕が最も多く(40点)、ついで鉢(18点)、壺(13点)で支脚は認められない。壺は広口壺(309・311)と複合口縁を有するもの(308・310)があり、広口壺の311は口唇に櫛描波状文と刺突による加飾を施している。胴部は球形を呈し外面にヘラミガキを施している。甕はすべて叩き成形によるもので、形態は長い砲弾状の胴部から口縁部がくの字状に外反するタイプに統一されている。多くの場合外面下半の叩きを縦ハケ調整で消している。324の内面下半には顕著なヘラ削り(下→上)が認められる。高知平野の叩き盛行期における内面ヘラ削りは極めて希である。また底部はすべて平底である。鉢もすべて叩き成形で、口径30cm前後の大型品(330・331)と10~17cmの小型品(325~329)がある。底部は一例を除いてすべて平底である。

7期の土器

ST5・7・9・18・19・21・22出土の土器が該当する。器種は壺、甕、鉢、高坏、蓋の他に新たに

支脚が登場する。組成を見るとST21で壺が32.1%を占めているが、それ以外では壺が減少し鉢の比率が増大している。壺は、広口壺(1・2・62・349・363・400・411～413)、複合口縁壺(3・4・60・61・364・401)の他に、口頸部が直線的にのびるタイプ(410)や直立気味の頸部から口縁部が僅かに外反するタイプが見られる。広口壺の口唇部は400が櫛描波状文、411が貝殻による圧痕、412と413が列点文で、複合口縁壺の口縁部外面も60・364・401が櫛描波状文で加飾されている。

甕は、基本的形態・成形技法共にST17出土のものと同様だが、胴部外面のハケ調整の範囲が少なくなり、新たに丸底や尖底が登場してくる。丸底の比率は1割～4割と遺構によってかなりばらつきがあるが、主流は平底である。尖底は全体を通して数例と極めて少ない。鉢も基本的な形態や成形技法は6期のもので変化ないが、甕と同じように丸底や尖底が登場するようになる。しかし主流は平底である。高杯は良好な資料に恵まれていない。この他ST5出土の小型丸底壺は、当地域ではこれまで古式土師器1期に登場する器種であるが、今回は床面からの出土であり当該期に属するものとしなければならない。

2) 古式土師器

ST8・12～14・16・20及びSK113が該当し、すべて1期に属する。土器組成上の変化としては、壺の構成比率が低下し、ST13を除くとすべて1割未満となる。その分、鉢が増加しST8・12～14、SK113では甕の点数を上回り、全体の5割近くを占めるようになる。また高杯・支脚も弥生後期7期に比べてわずかではあるが増加している。新しい器種としては僅少ではあるが焼成前穿孔の甑が登場する。壺は、伝統的な広口壺(126～130・132・190・191・197・244・247・248・250・255・381・447)や複合口縁壺(131・192・194・195・198・251・252)、口頸部直行タイプ(196)の他に、口縁部がラッパ状に開く二重口縁壺(112・133・193・448・449)が新たに登場する。このタイプはST12出土の112が在地産である他は後述するようにすべて搬入による東阿波型土器である。また広口壺と複合口縁壺には少数例(197・250・131・198)ながら口縁部外面を櫛描波状文などで加飾したのが見られる。これまでの高知平野の調査では、当該期における加飾壺の検出例は認められなかったものであり、弥生後期7期の内に終焉を迎えると考えられていたものである。さらに広口壺で頸部下端に加飾した粘土帯を貼付した例(132・255)も当該期の高知平野では初めての例である。

甕は、形態・技法共に弥生後期6・7期を踏襲している。丸底の割合は、2～4割を示し後期7期に比べてわずかながら増加しているが、顕著な違いは認められない。同じ高知平野でも西分増井遺跡⁽³⁾やひびのき遺跡⁽⁴⁾、五軒屋敷遺跡⁽⁵⁾の例では、丸底が5割以上を占めている。丸底化の進行が顕著でないのは当遺跡の特徴とすべきであろうか。次に甕の形態的变化を示すものとして少数例ではあるが、注目すべきものとしてST12の115・116、SK113の456を挙げることができる。すなわち長胴、太筋叩きと言う伝統的な形態が主流を占める中で、球形丸底化がほぼ完了し456に至っては叩き痕が見られず、他の2例においてもハケ調整の及ぶ範囲が著しく広い。これは弥生後期6期で見られた胴部下半ハケ調整とはその手法を異にしており、古式土師器2・3期に顕在化する特徴である。また116の胴部内面には、ヘラ削りが認められる。かかる技法も当地域の在地土器にはこれまで見られなかったものである。やはり2・3期を指向した技法として位置付けることができよう。

鉢は、上述したように土器の中で最も多くを占める器種である。当該期の高知平野の諸遺跡においても鉢の出土は多いが、甕を凌駕したのは今次調査例が初めてである。基本的には弥生後期の延長線上にあるが、2つの点で異なった技法・形態上の特徴が見られる。1つは、叩き成形による深い鉢が主流を占める中で、手捏ねによる成形で浅い皿状のタイプ(43・163・228・282・283)が定量出現することである。2つめは、外面には叩き痕をほとんど残さずひび割れ状の亀裂が顕著に見られることを特徴とするタイプ(148・158・215・216・218～222・224・225～227・275)である。これらの内226と227以外はしっかりした平底を有している。伝統的な叩き痕跡を残すタイプが法量にばらつきがあるのに対して、このタイプは口径11～14cm、器高5～6cmの中におさまり、一定の規格性を有している。前者の手捏ねによる皿状のタイプの出現は、当該期の目安の一つとして位置付けられてきたものであるが、後者は今次調査によって初めてその存在が明らかになったものである。このタイプの成形技法を詳細に見ると、底部付近にかすかに叩き痕跡の認められるものがあることから、叩き成形後に丁寧なナデ調整を施したものを考えられる。しかし弥生後期以来の伝統的タイプが丸底化し、叩き+ハケ調整あるいは叩きっぱなしによる技法を用いるのとは大きな違いである。この形態・技法上の差異は如何なる意味を有しているのであろうか。高知平野の古式土師器2期の実態は必ずしも十分に把握できていないが、3期には平底ナデ調整の鉢が見られる。この平底、ナデ調整の鉢は、古式土師器1期の中にありながら2・3期を指向タイプの初現として理解しなければならない。また、図示し得た15点中11点までがST14から出土していることも注目すべき現象であり、将来は古式土師器1期が細分される可能性も有していよう。

高杯は、ST8・13から良好な資料が出土している。杯部が椀状を呈し脚部がハの字状に開くタイプ(54・55・174・175・178)と屈曲して立ち上がる杯部に柱状部から屈曲して開く脚部がつくタイプ(56・167～172・287)に大きく分けることができる。両者ともに弥生後期7期から継続するものであるが、後者のなかにはエンタシス状の中空の脚上部内面に小円孔を穿った例(232)が見られる。これらの高杯は基本的には、脚部を杯底部の中央に挿入する分割成形技法が用いられている。甑は僅少であるが、底部に一孔を穿つもの(229・284)と多孔を穿つもの(398)が見られる。

3) まとめ

以上小籠遺跡出土の弥生後期土器および古式土師器について既成の編年に基づいて見てきた。当該期は、高知平野において最も遺跡が多く分布し土器資料も質量ともに充実している⁽⁶⁾。しかしすでに触れたように、弥生後期後半から古式土師器への変化は極めて漸進的であり、しかも各器種において形態的な統一が進み、器形が単純化することから個々の遺物から変化の画期を見出すことは難しい。これは古式土師器1期に至って新しい技法を駆使した他地域からの搬入品を認めながらも、それらが在地の土器生産になんら影響を与えていないことを示している。すなわち高知平野においては、叩き技法が全面的に展開する弥生後期後半以降、古式土師器1期までは、いわゆる伝統的V様式⁽⁷⁾の諸段階として理解することができる。このような特徴を持った高知平野の土器の展開の中であって、小籠遺跡の土器に見られる弥生後期6期から古式土師器1期への移行は、甕の丸底化や皿

状鉢の頻度の僅少さ、加飾壺の存続などに見られるように周辺の諸遺跡に比べて更に変化に乏しいことが指摘できる。このことは、これまで明らかでなかった高知平野のなかにおける地域性の存在として理解しなければならない。

一方、古式土師器2・3期を指向した甕や鉢は、これまで1期には認められなかった存在である。

古式土師器1期が細分できるのか、今後資料の増加を待って検討しなければならない。古式土師器2期は、岡本健児氏が叩き技法の衰退期として位置付けられた馬場末式⁽⁸⁾を該当させたものであるが、すでに触れたように当型式の土器組成や具体像は必ずしも明らかになっていないのが実態である。おそらく、見通しとしては2期に至って主体を占めるタイプとして理解することができる。今後の資料の増加を期待したい。

	壺 (%)	甕 (%)	鉢 (%)	高杯 (%)	支脚 (%)	計 点数
ST 5	12 (10.3)	53 (45.7)	48 (41.4)	2 (1.7)	1 (0.9)	116点
ST 6			2			2
ST 7	8 (15.4)	21 (40.0)	22 (42.3)		1 (1.9)	52
ST 8	11 (8.5)	44 (33.8)	66 (50.8)	8 (6.2)		130
ST 9	5 (7.6)	34 (51.5)	25 (37.9)	2 (3.0)		66
ST10		7	1			8
ST11	3 (20.0)	5 (33.3)	6 (40.0)	1 (6.7)		15
ST12	1 (10.0)	3 (30.0)	5 (50.0)	1 (10.0)		10
ST13	25 (13.1)	61 (31.9)	88 (46.1)	9 (4.7)	8 (4.2)	191
ST14	21 (9.3)	71 (31.4)	121 (53.5)	4 (1.8)	9 (4.0)	226
ST15		2	1			3
ST16	17 (9.6)	82 (46.3)	45 (25.4)	4 (2.3)	29 (16.4)	177
ST17	13 (18.3)	40 (56.3)	18 (25.4)			71
ST18	4 (7.8)	11 (21.6)	33 (64.7)		4 (7.9)	52
ST19	14 (14.1)	32 (32.3)	43 (43.4)	6 (6.0)	4 (4.1)	99
ST20	11 (9.8)	68 (60.7)	31 (27.6)		2 (1.8)	112
ST21	9 (32.1)	12 (42.9)	7 (25.0)			28
ST22	10 (8.9)	48 (42.9)	50 (44.6)	2 (1.8)	1 (0.9) 蓋1 (0.9)	112
SK113	2	14	50	2		39
計	166	608	633	41	27	1475
ST 1	1	2	4			7
ST 3	3	2	1			6

小籠遺跡出土の弥生時代後期～古墳時代初頭の遺構別土器組成表 (ST1・3は94年度検出)

註)

- (1) 出原恵三「土佐の弥生後期土器編年」『瀬戸内の弥生後期土器の編年と地域性』古代学協会四国支部第四回大会資料 1990年
- (2) 出原恵三『拝原遺跡』高知県香我美町教育委員会 1993年
- (3) 出原恵三『西分増井遺跡群発掘調査報告書』高知県春野町教育委員会 1990年
- (4) 岡本健児・広田典夫『ひびのき遺跡』高知県土佐山田町教育委員会 1977年
- (5) 角谷和男『五軒屋敷遺跡調査報告書』高知県教育委員会 1984年
- (6) 出原恵三「弥生から古墳へ—前期古墳空白地域の動向」『考古学研究』第40巻2号 考古学研究会 1993年
- (7) 酒井龍一「和泉に於ける伝統的V様式に関する覚え書」『豊中・古池発掘調査概報』Ⅲ 豊中市教育委員会 1976年
- (8) 岡本健児「南四国における叩目のある弥生土器と土師器」『森貞次郎博士古稀記念・古文化論集』下 1982年

2 小籠遺跡出土の搬入品について

—弥生時代終末～古墳時代初頭—

泉 幸代

1994年度の1次調査で小籠遺跡⁽¹⁾出土の搬入土器はわずか2点であり、そのうち図示したのは甕1点(ST1-Fig.15)である。胎土は粗粒砂を含む赤茶色で、外面は縦方向のヘラ磨きがあり、内面は削りであるが産地は断定できない。もう1点は吉備系土器の細片である。

今年度(2次調査)の特徴としては徳島県で作られた東阿波型土器が多量に出土したこと、岡山県で作られた吉備型甕(完形品)が出土したことである。その他確認できた土器は畿内産の庄内式土器である。今回搬入された土器(口縁部が主)は29点(後述の表参照)になり、県内では例を見ないほど多い出土となった。これから本遺跡の搬入土器で最も多く確認できた東阿波型土器と完形品が出土した吉備型甕を中心に述べていき、畿内の土器にもふれていきたい。

1) 東阿波型土器

白亜系和泉層群分布地域に属する所で、三波川変成帯に由来する結晶片岩を含んだ特徴的な広口壺や甕などが黒谷川郡頭遺跡⁽²⁾(吉野川北岸に立地する)で多量に認められた。それらの土器は吉野川南岸の鮎喰川流域や気延山周辺を中心に展開する遺跡群に限定されることから、菅原康夫氏によって東阿波型土器⁽³⁾と名付けられた。

今回の調査で東阿波型土器の出土した遺構は細片も合わせると、竪穴住居8軒(ST5・8・12・13・14・15・16・21)と土坑4基(SK101・102・110・113)で、その他包含層からも出土している。そのうち器種の確認された東阿波型土器は17点になり、県内では最も多い出土となった。器種で分類すると壺6点、甕10点、高杯1点であり、甕(特に口縁部)が最も多く出土している。しかし、残念ながら底部の分かるものは1点も出土していない。

(1) 壺

壺は2タイプ出土している。二重口縁壺と直口壺である。

A類 二重口縁壺

133(ST13)、193(ST14)、448・449(SK113)が該当する。色調は灰褐色～にぶい褐色であり、結晶片岩と雲母が含まれている。133・193・449は大きく外反する頸部と屈曲して外上方に立ち上がる口縁部とから成り立ち、口縁端部が丸くおさめられている。448は表面の剥離が激しく断定はできないが同様な形態と思われる。また包含層(SK113の上部)から出土している口縁部は448の胎土に類似しているため、同一個体の可能性もある。

B類 直口壺

ST14から出土している196は口縁部が直線的に外上方にのびる。外面は横ナデの後縦ヘラ磨き、内面は横ナデ調整である。胎土には結晶片岩と雲母が含まれている。

(2) 甕

甕は口縁端部を摘み上げるもの、口縁部が外反して端部を丸くおさめるもの、『く』の字状に大きく外反して立ち上がる口縁部をもつものの3タイプが出土している。これらはST15(241)、SK110(524・526・527)、SK113(453・454)、ST8(937他)、包含層から出土したものである。

A類 口縁端部を摘み上げるタイプ

241・453・524・526・527・937が該当する。

937 (Fig.123) のように口縁端部を摘み上げ、口縁先端が三角形状を呈している。453は摘み上げた先端が丸くなっており、526は口縁先端が摩耗している。口縁部の内、外面は横方向の強いナデ仕上げである。図示していないがST8や包含層からもこのタイプの口縁部が出土している。

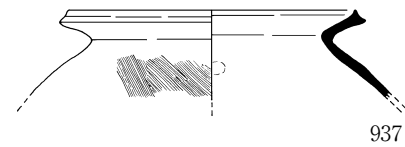


Fig.123 ST 8 出土の東阿波型土器実測図 (S=1/4)

453は口縁端部の上下を僅かに肥厚させて、端面には強い横ナデによる凹みがある。527と937の体部外面は右下がりのハケ調整で、胴部内面の上部は453と同様、指頭圧痕が顕著に見られる。937はこの中でも外反が最も鋭いものである。

B類 口縁端部が丸みを帯びるタイプ

図示していないがST8から出土の口縁部が該当する。口縁部の内・外面は横方向の強いナデ仕上げであり、口縁端部を摘み上げない畿内第V様式の系統をひくものである。

C類 『く』の字状に大きく外反して立ち上がる口縁のタイプ

454は倒卵形の体部をもち、内面は指頭圧痕より小さい圧痕が見られる。ここでは器種を甕としているが、広口壺となる可能性もある。

古代のSK110から出土の524・526・527は北隣に接するSK113からの混入である。ST8の937は床面から出土し、図示し得なかったA類の甕はベット状遺構から、B類の甕は埋土中からの出土である。

出土した甕は倒卵形の体部を持ち、丸底の可能性が強いと思われるが、残念ながら底部の確認できるものが1点もないので断定はできない。

(3) 高杯

291は胎土に長石、石英の粗粒砂を含むもので、外面細い原体によるヘラ磨きを施し、内面ハケ調整である。高杯は脚部1点のみの出土である。

(4) その他

細片がST5、8、12、13、14、SK101、102、包含層から出土している。これらは胴部の細片であるが、上記と同様の精選された胎土で薄い造りである。一部の細片には内面ヘラ削りがある。

上記の時期を想定すると徳島地域の編年で黒谷川Ⅲ式⁽⁴⁾ (県内はヒビノキⅢ式=古式土師器Ⅰ期)、古墳時代の初頭と考えられる。同じ黒谷川Ⅲ式の時期でも、SK113から出土の454はSK110の527より少し新しい時期のもの⁽⁵⁾である。

2) 吉備型甕

吉備地方南部平野は豊富な資料を持ち土器の様相も顕著な特色を示す地方であり、弥生時代後期後半になると吉備中枢部では規格性に富んで極めて特徴的な形態を有する甕が生産されている。これがボウフラというニックネームで呼ばれている吉備型甕である。この口縁部を上方に拡張するボウフラは口縁部径や胴部最大径などに高い規格性をもつのが特徴である。この甕は吉備地方の土器編年の百・古・Ⅱ⁽⁶⁾から漸進的にプロポーションが変化している。初期の段階では倒卵形で、時代が

進むにつれてふっくらとした下膨れの丸底になる。胴部外面は概ね縦ハケ調整後ヘラ磨き、内面は頸部直下から削りを施している。器壁は極めて薄く、厚い部分でも3mm前後、薄い部分では2mm以下になる造りである。

(1) ST14出土の吉備型甕

ST14は古墳時代初頭の堅穴住居址で、床面から完形の吉備型甕(211)が出土している。211の胎土は長石、石英、雲母などの細粒砂を含んでおり、口縁部はほぼ直立か内傾気味に立ち上がる。口縁部の外面は吉備型甕特有の櫛描沈線(7条単位)を巡らし、体部外面は縦ハケの後縦ヘラ磨きを施している。内面上部左上がりの削り、頸部以下左から右へのヘラ削り、中位以下は下から上への縦ヘラ削りで、下部は指頭圧痕が顕著に見られる。なお外面は煤けている。この甕は口径14.9cm、器高25cmで吉備地方では一般的な甕である。時期は吉備地方の下田所式⁽⁷⁾に相当する。

(2) その他の吉備土器

ST14以外から出土している吉備の土器はST8、13、16、18、SK99からであるが、細片ばかりで器種が断定できない。胎土は211のような淡黄色が多く、極めて薄い器壁である。

3) 畿内、その他の土器

今次調査で畿内地方から搬入したと考えられる土器は細片も合わせると9点になる。これらはST9、13、15、16、19、SK110、包含層から出土している。

(1) 庄内式土器

242はST15からの出土の甕で、胎土には石英、雲母の粗粒砂が含まれている。口縁端部はわずかに肥厚しており、内・外面共に強い横ナデ調整である。ST16からも甕(245)が出土しており、石英や金雲母が含まれている他、角閃石も含まれている。口縁部内・外面共に横ナデ調整で、口縁端部を摘み上げている。色は242が外面灰黄褐色、内面暗灰茶色で、245は黄灰色である。この2点は口縁部のみの出土であるから全体の形態ははっきりしない。

(2) 畿内の土器

523はSK110から出土した甕で、長石・雲母を含み、特に後者を多く含む。口縁部内・外面は横ハケ後横ナデ調整であり、内・外面共に灰黄褐色である。胎土は生駒西麓産ではないが畿内のものであり、口縁部の形態から庄内式より、新しい布留式併行期の土器ではないかと思われる。この甕はSK113からの混入である。また、ST9、13、19、包含層から出土の土器は細片ばかりで、胎土は庄内式の土器に類似しているが器種は断定できない。

庄内式土器や畿内の土器は四国はもちろん北部九州、山陰、北陸など遠隔地にまで移動している。県内では春野町の西分増井遺跡⁽⁸⁾から畿内(河内産と考えられる)の壺や甕が数点出土しており、同じ春野町の馬場末遺跡⁽⁹⁾からも胴部から『く』の字状に外傾した口縁の甕が出土している。また佐川町の襟野々遺跡⁽¹⁰⁾からも、口縁部が『く』の字に屈曲し、口縁端部を摘み上げる庄内式の甕が出土しており、南国市の五軒屋敷⁽¹¹⁾のST2からも庄内式の甕が北河内より搬入されている。これらは一部の紹介なので実際はもっと増えている。

(3) その他の土器

今回産地を確認できなかった搬入土器を一部紹介し、これからの課題としたい。

壺は1点(468)のみでSK117から出土している。468は拡張する口縁部に櫛描波状文を施し、外面わずかに右下がりのハケが認められる。胎土に石英の細・粗粒砂を含んでいる。

甕は長石を多く含む452(SK113)が搬入土器と考えられる他、長石・石英の細・粗粒砂を含む210(ST14)や長石の細粒砂とチャートの小礫を含む336(ST17)も搬入の可能性はある。

鉢は417(ST22)と458(SK113)が搬入土器と考えられる。417は長石・石英・角閃石・雲母の細粒砂を含むもので、458は長石・石英・金雲母の細粒砂を含むものである。これらも在地の土器ではないが産地がはっきりしない。

高杯はST19から出土している367が搬入土器と考えられる。胎土の色は赤褐色で、長石の細・粗粒砂が多く、チャートも含まれてはいるが、在地のものではないと思われる。

4) まとめ

以上述べてきた東阿波型土器は淡路、摂津、河内、播磨など大阪湾を取り巻く地域へかなり持ち出されている。県内で東阿波型土器が出土している遺跡は松ノ木遺跡⁽¹²⁾(本山町)、西分増井遺跡(春野町)、ひびのき遺跡⁽¹³⁾(土佐山田町)、拝原遺跡⁽¹⁴⁾(香我美町)の他、口縁部を肥厚する甕が出土している馬場末遺跡(春野町)などである。松ノ木遺跡は瀬戸内海と太平洋岸を結ぶ最短距離上の中間にあり、情報がクロスする交通の要衝として重要な役割を果たして来た所である。高知県の搬入土器の拠点的場所ともいえる。この遺跡では竪穴住居址から東阿波型土器の甕が2個体出土している。これらは完形品であり、1個体は小型の甕で、口径12.9cm、器高は18cmで、もう1個体は口径が14cmで、器高は23.5cmである。どちらも丸底であり、外面ハケ調整を施し、内面はヘラ削りで胴部上面は指頭圧痕が残る。小型の甕は底部までハケ調整を施している。これらも黒谷川Ⅲ式の時期のものである。県内では初めて底部の観察ができるよい資料となった。

弥生時代後期後半に成立した東阿波型土器や吉備型甕がその周辺の遺跡で大半を占めるようになるのは古墳時代初頭になってからである。それは吉備地方では弥生時代後期から足守川下流域の沖積地での可耕地の増大により、集落が急増し規模も肥大化したことにもよる。

ボウフラが出現した頃、県内の土器は長胴厚手で太筋の叩き目を残す土器が一般的であったが、吉備では全く異なった形態、手法が用いられている。形態や胎土が備前南部と備中南部の遺跡群から共通する甕が出土していたことにより、共通(特定)の地域の粘土を使用していることが考えられ、ひいては特定の工人集団による一括生産も十分考えられる⁽¹⁵⁾。

吉備型甕は主要な分布地から離れた四国や九州などの遠隔地に運ばれていることも注目される点である。四国において吉備型甕は18遺跡⁽¹⁶⁾から出土している。県内は淡黄色で花崗岩質の砂粒が多い甕が出土した西分増井遺跡、ボウフラが2点出土した松ノ木遺跡と小籠遺跡の3遺跡である。これは既報告の数なのでこれからはもっと増えると考えられる。

搬入土器は上述のように県内の遺跡においても年々確認される量が増えてきている。弥生時代の搬入土器として、県内中央部では中期に香川県から搬入してきた土器があげられる。ひびのきサウ

ジ遺跡⁽¹⁷⁾では後期後半の竪穴住居 (ST8)より讃岐からの搬入土器・下川津B類⁽¹⁸⁾の甕が出土しており、下ノ坪遺跡 (野市町)でも下川津B類の壺が出土している。また、香我美町の稗地遺跡⁽¹⁹⁾では弥生後期終末期の竪穴住居 (ST3・5)から、胎土中に角閃石や雲母を含む搬入土器 (河内平野産)が出土している。しかし、これらは数点であり、古墳時代の搬入土器ほどまとまっていたとはいえない。小籠遺跡出土のこの時期ほど各地域から多量の搬入土器が見られることはない (表参照)。今次調査で貴重なものは、上述のように東阿波型土器が多量に出土したこと、吉備甕は底部まで観察できたこと、これら搬入土器の時期が古墳初頭にほぼ定まったことなどである。

今後の課題として、時間的な位置付けがある。搬入土器の生産地とわが県内や本遺跡との時間的な位置付けはそのまま同時代、同文化で推移していたとはいえない面もある⁽²⁰⁾。土器が搬入されたと思われる頃、県内では前期古墳が少なく、在地の甕は漸次的に変遷してきているので時代の変化ははっきりしない。鉢類は別として、甕は丸底以外、搬入土器のように器壁を薄くするヘラ削り技法はほとんど見られないし、搬入された土器の影響を受けて、土器組成や製作技法、形態が変わったとは考えられない。土器の交流といっても一方的な受容だったといえる。これは他地域との交流において、地域的に制約のある地域、閉鎖的な地理的条件にある地域の自然条件が大きく関わって来るように思われる⁽²¹⁾。また、受容した人々の受けとめ方 (身につけた技術を変えようとしない、守ろうとするなど)や搬入土器のルートも関係してくる。ルートは阿波から室戸を回る東ルートや本山町を通過する山越えルート、伊予を経由して宿毛を通る西回りルートなどが考えられる。受容した搬入土器の時期や人々の背景、ルートは今後の研究課題であり、資料の蓄積を待って検討をしたい。

Ⅱ 区 遺構別搬入土器出土状況

遺構名	時代	東阿波型土器				吉備土器			庄内式土器			その他
		壺	甕	高杯	細片	壺	甕	細片	壺	甕	細片	
ST 5	弥生時代後期終末				1							
ST 9	〃										1	
ST17	〃											甕2
ST18	〃							3				
ST19	〃										2	高杯1
ST21	〃				1							
ST22	〃											鉢1
ST8	古墳時代初頭		3		32			15				
ST12	〃				3							
ST13	〃	1			3			3			1	
ST14	〃	2			8		1	20				甕1
ST15	〃		1							1		
ST16	〃			1				4		1		
SK99	〃							1				
SK101	混入				2							
SK102	〃				2							
SK110	SK113より混入		3									甕1
SK113	古墳時代初頭	2	2									甕1・鉢1
SK117	〃											壺1
包含層		1	1		19						2	
合計		6	10	1	71	0	1	46	0	2	6	その他9

末筆になりましたが、今回の搬入土器の胎土分析や時期決定などについて御教示いただいた徳島県文化財センター湯浅利彦氏、岡山県古代吉備文化財センターの平井勝氏・中野雅美氏に対して記して感謝致します。

註

- 1) 出原恵三・藤方正治・泉 幸代『小籠遺跡Ⅰ』（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター1995年
- 2) 菅原康夫 他『黒谷川郡頭遺跡Ⅱ』徳島県教育委員会 1987年
- 3) 菅原康夫「吉野川流域における弥生時代終末期の文化相」『考古学と地域文化』同志社大学考古学シリーズ Ⅲ 1987年
- 4) 菅原康夫 他『黒谷川郡頭遺跡Ⅴ』徳島県教育委員会 1990年
- 5) 徳島県文化財センターの湯浅利彦氏をはじめ、同センターの方々に御教示いただいた。
- 6) 平井 勝・岡本寛久・高田恭一郎 他 編年対比表『百間川原尾島遺跡 4』岡山県教育委員会 1995年
- 7) 6) に同じ
- 8) 出原恵三 『西分増井遺跡群』高知県吾川郡春野町教育委員会1990年
- 9) 岡本健児・廣田典夫 『山根・石屋敷遺跡（付）馬場末遺跡』春野町教育委員会 1976年の報告書と、廣田佳久氏の「周辺地域における土師器の様相」『研究紀要 第1号』（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター 1994年の土器実測や観察したものを参考にさせていただいた。
- 10) 襟野々遺跡の報告書は刊行されていないが、8)と同様に廣田佳久氏が「周辺地域における土師器の様相」『研究紀要 第1号』で載せたものを参考にさせていただいた。
- 11) 宅間一之・下村光彦 他『五軒屋敷遺跡調査報告書』高知県教育委員会 1984年
- 12) 出原恵三・前田光雄 『松ノ木遺跡 Ⅳ』高知県本山町教育委員会1995年
- 13) 岡本健児・廣田典夫 『高知県ひびのき遺跡』土佐山田町教育委員会 1977年
- 14) 出原恵三 『拝原遺跡』香我美町教育委員会 1993年
- 15) 白石純（岡山理科大学）「百間川原尾島遺跡出土土器の胎土分析」『百間川原尾島遺跡 3』岡山県教育委員会 1995年
- 16) 出原恵三「四国出土の吉備型甕」『古代吉備 17集』古代吉備研究会 1995年
- 17) 高橋啓明 『ひびのきサウジ遺跡』土佐山田教育委員会 1990年
- 18) 大久保徹也「下川津遺跡における弥生時代後期から古墳時代初頭の土器について」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 Ⅶ・下川津遺跡』第2分冊 香川県埋蔵文化財調査センター・香川県教育委員会 他 1990年
- 19) 松田知彦・出原恵三 他『稗地遺跡』（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター 1993年
- 20) 廣田佳久 「周辺地域における土師器の様相」『研究紀要 第1号』（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター 1994年
- 21) 20) に同じ

参考文献

森岡秀人・比田井克仁「土師器の移動」『古墳時代の研究』6 雄山閣 1991年

3 小籠遺跡出土の支脚について

浜田 恵子

Ⅱ区の調査では、弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけての遺構から多数の支脚が出土した。出土数は完形品あるいはほぼ完形まで復元できたもの6点、破片102点を数え、脚底部の数からみた個体数は67個体に及んでいる。破片が多いもののいずれも遺構からの出土で、床面出土土器は19点を数える。高知県内ではこれまでに県東部の5遺跡からの出土が確認されている。しかし、今回の様なまとまった数の出土は県内でも例が少なく、当遺跡を特徴づけるものといえる。

支脚についてはその用途などに性格不明な点が多く残されており、その捉えかたも様々である。従来県内の報告では受部が凹状を呈し上面で支えるタイプのもので煤や被熱痕が認められないものを「器台形土器」として捉えていた。しかしここでは、「対象物(容器)を高く掲げる目的で作られたと考えられる土器」でおもに「精製品」であるものを「器台」とし、それに対して「対象物(容器)を固定する(支える)目的で作られたと考えられる土器」でおもに「粗製品」であるものを「支脚」として捉え分類した。

(1) 小籠遺跡出土支脚の分類

支脚の形態は多様性をもちその分類の仕方も様々であるが、ここでは谷若倫郎氏による支点のあり方に着目した分類法を参考にして、その形態分類を行った。谷若倫郎氏は朝倉南甲遺跡⁽¹⁾の報告の中でその支点のあり方に着目して、支脚をA型(頭部が平面ないしは凹面を呈し、基本的には面で支えるもの)、B型(頭部が前方に伸び、1点で支えるもの)、C型(頭部が前方左右に伸び、2点で支えるもの)、D型(頭部が環状を呈し、周縁で支えるもの)、の4形態に分類している。小籠遺跡ではB型・D型の2タイプは出土しておらず、他県のような形態の多様性は認められないが、ここでも支点のあり方に着目しその分類を行いたい。

当遺跡の出土支脚は完形の資料が少なく、全体の形状をつかむことが困難なものが多かったが、観察可能なものは大きく次の2類に分類することができた。A類(受部が凹面を呈し、上面で支えたと考えられるもの)。C類(受部が左右に伸びる角状の突起からなり、2支点で支えたと考えられるもの。または受部が2本の角状突起と1個の小突起からなるもの)。

さらにA類は、底部が平底風のもの(A-1類)と上げ底風のもの(A-2類)、体部を貫通する穿孔をもつもの(A-3類)に、C類は、体部が中実のもの(C-1類)、体部下半が中空のもの(C-2類)、体部上半まで中空のもの(C-3類)に細分することができる。

(2) 形態、成形・調整、煤付着痕

[A類] 491(P22埋土、fig.51) 358・357・359(ST18床、fig.36) 492(P40埋土、fig.51)

A-1類は491・358である。491は受部が皿状の緩やかな凹面を呈し、体部は中実で底部は平底状である。法量は受部径8.8cm、底径6.6cm、器高7.4cmを測る。491は粘土塊を板状の原体によって叩き締めた後、体部を指頭押圧によって成形している。裾部の摘み出しは見られない。受部の成形は上面中央を押圧で凹ませた後に周縁を摘み出し、強い指ナデによって皿状に形を整えている。調整は指ナデの痕がわずかに認められるものの全体に不十分で、整形時の強い指ナデによる粘土のよじれや指頭圧痕が多く残る。受部の外縁は部分的に器表が剥離し、一部欠損する。受部の上面と外縁

には薄い煤の付着が認められる。

A-2類は357・359である。357は凹状の受部と上げ底状の底部をもち、体部中位はくびれる。法量は、受部径8.9cm、底径7.9cm、器高8.8cmを測る。掌と指頭による押圧で体部を成形した後、強い指ナデで形を整えている。底部は指頭押圧と裾部の摘み出しを行い、上げ底風に作り出している。指ナデで最終調整をするが、指頭圧痕が多く残る。受部上面と外縁下側には煤の付着が薄く認められる。

A-3は492である。受部は凹状で、筒型の体部を径1cmの焼成前穿孔によって貫いている。法量は、受部径4.7cm、底径5.8cm、器高5.3cmを測り、小型品である。穿孔部の内面には棒状の原体を抜き取った痕が残る。比較的丁寧な作りで指頭押圧と指ナデで整形・調整されている。煤の付着は認められない。

[C 類] 360 (ST18床, fig.36) 467 (SK113床, fig.46) 188 (ST13埋土, fig.24) 304 (ST16床, fig.31)
305 (ST16埋土, fig.31)

ほぼ完形をとどめるものはC-2類の360のみである。360は体部下半が中空で、体部上半は中実となる。受部には2本の角部が設けられ、やや前方に傾斜しながら左右に突出する。角部の先端は尖り気味で2本の角部はそれぞれ内側にゆるく湾曲させている。法量は、底径8.8cm、器高15.0cmを測る。体部は粘土塊を板状原体によって叩き締めた後、掌と指頭による押圧で筒状に成形している。その後、体部下半まで幅1.5cmのヘラ状の原体によって押し広げ、指頭で裾部を摘み出している。2本の角部は貼付によるものではなく、筒状の体部上面を切り開いた後指頭で摘み上げて成形したもので、突起先端部から末端に向けて何度も強いナデを施し、形を整えている。全体の調整は指ナデで仕上げているが荒く、指頭圧痕が多く残る。また、体部下半には水平方向または右上がりの叩き痕が残る。外面は灰黄色であるが、体部内面は黒色を呈する。焼成時に器内の温度が上がりきらず内部が炭化し焼け残ったものと思われる。2本の角部の両脇、傾斜方向の反対側には角部から体部下半にかけて縦方向の煤の強い付着が認められる。

C-3類は467である。体部は中空で、受部には先端がやや丸みをもった太く短い突起が設けられている。体部片側が破損し全体の形態は不明であるが、2本の角部が前方約45度の角度で傾斜しながら左右に取り付けられていたものと予想される。角部傾斜方向の反対側には摘み状の小突起が設けられている。この摘みは粘土貼付によるもので、出土時には剥離していたものである。体部は板状に叩き締めた粘土を筒状に巻き成形したもので、外面を掌で包み整形しながら内面から指全体で押圧している。体部内面には縦方向に走る絞り目と指の押圧痕が顕著に認められる。体部は縦方向の接合部から剥離し、上下に割れ欠損する。角部には強いナデを施し、上方内側に緩く湾曲させる。煤は小突起の左下から体部下半にかけて縦方向に薄い付着が認められる。

他に304・305・188がC類支脚と認められるものである。467の小突起が貼付によるものであったのに対して、3点は粘土を摘み出して成形している。

以上、観察可能な支脚を取り上げ、その形態、成形・調整、煤の付着痕について述べた。破片のために取り上げて述べる事が出来なかった支脚も多数あるが、どの器体も粗製品であった。しかし、安定性に優れたものが多く、対象物を固定することを第一の目的として作られた実用性を重視

した土器といえる。なお、粗製とはいうものの、受部の製作にあたっては数度にわたる強い指ナデが施されており、A類受部の凹面の形、C類角部の傾き・曲げ方・わずかな凹ませ具合など、工夫を凝らしたものが多い。対象物を固定することを意識して作った製作者の意図がうかがわれる。

次に煤付着土器に着目すると、出土した108点の支脚のうち、強い煤の付着痕が残るものは5点、ごく薄い煤の付着が認められるものは14点であった。その殆どが破片のため煤の付着範囲を正確に掴むことができないが、体部下半は薄い煤の付着が、C類の角部とその下側には強い煤の付着が見られる傾向がある。しかし、煤付着の時期については、土器焼成中に器表に煤が付着している可能性もあり、今回観察された煤が煮沸時の使用によるものなのか、焼成時付着によるものなのか、断定することが出来なかった。また、野焼きによる焼成中の煤付着は状況に応じて様々な様相を残すことから、煤の付着位置から煮沸時の支脚に対する炎の位置についても断定することはさし控える。なお、器表の被熱による赤化が認められるものはなかった。

(3) 県外での分布と出現時期

受部が水平を呈することからA類とD類をほぼ類似したタイプとしてまとめ、A類からD類までの各タイプの分布を見ると、A類・D類は九州北部から西部瀬戸内、中部瀬戸内にかけての比較的広い範囲で分布し、B類は九州北部と愛媛県瀬戸内側に、C類は愛媛県・香川県の瀬戸内側と山口県防府市、島根県・鳥取県の日本海側に分布している。

さらに各県での出現時期を見ると、九州北部では、佐賀県で弥生後期後半からすでにA類・D類とB類が並存しているが、弥生後期終末にはB類が量的に優勢になり突起も強まること⁽²⁾が報告されている。一方、四国に目を移すと、支脚は香川県と愛媛県から出土しており、どちらも瀬戸内側に集中した分布が見られる。香川県ではA類・D類がやや古く弥生後期後半から存在し、C類は遅れて弥生後期終末に出現している。また、愛媛県松山市周辺の遺跡群でも、A類・D類が弥生後期中葉から存在し、C類が弥生後期終末から出現していること⁽³⁾が報告されている。

他に、島根県松江市から鳥取県東部にかけての日本海側にもC類が集中して分布している。中には体部に穿孔を持つものもあり、多くは須恵器と相伴して出土している。これらの山陰地方のC類支脚は他の分布域に比べると時期的に新しく、古墳時代後半に位置付けられるものである。

以上のことから、支脚の出現時期は地域ごとに多少の差はあるものの、受部が水平をなすA・D類が比較的古いタイプで、B類・C類はその後新しく出現するタイプであると捉えることが出来る。

(4) 高知県での分布と出現時期

県内での出土例は県東部の弥生後期終末から古墳時代初頭にかけての集落遺跡に集中する。現在までに出土が確認されているのは、香美郡香我見町拝原遺跡⁽⁴⁾・同野市町本村遺跡⁽⁵⁾、長岡台地の集落群の中では五軒屋敷遺跡⁽⁵⁾・東崎遺跡⁽⁷⁾・小籠遺跡⁽⁷⁾・ひびのき遺跡⁽⁷⁾の6遺跡であり、拝原遺跡・本村遺跡からはA類が、五軒屋敷遺跡・東崎遺跡・小籠遺跡・ひびのき遺跡からはA類・C類が出土している。

これらのうち、東崎遺跡からはこの時期の竪穴住居13棟が検出され、同集落の範囲内にあると考えられる五軒屋敷遺跡も含めるとその範囲はさらに広がり、小籠遺跡に並ぶ大規模集落であることが予想される。東崎遺跡は小籠遺跡から約2kmほど離れた位置に近接する集落遺跡であり、同様に多量のA類・C類支脚が出土している。長岡台地では現在までに多くの弥生後期終末から古墳時代

初頭にかけての集落が調査されているが、支脚C類が確認されているのは現在のところ小籠・東崎の両拠点の集落とひびのき遺跡のみである。

以上のことから、県西部ではこの時期の集落の調査例が少なくその分布の実態が明らかになっていないものの現段階での県内の分布状況をみると、支脚は限られた一部の地域にのみ集中して分布する傾向をもち、他の器種のような均等な広がりを持った分布を示さないことがわかる。

次に、小籠遺跡のST床面出土土器を見ると(表参照)、弥生後期終末にはA類とC類が揃って出土し、古墳時代初頭に入るとA類が消失しC類のみの出土になる。また、C類の体部を中実のタイプと体部下半または上半まで中空のタイプに分けてその出土を見ると(表の3参照)、弥生終末期には全て中空で、古墳時代初頭に入ると中実のタイプが中空タイプに混じって出現している。床面出土の資料が少ないため、埋土中出土土器にまで目を向けると(表の4参照)、古墳時代初頭にはC類のうち約3~4割程が中実のものに変化していることがわかる。なお、C類支脚については、五軒屋敷遺跡でも、ST1(弥生後期7期=ヒビノキⅡ式)には全て中空のタイプが存在し、同じくST2(古式土師器1期=ヒビノキⅢ式)では中実のタイプが新しく出現することが報告されている。このように、長岡台地では弥生後期終末にA類・C類支脚が揃って出現し、古墳時代初頭に入るとA類が消失しC類が残ること、また、その中でC類支脚には中実のタイプが新しく出現してくることがわかる。

その後間もなく小籠遺跡では集落が消失し、4~5世紀を通して遺構は認められなくなる。200年間以上の空白の後6世紀後半に竈をもった堅穴住居が出現するが、その時期に該当するST10では支脚は認められない。県内における支脚は、限られた地域の中で分布し、集落とともに短期間のうちに出現・消失していった器種であるといえる。

遺構名	時 期	平面形	①出土数	②個体数	床面出土数とタイプ	③中実:中空(床)	④中実:中空(埋土)
ST18	弥生後期終末	円形	11	4	4 (A類-3点,C類-1点)	0:1	0:2
ST7	〃	隅丸方形	2	1	0	—	不明
ST22	〃	〃	2	1	0	—	0:1
ST5	〃	方形	2	1	0	—	0:1
ST19	後期終末~	隅丸方形	8	4	0	—	0:4
ST8	古墳時代初頭	隅丸方形	2	1	0	—	不明
ST13	〃	方形	10	8	3 (C類-2点,不明-1点)	0:2	2:6
ST14	〃	〃	12	9	5 (C類-4点,不明-1点)	2:2	3:6
ST16	〃	〃	46	9	5 (C類-5点)	0:5	10:16
ST20	〃	〃	3	2	0	—	1:1
P22	弥生後期終末	楕円形	2	1	0	—	0:1
P40	〃	〃	2	1	0	—	不明
P44	〃	円形	1	1	0	—	不明
SK113	古墳時代初頭	楕円形	5	4	1 (C類-1点)	0:1	0:3
計	—	—	108	67	—	—	—

Ⅱ 区遺構別支脚出土状況

(②は底部の点数から個体数を推定したもの。③は床面出土C類で中実・中空が確認できたものの点数。④は埋土を含むC類で中実・中空が確認できたものの点数。)

註

- (1) 谷若倫郎・岡田敏彦・米沢俊二『朝倉南甲遺跡』愛媛県埋蔵文化財調査センター 1986
- (2) 田平徳栄『惣座遺跡』佐賀県教育委員会 1990
- (3) 梅木謙一「松山平野の弥生後期土器 編年試案」『松山大学構内遺跡』松山市教育委員会 1991
- (4) 出原恵三『拝原遺跡』高知県教育委員会 1993
- (5) 坂本憲昭『野市町本村遺跡調査報告書』野市町教育委員会 1993
- (6) 角谷和男・下村公彦『五軒屋敷遺跡調査報告書』高知県教育委員会 1984
- (7) 岡本健児・広田典夫『ひびのき遺跡』土佐山田町教育委員会 1977

4 小籠遺跡出土の古代土器について

出原 恵三

今次調査で検出した古代の遺構は、土坑19基、溝1条、ピット数個である。これらの諸遺構の中で土坑は東と西の2つの群れに分かれる。東群は多量の遺物が出土したSK130とSK136、西群はSK101・102・104～106・109・110を挙げることができる。後述するようにこれら2群には、明らかに時期差が認められる。従って先ず西群と東群の諸特徴を明らかにし、周辺の諸遺跡との比較検討を通して編年的位置付けを行い、高知平野の古代土器の様相について考察を試みるものである。

1) 西群の土器

東群に比べて検出遺構の数は多いが、出土遺物は少なく土器組成について一定の把握が可能な遺構はSK106のみである。また遺構の位置関係や切り合いから諸遺構が同時存在でないことは明らかであるが、個々の先後関係を明らかにすることはできない。SK106からは識別可能な口縁部で見ると土師器杯6点、須恵器杯3点、須恵器皿3点、土師器甕2点、製塩土器が出土している。供膳形態では土師器と須恵器がほぼ同数存在している。土師器杯は回転台成形によるものであるが内外面丁寧なヘラミガキが施され、特徴的な口縁部形態を有している。SK105・109からは、点数は少ないが供膳形態では須恵器と土師器が相半ばして出土しており、土師器はどれも丁寧なヘラミガキが施されている。この他西群の供膳形態は、杯と皿の形態差が明瞭であることや須恵器と土師器で一定の互換性が認められることも特徴として指摘できる。またSK106の土師器・須恵器は9世紀前半に位置付けることができる。SK105・109もほぼ同時期か少し下の時期と考えられる。

2) 東群の土器

SK130・136からは土師器杯・皿・甕、黒色土器椀、灰釉陶器椀が出土している。これらは一括性の高い遺物であり、当地域の古代土器編年の基準資料となるものである。また両土坑の遺物は、器種、形態、出土状況などから同時期の所産であると考えられる。各器種毎に形態分類を行った上で、土器組成や製作技法など諸特徴について述べる。

(1) SK130・136出土土器の分類

① 土師器杯

すべて回転台成形、器面はすべて横ナデ調整、外底には粘土紐の単位を明瞭に残す例が多く見られる。底部はヘラ切り後ナデ調整するものもあるが、多くは切りっぱなしのままであると思われる。しかしヘラ切り痕を明瞭に残すものは少ない。高台の有無など諸特徴からA I・II、B I・II類に大別することができる。

A I 類

回転台による成形で、底部から内湾気味または直線的に立ち上がり口縁部は少し外反、端部は丸くおさまる。法量に大小の分化が認められる。大きいものをA I a類、小さいものをA I bとする。前者の口径は13cm～13.5cm、後者の口径は12cm前後を測る。A I a類の器高指数は14.2～18.6で平均22.5である。A I b類の器高指数は21.1～25.6で平均24.0となっている。(A I a類：542・544・548・554・556・560・559・598～602 A I b類：545・553・555・557・558)

AⅡ類

AⅠ類に比し器高指数が大きい。AⅠ類においても少し認められた(554・560)が、底部内外面に段を有し、体部が直線的に立ち上がる。後述するように円盤の上に粘土紐を巻きつけて成形していることがよく分かるタイプである。底部はヘラ切り、体部外面は凹線條の横ナデ調整痕が明瞭に認められる例が多い。中には563・565のように、口縁内面に沈線状の凹みを有するものがある。AⅡ類も法量に大小が認められる。大きいものをAⅡa類、小さいものをAⅡb類とする。前者の口径は15cm、後者の口径は14cm前後を測る。AⅡa類の器高指数は33.1～38.7で平均35.4、AⅡb類のそれは29.6～31.0で平均30.3である。

(AⅡa類：562～566・568・605 AⅡb類：561・567・606・610)

B類

杯Ⅱ類の底部に高さ1～1.5cmの貼付高台を有するタイプである。全形のわかるものは572のみであるが高台径に大・小が見られる。大きいほうは高台高1.5cm、径9cm、小さいほうは高台高1cm、径8cmを測る。前者をBⅠa類、後者をBⅠb類とする。(BⅠa類：572・612 BⅠb類：571・611)

② 土師器椀

断面三角形の貼付高台を有する。口縁部形態は不明である。(569・570)

③ 土師器皿

杯と同様にすべて回転台成形、器面はすべて横ナデ調整、底部はヘラ切り後ナデ調整するものもあるが、多くは切りっぱなしのままである。口縁部の形態によってAⅠ～Ⅲに分けることができる。全体の形状の明らかなものが少ないが、杯のように法量分化は認められない。

AⅠ類

底部から比較的直線的に立ち上がり、口縁部が外反するもの。器高指数は10.6～15.9を示し平均13.6である。(535・538～541・593～597)

AⅡ類

口縁部が強く外反するもの。器高指数は9.3～16.0を示し平均11.8である。(533・534・537)

AⅢ類

内湾して立ち上がり口縁部が外反するもの。(536)

④ 黒色土器

すべてA類椀の底部であるが、体部・高台の形態から3つに分けることができる。

Ⅰ類

類杯の底部に微隆起帯状の高台を貼付し、内面は丁寧なヘラミガキを施す。(573・615)

2点ともに搬入品である。

Ⅱ類

断面三角形の貼付高台を有し、体部は底部から屈曲して立ち上がる。内面は丁寧なヘラミガキ、外面下半に弱いヘラ削りが見られる。(577)

Ⅲ類

明らかに回転台成形によるもので、外底にヘラ切り痕をそのまま残している。しっかりした高台を有し、底部から丸みを帯びて立ち上がる。Ⅰ・Ⅱ類に比べて器壁が著しく厚い。内面ヘラミガキ

外面は弱いヘラ削りを施している。胎土に2種類ある。(574～576・614)

⑤ 土師器甕

I 類

比較的薄手で、胴部が大きく張るタイプである。内外面ナデ仕上げであるが、胴部外面に指頭圧痕が顕著。搬入品である。(617・619)

II 類

口縁部が「く」字状に外反、体部外面に叩き成形痕を顕著に残す。(618)

III 類

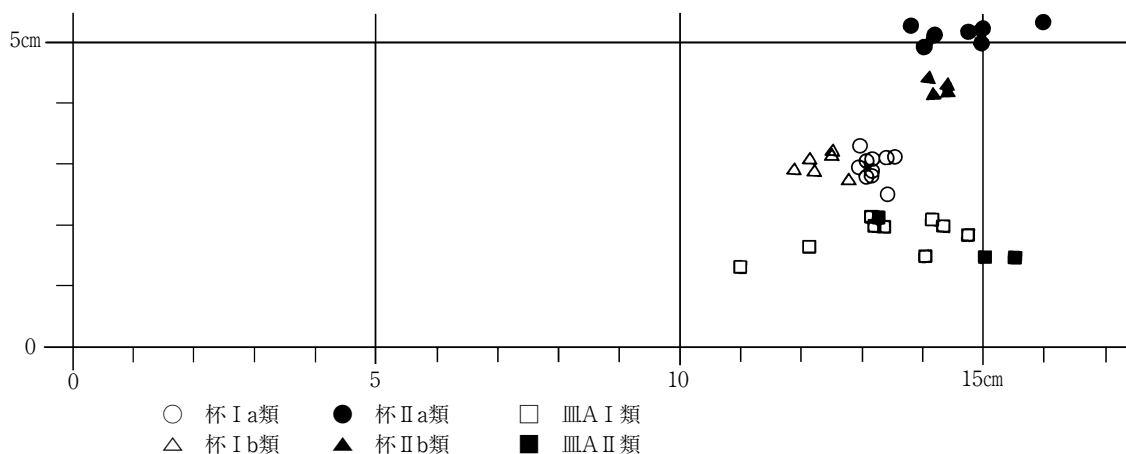
口縁部が「く」字状に屈曲し、胴部外面は木理の粗い縦ハケ調整を施す。搬入品である。(582・584・585・586)

IV 類

形態はIII類に類似しているが、胴部上半に強い横ナデ調整を施す。(580・581・583・616)

以上の分類をもとに SK130・136出土土器について、形態や技法上の分析を行い諸特徴の抽出と時間的位置付けを試みたい。供膳形態では土師器の杯・皿が主体を占め、これに少量の黒色土器A類碗と灰釉陶器碗が加わり、須恵器は全く認められない。杯と皿の構成比を識別可能な口縁部片で見ると、SK130が46点：15点で、ほぼ3：1、SK136では35点：13点でこちらもおよそ3：1となっている。杯・皿は、無高台のものがほとんどを占めており有高台の所謂B類は杯に数例見られるに過ぎない。また両者の形態差は西群に比べるとかなりルーズなものとなっている。

SK130・136 土師器杯・皿径高分布



最も出土量の多い杯A I類は、その形態的系譜を8世紀代を中心に展開する律令的土器様式を構成するもっとも普遍的な存在である杯A類に求めることができるが、ヘラミガキが全く見られないこと、横ナデ仕上げに原因して体部の開きが強くなっていることや、皿との口縁部の形態差の欠如など形態化が著しく進行している。西群の杯と比べて調整技法や形態において大きな違いが認められる。杯A II類は、基本的な成形技法においてはA I類と同様であるが、器高指数が大きいことや体部外面の回転ナデ痕跡が顕著であることを特徴としている。このような特徴は、回転台成形独特

の技法的特徴が投影されたものであり、当地域における回転台土師器の一つの到達点として把握することが可能であろう。AⅡ類は西群には全く存在しないタイプであり、回転台土師器の展開の中でAⅠ類から分化し新たに出現した杯として位置付けることができる。杯BⅠ類は、杯AⅡ類に高台を貼付したものであり、特徴的な足の高い高台は器高の増大に比例したものであろうか。椀は底部資料のみであり杯となる可能性もあるが、黒色土器椀の高台と類似した形態を有しており、ここでは椀として把握した。

土師器皿は杯に見られたような法量分化がほとんど見られない。西群には良好な資料を欠いており、比較検討ができないが、口縁部が強く外反するAⅡ類が4割程度見られるところに特徴を求めることができる。

黒色土器は出土例が少ないが、土坑の時期比定に際して基準となる資料である。Ⅰ類の2点(573・615)を除くとすべて回転台成形によるものである。この2点は、金属器指向型と言われる黒色土器A類杯の底部に微隆起帯状の貼付高台を有するもので明らかに畿内からの搬入品である。唯一全体の形状を知ることの可能なⅡ類(577)は、胎土から見て在地生産のよるものであるが、体部の形態はⅠ類に類似している。搬入品の模倣形態として位置づけることができる。出土量の多かったⅢ類は、体部の立ち上がりから見てⅠ・Ⅱに比べてやや深い椀形態を有しているものと考えられる。

また在地産のⅡ・Ⅲ類は、高台径が大きく9～10cmを測る。今次調査で得られた黒色土器は、森隆氏の西日本各地における黒色土器生産の展開のなかではC段階(9世紀中頃～10世紀前半)に併行関係を求めることができる。すなわち黒色土器生産の最大の画期とされる第二次拡散期の所産として位置づけることができよう⁽¹⁾。これまで南四国における黒色土器の在地生産の開始は、ひびのきサウジ遺跡SE1出土の資料⁽²⁾をもとに10世紀後半に求めていたが、今次資料によってその開始が半世紀程遡ることが明らかになった。おそらく在地産黒色土器の最古例として位置付けることが可能であろう。

土師器甕は、定量の出土が見られバリエーションも豊富である。薄手のⅠ類は、南四国では初めての出土である。搬入品であることは確実であるが現段階では産地を比定することは難しい。出土量の多かったⅢ類は、西群からも2点(516・517)出土しているが、東群のものに比較すると口縁端部のつくりや口縁部直下の横ナデ調整にシャープさが認められる。

以上東群の遺物について述べた。供膳形態において須恵器を全く伴わない。杯・皿においては回転台による横ナデ調整が全面的に展開し、その結果新しい形態である杯AⅡ類や皿Ⅱ類が出現する。西群に比べて杯・皿相互の形態差が曖昧になる。しかし杯においては一定の法量分化が認められる。黒色土器A類椀は搬入品と共に在地産のものが出現し定量見られる。などの特徴を挙げるができる。東群の遺物にたいしてどのような時間的位置付けを与えることが可能であろうか。先に黒色土器を9世紀中頃から10世紀前半の時間幅の中で捉えたが、後述するように10世紀中葉の十万遺跡SD2⁽³⁾や10世紀後半のひびのきサウジ遺跡SE1の資料と比較すると形態や技法において大きなヒアタスが存在し、西群との関連も考慮に入れると現段階では9世紀末あるいは10世紀初頭に位置付けるのが妥当ではなかろうか。

3) 土師器杯・皿の製作技法に見られる画期

SK130・136の中で最も出土量が多く、在地の土器生産のあり方を理解する上で最も普遍的な資料である杯・皿の製作技法について観察の結果を述べたい。これらの成形技法について見ると、すでに触れたように本来須恵器の成形手法であるところの低速回転台を用いた所謂回転台土師器と呼ばれているものである。杯・皿の底部外面には、粘土紐の痕跡が明瞭に見られる例が多数存在している。さらに底部と体部との境に粘土のつなぎめを観察できるもの(544・554・565・563など)があり、中には562のように体部との接合部から底部が剥落している例すらある。これらは成形の諸段階を復元する上で良好な資料である。すなわち成形の第一段階では粘土紐を巻き押圧を加え円盤状の底部を成形した後、それに体部の粘土を付きたし大略の器形を作る。そして第二段階で回転力を利用して器面調整を兼ねた器形の最終成形を行うものである。これはかつて、田中琢氏が明らかにした須恵器の製作技法に基本的に一致するものである⁽⁴⁾。ただ田中氏が明らかにした古墳時代から奈良時代までの須恵器では、粘土紐巻き上げによって「大略の器形をつくる」第一段階が1つの工程であったものが、今次土師器資料では2つの工程として示されている。つまり第一段階で底部成形と体部成形の分割成形技法が採用されているとしなければならない。また底部外面には明瞭な切り離し痕跡をとどめるものが少ないが、このことと底部円盤成形とは無関係ではあるまい。

同じ回転台成形でありながら、西群の資料中にはこのような第一段階における分割成形技法を確認できるものは存在しない。これは第一段階が伝統的な1つの工程として行われたものと考えられる。製作技法上の大きな違いとして理解することができよう。

次にこの分割成形技法の出現の意義について触れたい。すなわち、筆者はかつて美良布遺跡出土の中世土師器杯底部の観察を通して製作技法について言及し、底部円盤の上に粘土を巻き上げて全体の成形を行う技法のあることを述べ、15世紀後半以降には見られなくなることを指摘した⁽⁵⁾。そしてこの技法の成立については、「10世紀代に盛行を極めるベタ高台の杯のルジメント」として理解したが、今次調査の資料によってベタ高台出現以前の回転台土師器の生産の中から生まれた技法であることが明らかになった。その時期は9世紀末から10世紀初頭に求めることができる。この時以降、分割技法は古代後期から中世(15世紀前半まで)を通しての南四国における土師器生産、主として杯の基本的製作技法として存在し続けたのである。すなわち当該期における分割成形技法の出現は、以後南四国の供膳形態土師器の生産に規定的役割を果たしたものとして重要な意義を見出すことができるのである。

4) SK130・136出土土器の位置付けと高知平野における古代の土器生産

すでに周知のように西日本における古代の土器研究は、平城京・平安京などの都城や畿内を中心に長年にわたって多方面から精緻な研究が進められてきた。本格的な都城の確立する7世紀末に開始され8世紀中葉を頂点として展開する律令的土器様式⁽⁶⁾と呼ばれる都城独自の土器体系が明らかにされ、律令国家体制が弛緩し始める9世紀後半を境に土器生産が大きく変質して行くという現象は多くの研究者の認めるところである。一方、発掘調査の増加にともない最近では畿内周辺部や列島全域にわたって広く研究が行われるようになり、その結果在地土器の地域編年や土器生産に見られる製作技法上の特徴や諸画期など各地域における実態の解明が急速に進展しつつある。そして今や

土器生産における分業の問題や工人集団の交流やその位置付けなど地域の手工業生産の展開との関わりにまで論議が及んでいる。

南四国においては、資料不足の観を否めないものの松田直則氏によって古代後半を中心とした土器の編年研究が進められている。松田氏は、高知平野東部に展開する土佐国衙、十万遺跡、ひびのきサウジ遺跡などの一括資料をもとに土器編年を試み、9世紀から12世紀までを大きくⅠからⅢ期に時期区分し編年を組み立てている。(Ⅰ期：9世紀後半から10世紀前半 Ⅱ期：10世紀中頃から11世紀初頭 Ⅲ期：11世紀後半から12世紀初頭)そしてその中で模倣系須恵器の出現と展開に諸画期と高知平野の特徴を見出している⁽⁷⁾。

今次調査で得た東西両群の資料は、松田氏の編年に当てはめればⅠ期に属することになるが、特に東群のSK130・136の資料は一括性が高く一時期の土器組成を示すものであり、Ⅰ期の細分を可能にするものである。以下今次資料を高知平野の在地土器の展開の中に位置付けるとともに当地域の古代土器の生産について若干の考察を試みるものである。

(1) 古代前半の土器

高知平野において8世紀代の土器様相については十分な解明がなされていない。土佐国衙などの調査によって断片的な資料は得られているものの、一括性のある量的に恵まれた資料を欠いており現段階においては土器組成を編年的に提示することは困難である。しかし最近では国衙周辺で土師器の工人集団の存在を示すような遺跡も明らかになっており、また近隣の土佐山田町には当該期の窯址群が存在していることから近い将来には解決されることであろう。

ただ唯一8世紀代の比較的まとまった資料として十万遺跡のSK50⁽⁸⁾を挙げるができる。当遺跡は方形の掘方を有する掘立柱建物14棟からなる遺跡で、官衙的な性格が考えられる。SK50はその一面にある。ここからは供膳形態として須恵器杯身7点、同杯蓋14点、同高坏1点、土師器杯蓋1点、同高坏2点、同盤1点が出土している。実に8割以上を須恵器が占めている。今次調査出明らかになったSK106を中心とする土坑群は、すでに述べたように9世紀前半に位置付けられるものであり、供膳形態では土師器と須恵器がほぼ同数出土している。また地域はことなるが高知県西部の風指遺跡からは、包含層出土であり一括性には乏しいものの京都洛北産の緑釉陶器や畿内の黒色土器A類杯と共に多量の供膳形態が出土しており、その約8割を土師器が占めている⁽⁹⁾。明らかに今次調査のSK130・136に先行する時期のものである。時期が下るにしたがって須恵器が減少していることが分かる。9世紀代に至ると西日本的に供膳形態からの須恵器の数量的減少が顕著となるが、南四国においてもその過程を具体的に追うことができる。供膳形態において定量須恵器が認められる段階、すなわち現状では、9世紀後半までを古代前半期として捉えたい。古代前半期の土師器は須恵器以上に良好な資料に恵まれていないが、供膳形態の器種組成は杯・皿・高坏・盤などから成っており須恵器との互換性を保っている。その成形技法は、伝統的な粘土紐巻き上げの第一段階、回転台による第二段階、ヘラミガキ等の器面調整という段階として捉えることができる。

古代前半期には、器種組成や各器種の形態や技法上の変化など、諸画期が当然存在するものと考えられるが、現状では須恵器の衰退過程としてしか認識することができない。諸画期の解明については今後の課題である。

(2) 古代後半の土器

前半に比べて良好な資料に恵まれている。ここでは松田編年のⅠ期とⅡ期についてSK130・136の土器と比較しながら私見を述べたい。

① 古代後半Ⅰ-1期

松田編年のⅠ期前半にあてることができる。古代後半の開始期でありSK130・136の資料として位置付けることができる。その指標としてはすでに触れたように、供膳形態からの須恵器の欠落、土師器杯・皿の分割成形技法の採用、器面調整のヘラミガキから横ナデ調整への変化、土師器杯AⅡや皿AⅡ類の出現、黒色土器A類椀の在地生産の開始、杯と皿の形態区分の曖昧さの進行、などを特徴として挙げるができる。

同時期の資料を周辺の遺跡に求めれば、土佐国銜金地地区のSK70⁽¹⁰⁾、同じく金地地区のSX3・4・13・14・15⁽¹¹⁾を挙げるができる。これらの内、SK70・SX4・SX13～SX15からは杯AⅡが、SX3からは杯B類が出土している。甕Ⅱ・Ⅲ類も見られる。またこれらの諸遺構は、方形または略方形のプランを呈する小竪穴で、一辺に階段上のテラスを設けておりSK130・136と極めて類似した構造を有している。

② 古代後半Ⅰ-2期

資料はまだ少ない。土佐国銜金地地区のSX5・SX8・SX10を該当させることができる。Ⅰ-1期の杯・皿は継続して見られるが、杯の法量分化は認められず、全体として器形の縮小化が進行する。皿には小型化した器高の低いものが登場する。杯と皿には形態区分の難しいものが増加する。またこの時期に10世紀前半代に製作が開始されると言われる摂津型釜C2類が登場し従来の甕Ⅲ類とともに煮沸形態を構成する。この釜は、以後南四国に広く分布するものである。

③ 古代後半Ⅱ-1期

十万遺跡SD2の遺物をあてることができる。溝の資料で混入遺物もあり良好な一括遺物とは言えないが、傾向を掴むことは可能である。土師器杯・椀、須恵器杯・椀、灰釉陶器椀、土師器甕、摂津型釜C2類⁽¹²⁾などが出土している。新たな現象として土師器椀の定量出土が挙げられる。Ⅰ-1期にあった断面三角形の貼付高台を有するものに加えて、新たにベタ高台を有するものが登場する。前者がヘラ切りであるのに対して、後者はすべて静止糸切りがみられる。また後者の体部外面には横ナデ痕跡が極めて顕著である。器種組成・技法上の大きな変化として把握しなければならない。量的な制約はあるもののⅠ期で主体を占めていたな杯AⅠ類はほとんど消滅している。

④ 古代後半Ⅱ-2期

田村遺跡SK31⁽¹³⁾、土佐国銜金地地区SX11⁽¹⁰⁾など良好な資料に恵まれているが、ここでは最も良好な一括資料であるところのひびのきサウジ遺跡の井戸SE1出土の土器を取上げる。供膳形態としては、土師器杯150点(40.3%)、同椀51点(13.7%)、同皿42点(11.3%)、須恵器椀28点(7.5%)、黒色土器A類椀47点(12.1%)、煮沸形態として甕29点(7.8%)、釜14点(3.8%)、竈4点(1.1%)その他が出土している。

土師器杯は、Ⅰ期に主体を占めたAⅠ類は全く認められず、器高指数の大きなAⅡ類のみである。しかも器形が著しく小型化している。しかし先に述べた分割成形によるもので、底部はすべてヘラ切りである。土師器椀は多数を占めるベタ高台のものと少数の輪高台のものがある。前者は回転糸

切り、後者はヘラ切りである。後者の高台は断面三角形のものと細い長方形のものがある。土師器皿も著しく小型化し、体部は更に横広がりとなる。平底、足高高台、ベタ高台が見られるが後二者は僅少である。ベタ高台のもののみ回転糸切りで、他はヘラ切りである。須恵器碗は土師器碗と同様の形態であり、多数を占めるベタ高台は回転糸切り、輪高台のものはヘラ切りである。黒色土器A類碗は、形態・胎土ともにⅠ-1期で見たⅢ類の系譜上にあるものである。高台径が6~7cmとかなり小さくなっていが、ヘラ切り後高台を貼付する技法は踏襲している。ベタ高台の須恵器・土師器碗は、松田氏の言う播磨系須恵器碗及び模倣形態の土師器碗である⁽⁷⁾。Ⅱ-1期に出現し当該期に全面的に展開し、供膳形態の組成を一変させ、碗と杯と小皿という集約された土器組成が確立し、ここに南四国における中世的土器様式の成立を見るのである。技法的にも劇的な変化が生じ伝統的形態のヘラ切りとベタ高台碗の回転糸切りの二系統が併立する。そしてこれ以降伝統的形態にも回転糸切りが用いられるようになる。

5) まとめ

以上、9世紀末頃から10世紀代の土器について述べてきた。小籠遺跡のSK130・136に代表されるⅠ-1期は黒色土器A類碗から9世紀末~10世紀初頭に時期比定することが可能で、おおよそ平安京Ⅱ期新に併行関係を求められよう。8世紀中葉を頂点として展開した律令的土器様式を払拭して、南四国の在地土器様式を確立した段階として位置付けることができる。供膳形態からの須恵器の消滅、土師器の新しい製作技法の成立をもって南四国における古代後期土器の展開が開始されるのである。当地域の須恵器衰退については、窯址の調査研究をとうして今後解決していかなければならない問題であるが、そもそも歴史時代における須恵器の地方窯の成立は、律令国家体制の支配機構と密着したものであり⁽¹⁴⁾、分業の未発達な状態にあった土師器工人を権力機構の中に編成したものであった。したがって先にも触れたように律令体制が弛緩し、社会的に需要がなければ須恵器生産から離反して行くのは、至極必然である。そしてこのことと土師器生産に分割技法という新たな技法が創造されることとは無関係ではありえないであろう。決して全国を一律に論ずることはできないが、ここに古代前期すなわち律令体制下における地方窯の本質が現われている。

Ⅱ期は黒色土器A類碗やベタ高台碗から10世紀後半に時期を求めることができる。当地域における中世的土器様式の成立という大きな画期である。これには衰退していた須恵器生産の定着と言う土器生産上の変革が伴っている。この時期の須恵器生産は、南四国の黒色土器生産が活発でなかったこととも関係しており、供膳形態として需要の高まりつつある碗形態の供給という社会的背景の中から登場してきたものと考えられる。従って律令体制下のそれとは歴史的本質を全く異にするものである。

以上長々と古代後期の土器について述べたが、四国の他の三県との関係などについては触れることができなかった。本県においては、当該期の未報告資料が多くあり、その中には編年や地域性を示す良好な資料も含まれている。また最近では10世紀中頃の須恵器窯も調査されている。近い将来この時期の土器研究は大きな前進を見ることであろう。最後に考察を書くにあたって松田直則氏から貴重な教示・助言を頂いたことを銘記して感謝の意を表したい。

(註)

- 1) 森 隆「西日本の黒色土器生産(下)」『考古学研究』第37巻第2号 1991年
- 2) 高橋啓明『ひびのきサウジ遺跡』高知県土佐山田町教育委員会 1990年
- 3) 回転台土師器と言う呼称については、森隆氏が滋賀県湖東地域の平安時代土器群の研究で使用したものである。この種の土師器はロクロ土師器、須恵系土師質土器などと呼ばれ用語については不統一であったが、最近西日本の研究者の間では回転台土師器の呼称が比較的多く用いられているようである。
- 4) 田中 琢「須恵器製作技術の再検討」『考古学研究』第11巻第2号 1964年
- 5) 出原恵三『美良布遺跡』高知県香北町教育委員会 1991年
- 6) 西弘 海「土器様式の成立とその背景」『土器様式の成立とその背景』真陽社 1986年
- 7) 松田直則「土佐における古代末から中世の土器様相」『中近世土器の基礎研究』日本中世土器研究会 1989年
- 8) 高橋啓明・出原恵三・吉原達生『十万遺跡発掘調査報告書』高知県香我美町教育委員会 1988年
- 9) 出原恵三「風指遺跡」『後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ 風指遺跡 アゾノ遺跡』高知県教育委員会 1989年
- 10) 廣田佳久「金地地区」『土佐国衙跡発掘調査報告書 第8集』高知県教育委員会 1988
- 11) 廣田佳久『土佐国衙跡発掘調査報告書 第9集』高知県教育委員会 1989
- 12) 菅原正明「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所創立30周年 記念論文 1983年
- 13) 「Loc. 14」『高知空港拡張整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 田村遺跡群』第6分冊 高知県教育委員会 1986年
- 14) 浅香年木『日本古代手工業史の研究』法政大学出版局 197

表.15 近世土坑計測表

Fig.No.	No.	平面形	平面規模 (m)	深さ (cm)	主軸方向	備考
63	SK44	不整形	0.93×0.7	6	N-17°-E	
〃	〃45	楕円形(瓢箪形)	1.08×0.58	10	N-71°-W	
〃	〃46	〃	1×0.77	12	N-0°-W	
〃	〃48	〃	1.32×0.62	36~50	N-17°-E	
〃	〃49	不整形	1.58×1.62	16~22	N-24°-E	
〃	〃50	円形	径1.38	52		
〃	〃51	円形	径0.54	18~46		
64	〃52	楕円形	3.16×2.16	16~27	N-69°-W	
66	〃53	〃	1.5×0.84	22	N-78°-W	
〃	〃54	隅丸長方形	3.77×1.24	20~30	N-22°-E	
〃	〃55	〃	2.25×1.76	6~20	N-12°-E	
〃	〃56	円形	径1.16	50		
〃	〃57	〃	径1.27	33		
68	〃58	隅丸長方形	1.24×1.09	22~26	N-9°-E	
70	〃59	不整形	1.6×0.74	10	N-26°-E	
〃	〃60	円形	径1.28	26~37		
〃	〃61	不整形	1.1×0.23	14		
〃	〃62	隅丸長方形	0.9×0.8	10	N-23°-E	
〃	〃63	不整円形	径1.33	18		
〃	〃64	円形	径1.26	36~48		
72	〃65	不整円形	1.88×1.7	52~48	N-10°-E	
73	〃66	円形	径1.4	60		
〃	〃67	〃	径1.46	59		
74	〃68	不整円形	径0.95	27	N-8°-E	
75	〃69	隅丸長方形	2×1.32	14~25	N-17°-E	
〃	〃70	円形	径1.36	36		
〃	〃71	〃	径1.3	40~50		
〃	〃72	〃	径1.22	42		
〃	〃73	〃	径1.12	26		
〃	〃74	〃	径1.2	36		
〃	〃75	〃	径1.12	42		
77	〃76	不整形	1.35×0.92	35		
〃	〃77	〃	1.94×1.02	27	N-53°-W	遺物なし
79	〃78	〃	2.15×2.04	56	N-0°-W	
80	〃79	円形	径2.24	40		
〃	〃80	〃	1.35×1.28	56		
〃	〃81	楕円形	0.7×0.64	18	N-67°-W	
〃	〃82	〃	1.72×1.06	10~34	N-53°-W	
〃	〃83	円形	径0.98	26		
〃	〃84	不整形	1.96×1.34	10~24	N-9°-E	
〃	〃85	〃	1.76×0.89	14~30	N-89°-W	
82	〃86	隅丸長方形	1.56×1.16	6~10	N-75°-W	
83	〃87	不整形	2.58×2.24	28~40	N-12°-E	
86	〃88	〃	2.48×2.38	38	N-1.5°-W	
87	〃89	台形	2.24×1.32	8~14	N-17°-E	
89	〃90	楕円形	2.88×2.62	20~42	N-85°-E	
90	〃91	円形	径1.08	46	N-22°-E	
〃	〃92	〃	径1.1	50	N-74°-W	
92	〃93	楕円形	4.76×1.5	22~32		
94	〃94	隅丸長方形	1.36×0.68	6	N-9°-E	
95	〃95	不整形	3.84×1.32	6~18	N-11°-E	遺物なし
〃	〃96	〃	1.62×1.2	20~26	N-11°-E	
〃	〃97	隅丸長方形	1.38×0.68	6~8	N-11°-E	
96	〃119	楕円形	1.68×1.34	45~56	N-77°-W	
〃	〃120	円形	径2.12	54~56		
〃	〃121	〃	径1.06	50~61	N-25°-E	
〃	〃122	〃	径1.32	24~38		
〃	〃124	不整形	2.22×1.66	28~34		
〃	〃134	円形	径0.8	45~48		
〃	〃135	円形	径1.2	44~58	N-71°-W	
97	〃137	〃	径1.2	28~34		
〃	〃139	楕円形	0.87×0.55	34~60		

表.16 遺物観察表（弥生・古墳）

Fig. No.	挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)				特 徴	備 考
				口径	器高	胴径	底径		
8	1	ST5	壺	18.0				チャート・赤色風化礫の粗粒砂を含む。橙色。外面右下がり、内面横方向のハケ調整後ヘラ磨き。	
〃	2	〃	壺	19.2				チャート・粗粒砂を含む。黄橙色。内・外面強い横ナデ調整、口縁部外面凹状を呈す。	
〃	3	〃	壺	11.4				チャート・赤色風化礫の粗粒砂を含む。浅黄橙色。内・外面ナデ調整。二重口縁を有す。	
〃	4	〃	壺	16.0				チャート・赤色風化礫の粗粒砂を含む。橙色。内・外面ナデ調整。二重口縁を有す。	
〃	5	〃	壺	13.6				チャートの粗粒砂を含む。浅黄橙色。頸部外面縦ハケ、内面横ハケ調整。	
〃	6	〃	壺	17.6				チャートの小礫を多く含む。浅黄橙色。器表の剥離が激しい。	
〃	7	〃	甕	13.3				チャートの小礫、赤色風化礫を多く含む。橙色。胴部外面叩き下半に縦ハケ、内面縦ハケ後指ナデ。	
〃	8	〃	甕	13.3				チャートの粗粒砂を含む。橙色。口縁部外面叩き後縦ハケ、内面右下がりハケ。胴部内面に1.5~1.7cmの粘土紐の単位を認める。	
〃	9	〃	甕	12.2				チャートを全く含まない。灰白色。叩き成形。内面ハケ。	上胴部外面黒斑
〃	10	〃	壺	9.2				チャートの粗粒砂、小礫を含む。赤褐色外面ハケ、一部にヘラ磨き。内面指頭圧痕顕著。	
〃	11	〃	甕	15.6				チャート、赤色風化礫を多く含む。橙色。叩き成形。外面口縁部と胴部の一部にハケ調整。内面右下がりのハケ後指ナデ。	
〃	12	〃	甕	16.2				頁岩、長石、石英の粗粒砂を含む。橙色。叩き成形。内面ハケ調整。	外面煤ける
〃	13	〃	甕	15.0	21.9	17.6	4.1	チャート、砂岩の粗粒砂を多く含む。橙色。口縁部内外面右下がりのハケ調整、胴部外面叩き後下半に縦ハケ調整、内面ハケ調整後指ナデ。	底部付近黒斑
〃	14	〃	鉢	13.3				チャートの粗粒砂を多く含む。橙色。叩き成形、内面右下がりのハケ調整後縦方向ヘラ磨き。	
〃	15	〃	鉢	15.7				チャート、赤色風化礫の粗粒砂を含む。橙色。外面ナデ調整、内面右下がりのハケ調整。	
〃	16	〃	鉢	14.4				チャートの粗粒砂を多く含む。橙色。外面右下がりのハケ調整後ヘラ磨き、内面ハケ調整。	
〃	17	〃	鉢	19.0				チャート、石英、長石、雲母の粗粒砂を含む。内外面ハケ調整後ヘラ磨き。	
〃	18	〃	鉢	16.2	7.9		3.2	チャートの粗粒砂を含む。橙色。外面底部付近叩き、内面ハケ調整。	口縁部の一部にターレット状の付着物あり
〃	19	〃	鉢	9.7	10.3		4.3	チャートの粗粒砂を含む。橙色。外面叩き後ナデ調整。	胴部の一部に黒斑
〃	20	〃	鉢	18.8				チャートの粗粒砂を含む。橙色。内外面ナデ調整。	
〃	21	〃	鉢	18.0	9.5			チャート、赤色風化礫の小礫、粗粒砂を多く含む。橙色。内外面ハケ調整後ヘラ磨き。	口縁部から底部にまたがる大きな黒斑あり
〃	22	〃	小型丸底壺					チャートの粗粒砂を多く含む。橙色。内外面調整不明。	
〃	23	〃	鉢	17.0	8.0		4.0	チャート、赤色風化礫の小礫、粗粒砂を多く含む。橙色。底部付近に叩きが見られる。	

表.16 遺物観察表（弥生・古墳）

Fig. No.	挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)				特 徴	備 考
				口径	器高	胴径	底径		
8	24	ST5	甕					チャートの小礫、粗粒砂を多く含む。淡黄色。外面水平方向の叩き後縦ハケ調整、内面横ハケ調整。	
9	25	〃	甕	4.9	6.3	5.1	1.9	チャートの粗粒砂を多く含む。橙色。外面縦ハケ調整、内面指ナデ調整。	
〃	26	〃	土師器 小皿	6.0	1.4		4.0	砂粒をほとんど含まない。内外面横ナデ調整、糸切り。	混入遺物
〃	27	〃	蓋					天井径7cm。チャートの粗粒砂、小礫を含む。浅黄色。天井部外面にヒビ割れ状の亀裂顕著。	
〃	28	〃	高杯				15.0	チャートの粗粒砂を多く含む。橙色。内外面ハケ調整、端部横ナデ調整。	
〃	29	〃	高杯				12.4	チャートの粗粒砂を多く含む。橙色。内外面横方向ヘラ磨き。	
〃	30	〃	高杯				6.7	チャートの粗粒砂を多く含む。橙色。外面ハケ調整後ナデ調整、裾部付近ヘラ磨き。	
〃	31	〃	甕				11.0	チャート、砂岩の小礫、長石の粗粒砂を多く含む。褐色。外面ハケ調整、内面指頭によるナデ調整。	底部付近黒斑
12	34	ST7	甕	13.6		16.9		チャート、石英粒、4mm大砂粒。橙色。外面は叩きのち口縁部でナデ、胴部で縦位粗いハケ。	
〃	35	〃	甕	12.0				石英粒、5mm大砂粒及び細砂粒多。橙色。外面は口縁部で縦位のハケのちナデ、胴部は叩きのちハケ。内面は右下がりハケのちナデ。	
〃	36	〃	甕	12.2				石英粒、3mm大砂粒多。黄橙色。外面は叩き、焼成不良。	
〃	37	〃	甕				2.8	石英粒、4mm大砂粒多。黄橙色。外面は叩きのち縦位のハケ。内面は縦位の粗いハケのちナデ。	
〃	38	〃	鉢	12.5	6.5		3.0	チャート、石英粒、3mm大砂粒。黄橙色。外面は叩きのちナデ。内面は右下がりの粗いハケのちナデ。	
〃	39	〃	鉢	14.3	10.3			石英粒、5mm大砂粒。橙色。外面は叩き。内面は右下がりの粗いハケ。	
〃	40	〃	脚付鉢	10.0	6.5		5.8	チャート、石英粒、6mm大砂粒多。橙色。外面は接合部に指頭圧痕。内面は鉢部でハケのちナデ、脚部でナデ。内面は摩滅。	
〃	41	〃	手捏ね 土器	5.7	2.8		3.0	チャート、3mm大砂粒。浅黄橙色。内外面に指頭圧痕。	
14	43	ST8	鉢	11.5	3.2			3mm大砂粒。黄橙色。手捏ね成形。内外面共口唇部に横ナデ、体部指頭圧痕。	
〃	44	〃	鉢	13.1	4.4			チャート、石英粒、4mm大の砂粒稀。橙色。外面は叩き。内面はハケのちナデ。	
〃	45	〃	鉢	15.1	4.1			4mm大の砂粒。橙色。内面はハケのちナデ。穿孔途中の打痕。	
〃	46	〃	鉢	16.5	5.3		5.4	チャート、石英粒、5mm大の砂粒。黄橙色。外面は叩きのちナデ。内面は右下がりの粗いハケのちナデ。	
〃	47	〃	鉢	15.5	6.4		3.0	チャート、石英粒、5mm大の砂粒。橙色。外面は叩き。内面はハケのちナデ。	
〃	48	〃	鉢	13.8	7.6		5.7	チャート、石英粒、2mm大の砂粒。橙色。外面は叩きのちナデ。内面は右下がりハケのちナデ。	
〃	49	〃	鉢	12.8	7.5		4.2	チャート、石英粒。3mm大の砂粒。外面は叩きのちナデ。内面は粗いハケのちナデ。口縁部は内外面横位のナデ。	

表.16 遺物観察表（弥生・古墳）

Fig. No.	挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)				特 徴	備 考
				口径	器高	胴径	底径		
14	50	ST8	鉢	13.4	6.6			チャート、石英粒、3mm大の砂粒。黄橙色。内面は縦位の細かいハケのちナデ。	
〃	51	〃	鉢	13.6	5.9		8.0	チャート、石英粒、2mm大の砂粒。黄橙色。外面は指頭圧痕。内面は右下がりの粗いハケのちナデ。	
〃	52	〃	鉢				6.0	2mm大の砂粒。橙色。外面はナデ。内面はハケのちナデ。	
〃	53	〃	鉢	20.8	9.0			チャート、石英粒、3mm大の砂粒。橙色。外面は叩きのちナデ。内面はハケのちナデ。	
〃	54	〃	高杯	16.3	10.7		13.4	5mm大の砂粒。橙色。組合せ成形。外面はナデ又はヘラ磨き、口縁部は横位のナデ。内面はナデ。	
〃	55	〃	高杯	14.7	11.7		14.7	チャート、石英粒、3mm大の砂粒。黄橙色。組合せ成形。外面はヘラ磨き。内面はハケのち杯部で磨き、脚部でナデ又は磨き。	
〃	56	〃	高杯	25.6				チャート、石英粒、2mm大の砂粒。橙色。内外面に丁寧なヘラ磨き。	
〃	57	〃	高杯	14.8				胎土精緻。稀に4mm大の砂粒稀。黄橙色。内外面共口縁部は横位のハケのちナデ、他はナデ。	
〃	58	〃	高杯				11.8	チャート、石英粒、3mm大の砂粒。橙色。組合せ成形。外面はハケのちヘラ磨き。内面はハケのちナデ。	
〃	59	〃	甕					石英粒、8mm大の砂粒。黄橙色。外面は叩きのち縦位ハケ。内面は縦位ハケ。	
123	937	〃	甕	15.0				石英・雲母・結晶片岩・角閃石の粗粒砂を含む。にぶい橙色。口縁部内・外面強い横ナデ。胴部外面右下がりのハケ、内面指頭圧痕顕著。	口縁部外面煤ける 東阿波型土器
16	60	ST9	壺	16.4				チャート、赤色風化土の小礫を含む。にぶい橙色。内・外面横ハケ後ヘラ磨き。外面櫛描波状文。	
〃	61	〃	壺	14.4				チャートの粗粒砂を含む。橙色。内・外面ナデ調整。	上胴部に黒斑あり
〃	62	〃	壺	18.4				チャートの小礫、粗粒砂を多く含む。淡黄色。外面右下がりのハケ。口縁部内・外面に強い横ナデ。	
〃	63	〃	甕	13.0				チャートの小礫を含む。淡黄茶色。外面叩き。内面左上がりのハケ。口縁部は叩き出し。	
〃	64	〃	甕	12.9				チャートの粗粒砂を多く含む。茶。口縁部内・外面横ナデ。	外面煤ける
〃	65	〃	甕	13.2				チャートの小礫を多く含む。淡茶色。胴部外面水平方向の叩き。内面指ナデ顕著。口縁部叩き出し。	外面黒斑が多い
〃	66	〃	甕				3.0	チャートの粗粒砂を多く含む。橙色。外面叩き+縦ハケ。上胴部内面縦ハケ、以下はナデ。口縁部叩き出し。わずかに平底。	
〃	67	〃	甕	13.2				チャートの粗粒砂、小礫を含む。黄灰色。外面水平方向の叩き。内面指ナデが顕著。	
〃	68	〃	鉢	11.6	6.2		1.5	チャートの細・粗粒砂を多く含む。鈍い黄橙色。外面叩き。内面ハケ+ナデ調整。丸底。	
〃	69	〃	鉢	32.0				頁岩、チャート、赤色風化礫の粗粒砂を多く含む。橙色。口縁部まで右上がりの叩き。口縁部外面ナデ、胴部縦ハケで最終調整。	

表.16 遺物観察表（弥生・古墳）

Fig. No.	挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)				特 徴	備 考
				口径	器高	胴径	底径		
16	70	ST9	鉢	12.5	7.3		6.4	チャートの小礫、粗粒砂を含む。黄茶色。外面右上がりの叩き。内面右下がりのハケ後ナデ。	胴部に大きな黒斑あり
〃	71	〃	鉢	15.0				チャートの粗粒砂を含む。橙色。外面叩き+ナデ。内面右下がり+左下がりのハケ。	
〃	72	〃	鉢	27.4				チャートの砂粒を多く含む。淡茶色。外面右上がりの叩き。内面右上がりのハケ。口縁部面横ナデ。	
〃	73	〃	鉢	16.0				チャートの粗粒砂を多く含む。橙色。外面水平方向の叩き。内面縦ハケ。	
〃	74	〃	鉢	15.4				チャートの粗粒砂を多く含む。にぶい橙色。薄い作り。外面叩き+ナデ。内面右下がりのハケ。	
〃	75	〃	高杯					チャートの粗粒砂を含む。にぶい橙色。外面木理の異なる2種のハケ原体による右下がりのハケ。内面ハケ+ミガキ。口縁部は稜をなして外反する。	
〃	76	〃	高杯	18.1				チャートの粗粒砂、小礫を含む。黄茶色。外面丁寧な横ナデ。内面ナデ調整。口唇部横ナデで面取る。脚接合部で欠損。	
〃	77	〃	高杯				11.0	チャートの粗粒砂を少量含む。橙色。内・外面調整観察不可能。脚は直線的に下降し、端部近くでわずかに外反。径8mmの円孔5穴。杯部は接合部より剥離欠損。	
〃	78	〃	高杯				16.1	チャートの粗粒砂を含む。橙色。器表の荒れがひどい。	
〃	79	〃	甕				4.0	チャートの粗粒砂、小礫を含む。にぶい橙色。外面叩き。内面ナデ。	
〃	80	〃	支脚				14.8	チャートの小礫、粗粒砂を多く含む。浅黄橙色。外面叩き+縦ハケ。	
〃	81	〃	蓋				19.2	チャートの粗粒砂を多く含む。橙色。内+外面ナデ調整。	
〃	82	〃	鉢				4.0	チャートの粗粒砂を多く含む。橙色。外面叩き。内面ナデ調整。	
〃	83	〃	不明				4.7	チャートの粗粒砂を多く含む。橙色。内・外面器表が激しく剥離。	
〃	84	〃	鉢				2.4	チャートの粗粒砂を多く含む。橙色。底部外面右上がりの叩き。	
〃	85	〃	甕				2.3	チャートの粗粒砂を多く含む。橙色。外面不定方向のハケ。内面ナデ。	
18	86	ST10	土師器甕	16.0				チャート、長石などの粗・細粒砂を含む。暗茶色。この時期に見かけない胎土。口縁部内、外面ともに横ナデ。胴部内面削り+ナデ。	
〃	87	〃	土師器甕	13.8				チャートの砂粒を多く含む。灰褐色。口縁部外面縦方向、横方向のハケ。器表のいたみが激しい。	
〃	88	〃	土師器甕	15.4				チャートの細・粗粒砂を含む。暗茶色。口縁部内・外面共に横ナデ。胴部内面ヘラ削り。	
〃	89(a+b)	〃	土師器甕	21.9		22.3		チャートの砂粒を多く含む。にぶい橙色。外面口縁部は強い横ナデ、他は縦ハケ。下胴部は部分的に下→上の削り。内面横ヘラ削り後横ナデ。丸底。	外面煤ける
〃	90	〃	土師器甕	13.5	18.2	15.0		チャートの粗粒砂を多く含む。外面にぶい橙色。内面にぶい黄橙色。外面縦を基調とするハケ調整、口縁部は横方向の強いナデ。内面口縁部横ハケ、胴部横ナデ。丸底。	外面被熱赤変煤ける
〃	91	〃	土師器甕	17.5		17.6		チャートの粗粒砂を多く含む。外面にぶい橙色。内面橙色。外面口縁部強い横ナデ、胴部縦ハケ。内面口縁部横ハケ、胴部弱い削り。	外面煤ける

表.16 遺物観察表（弥生・古墳）

Fig. No.	挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)				特 徴	備 考
				口径	器高	胴径	底径		
18	92	ST10	土師器 高杯					チャートの粗粒砂を多く含む。外面黄橙色、内面橙色。器表のいたみが激しい。	
〃	93	〃	鉢					チャートの粗粒を少量含む。橙色。丸底。	
〃	94	〃	土師器 鉢	17.5				チャートの粗粒砂を多く含む。にぶい橙色。外面縦ハケ。内面上半横ハケ、下半ナデ。	被熱赤変
〃	95	〃	土師器 甌	34.8				チャートその他の粗粒砂を含む。橙色。外面縦方向のハケ、口縁部は横ナデ。内面横方向のハケ。	
〃	96	〃	須恵器 蓋	13.4		4.2		精選された胎土。灰色、断面僅かにセピア色。外面天井部に長短2本の沈線ヘラ記号あり。内面立ち上がり3本沈線のヘラ記号あり。天井部中央に一定方向の横ナデ。	須恵器 回転台右回り
〃	97	〃	須恵器 杯蓋	14.5				長石粒を少量含む。灰色。内・外面横ナデ。	
〃	98	〃	須恵器 杯身	16.0				長石の細粒砂を多く含む。灰白色。底部外面削り、他は横ナデ。	ロクロ右回り
〃	99	〃	須恵器 杯身	10.3	4.5			チャートの小礫が入る。淡灰色。内・外面横ナデ。外底切りはなし。内底中央部一定方向ナデ。	
19	100	ST11	壺					チャート、赤色風化土の粗粒砂を含む。淡茶色。頸部外面縦ハケ。口頸部内面横ハケ。	
〃	101	〃	小壺	5.3	8.1	3.6		砂粒をほとんど含まない。にぶい黄橙色。外面肩より上縦ハケ。内面縦ハケ。	下胴部に黒斑あり
〃	102	〃	甕	15.4				チャートの粗粒砂を含む。浅黄橙色。口縁部に接合痕あり。	
〃	103	〃	甕	15.1				チャートの粗粒砂、長石粗粒砂を含む。橙色。調整不明。	
〃	104	〃	鉢			3.3		チャートの粗粒砂を含む。淡茶色。外面ナデ。内面右下がりのハケ。	下胴部に大きな黒斑あり
〃	105	〃	高杯					チャートの粗粒砂をわずかに含む。にぶい橙色。外面縦ハケ+縦ヘラ磨き。内面横ハケ。	
〃	106	〃	不明					長石、チャートの粗粒砂を含む。にぶい橙色。外面縦ハケ+磨き。内面ハケ+ナデ。	
〃	107	〃	杯			7.6		砂粒をほとんど含まない。灰黄色。外底は糸切り。	
〃	108	〃	杯			6.6		砂粒をほとんど含まない。にぶい黄橙色。内面ナデ調整。外底は糸切り。	
〃	109	〃	皿	15.5		11.4		長石の細・粗粒砂を含む。淡灰色。内・外面強い横ナデ。	
21	111	ST12	壺	14.0				チャートの小礫を多く含む。橙色。口縁部内外面ハケ調整。	
〃	112	〃	壺	18.0				チャートの粗粒砂、長石細・粗粒砂をわずかに含む。橙色。二重口縁壺。調整不明。	
〃	113	〃	壺	13.3				チャートの粗粒砂を含む。橙色。口縁部内外面ハケ調整。	
〃	114	〃	甕	15.0				長石、チャートの粗粒砂を含む。暗灰黄色。口縁部内外面強い横ナデ調整。端部は摘み出してやや折り返す。胴部外面右下がりのハケ調整、内面ヘラ削り後ナデ調整。	内外面煤ける
〃	115	〃	甕	11.3	19.1	17.8		チャートの小礫、粗粒砂を多く含む。黄橙色。胴部外面叩き後縦ハケ調整、内面縦ハケ調整。丸底。	外面煤ける
〃	116	〃	甕	14.4		21.6		石英、チャートの粗粒砂を多く含む。黄橙色。口縁部叩きだし、胴部外面叩き後ほぼ全面を縦ハケ調整。内面同上半部はハケ調整後指ナデ調整、下半はハケ調整後ヘラ削り。(下→上)	

表.16 遺物観察表（弥生・古墳）

Fig. No.	挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)				特 徴	備 考
				口径	器高	胴径	底径		
21	117	ST12	壺					チャートの粗粒砂を多く含む。黄橙色。外面縦ハケ調整、内面ハケ調整後ナデ調整。	
〃	118	〃	鉢	13.2	8.2		4.6	砂粒をほとんど含まない。橙色。内外面ナデ調整。わずかに突出した底部。	
〃	119	〃	鉢	13.8	6.6		2.0	チャートの細・粗粒砂を少量含む。橙色。外面ナデ調整、内面右下がりハケ調整後右上がりのナデ調整。	
〃	120	〃	鉢	11.2	6.1		4.6	チャートの粗粒砂を少量含む。橙色。外面ヒビ割れ状の亀裂が入る。	
〃	121	〃	鉢	12.0	5.5		1.9	橙色。叩き成形。口縁部および上胴部横ナデ調整、内面ナデ調整。	
〃	122	〃	鉢	11.2	5.5		3.8	砂粒をほとんど含まない。橙色。外面底部付近に型どりに使用したと考えられる籠目状の圧痕が認められる。外面ナデ調整、内面横ナデ調整、ヒビ割れ状の亀裂が入る。	
〃	123	〃	鉢	12.0	3.5			砂粒をほとんど含まない。赤橙色。内外面指頭圧痕顕著。	
〃	124	〃	脚付鉢	9.6	6.2		7.2	精選された胎土。橙色。脚部と体部の分割成形が良く観察できる。体部内面右下がりのハケ調整、ヒビ割れ状の亀裂が入る。脚部外面指頭圧痕顕著。	
23	126	ST13	壺	18.3				チャートの細・粗粒砂を多く含む。外面橙色、内面黄灰色。口縁端部は上下に拡張。内・外面ハケ調整。	
〃	127	〃	壺	17.4				チャートの粗粒砂を含む。淡茶色。口縁部内・外面横ハケ。	
〃	128	〃	壺	18.0				チャートの細・粗粒砂を少量含む。淡茶色。外面指頭圧痕顕著。内面木理の粗いハケ。	
〃	129	〃	壺	15.8				チャートの小礫、粗粒砂を多く含む。にぶい黄橙色。口縁端部は折り返し強く横ナデ。外面右下がりのハケ。	
〃	130	〃	壺	15.4				チャートの粗粒砂を含む。淡黄色。口縁端部は上下に拡張。口縁部外面強い横ナデ。内面横ナデ+ヘラ磨き。	
〃	131	〃	壺	12.3				チャートの細粒砂少量含む。にぶい橙色。外面櫛描波状文。内・外面横ナデ。	
〃	132	〃	壺					チャートの細・粗粒砂を含む。にぶい橙色。頸部に断面長方形の太い突帯。ハケ状原体による羽状文を施す。	
〃	133	〃	壺	21.0				結晶片岩、雲母を含む。橙茶色。内・外面横ナデ。	搬入品 東阿波型土器
〃	134	〃	壺	16.0				チャート、赤色風化礫の粗粒砂を多く含む。浅黄橙色。内・外ナデ調整。口唇部下方に摘み出し横ナデ。	
〃	135	〃	甕	17.1				チャートの粗粒砂を多く含む。赤茶色。外面叩き。口縁部叩き出し。口縁部内面右上がりのハケ。	
〃	136	〃	甕	15.8				チャートの粗粒砂を多く含む。にぶい橙色。外面右下がりの叩き。口縁部叩き出し。口縁部内面横ハケ、胴部内面左下がりのハケ。	外面煤ける
〃	137	〃	甕	14.0				チャートの粗粒砂を含む。橙色。口縁部外面にわずかに縦ハケが認められるが、器表の荒れが激しい。	
〃	138	〃	甕	11.9				チャートの粗粒砂を含む。灰白色。外面叩き。内面右下がりのハケ。口縁部叩き出し。	
〃	139	〃	甕	14.3				石英・長石の粗粒砂を含む。橙色。外面叩き+縦ハケ。口縁部内面右下がりのハケ。口縁部叩き出し。	

表.16 遺物観察表（弥生・古墳）

Fig. No.	挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)				特 徴	備 考
				口径	器高	胴径	底径		
23	140	ST13	甕	17.2				チャートの粗粒砂を少量含む。にぶい黄橙色。外面叩き。口縁部外面右下がりのハケ。内面指頭によるナデ。口縁部叩き出し。	
〃	141	〃	壺	10.6	9.9			チャート、長石の粗粒砂を含む。にぶい橙色。外面胴部下半叩き、口縁部横ナデ。内面は指頭によるナデ。	胴部下半から底にかけて大きな黒斑
〃	142	〃	甕	8.1				チャートの粗・細粒砂を多く含む。橙色。内・外面ナデ調整。口縁部外面横ナデ。胴部内・外面にわずかに下地のハケあり。	
〃	143	〃	甕				4.0	チャートの小礫、粗粒砂を含む。橙色。外面叩き。内面ナデ調整。	
〃	144	〃	甕	12.6		18.4		チャートの粗粒砂を少量含む。橙色。胴部外面水平方向の叩き+部分的に縦ハケ。内面指頭によるナデ。口縁部内・外面に強い横ナデ。	外面胴部下半煤ける
〃	145	〃	鉢	15.2				砂粒をほとんど含まない。橙色。内・外面ナデ。	
〃	146	〃	鉢	20.8				チャートの粗粒砂を少量含む。橙色。外面叩き。内面横ハケ。外面にヒビ割れ状の亀裂多し。	
〃	147	〃	鉢	21.0				チャート、頁岩の粗粒砂を多く含む。浅黄橙色。調整観察不能。	
〃	148	〃	鉢	14.2		5.1	5.6	チャートの粗粒砂を含む。にぶい橙色。内・外面丁寧なナデ。外面はヒビ割れ状の亀裂が入るが、ほとんどナデ消している。	
〃	149	〃	鉢	15.0		5.3	5.0	砂粒をほとんど含まない。橙色。叩き成形なるも、上半はほとんどナデ消す。内面ハケ、ナデ。	
〃	150	〃	鉢	26.0				砂粒をほとんど含まない。にぶい橙色。内・外面丁寧なナデ。	
〃	151	〃	鉢	13.5				チャートの粗粒砂を含む。浅黄橙色。外面叩き。内面ナデ調整。	
〃	152	〃	鉢	11.0				チャートの粗粒、小礫を含む。にぶい黄橙色。内・外面ナデ調整。	
〃	153	〃	鉢	14.2				チャートの小礫、粗粒砂を少量含む。にぶい橙色。外面ナデ。内面右下がりのハケ。器壁が厚い。	
〃	154	〃	鉢	12.6				チャートの小礫を含む。にぶい橙色。外面叩き。内面ハケ調整。口縁部叩き出し。	
〃	155	〃	鉢	8.8	4.2		2.0	砂粒をほとんど含まない。橙色。外面ナデ、ヒビ割れ状の亀裂が入る。内面右下がりのナデ。	
〃	156	〃	鉢	8.3	5.2		4.0	チャートの粗粒砂を含む。橙色。外面叩き。内面右下がりのハケ。	
〃	157	〃	鉢	10.2	4.3		3.7	チャートその他の粗粒砂を含む。橙色。外面叩き。器表の荒れが激しい。	胴部外面に小黑斑あり
〃	158	〃	鉢	12.1	5.0		5.2	砂粒をほとんど含まない。橙色。外面叩き後ナデ。外面ヒビ割れ状の亀裂。内面右下がりのハケ+ナデ。底部外面に初ガラ圧痕を含む多くの植物繊維の圧痕あり。	
〃	159	〃	鉢	14.6	7.1		2.7	チャートの粗粒砂を少量含む。にぶい黄橙色。外面胴部下半螺旋状の叩き、上半はナデ。上・下接合部にわずかな凹み。内面右下がりのハケ。	
〃	160	〃	鉢	13.2	6.5		7.5	チャートの粗粒砂を多く含む。橙色。外面下半は右下がりの螺旋状叩き。上半は叩き後横ナデ。	外面煤ける

表.16 遺物観察表（弥生・古墳）

Fig. No.	挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)				特 徴	備 考
				口径	器高	胴径	底径		
23	161	ST13	鉢	13.2	7.2		3.3	チャートの小礫を多く含む。にぶい橙色。外面右下がりの螺旋状叩き。平底。	外面激しく煤ける
〃	162	〃	鉢	11.9	5.7			砂粒をほとんど含まない。橙色。外面下位に螺旋状叩き。上半は横ナデ。内面右下がりのハケ。	
〃	163	〃	鉢	7.9	2.9			砂粒をほとんど含まない。にぶい橙色。内・外面指頭圧痕顕著。	
24	164	〃	鉢	11.7	5.8		3.8	チャートの粗粒を含む。橙色。外面ヒビ割れ状の亀裂が多く走る。内・外面器表の荒れがひどい。	
〃	165	〃	鉢	15.2	5.9			チャートの粗粒を含む。にぶい橙色。外面下半叩き。上半は粘土でつぎたしナデ。外面上半にはヒビ割れ状の亀裂。内面ナデ。	
〃	166	〃	鉢	14.7	7.1		3.3	チャートの粗粒砂を多く含む。橙色。内・外面ナデ調整。底部外面粉ガラ、その他植物繊維の圧痕あり。	胴部に黒斑あり
〃	167	〃	高杯	17.8	5.0			チャートの粗粒砂を少量含む。黄褐色。外面口縁部付近右下がりのハケ、以下は横ヘラ磨き。内面横ヘラ磨き。	
〃	168	〃	高杯					砂粒をほとんど含まない。橙色。外面杯底部にわずかにヘラ磨き。杯部立ち上がりにしっかりした稜をなす。	
〃	169	〃	高杯	22.0				チャートの粗粒砂を少量含む。黄橙色。外面は下地のハケ調整がわずかに見られる。他はナデ。口縁部内・外面と杯部立ち上がりの段に強い横ナデ。	
〃	170	〃	高杯	17.6				チャートの細・粗粒砂を含む。黄茶色。外面ナデ。口縁部内面横ハケ。	
〃	171	〃	高杯	18.6				チャートの粗粒を含む。橙色。口縁部内面わずかに右下がりのハケ。他はナデ調整。杯部立ち上がりにしっかりした段をなす。	
〃	172	〃	高杯	20.6	14.6		14.2	チャートの粗粒砂を少量含む。橙色。内・外面丁寧なヘラ磨き。杯部立ち上がりの段を強く横ナデ。	
〃	173	〃	高杯	22.4				チャートの粗粒砂を含む。にぶい橙色。内・外面ナデ調整。口縁部は内側に肥厚。口唇部は巾広く面取る。	被熱赤変し煤ける
〃	174	〃	鉢	12.4				精選された胎土。橙色。外面ナデ内面ハケ。接合部で脚部と剥離している。	
〃	175	〃	鉢	14.8				チャートの粗粒砂を多く含む。橙色。口縁部内面横ハケ。他はナデ。	
〃	176	〃	高杯				11.7	チャートの細・粗粒砂を少量含む。橙色。外面縦ハケ+丁寧な縦ヘラ磨き。内面ナデ。	
〃	177	〃	高杯				10.3	チャートの細・粗粒砂を少量含む。橙色。外面縦ハケ+縦ヘラ磨き。内面ナデ。	端部付近煤ける
〃	178	〃	高杯					チャートの細・粗粒砂を含む。茶色。杯部外面ナデ。下地に叩き痕を認める。内面ヘラ磨き。	
〃	179	〃	高杯				13.6	チャートの粗粒砂を少量含む。橙色。	
〃	180	〃	高杯				13.0	チャートの細・粗粒砂を少量含む。黄橙色。外面ナデ。内面右下がりのハケ。	
〃	181	〃	高杯				10.3	チャートの粗粒砂を少量含む。黄茶色。器面調整観察不可能。端部は水平な面をなす。	
〃	182	〃	高杯					チャート、長石の粗粒砂を少量含む。黄茶色。器面調整観察不可能。	

表.16 遺物観察表（弥生・古墳）

Fig. No.	挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)				特 徴	備 考
				口径	器高	胴径	底径		
24	183	ST13	高杯				10.1	チャートの細・粗粒砂を少量含む。にぶい黄褐色。外面縦方向を基調とするヘラ磨き。内面ナデ。	内・外面煤ける
〃	184	〃	支脚				9.6	ほとんど砂粒を含まない。茶色。外面叩き。内面指頭圧痕顕著。	外面黒斑あり
〃	185	〃	支脚				7.9	チャートの粗粒砂を多く含む。にぶい橙色。外面ナデ調整。	
〃	186	〃	ミニチュア土器	3.5				チャートの小礫を含む。にぶい黄橙色。	
〃	187	〃	支脚					チャートの粗粒を含む。橙色。全面強くナデているが部分的に成形時についた指紋が残る。	
〃	188	〃	支脚					チャートの粗粒砂を多く含む。にぶい橙色。器表全体にヒビ割れ状の亀裂が走る。頭部に角状の突起が2つ伸び又状部下にも指頭による摘み出し小突起がある。	
26	189	ST14	壺	16.7				チャートの細・粗粒砂を含む。橙色。内外面ハケ調整、口縁部端部はわずかに摘みあげて横ナデ調整。	
〃	190	〃	壺	17.8				チャート、赤色風化礫の細粗粒砂を少量含む。黄橙色。内外面右下がりのハケ調整。口縁部端部わずかに下端に摘みだし横ナデ調整。	
〃	191	〃	壺	14.0				チャートの細粗粒砂を少量含む。口縁部内面横ナデ調整、外面縦ハケ調整。口縁部端部わずかに下端に摘みだし横ナデ調整。	
〃	192	〃	壺	16.4				チャートの粗粒砂を多く含む。橙色。二重口縁壺。器表の荒れが激しい。	
〃	193	〃	壺	20.4				結晶片岩、雲母などの粗粒砂を含む。茶色。二重口縁壺。全面横ナデ調整。	東阿波型土器
〃	194	〃	壺	13.4				チャート、赤色風化礫の粗粒砂を多く含む。橙色。内湾して立ち上がる二重口縁壺。ナデ調整を基調とし、内面の一部に横ナデ調整。	
〃	195	〃	壺	9.2				チャート、赤色風化礫の粗粒砂を多く含む。橙色。	
〃	196	〃	壺	11.8				長石・雲母の細粒砂を含む。橙色。頸部外面横ナデ調整後ヘラ磨き、内面横ナデ調整。	東阿波型土器
〃	197	〃	壺					チャートの細・粗粒砂を含む。淡黄色。口縁部を上・下に拡張し櫛描波状文を施す。	
〃	198	〃	壺					チャートの粗粒砂を多く含む。口縁部外面に櫛描波状文。橙色。	
〃	199	〃	甕	14.4				チャートの細・粗粒砂を含む。橙色。口縁部外面縦方向、内面右下がりのハケ調整。	
〃	200	〃	甕	16.0				チャート、長石、風化礫の粗粒砂を多く含む。口縁部内面横ハケ調整、外面縦ハケ調整。胴部外面縦ハケ調整、内面ハケ調整後ナデ調整。黄橙色。	
〃	201	〃	甕					チャートの粗粒砂を少量含む。橙色。内外面器表の荒れが激しい。	
〃	202	〃	壺				4.8	チャートの粗粒砂を少量含む。黄橙色。外底に植物繊維圧痕あり。	底部付近に黒斑あり
〃	203	〃	壺				4.4	チャートの粗粒砂を含む。橙色。外面ハケ調整、内面強いナデ調整。	下胴部に大きな黒斑あり
〃	204	〃	鉢	28.0				チャートの粗粒砂を含む。橙色。叩き成形、口縁叩きだし。	

表.16 遺物観察表（弥生・古墳）

Fig. No.	挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)				特 徴	備 考
				口径	器高	胴径	底径		
26	205	ST14	甕					チャートの粗粒砂を多く含む。橙色。叩き成形。丸底。	
〃	206	〃	甕				3.1	チャートの粗粒砂を多く含む。橙色。	
〃	207	〃	甕					チャートの粗粒砂を含む。橙色。叩き成形。丸底。	
〃	208	〃	甕					チャートの粗粒砂を多く含む。橙色。叩き成形。内面ナデ調整。	外面煤ける
〃	209	〃	甕				11.8	チャートの粗粒砂を含む。黄橙色。叩き成形であるがほとんどナデ調整で叩きは消えている。内面横ナデ調整。	
〃	210	〃	甕	14.2			20.2	長石・石英の細粗粒砂を含む。茶色。叩き成形、口縁部叩きだし。外面中位以下木理の粗いハケ調整、内面上部右下がりのハケ調整、以下縦方向のナデ調整。	搬入品の可能性あり
〃	211	〃	甕	15.0	25.0		22.2	長石・石英・雲母などの細粗粒砂を含む。淡黄茶色。口縁部外面7条の櫛描文、胴部外面縦ハケ調整後部分的にヘラ磨き。内面中位以下縦方向ヘラ削り、頸部直下左→右のヘラ削り、下胴部は指頭圧痕顕著。	外面煤ける 吉備型甕
〃	212	〃	鉢	15.3				橙色。チャートの粗粒砂を含む。	被熱赤変
〃	213	〃	鉢	14.9				チャートの粗粒砂を含む。黄橙色。内外面ナデ調整を基調とするも外面の一部に右下がりのハケ調整、外面ヒビ割れ状の亀裂顕著。	
〃	214	〃	鉢				4.0	チャートの小礫、粗粒砂を多く含む。黄橙色。内外面ナデ調整。外面ヒビ割れ状の亀裂顕著。	
〃	215	〃	鉢	12.6			4.8	チャートの粗粒砂を含む。橙色。内外面ナデ調整。外面ヒビ割れ状の亀裂顕著。	外底粗、他の圧痕あり、外面煤ける
〃	216	〃	鉢				6.2	砂粒をほとんど含まない。橙色。内外面ナデ調整。外面ヒビ割れ状の亀裂顕著。	外底粗、他の植物の圧痕あり
〃	217	〃	鉢	12.5	4.7		4.8	チャートの粗粒砂を含む。橙色。内外面ナデ調整。外面ヒビ割れ状の亀裂顕著。	
〃	218	〃	鉢	11.9	5.5		4.7	チャートの小礫を含む。橙色。外面ナデ調整を基調とするも口縁部付近には横ハケ調整がわずかに見られる。内面右下がりのハケ調整。	
〃	219	〃	鉢	11.6	5.5		4.4	砂粒をほとんど含まない。黄橙色。外面ナデ調整、ヒビ割れ状の亀裂顕著。内面強いナデ調整、底部付近にハケ状原体による圧痕あり。	
〃	220	〃	鉢	11.1	5.6		4.8	砂粒をほとんど含まない。橙色。ヒビ割れ状の亀裂顕著。底部付近にハケ状原体による圧痕あり。	
〃	221	〃	鉢	10.4	5.5		3.7	チャート、赤色風化礫を多く含む。橙色。外面ヒビ割れ状の亀裂顕著。	
〃	222	〃	鉢	11.0	6.2		4.3	チャートの細粗粒砂を含む。橙色。内面ナデ調整。外面ヒビ割れ状の亀裂顕著。外底に植物繊維圧痕あり。	
〃	223	〃	鉢	12.7	6.0		2.2	チャートの小礫・粗粒砂を含む。橙色。叩き成形。内外面上半部、右下がりのハケ調整、内面下半には指頭によるナデ調整。	内外に大きな黒斑あり
27	224	〃	鉢	12.7	5.5		4.2	チャートの粗粒砂を含む。黄橙色。内外面ナデ調整を基調とする。底部外面植物の圧痕あり。	下胴部から底部にかけて黒斑あり
〃	225	〃	鉢	10.3	5.8		4.8	チャートの粗粒砂を少量含む。黄橙色。内外面強い横ナデ調整。内底にヘラ状原体による放射状の圧痕あり。外面ヒビ割れ状の亀裂顕著。	

表.16 遺物観察表（弥生・古墳）

Fig. No.	挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)				特 徴	備 考
				口径	器高	胴径	底径		
27	226	ST14	鉢	12.4	6.0			チャートの粗粒砂を含む。内外面ナデ調整。橙色。外面ヒビ割れ状の亀裂顕著。外面底部から胴部にかけて木の葉の圧痕あり。	
〃	227	〃	鉢	9.0	6.0		2.0	チャートの粗粒砂を含む。橙色。内外面ナデ調整。内面口縁部付近は右下がりの木理の粗いハケ調整。ヒビ割れ状の亀裂顕著。外面底部植物の圧痕あり。	
〃	228	〃	鉢	7.0	2.3			チャートの粗粒砂を多く含む。橙色。内外面指頭圧痕顕著。尖底。内面に大きな黒斑あり。	
〃	229	〃	甌					チャートの細・粗粒砂を多く含む。黄褐色。叩き成形。内面指頭によるナデ調整。底部焼成前穿孔径6mm。	
〃	230	〃	高杯				13.8	チャートの細粗粒砂を少し含む。橙色。裾部に円孔（内→外）あり。外面細いヘラ磨き、内面横ハケ調整。	
〃	231	〃	高杯					チャートの細粗粒砂を多く含む。橙色。	
〃	232	〃	高杯					チャート・長石の細粗粒砂を含む。橙色。柱状部はわずかにエンタシス状を呈す。柱状部上端に小円孔あり。外面細い原体によるヘラ磨き。	
〃	233	〃	高杯					チャートの粗粒砂を多く含む。外面縦ヘラ磨き、内面にしぼり目。裾部に円孔4つあり。	
〃	234	〃	支脚				8.0	チャートの粗粒砂を含む。橙色。外面縦ハケ調整後ナデ調整、内面しぼり目。	
〃	235	〃	支脚				8.8	チャートの粗粒砂を少量含む。橙色。外面ナデ調整、内面指頭による強いナデ調整・押さえ。指紋が多く残る。	
〃	236	〃	支脚				8.8	チャートの粗粒砂を多く含む。橙色。外面指頭圧痕顕著。内面しぼり目。	
〃	237	〃	支脚				7.2	チャートの粗粒砂を多く含む。灰黄褐色。内外面指頭圧痕顕著。	
〃	238	〃	支脚				6.4	チャートの粗粒砂を多く含む。浅黄色。充実支脚。内外面指頭圧痕顕著。	
〃	239	〃	支脚					砂粒をほとんど含まない。橙色。	
〃	240	〃	支脚					砂粒をほとんど含まない。黒褐色。	
28	241	ST15	甕	15.2				石英、結晶片岩を含む。茶色。内・外面横ナデ。	東阿波型土器
〃	242	〃	甕	16.3				石英、雲母の粗粒砂を含む。外面灰黄茶色、内面暗灰茶色。内・外面強横ナデ。端部はわずかに肥厚。	外面煤ける。庄内式土器
〃	243	〃	脚付鉢	11.0	5.1		4.8	チャートの粗粒砂を少量含む。橙色。外面細い原体による磨き。内面ヘラ磨き。	
30	244	ST16	壺	19.6				チャートの小礫、粗粒砂を含む。淡黄色。内外面横ナデ調整。	
〃	245	〃	甕	16.7				口縁部内外面横ナデ調整。黄灰色。口縁部端部摘みあげ。	庄内式土器
〃	246	〃	壺	18.6				チャートの粗粒砂を多く含む。橙色。口縁部外面強い横ハケ調整、頸部外面右下がりのハケ調整。	
〃	247	〃	壺	15.2				チャート、橙色。赤色風化礫の粗粒砂を含む。	
〃	248	〃	壺	14.3				チャート、赤色風化礫の小礫粗粒砂を含む。明黄褐色。内面ハケ調整。	
〃	249	〃	壺	11.4				チャート、赤色風化礫の細粗粒砂を含む。浅黄色。叩き成形。内外面木理の粗いハケ調整。	

表.16 遺物観察表（弥生・古墳）

Fig. No.	挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)				特 徴	備 考
				口径	器高	胴径	底径		
30	250	ST16	壺					チャート、その他の粗粒砂を多く含む。橙色。口縁部を上下に拡張、半截竹管状の原体で刺突を加える。	
〃	251	〃	壺	15.2				チャート、赤色風化礫の細粗粒砂を多く含む。橙色。内外面ハケ調整。	
〃	252	〃	壺	11.2				チャートの小礫・粗粒砂を多く含む。橙色。口縁部が内側に屈曲する二重口縁壺。頸部内外面ハケ調整。	
〃	253	〃	壺				6.0	チャート、赤色風化礫の小礫・粗粒砂を含む。橙色。	外底付近大きな黒斑
〃	254	〃	壺					チャートの粗粒砂を多く含む。橙色。口縁部外面櫛描波状文。	
〃	255	〃	壺					チャート、赤色風化礫の粗粒砂を多く含む。橙色。頸部外面ハケ調整、頸部下半に粘土帯を貼付し、刺突文を施す。	
〃	256	〃	甕	16.0				赤色風化礫の粗粒砂を含む。淡黄色。叩き成形。器表の荒れが激しい。	
〃	257	〃	甕	20.0				赤色風化礫の粗粒砂を少し含む。橙色。叩き成形、口縁叩きだし。口縁部内面右下がり、胴部内面縦ハケ調整後ナデ調整。	
〃	258	〃	甕	16.7				チャートの粗粒砂を多く含む。橙色。内外面右下がりハケ調整。	
〃	259	〃	甕	15.0				チャートの粗粒砂を多く含む。橙色。口唇部上下拡張、内面横ハケ調整、外面縦ハケ調整。	
〃	260	〃	甕	17.8				チャートの粗粒砂を含む。黄白色。叩き成形、口縁部叩きだし。口縁部内面横ハケ調整。	
〃	261	〃	甕	16.0				チャート、赤色風化礫の粗粒砂を多く含む。黄橙色。叩き成形。口縁部叩きだし、口縁部内面右下がりのハケ調整。口縁部外面指頭圧痕顕著。	
〃	262	〃	甕	13.0				赤色風化礫の粗粒砂を含む。叩き成形、口縁部叩きだし。口縁部内面横ナデ調整、外面右下がりのハケ調整。	
〃	263	〃	甕	11.6				チャート、風化砂岩の粗粒砂を含む。橙色。叩き成形、口縁部叩きだし。	
〃	264	〃	甕	12.5		15.0		チャートの粗粒砂を多く含む。橙色。叩き成形、口縁部叩きだし。外面部分的に縦ハケ調整、内面弱い削り(下→上)。	底部付近黒斑
〃	265	〃	甕	13.6				長石の粗粒、赤色風化礫の粗粒砂を含む。橙色。	
〃	266	〃	甕				5.3	チャートの粗粒砂を含む。橙色。叩き成形。外底に繊維の圧痕あり。内面右下がりのハケ調整。	
〃	267	〃	甕					チャートの粗粒砂、砂岩、赤色風化礫を含む。灰白色。叩き成形。丸底。	
〃	268	〃	鉢	15.4				チャートの粗粒砂を含む。浅黄橙色。叩き成形。内面右下がりのハケ調整。	
〃	269	〃	鉢	20.3				チャートの粗粒砂を多く含む。黄橙色。叩き成形。内面ハケ調整。	
〃	270	〃	甕					チャートの粗粒、小礫を多く含む。橙色。外面ハケ調整。	
〃	271	〃	甕					チャートの粗粒砂、赤色風化礫の粗粒砂を含む。灰黄色。外面ハケ調整、内面ナデ調整。	
〃	272	〃	鉢	18.8				チャートの粗粒砂を含む。橙色。内外面右下がりのハケ調整。	
〃	273	〃	鉢	18.4				チャート、赤色風化礫の粗粒砂を含む。橙色。内面右下がりのハケ調整。	
〃	274	〃	鉢	10.4				チャートの粗粒砂を含む。叩き成形。内面右下がりのハケ調整。	

表.16 遺物観察表（弥生・古墳）

Fig. No.	挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)				特 徴	備 考
				口径	器高	胴径	底径		
30	275	ST16	鉢	8.5	3.6			チャートの小礫を含む。黄橙色。外面ナデ調整。内面口縁部付近右下がりのハケ調整。	
〃	276	〃	鉢				4.8	チャートの粗粒砂を含む。叩き成形。橙色。	
〃	277	〃	鉢	11.1	5.0			チャートの粗粒砂を多く含む。灰色。叩き成形。内面横ハケ調整、外底に黒斑あり。丸底。	
〃	278	〃	鉢				3.8	チャートの粗粒砂を含む。淡黄色。	
〃	279	〃	鉢				2.0	チャートの粗粒砂、小礫を含む。黄橙色。外面ハケ調整。	
〃	280	〃	鉢					チャート、赤色風化礫の小礫・粗粒砂を含む。橙色。尖底。	
〃	281	〃	鉢	15.8				チャートの粗粒砂を多く含む。橙色。叩き成形。内面ハケ調整。	
〃	282	〃	鉢	7.0	2.0			チャート、その他の粗粒砂を少量含む。橙色。外面全体に大きな黒斑。丸底。	
〃	283	〃	鉢	7.0	1.9			チャートの粗粒砂を含む。橙色。手捏ね。	
〃	284	〃	甌					チャート、赤色風化礫の粗粒砂を多く含む。黄橙色。叩き成形。内面ナデ調整。底部焼成前穿孔、径5mm。	
〃	285	〃	鉢	12.8				チャートの粗粒砂を多く含む。叩き成形。内面右下がりのハケ調整。	外面煤ける
〃	286	〃	高杯					チャートの粗粒砂を含む。橙色。内外面ハケ調整後ヘラ磨き。	
〃	287	〃	高杯	19.6				チャートの小礫、粗粒砂を多く含む。橙色。内面横ハケ調整後縦方向ヘラ磨き、外面上半縦ハケ調整、下半縦ヘラ磨き。	
〃	288	〃	高杯					チャートの粗粒砂を含む。橙色。外面細い原体によるヘラ磨き。	
31	289	〃	高杯				14.0	砂粒をほとんど含まない。橙色。器表の摩耗が激しい。	
〃	290	〃	高杯				17.0	チャートの粗粒砂を含む。黄灰色。外面炭素吸着後ヘラ磨き。	
〃	291	〃	高杯					長石、石英の細粒砂を含む。赤褐色。外面細いヘラ磨き、内面ハケ調整。	搬入品
〃	292	〃	高杯				14.0	チャートの粗粒砂を多く含む。橙色。内外面水平方向のハケ調整。	
〃	293	〃	支脚				7.4	チャート、赤色風化礫の細粒砂を含む。浅黄橙色。	
〃	294	〃	支脚				9.7	チャートの小礫を多く含む。黄橙色。外面指頭圧痕顕著。ナデ調整。	
〃	295	〃	鉢				6.8	チャート、赤色風化礫の小礫、粗粒砂を含む。黄橙色。	
〃	296	〃	高杯					精選された胎土を使用。淡黄色。脚部を杯部へ挿入する分割成形法。外面縦ハケ調整後縦ヘラ磨き。上下一対の円孔を4箇所に穿つ。	
〃	297	〃	支脚				8.0	チャート、赤色風化礫の細・粗粒砂を含む。橙色。外面裾部に叩き痕が見られる。内外面指頭圧痕顕著。	
〃	298	〃	支脚				6.8	チャートの粗粒砂、小礫を含む。浅黄色。外面指頭圧痕顕著。	
〃	299	〃	支脚				6.4	チャート、赤色風化礫の小礫、粗粒砂を含む。橙色。	
〃	300	〃	支脚				7.2	チャートの小礫、粗粒砂を多く含む。橙色。内外面指頭圧痕顕著。	
〃	301	〃	支脚				7.7	チャートの小礫、粗粒砂を多く含む。浅橙色。内外面指頭圧痕顕著。	

表.16 遺物観察表（弥生・古墳）

Fig. No.	挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)				特 徴	備 考
				口径	器高	胴径	底径		
31	302	ST16	支脚				8.6	石英、長石の粗粒砂を多く含む。淡黄色。外面粗いハケ調整。	
〃	303	〃	支脚					チャート、赤色風化礫の粗粒砂を多く含む。黄橙色。指頭圧痕顕著。ハケ調整。	
〃	304	〃	支脚					チャート、砂岩、赤色風化礫の粗粒砂を含む。淡黄色。叩き成形。内面に紋目。	
〃	305	〃	支脚					チャート、長石の細粗粒砂を含む。黄色。ハケ状原体による圧痕、指頭圧痕顕著。	
〃	306	〃	不明					チャートの粗粒砂を多く含む。茶色。叩き成形後ナデ調整。	
33	308	ST17	壺	21.0				チャートの粗粒砂を含む。にぶい浅黄色。外面木理の粗いハケが残る。内面横ナデ。	
〃	309	〃	壺	16.0				チャートの小礫・粗粒砂を含む。にぶい黄橙色。口縁部外面強い横ナデ。頸部以下縦ハケ。内面ナデ頸部接合部付近に指頭圧痕顕著。口唇部はわずかに下垂。	
〃	310	〃	壺	15.5				チャートの小礫・粗粒砂を含む。橙色。口縁部内・外面横ナデ。	
〃	311	〃	壺	26.0				チャートの小礫・粗粒砂を含む。浅黄橙色。内・外面ハケ調整。口縁端部を上下に肥厚。口唇部に半截竹管状の原体で波状文を描き、竹管状原体で太い刺突を施す。	
〃	312	〃	壺				4.0	チャートの細・粗粒砂を含む。淡黄色。外面叩き後ハケ、下半はヘラ磨きを施す。内面は上位指ナデ中位ハケ、底部付近ヘラ磨き。頸部内面右下がりのハケ。	胴部の一部に黒斑あり。一部被熱赤変し煤ける
〃	313	〃	壺					チャートの粗粒砂を含む。橙色。叩き成形であるが、叩き目はほとんど消えている。内面に粘土紐の単位を明瞭に認める。おおよそ3cm幅。	
〃	314	〃	甕	17.5				チャートの粗砂、赤色風化礫を少量含む。にぶい橙色。外面叩き。頸部内・外面右上がりのハケ。	頸部外面煤ける
〃	315	〃	甕	14.8				チャート、赤色風化礫を多く含む。にぶい橙色。胴部外面叩き後ハケ。内面に粘土紐接合痕を顕著に認める。	
〃	316	〃	甕	12.2				チャート、頁岩、風化礫の細・粗粒砂を多く含む。淡黄色。口縁部外面まで叩きあり。口縁部外面は叩き後縦ハケ。	
〃	317	〃	甕	15.0				チャートの細・粗粒砂を多く含む。にぶい橙色。胴部外面上半右上がりの叩き。中位以下縦ハケ。口縁部右下がりのハケ。(叩き出しの可能性あり) 内面ハケ+ナデ。	
〃	318	〃	甕	14.3		19.9		チャートの粗粒砂、長石細粒砂、他の細・粗粒砂を含む。灰黄色。外面右下がりの叩き。頸部外面叩き+右下がりのハケ。胴部外面中位以下縦ハケ。内面水平方向を基調とするハケ。底部付近指ナデ。内面に粘土紐の接合部を明瞭に見ることができる。口縁部内・外面叩き+ハケ+摘み。	外面煤ける
〃	319	〃	甕	12.1	17.8	14.5	2.0	チャートの粗粒砂を含む。灰黄色。上胴部は水平、下胴部も右下がりの叩きを基調とする。外面下半縦ハケ。内面ハケ+指ナデ。口縁部内面右下がりのハケ。	

表.16 遺物観察表（弥生・古墳）

Fig. No.	挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)				特 徴	備 考
				口径	器高	胴径	底径		
33	320	ST17	甕	13.9	21.7	17.3	2.9	チャート、赤色風化礫の粗粒砂を多く含む。にぶい橙色。胴部外面叩き後縦ハケ。口縁部外面にも叩きが見られる。内面ハケ+ナデ。	外面激しく煤ける
〃	321	〃	甕				4.5	チャート、赤色風化礫の小礫、粗粒砂を含む。黄橙色。外面叩き後縦ハケ。内面ハケ。	被熱赤変し煤ける。底部付近に黒斑あり
〃	322	〃	甕	13.2				チャートの粗粒砂を多く含む。橙色。外面叩き。頸部外面縦ハケ、内面指ナデ。胴部内面右下がりのハケ。断面に接合痕あり。	
34	323	〃	甕	26.8	25.7	19.2	3.4	チャートの小礫、粗粒砂を多く含む。灰黄色。外面胴部上半右下がりの叩き。下半は縦ハケで消す。頸部内・外面右上がりのハケ、外面は指頭によるナデ。胴部内面ハケ、指ナデ。外面叩き。	外面煤ける
〃	324	〃	甕	13.8	25.8	18.4	4.7	チャートの粗粒砂を多く含む。橙色。外面叩き、中位より下に縦ハケ。内面上部右上がりのハケ、中位へラ磨き、下半粗いへラ削り（下→上）。下半は被熱によりかなり表面が剥離。	外面全面煤ける
〃	325	〃	鉢	12.0				チャートの細・粗粒砂を含む。浅黄橙色。外面叩き。内面ハケ。	
〃	326	〃	鉢	12.6	7.5		2.7	チャートの粗粒砂、小礫を含む。にぶい橙色。外面叩き。亀裂顕著。底部外面丸底を指向するようなナデ。内面粗いハケ。	
〃	327	〃	鉢	16.0				チャートの小礫、粗粒砂を含む。灰黄色。外面木理の粗いハケ調整。内面ナデ。焼成前に径0.8cmの円孔。	
〃	328	〃	鉢	17.2				チャートの粗粒砂、小礫を含む。橙色。外面叩き後ナデ。内面縦ハケ。	
〃	329	〃	鉢	16.4	10.5			チャート、赤色風化礫の粗粒砂、小礫を多く含む。にぶい橙色。外面叩き。内面右下がりのハケ。外面底部付近へラ削り（下→上）。	
〃	330	〃	鉢	29.3				チャートの粗粒砂、小礫、赤色風化礫の粗粒を多く含む。浅黄橙色。外面胴部叩き、頸部ナデ。内面胴部板状原体による縦方向のナデ、頸部横ナデ。	
〃	331	〃	鉢	32.4	20.3		6.0	チャートの粗粒砂、小礫を多く含む。にぶい黄橙色。外面叩き。口縁部内・外面ナデ。胴部内面右下がりのハケ、下半は指ナデ。外底叩き。	
〃	332	〃	甕				5.8	チャートの粗粒砂を多く含む。にぶい橙色。外面叩き。胴部下半縦ハケ。内面右下がりを基調とするハケ。	下胴部、底部付近に黒斑
〃	333	〃	甕				4.2	チャートの粗粒砂を含む。にぶい橙色。外面叩き。	
〃	334	〃	不明				4.2	チャートの粗粒砂を含む。浅黄色。外面底部付近指頭圧痕あり。	内面に黒斑あり
〃	335	〃	不明				2.7	チャートの粗粒砂を多く含む。にぶい浅黄色。内・外面ハケ。丸底。	
〃	336	〃	甕				5.6	長石の細粒砂とチャートの小礫を含む。にぶい黄橙色。外面外底叩き。内面指ナデ。叩き成形なるも上半はほとんどナデ消す。内面ハケ、ナデ。	外面に縦帯状の黒斑あり。搬入の可能性あり
〃	337	〃	壺				4.9	チャートの粗粒砂を多く含む。浅黄色。外面下半弱いへラ削り（下→上）。中位に一部へラ磨き。内面横ハケ。外底叩き。	外面に大きな黒斑あり
35	338	〃	甕			18.0	3.0	チャートの細・粗粒砂を含む。にぶい黄橙色。外面叩き後縦ハケ。内面下位はナデ、中位は左下がりのハケ。接合部付近で内面の調整が異なる。底部付近に指頭圧痕顕著。	

表.16 遺物観察表（弥生・古墳）

Fig. No.	挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)				特 徴	備 考
				口径	器高	胴径	底径		
35	339	ST17	甕				3.6	チャートの粗粒砂を多く含む。にぶい黄橙色。外面縦ハケ、下地に叩きあり。内面ハケ及びナデ、下胴部はハケ+ナデ。接合部で調整が異なる。随所で表面剥離。	被熱赤変し煤ける
〃	340	〃	鉢				0.8	チャートの粗粒砂を少量含む。にぶい橙色。外面縦ハケ。内面ナデ。	
〃	341	〃	高杯				5.0	赤色風化礫の粗粒砂を含む。浅黄橙色。	
〃	342	〃	高杯					チャートの粗粒砂を多く含む。にぶい橙色。外面縦へら磨き。裾部付近に円孔あり（外→中）。	
〃	343	〃	壺				5.6	チャートの細・粗粒砂を多く含む。橙色。中期土器の可能性あり。	外面被熱赤変する
〃	344	〃	高杯					チャート、長石の細粒砂を含む。灰褐色。外面縦へら磨き。	
〃	345	〃	高杯					チャートの小礫、粗粒砂を含む。にぶい橙色。	
36	349	ST18	壺	14.7				チャートの小礫、粗粒砂を含む。内・外面橙色。外面口縁部強い横ナデ。内・外面ハケ。	
〃	350	〃	甕	13.2				チャートの粗粒砂を含む。橙色。叩き成形。外面口縁部叩きを右上がりハケで消す。内面右下がりのハケ。	外面口縁部煤ける
〃	351	〃	鉢	8.9	2.5			チャートその他の小礫、細粒砂を含む。内・外面灰白色。手捏ね成形。	搬入品の可能性あり
〃	352	〃	鉢	9.9	4.4			チャートの小礫、粗粒砂を含む。外面橙色、内面にぶい橙色。叩き成形。内面ハケ。	
〃	353	〃	鉢	10.8				赤色風化礫の粗粒砂を多く含む。浅黄橙色。叩き成形後ナデ。内面へら磨き。丸底。	
〃	354	〃	鉢				4.2	チャートの細粒砂、赤色風化礫を含む。ナデ調整。底部の立ち上がりは剥離欠損。	
〃	355	〃	高杯					チャート、赤色風化礫の粗粒砂を含む。外面にぶい橙色、内面にぶい黄橙色。内・外面へら磨き。	
〃	356	〃	甕					チャートの小礫を多く含む。外面にぶい橙色。内面にぶい黄褐色。外面底部付近わずかに叩き目+ハケ。丸底。	
〃	357	〃	支脚	8.6	8.2		7.9	チャートの小礫、粗粒砂を多く含む。外面淡黄色。外面指頭圧痕顕著。	
〃	358	〃	支脚	7.4	7.0		6.2	長石、その他の細粒砂を含む。外面灰白色。外面指頭圧痕顕著。	
〃	359	〃	支脚	5.4	7.2		7.3	チャートの小礫、粗粒砂を含む。にぶい橙色。外面指頭圧痕顕著。	上面被熱赤変
〃	360	〃	支脚	15.4			9.0	チャートの小礫、粗粒砂を含む。灰黄色。胴部側面は板状原体で強く押さえている。内面紋り目あり。	内面煤ける
37	361	ST19	高杯					チャートの粗粒砂を含む。橙色。外面ハケ+横ナデ。内面へら磨き。	
〃	362	〃	壺	13.0				チャートの細・粗粒砂を多く含む。橙色。外面細いハケ。内面木理の粗いハケ。	
〃	363	〃	壺	20.6				チャートの粗粒砂を含む。外面橙色。内面浅黄色。シャーモットあり。口唇部上下に拡張。	
〃	364	〃	壺	13.4				チャートの粗粒砂を含む。にぶい橙色。外面口縁部に櫛描波状文あり。内面横ハケ。	二重口縁壺
〃	365	〃	鉢	15.6				チャートの細粒砂を多く含む。橙色。	搬入品の可能性あり
〃	366	〃	鉢	10.3	3.3		3.7	チャートの粗粒砂を多く含む。橙色。	内・外面煤ける

表.16 遺物観察表（弥生・古墳）

Fig. No.	挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)				特 徴	備 考
				口径	器高	胴径	底径		
37	367	ST19	高杯					長石の細、粗粒砂とチャートの粗粒砂を多く含む。赤褐色。内・外面ヘラ磨き。	搬入品の可能性あり
〃	368	〃	壺	16.8				長石の細粒、チャートの粗粒砂を含む。橙色。口縁部外方に摘み上げ。	
〃	369	〃	鉢	13.4				チャートの粗粒、小礫を含む。浅黄橙色。外面ヒビ割れ状の亀裂あり。	
〃	370	〃	高杯					チャートの粗粒砂を多く含む。外面にぶい橙色、内面橙色。	被熱赤変
〃	371	〃	高杯				9.4	チャートの粗粒砂を含む。外面橙色、内面黄橙色。外面裾部に叩き痕あり。内面ハケ。	
〃	372	〃	高杯				9.5	チャートの粗粒砂を多く含む。にぶい橙色。外面叩き。内面紋目。	
〃	373	〃	高杯					チャート、赤色風化礫の粗粒砂を含む。浅黄橙色。外面ハケ調整。	
〃	374	〃	壺				7.0	チャートの小礫、粗粒砂を多く含む。橙色。外面ハケ+ヘラ磨き。	
〃	375	〃	不明					長石、チャートの細粒砂を多く含む。橙色。外面弱い削り。丸底。	
〃	376	〃	鉢				2.9	チャートの粗粒砂を多く含む。橙色。叩き成形。	
〃	377	〃	鉢					赤色風化礫の小礫を含む。にぶい橙色。外面叩き後縦ハケ。内面木理の粗い原体による横ハケ+細い原体の縦ハケ。丸底。	
〃	378	〃	器台	8.1	4.5		7.4	チャートの粗粒砂を多く含む。外面にぶい黄橙色。断面灰黄褐色。ナデ調整。	
〃	379	〃	紡錘車	全長 4	全幅 4.2	全厚 1.7	円孔 0.8	チャートの細・粗粒砂を含む。外面にぶい黄橙色。断面紡錘形。焼成前穿孔。指頭圧痕顕著。	重量20g
〃	380	〃	有孔円盤状土器	全長 8.8	全幅 8.9	全厚 2.3	円孔 1.3	チャートの細・粗粒砂を少量含む。にぶい黄橙色。中央に焼成前穿孔。	重量175g
38	381	ST20	壺	19.5				チャートの粗粒砂を含む。にぶい橙色。口縁部強い横ナデ調整。外面右下がりハケ調整。	
〃	382	〃	甕	13.0				チャート、砂岩の粗粒砂を含む。橙色。叩き成形右下がり、口縁部内外面右下がりのハケ調整。内面縦ハケ調整。接合痕跡を認める。	
〃	383	〃	甕	14.2			17.6	チャートの粗粒砂を含む。橙色。叩き成形、口縁部叩きだし。口縁部内面右下がりハケ調整。胴部内面板状原体による縦ナデ調整。	
〃	384	〃	甕	17.5			21.8	チャートの小礫、粗粒砂を多く含む。浅黄橙色。胴部外面叩き後縦ハケ調整。口縁部外面ナデ調整、内面横ハケ調整。	外面煤ける
〃	385	〃	鉢	12.3				砂粒を含まない。口縁部内外面指頭圧痕顕著。橙色。胴部外面ヒビ割れ状の亀裂が走る。内面ナデ調整。	
〃	386	〃	鉢	8.3	4.0		2.4	チャートの粗粒砂を多く含む。にぶい黄橙色。外面ナデ調整、ヒビ割れ状の亀裂が走る。内面右下がりハケ調整。	
〃	387	〃	鉢	10.4	7.2		3.2	赤色風化礫を含む。橙色。内外面器表の荒れが激しい。	
〃	388	〃	甕				3.8	チャート、砂岩の小礫、粗粒砂を多く含む。灰白色。外面叩き後板状原体でナデ調整。	
〃	389	〃	甕				1.6	チャートの粗粒砂を多く含む。黄灰色。外面叩き、内面指ナデ調整。底部付近黒斑。	外面被熱赤変、煤ける

表.16 遺物観察表（弥生・古墳）

Fig. No.	挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)				特 徴	備 考
				口径	器高	胴径	底径		
38	390	ST20	壺				6.2	チャートの粗粒砂を含む。にぶい黄橙色。外面叩き、内面へら磨き。	
〃	391	〃	鉢					チャートの粗粒砂を含む。浅黄橙色。外面縦ハケ調整、内面横ハケ調整。	
〃	392	〃	鉢	14.2			6.3	チャートの小礫を含む。橙色。叩き成形。丸底。	
〃	393	〃	鉢	13.1	5.5		5.0	チャートの粗粒砂を少量含む。赤茶色。口縁部は内側に稜をなして内湾気味に立ち上がる。口縁部内面右下がりハケ調整、胴部内外面ナデ調整。	
〃	394	〃	甕				3.5	チャート、長石の粗粒砂を含む。橙色。外面叩き後縦ハケ調整、内面ハケ調整。外面底部付近黒斑あり。	
〃	395	〃	支脚				8.0	チャートの小礫、粗粒砂を含む。にぶい黄橙色。外面指頭圧痕顕著。	
〃	396	〃	高杯					赤色風化礫を多く含む。橙色。内外面器表の荒れが激しい。	
〃	397	〃	高杯					チャートの粗粒砂を含む。にぶい黄橙色。外面ハケ調整後へら磨き、内面ハケ調整後ナデ調整。	
〃	398	〃	甌					チャートの粗粒砂を少量含む。にぶい橙褐色。径3~4mmの小円孔を7つまで確認。すべて外側から内側焼成前に穿孔。	
39	399	ST21	壺	18.6				チャートその他の小礫、粗粒砂を多く含む。にぶい橙色。	
〃	400	〃	壺	19.8				長石細粒、チャート、砂岩の粗粒を含む。にぶい橙色。口縁部外面叩き痕。口唇部櫛描波状文。口唇は摘み上げて強くナデ。	
〃	401	〃	壺					チャートの粗粒を少量含む。暗灰黄色。外面櫛描波状文。	
〃	402	〃	甕	12.2				チャートの小礫、粗粒砂を多く含む。にぶい橙色。口縁部外面まで右上がりの叩き、口縁部内面横ハケ。胴部内面右下がりのハケ。	外面煤ける
〃	403	〃	鉢	19.0	7.2		3.8	チャート、赤色風化礫の小礫を多く含む。明黄褐色。内・外面とも器表の荒れが激しい。	
〃	404	〃	鉢	9.2	4.9		3.8	チャートの粗粒砂を少量含む。灰黄色。外面上半ヒビ割れ状の亀裂が激しく入る。	
〃	405	〃	高杯				15.2	チャートの粗粒砂を含む。にぶい黄橙色。外面へら磨き。端部横ナデ。	
〃	406	〃	高杯	17.8				チャート、赤色風化礫の粗粒を多く含む。にぶい黄橙色。内・外面へら磨きが施されているが、摩耗のため単位不明。	
〃	407	〃	甕				6.4	チャートの小礫を多く含む。橙色。外面叩き。内面ハケ。丸底。	
〃	408	〃	鉢	23.0	7.9			チャート、赤色風化礫の粗粒砂を含む。橙色。外面叩き。内面ハケ+指ナデ。	
〃	409	〃	壺	7.8				精選された胎土。にぶい橙色。内外面へら磨き。口唇部に貝殻圧痕あり。	
〃	410	〃	壺	12.0				チャートの粗粒砂を含む。浅黄橙色。外面縦ハケ後へら磨き。内面横ハケ。	
〃	411	〃	壺	17.0				チャートの粗粒、長石の細粒を含む。外面にぶい黄橙色、内面にぶい橙色。口縁端部を下方に拡張。口唇部に貝殻圧痕を巡らす。	
〃	412	〃	壺	25.0				チャートの砂粒を多く含む。橙色。口縁部を下方に拡張。口縁部内、外面強い横ナデ。口唇部に列点文あり。	

表.16 遺物観察表（弥生・古墳）

Fig. No.	挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)				特 徴	備 考
				口径	器高	胴径	底径		
41	413	ST22	壺	24.3				チャート、砂岩、赤色風化礫の小礫を多く含む。にぶい黄褐色。口唇部に刺突文あり。	
〃	414	〃	甕	10.4		11.9		チャートの粗粒を少量含む。橙色。叩き成形+ナデ。内面口縁部横ナデ。指頭によるナデ。	外面底部付近に黒斑あり
〃	415	〃	壺	10.0	13.8	12.9		赤色風化礫の粗粒を多く含む。淡黄色。外面叩き成形+ハケ。内面右下がりのハケ、底部付近指ナデ、口縁部横ハケ。丸底。	外面底部に小さな黒斑あり
〃	416	〃	甕	15.4				チャートの細・粗粒砂を多く含む。黄褐色。叩き成形。	外面全面煤ける
〃	417	〃	鉢	12.0				長石、石英、角閃石、雲母の細粒砂を含む。焦茶色。	搬入品
〃	418	〃	鉢	14.4				チャートの粗粒砂を含む。浅黄橙色。外面ヒビ割れ状の亀裂が入る。口縁部内・外面強い横ナデ。内・外面ナデ。	
〃	419	〃	鉢	8.0	5.7		3.5	風化礫の粗粒を含む。にぶい黄橙色。内・外面ナデ。	
〃	420	〃	鉢	10.8	4.9		4.4	砂粒の混入が少ない。にぶい黄褐色。外面叩き成形。内面ハケ。	
〃	421	〃	鉢	9.2	4.6		3.9	チャートの粗粒砂を多く含む。外面にぶい黄橙色、内面にぶい橙色。外面叩き。内面横ハケ、底部付近は指ナデ。	
〃	422	〃	鉢				2.2	チャートの粗粒、小礫を少量含む。外面にぶい橙色、内面灰黄色。外面右下がりの叩き+ナデ。内面縦ハケ、底部付近は指ナデ。	
〃	423	〃	鉢	10.4	6.5		4.0	赤色風化礫の粗粒を少量含む。淡茶色。外面叩き成形後ナデ。内面ハケ。	
〃	424	〃	鉢	12.7	3.8		7.6	チャートの粗粒を含む。にぶい橙色。外面叩き+ナデ。内面ハケ+ナデ。	
〃	425	〃	鉢	19.2				チャートの粗粒を含む。にぶい橙色。口縁部端部摘み出し。外面口縁部強い横ナデ、胴部ヘラ磨き。内面ナデ。	
〃	426	〃	鉢	15.6				チャートの粗粒、小礫を多く含む。外面橙色、内面灰黄色。外面右下がりの叩き。内面右下がりのハケ。	
〃	427	〃	鉢					チャートの粗粒、小礫を多く含む。外面にぶい橙色、内面灰色。外面叩き成形後縦ハケ。内面指ナデ。丸底。	
〃	428	〃	高杯					チャートの小礫、赤色風化礫を多く含む。橙色。外面ナデ仕上げ。内面紋り目あり。	
〃	429	〃	鉢				2.8	チャートの粗・細粒砂を多く含む。灰黄褐色。外面叩き。内面縦ハケ。	
〃	430	〃	脚付鉢					チャートの粗粒砂を含む。にぶい橙色。外面脚部上側指頭圧痕顕著。	
〃	431	〃	蓋					チャートの小礫、粗粒を多く含む。浅黄褐色。内・外面ナデ。	
〃	432	〃	壺				9.0	チャート、赤色風化土の小礫、粗粒砂を多く含む。橙色。外面剥離部分に叩き痕あり。叩いた後粘土を貼り付けたものか？木理の細いハケ。内面ナデ。	
〃	433	〃	甕					チャートの粗粒砂、小礫を多く含む。外面浅黄褐色、内面灰白色。内・外面ハケ。丸底。	
〃	434	〃	鉢				5.8	チャートの小礫、粗粒を含む。外面にぶい黄褐色、内面橙色。外面叩き。内面ハケ。	
〃	435	〃	支脚					チャート、赤色風化土の小礫、粗粒砂を多く含む。にぶい橙色。外面にヒビ割れ状の亀裂が多い。ナデ仕上げ。	

表.16 遺物観察表（弥生・古墳）

Fig. No.	挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)				特 徴	備 考
				口径	器高	胴径	底径		
42	441	ST23	甕	15.8				チャート、赤色風化土の粗粒砂、小礫を含む。橙色。口縁部外面右下がりのハケ調整。胴部外面右上がりの叩き、内面右下がりのハケ調整。	
〃	442	〃	甕	16.0				チャート、赤色風化礫の粗粒砂を含む。黄橙色。口縁部叩きだし、胴部外面右上がりの叩き。口縁部、胴部内面右下がりのハケ調整。	外面煤ける
〃	443	〃	鉢	15.0				チャートの粗粒砂、小礫を含む。黄橙色。叩き成形、内面右下がりのハケ調整。	
43	444	SK98	甕	13.7				チャートの小礫、粗粒砂を多く含む。口縁部叩きだし、胴部外面左上がりの叩き、口縁部内外面左上がりのハケ調整。	
〃	445	〃	甕				5.9	チャートの小礫を多く含む。外面叩き後縦ハケ調整、内面縦ハケ調整。	底部付近に黒斑外面煤ける
〃	446	〃	鉢				3.0	チャートの粗粒砂を多く含む。外面叩き成形なるもほとんどナデ消す。内面ハケ調整。	底部付近大きな黒斑
46	447	SK113	壺	16.7				チャートの粗粒砂を多く含む。橙色。口唇横ナデ調整。頸部外面縦ハケ調整、内面横ハケ調整。	
〃	448	〃	壺	23.4				雲母・結晶片岩粒を多く含む。橙色。二重口縁部の屈曲部は鋭い。内外面剥離が激しい。	東阿波型土器
〃	449	〃	壺	21.1				雲母・結晶片岩粒を多く含む。灰褐色。内外面横ナデ調整。	東阿波型土器
〃	450	〃	壺	16.6				チャートの小礫、粗粒砂を多く含む。にぶい橙色。外面縦ハケ調整、内面横方向ハケ調整。	
〃	451	〃	壺	15.3				チャートの細、粗粒砂を多く含む。橙色。口縁部外面叩き後縦ハケ調整、内面右下がりハケ調整。胴部外面右上がり叩き、内面右下がりハケ調整。	
〃	452	〃	甕	14.8				長石を多く含む。明褐色。口縁部内外面横ナデ調整。胴部外面縦ハケ調整、内面ナデ調整。頸部下に接合痕を認める。	搬入品 外面煤ける
〃	453	〃	甕	15.0				雲母・角閃石・結晶片岩粒を含む。にぶい橙色。口縁部内外面強い横ナデ調整。胴部外面右下がりハケ調整。内面指頭圧痕顕著。	口縁部外面・胴部最大径付近煤ける 東阿波型土器
〃	454	〃	甕	22.0				雲母・角閃石、結晶片岩粒を含む。にぶい橙色。内面指頭圧痕顕著。外面剥離が激しい。	東阿波型土器
〃	455	〃	甕	9.5	14.2	12.4	5.9	チャートの粗粒砂、小礫を含む。橙色。胴部外面下から3分の2程叩きを残し、それより上はナデ調整。	
〃	456	〃	甕			16.2		チャートの粗粒砂を含む。橙色。丸底。内外面上半横、下半縦ハケ調整。	
〃	457	〃	鉢	11.1	5.8		3.0	チャートの粗粒砂を含む。にぶい橙色。内・外面ナデ調整。	
〃	458	〃	鉢	11.0				長石、石英、雲母の粗粒砂を多く含む。褐色。内外面横ナデ調整。口縁部端部わずかに摘み上げ。	
〃	459	〃	鉢	15.0				チャート、その他の粗粒砂を含む。橙色。内面横ハケ調整、外面横ハケ調整後横ナデ調整。	
〃	460	〃	高杯	21.4				チャート、長石他の細・粗粒砂を含む。明黄褐色。調整不明。接合部で剥離。	
〃	461	〃	鉢	13.2	11.6	15.0		チャートの粗粒砂を含む。にぶい黄褐色。丸底。胴部外面は斜め方向のハケ調整後下半は横方向の弱い削り、内面横ハケ調整後ナデ調整。口縁部内外面横ハケ調整後横ナデ調整。	

表.16 遺物観察表（弥生・古墳）

Fig. No.	挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)				特 徴	備 考
				口径	器高	胴径	底径		
46	462	SK113	甌					チャートの粗粒砂を含む。橙色。外面指頭圧痕顕著。内面底部付近まで縦ハケ調整。底部に焼成前穿孔あり、径6mm。	
〃	463	〃	高杯	22.7				チャートの粗粒砂を含む。橙色。内外面ナデ調整。脚部押入部で剥離。	
〃	464	〃	甕					チャートの粗粒砂を含む。灰黄色。外面叩き後ナデ調整。内面指ナデ調整。底部付近に朽など植物繊維の圧痕が多く見られる。	
〃	465	〃	鉢				3.0	チャートの粗粒砂を少量含む。橙色。外底に朽圧痕。	
〃	466	〃	甕					チャートの小礫を含む。橙色。丸底。叩き成形。底部付近に縦ハケ調整、内面は縦ハケ調整と指ナデ調整。	外底に大きな黒斑
〃	467	〃	支脚		11.2		7.6	チャートの粗粒砂を含む。橙色。内外面指頭圧痕顕著。頭部の一端を積み上げている。	
48	468	SK117	壺	15.0				石英の細・粗粒砂を多く含む。灰茶色。内・外面横ナデ。外面わずかに右下がりのハケを認める。拡張口縁に櫛描波状文。	搬入品
〃	469	SK118	鉢	10.0				チャートの粗粒砂を少量含む。淡茶色。口縁部内・外面横ナデ。胴部外面縦ハケ。	
〃	470	〃	甕	15.2	21.4	15.9	3.7	チャートの粗粒砂を多く含む。にぶい橙色。外面下半右下がり、上半右上がりの叩き。内面縦を基調とするハケ。内底指頭圧痕顕著。	外面煤ける
〃	471	SK142	高杯					チャートの粗粒砂・小礫を多く含む。浅黄橙色。外面横ナデ。内面に絞り目あり。	
49	472	SD79	甕	14.0	18.0		3.4	チャートの粗粒砂を多く含む。にぶい褐色。口縁部内面横ハケ。外面ナデ、指頭圧痕。胴部外面叩き、下半縦ハケ、内面縦方向の指頭によるナデ。	外面煤ける
51	473	P42	甕	16.0				チャートの小礫・粗粒砂を多く含む。黄褐色。外面叩き後縦ハケ。内面ハケ後ナデ。上胴部は器壁が厚く、ハケを施した粘土帯内面上段の粘土帯を重ねている。	
〃	474	P44	壺	17.0				チャートの小礫・粗粒砂を含む。明茶色。外面右下がりのハケ。	
〃	475	〃	壺	11.6				チャート、赤色風化礫の粗粒砂を多く含む。黄褐色。外面叩き。内面ナデ。	
〃	476	P32	壺					チャートの小礫、粗粒砂を含む。にぶい黄橙色。外面叩き。頸部及び上胴部縦ハケ。胴部内面横ハケ。内面断面に粘土接合痕明瞭。幅1.5~2.5cm。	
〃	477	P12	甕	13.6		15.4		チャートの小礫、粗粒砂を含む。にぶい橙色。外面胴部上半右上がりのハケ、下半水平方向のハケ、頸部叩き後縦ハケ。内面ナデ。頸部内面横ハケ。口縁部内・外面横ナデ。	胴部下半煤ける
〃	478	P8	甕	13.4	23.1	16.4		チャート、赤色風化礫の粗粒砂を含む。橙色。外面叩き、胴部下半縦ハケ。内面指ナデ。	
〃	479	P44	甕			24.8		チャートの粗粒砂を含む。黄褐色。外面水平方向のナデ、部分的にハケ。内面上胴部ハケ、中位以下ナデ。断面に接合痕を2箇所認める。	
〃	480	P12	甕	12.2	19.6	13.8	2.8	チャートの粗粒砂、小礫を含む。橙色。外面叩き、胴部下半はハケ・ナデで消す。胴部内面削り+縦ハケ+ナデ。上胴部内面に接合痕あり。	外面被熱赤変し煤ける
〃	481	〃	甕			12.8		チャートの小礫、粗粒砂を含む。にぶい橙色。外面叩き後縦ハケ。外面剥離が激しい。内面指ナデ。	外面煤ける

表.16 遺物観察表（弥生・古墳・古代）

Fig. No.	挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)				特 徴	備 考
				口径	器高	胴径	底径		
51	482	P22	鉢	13.2	6.4		4.0	チャートの小礫、粗粒砂を含む。橙色。外面叩き。内面右下がりのハケ。	底部付近煤ける
〃	483	P44	鉢	14.7	5.6			チャート、赤色風化礫の粗粒砂を含む。浅黄橙色。外面叩き、上半部はほとんどナデ消す。内面上位横ハケ、以下ナデ。	
〃	484	〃	鉢	9.9	5.0		2.4	チャートの小礫、粗粒砂を含む。にぶい橙色。外面右上がりの叩き、上半部はナデ消す。内面ハケ。	
〃	485	〃	鉢	11.6				チャートの粗粒砂を含む。淡茶色。外面右上がりの叩き。内面ナデ。	
〃	486	P22	鉢	11.7				砂粒をほとんど含まない。灰黄色。外面右上がりの叩き後ナデ。内面右下がりのハケ。外面ヒビ割れ状の亀裂多い。	
〃	487	P7	鉢	13.3	4.8		5.0	チャートの粗粒砂を含む。橙色。外面叩き後ナデ。内面ナデ。	
〃	488	P54	鉢	9.2	6.4		3.2	チャートの粗粒砂を含む。明黄褐色。外面縦ハケ後ナデ。内面横ナデ。脚台状の底部(内・外面指頭による摘み出し)底部内面にも指頭による圧痕。	
〃	489	〃	鉢	10.1		10.4		長石、石英の細・粗粒砂を含む。赤褐色。外面縦ハケ後ナデ。口縁部外面ナデ、内面横ハケ。上胴部内面に接合痕明瞭。	
〃	490	P44	鉢	8.6	3.2		2.0	チャートの粗粒砂を含む。淡灰黄色。内・外面ナデ。外面指頭圧痕顕著。内面ヒビ割れ状の亀裂。	外面黒斑あり
〃	491	P22	支脚	8.2	7.4		6.6	チャートの小礫、粗粒砂を含む。にぶい黄褐色。指頭圧痕顕著。	受部が激しく被熱赤変し煤ける
〃	492	P40	支脚	4.6	5.0		5.8	砂粒をほとんど含まない。浅黄褐色。内・外面指頭圧痕顕著。中心に径1cmの円孔を焼成前に穿つ。	
〃	493	P44	支脚					チャートの粗粒砂を含む。淡灰黄色。	
52	494	SK101	土師器皿					精選された胎土。内・外面丁寧なヘラ磨き。	
〃	495	SK105	土師器皿	17.2	1.6		12.0	精選された胎土であるが、チャートの小礫が少量入る。橙色。内外面横ナデ。	
〃	496	SK102	須恵器杯				9.0	長石、チャート他の細・粗粒砂を含む。灰白色。内・外面ナデ。貼付口縁。高台畳付け凹状。	
〃	497	SK105	須恵器杯	12.5	3.05		8.0	精選された胎土。灰白色。内・外面横ナデ。	
〃	498	SK102	土師器甕	29.6				長石、石英、雲母、角閃石の粗粒砂を含む。にぶい黄褐色。内・外面横ナデ。接合部で剥離。	移動式竈搬入品
〃	499	SK105	土師器杯	14.8				精選された胎土。内・外面ヘラ磨き。口縁部摘み上げ。	
〃	500	〃	須恵器皿	17.8	2.2		12.0	赤色粒砂を多く含む。灰白色。内・外面器表の荒れが激しい。	
〃	501	SK101	須恵器杯	16.6				精選された胎土。灰白色。外面口クロ目顕著。	
53	502	SK106	土師器杯	15.7	3.08		8.8	精選された胎土。橙色内・外面丁寧なヘラ磨き。	回転台を使用
〃	503	SK109	土師器杯	14.4				長石の細・粗粒砂を含む。橙色。内・外面横ナデ+横ヘラ磨き。	
〃	504	SK106	須恵器皿	16.0	2.4		12.0	長石、チャートの細・粗粒砂を多く含む。灰白色。内・外面横ナデ。	
〃	505	〃	須恵器杯	17.4	5.7		10.4	チャート、長石、石英の粗粒砂を含む。赤褐色。内・外面器表の剥離が激しい。幅広く低い高台。	
〃	506	〃	須恵器皿	15.6	1.7		13.2	長石の細・粗粒砂を多く含む。灰黄色。内・外面丁寧な横ナデ。	
〃	507	〃	須恵器皿	11.6	1.5		7.9	長石の細・粗粒砂を含む。灰色。内・外面横ナデ。外面自然釉。	
〃	508	SK107	土師器杯				10.0	精選された胎土。明黄褐色。内・外面横ナデ+磨き。貼付高台。	

表.16 遺物観察表（古代）

Fig. No.	挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)				特 徴	備 考
				口径	器高	胴径	底径		
53	509	SK106	須恵器杯	12.9	3.0		9.5	精選された胎土。灰白色。内・外面横ナデ。橙色。外面叩き。	口縁の一部が煤ける
〃	510	〃	須恵器杯	14.2				長石の細・粗粒砂を多く含む。黄灰色。内・外面横ナデ。	
〃	511	SK109	土師器杯	13.8				精選された胎土。にぶい黄橙色。内・外面横ナデ。内面の一部に横ヘラ磨き。口縁部摘みだし。	
〃	512	〃	須恵器蓋	12.9				精選された胎土。にぶい黄橙色。内・外面横ナデ。内面の一部に横ヘラ磨き。口縁部摘みだし。	
〃	513	SK106	須恵器杯				9.6	精選された胎土。灰白色。底部内面及び立ち上がり内外面丁寧な横ナデ。底部外面ヘラ切り後のナデが不十分。	
〃	514	〃	製塩土器	8.0				チャート他の小礫を多く含む。にぶい黄橙色。内面布目圧痕。口縁部内傾、端部は内側に突出気味。	
〃	515	〃	土師器甕	13.5				チャートの細・粗粒砂を多く含む。橙色。被熱により器表の剥離が激しい。	内面煤ける
〃	516	SK109	土師器甕	18.4				粗粒砂を含む（岩質不明）。にぶい黄橙色。内面横ハケ。口唇部を上下に拡張する。	外面煤ける
〃	517	SK106	土師器甕	24.9			23.0	チャートの小礫、粗粒砂を多く含む。暗褐色。口唇部横ナデ、口縁部内外面横ハケ後ナデ。頸部外面強い横ナデ。胴部外面縦ハケ、内面ナデ。	内・外面煤ける
54	518	SK110	土師器杯	14.3				長石の細、粗粒砂を含む。明赤褐色。内外面横ナデ。	
〃	519	〃	土師器皿	14.7	3.0		10.4	チャート、赤色風化礫の細・粗粒砂を含む。橙色。内・外面横ナデ+ヘラ磨き。	
〃	520	〃	土師器皿				7.7	精選された胎土。淡黄色。外面横ナデ。底部内面口縁目顕著、内・外面粘土紐の単位あり。	
〃	521	〃	須恵器蓋					精選された胎土。浅黄橙色。外面横ナデ。内面ナデ。	
〃	522	〃	土師器甕	26.7				チャート、頁岩、砂岩の粗粒砂を含む。にぶい褐色。口縁部外面横ナデ、内面横ハケ。胴部外面縦ハケ、部分的に磨き。胴後部内面横ナデ。口唇部は強い横ナデにより上下に拡張される。	内・外面煤ける
〃	523	〃	土師器甕	15.7				長石、雲母を含み、特に後者を多く含む。灰黄褐色。口縁部内・外面横ハケ後横ナデ。胴部内面削り。頸部の屈曲は甘い。	外面煤ける 搬入品
〃	524	〃	甕	16.0				雲母を多く含む。にぶい橙色。口縁部内・外面強い横ナデ。口唇部摘み上げ。	外面煤ける 東阿波型土器
〃	525	〃	製塩土器	9.5				砂岩、長石、他の細・粗粒砂を多く含む。灰褐色。外面一部海绵状を呈する。内面布目圧痕。	外面は被熱する
〃	526	〃	甕	13.4				雲母、結晶片岩粒を多く含む。にぶい黄橙色。口縁部内・外面強い横ナデ。胴部外面ハケ。内面頸部付近指頭圧痕+ナデ。	外面煤ける。 東阿波型土器
〃	527	〃	甕	13.7			21.1	雲母、結晶片岩粒を多く含む。にぶい橙色。口縁部内・外面強い横ナデ。胴部外面右下がりのハケ。内面下半は下→上のヘラ削り、上半はナデ、指頭圧痕が顕著に見られる。	外面胴部下半煤ける 東阿波型土器
〃	528	〃	甕	15.2			16.3	チャート、長石の細・粗粒砂を含む。にぶい褐色。口縁部外面縦ハケ、内面横ハケ。内面横ハケ。胴部外面叩き、内面上部指ナデ、中位以下縦ハケ。	
〃	529	〃	土師器鉢	18.8				チャートの小礫、粗粒砂を多く含む。にぶい黄橙色。外面叩き後ナデ。内面指頭圧痕顕著。	

表.16 遺物観察表（古代）

Fig. No.	挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)				特 徴	備 考
				口径	器高	胴径	底径		
55	530	SK126	土師器皿	16.4	2.1	11.0		精選された胎土（わずかに長石、赤色風化礫の細粒砂を含む）。褐色内・外面横ナデ。	回転台使用
〃	531	SK128	土師器杯	13.4				長石、石英などの細・粗粒砂を含む。灰褐色。内・外面横ナデ。須恵器のような焼成。外面赤く発色。	搬入品
〃	532	SK129	須恵器杯	14.6				細・粗粒砂を少量含む。内・外面横ナデ調整。内面に火襷あり。	
56	533	SK130	土師器皿	15.6	1.5		11.2	精選された胎土。橙色。内・外面丁寧な横ナデ調整。	AⅡ類 器高指数9.3
〃	534	〃	土師器皿	13.1	2.1		7.9	赤色風化礫、チャート、長石、石英を含む。内・外面横ナデ調整。	AⅡ類 器高指数16
〃	535	〃	土師器皿	13.2	2.1		7.9	赤色風化礫、チャート、長石、石英を含む。内・外面横ナデ調整。	AⅠ類 器高指数15.9
〃	536	〃	土師器皿	14.6				精選された胎土。内・外面横ナデ調整。	AⅢ類
〃	537	〃	土師器皿	15.0	1.5		10.5	赤色風化礫の細・粗粒砂を多く含む。内・外面横ナデ調整。	AⅡ類 器高指数10
〃	538	〃	土師器皿	14.4	1.5		9.0	赤色風化礫の細・粗粒砂を多く含む。内・外面横ナデ調整。	AⅠ類 器高指数10.6
〃	539	〃	土師器皿	14.4	2.1			赤色風化礫の細・粗粒砂を多く含む。内・外面横ナデ調整。	AⅠ類 器高指数14.6
〃	540	〃	土師器皿	13.4	2.0		9.8	赤色風化礫の細・粗粒砂を多く含む。内・外面横ナデ調整。	AⅠ類 器高指数14.9
〃	541	〃	土師器皿	14.8	1.8		10.0	赤色風化礫の細・粗粒砂を多く含む。内・外面横ナデ調整。外底弱いヘラ削り。	AⅠ類 器高指数12.2
〃	542	〃	土師器杯	13.4	3.2		8.2	赤色風化礫の細・粗粒砂を多く含む。内・外面横ナデ調整。外底ヘラ切り後ナデ調整。	AⅠa類 器高指数23.5
〃	543	〃	土師器杯				8.1	精選された胎土。内・外面横ナデ調整。	
〃	544	〃	土師器杯	1.4	3.2		8.2	赤色風化礫の細・粗粒砂を多く含む。内・外面横ナデ調整。内底は一定方向のナデ調整。	AⅠa類 器高指数16.7
〃	545	〃	土師器杯	12.2	3.1		6.9	赤色風化礫の細・粗粒砂を多く含む。内・外面横ナデ調整。	AⅠa類 器高指数25.4
〃	546	〃	土師器杯				8.0	精選された胎土。内・外面横ナデ調整。	
〃	547	〃	土師器杯				8.4	赤色風化礫の細・粗粒砂を多く含む。内・外面横ナデ調整。	
〃	548	〃	土師器杯	12.3	3.0		8.0	精選された胎土。内・外面横ナデ調整。	AⅠa類器高指数24.2
〃	549	〃	土師器杯				7.3	赤色風化礫の細・粗粒砂を多く含む。内・外面横ナデ調整。	
〃	550	〃	土師器杯				9.0	赤色風化礫、長石の細・粗粒砂を多く含む。内・外面横ナデ調整。	
〃	551	〃	土師器杯				8.3	赤色風化礫の細・粗粒砂を多く含む。内・外面横ナデ調整。外底ヘラ切り後丁寧なナデ調整。	
〃	552	〃	土師器杯				8.2	赤色風化礫の細・粗粒砂を多く含む。内・外面横ナデ調整。	
〃	553	〃	土師器杯	12.5	3.2		9.2	赤色風化礫の細・粗粒砂を多く含む。内・外面横ナデ調整。	AⅠb類 器高指数25.6
〃	554	〃	土師器杯	13.4	3.1		9.0	赤色風化礫の細・粗粒砂を多く含む。内・外面横ナデ調整。	AⅠa類 器高指数23.1
〃	555	〃	土師器杯	12.2	2.8		8.0	赤色風化礫の細・粗粒砂を多く含む。内・外面横ナデ調整。	AⅠb類 器高指数23
57	556	〃	土師器杯	13.2	2.8		8.2	精選された胎土。内・外面横ナデ調整。	AⅠa類器高指数21.2
〃	557	〃	土師器杯	11.8	2.9		8.0	精選された胎土。内・外面横ナデ調整。	AⅠb類器高指数33.3
〃	558	〃	土師器杯	12.8	2.7		9.0	赤色風化礫の細・粗粒砂を多く含む。内・外面横ナデ調整。	AⅠb類器高指数21.4 内外面一部煤ける
〃	559	〃	土師器杯	13.2	3.2		8.7	石英・長石の細・素粒砂を多く含む。内・外面横ナデ調整。外面に横ナデ調整の際に生じた沈線が見られる。	AⅠa類 器高指数23.9

表.16 遺物観察表（古代）

Fig. No.	挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)				特 徴	備 考
				口径	器高	胴径	底径		
57	560	SK130	土師器杯	13.6	3.1		8.2	赤色風化礫の細・粗粒砂を多く含む。内・外面横ナデ調整。	A I a類 器高指数22.8
〃	561	〃	土師器杯	14.5	4.3		8.0	赤色風化礫の細・粗粒砂を多く含む。橙色。内・外面横ナデ調整。	A II b類 器高指数30
〃	562	〃	土師器杯	15.0	5.0		8.0	赤色風化礫の細・粗粒砂を多く含む。浅黄橙色。内・外面横ナデ調整。底部は接合部より剥離。	A II a類 器高指数33.3
〃	563	〃	土師器杯	16.0	5.3		9.6	赤色風化礫、チャート、石英、長石、雲母の細・粗粒砂を多く含む。黄橙色。内・外面横ナデ調整。	A II b類 器高指数33.1
〃	564	〃	土師器杯	13.7	5.3		8.2	赤色風化礫の細・粗粒砂を多く含む。黄橙色。内・外面横ナデ調整。	A II a類 器高指数38.8
〃	565	〃	土師器杯	14.6	5.0		7.4	精選された胎土。黄橙色。内・外面横ナデ調整。	外面煤ける A II b類器高指数35.5
〃	566	〃	土師器杯	14.2	5.1		7.3	精選された胎土。橙色。内・外面横ナデ調整。	A II a類 器高指数35.7
〃	567	〃	土師器杯	14.4	4.4		9.0	精選された胎土。黄橙色。内・外面横ナデ調整。	A II b類 器高指数31
〃	568	〃	土師器杯	15.0	5.3		8.7	精選された胎土。黄橙色。内・外面横ナデ調整。	A II a類 器高指数36
〃	569	〃	土師器碗				8.4	長石、石英、赤色風化礫の砂粒を含む。にぶい橙色。断面三角形の貼付高台。高台高0.5cm。横ナデ調整。	内外面煤ける
〃	570	〃	土師器碗				9.0	長石、石英、赤色風化礫の砂粒を含む。橙色。断面三角形の貼付高台高0.5cm。内・外面横ナデ調整。	
〃	571	〃	土師器杯				8.4	長石、チャート、赤色風化礫の細粒を含む。橙色。高台高1.5cm。内・外面丁寧な横ナデ調整。	内面煤ける B I b類
〃	572	〃	土師器杯	15.6	7.1		15.4	赤色風化礫の粗粒砂を多く含む他に石英、長石粒砂を含む。ハの字状に開くしっぺりした高台を有す。高台高1.4cm。	B I b類 器高指数45.2
〃	573	〃	黒色土器碗					石英、長石、雲母細粒砂を含む。外面ナデ調整後ヘラ磨き。内面は丁寧なヘラ磨き。小さな高台を貼付。	
〃	574	〃	黒色土器碗					チャート、長石、他の細・粗粒砂を多く含む。高台径9cm。内面ヘラ磨き。	
〃	575	〃	黒色土器碗					石英、長石、チャートの細粒砂を含む。底部の円盤と体部の接合痕を観察することができる。内面丁寧なヘラ磨き。	
〃	576	〃	黒色土器碗					長石、チャートの細・粗粒砂を含む。内面ヘラ磨き、外面横ナデ調整。高台径11cm。	
〃	577	〃	黒色土器碗	17.9	5.4			長石、チャートの細・粗粒砂を含む。内面ヘラ磨き。体部下半弱いヘラ削り後横ナデ調整。高台径8.8cm。	
〃	578	〃	灰釉陶器碗	17.2				精選された胎土。釉調は内・外面乳白色。	
〃	579	〃	土師器鉢	13.2				赤色風化礫、長石の粗粒を含む。外面横ナデ調整。	外面激しく煤ける
〃	580	〃	土師器甕	21.0				長石の細粗粒砂を多く含む。口縁部内外面横ナデ調整。	外面煤ける IV類
〃	581	〃	土師器甕	24.0				赤色風化礫、チャートの粗粒砂を含む。口縁部内外面ハケ原体による横ナデ調整と指頭による横ナデ調整。胴部外面横ハケ調整。	内外面煤ける IV類
〃	582	〃	土師器甕	22.6				石英の粗粒砂を多く含む。口縁部内外面横ハケ調整後横ナデ調整。胴部外面縦ハケ調整、内面横ナデ調整。	III類
〃	583	〃	土師器甕	22.6				チャートその他の粗粒砂を含む。口縁部内外面横ナデ調整。胴部外面縦ハケ調整後一部横ハケ調整、内面横ナデ調整。	外面煤ける IV類

表.16 遺物観察表（古代）

Fig. No.	挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)				特 徴	備 考
				口径	器高	胴径	底径		
57	584	SK130	土師器甕	25.2				チャートその他粗粒砂を含む。口縁部内外面ナデ調整。胴部外面縦ハケ調整後一部横ハケ調整。外面底部付近横ハケ調整。	外面煤けるⅢ類
58	585	〃	土師器甕	26.2				石英、赤色光沢もった粗粒を多く含む。口縁部内外面横ハケ調整後強い横ナデ調整、胴部外面縦ハケ調整、内面ナデ調整。	外面煤けるⅢ類
〃	586	〃	土師器甕	22.9				石英、長石粒を多く含む。口縁部内外面横ハケ調整後強い横ナデ調整、胴部外面縦ハケ調整、内面はナデ調整を基調とするも口縁部近くは横ハケ調整、中位以下は指頭圧痕顕著。	
〃	587	〃	土師器土錘					確認全長3.8cm、最大径1.5cm、孔径0.8cm、重さ6.0g	
〃	588	〃	土師器土錘					確認全長1.5cm、最大径1.2cm、孔径0.3cm、重さ1.9g	
〃	589	〃	土師器土錘					確認全長2.6cm、最大径1.3cm、孔径0.7cm、重さ2.8g	
〃	590	〃	土師器甕					チャートの粗粒を多く含む。黄茶色。外面叩き、内面ハケ調整。丸底。	内外面煤ける
〃	591	〃	瓦					厚さ1.5～2.0cm、外面ナデ調整、内面布目。結晶片岩、チャートの粗粒砂を含む。黄白色。	
60	593	SK136	土師器皿	18.0	2.5		12.4	チャート、長石、赤色風化礫の粗粒砂を含む。茶色。内外面横ナデ調整。	I類器高指数13.9
〃	594	〃	土師器皿	14.4	2.0		5.8	赤色風化礫の粗粒砂を含む。橙色。内外面横ナデ調整。	A I類器高指数13.9
〃	595	〃	土師器皿	11.0	1.4		7.3	赤色風化礫の細粗粒砂を含む。橙色。内外面横ナデ調整。	A I類器高指数13.2
〃	596	〃	土師器皿	12.2				チャート、赤色風化礫の細粗粒砂を含む。橙色。内外面横ナデ調整。	
〃	597	〃	土師器皿	14.3	2.1			長石、赤色風化礫の粗粒砂を含む。橙色。内外面横ナデ調整。	A I類器高指数13.8
〃	598	〃	土師器杯	13.0	3.5		7.8	精選された胎土。黄橙色。内外面横ナデ調整。	A I a類器高指数26.9
〃	599	〃	土師器杯	12.2	2.7		5.8	赤色風化礫を多く含む。橙色。内外面横ナデ調整。	A I a類器高指数22.1
〃	600	〃	土師器杯				8.2	赤色風化礫の粗粒砂を含む。橙色。内外面横ナデ調整。	
〃	601	〃	土師器杯	13.0	2.9		8.1	長石、赤色風化礫の細粗粒砂を多く含む。橙色。内外面横ナデ調整。	A I a類器高指数22.7
〃	602	〃	土師器杯	13.0	3.3		7.0	赤色風化礫の粗粒砂を多く含む。淡茶色。	A I a類器高指数25.4
〃	603	〃	土師器杯				7.0	赤色風化礫の細粗粒砂を含む。橙色。内外面横ナデ調整。	
〃	604	〃	土師器杯				8.8	チャート、赤色風化礫の細粗粒砂を多く含む。黄橙色。	外面煤ける
〃	605	〃	土師器杯	14.8	5.2		8.0	赤色風化礫の粗粒砂を多く含む。橙色。内外面横ナデ調整。	A II a類器高指数35.2
〃	606	〃	土師器杯	14.4	4.4		9.2	チャートの粗粒砂、火山ガラスを含む。橙色。内外面横ナデ調整。	A II b類器高指数30.5
〃	607	〃	土師器杯				8.2	精選された胎土。浅黄色。内外面横ナデ調整。円盤底部と体部と粘土の接合部を明瞭に認める。	
〃	608	〃	土師器杯				8.2	赤色風化礫の粗粒砂を多く含む。橙色。内外面横ナデ調整。	
〃	609	〃	土師器杯				7.9	赤色風化礫の細粗粒砂を含む。黄茶色。横ナデ調整。外底弱い削りあり。	
〃	610	〃	土師器杯	14.1	4.6		7.5	赤色風化礫の小礫、粗粒砂を多く含む。橙色。横ナデ調整。	外面激しく煤けるA II b類器高指数32.6

表.16 遺物観察表（古代・中世）

Fig. No.	挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)				特 徴	備 考
				口径	器高	胴径	底径		
60	611	SK136	土師器杯				7.0	長石、雲母、赤色風化礫の細粗粒砂を含む。橙色。しっかりとした八字状に開く貼付高台を有す。高台高1.4cm。内外面ナデ調整。	外面は激しく煤ける B I b類
〃	612	〃	土師器杯					長石、雲母、赤色風化礫の細粗粒砂を含む。橙色。太くしっかりした貼付高台を有す。高台高1.4cm、内外面ナデ調整。	外面は激しく煤ける B I b類
〃	613	〃	黒色土器碗	15.6				雲母、石英の粗粒砂を多く含む。外面茶色。内面横方向を基調とする磨き。外面ナデ調整。	
〃	614	〃	黒色土器碗					雲母、長石、石英の細粗粒砂を含む。外面黄橙色。内面丁寧な磨き、外面横ナデ調整。高台脇は幅1cmの左←右のヘラ削り。高台径9.6cm。	
〃	615	〃	黒色土器碗					雲母、長石の細粒を多く含む。外面暗褐色。内面丁寧な磨き。断面三角の小さな貼付高台。高台径9.3cm。	
〃	616	〃	土師器甕	17.3				チャートの粗粒砂を多く含む。黄褐色。内面ナデ調整。外面横ハケ調整。	外面煤ける IV類
〃	617	〃	土師器甕	16.6				石英、長石、金雲母を含む。暗茶色。口縁部内外面横ナデ調整、胴部内外面ナデ調整。	外面煤ける I類
〃	618	〃	土師器甕	17.9	17.7			チャートの粗粒砂を含む。暗茶色。口縁部内外面強い横ナデ調整。胴部外面叩き。	被熱赤変し煤ける II類
〃	619	〃	土師器甕	20.2		22.0		長石、石英、雲母の細粒砂を含む。暗茶色。口縁部外面横方向の強いナデ調整、胴部外面指頭圧痕顕著。内面丁寧なナデ調整。	
〃	620	〃	須恵器無頸壺			15.3		長石粒を比較的多く含む。灰色。内面強い横ナデ調整、外面ナデ調整、肩に突起あり。環状となる可能性あり。	
61	623	SK140	須恵器杯蓋	12.2	2.3			長石粒を含むも精選された胎土。灰色。内面は特に丁寧なナデ調整。	
〃	624	〃	土師器杯	14.2	2.9		7.8	精選された胎土。赤茶色。口縁部内面段状を呈す。	器高指数20.4
〃	625	〃	土師器杯	18.4	4.5		12.5	長石細粒を少し含むが精選された胎土。茶色。内外面横ナデ調整、外底ナデ調整。	
〃	626	〃	須恵器皿				17.0	精選された胎土。八字状に開くしっかりした貼付高台を有す。内外面横ナデ調整。	
〃	627	〃	土師器甕	23.0				長石、チャートその他の粗粒砂を含む。赤茶色。口縁部内外面横ハケ調整後強い横ナデ調整。胴部内面横ナデ調整、外面右下がりのハケ調整。	胴部外面煤ける
〃	628	SD70	須恵器皿	17.1	1.4		14.0	精選された胎土。灰色。内・外面横ナデ。	
〃	629	P47	土師器杯	18.0				精選された胎土（チャートの細粒をわずかに含む）。橙色。内・外面ヘラ磨きが残る。	
〃	630	SB2	土師器杯	12.5	4.7		5.4	精選された胎土。浅黄橙色。内・外面横ナデ。外底糸きり痕顕著。	回転台使用
62	631	SD69	瓦器碗	13.4				精選された胎土。暗灰色。口縁部外面横ナデ。内面ヘラ磨きがわずかに残る。	
〃	632	〃	青磁碗				6.7	灰色堅緻な胎土。透明度のある緑灰色の釉を施釉、一部高台内面にまでかかる。	龍泉青磁碗
〃	633	P41	瓦器碗	15.3				長石、石英を含む。暗灰色。口縁部外面ナデ、外面指頭圧痕顕著。内面丁寧なナデ。	
〃	634	〃	瓦器碗	15.5				精選された胎土。暗灰色。内・外面横ナデ。	

表.17 遺物観察表（近世）

Fig. No.	挿図番号	出土地点	器種	種類	法量 (cm)				紋様・釉薬		特 徴	備 考	
					口径	器高	底径	胴径	内面	外面			
63	635	SK46	土師器 小皿		11.1	1.7	5.7				内・外面やや摩滅する。		
〃	636	SK48	磁器 蓋	染付	9.7				雷紋	草花紋			
〃	637	SK51	陶器 碗	染付			5.1		一重圈線・ 五弁花	横線		18世紀末以降	
65	638	SK52	磁器 碗	青磁	14.5				割花紋			龍泉窯産・13世紀	
〃	639	SK53	陶器 鉢		13.6				鉄釉	鉄釉・ 露胎			
67	640	SK56	陶器 瓶		3.0				鉄釉	鉄釉		備前産	
69	642	SK58	土師器 小皿		8.4	2.2	5.6				回転糸切り痕		
〃	643	〃	土師器 小皿		8.6	2.6	5.2				静止糸切り痕		
〃	644	〃	土師器 小皿		9.5	3.4	5.5				回転糸切り痕		
71	645	SK64	陶器 汁次		6.4	10.0	5.9		鉄釉	鉄釉・ 露胎		瀬戸・美濃産・17世紀前半	
〃	646	〃	陶器 小碗		5.5	3.0	2.3		灰釉	灰釉			
72	648	SK65	磁器 蓋	染付	9.8	2.8	5.4				笹紋		肥前系
〃	649	〃	磁器 皿	染付			5.8		草花紋		高台内「サ」銘		能茶山産
〃	650	〃	土師器 小皿		5.6	1.0	4.0				回転糸切り痕		
〃	651	〃	磁器 鉢	染付			6.2		宝紋	宝紋	高台内「茶山」銘		能茶山産
〃	652	〃	磁器 広東茶碗	染付			6.6						肥前系
〃	653	〃	磁器 瓶				7.9		柿釉	柿釉			
〃	654	〃	陶器 播鉢				15.4				1単位8条以上の播目		
73	656	〃	陶器 甕		24.6			28.8	柿釉	柿釉	鉄釉流し掛け		関西系
74	657	SK68	陶器 花筒		5.8				露胎	鉄釉			関西系
76	658	SK71	磁器 広東茶碗	染付			5.6				高台内「茶」銘		能茶山産
〃	659	〃	陶器 爛徳利						灰釉・ 露胎	灰釉			
〃	660	〃	土師器 小皿		6.0	0.9	4.4				回転糸切り痕		
〃	661	〃	陶器 行平鍋		18.0				鉄釉	鉄釉・ 露胎	外面飛鉋		関西系・19世紀
〃	662	SK73	陶器 蓋				かえり部 7.6	笠部 9.8	露胎	灰釉			
〃	664	SK75	磁器 碗	染付	12.0	7.0	4.6				風水紋		肥前系
78	665	SK76	陶器 火入れ				5.6		露胎	灰釉			肥前産・17世紀前半
81	667	SK80	陶器 椀				4.6		灰釉	灰釉・ 銅緑釉			肥前産・17世紀
〃	668	〃	陶器 椀				4.8		灰釉	灰釉・ 露胎			肥前産・16世紀末～ 17世紀初頭
〃	669	〃	陶器 甕				17.5						備前産
83	670	SK87	磁器 紅皿		5.0	1.4	2.2						肥前産・19世紀
〃	671	〃	磁器 紅皿		4.5	1.3	1.4						肥前産・18世紀末～19世紀

表.17 遺物観察表（近世）

Fig. No.	挿図番号	出土地点	器種	種類	法量 (cm)				紋様・釉薬		特 徴	備 考
					口径	器高	底径	胴径	内面	外面		
83	672	SK87	磁器菊皿		9.8	2.2	5.4				型打ち成形	肥前系
〃	673	〃	磁器小皿	染付	9.2				井桁紋?			肥前系
〃	674	〃	陶器蓋					笠部 6.3	露胎	緑釉	宝珠状の摘み	
〃	675	〃	陶器蓋				5.4		露胎	鉄釉		
〃	676	〃	陶器蓋			2.2	かえり部 9.1	笠部 11.8	鉄釉	鉄釉		
〃	677	〃	磁器猪口		4.6	2.9	2.6					肥前系
〃	678	〃	磁器小碗		5.9	4.8	3.2		灰釉	灰釉	雨垂れ状に施釉	
〃	679	〃	磁器蕎麦猪口	染付	7.8	5.7	6.2			花卉紋		肥前系
〃	680	〃	磁器小碗	染付			2.8			流水紋?		
〃	681	〃	陶器皿				5.0		鉄釉	鉄釉・露胎	(見込) 蛇の目釉剥ぎ	関西系
〃	682	〃	磁器広東茶碗	染付	10.6	6.5	5.8			草花紋		肥前系
〃	683	〃	磁器碗	染付	12.0				山形紋	帆掛け舟等		肥前系
〃	684	〃	磁器蓋	染付			摘み部 3.8			帆掛け舟		肥前系
〃	685	〃	磁器瓶	染付			8.9		露胎			肥前系
〃	686	〃	陶器瓶				6.3		鉄釉・露胎	灰釉		
〃	687	〃	陶器小壺		9.4				鉄釉・うのふ釉・露胎	鉄釉・うのふ釉		関西系
84	688	〃	陶器甕		10.8				鉄釉	鉄釉		関西系
〃	689	〃	陶器甕		13.4				鉄釉	鉄釉		関西系
〃	690	〃	陶器甕		16.4				鉄釉	鉄釉		関西系
〃	691	〃	陶器鉢		21.0				鉄釉(錆釉)	鉄釉(錆釉)		関西系
〃	692	〃	土師器蓋		16.2						火消し壺の蓋	
〃	693	〃	陶器土瓶		9.2			17.0	鉄釉・露胎	鉄釉・露胎		関西系・19世紀
〃	694	〃	陶器小壺		11.1				鉄釉	鉄釉	口縁部釉剥ぎ	関西系
〃	695	〃	陶器鍋				7.7		緑釉	露胎	底部内面に目跡	
〃	696	〃	土師質火鉢								板組造り・内面底部墨書	
85	697	〃	陶器甕		31.2				鉄釉	鉄釉	鉄釉(黒釉) 流し掛け	関西系
〃	698	〃	土師質焜炉				21.0					
86	699	SK88	陶器播鉢		35.0						1単位9条以上の播目	
87	700	SK89	土師器小皿		12.1	2.0	7.6				見込に陽刻	
91	701	SK91	磁器碗				5.0		五弁花	源氏香		肥前系・18世紀後半
93	702	SK93	磁器輪花小皿		8.8	2.3	5.2		草花紋		型打ち成形	肥前系
〃	703	〃	陶器輪花小皿		9.2	2.4	4.0		緑釉	緑釉・露胎	型打ち成形	

表.17 遺物観察表（近世）

Fig. No.	挿図番号	出土地点	器種	種類	法量 (cm)				紋様・釉薬		特徴	備考
					口径	器高	底径	胴径	内面	外面		
93	704	SK93	磁器碗			5.2		二重圏線・宝紋		高台内に「サ」銘	能茶山産	
〃	705	〃	陶器皿		14.6			鉄釉(鉛釉)	鉄釉(鉛釉)・露胎		関西系	
〃	706	〃	磁器蕎麦猪口		8.0	5.7	5.8		山水紋	口錆	能茶山産	
〃	707	〃	磁器碗	染付			4.0	一重圏線・花卉紋?			肥前系	
〃	708	〃	磁器猪口		6.2	3.0	2.8	帆船等			19世紀中頃	
〃	709	〃	磁器碗	染付	10.0	6.2	3.8		遠山、東屋	底部内面目跡		
〃	710	〃	磁器小皿				3.6	草花紋			19世紀中頃	
〃	711	〃	陶器椀				5.4	緑釉	緑釉・露胎			
〃	712	〃	陶器台付灯明皿		6.2	4.3	3.6	受部6.4	鉄釉	鉄釉・露胎	回転糸切り痕	
〃	713	〃	陶器台付灯明皿				3.9	受部7.5	鉄釉	露胎	回転糸切り痕	
〃	714	〃	陶器蓋			2.2	4.4	笠部9.6	露胎	鉄釉		
〃	715	〃	陶器土瓶		6.6				露胎・柿釉	鉄釉	取付け部は型押しにより、直径6mmの円孔を穿つ。	
〃	716	〃	陶器蓋					笠部17.0	鉄釉・露胎	鉄釉・露胎	飛鉋	関西系
〃	717	〃	陶器碗				5.1		鉄釉	鉄釉・露胎		関西系
〃	718	〃	陶器甕		14.4				露胎	鉄釉		肥前系
〃	719	〃	陶器鉢				11.8		鉄釉	鉄釉・露胎		関西系
〃	720	〃	磁器德利				9.4		露胎			肥前系
〃	721	〃	土師質七厘		24.0					丹塗り	空気孔として直径14mmの円孔を穿つ。	
〃	722	〃	土師質七厘				21.4			丹塗り		
94	723	SK94	磁器煎茶碗	染付	8.2					飛鳥		肥前系
98	724	SK121	磁器碗	染付	9.9	5.2	3.9			草花紋・二重圏線	くらわんか手	肥前産・18世紀後半
〃	725	SK124	磁器碗	青磁染付	10.9				四方襷	青磁釉		肥前産・18世紀後半
〃	726	〃	陶器火入れ		10.8	5.9	7.7		灰釉・露胎	灰釉・露胎		
〃	727	〃	陶器皿		21.8				緑釉	緑釉	縁折皿。刷毛塗による白化粧掛け。	肥前産・17世紀後半～18世紀
〃	728	SK137	磁器広東茶碗	染付			6.4		一重圏線・波、岩	草花紋		肥前系
〃	729	SK139	陶器椀				3.0		灰釉	灰釉		尾戸産
〃	730	〃	土師器小皿		6.4	1.4	4.3				回転糸切り痕	
〃	731	〃	土師器小皿				4.2				回転糸切り痕	
〃	762	〃	陶器碗		8.8				灰釉	灰釉		尾戸産?
〃	733	〃	陶器皿		12.3				柿釉	柿釉		関西系
〃	734	〃	陶器甕		17.2	17.7	12.3	18.4	柿釉	柿釉	鉄釉(黒釉)による流し掛け。	関西系
100	735	SE4	磁器広東茶碗	染付			6.2			鶯紋		肥前系

表.17 遺物観察表（近世）

Fig. No.	挿図番号	出土地点	器種	種類	法量 (cm)				紋様・釉薬		特徴	備考
					口径	器高	底径	胴径	内面	外面		
100	736	SE5	磁器猪口				2.8		松、鶴		19世紀中頃	
〃	737	〃	磁器小椀	染付	6.0	2.8	3.6			草花紋	肥前系	
〃	738	〃	陶器広東茶碗	染付			6.4		五弁花		瀬戸・美濃産・19世紀	
〃	739	〃	磁器広東茶碗	染付	11.2	6.8	6.2			野菜紋(大根葉)	肥前系	
〃	740	〃	磁器広東茶碗	染付			6.8		雁	山水紋	肥前系	
〃	741	〃	磁器皿	染付			4.0		区画紋・丸紋・井桁	(見込) 蛇の目釉剥ぎ	肥前系	
〃	742	〃	磁器小皿	染付	4.1					斜格子紋	肥前系・18世紀?	
〃	743	〃	陶器皿				5.6		銅緑釉	露胎	(見込) 蛇の目釉剥ぎ	内野山窯産・17世紀末～18世紀前半
〃	744	〃	磁器蓋	染付	9.4	3.0	摘み部5.2		一重圏線・波・岩	草木紋	肥前系	
〃	745	〃	陶器椀		12.4	7.6	5.4		鉄釉	鉄釉	白色土化粧掛け。	関西系
〃	746	〃	磁器德利	染付?			8.8		露胎		肥前系	
〃	747	〃	磁器德利	染付	4.0				露胎	唐草紋・岩・竹	肥前産・18世紀後半～19世紀中頃	
〃	748	〃	磁器德利	染付			7.6	14.3	露胎	唐草紋・岩・竹	肥前産・18世紀後半～19世紀中頃	
〃	749	〃	磁器德利	染付?			5.8	12.0	露胎		内面底部に錆が付着する。	肥前系
〃	750	〃	陶器土瓶		8.0	10.1	7.4	13.2	鉄釉・露胎	露胎	白色釉によるイッチン掛け。	
〃	751	〃	陶器火鉢		27.5	15.8	19.6	29.1	灰釉・露胎	緑釉・灰釉	白色の化粧掛け。把手は型打ちしによる獅子頭を貼付する。	
〃	752	〃	土師器焙烙		29.4						内・外面にナデを施し、外面はやや煤ける。	
〃	753	〃	陶器壺					27.0	鉄釉	鉄釉	白色土による化粧掛け。	関西系
〃	754	〃	陶器甕		32.2				柿釉	柿釉	鉄釉(黒釉)による流し掛け。	関西系
102	758	SE6	磁器猪口		5.4							
〃	759	〃	磁器小椀	染付	6.4	3.9	2.2			隸字体	端反椀。口錆	19世紀中頃
〃	760	〃	磁器猪口		6.4	3.2	2.4					19世紀中頃
〃	761	〃	磁器猪口		7.2	3.2	2.8		竹、鳥		コバルト釉	19世紀中頃
〃	762	〃	磁器杯				3.4		菊水紋			19世紀中頃
〃	763	〃	磁器小皿		8.8	2.4	3.6				(見込) 蛇の目釉剥ぎ	肥前系
〃	764	〃	磁器蓋	染付	9.8	2.8	摘み部5.2		雁	網干、東屋		肥前系
〃	765	〃	磁器蓋		7.4	1.5	摘み部3.1					肥前系
〃	766	〃	磁器碗	染付	10.2							
〃	767	〃	陶器椀		9.8				灰釉	灰釉	口縁部に銅緑釉を施す。	
〃	768	〃	陶器皿		13.4	4.9	5.2		鉄釉	鉄釉	(見込) 蛇の目釉剥ぎ。釉剥ぎ部分にアルミナ砂を塗布。	関西系
〃	769	〃	陶器皿		12.6	4.3	4.8		鉄釉(鉛釉)	鉄釉(鉛釉)	(見込) 蛇の目釉剥ぎ。釉剥ぎ部分にアルミナ砂を塗布。	関西系
〃	770	〃	陶器蓋			2.2	4.0	笠部9.2		透明釉	回転糸切り痕	

表.17 遺物観察表（近世）

Fig. No.	挿図番号	出土地点	器種	種類	法量 (cm)				紋様・釉薬		特 徴	備 考
					口径	器高	底径	胴径	内面	外面		
102	771	SE6	磁器 輪花皿	染付	20.6	2.9	13.6		草花紋		型打ち成形	肥前系
〃	772	〃	陶器 瓶				8.4		露胎			備前系?
〃	773	〃	陶器 碗		11.5	8.3	5.2		灰釉	灰釉・ 露胎	底部内面に目跡。	尾戸産?
〃	774	〃	磁器 小鉢	染付			8.8		草花紋	宝紋?	蛇の目凹高台。高台内「茶山」 名。	能茶山産
〃	775	〃	陶器 播鉢		17.0						1単位9条以上の播目。口縁部 に鏝状の凸帯。	
〃	776	〃	陶器 鉢		23.0				灰釉	灰釉		瀬戸・美濃産
105	778	SE9	土師器 小皿		6.4	0.8	4.5				口縁部に煤付着。	
〃	779	〃	陶器 蓋			2.4	5.6	笠部 11.0	露胎	透明釉	回転糸切り痕	
〃	780	〃	陶器 筒型碗		9.8	5.0	5.8		灰釉	灰釉・ 露胎		尾戸産?
〃	781	〃	陶器 甕				7.6		露胎			備前産
〃	782	〃	陶器 瓶	陶胎 染付			6.6					
〃	783	〃	陶器 鍋				6.8		鉄釉	露胎	底部内面に3ヶ所の目跡。外 面に3ヶ所目が残る。	関西系
〃	784	〃	陶器 鉢				10.2		鉄釉	鉄釉・ 露胎		関西系
〃	787	〃	瓦器 焙烙		45.2						口縁端部に煤が付着。	
107	788	SE11	陶器 碗	染付	10.2					菊紋		瀬戸・美濃産
〃	789	〃	陶器 皿		13.8				灰釉	灰釉		尾戸産?
〃	790	〃	陶器 碗	陶胎 染付	12.2	7.3	5.1			草木紋		
〃	791	〃	陶器 碗		11.2				灰釉	灰釉		尾戸産
〃	792	〃	磁器 広東茶碗	染付			6.1		一重圈 線	薄紋?		肥前産・18世紀後半～19世紀 前半
〃	793	〃	陶器 碗		11.3	7.5	5.1		灰釉	灰釉・ 露胎		尾戸産
〃	794	〃	陶器 小鉢				6.0		灰釉	灰釉		
〃	795	〃	陶器 碗				5.2		灰釉	灰釉・ 露胎		尾戸産
〃	796	〃	陶器 碗		14.5				灰釉	灰釉		尾戸産
〃	797	〃	陶器 香炉		10.4	8.5	6.2	12.8	灰釉	灰釉・ 露胎		尾戸産
〃	798	〃	陶器 瓶				8.4	14.2	柿釉	灰釉・ 鉄釉	釉流し掛け。	尾戸産?
〃	799	〃	陶器 播鉢		28.1						1単位7条の播目が施される。	
109	800	SD56	磁器 皿	染付	12.2	3.7	4.4				(見込) 蛇の目剥ぎ	肥前系
〃	801	〃	磁器 碗	青磁	17.2				青磁釉	青磁釉	青磁 I-2類	龍泉窯産・13世紀
〃	802	〃	陶器 甕		17.8				鉄釉	鉄釉		肥前系
〃	803	SD61	磁器 猪口		4.1	2.3	2.5					肥前系
〃	804	〃	磁器 菊紋水滴	染付					露胎	陽刻	型押し成形	肥前系
〃	805	〃	陶器 蓋			3.4	かえり部 7.6	笠部 10.4	露胎	鉄釉	白色土化粧掛け。摘み部は宝 珠状を成す。	

表.17 遺物観察表（近世）

Fig. No.	挿図番号	出土地点	器種	種類	法量 (cm)				紋様・釉薬		特 徴	備 考
					口径	器高	底径	胴径	内面	外面		
109	806	SD61	陶器 台付灯明皿		11.4	2.6	4.2		灰釉	露胎		
〃	807	〃	陶器 蓋				6.2		白化粧土	灰釉	内面墨書を施す。	
〃	808	〃	土師器 蓋		15.4	3.6	7.0				内面に煤が付着する。火消し壺の蓋。	
〃	809	〃	陶器 土鍋		18.4	8.7	7.0	19.0	鉄釉	鉄釉・飛鉋	白釉によるイッチン掛け。	関西系
110	810	SD62	磁器 蓋	染付	9.2	2.9	摘み部 5.2		桔梗紋	桔梗紋		肥前系
〃	811	SD64	磁器 紅皿		4.5	1.4	1.5		放射状紋		型打ち成形	肥前産・18世紀後半～19世紀
〃	812	SD65	磁器 碗	染付			3.8					肥前系
〃	813	〃	磁器 仏飯碗	青磁	9.5	6.5	5.2		青磁釉	青磁釉・露胎		肥前産・17世紀中頃
〃	814	〃	陶器 皿				4.4		緑釉	緑釉		
〃	815	〃	磁器 皿	染付	12.7	3.6	4.7		斜交線紋		(見込) 蛇の目釉剥ぎ	肥前系
〃	816	〃	陶器 皿		14.2				緑釉	緑釉		
〃	817	〃	陶器 折縁皿		25.9	4.4	14.8		緑釉	緑釉	織部・緑釉掛け	瀬戸・美濃産・17世紀中頃
〃	818	SD66	陶器 椀		13.1	7.1	5.7		灰釉	灰釉		尾戸産?
111	819	SD78	土師器 小皿		7.0	1.5	3.6				回転糸切り痕	
〃	820	〃	土師器 小皿		7.1	1.5	3.5				回転糸切り痕	
〃	821	〃	土師器 小皿		7.2	1.5	4.5				口端部に煤が付着する。	
〃	822	〃	土師器 小皿				4.0				回転糸切り痕	
〃	823	〃	磁器 碗	青磁 染付	11.0	6.0	4.2		四方襷 五弁花	青磁釉	(高台内) 退化した渦福	肥前産・18世紀後半
〃	824	〃	陶器 椀				5.0		灰釉	灰釉		尾戸産
〃	825	〃	陶器 皿				4.5		緑釉	緑釉	(見込) 蛇の目釉剥ぎ	
〃	826	〃	磁器 皿	染付			4.3				(見込) 蛇の目釉剥ぎ。釉剥ぎ部分に鉄釉を塗布する。	
〃	827	〃	陶器 椀		11.8	8.5	5.7		灰釉	灰釉		尾戸産
〃	828	〃	磁器 壺		10.6				灰釉	灰釉・唐草紋・花卉紋		
〃	829	〃	磁器 皿				4.3				(見込) 蛇の目釉剥ぎ	
114	831	SX 5	磁器 猪口				2.0		草花紋 飛鳥		コバルト釉による。	19世紀中頃
〃	832	〃	土師器 小皿		5.8	1.0	4.2				回転糸切り痕	
〃	833	〃	磁器 煎茶碗	染付	8.2					薄の葉、穂		肥前系
〃	834	〃	磁器 紅皿		5.0	1.5	1.2		放射状紋 概ね露胎			肥前産・19世紀
〃	835	SX 9	磁器 碗	染付	7.4					飛鳥		肥前系
〃	836	〃	磁器 碗	染付	11.6							肥前系
〃	837	〃	磁器 瓶	染付	3.8				露胎			肥前系
〃	838	〃	磁器 碗	染付	10.9	6.0	4.4		雷紋・亀紋	網目紋?等	(高台内)「茶」銘	能茶山産

表.17 遺物観察表（近世）

Fig. No.	挿図番号	出土地点	器種	種類	法量 (cm)				紋様・釉薬		特 徴	備 考
					口径	器高	底径	胴径	内面	外面		
114	839	SX9	磁器碗	染付	11.5	5.9	4.2		一重園線・草花紋	木賊紋		瀬戸・美濃産・19世紀
〃	840	〃	磁器 広東茶碗	染付			5.6					肥前系
〃	841	〃	磁器 広東茶碗	染付	10.4	6.6	5.7				宝紋等	肥前系
〃	842	〃	磁器蓋	染付			かえり部 9.0	笠部 10.0			宝紋・鎬紋	肥前系
〃	843	〃	磁器蓋	染付			かえり部 10.6	笠部 12.4			宝紋	能茶山産
〃	844	〃	磁器蓋	染付	9.2				雷紋・亀紋	網目紋 ?等	(高台内)「茶」銘	能茶山産
〃	845	〃	磁器鉢	染付			6.0		宝紋他		(高台) 蛇の目凹高台	肥前系
〃	846	〃	磁器鉢	染付			5.8		山水紋	宝紋		能茶山?
〃	847	〃	磁器小皿	染付	12.4	2.7	6.2		草花紋		(見込) 蛇の目釉剥ぎ	波佐見窯系
〃	848	〃	陶器皿				10.0		菜の花 蝶		(内面) 5ヶ所の目痕	
〃	849	〃	陶器椀				4.4		灰釉	灰釉・ 露胎		
〃	850	〃	陶器蓋		3.4	かえり部 4.1	笠部 6.4		露胎	灰釉		
〃	851	〃	陶器播鉢		25.1						1単位10条の播目	
〃	852	〃	陶器花筒		10.0				うのふ 釉	うのふ 釉	(外面) 深い刻みと強いロクロ目	
115	853	〃	陶器鉢		24.5				鉄釉	鉄釉・ 露胎		関西系
〃	854	〃	陶器鉢				9.6		鉄釉・ 露胎	鉄釉		関西系
〃	855	〃	磁器德利	染付	3.7							肥前産
〃	856	〃	磁器德利	染付	3.7							肥前産・18世紀後半～19世紀中頃
〃	858	SX10	磁器碗	染付	7.6							
〃	859	〃	磁器皿				5.0					
〃	860	〃	土師器小皿		13.0	1.8	9.2				見込に陽刻	
116	861	P1	陶器播鉢		32.4						1単位10条の播目	
117	862	SK87・SE9	陶器蓋			かえり部 8.8	笠部 11.8		露胎	鉄釉		関西系
〃	863	〃	陶器瓶				5.2		鉄釉	鉄釉・ 露胎	開口部が存在する。	関西系
〃	864	〃	磁器瓶				6.6		露胎	灰釉・ 鉄絵		
〃	865	〃	陶器甕		16.6			19.8	鉄釉	鉄釉		関西系
〃	866	SE5・SX9	磁器德利	染付			9.2		露胎	竹、岩		肥前産・18世紀末～19世紀中頃
〃	867	SK87・SE9	土師器火消し壺		16.0							
〃	868	SE6・SD62	陶器鉢		11.4				鉄釉	鉄釉		関西系
〃	869	SK87・SE9	瓦器焙烙		37.0						(外面) 口縁端部まで煤が付着。	
〃	870	SK65・87	陶器播鉢		35.8	12.9	18.0				1単位10条の播目	
〃	871	SE9・SX9	陶器甕		24.0			28.8	柿釉	柿釉		関西系

表.17 遺物観察表（近世）

Fig. No.	挿図番号	出土地点	器種	種類	法量 (cm)				紋様・釉薬		特 徴	備 考
					口径	器高	底径	胴径	内面	外面		
118	872	遺構外	磁器紅皿		4.6	1.2	1.4			放射状紋・露胎	型打ち成形	肥前産・18世紀末～19世紀
〃	873	〃	磁器小碗	染付	7.2	3.7	3.0			折枝紋?		肥前系
〃	874	〃	陶器碗		8.0				灰釉	灰釉	端反碗	関西系
〃	875	〃	磁器小碗	染付?	8.4							肥前系
〃	876	〃	磁器合子	染付	4.8	3.0	3.2			花唐草紋	型押し成形	肥前系・19世紀
〃	877	〃	磁器煎茶碗	染付	8.2	5.0	3.4		五弁花	笹紋		肥前系
〃	878	〃	磁器煎茶碗	染付	8.0					斜格子紋・四方襷紋		肥前系
〃	879	〃	磁器碗	染付	10.0	5.0	4.8			鍋紋・草花紋・宝紋?		肥前系
〃	880	〃	磁器碗	染付	11.0				二重圏線	笹紋		肥前系
〃	881	〃	磁器広東茶碗	染付	9.8	5.8	4.8		一重圏線	草花紋		肥前系
〃	882	〃	磁器碗	染付	10.6	5.7	3.6		一重圏線・寿紋	鍋紋・渦紋または雲紋		瀬戸・美濃産
〃	883	〃	磁器広東茶碗	染付			5.6		五弁花			肥前系
〃	884	〃	磁器広東茶碗	染付			6.7		一重圏線			肥前産
〃	885	〃	磁器碗	染付	10.8					草花紋		肥前系
〃	886	〃	磁器碗	染付	11.0					草花紋(折枝紋)		肥前系
〃	887	〃	磁器広東茶碗	染付			6.6			草花紋		肥前系
〃	888	〃	磁器広東茶碗	染付	11.4	6.8	6.2		一重圏線・波、岩	草花紋		肥前系
〃	889	〃	磁器碗	染付	11.0	6.2	3.8			笹紋		肥前系
〃	890	〃	磁器鉢	染付	15.2	6.4	6.4		風景画	源氏香	高台内に「茶」銘	能茶山産
〃	891	〃	磁器蓋		7.0	1.6	摘み部3.2					肥前系・18世紀末以降
〃	892	〃	磁器蓋	染付	9.4	3.0	摘み部4.0		雷紋・草花紋	草花紋	摘み部内に「茶」銘	能茶山産
〃	893	〃	磁器蓋	染付	9.4	3.0	摘み部4.2		雷紋		摘み部内に「茶」銘	能茶山産
〃	894	〃	磁器小皿	染付	10.4	2.6	5.6		蔓草		蓋の可能性有り。	肥前系
〃	895	〃	磁器輪花皿	染付	8.5	2.5	4.2		丸紋・薄、雁?		型打ち成形	肥前系
〃	896	〃	磁器皿	染付			6.0		草花紋			肥前系・19世紀
〃	897	〃	磁器皿	青磁染付	9.9	3.1	4.2		一重圏線・大極図	青磁釉	(見込) 3ヶ所の目跡。	肥前系
119	898	〃	磁器輪花皿	染付	9.0	2.0	5.0		草花紋		口鏽	肥前系
〃	899	〃	磁器菊皿	染付	9.8	2.2	5.8		風景画		型打ち成形。口唇部に呉須を施す。高台内に「サ」銘。	能茶山
〃	900	〃	陶器皿		12.8	4.8	4.4		鉄釉	鉄釉・露胎	(見込) 蛇の目釉剥ぎ後アルミナ砂塗布。	福岡産?・18世紀末～19世紀
〃	901	〃	陶器皿				5.2		鉄釉	鉄釉・露胎	(内面) 蛇の目釉剥ぎ後アルミナ砂塗布。	
〃	902	〃	陶器鉢		20.2				灰釉	灰釉		尾戸産?
〃	903	〃	陶器皿		12.8				柿釉	柿釉	(内外面) 鉄釉(黒釉)による化粧掛けを施す。	関西系

表.17 遺物観察表（近世）

Fig. No.	挿図番号	出土地点	器種	種類	法量 (cm)				紋様・釉薬		特 徴	備 考
					口径	器高	底径	胴径	内面	外面		
119	904	遺構外	陶器鉢		16.6	6.5	6.8		灰釉	灰釉・鉄絵	(外面) 白釉によるイッチン掛け	
〃	905	〃	陶器小壺		8.0				露胎	灰釉・鉄絵	蓋受け部を持つ。	
〃	906	〃	陶器小壺		8.2				鉄釉	コバルト釉	白色土による化粧掛け	
〃	907	〃	磁器瓶	染付			5.0	7.2	露胎			肥前系
〃	908	〃	磁器瓶	染付			4.8		露胎			肥前系・18世紀後半
〃	909	〃	磁器瓶	染付			4.4		露胎・ロクロ目			肥前系
〃	910	〃	陶器壺					笠部 17.8				
〃	911	〃	磁器瓶	染付			7.4		露胎・ロクロ目			肥前系
〃	912	〃	陶器瓶				8.0		露胎・ロクロ目	透明釉	底部に墨書が施される。	尾戸産
〃	913	〃	磁器銚子	染付			7.0	8.0	露胎	舟?		
〃	914	〃	陶器椀		10.7				灰釉	灰釉		尾戸産?
〃	915	〃	陶器椀				5.1		灰釉	灰釉		肥前産?・18世紀中頃
〃	916	〃	陶器香炉				8.0		露胎	柿釉・露胎	(底部) やや縦長の脚が付く。 (内面) 3~4個の目跡が残る。	瀬戸・美濃産・17世紀中頃
〃	917	〃	陶器鉢		20.0				鉄釉	鉄釉		関西系
〃	918	〃	陶器鉢		23.7				鉄釉	鉄釉		関西系
〃	919	〃	土師器蓋		16.5						粘土板の組合せ成形。	
〃	920	〃	土師器蓋		13.6			14.0			(内面) 煤が付着する。	
120	921	〃	陶器片口		16.0				緑釉	緑釉		
〃	922	〃	陶器片口		24.4				鉄釉	鉄釉	白色土による化粧掛け。	肥前産・18世紀~幕末
〃	923	〃	陶器壺		10.0			21.6	鉄釉・露胎	鉄釉	胴部は算盤玉型を成す。	
〃	924	〃	陶器壺		10.7				露胎	透明釉	白色土による化粧掛け。軟質陶器。	
〃	925	〃	須恵器鉢		21.4						(内・外面) ナデ	
〃	926	〃	磁器注口部						露胎	透明釉	急須の注口部と考えられる。	
〃	927	〃	土師器焙烙		29.2						(外面) 煤が付着する。	
〃	928	〃	陶器甕		28.0				鉄釉・ロクロ目	鉄釉		関西系
〃	929	〃	陶器播鉢		29.4						(内面) 1単位10条の播目を施す。	
〃	930	〃	陶器播鉢		32.4						(内面) 1単位10条の播目を施す。	
〃	931	〃	陶器火鉢		22.0				鉄釉	鉄釉	(把手) 型打ち成形による獅子頭を貼付。白色土による化粧掛け。	
〃	932	〃	陶器甕		33.2				柿釉	柿釉	鉄釉(黒釉) 流し掛け。体部上位に3~4条の沈線帯。	関西系
121	933	〃	土師質焜炉		12.6						胴部中位に断面三角形粘土帯と直径10mmの円孔、口縁部に断面三角形の支え部を配す。	
〃	934	〃	土師質焜炉				12.2				底部には断面五角形の脚が付く。体部二重構造を有する。	

表.18 石器観察表

Fig. No.	挿図番号	出土地点	器種	法 量				特 徴	備 考
				全長(cm)	全幅(cm)	全厚(cm)	重量(g)		
9	32	ST5	砥石	15.0	9.7	6.5	1435.0	使用痕2面	砂岩製
〃	33	〃	砥石	12.3	8.4	8.5	250.9	使用痕1面	砂岩製
12	42	ST7	叩石	7.2	6.7	4.6	302.1	縁辺部に鼠歯状痕	砂岩製
21	125	ST12	砥石	7.0	5.5	1.6	11.6	被熱赤変	細粒砂岩製
31	307	ST16	石斧	8.6	4.8	0.6	33.8		頁岩製
35	346	ST17	石庖丁	8.4	4.0	0.7	33.5	両端抉り	結晶片岩製
〃	347	〃	砥石	15.4	12.5	7.4	2500.0	使用痕2面 一部被熱赤変	砂岩製
〃	348	〃	砥石	27.0	9.4	3.7	1330.0	使用痕1面 意識的に破損	砂岩製
41	436	ST22	砥石	11.6	5.7	3.4	266.4	使用痕2面	砂岩製
〃	437	〃	砥石	10.8	5.7	5.6	400.9	使用痕1面	砂岩製
58	592	SK130	砥石	21.8	10.7	3.4	1300.0	使用痕2面	砂岩製
67	641	SK56	砥石	9.1	6.0	1.2	93.0	使用痕4面 仕上げ砥	泥岩製
71	647	SK64	太形蛤刃石斧	13.3	7.3	5.2	875.0	基部は欠損する	緑色片岩製
72	655	SK65	砥石	6.1	5.6	1.9	72.0	使用痕4面 仕上げ砥	粘板岩製
76	663	SK74	敲打具	10.9	6.2	4.6	468.0		砂岩製
81	666	SK79	石臼	直径 25.4		5.5	1440.0	主溝間の角度は45°であり、主溝・副溝は8分画される	砂岩製・粉挽き臼(上臼)
103	777	SE6	石臼	直径 25.6		7.0	2500.0	主溝間の角度は50°～60°であり、主溝・副溝は6分画で存在する。副溝は主溝に対して2～3条確認でき、端部に迄達する。	砂岩製・粉挽き臼(上臼)
105	786	SE9	砥石	5.3	4.7	2.2	93.0	使用痕6面 荒砥	砂質凝灰岩製
111	830	SD78	砥石	8.7			64.8	使用痕4面 仕上げ砥	泥岩製
121	935	遺構外	砥石	7.4	6.6	1.0	72.0	使用痕5面 仕上げ砥	泥岩製・赤色顔料が附着
〃	936	〃	石臼	直径 27.0		4.9	932.0	主溝間の角度は45°であり、楮目は8分画される。主溝1本に対して副溝3本が存在する。心棒穴は円形を成す。	砂岩製・粉挽き臼(上臼)

表.19 近世瓦観察表

Fig. No.	挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm)			特 徴	備 考
				全長	全幅	全厚		
101	755	SE5	軒平瓦		29.5	1.5	中心飾りは3単位の雄芯状紋。珠点が存在する。(均整唐草紋)	
〃	756	〃	丸瓦	21.5	13.0	1.5	凸部に「あき」の刻印を施す。	
〃	757	〃	平瓦			2.2	凸面に縄蓆紋、凹面に布目圧痕。	平安時代
105	785	SE9	軒平瓦			1.6	中心飾りは、3単位の雄芯状紋。均整唐草紋を施す。	
115	857	SX9	軒平瓦			1.3	蔓草は単線で表現される。	

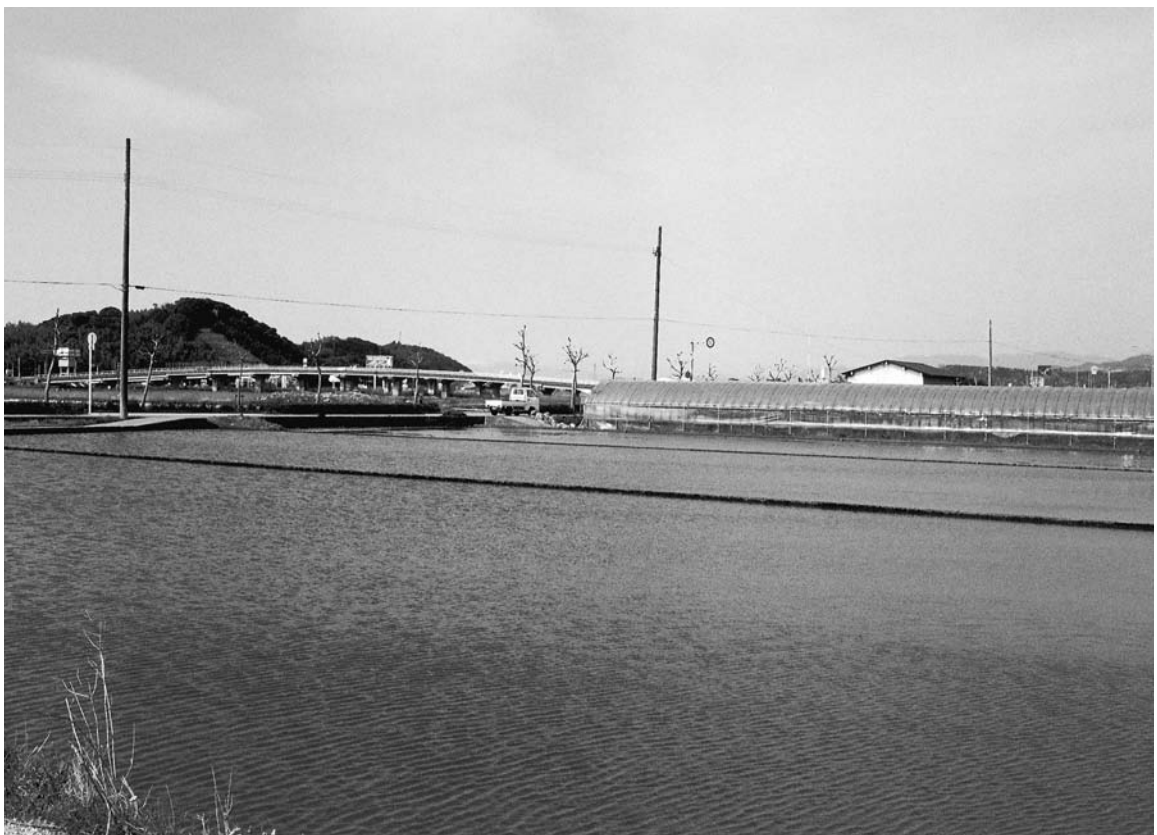
表.20 出土古銭計測表

Fig. No.	記号	出土地点	銭種	分類	初鑄(年)	銭径 (cm)			重さ(g)	伴 出 遺 物	備 考
						外径	内径(表)	内径(裏)			
122	a	SK58	治平元宝	宋銭	1064	2.38	1.84	1.75	2.9	土師器片	渡来銭
〃	b	SK65	寛永通宝	文銭	1668	2.47	2.01	1.81	1.7	磁器片・陶器片・瓦片・窯道具・砥石	背文
〃	c	SK87	寛永通宝	新寛永	1700	2.4	1.96	1.85	1.8	磁器片・陶器片・土師器片・瓦片・鉄製品・敲打具	不旧手銭 (山城国京都七条)
〃	d	〃	寛永通宝	新寛永	1700	2.16	1.74	1.62	1.7	磁器片・陶器片・土師器片・瓦片・鉄製品・敲打具	四ツ宝銭 (武蔵国江戸亀戸)
〃	e	包含層	寛永通宝	古寛永	1636	2.45	1.99	1.82	1.9	包含層の遺物	
	採択不能	SK58	不明	不明						土師器片	

写真図版



Ⅱ区調査前全景（北東から）



同上（北東から）

PL.2



Ⅱ-2区 西壁セクション



同 上



ST5 完掘状況

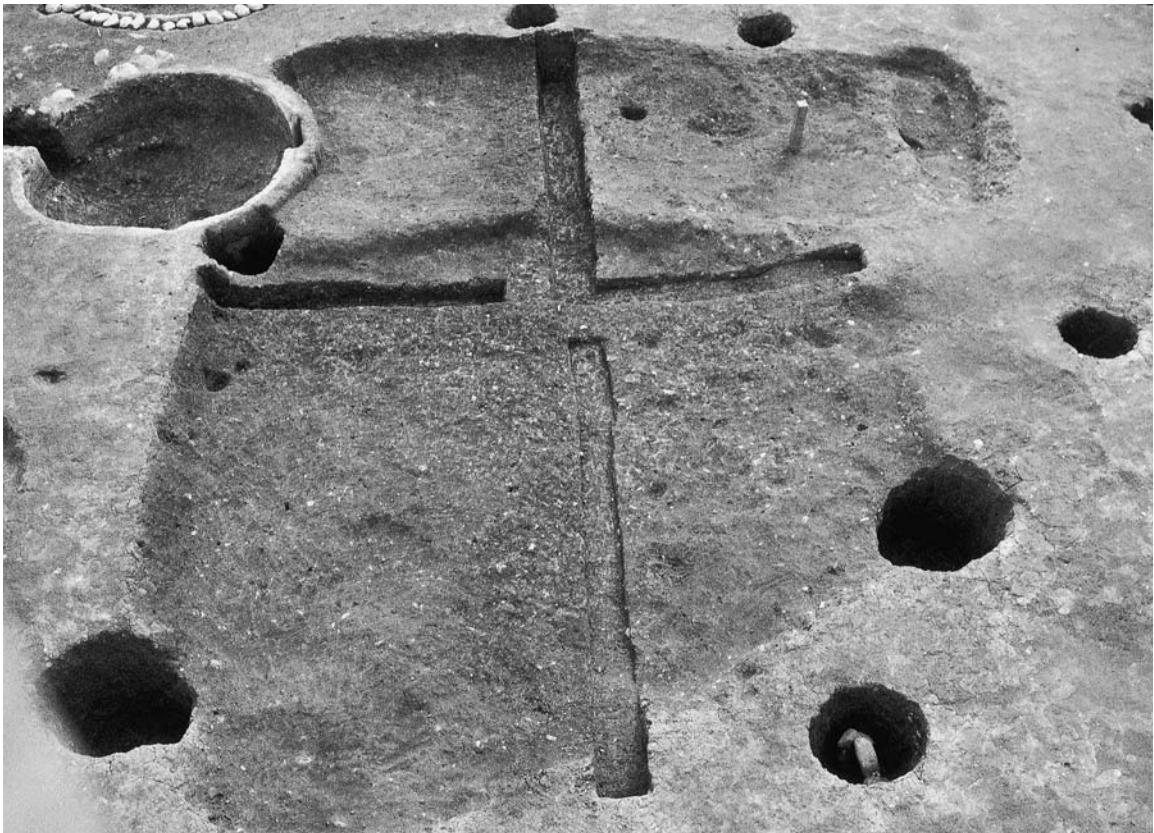


ST5 セクション

PL.4



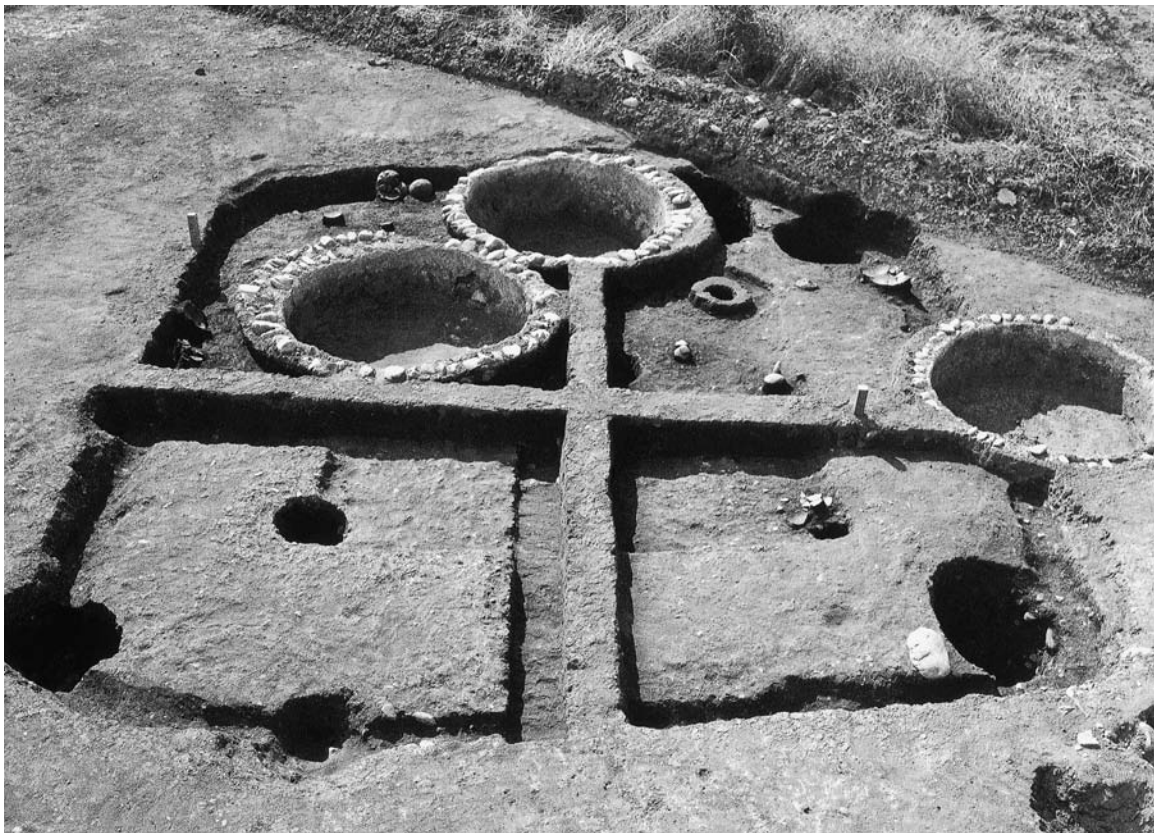
ST5 遺物出土状況



ST6 完掘状況



ST7 完掘状況



ST8 セクション及び遺物出土状況

PL.6



ST9 遺物出土状況



ST9 完掘状況



ST9 セクション



ST10 遺物出土状況

PL.8



ST10 セクション及び遺物出土状況



ST10 遺物出土状況 (左89・右96)



ST11・12 セクション及び遺物出土状況

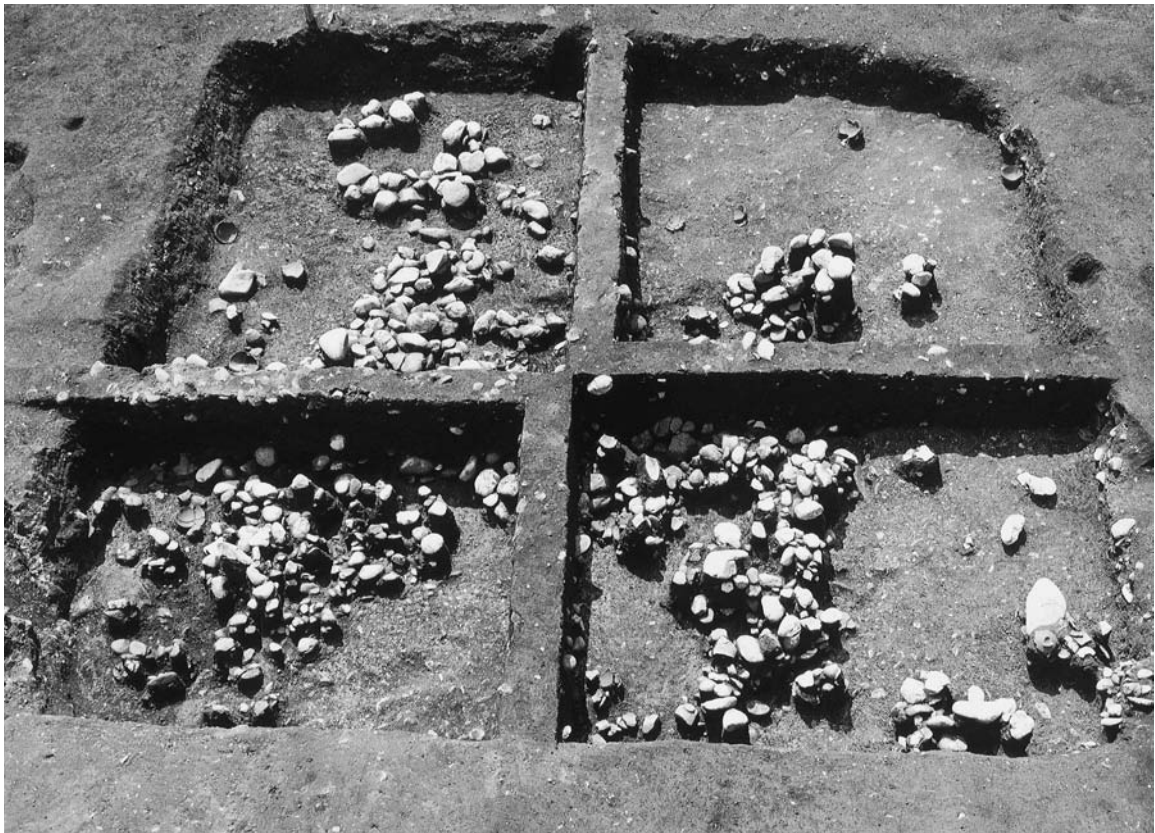


ST11 遺物出土状況 (110)

PL.10



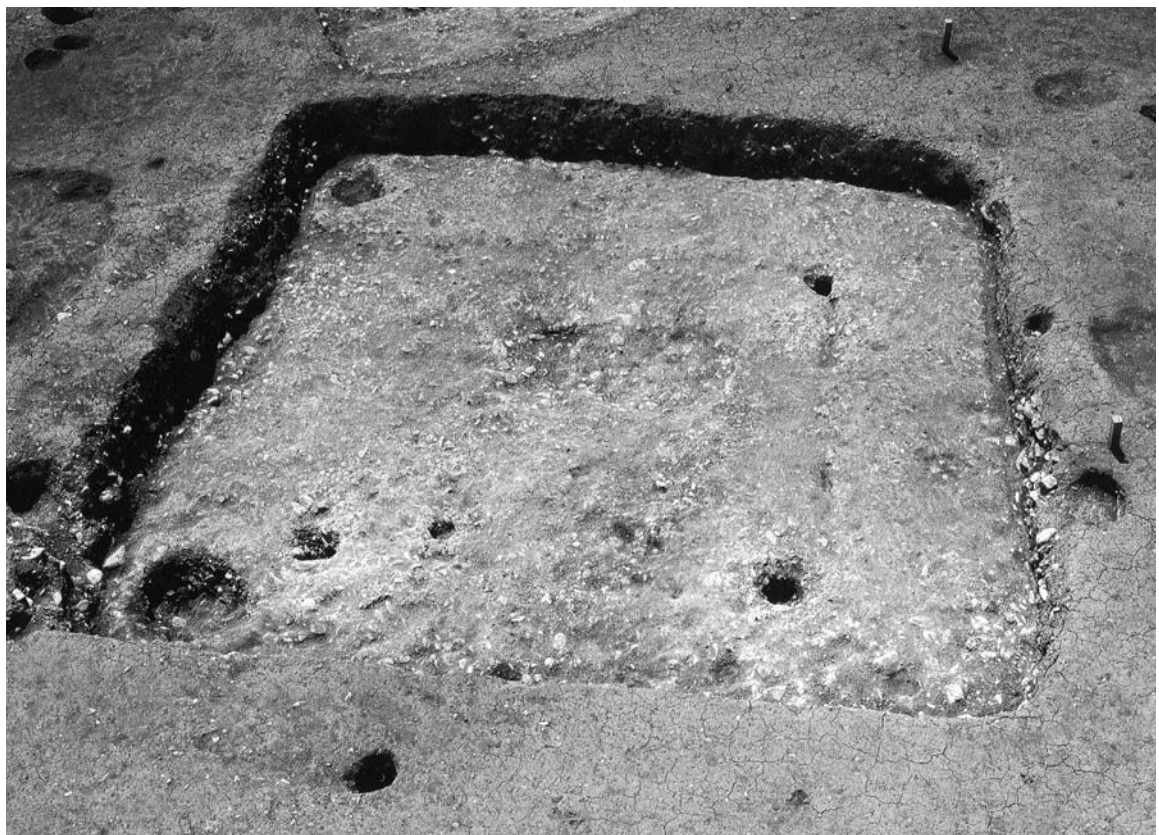
ST12 完掘状況



ST13 セクション及び遺物出土状況

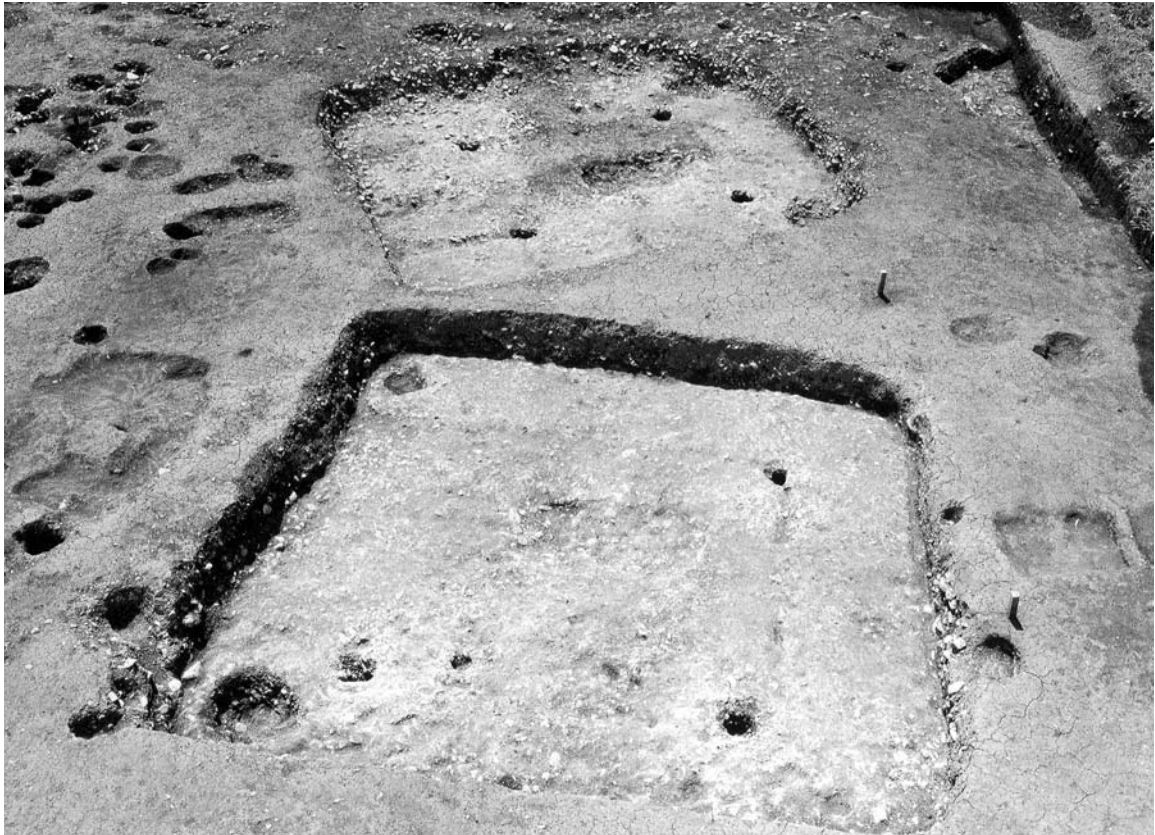


ST13 セクション及び遺物出土状況



ST13 完掘状況

PL.12



ST13・14 完掘状況



ST14 遺物出土状況 (211)

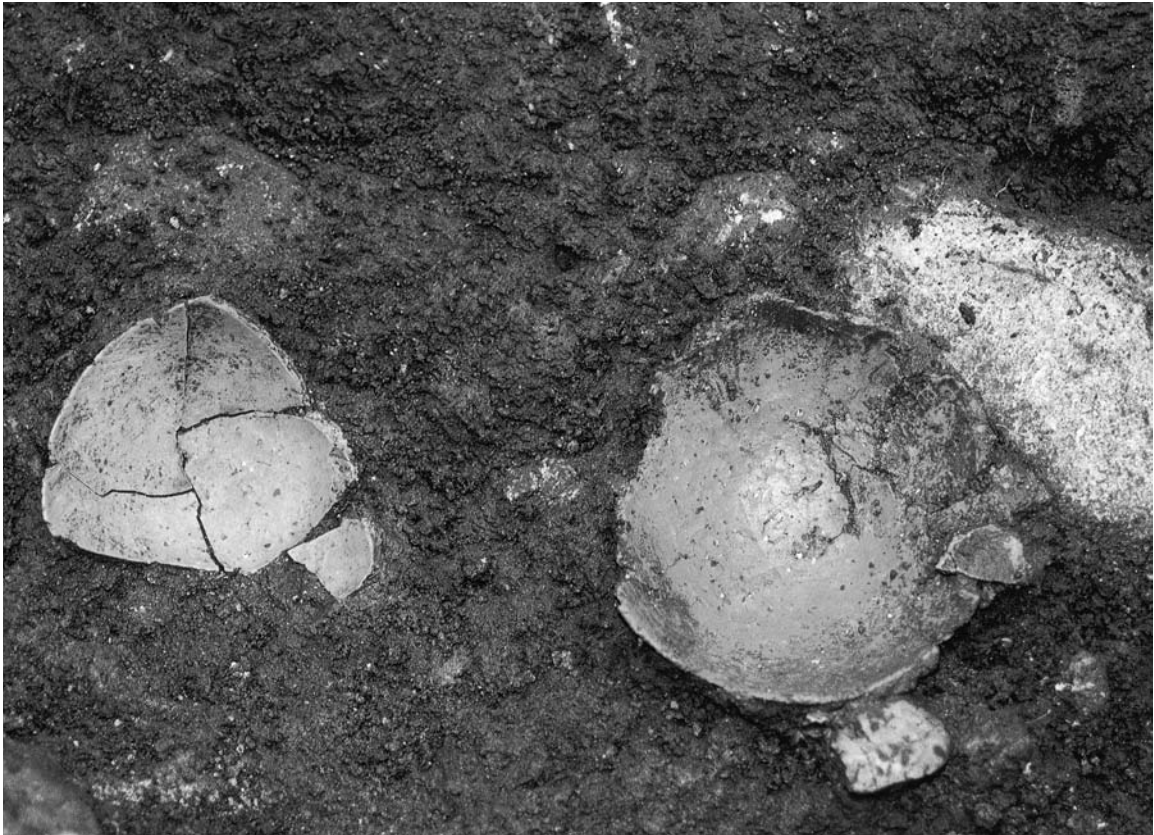


ST14内P7 半截状況



ST14 セクション

PL.14



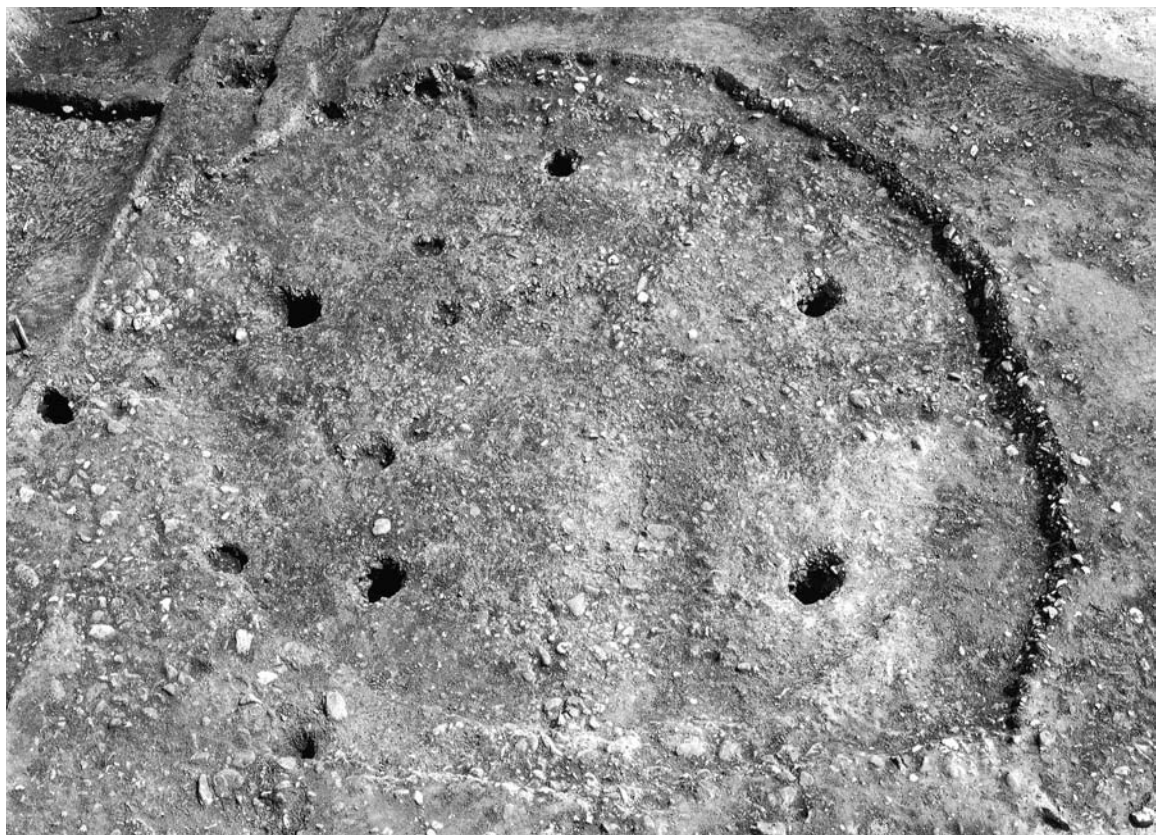
ST14 遺物出土状況 (左227)



ST15 北壁セクション



ST16 セクション及び遺物出土状況



ST16 完掘状況

PL.16



ST17 セクション及び遺物出土状況



ST17 セクション

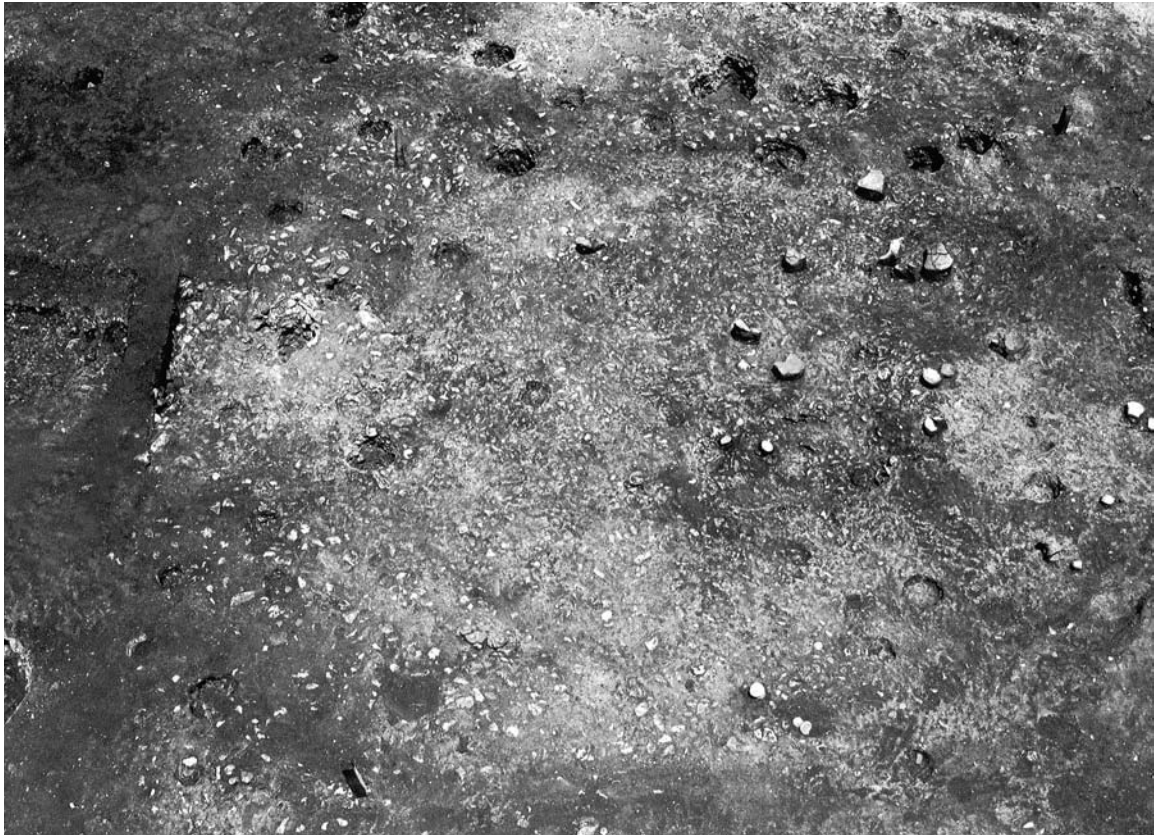


ST17 遺物出土状況



同 上

PL.18



ST18 遺物出土状況



ST19 セクション



ST19 完掘状況



ST19・20 完掘状況

PL.20



ST22 セクション



ST22 完掘状況



SK102 半截狀況



SK106 遺物出土狀況

PL.22



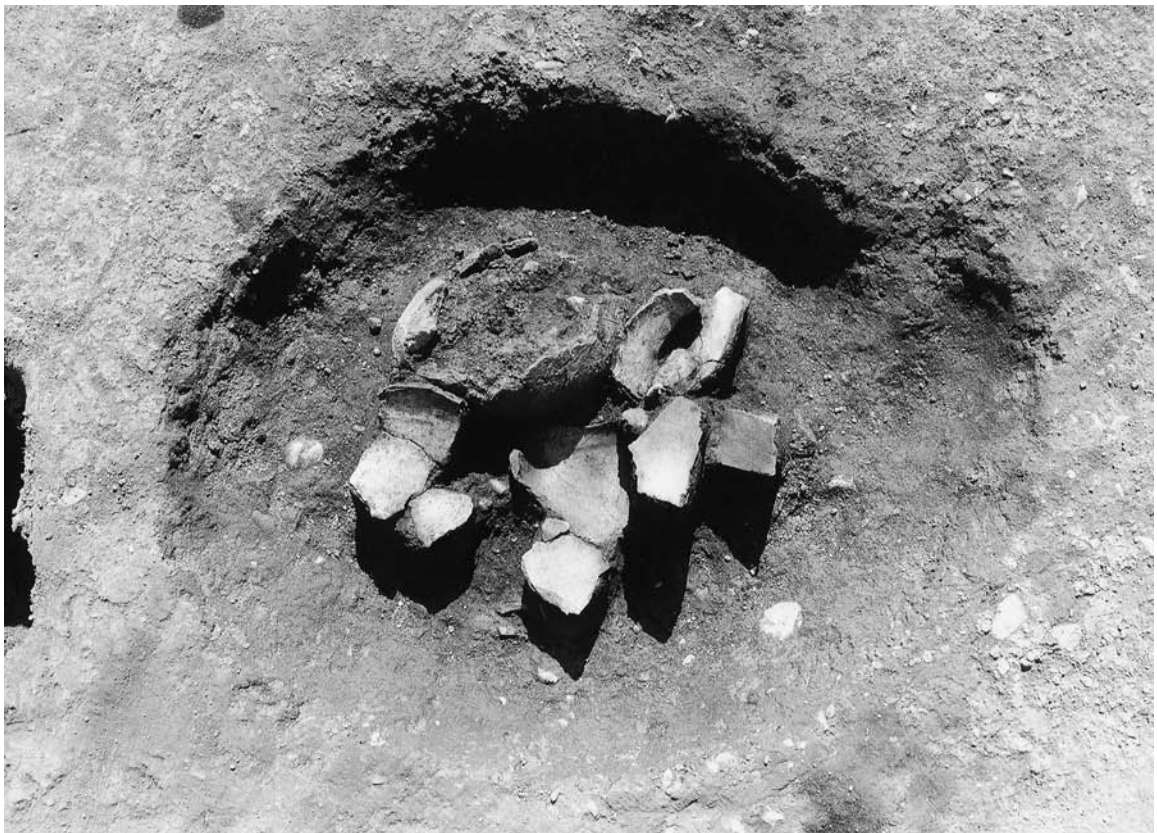
SK98 遺物出土状況



SK113 セクション及び遺物出土状況



SK108 半截狀況



P2 遺物出土狀況



SK113 セクション及び遺物出土状況



同 上



SK113・110 セクション



SK113・110 完掘状況

PL.26



SK105 遺物出土状況



SK130 セクション及び遺物出土状況



SK130 セクション及び遺物出土状況



SK130 遺物出土状況

PL.28



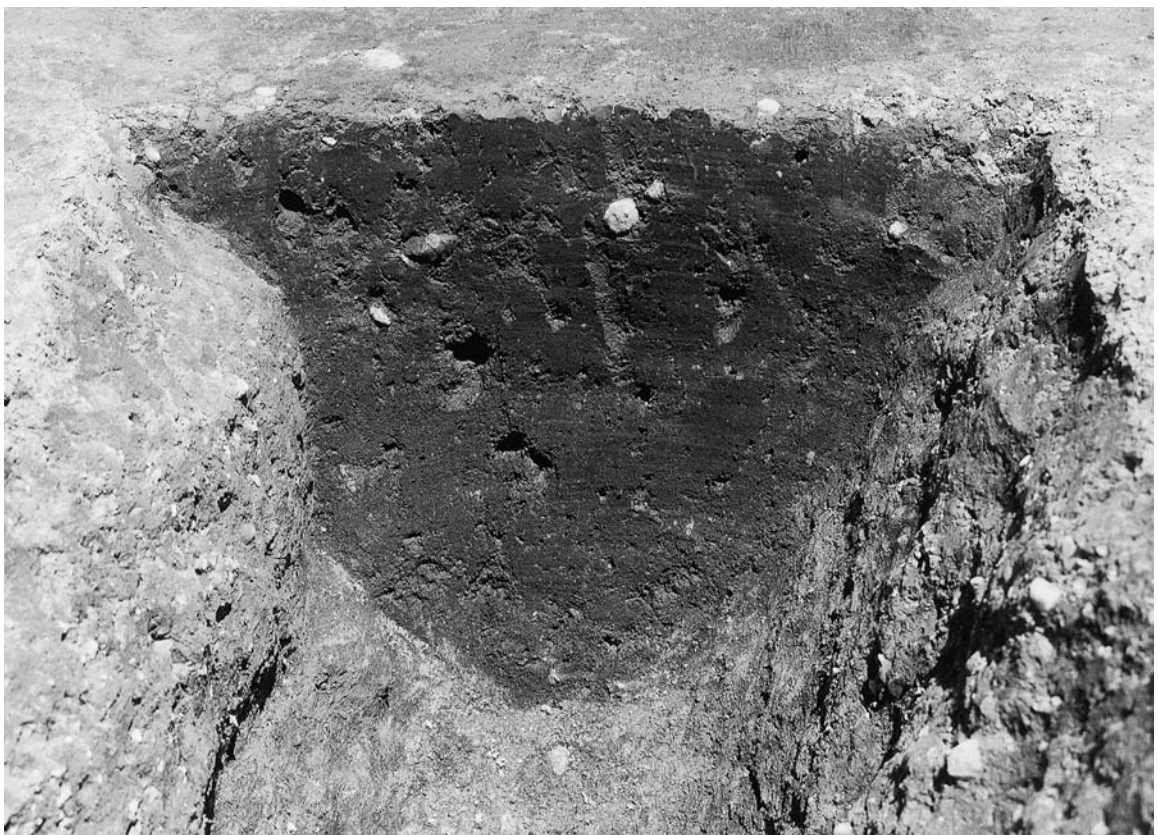
SK130 完掘状況



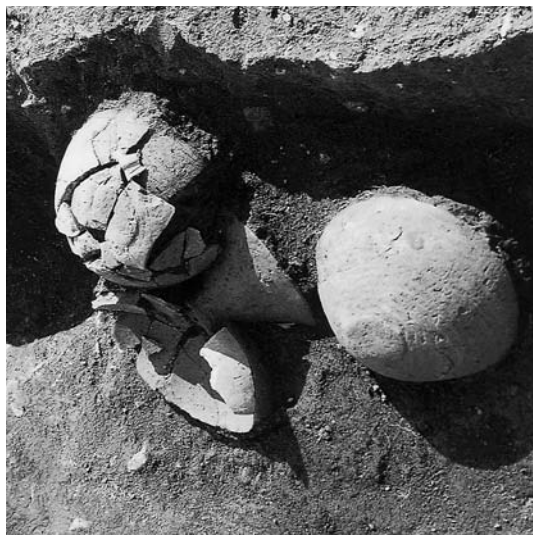
SK136 遺物出土状況



SK136 完掘状況



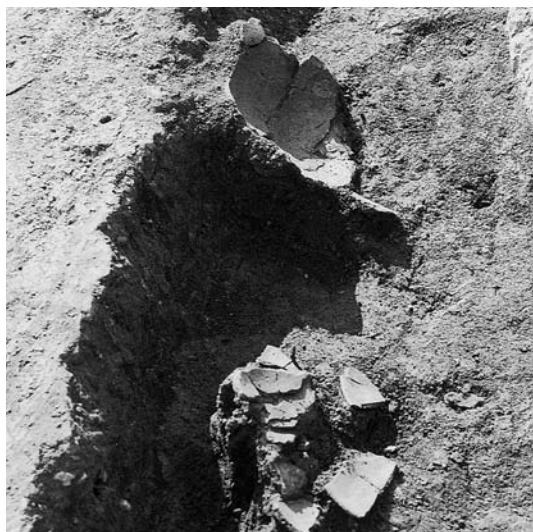
SD69 セクション



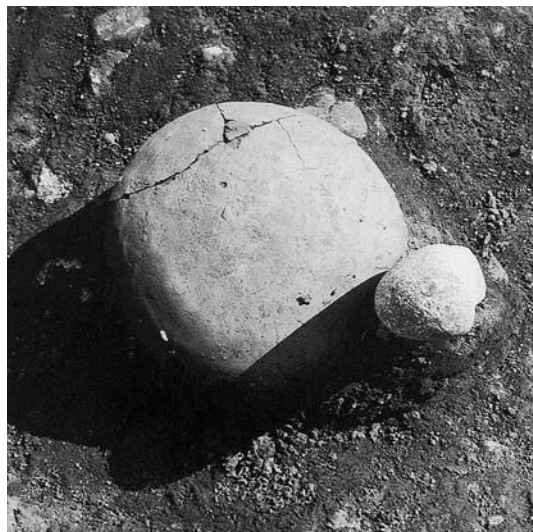
ST8 遺物出土状況 (47・48・55)



ST8 遺物出土状況 (54)



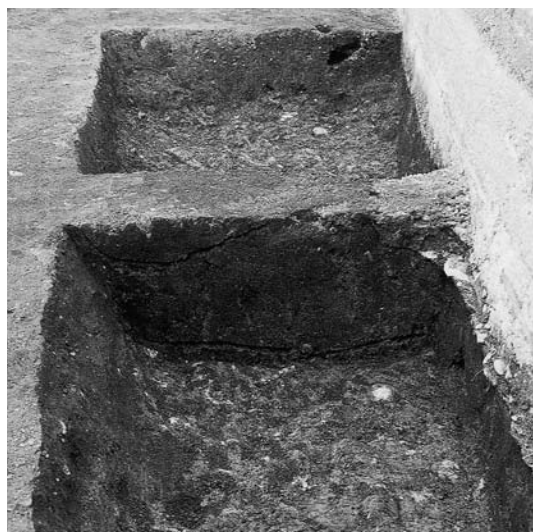
ST8 遺物出土状況 (46手前・53奥)



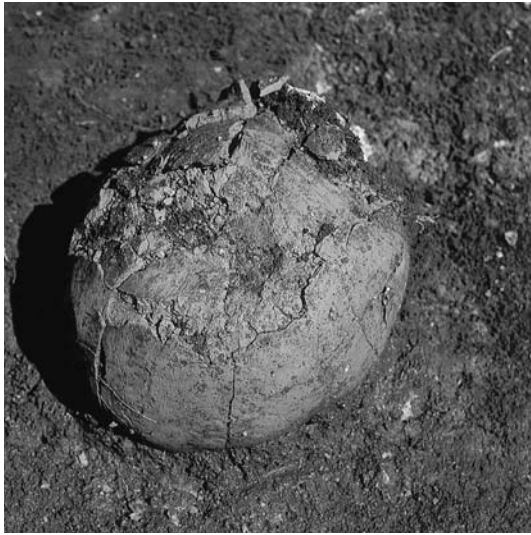
ST8 遺物出土状況 (43)



SK42 半截状況



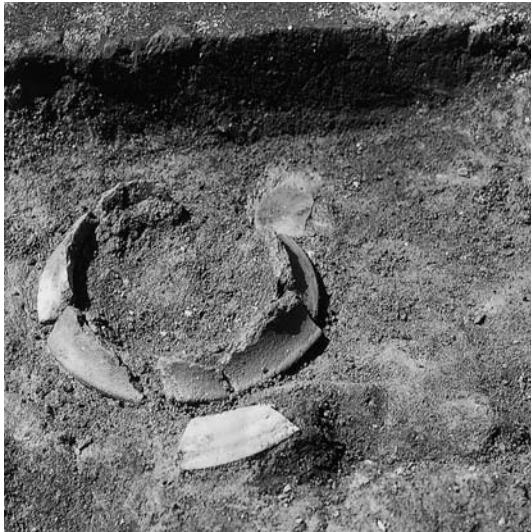
SK43 半截状況



ST9 (66)



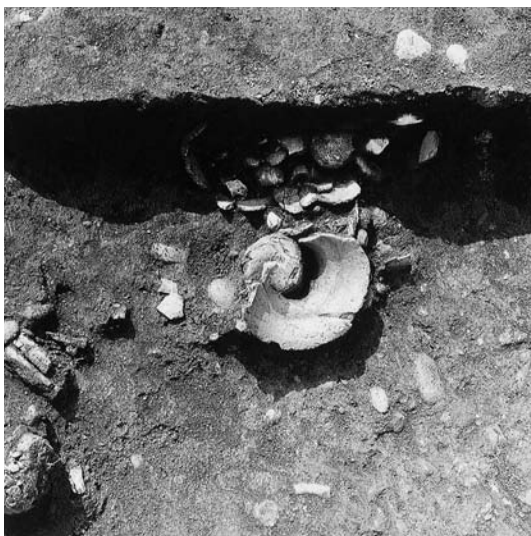
ST10 (89)



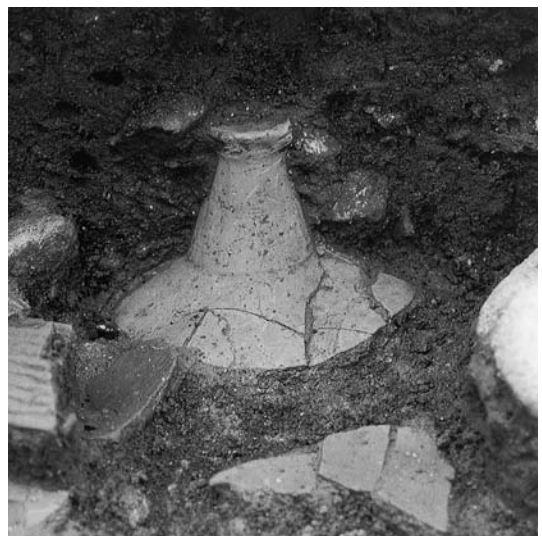
ST10 (88・99)



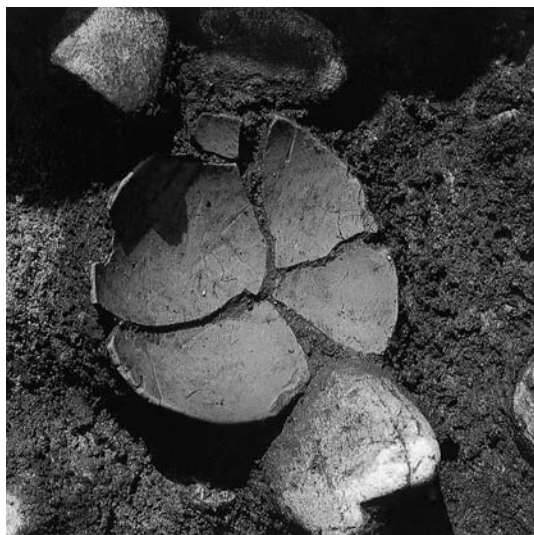
ST12 (124)



ST12 (112)



ST13 (172)



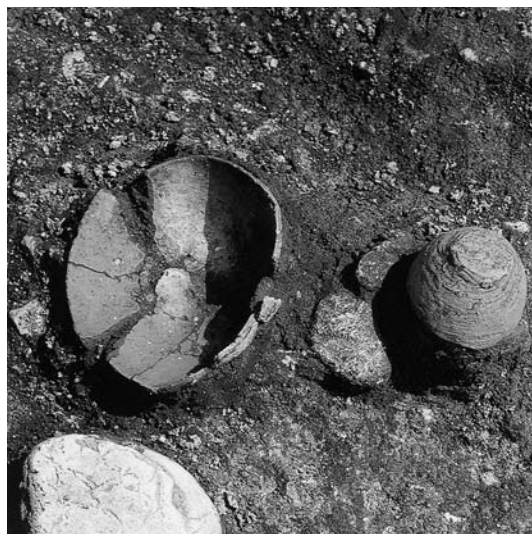
ST13 (158)



ST13 (左183・右141)



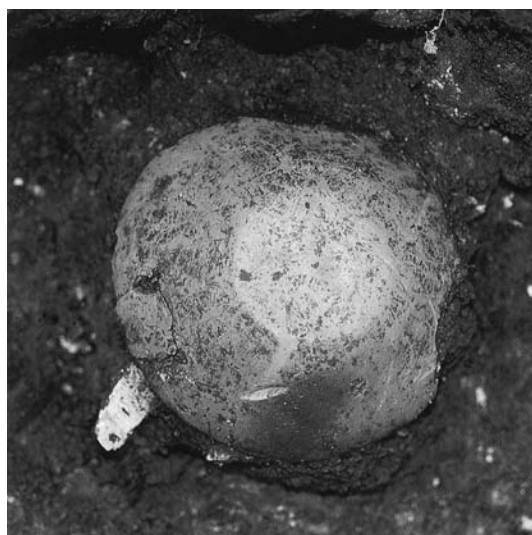
ST13 (162)



ST13 (156・161)



ST14 (223)



ST14 (217)



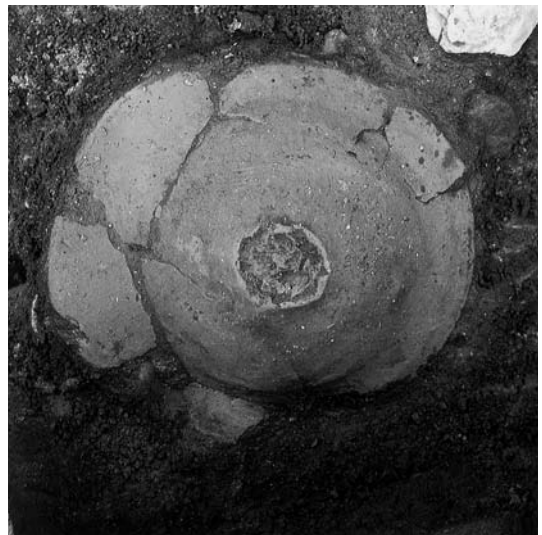
ST14 (226)



ST14 (228)



ST15 (243)



ST16 (287)

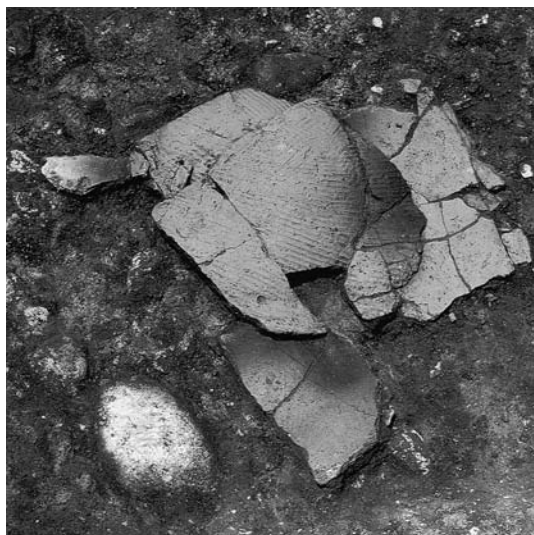


ST16 集石



ST17 (323)

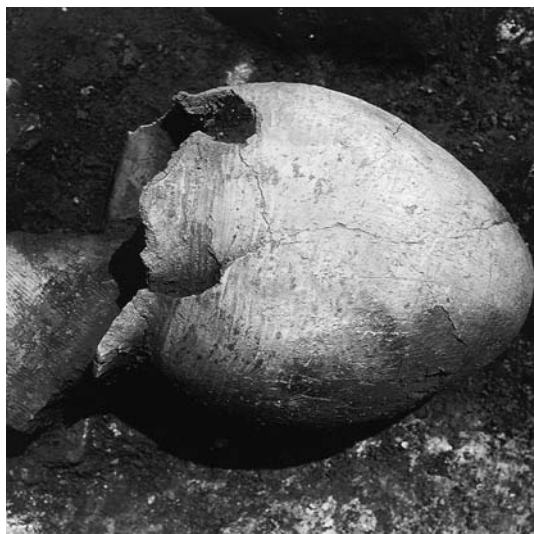
遺物出土状況



ST17 (331)



ST17 (右313・左337)



ST17 (319)



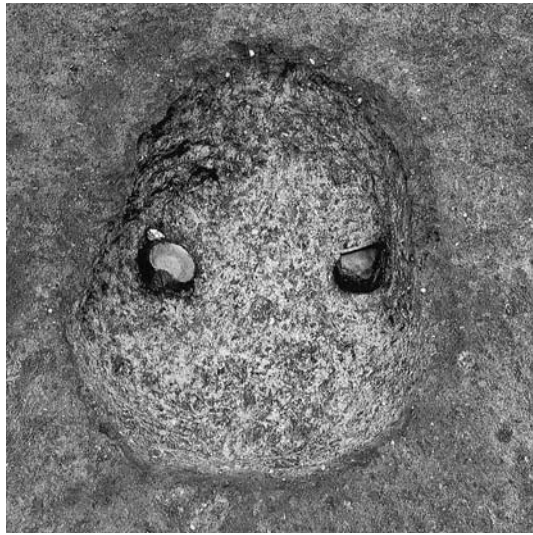
ST18 (358)



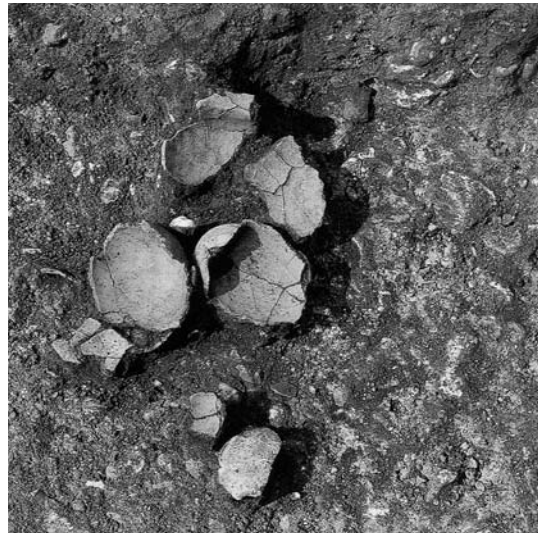
ST18 (357)



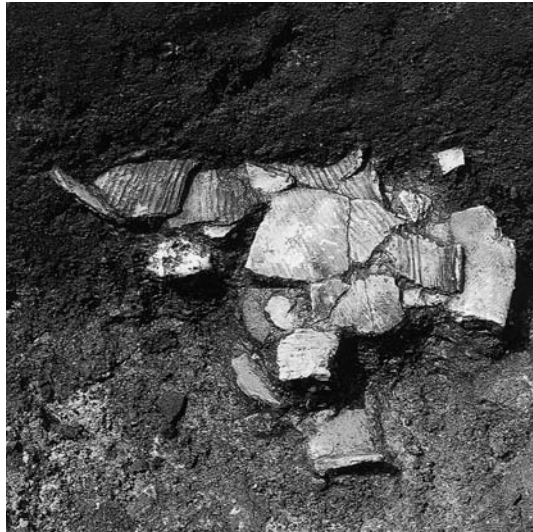
ST20 (393)



SK106 (505・517)



ST12



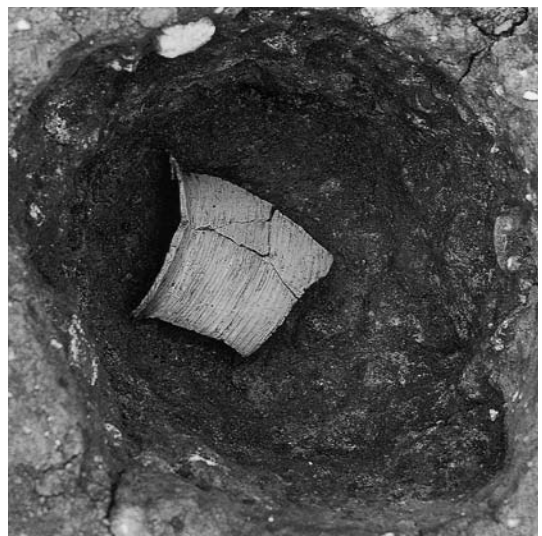
SK118 (470)



SK136 (618)

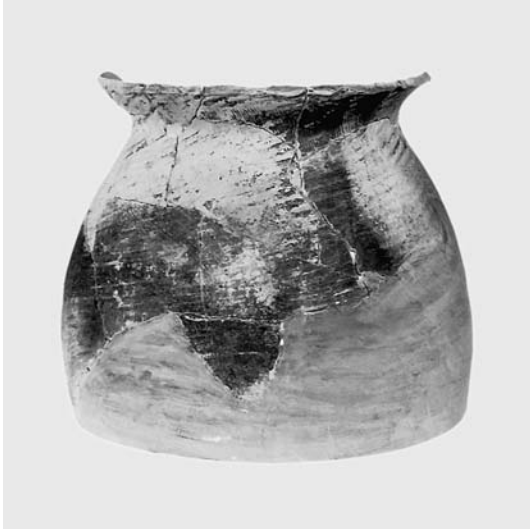


P44 (479・490)



P8 (478)

遺物出土状況



11 (ST5)



13 (ST5)



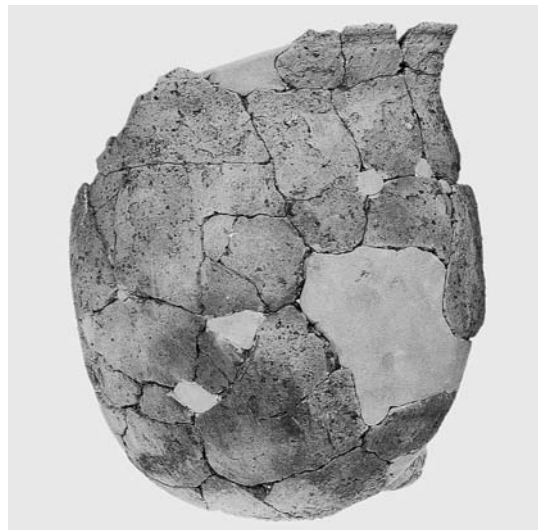
65 (ST9)



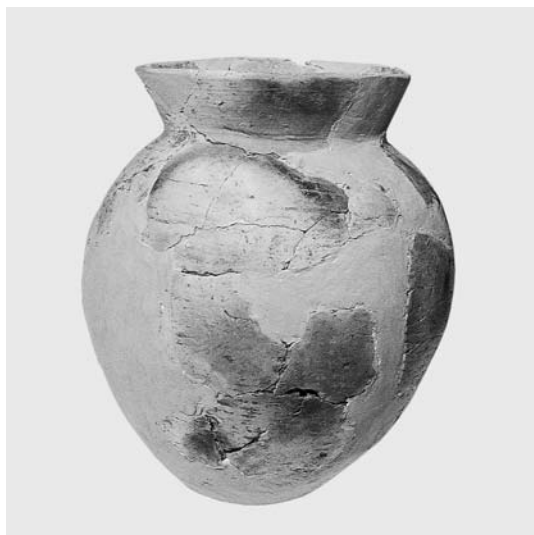
66 (ST9)



89a (ST10)



90 (ST10)



115 (ST12)



144 (ST13)



211 (ST14)



264 (ST16)



312 (ST17)



317 (ST17)



318 (ST17)



319 (ST17)



320 (ST17)



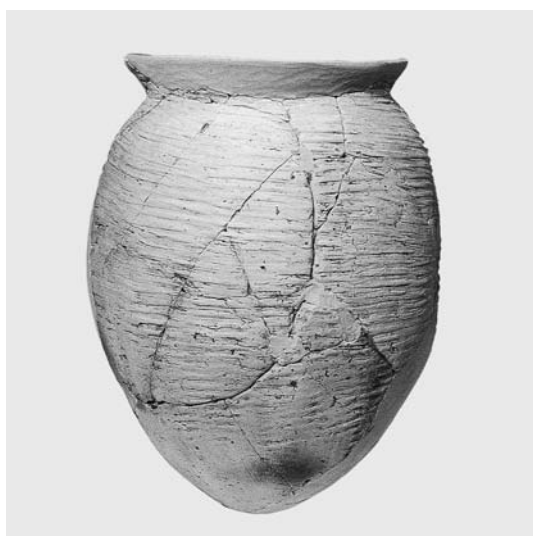
338 (ST17)



445 (SK98)



455 (SK113)



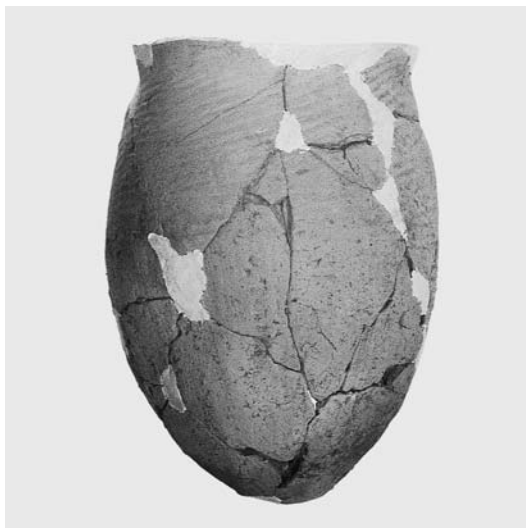
461 (SK113)



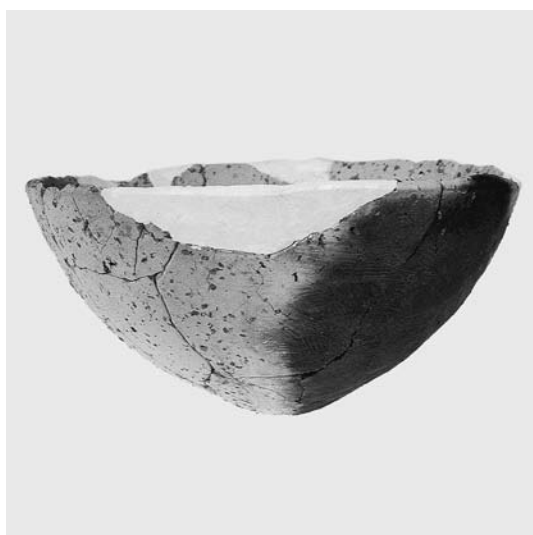
478 (P8)



480 (P12)



527 (SK110)



112 (ST12)



21 (ST5)



53 (ST8)



586 (SK130)



618 (SK136)



574 (SK130)



110 (ST11) 438 (ST22)





18 (ST5)



463 (SK113)



330 (ST17)



331 (ST17)



70 (ST9)



415 (ST22)



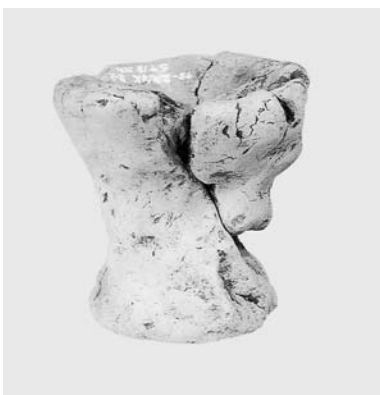
488 (P54)



359 (ST18)



358 (ST18)



359 (ST18)



297 (ST16)

467 (SK113)

360 (ST18)



297 (ST16)

467 (SK113)

360 (ST18)



8 (ST5)



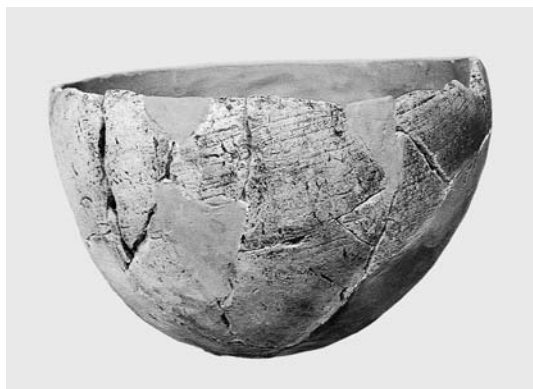
309 (ST17)



453 (SK113)



447 (SK113)



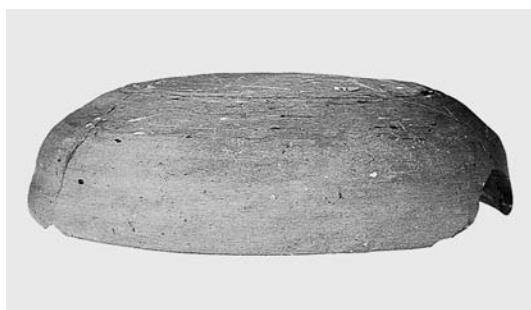
166 (ST13)



486 (P22)



96 (ST10)



99 (ST10)



47 (ST8)



48 (ST8)



50 (ST8)



51 (ST8)



94 (ST10)



158 (ST13)



219 (ST14)



243 (ST15)



124 (ST12)



175 (ST13)



171 (ST13)



287 (ST16)



54 (ST8)



55 (ST8)



172 (ST13)



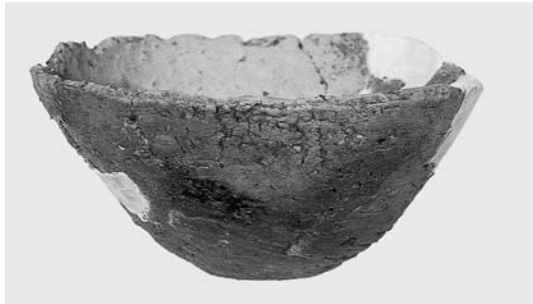
183 (ST13)



119 (ST12)



120 (ST12)



159 (ST13)



161 (ST13)



165 (ST13)



174 (ST13)



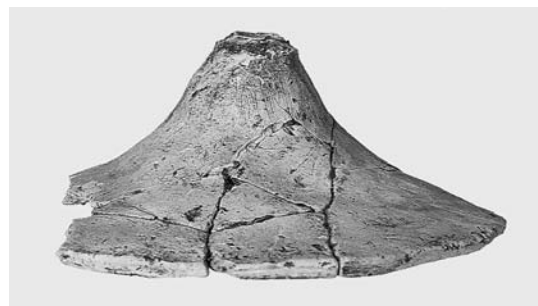
224 (ST14)



393 (ST20)



30 (ST5)



178 (ST13)



509 (SK106)



554 (SK130)



555 (SK130)



557 (SK130)



558 (SK130)



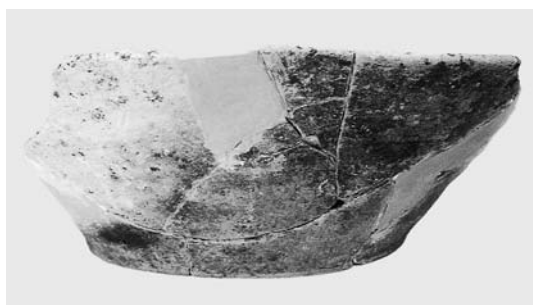
560 (SK130)



500 (SK105)



530 (SK126)



562 (SK130)



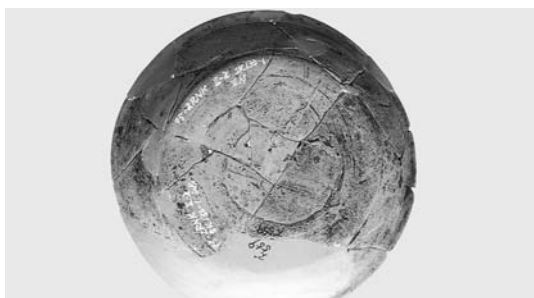
565 (SK130)



553 (SK130)



559 (SK130)



553 (SK130)



559 (SK130)



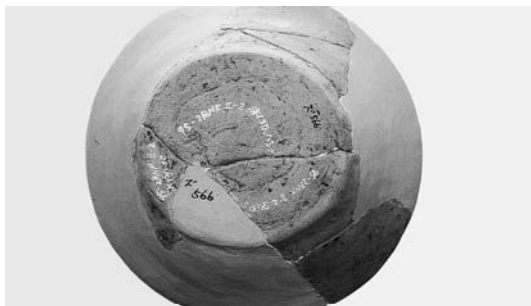
566 (SK130)



611 (SK136)



566 (SK130)



611 (SK136)



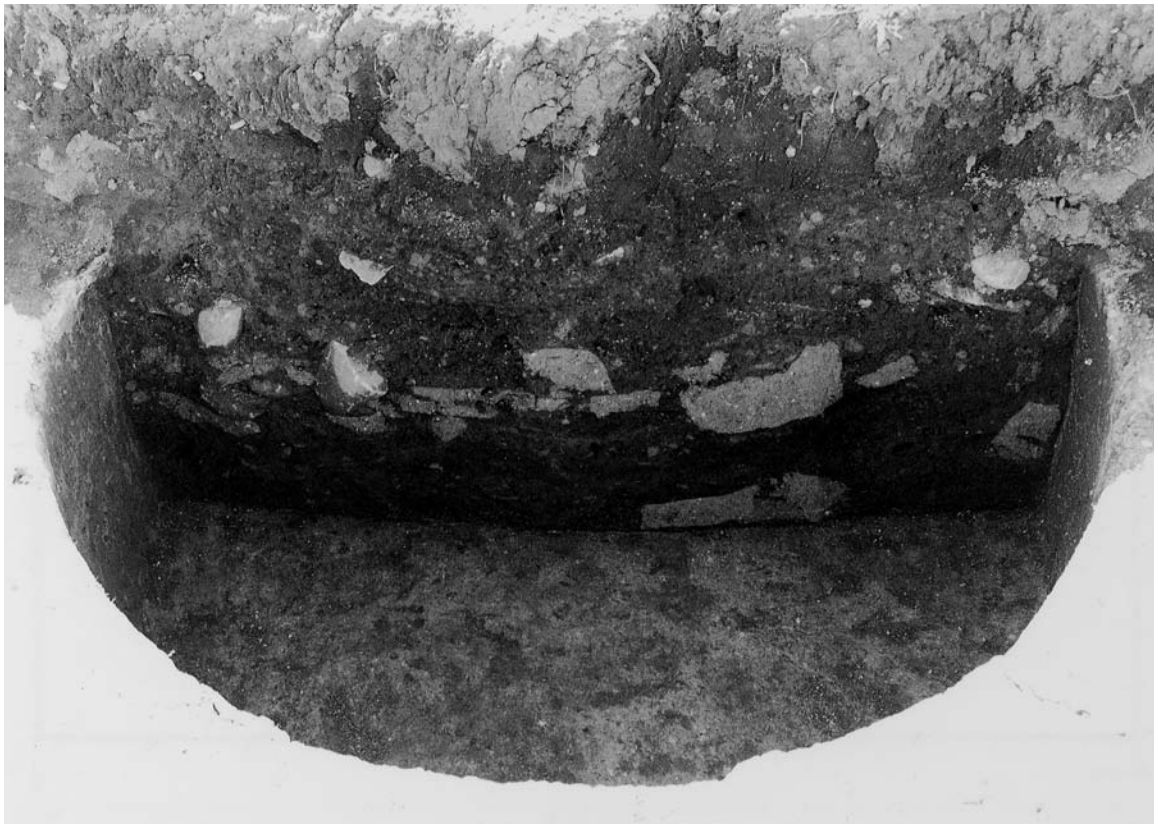
602 (SK136)



610 (SK136)



SK51 出土状況

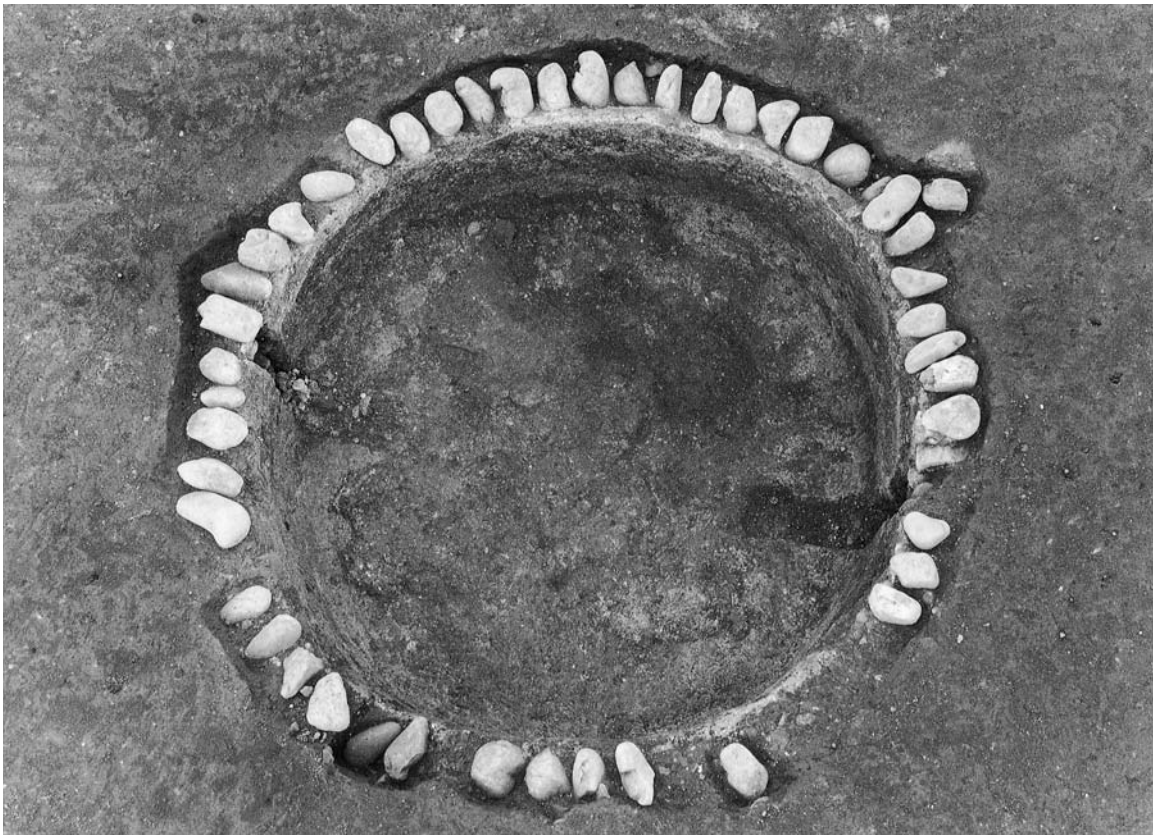


SK56 セクション

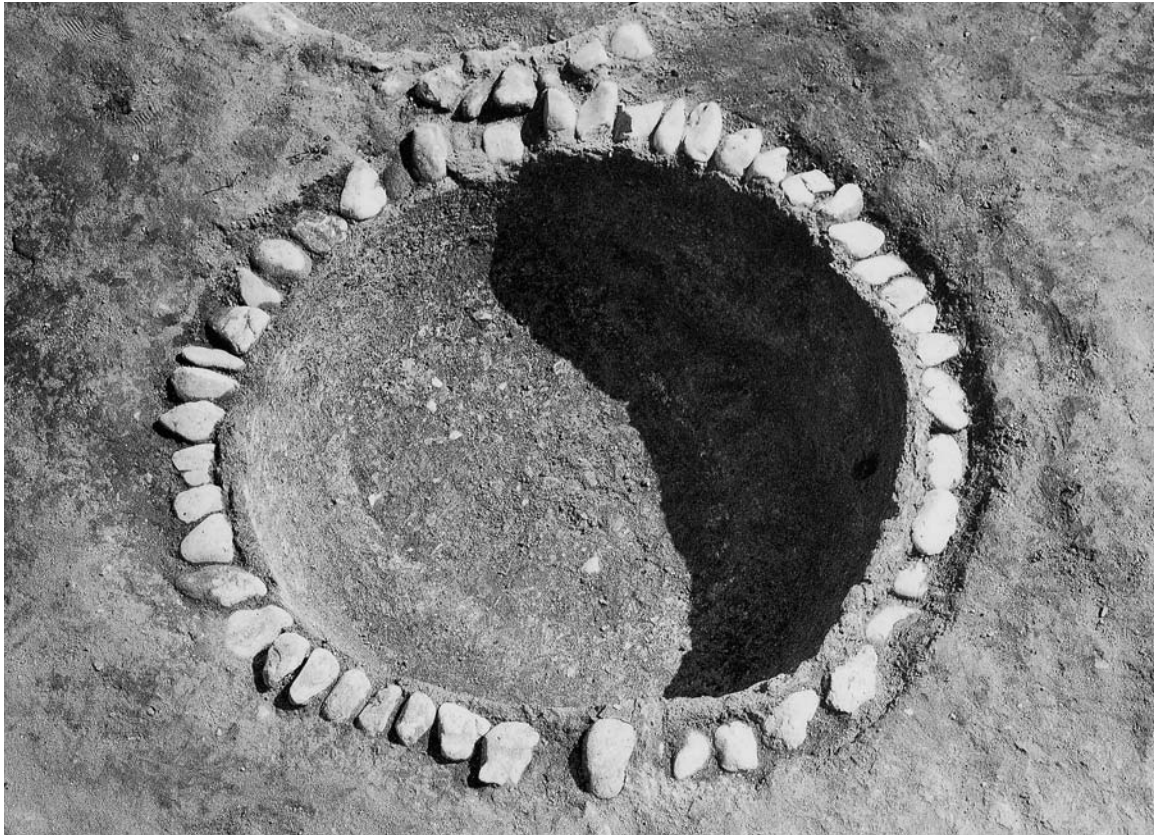
PL.50



SK60 完掘状況



SK64 完掘状況

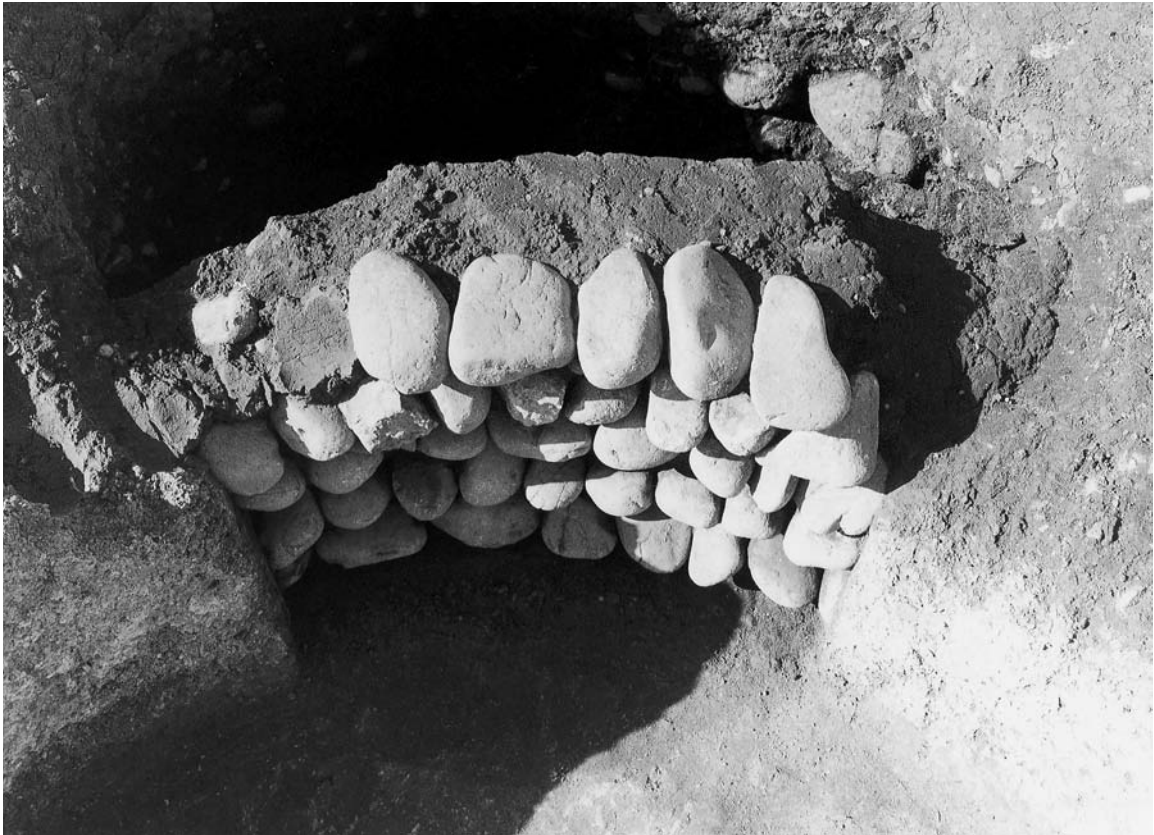


SK71 完掘状況



SK72 完掘状況

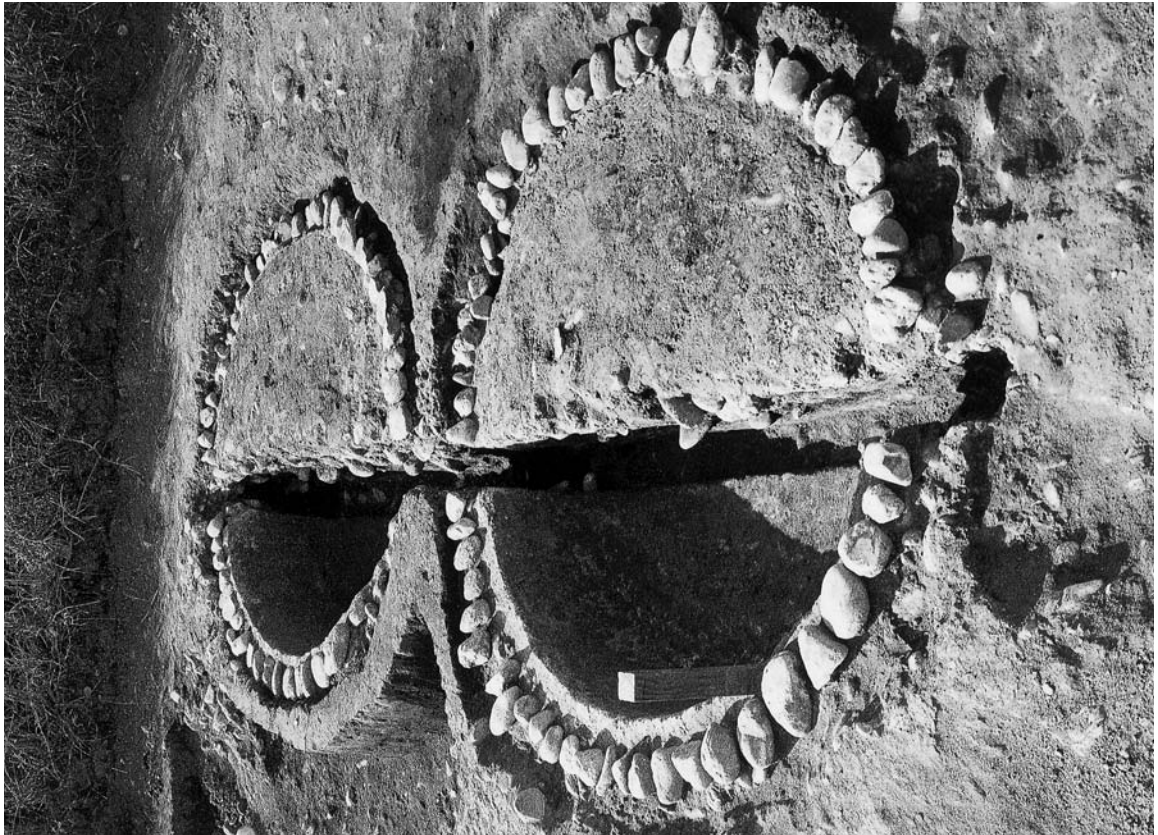
PL.52



SK71 三和土粹除去時 (SE8上面)



同上



SK73 (手前)・SK74 (奥) 半截状況



SK78 完掘状況

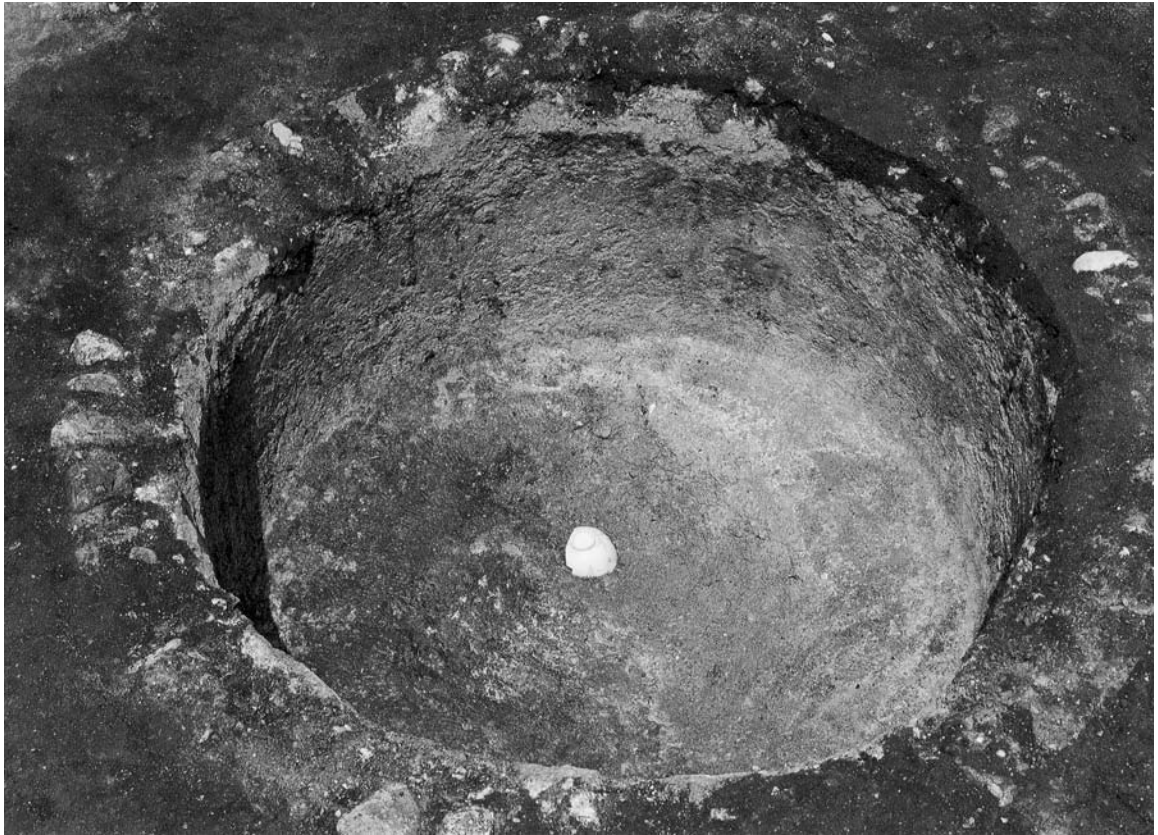
PL.54



SK90 出土状況



SK119・120 完掘状況



SK121 遺物出土状況



SK122 セクション

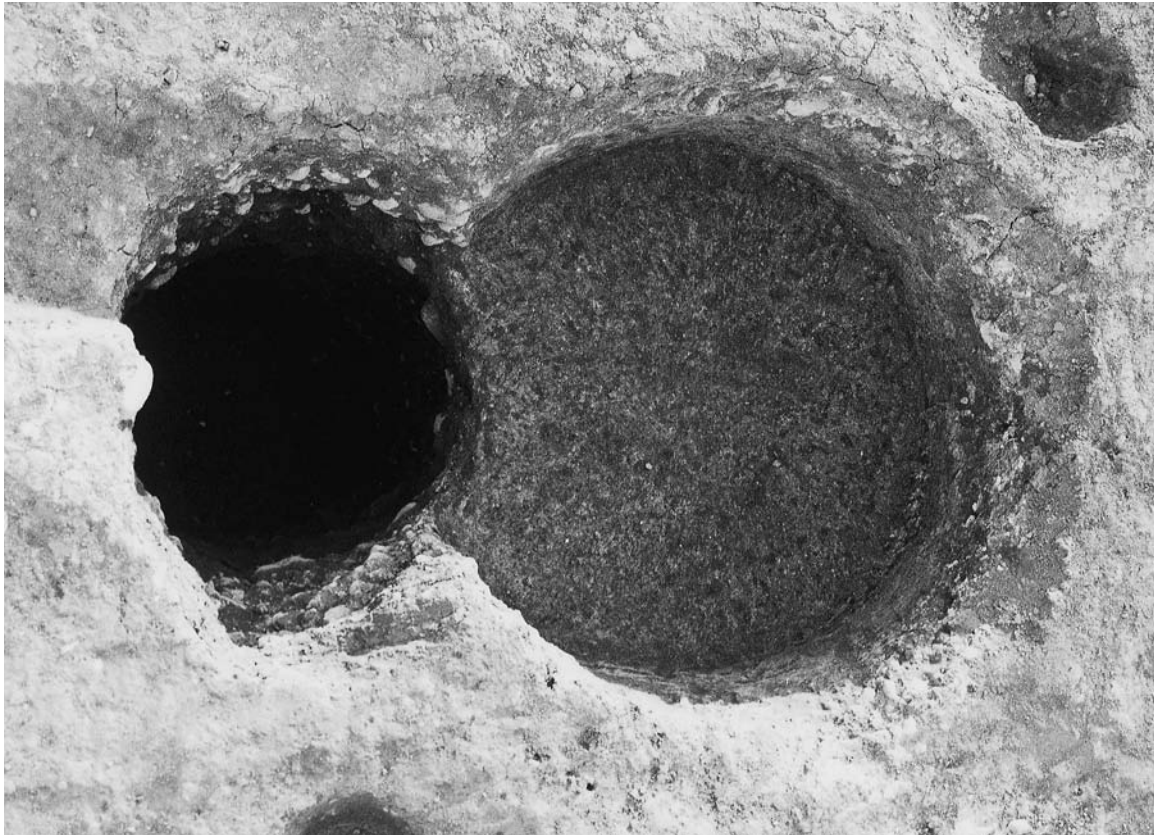
PL.56



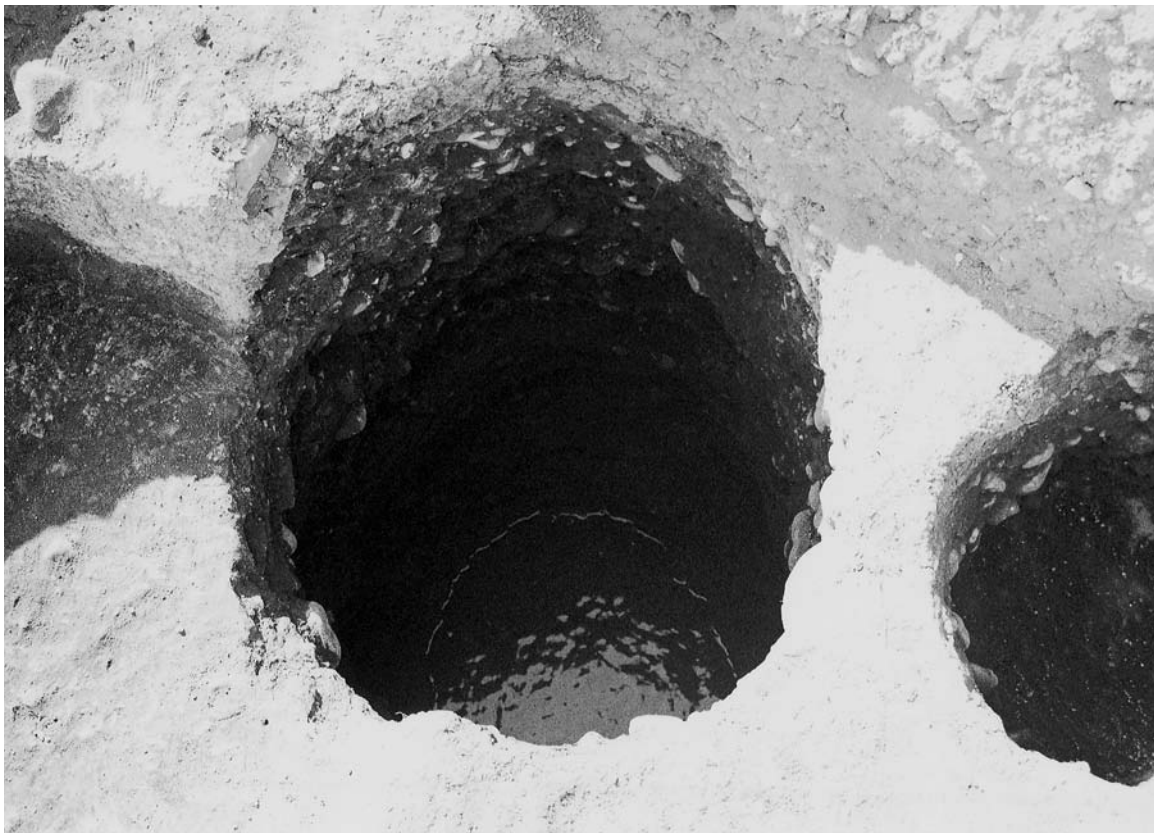
SE 2 セクション



SE 4 完掘状況



SE 9 完掘状況 (右SK92)



SE 8 完掘状況

PL.58



SE 11 完掘状況



SD65 出土状況



SD78 セクション



94年度調査区全景 (西より)

PL.60



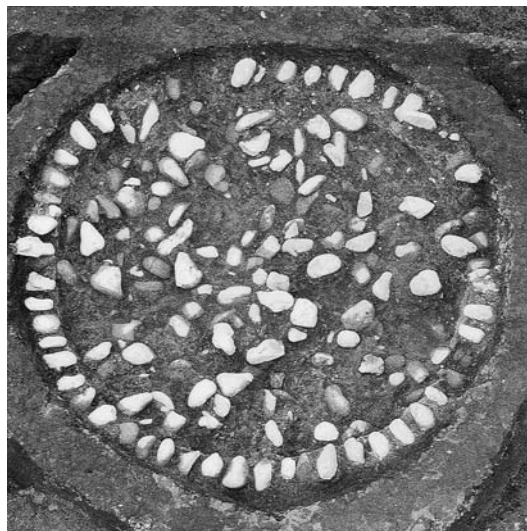
'94年度調査区全景（南東より）



'94年度調査区全景（南西より）



SK48 完掘状況 (右)



SK50 出土状況



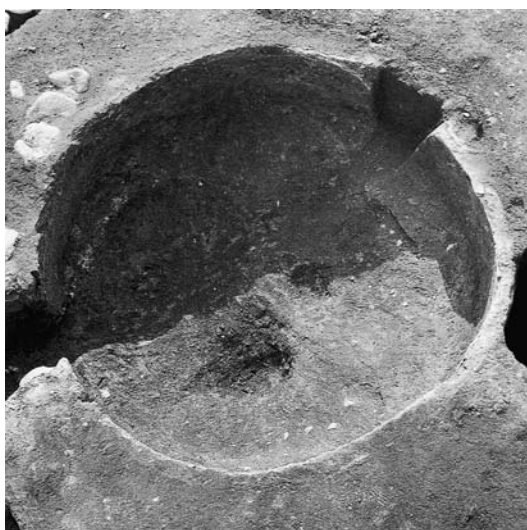
SK51 半截状況



SK57 完掘状況



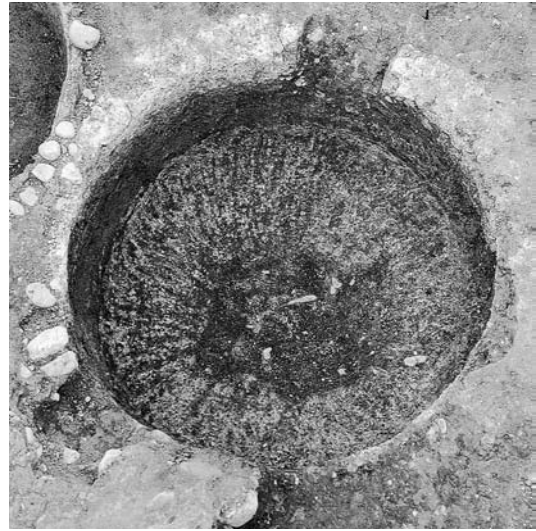
SK58 遺物出土状況



SK60 完掘状況



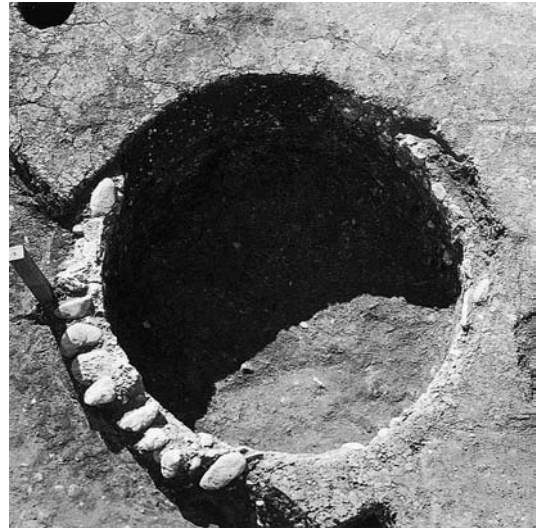
SK75 半截状況



SK75 完掘状況



SK79 出土状況



SK80 完掘状況



SK81 完掘状況



SK83 完掘状況 (左)



SK87 銅錢 (c) 出土狀況



SK121 遺物 (724) 出土狀況



SE5 完掘狀況



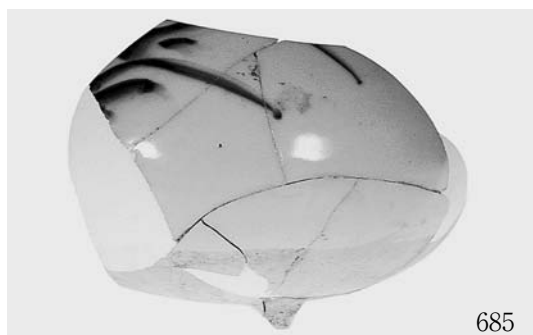
SE9 遺物 (233) 出土狀況



Pit 半截狀況



Pit 半截狀況





686



706



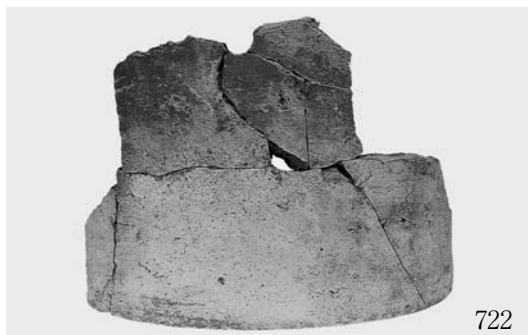
712



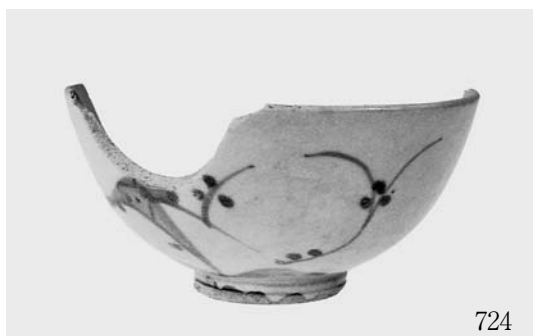
717



720



722



724



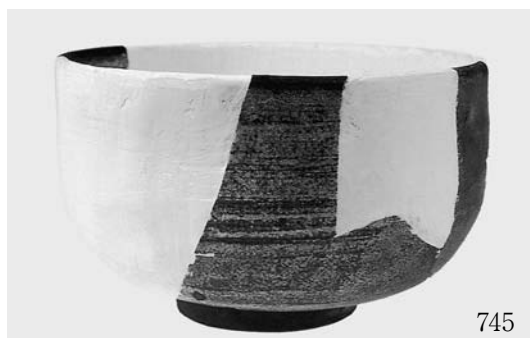
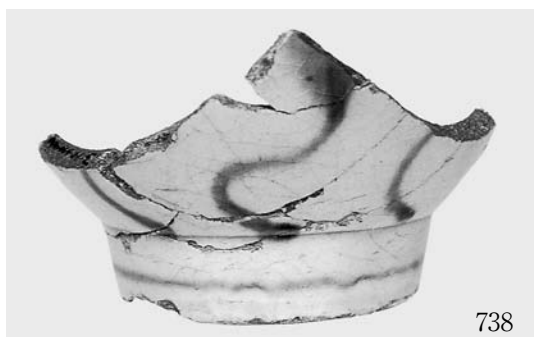
726

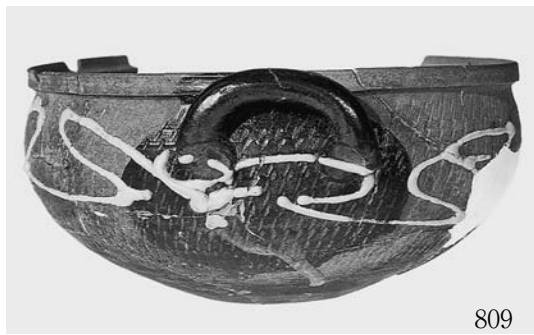


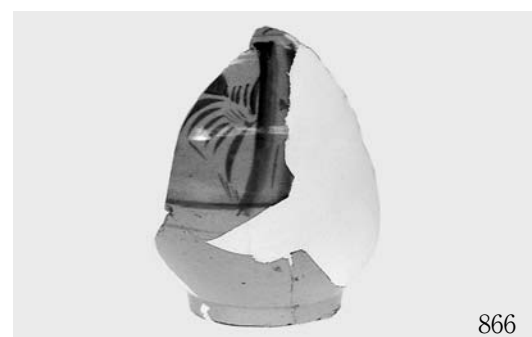
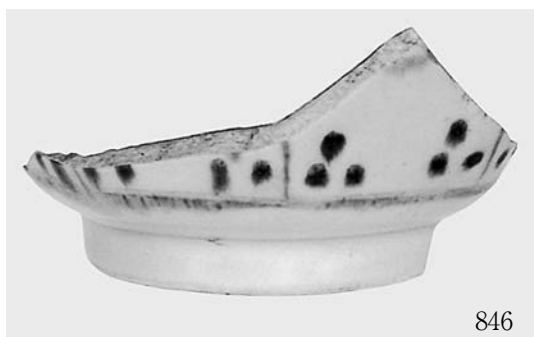
728



734









876



877



879



882



883 (外面)



883 (内面)



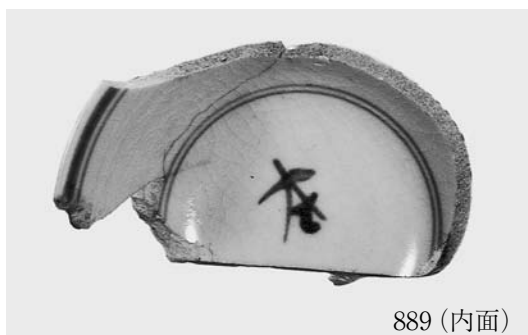
888 (外面)



888 (内面)



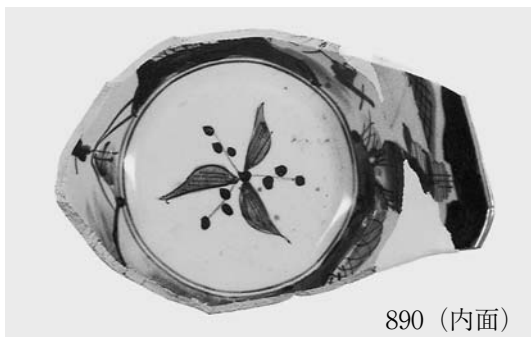
889 (外面)



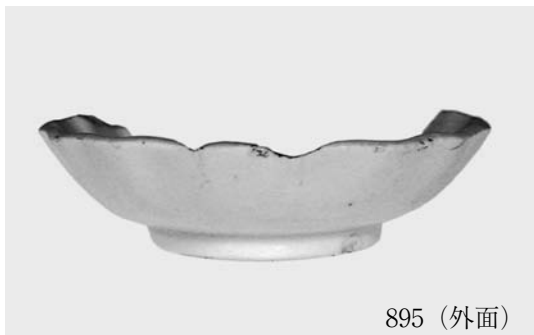
889 (内面)



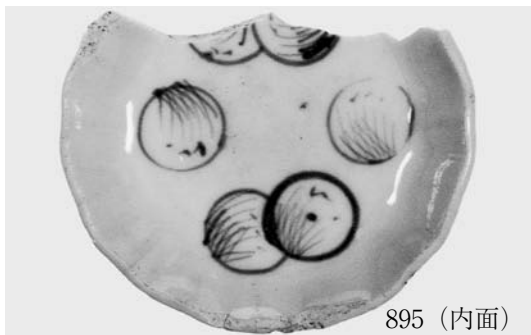
890 (外面)



890 (内面)



895 (外面)



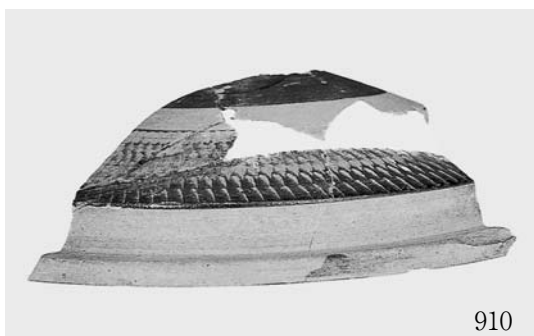
895 (内面)



891



908



910



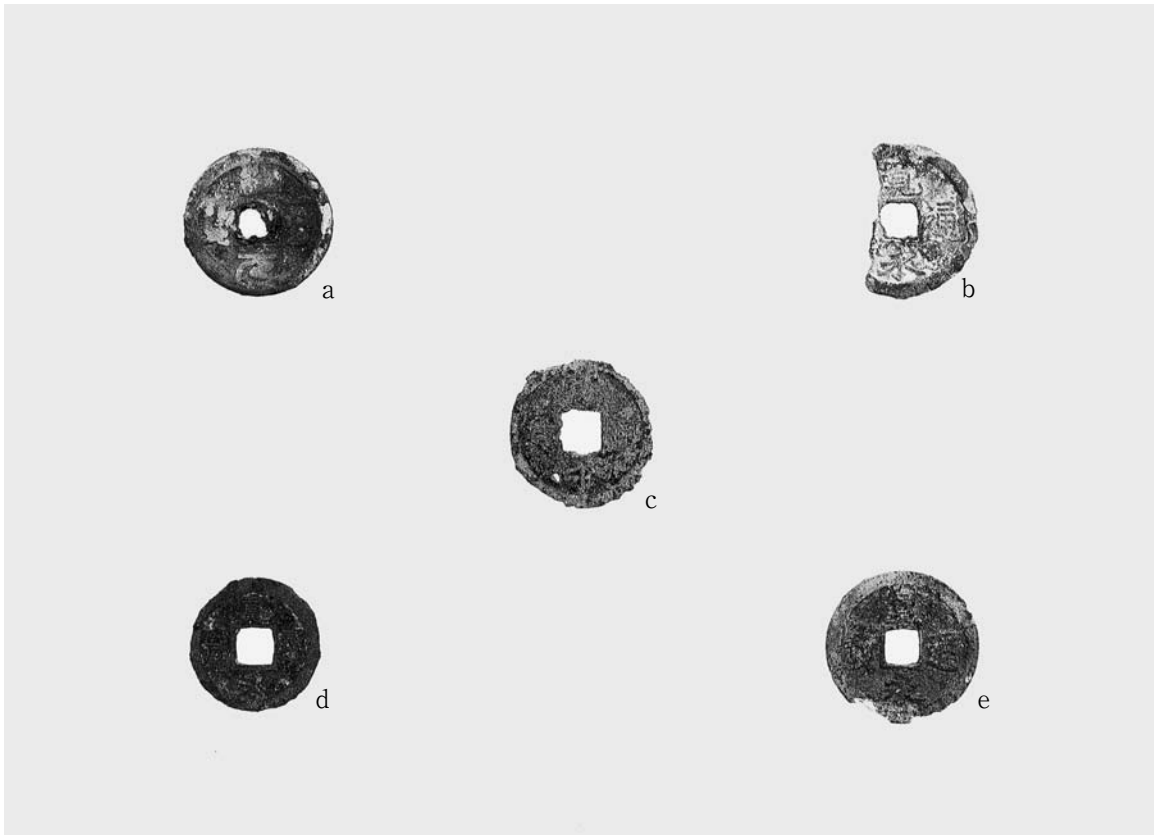
912



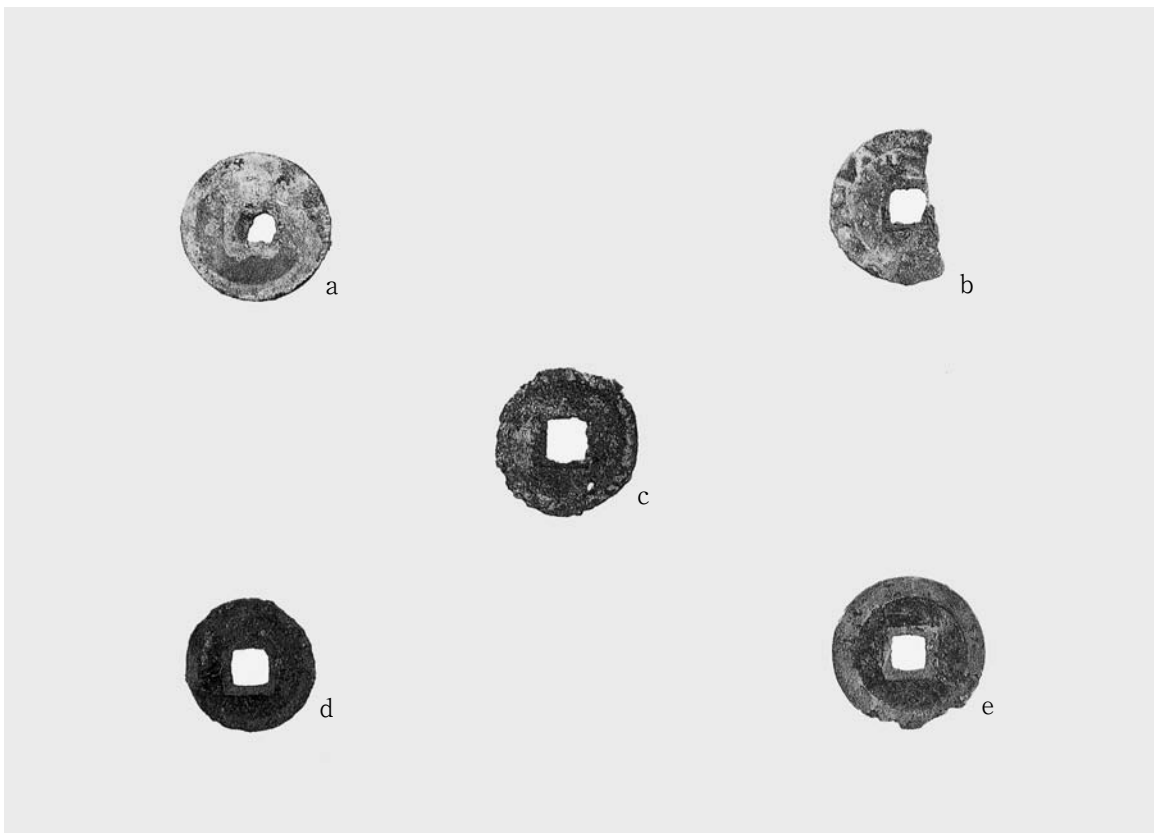
916



931



SK58 (a)、SK65 (b)、SK87 (c、d)及び包含層出土の古銭 (表面)



同 上 (裏面)

報告書抄録

ふりがな	こごめいせき に							
書名	小籠遺跡 II							
副書名	あけぼの道路建設工事に伴う発掘調査報告書							
巻次	2							
シリーズ名	高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第24集							
編著者名	出原恵三・泉 幸代・浜田恵子・藤方正治							
編集機関	(財)高知県文化財団 埋蔵文化財センター							
所在地	〒783 高知県南国市篠原南泉1437-1 TEL. 0888-64-0671							
発行年月日	西暦 1996年 3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 。 。 。	東経 。 。 。	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
こごめいせき 小籠遺跡	〒783 高知県南国市 岡豊町 小籠	39204	40171	33° 34′ 40″	133° 37′ 50″	平成7年 4月11日) 10月31日	(II区) 3,000	あけぼの道 路建設工事 に伴う
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
小籠遺跡	集落跡	弥生 古墳 古代 中世 近世	竪穴住居 溝 土坑 土壙墓 掘立柱建物	弥生土器 土師器 黒色土器 灰釉陶器 須恵器 瓦器 貿易陶磁器 近世陶磁器		弥生後期末～古墳時代 初頭の集落跡を確認 近世集落跡		

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第24集

小籠遺跡Ⅱ

(あけほの道路建設工事に伴う発掘調査報告書)

1996年3月

編集 (財)高知県文化財団 埋蔵文化財センター

発行 高知県南国市篠原南泉1437-1

Tel. 0888-64-0671

印刷 共和印刷株式会社